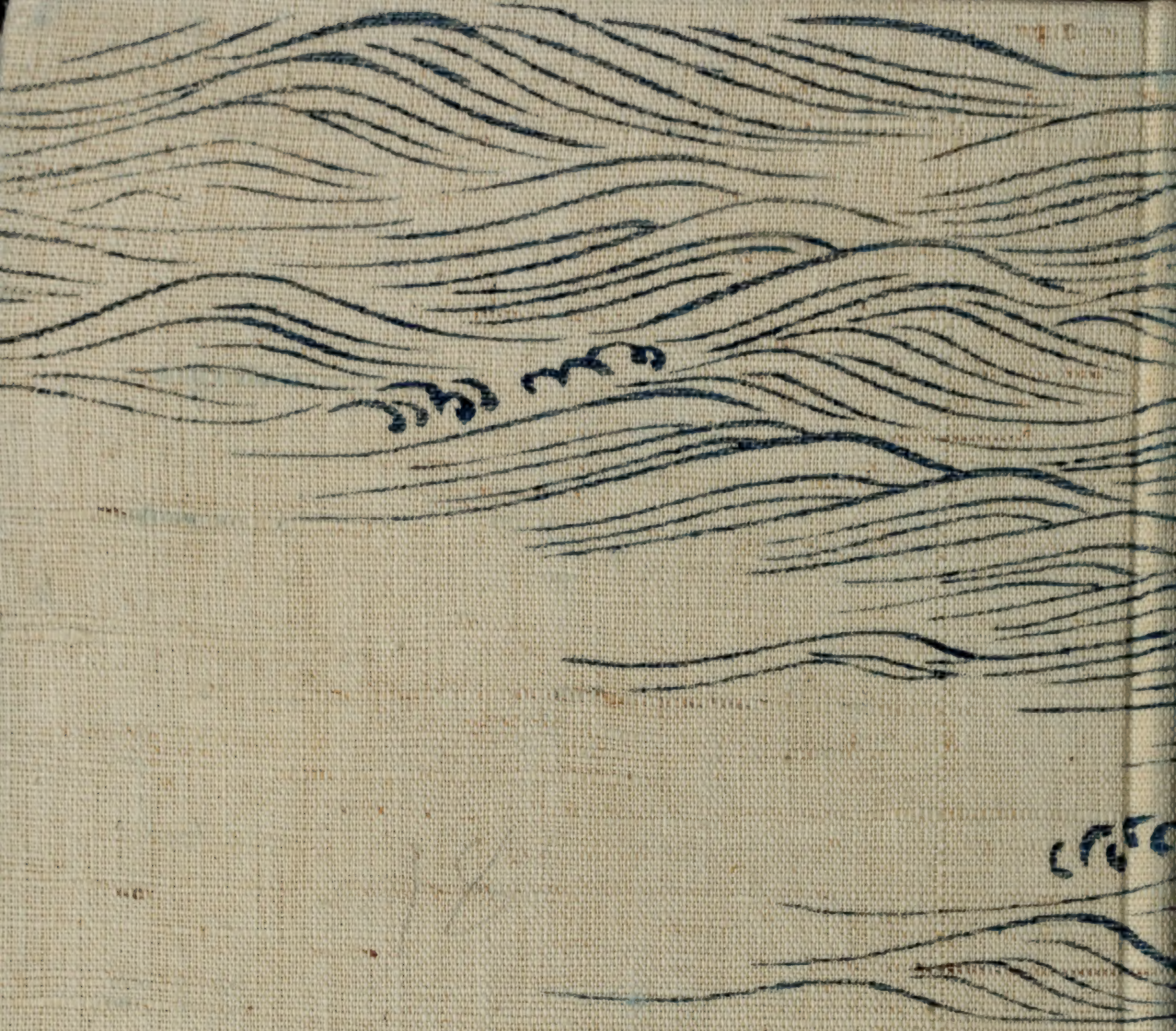






黙阿弥全集

第十八巻

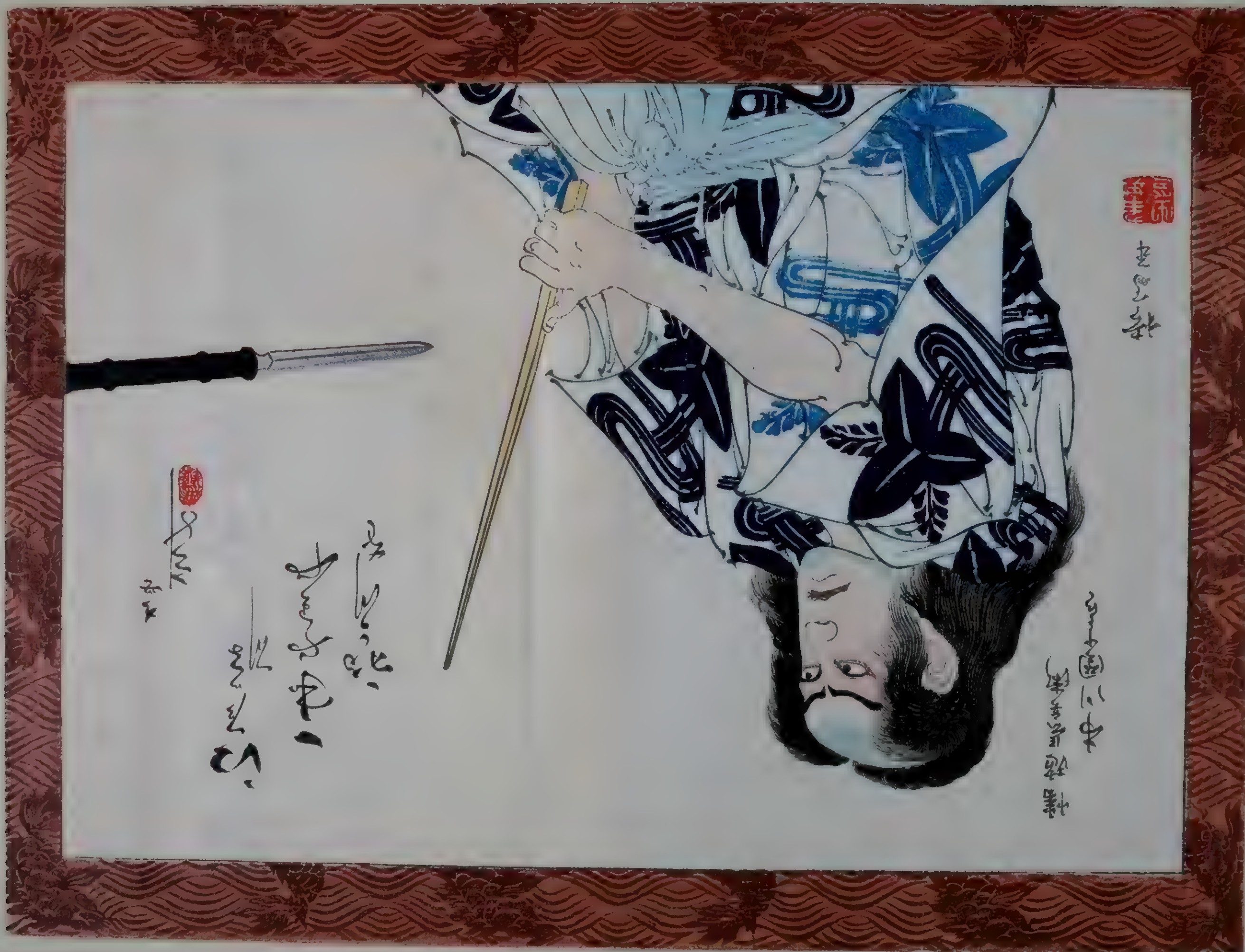
解説

慶應の頃流行した「繪合せ」の選評。默阿彌が判者、點者となつた時のもの。「多分芝居に因む川」といふ趣向の時のであらう、深川と大井川の兼題に關する分のみを抄出した。深川は「網模樣燈籠菊桐」の小猿七之介によそへたもので、「替る遠目に目がさめたやう」と評し、そのキヽとしては「矢矧の橋から永代橋へ替つた趣向の裏表、幼もやうの瓢簞は木場に縁ある小猿の七、高島屋がしたもモウ十年ほんに月日は夢のやうだ」とある。大井川は朝顔日記によそへたもので、「靭のお箱、木戸も客留」として、靭太夫の得意の語り物で木戸は客留めといふので、川留めを利かせ、「露の干ぬ間の朝顔とはしつぽり濡て廓から朝歸りの宮城氏、九十川より首ッたけ深き中との評判にどこでか蛇籠のしつとやあらん」とキヽをつけたのである。深川は七十五點、大井川は八十點となつてゐる。この選評を讀む間に、これは深川だとか、大井川だとか、頷かれるやうに認められたもので、これを披講するに默阿彌は妙を得てゐたといふ。











河竹糸女補修
河竹繁俊校訂編纂

默阿彌全集 第十八卷

東京 春陽堂刊行

默阿彌全集　第十八卷目次

挿絵目次

宵の騒ぎも引過の眞の噺に身の素性明す小雛と要次郎浮名も立し白浪と小梅が見出す短刀に悟る主人が寫眞で知る一座の連は片腕と頼む仲間の茨木傳次氣も相乘の三五郎車夫が異見も空吹風吹雪に惱む幸兵衛が子故に迷ふ乳貰ひを救ふお村が情の合力商ふ筆の命毛を繋ぎ留しも金兵衛が慾に目のなき非道の催促お雪が杖を失ひし父の船津が貧苦の發狂與兵衛が盡す深節も水の哀れや川中へ飛込む折柄保守に助けられしは神の加護其薄命を惠みたる善根により山岡は難を脱れて荻原が捕へし賊を問糺せば別れ程經し弟に驚くおふみ久助次兵衛流石士族に正作が惡を懲らせし血すぢの繩取り

水天宮利生深川

すゐてんぐうめぐみのふかがハ

「筆賣幸兵衞」は明治十八年二月、作者七十歳の時、千歳座に於て書卸された。作者が晩年に五世菊五郎の爲めに書いた「新皿屋敷」、「浮世清玄」などゝ共に特筆さるべき世話物で、ある。此の作は作者が零落して筆賣りになつて自宅へ來た浪人の哀れな姿と、隣り裏にゐたある女房が發狂して子供を投げ出した事等、見聞を基礎として創案されたものであるといふ。作中での眼目は幸兵衞の發狂する所で、そこに清元の用ひられたことも世評に上つた。伊原青々園氏は次の如く此の場の情景に就いて述べてゐる。「氣が狂ひ出してからをかしい動作をする底には無限の悲哀が籠つてゐる。……床のチョボで愁嘆が有り、泣きくづれると、突然清元で個の三味線を彈き出す、この一瞬間が自分には言ふに言はれぬ快い感じがした。それから始終義太夫と清元とが入違つて、悲しいとをかしいとの矛盾を縫つてゐる、音樂の力でこれほど舞臺のエフエクトを收めた所に此の作の價値はある……終ひに念佛を清元で語らすのも、みじめな感じを融和して好い心持である」と。

書卸しの時の役割は五世尾上菊五郎(浪人船津幸兵衞、横濱の商人西島要次郎實は正作弟正次郎)、先代市川左團次(劍術指南荻原正作、人力車夫入墨の三五郎)、坂東家橘(巡査田見尾保守)、片岡我童(質店山岡富三郎)、坂東秀調(山岡の妻おむら)、澤村源之助(千歳樓の娼妓小雛)、尾上松助(上州屋傳兵衞實は茨木傳次、差配人與兵衞)、尾上菊之助(幸兵衞娘お雪)、現梅幸事尾上榮之助(幸兵衞娘おしも)等であつた。

挿繪にしたのは香朝樓筆の錦繪である。

大正十三年十一月　　　　編者誌す



水天宮利生深川（筆賣幸兵衞――三幕）

序幕

吉原千歳樓の場
油堀荻原宅の場
萬年橋川端の場

〔役名――筆賣幸兵衞、小天狗要次郎、劍術指南荻原良作、人力車夫入墨の三五郎、金貸因業金兵衞、茨木傳次、荻原の下男杢助、周旋人茂栗安藏。荻原の妻おむら、千歳樓の娼妓小雛、幸兵衞娘お雪其他。〕

（千歳樓の場）――本舞臺三間少し前へ出して常足の二重、前通り三尺の式臺後一面常足板羽目の蹴込み、此上中障子の裏を見たる跡尻の模樣、上手三尺中仕切、上神棚、此下地袋、上手へ斜に階子の上り口、上手の見切腰張の壁、下手一間千歳樓といふ暖簾の裏を見せ、續いて板羽目の見切、神棚の前帳場格子、式臺に下足箱、同じく下足札など宜しく、總て千歳樓見世先の體、こゝに金兵衞着流し白足袋、羽織を懷へ入れ立掛り、安藏書生羽織兵兒帶、もぐり代言のこしらへ、小菊仕掛着娼妓のこしらへ、遣手おさく、稻藏、八十八の若い者皆々金兵衞を留めて居る、此の見得太鼓入り廓の騷ぎ唄にて幕明く。

金兵　癪に障つてならねえから、履物を出してくれ〳〵。
安藏　其の御立腹は御尤もだが、是には種々の事情もあれば、まあお待ちなさい。
小菊　小雛さんだとて、惡い氣ではありませんから、
さく　まあお腹も立ちませうが、御機嫌をお直しなすつて、
稻藏　お座敷へ歸つて下さいませぬと、お茶屋と違ひ見世口ゆゑ、
八十　わたくし共の不調法になりますから、
さく　ちよつとでもお休みなすつて、
稻藏　それからお歸りなすつて、
三人　下さりませ。
金兵　いゝや、いやだ、癪に障るから歸るのだ。
小菊　何が癪に障りますか、
さく　行屆かないことがござりますなら、
稻藏　幾重にもお詫を、
三人　致しまする。

金兵　いやおぬし達の詫びでは濟まぬ。まあ聞いてくれ。(ト合方きつぱりとなり、上り端へどつかり住ひ、)おれも小雛の身體に付いちやあ隨分爲になることも、是迄して來た金兵衞だ、それを構はず來ねえのは、あいつが間夫とかい、人とか噂に聞いた横濱の、さい取とか筒取とか生ツ白い野郎が來て、邪魔をするから來ねえのだ。そんな所に居る氣がねえから、それで今歸るのだ。

安藏　それは不體裁極る小雛、假令好いたる男が來るとも同じ玉を拂ふ客、僕が主人に面會なし道理上で掛合した上、次第に依れば法律で、きつと片を付けて見せます。(ト立上るを小菊留めて、)

小菊　お前さん迄ぎごはなことを、一緒に言つては困ります。もし茶屋衆に見られると、見世口の客だから上り端で甚助らしく、あんなにぶう／＼と言つて居ると笑はれると、私迄が共々極りが惡うござんす。

金兵　さうよ、見世口だから客は下等だ、下等だからぶう／＼言ふのだ。

さく　あれさ、さう惡く取つちやあ困ります、見世口だからお靜に、お座敷へいらつしやいと申しますのさ。

稻藏　宵の口だけ立込みましたが、直に小雛さんも參りませうから、

八十　もし茂栗さんえ、どうか旦那のお執成を、あなたからお願ひ申します。

安藏　まだ酒もろくに呑まず、おち〳〵娼妓の側にも居ぬから、少しも歸りたいことはない。

小菊　それだからお前さんも一緒に、お座敷へ來て下さんせ。

金兵　いゝや、厭だ、履物を出してくれ〳〵。

稻藏　そりやあ直にもお出し申しますが、どうかまあさう仰しやらずと、

八十　ちよつとお休みなすつてお歸りなさいまし。

金兵　えゝ、厭だ〳〵。

ト皆々留めるを金兵衛無理に式臺へ下りようとする。流行唄になり、上手の階子より小雛部屋着裝少しいなせなこしらへにて出來り、此中へはひり金兵衛の肩へ縋り、

小雛　もし金兵衛さん、又お前極りを言ひなさんすかえ。

金兵　いゝや極りぢやあねえ、おぬしが座敷へ來ねえから、外へ上つて遊ぶのだ。

小雛　それがお前の極りでござんす、まあ二階へ上りなさんせ。

金兵　厭だの。

安藏　いや二階へ上るは贊成だ。野暮を言はずに上りたまへ。

金兵　いや、厭だの。

小雛　はてまあ、上りなさんせいなあ。（ト無理に金兵衛を二重の上へ上げ、）金兵衛さん、そんなに氣を揉ませないでもいゝぢやあないか。

金兵　誰がおぬしに氣を揉ませるものか、おぬしがおれに氣を揉ましたのだ。

小雛　そりやあお前の了簡違ひ、何時でもおいでの其晩は、あいにくお客が落合ふので、おち〳〵話も出來ないから、どうかしてゆつくりとお前の所に居たいと思へど、今夜も丁度七つの名代、其内初會が多いから宵の内に廻つてしまひ、ゆつくり後で來ようと思ひ樂しんで居た了簡も、知らずに歸ると言ひなさんすのは、そりやあんまりでござんすわいなあ。

小菊　それ御覽なさい、私共が推量通り、是が初會や裏なら知らず、古い馴染の金兵衛さん。

さく　餘所へおいでなすつたことのない、互ひに思ひ思はるゝ、小雛さんも能くするあなた。

稲藏　こりやあ側で申しませんでも、朋輩衆の評判は、

八十　私共も小耳に挾んで、毎度聞いて居りますから、

安藏　座敷へ來る來ないの論なら、小雛に請求致しますから、

小菊　一緒に二階へ、

皆々　おいでなさいまし。（ト皆々扱ふを、）

金兵　宵に旨いことを言つて、夜の明ける迄小雛が來ずとも、拂ひをせずに行かれもしまい、そんな氣休めが當になるものか。

安藏　いや娼妓が勤めを致さぬ以上は、免許は受けぬが君の代言、法律上で押して參つても揚代を拂ふには及びませぬ。

小菊　そんな理窟張つたことを言はずと、茂栗さんも苦勞人、隨分諸方でお遊びと噂に聞いて居ますから、女をとらへて分らない野暮を言つて下さいますな。

安藏　決して野暮は申さぬ、來年は試驗を受け僕も立派な代言となり、やがて二十三年には國會開設の時至り、名義を上げる了簡ぢや。世間の事情に明るいから、遊里などで野暮を言ふ、そんな代言とは譯が違ふぞ。

稻藏　其處を見込んで小雛さんも、又小菊さんもあなたへ願ひ、

八十　留めてお貰ひ申します、思召しでございませうから、

さく　どうぞお歸りは明朝になります樣、あなたから、

稻藏　お願ひなすつて、

三人　下さりませ。

安藏　そりやおぬし達が賴まずとも、僕は床へも這入らぬ事故、なか〳〵歸りたいことはない。（ト金兵衞の方へ向ひ、）一統かやうに述べますから、勘辨して今晩は、泊つてやつては如何でござるな。

金兵　いや、不斷と違つて今夜は泊らぬ、仲の町で車へ乘り根津へ行つて遊ぶ氣ぢやが、それ程こなたが居たいなら、一人殘つて遊んで來なさい。

安藏　厄介になる主人公が、他國へ愉快を極めに行くに、僕が殘る譯にも參らぬ。左樣なら歸る方へ贊成致さう。

小雛　それぢやあどうでも聞かれませぬかえ。（ト小雛金兵衞に縋るを金兵衞ツンとして袖を拂ふ、）澤山外へ行きなさんせ、よく恥をかゝせなさんしたね。稻どん、履物を出してお上げ。（トきつと思入あつて、）えゝ腹の立つことわいなあ。（ト流行唄にて小雛二階へはひる、皆々跡を見送り、）

さく　あんまりお前さんがおぢらしなさるから、腹を立つて行きました。

小菊　まさか男が齒から外へ言つたことは止せますまいから、根津なら根津へおいでなさんせ。

ト此内稻藏履物を出す。

八十　もしお急ぎなら、車を申付けませうか。（ト此内金兵衞小雛に心の殘る思入にて、ちつと考へ居て、）

金兵　いや、おらあ歸らねえ。

皆々　えゝ。
金兵　神田産れではないけれど、ちつと旋毛が曲つて居るから、小雛を初めおぬし達が留める内は歸る氣だつたが、歸れと言ふと歸るのは厭だ。
さく　そんならお歸りぢやあ、
三人　ございませんか。
金兵　おらあ嫌だ、歸らねえ。
安藏　いや、流石は苦勞人だけあつて、歸ると見せて歸らぬ所は、是は僕も贊成致す。こりや、そちも嬉しからうな。
小菊　嬉しいと思つたところを、
安藏　えゝ、
小菊　やう〳〵安心しましたのさ。
安藏　僕もやう〳〵安心した。
稻藏　さうことが極りましたら、
八十　新規にお誂へ物を致しまして、

さく　改めて一口お上りなさいまし。
金兵　いや改めるには及ばぬ、今の殘り肴があるから、あれで一杯呑直さう。
安藏　まだ手付ずの寄鍋に、慈姑は水のへる物故、あれは廢して又外に、
さく　芹の青味に柚の香を、添へて嬉しき差向ひ、
稻藏　お相方と中をよく、白瀧の結びくら、又銀杏で吹矢のお遊び、
八十　中どん難儀の、障子の破れに、
小菊　廊下の透見に惚れたお客が、
安藏　娼妓と鍋を引寄せて、
さく　箸と箸との突付合は、
金兵　ちん／＼鴨の、
皆々　お樂しみ、
金兵　紙屑拾ひが、（ト立上るを道具替りの知せ、）掃溜へはひつたやうだ。
　ト此模樣宜しく、幕明きの鳴物にて道具廻る。

（小雛部屋の場）――本舞臺一面の平舞臺、上手一間床の間、三尺の地袋、此下一面向う二階の手摺、庭遠見の書割、下手廊下の片遠見、上手の柱へ八角の時計を掛け總て小雛部屋の體。爰に以前の小雛長火鉢の側に、湯呑にて清婦湯を呑みゐる、小松朋輩女郎にて住ひ、臺の物を置き、流行唄にて道具留る。

小松　小雛さん、何をお上りだ。

小雛　今朝ッから目まひがするから、清婦湯をのむのさ。

小松　清婦湯はよく利くね。

小雛　血の道の藥では一番だよ。

小松　要さんは久し振でおいでだね。

小雛　私の所へは久し振りだが、大方外へはちよく／＼と、遊びに行くに違ひないのさ。

小松　いゝと思ふ人はめつたに來ないし、厭だと思ふと居續などをされるには、實に相方は難儀でござんす。

小雛　其の好嫌ひをすると、何時迄も長い勤めをせねばならぬわいな。

小松　長いと言へば要さんは、まだ手水からお歸りでないかえ。

小雛　大方何處ぞの部屋へはひつて、いつもの長ッ尻で話し込んで居るのだらうよ。

小松　要さんの長ッ尻は、十八番でござんすね。

と端唄になり廊下口より要次郎散髪鬘、着流し濱商人意氣なこしらへにて、出來り、下手にて嚔をする、是にて兩人飛退き、

あゝびつくりした。おや、御免なさいましよ。

要次　藪から棒に、何をあやまるのだ。

小松　今お前さんの噂をしたのさ。

要次　大方惡く言つたのだらう。おれが圖星と言ふ所を、お前の人相で當て見ようか。

小松　當つたら何でも奢りますよ。

要次　（ちよつと考へる思入あつて）何處へ行つても話し込んで、長ッ尻だと惡く言つたらうな。

小松　おやまあ、圖星に當りましたよ。

小雛　まるで傳通院の尾島さんの樣だねえ。

要次　今に尾島さんの弟子になつて、みんなの心意氣を圖星に當てるから、色男を隱しちやあいけないぜ。

小松　そんなものはありませんよ。（ト要次郎思入あつて）

要次　おや、だいぶ藥の匂ひがするが、何を呑むのだ。
小雛　是も次手に當てお見なさいよ。
要次　一本槍に當てようか、そりやあ元大阪町の高木で賣る、血の道の藥の清婦湯だらう。
小松　ほんによく、當りましたね。
要次　當ると言やアあすこの家の、清婦湯と清心丹位近年當つた藥はねえ。
小雛　それといふのも、能く利くからさ。
要次　何でも生業は精出しやあきつと流行るに違えねえ。何よりお前がいゝ手本だ。
小雛　いやなことをお言ひだねえ。（ト打つ眞似をする、矢張端唄にて、廊下より以前の小菊出で來り）
小菊　小雛さん、御愉快だねえ。
要次　おゝ小菊さん、一つ呑みねえ。（ト是にて小菊火鉢の側へ住ひ）
小雛　因業金兵衛はどうしたえ。
小菊　どうした所か呆れたものさ、あれからみんなが歸れといつたら、又歸らないと言ひ出して、たうとう一座の安藏さんと賄ひ衆や中どんを相手に、殘り物でしみッたれに座敷でお酒を初めたから、いゝ加減にして出て來ました。

要次　あの金貸の金兵衛は、元見倒しの紙屑屋、それから見世へがらくたを並べ、けいず買ひをやつたので、今ぢやあかなりの金満家、酷い高利を貸すさうだが、因業といふ渾名を取るだけ、めつほふ出世をしたさうだ。

小雛　此間少し困つたから無心を言つたら、部屋にある簞笥や火鉢を抵當なら、相當の金は貸してやらうと言つた詞に愛想が盡き、しみ〴〵厭になつたのさ。

小松　何處の國にか勤めをして居る、娼妓の道具を抵當に證文へ印紙を張つてお金を貸さうといふ客は、こりやあ西洋にもありますまいね。

要次　さう開けていふのが西洋だらうが、今も二階で聞いて居りやあ安藏とかいふやつが、代言めいた事をいふが、高のしれた周旋人、いくら代言の眞似をしても三百所か二百にも踏めねえ奴だ。

小菊　飛んだお客へぶつかつて、初會の晩から大風呂敷を廣げた上に二タ言目には、やれ法律々々と、法律の勸工場へ行つたやうでござんす。

要次　然しあゝいふ獸を遣つて居る金貸に、明日にも出された其時は、たゝき分の玉を取つて移り替に苦勞をする娼妓社會をまぬがれて、因業金兵衛の御新造樣、さうなる時はおれなどは指を差すことも出來ねえなあ。

小雛　大きにお世話、止してもおくれ、金が欲しさに好かない客に出されて苦界を脱れるとは、そいやあ昔の女郎の言ひ草、警視廳へ廢業の屆を出した其上で、借さへ綺麗に返してしまへば、明日にも好いた所へ行かれる自由の權の有難さ、何で好かない金兵衞などに、請出されて行くものかね。

小松　小雛さんが三十越した人ならそりやあ讀と歌、梅毒病院の御厄介で一生看病婦になるよりも、嵐つても金貸の御新造さんがよからうが、血氣盛んな身體を持つて、何で厭な所へ行きますものかね。

小菊　それも自分で斯うといふ人がないなら知らないこと、二階中へ浮名の立つた要さんといふ人のあるのに、お前さんがさういふのは、そりやあ殺生でござんすぞえ。

要次　足を近く始終來たら、義理にも惚れたといふだらうが、商法上で濱へ行き、東京へ來ない其の時は、ばつたり足を拔くおれだ、能くされツこはありやしねえ。

小雛　さうしてさんざ氣を揉ませ、たまに來て厭みを言ふから、私や實に悔しいのさ。

ト要次郎をつれる。

要次　あいたゝゝ。（ト持つたる猪口を落す。）

小雛　いゝ氣味だ。（ト有合ふ湯呑を取上げ、）替りに私が是れで呑むよ。

要次　そんな大きなもので、止すがいゝ。
小雛　わたしや自棄で呑むのでござんす。
ト要次郎止めるを小雛無理に湯呑へつがうとする、流行唄になり、廊下より以前の稲藏八十八出來り、
稲藏　小菊さんも此方でござりましたか、いやもう金兵衛さんのお二人には、實に弱り切りまする。
八十　それに付けてもぐりの代言が、二言目には道理上と法律をもつて掛合ふと、おつう凄みを付けますから、
稲藏　賄ひ衆を座敷へ殘し、
兩人　お迎ひに參りました。
小菊　あの通りだから相方の心を察して見ておくれ。
兩人　そりやあ御尤もさまでございます。（ト此内要次郎紙入より札を出し、紙にて二包拵へながら）
要次　若い衆、丁度いゝ所だ、一杯呑みねえ。
兩人　へい、有難うござります。（ト下手へ住ひ小松猪口をさし、小菊酌をする。要次郎右の祝儀を小雛に渡す。）
小雛　稲どん、八十どんと二人へ。
兩人　是は有難うござります（ト禮を言ひ、祝儀をしまひながら）小雛さん、今晩は御愉快でございます。

小松　今夜は何か奢らせようと、先刻から遊びに來たのさ。
小雛　小松さん、座敷はいゝのかえ。
小松　晝間お客が歸つたから、今夜は仕舞が付いて居ます。
小雛　それぢやあゆつくり遊んでおいでよ。
要次　今に正孝でも呼んで、閻魔の顏でもさして見せよう。
小松　それは嬉しうござんすね。
稻藏　閻魔と申せば小雛さんでも、小菊さんでも、ちよつとあちらへ願ひます。
八十　さう致しませぬと賄ひ衆が、一人で困つて居りまする。
要次　成程こりやあ困るだらう、小雛先へ行つてやんねえ。
小菊　いゝえ私が行つて居るから、ばつが惡かつたら人を寄越します。
小雛　それぢやあどうぞさうしておくれ。
小菊　大きにお喧しうございました。
兩人　旦那有難うござります。

ト是迄に稻藏八十八始終要次郎の樣子を探る思入あつて、流行唄になり、小菊稻藏八十八付いて下手へ

はひる。

小雛 小松さん、熱いのを一つお上り。

小松 私より要さんへ。

ト猪口を差す、要次郎捨ぜりふにて受け小雛酌をする、是にて三人宜しく酒を呑み居る。矢張右の合方にて、稻藏下手より出來り、

稻藏 只今濱の方だと申して、あなたを尋ねておいでなさいました。

要次 何んといふ名の人だえ。

稻藏 傳次郎さんと仰しやいました。

要次 そんなら爰へ通してくんねえ。

稻藏 畏りました。(トはひる。小松思入あつて)

小松 お客樣がおいでなさるなら、私は歸ります。

小雛 引けたら又話しにおいで。

小松 邪魔になるとお氣の毒さ。要さん、大きに御馳走さま。

ト流行唄にて小松下手へはひる。此唄にて稻藏先に、傳次羽織着流しにて出で來り、

稻藏　へい、こちらでございます。
傳次　要次郎さん、やう〳〵お目に掛りました。
要次　よく尋ねて來てくんなすつた、さあずつとこつちへ。
傳次　眞平御免なせえ。（ト火鉢の側へ住ひながら、）花魁、今晩は。
小雛　よくおいでなさいました。
要次　どうしてこつちを突留めたえ。
傳次　今日築地の瓢屋で、廓へ行つたと聞いたから、是非逢ひたくて出掛けて來ました。
要次　是非逢ひたいとは、いゝ話しかな。
傳次　外ぢやあねえが支那一件で、滅法今朝は氣配がいゝから、午後の汽車で東京へ急に出て來ましたのさ。
要次　己等も新聞で見たから實は腹組をして居たが、何にしろ爰で逢つてこんな都合のいゝ事はねえ。
傳次　どうせ今夜は泊るだらうから、私も一緒に附合はう。
稻藏　それは有難うございます。小雛さん、お馴染でございますか。
小雛　いゝえ、あなたは初會であつたよ。

要次　座敷があるから、小松さんを掛けねえ。
稲識　畏りました、左様ならお支度を致させます。
小雛　序に新造衆を呼んでおくれ。
稲識　へい、畏りました。（下下手へはひろ。）
要次　有合せで、一つ差さう。
傳次　早速有難え。（下猪口を請取り酒を呑みながら、）明日は二番位な汽車で、一緒に濱へ出掛けるから、
　其積りで起して下さい。
要次　己等の相方は朝寐だから、朝のことは當にならねえ。
小雛　自分のことは棚へ上げて、朝寐とはよく言はれたものさ。
傳次　えゝ痴話喧嘩は見ッともねえぜ。
　　　下下手より以前のおさく先に、新造お清縞の着附、前掛装にて出來り、
お清　おや、よくいらつしやいました。
傳次　初會だから、お頼み申します。
小雛　お清どん、跡のお客の支度をおしよ。

お清　はい／＼。（ト次の間にて、吸物膳へ箸を附けて出す。）

さく　小雛さんは先刻の甚助が喧しくていけないから、ちよつとお願ひ申して行つて下さい。

小雛　あいよ。

さく　あいよぢやあ困りますから、ちよつと顔を出して下さい。

要次　おい、爰はいゝから行つてやつて、金兵衛さんの顔を見て來ねえ。

小雛　あいといふのに。（ト矢張煙草をのみ居る。）

さく　返事ばかりぢやあ困りますねえ。（トおさくせき立てる。此内要次郎祝儀包を二つ拵へ、）

要次　お作どん、一つはあの子にやつてくんねえ。

さく　是は毎度有難うございます。お清どん、ちよいとお禮を。

さく
せい　只今は有難うございます。

ト兩人禮を言ふ、爰へ稻藏杯臺を持ち先に立ち、跡より以前の小松引付裝にて出で來り、下手に中腰に坐り、

稻藏　おさくどん、ちよつとお引付を、

さく　あい／＼。（ト杯臺を請取り、）へい、あなた、（ト傳次へ引付をなし、）さ、お召替。

ト是にて小松稲藏付いて下手へはひる。

傳次　めつぽふいゝ女だな。

要次　どうだ、氣に入つたか。

傳次　大氣に入りだ。（ト此内新造燗をなし、徳利を持つて來る。）

さく　さあ小雛さん、ちよつと行つて下さいな。

要次　いや、此傳さんと商法のことで、儲話しをして居るから、引ける迄來るにやあ及ばねえ。

さく　左樣なら、どうぞお貸しなすつて下さいまし。

要次　新造衆も、用を足して來ねえ。

新造　はい、有難うございます。

要次　さあ行きねえ〳〵。

小雛　えゝも、人を蚰蜒のやうにするねえ。

ト小雛餘儀なく立上る、是より流行唄になり、おさくお淸小雛をせき立てながら下手へはひる。傳次廊下の口へ行き跡を見送り、

傳次　兄貴〳〵

要次　いゝかえ、誰も居ねえか。
傳次　もう大丈夫だ。（トしんみりとした合方になり）
要次　久しく手めえに逢はなんだが、旅へでも行つて居たのか。
傳次　旅ならいゝが四年跡、駿河臺で喰ひ込み、二年半の苦役をして、やうく此間出て來たのだ。
要次　道理で久しく見ねえと思つた、さうして今夜爰に居るのを、よく知つて居たな。
傳次　なに、先刻爰へはひるのを、表でちらりと見掛けたから、直ぐはひらうとは思つたが、お前が商人といふ觸込みだから、此方がひどい襤褸ッこぢやあ、あんまり割符が合はねえから、それにやあ此節賣出しの廓で名代の千歳樓、片ッぱしから玉揃ひの立派な見世へおれなどが、のんこのしやあぢやあ上られねえが、是もお前の顏があるから、裝をこせえてのめくと、商人の積りで尋ねて來たのだ。
要次　そりやあよく氣が付いた、おれだといつて一人ぢやあ、どうして遊び通せねえが、餓鬼の時から生立つた友達仲間に誘はれて惚れられようといふ己惚から、乘地になつて通つて居るが、どうして、以前の金瓶などゝは、はるかに勝つた千歳樓、己等の端口には食過ぎらあ。
傳次　おれなどの見世口を客にするのも、其實は主人が如在ねえからだ、假令一枚一本でも、いゝ顏を

して遊ばせるのは、當時の人氣で安直流行だ。

要次　如在ねえと言やあ、手前の裝はどう見ても商人だが、よくそんな裝が急に出來たの。

傳次　是も總場で困つたから、今大恩寺前へ行く土手ぶちで、丁度いゝ野郎が來たから、刄物でおどして引ッぱいだのよ。

要次　そいつをお生で着て居るとは、ひどい肚胸になつたなあ。

傳次　隱亡堀の秋山ぢやあねえが、是も誰が仕込んだのだ。

要次　さう言はれりやあ面目ねえ、さうして是からどうする氣だ。

傳次　此の東京もやかましく、所詮居た所が仕方がねえから、先づ奧州の方へ赴く積りよ。

要次　山伏になつて落ちるのか。

傳次　まぜッ返しなさんな、義經ぢやァあるめえし。（ト笑ひながら、）それに附いて氣の毒だが、折入つて賴みてえのは、路用を貸して貰ひてえのだ。

要次　そりやあ直にも貸してえが、あひにく今夜は貸されねえから、どうだえ明日の晩附合つてくれねえか。

傳次　そりやあ附き合ふが、强盜かえ。

要次　これさ、靜に言はねえかえ。（ト四邊へ思入あつて、）耳を貸しな。

ト傳次に囁く。此以前下手へ小松出で來り、前へ出ようとして是を聞きびつくりしてはびる。此途端樂太鼓のドン／＼を打込み、兩人びつくりなす、此時下手にて、

番人　火の用心。（ト大きくいふ。）

要次　何だ火の番か、びつくりさせやあがつた。

傳次　まるで芝居の捕物のやうだ。

ト兩人顏見合せ、氣味合の思入、此鳴物へ流行唄を冠せ、下手より小雛出で來り、四邊へ思入あつて、

小雛　もし要さん、大變が出來たわいなあ。

要次　なに、大變とは。

小雛　もし、（ト小雛兩人に囁く。）

要次　そんなら二人の身の上を、

傳次　見出されては油斷が出來ねえ。

小雛　早く爰を逃げておしまひ。

要次　むゝ、羽織を出してくれ。

ト小雛次の間の簞笥より要次郎の羽織を出して着せる、傳次は思入あつて羽織を脱ぎ懐へ入れる。

傳次 兄貴、勘定はいゝかえ。

小雛 そんなことはいゝから、早くおいでなよ。

要次 それぢやあ小雛、跡を頼むぜ。（ト行きかゝるを小雛袖をとらへ）

小雛 落着いたら、居るところを。

要次 其の居所は、（ト四邊へ思入あつて、小雛に囁く）

小雛 そんなら道を氣を付けて、

要次 見世まで送つてくんねえ。

ト流行唄にて、要次郎傳次小雛付添ひ廊下の口へはひる。是と入替つて小松出で來り、跡を見送りながら、

小松 今のお客が上つた時、旦那さんと中どんが、ひそ〴〵話しをする樣子、何だか種が分らなかつたが、思はず聞いた二人の話し、未だに動悸が止まらぬわいな。（ト思入、爰へ小雛出てくる。）お客は何處へおいでゝござんす。

小雛 急に電信がかゝつて來て、馬喰町迄行つて來ると、相場のことで二人共、人力で出て行つたが、

小雛　今夜でないと五百圓程、相場の違ひが出來るというて、急いで出て行きました。

小松　そりや眞實に馬喰町へ、お二人とも行きなさんしたかえ。相場師といふ者は、みんなあんな者だね。

ト小松四邊へ思入つて、

小雛　もし小雛さん、あの二人を何だとお思ひだえ。

小松　別に狐狸でもなく、並のお客と思つて居るのさ。

小雛　お前氣が付かないか、あの二人は泥坊でござんす。（ト小聲にて言ふ、小雛煙草をのみながら）

小松　要さんがそれといふのは、わたしや承知で捨てられないのさ。

小雛　お前は呆れた人でござんす。（ト合方になり、）去年住替で來た時から、姉妹同樣世話になる仲のいいお前故、わたしや親身に異見をするが、是が馴染の少ない女郎衆なら承知で取るのもいゝけれど、幾らも爲になるお客の來るのをそれは構ひもせず、何ほ惚れたといひながら、あゝいふ人を承知でとるとは、若し間違ひのあつた時は、とも〴〵難儀をせねばならぬ、其處を思つてもう此後、どうぞお客にして下さんすな。是が私の頼みぢやわいな。

ト小松宜しく異見をする。小雛思入あつて、

小雛　さう言つておくれのは、わたしや惡くは思はないが、あの人故に外のお客の氣合が惡くお茶を引くとも、それを承知で惚れたのは、こりやあみんな心柄、どうで始終は裁判沙汰と、常から覺悟をして居ます。

小松　そんならこれ程氣を揉んでも、

小雛　惡縁だから堪忍して下さんせ。

ト小松呆れしこなし、太鼓入甚句になり、下手より以前の金兵衛、安藏寐卷裝にて出で來り、

金兵　これ、いつ迄一人で寐かして置くのか。

安藏　僕の相方迄卷添で、引けても座敷へ顏を見せぬは。

金兵　小雛、二人ともどうする氣だ。（ト兩人よき所へ下に居る。）

小雛　つい立込んで廻りませんが、今直に行きますわいな。

金兵　いや、直には來られめえ。お主がぞつこん惚れて居る橫濱の商人と化けて上つた要次郎、連と二人を見出したが、彼奴は小天狗の要次郎に、茨木傳次と名の響いた、肩書付の强盜だ。

ト小松是を聞き四邊へ心遣ひのこなし、小雛思入あつて、

小雛　どうしてそれを、お前さんが。

金兵　知つて居るのは外ぢやあねえ、己が濱でけいず買をして居た時分に二人から、盗み物を買つたので、それで面を覺えて居るのだ。

安藏　其後惡事が顯れて、罰を蒙り金兵衛さんは、やう／＼明るい身體になつたが、あんな賊に惚れるより、僕が辯士で掛合ふから、明日にも廢業した上で、細君になつたがいゝではないか。

金兵　それともおぬしが不承知なら、此意趣返しにあいつら二人を、探索方へ言付けて直上げさせてやるがいゝか。

安藏　それより無事に僕が扱ひ、金溜主義の金兵衛さんへ、身を任したがよからうぜ。

小雛　思召しは有難いが、とても身體を汚すなら、けいず買より強盗で、此身を果す了簡さ。

小松　そんならお前は、どうあつても。

小雛　縛られたらば百年目、此娑婆にさへ居る内は。

金兵　情人は彼奴と、

兩人　極める心か。（ト寄るを、）

小雛　お前はどうも、（ト煙管を取るを道具替りの知らせ。）蟲が好かぬわいな

ト小松心遣ひのこなし、金兵衛安藏忌々しき思入、太鼓入り角力甚句にて道具廻る。

（荻原宅の場）――本舞臺一面の平舞臺、向ふさゝら子下見、眞中より少し上寄りに九尺の出格子の窓、此の內障子を建て、下手一間屋根付の門潛り戶の入口、荻原良作といふ表札、ずつと下手斜に川の流れ、向ふ河岸の片遠見、すべて深川油堀荻原宅外構の體。舞臺花道共一面に雪布を敷つめ、爰におせん前掛下女の裝にて耳盥を持ち下手に杢藏やつし裝、股引尻はしをり、下男のこしらへにて雪掻を持ち、雪を掻いて居る、此の模樣合方水の音にて道具留る。

せん 杢藏どん、ちつとの內に大層積つたね。

杢藏 暮合から降出したが、見る間に四五寸も積つたから、小止みの內に道を付け、旦那樣のお歸りに間に合ふやうにしておくのだ。

せん 今日は佐賀町の山岡樣へ、山の村岡さまと碁が初まるといふこと故、日が暮れてもまだお歸りがござんせぬ。

杢藏 してお仙どんは、何を川へ流しなすつたのだ。

せん 坊ちやんがお亡なりから、御新造さんの乳が張り、毎日川へ流しても又跡から張つて來るので、實に勿體なうござんす。

杢藏 一昨日迄來た長家のかみさんは、先生の內では氣が詰ると、あれ限り乳を貰ひに來ねえが、嘸子

供が困るだらう。

せん　それ故お乳が張るのぢやわいな。

ト矢張右の合方にて、花道より、泥六散髪鬘小倉の袴にて、竹具足を擔ぎ、傳八同じこしらへにて矢張竹具足へ竹刀を結び、低き貸下駄にて番傘を一本持ち出來り、

泥六　大橋から是へ參るに、西受の川端で馳走の酒の醉も醒め、總身へ寒さが染渡つて參つた。

傳八　雪中故人力の直段が中々追ッ付ず、歩行で是へ參つたが、年は越してもまだ寒中、こちらの手は性がござらぬ。（ト舞臺へ來り、）

兩人　ヨウ杢藏、雪搔かな。

杢藏　これはお歸りでござりますか。

泥六　お玉ヶ池で試合の後に、馳走になつて遲刻致した。

せん　お二人さんは今日は、御勝利でございましたか。

泥六　いや勝利とも〳〵、茨城縣から參つた書生を、五人まで打倒し、

傳八　其外、田舍修業の奴等を、片ッ端から打つたので、

泥六　鼻高々と歸つて來たから、今夜は祝ひに其方達に、なう田沼、

傳八　佐賀町の蕎麥屋へ誂へ、天ぷら蕎麥を二つ宛奢らう。
杢藏　勝祝ひのお蕎麥とは、
兩人　それは御馳走でござります。
泥六　そこでお仙どんに賴み置いた、こなたのそば
も今晩は二つ宛振舞つて貰ひたいが、
傳八　それは承知でござらうの。
せん　なに、おそばとはえ。
泥六　えゝ、おつウとぼけるが、それ、此間賴み置いた、
傳八　振舞つてくれる一件を。（ト兩人お仙の袖を引くを、）
せん　えゝ、そんなことは、存じませぬわいな。（トツンとして門の內へはひる。）
泥六　いや、色氣もそつけもないお仙が、物の言ひツぷり、僕には所詮出來ぬわい。
傳八　天ぷら蕎麥か花蒔で、口說落さうと思つたが、やつぱり今日の試合の手際か。
杢藏　へえゝ、左樣なら貴方がたは負けたのでござりますか。
泥六　實は打たれて歸つて來たが、お仙の前へ體裁つくり、奢るとは申したが、
傳八　步行で歸る仕儀だから、今夜の蕎麥は願ひ下げにしてくれ。

杢藏　お仙に彈かれるあのお手際ぢやあ、お二人ともむづかしいと思ひましたが、お玉ヶ池の道場で付刀でお打たれなすつたのは、是は出來ない前表でございます。

泥六　えゝおぬし迄が、けちを付けるか。

杢藏　斯ういふ時にはいつそのこと、負祝ひをなさいまし。

泥六　馬鹿を申せ、負祝ひをした日には、

傳八　身代限りをせねばならぬ。

杢藏　何ぞ替りに抵當を下さい。

泥六　僕が抵當は登樓の折に、悉皆典物になつて居るわえ。（ト杢藏傳八に向ひ）

杢藏　そんなら、あなたは。

傳八　ぽつ〳〵だよ。

杢藏　なに、ぽつ〳〵とは。

傳八　同じくと申すのぢや。

杢藏　私は又雨垂のことかと思つた。（ト雪おろしになる。）あゝ、雨垂所か、又雪が降つて來た。

泥六　今夜は生炬燵といふ晩だな。

傳八　もう一度示談で當つて見ようか。

杢藏　いや無駄を知らない。

兩人　何だと。

杢藏　お寒いから、内へおはひりなされませ。

ト合方雪おろしにて、兩人、杢藏は雪掻を擔ぎ、潛りの内へはひる、是より床の淨瑠璃になる。

上るり　〽鳴鐘の吹雪に籠る八時過ぎ、積る苦勞も深川に流れて寄邊泣く千鳥、降雪よりも幸兵衞がふさがる胸の晴れやらず、涙に暮の道端へやう〳〵に歩み來て、

ト時の鐘雪おろし、よき程に花道より幸兵衞好の鬘、切繼やつし裝腰へ風呂敷包を結ひ付け低き安下駄にて、抱兒を懷へ入れ、破傘をさし出來り、

幸兵　去年の暮から雨がなく、よく天氣が續いた故、お濕りにはよいけれど、其日稼ぎの貧乏人には、取分け困る今夜の雪、まして是が乳がなくては尚々夜は寐付かれまい、どうか何處ぞで一ひゞき呑ましてやりたいものぢやなア。

〽きしむ足元踏みしめて夜風を厭ふ破傘に、薄き緣しの軒の角寒さに親子消入る思ひ、

ト此内風の音になり、傘にて抱兒をかばふこなしにて舞臺へ來り、ホツト思入、赤兒笛になり、是を

いぶり付けながら、

あゝ又泣くか、いゝさ〳〵、(ト思入あつて、)あゝ是も尤も、晝間出先で貰つたぎり、疾にひもじいことであらう、今に何處ぞで飲ませるから、其樣に泣いてくれるな、たがよ〳〵。

〽をやみを幸ひいぶり付け〳〵、我子の顏をつく〴〵と雪明りに透し見る、孫康ならぬ親は子にかゝる憂目を見するのは、不便のものやと抱きしめ涙にくるゝ折柄に門の潛りを立出る杢藏、

ト此内雪止みしこなしにて、幸兵衛傘をつぼめ、懷にていぶり付けながらぢつと顏を見やり、愁ひの思入宜しく、爰へ潛より杢藏出來り、

杢藏　天氣の晩でも人通のない、此油堀に赤子の泣聲、もしや捨兒でもありやあしないか。

〽四邊見廻し心付き、(ト幸兵衛を透し見て、)

誰か居る樣だ、そんなら捨兒ではなかつたか。

幸兵　えゝ。

杢藏　いえなに捨て置れぬ赤兒の泣聲、樣子を見に出て來たが、母御は一緒ではござらぬか。

幸兵　實は先月母親が、亡なりましてそれからは、私が商ひながら諸方を貰つて歩きまする。

杢藏　それは嘸困りなさるだらう、儘になるなら御新造様の乳を貰つてやりたいが。
幸兵　へえ、御新造様は、お乳は出ますかな。
杢藏　いや出るとも〳〵、丁度先月お坊様が痲疹でお亡なりなされ、それからお乳が張切るので、今も女中が耳盥で川へ流した位のこと、もう一足早かつたら、あれでも飲ましてやつたもの。
幸兵　すりや、流すほど出ますとな。
〽羨ましくは思へども、取付くしまのあらざれば、
ト是を聞き乳を貰ひたき思入、此内窓の障子を明け、おむら丸髷士族の妻のこしらへにて、以前のお仙と兩人是を聞き、不便だといふこなしにて窺ひ居る、幸兵衞思入あつて、
母に別れて男親が、斯うして乳を貰ひながら所々を歩く者もあるのに、又有りあまつて張る乳を川へ流すといふもあり。
杢藏　こなたの内儀は其子を殘し、乳に不自由なさるといふ、又御新造は子を先立て一人でお歎きなさるといふ。
幸兵　世は樣々でございますなあ。
〽飲せたいは山々なれど、我身の上を顧みて目に持つ淚押隱す心を察し戸口より、お仙はい

そいそ立出で丶、

ト幸兵衞愁ひの思入、赤子笛になるをいぶり付ける、此前におむら不便だといふことなしあつて、障子を建てろ、杢藏も氣の毒なる思入、潛りよりお仙出て來り、

せん　赤さんの泣聲に、今お窓から御新造が御覽なすつて樣子を聞き、嘸お困りなさんせうから、一はい上げようと仰しやる故、お呼び申しに來ましたわいな。

幸兵　左樣ならお乳を下さりますとか。え丶有難うござりまする。ト禮を言ひながらちつと思入あつて、あんまりむさい此裝では、

杢藏　何の構ふことはない、そんなことを厭がるやうな御新造とは違ひます。

せん　養育院や育兒院へ度々施しをなさる位、お慈悲深いお方故、

杢藏　遠慮なく行きなさるがよい。

幸兵　左樣ならば、仰せに隨ひ、ト以前の傘を取らうとする、此時赤兒泣く是をいぶり付けながら　これさ、泣くな、よいお乳を下さるぞ。

へ伴はれてぞ、

ト　お仙先に杢藏幸兵衞潛りの内へはひる、此の模樣宜しく雪おろし三重にて、此道具廻る。

(庭先の場)――本舞臺四間常足の二重本庇本椽付、上手一間の床の間、次に三尺の違棚、續いて腰張の茶壁、太鼓張の入口上手一間跡へ下げて廻り椽の下地窓、平舞臺の下手屋根付の枝折門、左右建仁寺垣、雪持松の立木、所々に霜除、日覆より釣枝、平舞臺に雪布を敷きつめ、總て荻原宅庭先の體、爰に以前のおむら住ひ下手の枝折門よりお仙出て來る、此模樣雪下し合方にて、道具留る。

せん 只今お窓から御覽なされました乳呑兒を、お庭口より杢藏どんが連れて參りますれば、お乳をお遣り下さりませ。

むら 乳呑があらば飲ましたいと思ふ所へあの子の泣聲、飲ましてやつたことならば、菩提の爲にもならうかと、それで呼びにやつたわいの。

せん そりやもう必らず坊ちやんの、お爲めになりますよい御功德、何よりの御善根でござりまする。

〽話し半へ杢藏が、手引の絲の緣先へ伴ひ來る乳貰ひの、姿に不便いやまさり、顏見合して詞なし、(ト此内下手より、杢藏先に幸兵衛出て來り、下手へ腰を掛け、)

杢藏 御新造樣、乳貰ひを連れて參りました。

むら さあ〱それへ上げたがよいわいの。

杢藏 はい〱、畏りました。さ、遠慮なく上りなされ。

幸兵　是れで宜しうござりまする。

せん　そこは冷えまする、此方へお上りなさんせ。

幸兵　左様なれば、眞平御免下さりませ。

〽禮儀正しく手をつかへ、（ト幸兵衛下手へ上り、手を突き、）只今はからず御門外にて、是が泣入りましたのが、御縁の端とお情にも、お乳をお飲ませ下さる由、何とお禮を申しませうやら、有難う存じまする。

むら　乳の張るので呑む子をば、ほしいと思ひし其處へ、幸ひお困りの御様子故、それでお呼び申しました。

幸兵　雪は降出し夜分のこと、何れへ參つて願はうかと、實に當惑致せし所、是が地獄で佛でござりまする。

むら　さあ早う飲まして上げませう。

〽さあ〳〵早うと抱き取り、紅葉に似たる幼兒の凍えし手先肌に入れ、暖めながら含ます乳房、飲む我子より見る親の、心の内ぞいかばかり、折柄立出る門弟か、

ト此内赤兒笛になり、お仙幸兵衛より請取りおむらへ渡す、是にて乳を呑ませ泣止む、幸兵衛ちつと

思入、爰へ奥より門弟兩人出て來り、
泥六 只今お次にて承れば、何か是なる往來の者を、此處へお招ぎなされ、
傳八 小兒にお乳をお呑ませなさるとは、よい御善根にござれども、
泥六 毎度新聞上にも出て居ますが、得手かやうな者が此場より小用に參ると僞りて、
傳八 其儘小兒を置去りに、逐電致すこともござれば、
泥六 めつたに御油斷は、
兩人 なりませぬぞ。(ト幸兵衛思入あつて、)
幸兵 斯く見苦しき風體故、其御疑惑は御尤もながら、左樣な者ではござりませぬ。
傳八 誰も先から捨兒をすると、口へ出しても申されまいから、こりや左樣申すは當然だが、巾着切かたりなどが巧みの深き時世故、中々心はゆるされぬ故、
泥六 僕等が注意致すのでござる。(トおむら思入あつて、)
むら して、何を渡世になされまする。
幸兵 私は筆職にござりまする。
むら 男へお話しを聞きましたには、御家内もお亡なりの御樣子、嘸お困りでござんせうが、此お子の

外に兄弟衆でもござりますか。

せん　あの衆達に疑られるも、お氣の毒に思ひますから、

杢藏　此の苦勞をさつしやることを、

むら　乳を呑む内お話しなさんせ。

へ恩義に報ふ問ひでうに今更包むにつゝまれず、（ト幸兵衞迷惑なるこなしあつて、氣を替へ、）

幸兵　小兒が御恩になるのみならず、一方ならぬ御親切にあまへまして身の上を、申上げるでござりまする。（ト床の合方になり、）元私は舊幕の士族の果でござりますが、瓦解此方零落なし、上より賜る公債證書も抵當となし金子を借受け、所謂士族の商法を開きましたが、馴れぬことにて世話をする周旋人によい事され、引續いての損失に公債證書も貸方へ引上げられて手振編笠、無據舊友に筆を結ふのを教へて貰ひ、それをば所々へ賣歩き細き煙りの命毛を繋いで居りし其處へ、妻が産後の肥立惡く搗て加へて小兒を殘し死去致してござりますが、跡片付に差支へ金策に奔走致すを、十六になる惣領の娘が案じ涙にくれ、それが元にて目しひとなり、療治を願ふ其先の茅場町の安藤樣、又駿河臺の井上病院と、よいお醫者は存じて居れど願ひに出られぬ貧窮人、舊朋友も路上にて人力車を曳くもあれば、それをなさんと思へども、身體は弱し小兒はあり、餘儀な

く所々へ筆を持行き一本二本の商ひにやう／＼送るはかない身の上、御推量なされて下さりませ。

むら　そんなら惣領の娘御も、目が潰れなさんしたとか。

せん　さうして商ひに出る其内は、一人で留守をなさんすか。

幸兵　いえ、其間にもう一人十になります妹と都合三人でござりますが、互ひに姉妹思ひにて、目しひながらも夜なべをかけ、手探りにて筆を拵へる其不便さを見るに付け、いつその事養育院へ願はうとも存じましたが、身の不勉強より官員にもなられぬ上に入院なさば、先祖へ對して濟まざる儀と、思ひ止まりましたれど今日などは暮合から俄に降出す此雪に、身體は凍え小兒は泣き、いつそ永代より身を投じ親子諸共死なんとせしが、宅に殘りし子供を思ひ、どうも死ぬにも死なれませず、親子泣く／＼參る道、計らず佇む御門の外、お情厚きお詞に包まず恥をお話し申し、面目次第もござりませぬ。

〽内へ涙を呑込んで語るも便なき子故の闇、聞く人々も胸曇り、ふさがる空の晴れやらで、

ト此内幸兵衛ぢつと俯向き思入、おむら皆々愁ひのこなし、泥六傳八も涙を隱して拭きながら、

泥六　一伍一什の物語は何を申すか哀ッぽく、當にならぬと思つて居たが、段々譯を承はると泣くといふ論はないが、少々感じて參つた。

傳八　何に致せ十六の盲目の娘が惣領に、此小兒共三人で、親子四人の活計は筆位ではやりきれまい。

幸兵　恥を申さねば分りませぬが、三度の食も不足勝ちにござりまする。（ト ぢつと俯向く。）

杢藏　おゝさうであらうとも、何をしても四人口、中々骨の折れる筈と言つた所が新燧社のマッチの箱も仕事は安し、石鹼の手傳ひも錢にならず。

せん　いつそ新地のはなの昆布會社の手傳ひはどうでござんす。

杢藏　どうして〳〵昆布會社は、人が餘る程上さん達が、はひり込んで居るから無駄だが。

泥六　あゝ何ぞいゝ錢儲を、

傳八　教授致して、

皆々　やりたいものぢやなあ。

〽性は善なる書生等も惡き心を改めて、案じ合ふこそ賴もしけれ。

ト 皆々氣の毒だといふこなし、此内おむら思入あつて、お仙に囁く、是にてお仙奥へはひる。

むら　段々との身の上話しお聞き申すもお氣の毒、人は七轉び八起とやら、又何れにかなりませうから、せめて此子の祝ひ頃迄辛抱をなさるがよい、斯うして乳を上げるのも何かの御縁であらうから、此後共遠慮なく油堀の川岸通りで荻原とさへお聞きなされば、直に爰が知れますから、呑ませに

連れておいでなさい。

へ親切面に現はるゝ詞の内に萩原と、聞いて扨はと心付き、（ト幸兵衛ハッと思入あつて、）

幸兵 左樣なら此方樣は、荻原樣とおつしやりまするか。

むら 旦那も矢張り舊幕臣、靜岡の者でござりますが、親父の跡を相續なし、是迄居つた其お蔭に當時は劍術流行なし、日々稽古で御用多く日曜の外出ることの出來ぬほどになりましたも、只今申す七轉び八起、必ず短氣をなさいますな。

杢藏 是を御緣に乳を貰ひに、之から度々來なさるがいゝ。さうして內は何處で、名は何と言はつしやるな。

幸兵 名前は幸兵衛と申しまするが、宅の所はどうもこゝでは。

泥六 其の斟酌には決して及ばぬ。

傳八 僕等も後日尋ねて參れば、

杢藏 言うて置いたがよいではないか。

幸兵 どうも、それは、

へ言ふにいはれぬ胸の內、差しうつ向けば察しやり、

ト幸兵衛切なき思入にて俯向く、おむら思入あつて、

むら　いや其のお住居は聞かずとも、遠慮なくおいでなされば、其の内知れるでござりませうから、後してのことになさりませ。

ト奥よりお仙紙包を持出で來り、おむらの前へ置くを指圖して、お仙幸兵衛の前へ出す。

それはほんの心ばかり、此兒が寒くない樣に、着物でも拵へて下さんせ。

幸兵　乳をお貰ひ申した上に、斯樣な御厄介になりましては。

むら　いえ、其心配には及びませぬ、内にも坊の一つ身が殘つてあれど死んだ子の物、それ故金子で上げますから、どうぞ求めて下さんせ。

幸兵　左樣ならばお詞にあまへ、其のお子樣のお寐卷でも頂戴致したうござります。

むら　それでも死んだ子の物は。

幸兵　何の構ひは致しませぬ、此方樣にあやかるのは、是の仕合せにござります。

むら　さういふことなら、これ仙や、下の簞笥の八丈を。

せん　畏りました。（ト奥へはひる。）

泥六　昔は死去した小兒の物など、古着屋なら知らぬこと斯う打明けて小兒などへ、なか〳〵着せはせ

なんだが。
傳八　其處が開化で表向に悦んで受けられるとは、徳川家の舊臣でも、こなたはよつぽど開けて居る。
本識　何でも貰ふ物は夏も小袖、私などは此間坊ちやんを湯灌した手拭迄勿體ないから貰つて、いまだに遣つて居ります。
泥六　いや、これは餘り開化過ぎる。（トお仙一ツ身の着附を持出て來り、）
せん　是でござりまするか。
むら　それを上げたがよい。
せん　さ、お氣に掛けずば是も坊ちやんのでござりまする。（ト出す、幸兵衛請取り見やりて、）
幸兵　あまり結構過ぎたお召物、是では恐入りますから、どうぞよごれしお寐卷なりとも、
せん　いえ、其御遠慮には及びませぬ、是はお惡いのでござりまする。
泥六　だいぶ上げがござるから、軈て成人の其後は、仕立直して丈を延ばし、
傳八　學校へお上げなさる時、筒袖にしたがよい。
幸兵　どうか學校へ參られる樣に。
ト跡言ひさして詞なし、知らぬが佛幼兒は、添乳に睡る雪の夜の寒さを忘れてすや／＼と、

疲れし聲に心付き、
ト此内幸兵衞ホロリと思入あつて、着物を持つた儘愁ひの思入。

むら　澤山呑んだと見え、すや〳〵と寐て仕舞つたわいの。

幸兵　お蔭樣で寐ましたか、さ、こちらへお遣し下さりませ。

〽言ひつゝ受取り我子の顔つく〴〵と打ち見やり、（トお仙取次ぎ幸兵衞に渡す。）

あゝ、子供は佛樣ぢやなア。

〽世が世であらば雪の夜に、かゝる憂目は見せぬものと、積る昔を思ひしが四邊憚り咳にまぎらし、

ト抱兒を抱へ愁ひの思入あつて、咳をせく、お仙見兼ね茶碗へ湯を持つて來り、

せん　お湯をお上りなされませ。

幸兵　是は憚りでござりまする。

せん　お湯と申せば御新造さま、湯タンボが出來ました。

むら　わたしやフランネルを着たから、それはあの子に上げて下さんせ。

せん　左樣なら是は、お歸りに入れておいでなさいまし。（ト平尾製の懐中湯タンボを出す。）

幸兵　何から何迄お心付け、お禮の申上げやうもござりませぬ、(ト受取りながら、)是は珍らしき品でござりますな。

むら　それは此節馬喰町の平尾で賣る發明の湯タンポ、溫石替りに始終入れます。

幸兵　其の馬喰町の平尾と申すは、小町水の内でござりましたな。

むら　左樣でございます。

幸兵　左樣なら此間見世へ筆を持つて參り、澤山求めて貰ひましたが、是が評判の懷中湯タンポでござりましたか。

せん　次手に其一つ身も、此子に着せてお上げなさんせ。

幸兵　お言葉にあまえまして、左樣致すでござりまする、(トお仙手傳ひ抱兒に着物を着せる、件の金包を取つて、)是はお返し下さりませ。

むら　それはほんの心ばかり、どうぞ納めて下さりませ。

幸兵　お召物をお貰ひ申しては、なか〲是は受けられませぬ。

むら　はて、さう言はずと志し、取つておいて下さんせ。

幸兵　そんなら是迄わたくしへお惠みなされて下さりますとか、何とも恐れ入りまする。(ト禮を言ひ、風

呂敷包の内より筆を十本ほど反故に包み、）お用ゐにはなりますまいが、お禮の印でござりまする。

むら　其心遣ひには及ばぬから、それは外へ賣つて下さいまし。

幸兵　いえ、心ばかりの品なれど、どうぞ納め下さりませ。（ト無理におむらの前へ差付け雪おろしになる）

泥六　又降出して參つたか、其湯タンポのさめぬ内、

傳八　ちつとも早く幸兵衛殿、

杢藏　内へ戻つたがよくござるぞ。

幸兵　お暇致すでござりまする。（ト件の金包を懷中なす、是迄抱兒お仙抱きゐる。）是は憚りでござりました。（ト請取り湯タンポを懷へ入れ、おむらに向ひ、）左樣なれば御新造樣、何から何迄御厚情、御恩は忘却致しませぬ。

むら　又いつでも呑ませに來なさんせ。

幸兵　有難うござりまする。

杢藏　さ、案内してやりませう。

幸兵　どうぞお願ひ申しまする。（ト幸兵衛皆々に挨拶なし、平舞臺へ來り、）湯タンポで、こりや寒いことを知らずでござりまする。

へ子の愛着に幸兵衛も、我身の憂きを忘るゝ思ひ、下男が案内に出て行く、

ト雪おろしになり、杢藏先に幸兵衛傘を半開きにして、以前の口へはひる。此時奥にて、「お歸り」と呼び、合方になり、奥より萩原良作惣髪の鬘、長合羽にて出て來る、おむら初め皆々出迎ひ、良作上手へ通る。

むら　これはお歸りで、

皆々　ござりますか。

良作　合羽を取つてくりやれ。

せん　畏りました。（ト良作の合羽をとる、おむら服臺の書生羽織を取つて引掛ける。）是は何處もよごれません。

良作　人力で參つたから、何處も濡れぬのぢや。

むら　大分お遲うなりましたな。

良作　碁好ばかり寄つたので、なか／＼長くなりさうぢやから、無理に戻つて參つたのぢや。

ト　お仙茶を出す、下手より杢藏出來り、

杢藏　これは旦那樣、お歸りでござりますか。

良作　只今表に居つたは其方か。

杢藏　はい、左樣にござります。御新造樣、只今の浪人が表へ出ますと振返り、三度迄手を合して行きましたが、よい御功德をなされましたな。

良作　誰が參つたのぢや。

むら　舊幕の士族にて、三人の子を殘し妻が死去致しまして、筆を賣つて歩くと申す不便な者が、軒下へ參りましたを呼入れて其子に乳を呑ましてやり、坊の古着と少々の合力を致しましたので、悅んで歸りました。

良作　それはよい功德を致した、舊幕士族と聞くに付け種々樣々に落ぶれて困却致す者多きは、苦々しき事だわえ。

泥六　只今の浪人などは、男振といひ、物言も滔々と辯じましたが、何處か不勉強なることゝ見え、

傳八　僅な筆にて活計を、立てると申すは不便でござるな。

良作　舊士族でも身共などは、一旦廢刀の令出てより、世に廢れると思ひの外、近年劍道流行仕出し、宮內省を初めとして諸官省、其內警視は分署に至る迄、烈しき試合致すので、再び世に出で今日を樂に暮す身分となりしは、亡き師匠の大恩なり、君等も後世師の恩は忘却しては濟まぬぞよ。

泥六　日々稽古を願ふので、今日お玉ヶ池の試合にも、

傳八　見事勝を
兩人　得ましてござりますぞ
せん　あれお二人の、嘘ばッかり。
兩人　え、何を知つて居るものぞ。（トお仙に默つて居ろといふ思入、良作有合ふ筆を取上げ、）
良作　大分筆を求めたな。
むら　それは只今お話し申した、浪人の筆屋が置いて參りました。
良作　左樣か。（ト筆を見ようとして、包みし反故を開きて見やり、不審の思入あつて、）見覺えのある此手蹟、こりや、其筆賣の面ざしは、どういふ樣子ぢや。
むら　年の頃は卅四五、細面にして中肉中背、
せん　役者で申すと、菊五郎に似て居りました。
良作　師匠死去の其後は、靜岡に於て御子息が餘程困難と聞きし故、再度郵便を以て尋ねしが、一度も返事來らぬは、不審と思ふ其矢先筆を包みし此反故は、師匠が日々記されし日記帳をほごせしものにて、手蹟は覺えのお家流、年齡といひ面ざしといひ、若しや御子息。こりや〳〵、して住居を承はつたか。

杢藏　お内は私も御門弟も、くどくお聞き申しましたが、何か仔細でもあると見え、申されぬと申しました。

良作　して、名前は聞かぬか。

泥六　名前は幸兵衞と申しました。

良作　御子息は幸之助といはれたが、（ト　ちつと思入あつて、）そんなら若しや幸兵衞と。

むら　すりや豫々お噂ありし、

せん　若旦那では、

皆々　ござりませぬか。

良作　住所を聞かぬは、（ト持つたる反故を置くを木の頭。）不念であつたの。

ト腕組をなす、皆々惜しいことをしたといふこなし、此模樣合方雪おろしにて、

ひやうし幕

ト雪おろしにてつなぎ直引返す。

（萬年橋の場）――本舞舞向う濱町川岸より千歲座の屋根が見たる夜の遠見、裾通石垣の見切、所々に水杭、上手疊んだる出茶屋、下手貸倉の下見をしたる張物にて見切り、此前柳の立木、日覆より同

しく釣枝、舞臺花道共雪布を敷きつめ、すべて深川萬年橋南岸の體、爰に○□△の三人頰冠り、そぼろなる装にて一本の傘を三人にてさし、一人中腰にて下駄の鼻緒を直し居る、此見得合方雪おろしにて幕明く。

○何時迄鼻緒をたつて居るのだ、素蛸ぢやあたまらねえ。

□未練をしねえで跣足で行け。

△夏でもあるか雪の中を、どうして跣足で行かれるものか。

○何にしろ寒くツてこてえられねえ、鶴か牛で暖りてえが、文なしぢやあ仕様がねえ。

□蕎麥で一合でも構はねえが、誰か少しやあ持つて居ねえか。

△三人共形なしだ。

○お祖師様の龍の口で、御難と出來て居やあがる。（ト此内向ふを見やり）

□向ふへ人が來る様だが、苦し紛れだ當つて見て、酒の錢でもふんだくらう。

○いゝか、相手は大丈夫か。

□小さく見えるから、子供かも知れねえ。

△子供なら安心だが、錢が安心ならねえなあ。

ト合方雪おろしになり、花道よりお芥子銀杏返しの鬘、切繼裝裾を端折り、はだしにて破傘を半つぼめ

にさし、竹の杖を突き、盲目のこなしにて出來り、

お雪　川風で雪を吹ッかけ、ぴつしよりになつてしまつたが、其替り人通りがないので、晝よりよつぽど歩きよい。（ト舞臺へ來る、三人お雪の前へ行き、）

○　おい〳〵姉さん、一人でお前何處へ行くのだ。

お雪　柾木のお稲荷様へ願掛けをしましたから、日參を致しまする。

□　目が見えねえの。

お雪　はい、盲目でござりまする。

△　跣足參りか、こいつア感心だ。

○　おい、お參りなら錢があるだらう、氣の毒だが貸してくんねえ。

お雪　え、貸せとおつしやりますは。

○　別にお前を知つた者ぢやあねえ、三人寄つて一文なしだから、

□　蕎麥を喰ふことも出來ねえ、ヒッテンばかり寄つたのだ。

△　幾らでもいゝから、持つて居るだけ貸してくんねえ。

お雪　有りさへ致せばお貸し申しますが、お賽錢の文久ばかりでございます。

○ そんなことを言はねえで、二十錢でも三十錢でも貸してくんねえといふに。

ト懐へ手を入れようとする。

お雪 あれ、どうぞお待ちなすつて下さいまし。(ト手へ縋るお雪の顔を見やり、)

ヘ なか〳〵いゝ器量だが、幾つになる。

お雪 はい、十六でございます。

○ 十六だ、こいつあ丁度いゝ。さ、錢を出さねえと、爰に居る三人が替り〴〵に、

□ 念佛講をやらかすぞ。

お雪 え、

□ それとも錢を貸してくれるか。

お雪 それぢやというて持合せが、

△ なけりやあいゝ、なぐさんでやれ。(ト兩人手を取るを振拂ひ、)

お雪 あれ、誰ぞ來て下さんせ。

三人 えゝ、聲を立てやあがるな。

と合方雪おろしにて、三人お雪を捉へようとするを、傘にてやにはに打つ、是にて三人たぢ〳〵とす

ると、お雪雪を取つてはふるごつちやの立廻り、爰へ上手より前幕の要次郎頬冠り、尻端折り下駄がけ、同じく傳次番傘をさし、駈出て來る、お雪逃げようとして突當り、

要次　え〻びつくりした。

傳次　大勢で何をするのだ。（ト此聲にお雪要次郎に縋り、）

お雪　私を捉へあの人達が、なぐさまうと仕ますから、どうぞ助けて下さりませ。

要次　何だ、此奴らあ強淫するのか。

傳次　こんな子供を酷いことをしやあがる。

要次　さあ交番へしよぴいて行くから、片ッ端から來やあがれ。

○　べら棒め、巡査なら仕方がねえが、

□　種も知れねえ手前達に、

△　何で連れて行かれるものかえ。

□　え〻面倒な、叩き擲れ。

傳次　何を。

ト傳次持つたる傘にて打つてかゝり、三人と立廻りあつて、トゞ皆々上手へ逃げてはひる。此内雪止ん

で灯入の半月を出し、

要次　口程にもねえ奴等だ。

傳次　泡を喰つて逃げて行きやあがつた。

要次　何處か怪我をしやあしねえか。（トお雪の身體の雪を拂つてやりながら、）お前目が見えねえのか。

お雪　俄盲目でござりまする。

傳次　そいつあ可愛さうだが、今時分何處へ行くのだ。

お雪　此橋向ふの柾木のお稲荷様へ、はだし參りを致しまする。

要次　そりやあ感心なことだが、此の雪の降るのにたゞ一人、どういふ譯で日參するのだ。

ト合方きつぱりとなり、

お雪　お母さんが亡なりまして、悲しい事と泣明し、それが元で目が潰れ、お醫者様へ掛れませねば、どうぞ目の見える様にと、お稲荷様へ日參致しまする。

傳次　まだ年もいかねえのに、目を泣きつぶす程苦勞するとは不仕合せな娘だが、さうして家には父親ばかりか。

お雪　いえ十になります妹に乳呑が一人ござりまする。それをお父さんが懐へ入れ、筆を賣りながら先

き先きで乳を貰つて歩きますが、細い元手の內職では、親子四人をすごし兼ね、心配するのを聞きますので、猶々目が治りませぬ。

要次　それぢやあ內職にお前の親父が、筆を拵えて賣りに出るのか。

お雪　今日も晝間賣りに出たぎり、まだ戾つて參りませぬ。

傳次　父親が留守ぢやあ歸り迄、子供二人で留守をするのか。

お雪　お父さんが歸る迄は、お夜食も喰べませんが、それも商ひの都合により、まるで喰べぬこともござりまする。（と淚を拭ふ。）

要次　おゝさうだらう、筆位ぢやあ四人口どうして暮せる譯がねえ。傳次、可愛さうぢやあねえか。

傳次　おらあ餓鬼を持つたことがあるから、其時のことを思ひ出すと、哀れッぽくなつてたまらねえ。

　　ト傳次男泣きになく、要次郎も愁ひの思入あつて、札を出して紙に包み、

要次　此の中に一圓あるから、是を持つて直歸り、米でも買つて親父を悅ばしてやるがいゝ。

　　トお雪に持たせる。

お雪　え、そんなら是を私へ。

傳次　明日の晩から跣足參りは止しにしねえ。巡査に見付かッたら說諭をされるに違えねえ。

要次　何も是が日參したつて、又内に居て拜んだつて、一心さへ通じれば、どつちにしても同じことだ。

傳次　風でも引くとお前より父親が餘計に心配して、却つて信心にはならねえから、

要次　なるたけ内に居る樣にして、稻荷樣をよく賴むがいゝ。

お雪　はい有難うござります、そんなら是をお貰ひ申しても宜しうござりますか。

要次　いゝから持つて行きねえ。

お雪　是で今夜はお飯も喰べられます、有難うござります〳〵。

ト　お雪作の札を押頂き、懷へ入れる、傳次思入あつて、

傳次　兄貴、此幸先ぢやあ、今夜の仕事は出來ねえぞ。

要次　おれもさう思つて居るのだが、仕方がねえから此間行つた、安泊りの上總屋へ行かう。（ト此内お雪西邊を探りゐる。）何を搜すのだ。

お雪　杖と傘はござりませぬか。

傳次　おい〳〵。爰にある〳〵。（と傳次落散りあるを拾ひ、お雪に渡す、是にてお雪立上る。）

要次　お前、内は何處だ。

お雪　はい淨心寺の裏の方でございます。

傳次　それぢやあ十町足らずあるな。

お雪　まことに申し兼ねましたが、一人で參ると又今の人に逢ふかも知れませぬが、どうか高橋へ知つた所迄お送りなすつては下さりませぬか。

傳次　こいつあ尤もだ、兄貴高橋迄送つてやるぜ。

要次　さうだとも〳〵、若し間違でもあつた時は、佛作つて魂入れずだ、己あ爰らに待つて居るから、三四町だ送つてやんねえ。

傳次　それぢやあ爰らに待つて居てくんねえ。

お雪　そんなら送つて下さりますか、えゝ有難うござります。

要次　氣を付けてやつてくんねえ。

ト合方になり、傳次捨ぜりふにてお雪の傘を持ち、手を引いて花道へはひる、要次郎跡を見送り、

哀れツほい娘の話しで、何だか氣がくすんでしまつて、何をする氣もなくなつた、今夜は是から上總屋で一ぺいやり、無事に寐るより仕樣がねえ。（ト風の音になり、身震ひをなし、）あゝ寒い、雪は上つたがたまらねえ風だ。（ト襟を合せる途端心付し思入にて、）や、こいつあしまつた、車の中へ忘れものをした。（ト上手へ行かうとして、）是から行つても辻車、飛んだことをしてしまつた。

と宜しく思入、上手にて、
三五 おゝい、さつきの旦那々々。(ト要次郎聞耳を立て、)
要次 外に往來もねえが、誰を呼ぶんだ。
ト合方になり、上手より三五郎散髪鬘車夫の拵へにて、二人乘の車を曳き呼びながら出來り、
三五 其處へおいでなさるのは、東橋で乘つた旦那ぢやあござりませぬか。(と是にて要次郎振返り、)
要次 おゝ、先刻の若い衆か。
三五 旦那でござりましたか、いや、いゝ鹽梅に追付きました。
要次 何でおれを呼んだのだ。
三五 大橋際の新開で、蕎麥を喰はうと思ひましたら、蒲團の下にお忘れ物がありましたから、直追つかけて參りました。(ト是にて要次郎ぎつくり思入あつて氣を替へ、)
要次 おらあ何も忘れたものはねえが。
三五 てつきり旦那のと思ひまして、持つて來ましたから、まあ御覽なすつて下さいまし。
ト蒲團の下より手拭に包みし匕首を出す、要次郎知らぬ振にて、
要次 そりやあ已が置いたのぢやあねえ、大方先乘つた客だらう。(と三五郎思入あつて、)

三五　是が外の品ならば、先の客かと思ひませうが、是りやあお前に限る品だ。

要次　えゝ、（ト　びつくり思入、三五郎四邊を見廻し、小聲になり。）

三五　忘れなすつたか、七年跡お前と一緒に土を擔いだ、おらあ入墨の三五郎だ。

ト是にて三五郎をよく見て、

要次　違えねえ、三五郎だつたか。

三五　小天狗、まあかぢ棒へ掛けねえ。（ト琴の入りし誂の合方になり、兩人梶棒へ腰を掛け。）七年跡監獄所で、別れたきり逢はねえが、おれも前髪の時分からすりぢやあ人に知られた小僧、まだ德川家の其以前十六の時板の間稼ぎで傳馬町へ送られた、擧句に百背負つた上、生涯拔けねえ入墨に性懲もなく又其後、初犯再犯と度重なり、舊幕ならば疾の事首のねえのも御一新の、明治の御世に有難え、人殺しと火付をしねえので再び娑婆へ出られたが、それからすつぱり改心して、初めて堅氣の人力曳、汗をたらして一里引いても、取るのはやうやう八百か一貫が關の山だが、其苦しみをする替りに夜るは樂々足を伸ばし、戸を開ける音がしてもちつとも怖いことがねえ、樂な身分になつたのよ。

要次　それぢやあ手前はあの時ぎり改心して堅氣になつたか、こいつあどうでも今夜はいけねえ。

三五　なに、いけねえとは。

要次　實は茨木傳次と二人で、目途を付けた仕事があつて、出掛ける途端此河岸で、盲目の娘を寄つてたかり強淫しようとしたのを助け、追散した其跡で聞きやあ哀れな物語、仕事所か腰も折れ安泊りに寐込まうと、思つた所を手前に呼ばれ改心したと言ふのを聞いちやあ、己も了簡付けにやあならねえ。

三五　了簡付けると言ひなさるは、盗人をするのか改心するのか。

要次　其處が今考へ中だ。（と腕組をする。）

三五　僅十兩盜んでも首を切れる時分なら、あく迄やるがいゝけれど、まさか人殺しもしなさるめえ、強盜位が關の山なら何年間か監獄所の、裏を返しやあ濟むのだから、ならうことなら思ひ切り、惡いことは止めにしねえ、（ト宜しく思入、要次郎ちつとなつて、）

要次　よく言つてくれた、其詞は無にはしねえから、長い月日を見て居てくんねえ。

三五　別に異見を言ふぢやあなし、おれが斯うして堅氣になり、氣樂に暮して居ることを話して置きやあそれでいゝのだ。（ト此内要次郎札を紙に包み、）

要次　こりやあ少しだが、届けてくれた禮だ。

三五　先刻お前に二十錢、酒手を貰つたからあれでいゝ。

要次　そりやあ先刻の骨折だ、是りやあ忘物の禮に取つてくんねえ。

三五　それぢやあ氣の毒だな。（ト受取る、要次郎思入あつて、）

要次　其替り此一件をな。（ト匕首へこなし、）

三五　案じなさんな、言ふ位なら持つて來やあしねえ。（ト是にて兩人立上り、三五郎上手を見やり、）おい、
　　　レコが來るぞ。（ト巡査の眞似をする。）

要次　違えねえ、（ト手拭を鼻の上で結び、匕首を懷へ入れる。三五郎梶棒を上げながら、）

三五　それぢやあ、兄い。

要次　縁があつたら其内逢はう。（ト要次郎下手へ行きかけるを、）

三五　おい〳〵、足を洗ふことをな。（ト氣味合の思入、要次郎呑込み、）

要次　そりやあ承知だよ。（ト上手を見やり、氣を替へ、）なあに、（ト下駄を履いた儘、片足上げるを木の頭、）
　　　雪でよごれやあしねえ。

ト上手を見込む。三五郎早く行けといふこなし、時の鐘、合方にて宜しく、

ひやうし幕

二幕目

浄心寺裏貧家の場
海邊川岸身投の場

（淨瑠璃）隣で語る清元の古い趣向を新淨瑠璃に、風狂川邊の芽柳（清元連中）

〔役名〕――筆賣船津幸兵衞、人力車夫三五郎、巡査田見尾保守、金貸金兵衞、差配人與兵衞、山岡の番頭治兵衞、杢藏、安藏。荻原妻おむら、幸兵衞娘お雪、同お霜、下女おせん、其他。〕

（幸兵衞内の場）――本舞臺三間の間平舞臺の世話場、向ふ一面崩れのある鼠壁、眞中より上寄りに、素麺箱を釣したる佛檀、内に彌陀の掛物、瀬戸物の花生、燈明皿、眞中に黒塗の位牌、白木の位牌へ紙の戒名を張り、此の上手に古き二枚屏風を立廻し此の内に蒲團あり、三尺の釣棚に竹筒へ入れし結掛けの筆、反故張りの小箱などあり、屋體の外上の方跡へ下げて惣雪隱の後ろ、芥溜を見せ、下手に一つ竈釜を掛け、側に鍋あり、此上に荒神棚、いつもの所門口、下手路地口、出這入りあり、是れに續いて隣の二階家伊豫簾を掛けし淨瑠璃臺、屋根に雪の積りし道具、舞臺下手より花道へ雪布を敷き、總て深川淨心寺裏筆賣幸兵衞内の體。爰に前幕のお雪裏向に佛檀を拜み居る、門口にお霜銀杏髷やつし裝小娘のこしらへにて草箒で門口の雪を掃いて居る、側におつぎ半纏前垂掛け裏長屋の女房のこしらへ、お百白髪髷婆アのこしらへにて立掛り居る、鳥唄へ葬禮の鳴物を冠せ幕明く。

つぎ　お霜さん、お前には掃けないから私が雪を掃いて上げよう。
お霜　いえ宜しうござります、私が掃きます。
お百　今朝の寒さで凍つたから、なか／＼お前には掃けないよ、をばさんに掃いてお貰ひ。
お霜　それではお頼み申します。
つぎ　さあ／＼箒をこつちへお出し、（ト箒を取り門口を掃く。）
お百　おつぎさん雲光院へ葬ひが來たね。
つぎ　今し方擔ぎ込んだが、貧乏人の葬ひで煎餅が十枚ばかりだ。
お百　それぢやあ貰ひに行つても詰らないの。
つぎ　饅頭か强飯なら貰ひに行つても割に合ふが、煎餅や最中位で臺所を働く奴に、乞食の樣に言はれるのは、腹が立つから行きやあしねえ。
お百　其くせ汝等が二つも三つも、内へ持つて歸るくせに、吳れ惜しみをしやあがるのだ。
ト此内門口を掃きしまふ、お霜内へはひり、
お霜　姉さん、洗濯屋のをばさんが表を掃いて下さいましたよ。（ト是にてお雪正面を向き。）
お雪　それはおつめたいのに、有難うござります、私の目が見えませぬので御厄介になりまする。

トおつぎお百内へはひり、

つぎ　これが廣い所ではなし、僅な表を掃く位なんの造作もありません。

お百　一つ長屋のよしみだから、困ることがあつたらば、遠慮なしにお頼みよ。

お雪　有難うございます。

つぎ　お母さんの達者な時分は、おゆきさんが臺所を一人で引受けて居なすつたが、目が見えなくなつてから、年の行かないお霜さんが三度々々の御膳拵へ、實に感心なことだね。

お百　幸兵衛さんも一人では、乳呑はあるしお困りだらうから、日柄が立つたら後添を貰ひなすつたらよからうに。

つぎ　私を貰つておくれだと、生業が洗濯屋だから穢れた物もさつぱりと、綺麗な裝にして上げるが、幸兵衛さんが堅藏だから幾ら私がお膳を据ゑても、うつかりそれを喰べなさらない、をばさん話しをしておくれな。

お百　洗濯屋の取持に、糊賣婆アは相應だが、おつぎさんには幸兵衛さんより、人力車の三五郎さんの方が、釣合がよからうに。

つぎ　如在なく當つて見たが、是も以前が以前だけ、私などは向ふで喰はない。

お霜　をばさん、お前はお父さんに何をたべさせなさんすのぢやえ。
つぎ　旨い物を上げたいのだが、お父さんが喰べないのさ。
お霜　そりやお葬ひのお饅頭かえ。
つぎ　お饅頭は當てられたね。
お百　もう此子も十だから、うつかりしたことは言はれないよ。（トお雪態と話を餘所にして、）
お雪　今し方裏のお方が、今夜お隣の漆喰屋さんに清元の淨瑠璃がありますと仰しやつたが、ほんとのことでござりますか。
つぎ　おゝそりやほんとのことであります、若夷とやらのお祝ひで濱町の家元が連中を連れて來ますさうだ。
お百　清元の家元なら、明烏が聞きたいね。
つぎ　語り物は何だかしらぬが、新淨瑠璃だといふことだ。
お百　そりやあ何にしろ樂しみなことだ、所詮大芝居は見られないから、こんな時でなくては聞かれない。
お雪　目で見る物は見られませぬが、聞きますものは變りがない故、早う聞きたうござります。

お霜　わたしや手習をするばかり、稽古事は習はぬ故、どんなものか知らぬわいな。

お雪　お前の友達のおしんさんが、毎日内で浚ふのがあれが清元といふのぢやわいの。

お霜　梅の春とかいふものを、先刻も浚つて居なさんした。

つぎ　あゝ梅の春はいゝ淨瑠璃さ、〽浮いて鷗の一い二う三い、

　　トちよつと淨瑠璃を語る、此時大和風爐へ掛けし土瓶われし心にて、ポンと音して烟り立つ、

お百　やあ是は大變、お前の淨瑠璃で土瓶が割れた。

つぎ　何の土瓶の一つ位隣のお寺に幾らもあるから、今に替りを持つて來て上げよう。

ト鞠唄葬禮の鳴物になり、おつぎ雜巾で四邊を拭く、花道より前幕の幸兵衛抱兒を懷に入れ、碇を書きし額を風呂敷に包み、之を提げて出で來り、花道にて、

幸兵　昨夜測らず油堀で一圓惠みを請けた上、娘の雪が災難を救つてくれた其人が、是も一圓惠んで呉れ、此頃になく二圓といふ金が我手に入つたのも、日頃親子が信心なす水天宮樣の御利益故、御門前迄お禮に行き額を一枚買つて來たが、雪のあしたの上天氣、今日の空と同じ樣に曇つた心が晴々した、（ト幸兵衛舞臺へ來り、）娘今歸つた。

ト内へはひる。

お雪　父様お歸り。
兩人　なされましたか。（ト兩人辭儀する。）
お百　お二人共に行儀正しく、是で以前が知れますな。
幸兵　是はお長屋の衆、ようおいでなされました。
つぎ　お留守へ二人入り込んで、世間話をして居りました。
幸兵　それは子供も淋しくなく、有難うござりまする。
お百　だいぶ赤さんがおとなしいが、乳を貰ひに行きなすつたのか。
幸兵　私用を足した歸り掛け、芋屋で一ぱい貰ひましたが、困るを知つて親切によく飮まして下さるので、まことに親子が助かります。
つぎ　見れば綺麗な一つ身だが、それは古着で買ひなすつたのか。
幸兵　いえ、是は昨晩油堀で思ひがけなく貰ひました。
つぎ　それはいゝ物を貰ひなすつたね。
お百　知つた所でござりましたか。
幸兵　いえ、見ず知らずでござりましたが、昨日筆を商ひながら水天宮樣へ參詣なし、歸る途中で日が

暮れる雪は降出し困りましたが、お得意先で傘を借り油堀迄參りましたら、是がひもじくなりましたか、火の付く様に泣きますを、さる軒下に佇みてだまして居るを窓から見て、乳を振舞つてやらうから門の内へはひれと言はれ、飛立つ程に有難く内へはひつて見まするると、玄關構の立派なお内、庭へ廻つて縁端で穢い是に御新造が乳を飲まして下さる内、貧に迫りし身の上の話しを致しましたところ、それは嘸かし困るであらうと、金を一圓惠んで下され、また其上に亡なられた其家の子息の此の一つ身、氣に掛けぬなら進ぜようと言はれる故に何が扨、斯く落ちぶれし身の上に何で氣に掛けませうと、是を貰つて參りました。

つぎ　さういふ情のある所へ呼込まれたがお前の仕合せ、天の助けでござりますな。

お百　油堀で門構なら、私が糊のお得意先、荻原樣に違ひない。

幸兵　いかにも劍術指南をなさる、萩原良作殿といふ元直參であつたとやら、

つぎ　お雪さんも萬年橋で、危い難儀を救はれて、一圓貰つてお歸りだし、

お百　幸兵衛さんも追々に、是から運が向きませう。

幸兵　どうぞ米の二合買ひを、致さぬやうになりたいものだ。

つぎ　それでは今日は子供衆も、旨い物をお上りだらうね。

お霜　あい、今日はほんとのお飯を喰べました。

お雪　あゝこれ、そんな卑しいことを。（トきつと言ふ。）

幸兵　決して叱るな、言ふのが尤も、是迄毎日薩摩芋をかてにいれたる粥ばかり、久し振で炊いた飯を喰べた故にさう言ふのぢや。

お雪　それぢやというて皆さんへ、そんな事をお聞かせ申し、わたしや恥かしうござりまする。

幸兵　知らぬ所ではあるまいし、朝夕親子が難儀をば皆御存じの方なれば、包み隠すに及ばぬわい。

トおつぎお百思入あつて、

つぎ　何も恥かしいことはない、私等二人も困る時は、やつぱりお粥をたべて居ます。

お百　然も今日も茶粥腹で、おなかゞ餘程北山だ。

つぎ　もう煮染屋の來る時分。

お百　どれ、おまんまの支度をしませう。（ト兩人立上る。）

幸兵　それではお歸りでござりますか。

つぎ　又出直して、

兩人　參りませう。

と右の鳴物にて兩人上手路地口へはひる、お霜風呂敷包を見て、

お霜　父樣、是は何でござります。

幸兵　水天宮樣へ上げようと人形町の勝文さんへ、筆を賣りに行つた次手に、親方にお頼み申し別段負けて下すつた、是は上等の碇の額だ。(と風呂敷を解き碇の額を出し見せる、お雪探り寄り、)

お雪　昨晩は御利益で、危い難儀をまぬかれまして、有難うござりまする。(ト手を合して拜む。)

幸兵　昨夜貰つた一圓の金を崩して米薪から、味噌や醤油を買つた上、額を一枚買つたらば最早殘りはたつた十錢、春の雪より消えるが早い、何にしろ此額を下へ置くのは勿體ない、荒神樣の此棚へ暫く上げて置きませう。

ト幸兵衞件の額を荒神樣へ上げる、合方題目太鼓になり、花道より前幕の金兵衞安藏羽織着流しにて出來り、花道にて、

金兵　高が内職の筆職人、其日の儲も細いからどうで貸したあの金を、すべよく返す氣遣ひなし、品を取るより仕方がない。

安藏　到底取れぬ見込なら、抵當品を渡さずば勸解へ訴へると、一番脅してやりませう。

金兵　當時の規則を知らぬから、君が脅してくれたらば、大概品を渡さうから、旨くたんくわをきつて

下さい。

安藏　其處は僕が代言めかして、一番手なみを見せませう。

　ト右の鳴物にて兩人舞臺へ來り、ずつと內へはひり、

金兵　おゝ幸兵衞殿、內であつたか。

安藏　今日は逃げることはならぬ。

幸兵　これは金兵衞殿、安藏殿、よくおいでなされました。

金兵　名代の因業金兵衞だ、あんまりよいこともあるまいぜ。

幸兵　これお霜、二人の衆へお茶を上げぬか。

お霜　父樣、土瓶がこはれました。

安藏　それは幸ひ、三百茶の出しがらなどは眞平だ。（ト合方になり）

金兵　ときに幸兵衞殿、逹ての賴みに先達て私が貸した二圓の金、よもや忘れはさつしやるまいな。

幸兵　御恩借のあの金子、何で私が忘れませう。

金兵　忘れずば證書通り、期月が切れたになぜ返さぬ。

幸兵　疾に御返濟致すべきを、妻が產後で歿しまして跡の片付何やかや、思はぬ暇を費して筆の細工も

出來ませず、それ故段々不都合に不都合を重ねまして、存じながら延引致し申譯がござりませぬ。

金兵　金が出來ずば約束通り百貫の形に編笠一かい、抵當に入れた煎餅蒲團一つ竈釜に鍋、臺所道具一式を、持つて行くからさう思はつせえ。

幸兵　御返濟を致しませねば、持つて行くと仰しやるのも御尤もでござりますが、私は兎も角も是なる子供が此寒さに、蒲團がなくては寐られませぬ、又明日の朝粥を炊くにも鍋か釜がござりませねば、炊くことが出來ませぬ、二三日内には何程か入金致しますから、子供を不便と思召して、お待ちなされて下さりませ。

金兵　いや〳〵、たゞではもう待たれぬ。

幸兵　これお雪、そち達もお願ひ申せ。（ト是にてお雪前へ出て、）

お雪　唯今父様の申します通り、どうぞお慈悲に今暫くお待ちなされて下さりませ、お恥かしうござりますが、五布蒲團一枚へ親子四人がくるまりて寒さを凌ぎまする故、それをお持ちなされますると、今宵寐ることが出來ませぬ、父様と私は寐ずに寒さを怺へませうが、是が可愛さうでござりますする。

お霜　いえ、私は寒さを怺へますが、父樣や姉さまが風を引くと困りますから、お待ちなされて下さり

ませ。

金兵　そりや寒風に吹通され、嘸寒いことだらうが、おれの知つたことぢやあねえ、蒲團を持つて行かれるのも、親が意氣地がねえからだ。人を恨むな、親を恨め。

幸兵　すりやどうあつても抵當の、蒲團をお持ちなされまするか。

金兵　おゝ、持つて行かねえでどうするものだ。

幸兵　ても情ないことぢやなあ、（下俯向きぢつと思入、お雪お霜泣き居る、安藏思入あつて、）

安藏　これ幸兵衛さん、是だから少々たりとも入金をしなせいと、あれほど僕が談じたのに、何時でも同じ言譯のみ、佛の樣な金兵衛さんでもこりやあ鬼にならねばならねえ、到底出來る目途がなければ、約定通り抵當の品を渡してしまひなせえ、先月の利子を元へ加へ十圓といふ金高だから、渡して損はありやあしめえ。

幸兵　いえ、其樣の金高になりましたのは存じませぬ、金兵衛殿から借りたは二圓、僅な内に八圓も利足の溜る譯がない。

安藏　それは二圓の利子ばかりでは、さうなる譯はないけれど、今いふ蒲團一つ竈鍋釜膳椀諸道具一式、證書の表は賣渡し、金兵衛さんから改めて品をお前は借りるから、損料錢を出すのは當然、其處

て二圓の利子に禮金三月しばりの書替に、踊りの利子に筆墨代日々遣ふ道具の損料、合して八圓何がしだが、端錢は負けて十圓の證書で僕が扱つたのだ、せめて半金今五圓入金するなら待つてやらう、それが出來ずば抵當の品を渡すはあたりまへ、ぐづ〳〵すれば僕が職掌、勸解へ願ひ出て、拘留させて涼ませようか。

幸兵 浮世を知らぬ私故、お借り申した二圓の金、其利子ばかりと存じましたに、我品物に損料の出ますことは存じませぬ。

安藏 よく昔いふ二十一安利な時分の事よりは、知らぬとお前が言ひなさるから、當今用ゐる貸借上の規則を委しく話したに、今更それを知らねえとは、そりやあお前とぼけるのだらう。

幸兵 何で僞を申しませう、毛頭それは心得ませぬ。

安藏 幾ら知らねえとおめえが言つても、印紙を張つた證書があれば、勸解へ出ようが裁判所へ出ようが、お前の言ひ分は立ちはしねえ、そんな不條理な事を言はずと、抵當品を渡さずば幾らか爰で入金しなせえ。

ト是にて幸兵衞抱兒をお霜に渡し、財布の中より十錢札を出し、

幸兵 左樣仰しやいますことならば、爰に少々ござりまする是を入金致しませうから、どうぞお待ち下

さりませ。（ト十錢札を出す。）

安藏　むゝ、こりや入金するといふは、十錢札一枚か、何ぼ人民の爲をはかるが我職務といひながら、是では口の利きやうがない。（ト十錢札をはふり出す。）

金兵　いや十錢札でも取らぬは損、是は利子の內へ取り入金せずば約定通り、抵當物を持つて行かう。

幸兵　それではどうでも家內の品を、

金兵　證書の表は賣渡し、己の物だから持つて行くのだ。

安藏　それとも入金しなさるか。

幸兵　さあ、それは。

金兵　抵當物を己に渡すか。

幸兵　さあ、

安藏　入金するか。

幸兵　さあ、

兩人　さあ、

三人　さあ〳〵〳〵。

安藏　以前が士族といふことだが、え丶さりとは意氣地のねえことだ。

ト安藏幸兵衛を突倒す。幸兵衛口惜しき思入。

金兵　冬至は過ぎても日は短かい、ぐづ〳〵待つては居られねえ、持つて行くからさう思へ。

ト合方きつぱりとなり、二枚折を取退け蒲團を引出す、幸兵衛是を留めて、

幸兵　モウ長くとは申しませぬ、どうぞ蒲團は二三日、お待ちなされて下さりませ。

安藏　それぢやあ幾らか入金するか。

金兵　十錢ばかりの端た錢ぢやあ、もう待つことはならねえぞ。

ト蒲團を引取る、是にて幸兵衛どうとなる、お雪思入あつて、

お雪　あもし、まあ〳〵待つて下さりませ、其お金を上げませう。

金兵　なに、金を渡すと。

幸兵　あゝ、これ、娘何を言ふのだ。

お雪　昨夜私が貰うて來たあのお金を、金兵衛樣へどうぞ上げて下さりませ。

幸兵　あれは差配の與兵衛樣へ、家賃に上げる積りなれば、

金兵　それぢやあこなたは家賃を拂つて、己が貸は返さぬ氣か。

幸兵　左樣な譯ではござりませぬが。

安藏　さういふ不當のことをすれば、是から召連れ訴へをするから、僕と一緒に來さつせえ。

　　ト手を取つて引立てる。

お霜　あれ、父樣をひどいことをするわいな。

お雪　なに、父樣を。（トお霜に取付く。）

お霜　姉さん、私ぢやわいな。（ト是にて抱兒泣出す、お霜いぶり付けるお雪安藏に縋り付き、）

お雪　今のお金を上げますから、父樣を連れて行くのは堪忍して下さりませ。

安藏　さういふことなら待つてやるから、家賃に渡す金を出せ。

幸兵　さあ、其の金は。

安藏　えゝきり〱と出さねえか。（ト突倒す。お雪幸兵衞に縋り。）

お雪　これ父樣、貰はぬ昔と思へば濟みます、昨夜のお金を早く上げて、待つて貰うて下さりませ。

お霜　姉さんが氣を揉むから、早く上げて下さりませ。おゝ泣くな〱、赤迄泣いて居ますわいな。

金兵　さあ、其金を出さねえか。

安藏　出さゞあ召連れ訴へせうか。（ト幸兵衞是非なき思入にて、財布から一圓札を出し、）

幸兵　是は昨夜此娘がさる慈善者の惠みを受け、一圓貰うて歸りし故、爰へ住ひて一年あまり段々溜りし家賃の借、せめては是を入金して言譯なさうと思ひし金、盲目の娘が氣をもみます故、是をお渡し申しますから、お待ちなされて下さりませ。（ト一圓札を出す、金兵衛取つて、）

金兵　ムウ三文もねえ面をして、一圓といふ此金を喰ひ隱しをしておくからは、まだ〳〵幾らか持つて居よう。

安藏　成程是迄ない〳〵といふのは策に違ひない、見れば乳呑が身分に過ぎた柔か物を着てゐるは、大方古着で買つたのだらう。

幸兵　いえ〳〵是は油堀で、昨夜貰うて參つた一つ身。

金兵　よく貰つた〳〵といふが、此のせち辛い世の中に、誰が呉れ者があるものだ、汝が買つたに違ひねえ。

安藏　穢れくさつた蒲團より、此一つ身がはるかに踏める、是を替りに持つて行きませう。

ト脱がせにかゝる。

幸兵　それを持つて行かれては、昨夜折角下すつた先へ對して濟みませぬ、それは許して下さりませ。

金兵　目にかゝつたら見脱せねえ、早く脱してしまひなせえ。

安藏　なか〳〵是はふめる代物。

ト お霜が抱いて居る抱兒を引取り、上着を脫せる、お霜止めるを突退ける、幸兵衞止めようとするを金兵衞押へ付ける、此内題目太鼓を冠せ宜しくあつて、

お霜　あれ、赤の着物を脫がせました。
お雪　ても情ないことなされますなあ。
幸兵　それを持つて行かれては、先へ對して濟みませぬ。
金兵　えゝ濟むも濟まぬもあるものか。（ト幸兵衞を突退ける、安藏一つ身を見て、）
安藏　表は黑手の島八丈、裏は縹色の通しだから、一二圓位になりさうだ。
金兵　都合三圓と端たが十錢、まだ五圓には足らねえが、是で二三日待つてやらう。
安藏　然し最初の見込より、餘計に金が手に入つた。
金兵　歸りに牛で一ぱいやらう。（と兩人門口へ出かゝるを幸兵衞引留め、）
幸兵　それを持つて行かれては、惠んでくれし先方へ、申譯がござりませぬ、なくてならぬ品なれど、蒲團をお持ち下さりませ。
金兵　蒲團は金にならぬから、替りに是を持つて行くのだ。

幸兵　抵當にせぬ其品を持つて行くとは、あまりの不法。

安藏　是が當今流行の法だわ。（ト幸兵衞を突倒す、ひよろ〳〵としてお霜に當り、抱兒泣出す。）

お霜　あれ、赤が泣いていけませぬ。

幸兵　お、泣くな〳〵。（ト抱兒をいたはる、此間に兩人こそ〳〵と門口へ出て、）

金兵　思ひの外に旨くいつた。

ト早めたる題目太鼓にて、足早に花道へはひる、幸兵衞抱兒をだまし、下手を見て、

幸兵　おのれ、もう行きをつたか。

ト門口へつか〳〵と行く途端、路地口より與兵衞羽織着流し下駄がけ、差配人のこしらへにて出來り、

與兵　幸兵衞殿、何處へ行かつしやるのだ。（ト幸兵衞を留める。）

幸兵　おゝ御差配の與兵衞樣、えゝ悔しうござります〳〵。

與兵　どういふことだか氣を靜めて、譯を私に話さつしやい。

ト合方になり、與兵衞捨ぜりふにて幸兵衞を留めながら内へはひる、幸兵衞せき込む思入にて、

幸兵　此前貴方が中へ入り、お留めなすつて下すつた、高利貸の金兵衞と代言めかす安藏が、最初二圓借りた金を元利結んで十圓の證書に書替へ無體の催促、昨晩娘が慈善者に貰うて參つた思はぬ一

圓、是迄溜る店賃のお借の中へ入れませうと退けておいたを安藏が、召連訴へするといふのを止める爲に此お雪が、其一圓を上げてくれと申せし故に餘儀なくも、其一圓を取られた上昨夜計らず私が貰つて參つた一つ身を、持つて行かれましたれば、貰つた先へ濟まぬから、金は兎もあれ一つ身を取返さうと存じまして、出掛ける所でござりました。

奥兵　高利貸はいづくでも今は惡い風になつて、家內の品を抵當に取つた上で其品を又損料で貸すといふ二重取の狡猾法、取分け彼奴は因業と、渾名を取つた太い奴、昨夜貰つた一つ身なれば、抵當といふ譯でもあるまい。それを手籠に持つて行くは、申さば物取り同樣だ、そんな法はないけれど、是からこなたが行つた所が、容易なことでは返すまい。

幸兵　それに金兵衛ばかりでなく、裁判事を心得居る代言めいた安藏が、側で兎やかう申す故。

奥兵　あいらが何と言はうとも高の知れた周旋人、あの金兵衛が無筆故證書を書くに困る所から、書記に抱へた貧乏士族、いや是は失敬、(ト幸兵衛思入あつて、)いや代言めいたことを言つても、法律所か焙烙の割れたも知らぬ辨當代言、上より免許を受けてこそ世界の爲の代言だが、あいつらは舊の小出入師、取るに足らぬ奴だから、是から私が談判なし兎やかう言はゞ派出所へ引張つて行つて埒を明け、持つて行つた一つ身は今取返して來てやるから、さう思つて居さつしやい。

幸兵　有難うござりますが、不斷お世話になります上、又もや左樣な御厄介になりましては濟みませぬ。

與兵　何の濟まぬことがあるものか、店子と言へば我子も同然、場所は惡いが先祖から代々勤める差配人、私が店子の内へ來てあいらにそんなことをされては、此の與兵衞の顏に拘はる、是から行つて一理窟言つて來ねば腹がいえぬ。

幸兵　それではどうでも貴方樣には、

與兵　おゝ、一走り行つて來る。（ト門口へ行掛る。）

お雪　どうぞお父樣の迷惑になりませぬやう、旦那樣。

お霜　お願ひ申し、

兩人　上げまする。

與兵　決して迷惑はかけぬから、二人ともに案じるな。（ト門口へ出て）あんな太い奴はない。

ト題目太鼓のはひりし合方にて與兵衞尻を端折り、足早に花道へはひる。跡本釣鐘を打込み幸兵衞ホツト思入、是にて上手の霞幕を引落し、竹本連中黒上下にて出語りの淨瑠璃になる。

上るり〽新らしく年は替れどまだ冬に、替らぬ寒さ身に染みる風に軒端の雪散りて、憂事積る幸兵衞が手業に結ひし筆よりも、細き煙りを立兼ねて、我身の上をかこち言、

ト本釣鐘床の方、幸兵衛抱兒を抱取り思入あつて、

幸兵　如何なる前世の因果にや、壯年よりして今日迄愚なれども人倫の五常の道を堅く守り、惡い心は持たねども世の盛衰と身の不運、瓦解此方なす事なく、人の勸めに仕馴れざる商法なして資本を失ひ、奉還金も何やかや世話なす者に掠められ、遂には斯る姿となり零落なしては誰一人、尋ねてくれる人もなく見下げ果てたる浮薄の人情、かゝる内にも信義ある以前の友の鹿々が筆を結ふのを教へてくれ、それを今日身過となし、家族五人が命毛を繋ぎ留めしも不幸が續き、妻が産後の惱みから此幸太郎を殘して死に、其取片付から佛事の營み、又不都合に不都合を重ね〴〵の我薄命、日頃親子が信心なす水天宮の利益にて昨夜計らず二人共幸ひを得て嬉しやと、悦ぶ甲斐も情ない、あの金兵衛に持つて行かれ神にも見捨てられたるか、世にもはかない身の上ぢやなあ。

〽身のはかなさに越方を思へば胸もとぢられて、軒の雫のほと〳〵と落つる涙は見えぬ目も同じ思ひに探り寄り、

ト幸兵衛投首をなし、ぢつと思入、お雪涙を拭ひながら、

お雪　今父樣のお歎きを側でお聞申しても、唯悲しいと共々に見えぬ此目に泣くばかり、

〽私が斯ういふ身でなくば、恥を忍びて苦界に沈み、其お金にて父樣の此御苦勞を救ひます

れど、
目が見えぬ故心に任せず、
〽どうぞ此目が治る樣、お守りなされて下されと、位牌へ向ひ母樣へ朝夕お願ひ申せども、
驗のないはなほらぬのか、
思へば悲しうござります。
〽膝に縋りて泣伏せば、肌へに通る眞味の涙幸兵衞背を撫でさすり、
幸兵　そちが其目は母に別れ、悲歎に迫つて泣明し、それから煩ひ明くことのならぬ樣になつたれば、名高い目醫者にかけたらば、治らぬこともあるまいが、藥を求むる料がなく、素水で洗ふがよいと聞き、たゞそれのみで洗ふ故、何時がいつ迄同じこと、治る其目を治さぬも、是皆親が意氣地がないゆゑ。
お雪　水で洗ふが何よりか藥になると申しますれば、今に此目も治りませうから、親が意氣地がないなど〻、假にも言うて下さりますな、それを聞きます私がどの樣につらうござりませう。
〽さめ〴〵泣けば妹も、共に涙にくれながら、
お霜　姉さん、其樣にお泣きでない。

へ私が替つて治る樣、水天宮樣へお願ひ申せば、今に私の目が潰れ、お前の其目が見えようから、それを待つてゝ下さりませ。

へ言ふにたまらず引寄せて、（トお雪探りながらお霜を引寄せて、）

お雪　おゝ可愛いことを言つてくれるが、私の此目が見ゆればとて、そなたの其の目が見えなくなり、何でそれが嬉しからう、父樣の御苦勞なさるは姉と妹と替るのみ、やはり同じことになれば、そんなお願ひは掛けぬがよい。（ト此内幸兵衛二人を見て、ぢつと思入あつて、）

幸兵　年端も行かぬ二人の者に、こんな思ひをさせるのも、己が稼ぎがならぬ故、足手纏ひの幸太郎何處ぞへやらうと思へども、金を付けねば貰ひ手なく、それ故是非なく乳を貰ひ、斯うして育てゝ居るけれど、是があつては活計を立てる筆さへ結ふことならず。

お雪　私が此目が見えますれば、乳を貰ひに行きますけれど、

お霜　年が行かねば私では、

幸兵　行かうと言うても親がやられず、

お雪　朝夕神や佛樣へ、

お霜　お願ひ申せどお驗しなく、

幸兵 見放されたる身の因果、

兩女 父樣、

幸兵 娘、（ト手を取交し）實に途方にくれるわえ。

〽途方にくれて親と子が、泣沈みたる折も折、隣で語る一節に、

と三人ぢつと泣伏す、知らせに付二階家の伊豫簾を巻上げる、爰に淸元連中羽織袴にて居並び、直に淨瑠璃になる、

淸〽吹けよ川風揚れよ簾、中の小唄の顔見たや、

淸〽彈く三絃も浮立ちし、浮名辰巳の送り舟、其いにしへに深川の流れの水は替らねど、

淸〽いつしか替る世の中に後朝をしむ山鐘も今はしづみし無常音、

ト此内幸兵衞お霜に蒲團を持つて來いと敎へる、お霜重さうに蒲團をやつと持つて來る、幸兵衞指圖してよき所へ敷せ、抱兒をそつと寐かさうとする、抱兒泣出す、是非なく抱上げいぶり付けやつと寐かす、お雪淨瑠璃を聞居る、幸兵衞もこれを聞き思入あつて、

隣のお内は新年の若夷の祝ひとて、太夫を呼んで淨瑠璃語らせ、假にも千圓萬圓の賣買をする富限者と塀を隔てゝ此裏家に、貧苦に迫る此幸兵衞、同じ世界の人なれど身の盛衰と貧福は、斯う

も違ふものなるか。

〽清 通し矢數に名の高き三間堂も墓所となり、影さへ凄き弓張の月も涙の霜曇り、

トお雪お霜は一緒に寄り淨瑠璃を聞く思入、幸兵衛ちつと思入、床の合方になり、

返らぬ愚痴を又言ふ樣だが、是から先に是といふ目當もなければ此浮世に、生甲斐のない我身體其日の煙りも立兼ぬればなか／＼衣類に手は屆かず、纔々なれどかたしろがある故斯うして着て居れど、今に荒布を見る樣に切れたら何と致さうぞ、一日居れば一日丈舟津の家名を汚す道理、男と生れし身を以てさりとは意氣地のないことだが、死ぬより外に思案がない故、口へは出さぬが是迄に、幾度となく覺悟をしたが、

〽竹 今此親が死んだなら、跡に殘つて目の見えぬお雪を始め此お霜、取分け乳呑の幸太郎、直に飢ゑて死ぬであらうと、

〽竹 子の恩愛に引かされて、

斯うして其日を送れども、果は親子が食に困り、飢渇に迫つて死ぬであらう、以前は士農工商と人の上に立つたる士族、左樣なはかない最期をなさば、末世へ殘す身の恥辱、子供がなくば切腹なし、立派に死をば遂げようもの。

〽肌へを通すまだ冬の、夜風にそよぐ音寒き葭蘆茂る中木場へ、聲も哀れに落つる雁、

ト幸兵衛三人の子を見て不便だといふ思入お雪是を聞き思入あつて、

お雪　今父様の仰しやるのは、御尤もでございます、迚も生きて居られませずば、少しも早う私共も、共々死にたうございまする、侍らしう子供等を先へ殺して父様は、御切腹をなされまして、立派にお果てなされませ。

幸兵　おゝよく言つたよく申した、流石は武士の胤なるぞ、既に先頃子供等を殘して憂目見せんよりいつそのことに一と思ひ、殺して死なうと思つたが、子は子の果福で末々に、どんな出世を仕ようもしれねば、それを親が貧に迫り殺すも本意ならざれば、我と我身に異見をなし、一先思ひ止つたが、そちがさういふ心なら、親子諸共一緒に死なう。

お雪　それではいよ〳〵父様は、死ぬるお覺悟でございまするか。

幸兵　昨夜貰ひし一つ身を、若し金兵衛から古着屋へ賣られたことなら荻原殿へ、面目ないと思つたも、命を捨つれば心安し。

お雪　これお霜、今父様の仰しやつたを、爰で聞いて居たらうが、そなたも一緒に死ぬであらうの。

お霜　あい、お父様と姉さんと、御一緒なれば死にまする。（ト寐て居る抱兒に向ひ、）これ、今に死ぬと乳

のあるお母様の所へ行かれるぞ。あれ、幸太郎が嬉しいか、にこ〳〵笑うて居りまする。

幸兵　おゝ幸太郎が笑うて居るか。

〽竹 顔を背けて齒を喰ひしばり、せきくる涙をこらゆるせつなさ、姉妹二人に佛檀の位牌へ向ひ手を合せ、（ト幸兵衛顔を背けぢつと思入。お雪お霜は素麺箱の佛檀へ向ひ手を合せ）

お雪　もうし母様、今に冥土へ参りまして、小さい時よりお世話になりし御恩送りに二人して、

お霜　孝行を致します。

お雪　お待ちなされて、

兩人　下さりませ。（トくどき模樣になり）

〽清 昨夜の雪の身にしみて、凍る小川の底見えし淺き緣の砂村や、荼毘の煙りと消えて行く、

〽清 親子は一世いつの世に、大智稲荷の逢ふことも、

〽清 あらしの儘に吹折れし、十萬坪の枯芒、

〽清 是も冥土に由緣ある野邊の案山子の阿彌陀笠、

ト此内お雪はお霜をとらへ、今に死ぬといふ思入のこなし、幸兵衛は佛檀の中より澁紙に包みし短刀を出し、拔いて見て是で子供を殺すのは、不便なことだといふ思入、双方宜しくあつて、

幸兵　譬にも言ふ武士の魂といふ大小迄、貧に迫りて賣盡せしが、家に傳はる此短刀、せめてのことに是ばかりは末々我子に讓らうと、今日迄殘しおきたるも、是で親子が一命を捨つる刄物となつたるか。（ト是を聞き、お雪お霜前へ出て、）

お雪　父樣どうぞ私を、先へ殺して下さりませ。

お霜　いえ姉さんより私を、先へ殺して下さりませ。

幸兵　いや先誰かれより足手纏ひの、幸太郎を先へ殺し、それから二人を殺すほどに、少しの内も此世の別れ、お念佛を唱へやれ。

兩人　あい〳〵。

竹〽父の教に兩人が涙ながらに手を合せ、彌陀の名號唱ふる折、これも修行の寒念佛、

兩〽なまいだ〳〵南無阿彌陀、

ト此内一ツ鉦を冠せ、兩人手を合せ念佛を唱へる、幸兵衞は短刀を拔き、抱兒の側へ寄り短刀を差付け、突兼ねる思入宜しくあつて、

幸兵　今殺されるも知らずして、無心に笑ふ幸太郎、どんな鬼でも殺されぬが、それを殺さにやならぬといふは、如何なる因果なことなるか。

竹〽憂身に迫り幸兵衞が、短刀投捨てかつぱと伏し聲を上げてぞ泣きにける、音に驚きかたへなる幸太郎が泣出せば、

ト幸兵衞宜しく思入あつて、短刀を投捨てハツと泣伏す、是にて抱兒烈しく泣く、お雪此聲を聞き、

お雪　や、こりや幸太郎が殺してか。

お霜　まだ殺しはなさりませぬ。（ト是にてお雪幸兵衞の側へ探り寄り、）

お雪　もし父樣、幸太郎を後にして、

お霜　二人を殺して、

兩人　下さりませ。

竹〽右と左に取すがる娘を手荒く突退けて、幸兵衞すつくと立上り、四邊を見やりて高笑ひ、

ト兩人縋るを幸兵衞手荒く突退け立上り、發狂せし思入にて四邊をきよろ〳〵見廻し、

幸兵　はゝゝゝゝ、なに舟幽靈が出た、おゝ出た〳〵長刀掻込み現れ出で、

ト下手にある棕櫚の古箒を持ち、

竹〽抑是は桓武天皇九代の後胤、平の知盛が幽靈なり、

や、すつてん〳〵、すつてんてん。（ト箒を振廻しとり留らぬ振になる、お雪びつくりなし、）

お雪　もし父様、お前はどうぞなされましたか。
お霜　父様々々、
幸兵　えゝやかましい、そつちへ退け退け、退きをらう。ちよぼいち播磨守様のお通りぢや、先のけ〳〵退きをらう。
〽竹箒を槍に行列の、足もしどろやとゝんとん、（ト箒を持ち、槍持の思入、兩人縋り留め、）
お雪　取留らぬことを言はしやんすは、こりや氣が違ひなさんしたか。えゝ情ないことぢやなあ。
お霜　姉さんどうせう、どうせうぞいな。
幸兵　どうもかうもいるものか、面白くつて堪へられねえ。（ト無器用に鉢巻をして、）
〽淸撞いてくりやんな八幡鐘よ、可愛男の目を覺す、
ト踊る、此時路地口より以前のおつぎお百出來り、是を見て、
つぎ　こりや、幸兵衛さんが踊りを踊つて、どうしたといふのだらう。
お百　大方氣でも違つたのだらう、（ト兩人内へはひる。）
幸兵　可愛男の目を覺す、あ、こりや〳〵。（ト言ひながら、おつぎお百を撲倒す。）
兩人　あいたゝゝ。

〽折柄爰へ息せきと、立歸つたる差配の與兵衞、

トばた／＼になり、花道より以前の與兵衞一つ身を懷へ入れ、走り出來り、直に門口へ來て、

與兵　これ幸兵衞殿、理窟詰で一つ身を取返して來ましたぞ。（ト一つ身を出す、幸兵衞引きとり、）

幸兵　こんな物が入るものかえ。（ト投り附ける、與兵衞びつくりして、）

與兵　や、こりやこなたはどうしたのだ。

お雪　もし、父樣は氣が違ひましたわいな。（ト泣く。）

與兵　心の狹い人だから大方迫つて狂ひ出したか、何にしろ氣違ひに刄物は一番險難だ。

ト短刀を取上げ有合ふ鞘へ納める、此時抱兒泣く、幸兵衞ツカ／＼と行きて抱取ちつと顏を見て思入、

〽可愛我子が目を覺し、泣くがしよざいか磯端に群居る鷗啼連れて、行きつ戻りつ戻りつ行きつ、羽音に狂ふ小夜千鳥、

ト幸兵衞抱兒を抱き宜しくこなしあつて、トヾ投り出す、抱兒泣く、お百抱き上げ、だます。

與兵　いかに氣違ひなればとて、投り出すといふがあるものか。

ト此內幸兵衞竈の下から薪を一本持つて來て、

幸兵　何を、此の兀天窓め。（ト與兵衞の天窓を打つ。）

與兵 あいた〳〵。
●つぎや、こりや天窓が打切れて、今汐時か血が流れる。（と與兵衛鼻紙で疵を押へる。）
お百 こりや女の手際にやいかぬ、三五郎さん〳〵、
竹〽呼はる聲に路地口より、三五郎は駈け來り、
トばた〳〵になり、路地口より前幕の三五郎、着流し三尺帶にて出來り、
三五 こりやアをばさんどうしたのだ。
お百 どうした所か幸兵衛さんが、今し方から氣が違ひ、
つぎ 大家さんの天窓をこはした。
三五 そりやあ飛んだことだな。
幸兵 やあ、おのれは金兵衛、覺悟せよ。
竹〽打つてかゝるを身をかはし、其手をとらへ引据ゑて、
ト幸兵衛三五郎へ打つてかゝるを身をかはし、其手をとらへ薪をもぎ取り引据ゑて、
三五 これ、幸兵衛さん、
幸兵 幸兵衛とは誰がことだ。

三五　誰でもねえおめえのことだ、心を慥に持ちなせえ。

幸兵　心は慥に持つて居る、落さぬ樣に財布へ入れ、首へ掛けて持つてゐる。

三五　假にもそんなつまらぬことを、言つたことのねえお前が、どうしてそんな氣になつたのだ。

幸兵　なつたが悪けりやァあやまらう、はゝゝ、いや馬鹿野郎め。

三五　斯うも心が替るものか、えゝ情ねえことだなあ。（ト淸元の相方になり）常から律義な了簡に一途に迫つて取逆せ、それで氣が違つたのだらうが、お前も以前は武士ぢやあねえか、心を廣く持ちなせえ。どんなことがあつてのことか、委しいことは知らねえが、今日暮しの事ならば一つ長屋に住むよしみ、及ばずながら、わつち等が力になつて上げますのに、何故相談をしなさらねえ。日に十錢か二十錢は、是から助けて上げようから、心を慥に持ちなせえ。言はずと知れたことだけれど、少しは内の手助になる姉さんは目が見えず、又妹子はまだ子供、中にも困るは小さいの、乳がなければ一日も育てることのならねえのはお前も知つて居なさるだらうに、それを不便に思はねえのか。此己などは餓鬼の折から身性が悪く飛んで歩き悪いことのみした故に、物の情を知らねえがそりやあ可愛いといふ子供をば持たことがねえからだ、其己でせえ三人が、跡に殘つて困らうと思ふと胸も一ぱいに、親が死んでも泣かねえ目に、今日といふ今日溢れる涙、氣が違ふ

とはいひながら、年端も行かねえ娘御に、苦勞をさせて嬉しいのか。

竹へ眞實餘つて三五郎が、胸ぐら取つて突廻せば、

ト此内三五郎宜しく思入あつて、幸兵衞の胸ぐらを取りこづく、

幸兵 あゝ喉佛が潰れる〳〵。

三五 此の子供衆は可愛くねえのか。

竹へ突放されて涙をうかべ、

ト三五郎幸兵衞を突放す、幸兵衞三人を見て不便だといふ思入あつて、

幸兵 可愛くなくて何とせう。

淸へ子故の闇に漁りの網の目に持つ雫より、涙にくれて恩愛の深き洲崎に浪立ちて、船の漂ふ如くなり、

ト幸兵衞子供が不便だとおい〳〵と泣き、愁ひの思入宜しくあつて、ふつと氣が替りし思入にて、

是も誰故、金兵衞ゆゑ。

竹へ忽ち替る發狂に、薪を取つて神棚を目掛けて打てばばら〳〵と、額も德利も落散りて、

ト幸兵衞薪を持ち神棚を打ちこはす、是にて神酒德利、以前の額落ちる、三五郎幸兵衞を抱留める、

のあるお母樣の所へ行かれるぞ。あれ、幸太郎が嬉しいか、にこ〱笑うて居りまする。

幸兵　おゝ幸太郎が笑うて居るか。

竹〽顏を背けて齒を喰ひしばり、せきくる淚をこらゆるせつなさ、姉妹二人は佛檀の位牌へ向ひ手を合せ、（ト幸兵衞顏を背けぢつと思入。お雪お霜は素麵箱の佛檀へ向ひ手を合せ、）

お雪　もうし母樣、今に冥土へ參りまして、小さい時よりお世話になりし御恩送りに二人して、

お霜　孝行を致します。

お雪　お待ちなされて、

兩人　下さりませ。（トくどき模樣になり、）

淸〽昨夜の雪の身にしみて、凍る小川の底見えし淺き緣の砂村や、荼毘の煙りと消えて行く、

淸〽親子は一世いつの世に、大智稻荷の逢ふことも、

淸〽あらしの儘に吹折れし、十萬坪の枯芒、

淸〽是も冥土に由緣ある野邊の案山子の阿彌陀笠、

ト此内お雪はお霜をとらへ、今に死ぬといふ思入のこなし、幸兵衞は佛檀の中より澁紙に包みし短刀を出し、拔いて見て是で子供を殺すのは、不便なことだといふ思入、双方宜しくあつて、

幸兵　譬にも言ふ武士の魂といふ大小迄、貧に迫りて賣盡せしが、家に傳はる此短刀、せめてのことに是ばかりは末々我子に譲らうと、今日迄殘しおきたるも、是で親子が一命を捨つる刄物となつたるか。（ト是を聞き、お雪お霜前へ出て、）

お雪　父様どうぞ私を、先へ殺して下さりませ。

お霜　いえ姉さんより私を、先へ殺して下さりませ。

幸兵　いや先誰かれより足手纏ひの、幸太郎を先へ殺し、それから二人を殺すほどに、少しの内も此世の別れ、お念佛を唱へやれ。

兩人　あい〳〵。

竹〽父の教に兩人が涙ながらに手を合せ、彌陀の名號唱ふる折、これも修行の寒念佛、

琉〽なまいだ〳〵南無阿彌陀、

ト此内一ツ鉦を冠せ、兩人手を合せ念佛を唱へる、幸兵衞は短刀を拔き、抱兒の側へ寄り短刀を差付け、突兼ねる思入宜しくあつて、

幸兵　今殺されるも知らずして、無心に笑ふ幸太郎、どんな鬼でも殺されぬが、それを殺さにやならぬといふは、如何なる因果なことなるか。

獅子の鳴物になり、幸兵衞皆々へ打つて掛りあばれる、是を三五郎留める立廻り宜しくあつて、やつと幸兵衞を引据ゑ、

三五　氣違ひといふものは、豪氣に力の出るものだ。（ト此内與兵衞手拭で天窓を結び前へ出て、）

與兵　扨々困つたことだなあ。（トお雪お霜幸兵衞に縋り付き、）

お雪　父樣、心を靜めて下さりませ。

清〽海邊に近く汐風に濕り勝なる門口へ、しだれし枝のおとづるゝ芽出し柳の薄緑、

ト花道より前幕のおむら、黒の羽織下駄がけ、お仙着流し、杢藏股引尻端折り下駄がけにて、衣類を入れし風呂敷包を背負ひ出來り、花道にて杢藏が向ふだといふ思入。おむら默頭きこなしあつて舞臺へ來る。

むら　杢藏、案内しや。

杢藏　はッ、畏りました。（ト門口へ來り、）御免下さりませ、船津幸兵衞樣はこちらでござりますか。

つぎ　はい、此方でござりますが、何處からおいでなされました。

杢藏　昨夜お小さいのに乳を上げた、油堀の荻原でござります。

與兵　それでは慥此一つ身を、下すつた御新造樣だ。

三五　ちと取込みがござりますが、こちらへおはひりなされませ。

むら　御免なされて下さりませ。
與兵　これは〳〵見苦しい所へ、ようこそおいでなされました。
お雪　昨夜は父が御新造樣に、厚いお惠みを受けまして、
お雪
お霜　有難うござりまする。（ト辭儀をする。）
むら　噂に聞いたお娘御は、お前さん方でござりましたか。（ト此時抱兒泣く。）
お百　おゝお泣きでない〳〵。（トいぶり付ける。）
せん　大層お泣きなさるのは、おひもじいと見えまする、御新造樣一ぱいお上げなさいまし。
むら　爰へお連れ申して來や。
せん　はい〳〵。
竹〽泣き入る幼子抱きとりて差出す折柄幸兵衞が、それと見るより氣色をかへ、
トお仙抱兒を抱きとり、おむらに渡さうとするを、幸兵衞見て立上り、
幸兵　うぬ、幸太郎を盜みに來たか。（トきつと言ふ。）
せん　えゝ。（トびつくりする、おむらも不審の思入にて、）
むら　こりやどうなされたのでござりまする。

幸兵　此頃子供を取られると、世間でいふのは此鬼だな、いでや渡邊源次綱が、子を取る鬼を退治てくれん。（ト箒を持つて立上る。）

三五　又怒り出したか、困つたことだ。

杢藏　御新造樣おあぶなうござります。

せん　此方へお退きなされませ。

與兵　御恩を受けたあなた樣へ申譯もござりませぬが、先刻より發狂致し、御覽の如くになりますれば、御免なされて下さりませ。

むら　扨は發狂なされしとか、あゝお氣の毒なことでござりまする。

〽幸兵衞落散る額取上げ、あたりきよろ〳〵見廻して、

ト幸兵衞三五郎を振放し、側にある碇の額を取つてきよろ〳〵見廻し、

幸兵　や、八幡樣の祭りが通る、こりや面白い〳〵、幸太に見せてやらう。

ト お仙の抱いて居る抱兒を取り、碇の額をだしの心にて振つて見せ、ちきりんちやん〳〵。

與兵　これさ〳〵、何處を祭りが通るものだ。

幸兵　あゝ面白い〳〵。

清〽空も曇りてむら〳〵と、村立つ雲に降出す雨か霙か寺町の、鐘に追はれて、

ト與兵衛留めるを振拂つて前を蹴る、是にて與兵衛ウンと倒れる、三五郎びつくりして介抱する。此内幸兵衛抱兒を抱へ、額を振つて祭の思入にて花道へ入る、是にて下手屋體へ簾を下し、清元連中を消す。

皆々　大家さんやア〳〵。（ト呼ぶ、是にて與兵衛ウンと心附く）

三五　もし大家さん、氣が付きましたか。

與兵　お〻氣が付いた〳〵、もう案じるには及ばないが、氣違殿は何處へ行つた。

三五　川岸の方へ行きました。

與兵　川岸の方は險難だ、三五郎どんは少しも早く、

三五　それぢやあ是から跡追つかけ、

與兵　内へ連れて來て下せえ。

三五　お〻合點だ。

竹〽尻引ッからげ川岸へ飛ぶが如くに、

ト是へ曲撥を冠せ、三五郎尻を端折り跣足にて駈けて花道へはひる。是にて竹本連中を霞幕にて消す、お尋案じる思入にて、

お雪　あゝ父様が案じられるが、追ッかけたいにも行くことならず。
與兵　三五郎どんが行つたれば、今に内へ連れて來よう。
つぎ　お案じなのも尤もだが、
お百　まあ落着いて内においでよ。
むら　お取込みの其中へ、さうとも存ぜず參りまして、お氣の毒でござりまする。
與兵　いえ、それは此方で申すこと、折角お訪ね下さりましたに、お茶さへも差上げず。
つぎ　然しお茶を上げない方が、御勝手でござりませう。
お雪　して、御新造樣には此住居を、どうして御存じでござりました。
むら　其夜所を仰しやらねば、何れのお方か知れませなんだが、此子供衆が親御樣へ、御孝行なされまする其事柄が毎夕社の今日新聞に出てをつて、それで御住所お名前も承知して參りました。
杢藏　實は先刻私が、しかと見屆けに參りました。
與兵　扨は今日新聞に、孝行なのが出ましたか。
つぎ　それでは今にお上から、
お百　御褒美が出ませうぜ。（ト此時花道の揚幕にて）

大勢　身投だ〳〵。（ト大きく言ふ、）

與兵　や、身投々々といふ聲は、幸兵衞殿ではあるまいか。

お雪　え、すりや、父樣が、（トびつくりして、）

お霜　何うしたらようござりませう。（トうろ〳〵する。）

むら　其驚きは尤なれど、何れの人か知れざれば、

せん　まあ落着いておいでなされませ。

杢藏　とはいへ今の樣子では、

つぎ　十が九つ、

お百　幸兵衞殿。

與兵　こりや斯うしては、（ト尻を端折るを道具替りの知せ、）居られねえ。

ト お雪お霜與兵衞に縋る、おむらは氣の毒だといふ思入、獅子の鳴物にて道具廻る。

（海邊河岸の場）―本舞臺一面常足の二重、石垣の蹴込み、舞臺前花道共波布を敷き後ろ黒塀見越の樹木、下の方横町の町家を見たる片遠見、日覆より松の釣枝、總て海邊橋邊河岸日暮の體、爰に幸兵衞水入の體川より上りしこしらへにて抱兒を抱き、俯向き居る、田見尾保守帽子洋服サアベル、巡査のこしら

へにて幸兵衛を介抱してゐる、幸兵衛以前の碇の額を置き、「此傍に三五郎川より上りし心にて、手拭で天窓を拭ひ居る、上下に〇△等の仕出し大勢立掛り、是を見て居る、時の鐘合方波の音にて道具留る。

保守　こりや、心は慥か〳〵。

幸兵　はい、慥でござりまする。（ト保守隠しより寳丹を出し、）

保守　幸ひ是れに寳丹があれば、是を服用するがよい。（ト出してやる。）

幸兵　有難うござりまする。（ト頂いて呑む。）

保守　先づ別條はない様子、是に付けても其方はよく飛入つて助けたな、まことに以て奇特なことだ。

三五　飛び込む姿を見ましたから、直に裸になりまして、川へ飛込み抱上げましたが、所柄故子供の折覺えた泳ぎが思はずも、今日の役に立ちました。

保守　そなたが居らずば親子共、水死致す所であつた。

三五　もう一足遅かつたら、所詮命はござりますまい。

保守　まことに危ふいことであつたな。して投身せし其方の、住所は何れで名は何と申すぞ。

ト幸兵衛額を上げ震へながら、

幸兵　手前は深川山本町三百六十四番地に居ります、船津幸兵衛と申しまする筆職人でござりまする。

保守　抱いて居るのは、其方の子か。

幸兵　幸太郎と申します、則ち悴にござりまする。（ト保守鉛筆で手帳へ書留める、是を三五郎見て、）

三五　もし幸兵衞さん、お前正氣になつたか。

幸兵　なに、正氣になつたかとは。

三五　先刻逆上て氣が違ひ、とつても付かねえことをいつて、内を駈出しなすつたから、直にわつちが後を追つかけ、捉まへようと思ふ内に、どんぶり川へ飛込んだから、南無三寶と宙を飛び、直に川へ飛込んで、お前を救ひ上げたのだ。

幸兵　それは濟まぬことでござりました。

保守　して助けたる其方は、矢張幸兵衞と同所の者か。

三五　へい、同長家にをりまする、石田三五郎と申しまして、苗字は重うござりますが、身分は輕い人力車夫でござります。（ト又保守書留める。）

○　かう、此身投はどうしたのだか、碇の額を持つて居るな。

△　子供を抱いて入水するとは、八島の軍を見る樣だ。

□　碇を擔いで飛込めば、さしづめ是は知盛だな。

◎　水天宮樣の額だから、平家に緣のある筈だ。（ト此內保守書留めて、）

保守　こりや、かしましい、靜にせぬか。

○　そりや又叱られた。（ト仕出し跡へ下る。）

保守　見れば水天宮へ奉納なす、碇の額を持つてゐるは、如何致したことなるぞ。

三五　是は日頃信心故、內にあつた碇の額を持つて出たのでござりますが、今も申します通り、狹い心に氣が違ひ、前後も知らず此川へ我子を抱いた其儘に、飛込んだのでござりまする。

保守　本人は兎も角も、よく抱いて居る其小兒が水も吞まずに助かつたな。

三五　其處は碇の此額を、持つて居た故御利益で、助かつたのでござりませう。

○　生開化の人達は、

△　信心などは無駄だといふが、

□　水天宮樣のお札ばかりは、

◎　散切天窓が頂くぞ。

保守　えゝ、又口出しを致すか。

ト きつと言ふ、仕出し跡へ下る。ばた〳〵になり、下手より與兵衞お雪の手を引きお霜付いて出來り、

與兵　これ〳〵三五郎どん、今の身投げは幸兵衛殿か。
三五　はい、左樣でござります。
與兵　え、それでは川へ飛込んで、
お雪　父樣は死なしやんしたか。
三五　案じなさんな、助かつた〳〵。
お雪　助かりましたか。
與兵　やれ有難い〳〵。
三五　此の小さいのを抱いたまゝ、飛込んだ所へわつちが駈付け、川へ入つて助けましたが、折よく丁度お巡り樣がお出なすつて共々に、介抱して下さりました。幸兵衛さんは兎も角も、小さいのが助かりました。
與兵　すりや二人とも無事であつたか、やれ有難い〳〵。
お雪　もし、父樣は何處にござりまする。
お霜　姉樣、爰ぢやわいの。（トお霜お雪を幸兵衛の側へ連れて行く）
お雪　もし父樣、

幸兵　おゝ娘。
お雪　よく助かつて、
兩人　下さりましたなあ。（ト縋り付いて泣く。）
幸兵　嘸や案じたことであらう、既の事死ぬところを、三五郎殿のお蔭にて己も幸太郎も助かつた。いかなることで此樣な不了簡なことをして、そち達二人はいふに及ばず、皆樣方に御苦勞掛け面目次第もござりませぬ。（ト與兵衞是を見て、）
與兵　やあ、こなたは正氣になつた樣だな。
幸兵　はい正氣になりましてござりまする。
與兵　そりやまあどういふ譯あつて。
三五　瀧を浴びても氣違ひは逆上が下つて治るもの故、川へ飛込みつめたいので、治つたものと見えまする。
與兵　それでは元の正氣になつたか。
お霜　こんな嬉しいことはない。
保守　貴樣は幸兵衞が身寄の者か。

與兵　へい、私は山本町三百六十四番地の、代々差配を致します、芝井與兵衛と申します者。
保守　それへ召連れ參りしは。
與兵　是は幸兵衛が娘にて、姉は雪妹は霜と申しまするっ（ト保守手帳へ書留め、）
保守　二人の者の父幸兵衛、又弟の幸太郎既に水死なす所、危き命の助かりしは、是なる三五郎が蔭なるぞ、よく禮を申すがよい。
與兵　仰しやる通り、三五郎が命の親でござりますから、厚く禮は致しまする。
三五　斯ういふことで人の爲めになるのも以前の罪亡し、何の禮に及びませう。
保守　いや〳〵貴重な人命を、二人迄助けしは、まことに容易ならぬこと此場の事情を具申なせば、追つて其方へは本署より、御褒美を下さるゝぞ。
三五　それは有難うござりまする。（ト此内幸兵衛與兵衛の額の疵を見付け、）
幸兵　與兵衛様にはおつむりを、どうなすつたのでござります。
與兵　さあ、此疵は、（ト言ひ兼る思入、）
三五　先刻お前が氣が違ひ、大家様の腦天を薪ざつぽで擲つたから、それで疵が付いたのだ。
ト言ふを與兵衛保守へ心配なすこなしあつて、

與兵　いやさうぢやない〳〵、薪ざつぽで打たうとしたを、留めるはづみに棚にあつた擂鉢が落ちたので、それが私の天窓へぶつかり、それで疵が付いたのだ。

幸兵　え、すりや私が貴方樣を打たうと致しましたとか、あゝ面目ない〳〵、日頃お世話になりますのに、そんなことを致しまして、生きてお目にはかゝれませぬ。（ト俯向き居る。）

與兵　いや〳〵大した疵ではない、己の天窓が兀げて居るからそれで疵が付いたのだ、生きておれに逢はれぬなど、折角助かつた命をば、必ず死んで下さるな。

○　いや大家さん、旨く言ひます。

四人　いや兀天窓――。（ト褒める、保守左右を見返り、）

保守　こりや〳〵、何時迄それに立つて居るのぢや、通行人の妨害なれば、早く其處を通らぬか。

　　トきつと言ふ。

△　そりや又叱られた。

　　ト是にて仕出し捨ぜりふにて上下へはひる。幸兵衞じゆつなき思入にて、

幸兵　最前水死致しなば、かゝる面目なきことも知らずにしまひませうもの、是を思へばいつそのこと死んだが増でござりまする。

保守　こりや〳〵幸兵衛、そりや何を申すのぢや、助かり難き一命を三五郎に助けられしは、此上もない其身の幸福、疵を付けたる言譯は致し樣が幾らもあらう、今言譯にそなたが死すとも、實意面に顯はるゝ差配人の是なる與兵衛、いかでかそれを悦ばん、必ず歎くに疑ひない、殊には是なる二人の娘が共に命を捨てるであらう、生先長き者共を殺すは親の無慈悲なるぞ、二人を不便に思ひなば、面目なきを堪忍び、長く麁忽を謝するがよい、それらのことを苦になして、又々發狂なさぬ樣、氣を落着けて此以後共に、よく其身を愼むがよい。

幸兵　はゝ、有難き其御說諭、向後死するを思ひ止まり、愼みますでござりまする。（ト幸兵衛辭儀をする。）

三五　何にしろづぶ濡で、嘸つめてえことだらう、着替といつても内にはあるめえ。

與兵　何が内にあるものか、氣の毒だが三五郎どん、わしが内から着替の着物を早く持つて來て下せえ。

三五　はい〳〵、畏りました。

與兵　貴樣も次手に着替るがいゝ。

三五　わつちやあ裸で飛込んだから、着物は少しも濡れませぬ。

與兵　それぢやあ早く着替の着物を。

ト此時上手へ以前のおむら、お仙、李藏包を背負ひ出て、

杢藏 いや、取りにおいでなさるには及ばぬ、其着替は爰にあります。
三五 なに、着替がありますとは。
むら 早くそれをお上げ申しや。
與兵 あなたは先刻おいでなされた、荻原樣の御新造樣。
　ト是を聞き幸兵衞びつくりなし、おむらを見て面目なき思入、
幸兵 これは〳〵荻原氏の御内室、昨夜は厚いお惠み受け、其のお禮にも上りませず、かゝる體を御覽に入れ、面目次第もござりませぬ。
　ト此内杢藏風呂敷包より、布子襦袢羽織帶を出す。
むら 今日お宅へお尋ね申し、失禮ながら差上げませうと、持參致した此品が、丁度お間に合ひまして、お嬉しう存じまする。
幸兵 すりや此品を私へ、お惠みなされて下さりますとか、えゝ有難うござりまする。
杢藏 さあ〳〵、是をお着替へなされませ。
三五 是は〳〵有難うござります。
せん お小さい樣は私が、お着替させ申しませう。

與兵　何分お頼み申しまする。

ト幸兵衛へ三五郎與兵衛手傳ひ着せ替る、抱兒はお仙杢藏手傳ひ着せる、保守おむらへ向ひ、

保守　それにござる御内室は、荻原氏と承つたが、御住所は何れでござるな。

むら　私ことは油堀にて、撃劍の指南を致す荻原良作が妻むらと申しまする者。

保守　これは／＼先生の御細君でござりまするか、先頃我署へお出の砌御指南を受けました、田見尾保守にござります。以後はお見知り下さりませ。(ト帽子を取つて辭儀をする。)

むら　これは田見尾様でござりましたか、御挨拶も申しませず、御免なされて下さりませ。

保守　して此者へ品々を、斯くお惠みなさるゝは、御縁故あつてのことでござるか。

むら　只今申上げ兼ねますが、少々よしみがござりまして。

保守　何様左様なことでござらう。

ト此内幸兵衛着替、おせん着せ替へることあつて、幸兵衛前へ出て、

幸兵　昨夜と申し只今といひ、厚きお惠み下さるゝ荻原氏と言はるゝは、若しや以前我父の。

むら　其儀は夫良作が參上致して委しきことをお話し申す心得なれど、あいにく今日撃劍の大試合がござりまして、それへ出張致せしゆゑ、何れ明日參上致し、申し上げるでござりまする。

幸兵　それに付けても合點行かぬは、昨夜住所姓名をも、それとお明し申さぬに、どうして今日手前方へ。

杢藏　其儀は毎夕新聞に御住所から御姓名、御難儀なさる事柄より、

せん　お子様方が御孝行になされまする事迄も、委しく記してござりまする。

幸兵　扨は新聞紙に出ましたか。(ト面目なき思入、おむら懐より服紗包を出し、中より水引を掛し金包を出し)

むら　輕少ながら此金子を御進上申し上げます。

幸兵　品々お惠み受けたれば、此金子を頂戴しては、

三五　下さるものは夏もお小袖、お志しを無にせずに、お貰ひなすつて置きなせえ。

むら　どうぞ納めて下さりませ。

ト通り神樂ばた〳〵になり、上手より治兵衛羽織着流し、質屋の番頭のこしらへ、丁稚風呂敷包を背負ひ、山岡といふ弓張提灯を持ち、以前のおつぎ付き出來り、

つぎ　幸兵衛さんが正氣になつたと、見て來た人の話しに聞き、悦ぶ所へ地主様から、番頭さんがおいでなすつた。

與兵　是はお店の治兵衛殿、何ぞ御用でござりますか。

治兵　先刻お前の話を聞き旦那様から取敢ず親孝行の娘御達へ、古着なれども衣類がそつくり、襦袢迄も取揃へ、又其上に一付でどんな目でも治るといふ、シヨウサンギンといふ目薬、まだ〳〵それに金五圓、幸兵衞殿へ下されたよ。

小僧　衣類は爰に背負つてをります。

幸兵　すりや私ハ地主様より、其品々を下さりますとか。取分け娘ハ目藥迄。

お雪　何とお禮を申しませうか。

三人　えゝ有難うございまする。

保守　何れも慈善の志し、人は斯こそありたきものぢや。

ト又獅子の囃子ばた〳〵にて、お百先に新聞配達人荷をかつぎ、提灯を持ち出來り、

お百　もしお悦びなさいまし、新聞屋さんが恵み金を大層持つて參りました。

三五　それぢやあ昨日の新聞に、難儀な事が委しく出たから、恵み金が集つたのか。

與兵　お前は毎晩歩きなさる、新聞屋さんでございますな。

配達　毎夕社でございまするが、村松町の本局へ今朝から屆いた恵み金、名前は是にございますが、惣高しめて四十五圓三十錢、是をお渡し申しまする。（ト幸兵衞に渡す。）

幸兵　是はまあ思ひがけない、諸方からの此のお惠み、

配達　まだ明日からぞく／＼と、幾ら來るか知れませぬ。

つぎ　なんとをばさん、大したお金を、

お百　氣の惡いことだね。（ト三五郎思入あつて、）

三五　成程人は正直に心を持たにやあいかねえものだ、貧に迫つて死なうと迄、覺悟を極めた幸兵衛さんが捨てた命が助かつて、忽ち多くの金が手に入り、不自由のない身になるも、天の惠みを受ける所だ。

與兵　三五郎どんも改心したから、今に惠みがあるだらう。

三五　腕の墨は消えずとも、惡い其名をすつぱり消し、まことの人になりてえものだ。

治兵　いやお前さんの言ふ通り惡いことは出來ませぬ、ひど金貸しの金兵衛が、けいず買が顯はれて、安藏諸共召捕れ、今拘引されました。

幸兵　すりや金兵衛殿が、召捕られしとか。

與兵　それは／＼いゝ氣味だ、是で私が、ゲエイ、溜飲が下つた。

むら　一度發狂なされしゆゑ、

杢藏　是なる河へ入水ありしも、
せん　それが却つて幸ひに、
與兵　逆上が下つて正氣になり、
治兵　多くの惠みを受けるのも。
お雪　水天宮樣の皆御利益、
三五　まことに是が正直の、
保守　頭に宿る神の加護、
幸兵　ても有難き、(ト額の上へ金包を載せ、頂くを木の頭) ことぢやなあ。

ト皆々宜しく波の音、獅子の鳴物にて、勇ましく、

ひやうし幕

三幕目

佐賀町質店の場
同裏手庭口の場
同座敷庭前の場

〔役名――筆賣幸兵衛、小天狗要次郎、山岡富三郎、荻原良作、差配人與兵衛、芙木傳次、番頭治兵衛。山岡の女房おふみ、娼妓小雛、幸兵衛娘お雪、同お霜、糊賣婆お百、其他。〕

（質店の場）――本舞臺四間の間常足の二重金網の蹴込、上の方跡へ下げて土藏の横を見せ、二重の正面一間大阪格子の出這入り、此上に神棚銅燈籠を吊しあり、上の方一間中仕切まひら戸の戸棚、此前に帳場格子、ずつと上手の棲土藏の入口觀音開きを見せ、下の方一面の板羽目、欄間へ質屋の規則を張出し、其外流れの張出し下へ質物の帳を掛けてあり、平舞臺いつもの所屋根付二間の格子、内三尺出入りの潜り、此上に小窓あり、門口の外正面締りのしてある三尺の路地口、下手一面の板羽目、此前に用水桶、總て深川佐賀町質店の體、二重に角の見世行燈を點し、上手帳場格子の内に治兵衛、前幕の番頭着流し、前垂掛にて住ひ、帳合をして居る、此側に丸吉丁稚、散髪着流し前垂にて住ひ、質物の紙包を大分積上げ、質札を讀上げ居る、下の方にお百前幕の糊賣婆にて住ひ、此脇に若い者佐七散髪鬘、着流し前垂掛にて、質物の紙包を解き居る、此見得稽古唄にて幕明く。

丸吉 千二百三十四號元金一圓五十錢、松五郎竹藏、千二百三十五號元金七十五錢、鶴右衛門龜吉、

ト讀立て居る。

佐七 元金が二十五錢で、利分が五錢出ますから、元利共に三十錢になります。

お百 それでは五十錢の札だから、二十錢釣を下さい。

佐七 へい〳〵畏りました。（ト札を請取り、帳場の所へ來り、）是で二十錢のお釣が出ます。

治兵 おい〳〵承知だ。（ト帳場の引出しより釣を出しながら、）お百さん、此頃はだいぶ儲かると見えますね。

お百 いえ儲けはしませんが、ちつといゝ事がありましたので、やう〳〵布子が受けられます。

佐七 僅な糊を賣りなすつても、油斷なく稼ぎさへすれば質が出せるといふもの。

丸吉 何でも人間と生れたら、朝暮稼ぐが則ち義務、遊んで居ちやあ破産の基だ。

治兵 えゝ生利なことを言はねえで、番號でも間違へるな。（ト此内佐七釣の札を持つて來て、）

佐七 それでは二十錢のお釣を上げます。（トお百に渡す、お百釣の札を見ることあつて、）

お百 こちらのお店は毎時來ても、暗いお見世だと思つて居たが、ランプが付いてゐないせゐだ。

治兵 いえ、ランプは明るい替りには、麁相があるとあぶないから、それで店では用ゐません。

お百 いえ火止のランプをお使ひなされば、たゞの油より直も安く、大丈夫でございます。

佐七　火止はよいといふことだが、内の旦那が大事取故、石油は一切用ゐません。

お百　成程こちらのお店などでは、大事に大事をお取りなさるも、こりや御尤もでござりまする。

丸吉　下等社會で罰金の御處置も平氣で淫賣の、手引をするとは違ひますのさ。

治兵　えゝ餘計な口出しをするなといふに。（ト叱り付ける、お百思入あつて、）

お百　私が斯うして思ひがけなく質受の出來るのは、こちらの御地所に住つて居る、筆賣の幸兵衛さんの世話をしてやつた其の禮に、油堀の荻原樣からお心付があつたので、置いた布子を出しには來たが、後ろ暗い淫賣の手引などはしやあしない。

佐七　どうして／＼お前さんが、地獄の手引をなすつたなどゝ、私共が思ひませう、此小僧めの言ふことは聞流しにして下さいまし。

治兵　道ならぬことをする時は、直き新聞で惡く言はれ、世間へ恥を晒しますが、幸兵衛さんといふお人は、誠の道を守りながら薄命にして零落をしなすつた故、然も昨日兩國村松町の每夕社から發兌になる、今日新聞へ出た所、諸方からの惠み金で浮み上ると聞きましたが、それでは油堀の荻原樣も、惠み金をなすつたか。

お百　はい、幸兵衛さんの親御とやらが、荻原樣へ劍術を教へた師匠といふことで、是から萬事を引受

けて、お世話をなさるといふことだが、それも是も新聞へ出たので居所が知れたとやら。

佐七　いや新聞で讀んでさへ、實に哀れな話しだと、直にこちらの旦那なども惠みをお出しなすつたが、荻原樣の續き合ひとは、今の今迄知らなんだ。

お百　それといふのも新聞の、編輯とやらをするお人の、お蔭ださうでござります。

丸吉　あの編輯は有名の、流石に假名垣魯文先生、筆の走るのは感服だ。

治兵　えゝ又喋べる、默つて居ろ。（ト此内お百件の布子を風呂敷へ包み、）

お百　どれ〳〵、内が明ッ放しゆゑちつとも早く歸りませう。

治兵　いや明放しとは不用心なことだ。

お百　はて、其處は貧乏人の氣さんじでござります。（ト門口へ出る、丸吉格子の締りをする。）思ひがけなく質請の出來るといふも新聞へ、幸兵衞さんが出されたお蔭、斯うして見ると新聞屋は貧乏人には助ける神だ。（ト稽古唄にて下手へはひる。）

治兵　これ丸吉、爰へ來い、お百婆あさんだからいゝけれど、地獄の手引をしたなどゝ、質請人への當こすり、餘計な事を喋べりやあがるな。

丸吉　喋べるまいとは思ひましたが、我思ふ事言はで過ぎなば、腹ふくるゝ古言にならひ、

佐七　えゝ、生利を言やあがるな。

ト天窓をはる、稽古唄きつぱりとなり、花道より差配人與兵衛羽織着流し駒下駄にて、頭へ骨董を戴り先に立ち、後より幸兵衛黑の羽織着流し、娘お雪着流し駒下駄、目明になりし心、お霜同じく着流し駒下駄にて菓子折の包を持ち、皆々連立ち出來り、花道にて、

與兵　これ〳〵幸兵衛殿、向ふが私の地主の店、旦那に逢つたら昨日の禮をふくこなたから言つて下さい。

幸兵　それではあれが慈善者の、山岡樣でござつたか、毎度お門を通りますれど、御差配人の地主樣とは心付かずになりました。

お雪　取分まして私は、お貰ひ申したお藥で此目が見える樣になり、こんな有難いことはござりませぬ。

お霜　お目にかゝつて旦那樣へ、みんなでお禮を申しませう。

與兵　おゝそれがよい〳〵、どれ案内してやりませう。（ト皆々舞臺へ來り、門口が明ぬ故、）はい御免下さい、差配人の與兵衛でござります、ちよつと爰を明けて下さい。

治兵　與兵衛さんが來た樣だ、明けてこつちへお通し申せ。

丸吉　へい〳〵畏りました。（ト格子を明け、）與兵衛さんおいでなさい、誰かお連がありますね。

與兵　おゝ丸吉どん、お世話であつた。（ト後ろへ向ひ、）さあ〱、ずつとはひらつしやい。
幸兵　然らば御免下さりませ。（と皆々内へはひる、丸吉見て、）
丸吉　こいつあ頗る別嬪だ。
佐七　立つて見て居ずと、跡をしめろ。
丸吉　其位な事は知つて居る。（ト門口を締る、與兵衞二重へ上り、）
與兵　治兵衞さん、御無沙汰を致しました。
治兵　與兵衞さんには何御用で、お出掛けでござります。
與兵　夜分に出かけて參りましたは、昨日お惠みを受けました差配内の幸兵衞殿を、お禮に連れて參りました故、旦那樣がお宅なら、お目に掛りたうござりまする。
治兵　それは大きに御苦勞でござつた。
丸吉　扨は例の薄命者か。
佐七　えゝ又口を出しやあがるか。
治兵　これ丸吉、奧へ行つてさう申して來い。
丸吉　何と申して參りませう。

治兵　今手前が聞いた通りだ。
丸吉　聞いた通りにさう申しませう。（ト丸吉奥へはひる。）
與兵　さあ幸兵衞殿も二人の娘も、こつちへ上つて居さつしやい。
幸兵　然らば御免を蒙つて、二人もお見世へ上るがよい。
お雪　それでは御免、
お雪
お霜　下さりませ。（ト三人二重へ上り、下手へ住ふ、是にて治兵衞前へ出て、）
治兵　昨夜は御混雜の中故、ろく〳〵御挨拶も致しませなんだが、手前は支配人治兵衞でござりまする。
幸兵　其節はわざ〳〵おいで下され、殊に旦那樣よりの下され物、厚くお禮を申し上げます。
治兵　只今主人がお目にかゝりますれば、暫くお待ち下さいまし、これ佐七どん、お茶を上げて下さい。
佐七　へい〳〵畏りました。（ト奥へはひる。）
幸兵　いえ、必ずお構ひ下さりますな。
　　　ト引違へて奥より主人富三郎、散髮羽織着流しにて出來り、
富三　與兵衞殿、よくござつた。
與兵　是は旦那樣、其後は御無沙汰致しましたが、御機嫌宜しうござりますか。

富三　聞けばこなたの差配内の幸兵衛殿がおいでとやら、それではこなたでござりますか。
幸兵　初めてお目にかゝりますが、昨日厚いお惠みに預りましたる浮浪人、船津幸兵衛にござりまする。是へ連れて出ましたは、お雪お霜と申しまする二人の娘にござりまする、共々お禮に上りましたも、金圓に添へ衣類迄お惠み下さる旦那様、何とお禮を申しませうか、不辯舌なる詞には述べ盡されぬ御厚恩、有難き儀にござりまする。
富三　それでは是が姉妹のお娘御でござつたか、よいお子持でござりまする。
お雪　又私へは結構なる目のお藥を下さりまして、お蔭様にて今朝より少し宛見えまするは、皆こちら様の御厚恩。
お霜　私迄も共々に、斯様に嬉しいことはなく、連立ちましてお惠みの、
幸兵　お禮に出まして、
三人　ござりまする。（ト宜しく辭儀をなす。）
富三　いや些細なことを其様に、厚いお禮で痛み入るが、何に致せ娘御の目が治りしとは悦ばしい。
幸兵　してお惠みのお藥は、何れのお醫者が御配劑の、御良藥でござりまする。
富三　あれは家内が先達て目を煩ひしその節に、淺草今戸においでなさる、磐瀬様といふお醫者よりお

んで居ります。
富三　なに、死んでをるとな。
治兵　何に致せ殺しては、跡が面倒でござりませう。
良作　其奴は當身で死んだの故、活を入れゝば生返る。
丸吉　それではやつぱり先生が、お當てなすつたのでござりますか。
富三　えゝ、誰が當ても同じことだ。
良作　捕逃さぬ樣此奴めを、庭へ引据ゑ置かつしやい。
治兵
丸吉　へい〳〵、宜しうござりまする。
ト治兵衞丸吉にて要次郎を引立て平舞臺へ下ろ、良作傳次に活を入れろ、傳次息を吹返し四邊を見て、
傳次　やあ、こいつアたうとう喰ひ込んだか。
富三　此奴も庭へ引据ゑろ。
佐七
權七　へい〳〵宜しうござります。
ト佐七權七にて傳次を平舞臺へ引下す、此時奥より以前のおふみ手雪洞を持出來り、
ふみ　先生のおいでがなくば、金子を奪はれ其上に、如何なる難に逢はうも知れず、お蔭樣にて無難に

脱れ、有難いことでござりまする。
富三　危い難を脱れましたは、貴方様のお働き。
治兵　私共に至る迄、難を脱れし身の仕合せ、
富三　一統お禮を、
皆々　申上げまする。（ト辭儀をなす、時の鐘、床の淨瑠璃になり、）
上るり〽折柄告ぐる鐘の音も、三つは其身を捨鐘と覺悟極めし盜賊を、荻原は見返りて、
ト良作要次郎を見て、
良作　さるにても匹夫にしては惜しき膽の据りし奴、いかなる賊か灯しにて面體を改め見ん。
ふみ　此雪洞で二人の顏を、
治兵　野郎め面を上げやあがれ。
〽差出す灯りに良作は、顏をとつくと打見やり、
ト治兵衛雪洞を差出す、良作要次郎の顏をぢつと見て、
良作　見受けし所年齡は、三十年に至らぬ樣子、兇器を持つて忍び入れば申さずとても強盜故、此儘最寄の派出所へ訴へ出て二人共巡査へ渡す其時は、必ず處分も受けるであらうが、兇器を持つて強

治兵　承れば油堀の荻原樣と幸兵衞樣は、お續き合ひだと申すこと。

富三　あの先生は手前方では、大の御懇意でござりますが、如何なる御緣でござりまするな。

幸兵　荻原氏は拙者めの父が劍道の師範を致せし其頃に、入門ありし師弟の間、世の形勢に劍道が廢りし故に師弟共行れませず流浪なし、父の病死もそれなりに、長らく中絶致せしを、又劍道が世に出し故今は立派な身分になられ、つい油堀に居られしを互ひにそれと知らざりしが、計らず再び廻り合ひ、まだ此外に一人の末の忰がござりましたを、荻原氏の御家内が愛子を此程失はれ乳の出ますを幸ひと、小兒を引取りくれし故、今は重緣にござりまする。

富三　いやそれは不思議なお續き合ひ、先兎も角も爰は見世先、奧へござつて御ゆるりと、どうかお話し下さりませ。

幸兵　いえ有難うはござりまするが、慈善者方のお宅樣へ、お禮廻りをする心得にて、出掛にお寄り申しましたなれば、何れ近日緩々と又伺ふでござりまする。

與兵　外は兎もあれ毎夕社へ、禮に行かねばなりませぬから、是でお暇なさるがよい。

富三　さういふことなら御ゆるりと、又出直して來てください。

幸兵　左樣致すでござりませう。

治兵　いやも、何處にどういふ緣者があるか、知れないものでござりまする。

與兵　それといふのも新聞で、名前がそれと知れた故、幸兵衞殿も都合が直り、滯つて居た店賃も殘らず請取り置きましたから、明日納めに參りまする。

富三　いや、それはどうでも宜しいが、更けぬ其内禮廻りに、お連れ申して歸るがよい。

幸兵　それでは二人も旦那樣へ、お禮を申してお暇しやれ。

お雪　左樣なれば旦那樣、お禮は申し盡されませねば、

お霜　是にてお暇。

兩人　致しまする。

富三　又娘御も遊びにござれ。

幸兵　いまだお目にはかゝりませぬが、御家内樣へ宜しく願ひまする。

治兵　これ、お履物を直して置いたか。

丸吉　へい〳〵、宜しうござります。(ト丸吉履物を直す、與兵衞先に幸兵衞娘二人二重より下りる。)

與兵　おい丸吉どん、寐小便は直つたかな。

丸吉　藥罐の樣に漏らしはしません。

與兵　えゝ口のへらねえ、（トいふを冠せ、）
幸兵　いや、お暇致すでござりまする。
ト稽古唄になり、與兵衞先に幸兵衞娘付いて花道へはひる。丸吉門口より出て是を見送り居る、此時下手より傳次の吹替音流し三尺帶尻端折り頰冠りにて顏を隱し出て來る、丸吉是を見て內へはひり格子を締め、小窓を明けて外を窺ふ、傳次の吹替はうろ／＼して內を窺ひ居る事、
富三　いや人は氏より育といへど、素性が正しき士族故、今落ぶれても人柄よく、姉妹共に奧床しい。
治兵　お內樣でもお子樣がござりませぬ故、二人の內どちらかお貰ひなされましたら、よいお樂しみでござりませう。
富三　荻原樣がお續き合ひと知れゝばどうかお賴み申して、どちらか養女にしたいものだ。
ト此時丸吉小窓を締めてこちらへ來り、
丸吉　旦那さま、怪しい奴が表へ來て、內を窺つてをりまする。
富三　此頃は物騷故、めつたに表は明けぬがよいぞ。
治兵　どれ／＼小窓の隙間から、どんな奴だか見てやらう。
ト治兵衞下手へ下りて小窓の隙より外を窺ふ、此時九時の鐘鳴る、矢張右の合方になり、花道より蠟

燭屋やつし裝尻端折り小田原提灯を持ち、紐の付いたる蠟燭箱を首に掛けて出來り、

蠟燭　蠟燭屋でござい。雪が解けきらないので道が惡いから、夜はちつとも俥がなく、蠟燭屋は上つたりだ。

ト舞臺へ來る、是にて傳次の吹替蠟燭屋へ思入あつて、下手へはひろ、蠟燭屋は呼びながら矢張下手へはひる。此の鳴物にて花道より前幕の杢藏手丸提灯を持ちて先に立ち良作羽織着流し、下駄掛にて出ろ、花道に留り、

良作　こりや杢藏、今打ちしは九時の鐘かな。

杢藏　左樣でござりまする、少々宛でも去暮から、よつほど日が延びましたゆゑ、夜分は詰つて參りました。

良作　今宵は少々手間取らうから、十二時頃に迎ひに來てくりやれ。

杢藏　畏りましてござりまする。（ト兩人舞臺門口へ來り、杢藏格子を明けて明かぬ故、）お賴み申す〳〵。

ト是にて治兵衞小窓を明け、

治兵　これは先生でござりまするか。

良作　治兵衞殿、それに居られたか。

治兵　あなたの外に何者か、其處らに居りは致しませぬか。

李藏　其處らに誰か居ぬかとは。（ト提灯にて見る。）

治兵　胡散な奴が參りまして、內を窺ひ居りましたゆゑ。

良作　それは如何なる奴か知らぬが、手前が居れば大丈夫故、どうか爰を明けて下さい。

ト是にて治兵衞門口を明け、

治兵　どうかおはひり下さいまし。（ト兩人內へはひり、）

李藏　いや、物騷なことでござりまする。（ト富三郎良作を見て、）

富三　これは〳〵先生には、ようこそおいで下さりました。

良作　御主人にもお見世でござつたか、先夜の勝負を付けたく存じて、御迷惑をも顧みず、又候今晚出向いて參つた。

富三　それはようこそ、先づ〳〵是へ。

良作　然らば御免下されい。（ト二重へ上り住ふ。）

李藏　左樣なれば私は、後程お迎ひに參りまする。

良作　おゝ大儀であつた、左樣致せ。

治兵　それでは直にお歸りか。
杢藏　又後程に參りまする。
治兵　大きに御苦勞でござりました。（ト杢藏外へ出る、治兵衞立つて來て、しまりをしてゐる。）
杢藏　金滿家故嚴重にしまりをしても胡散の奴が、付けるといふは物騷な、斯うして見ると金持より金のないのが安心だ。（ト治兵衞小窓を明け覗いて見て、）
治兵　杢藏どの、まだ行かつしやらぬか。
杢藏　いゝえ、胡散な奴を見て上げました。（ト稽古唄になり花道へはひる。是にて治兵衞こちらへ來る。）
丸吉　いや先生がいらつしやれば、何奴が來ようとも大丈夫だ。
富三　誰でもよいから奧へ行き、先生がおいでになつたと、お文に知らせて來い。
丸吉　へい〳〵、畏りました。（ト奧へはひる。）
治兵　いやもう實に先生がいらつしやれば、大安心でござりまする。
良作　碁の勝敗では、御主人に及ばぬ樣に存ぜられるが、眞劍にての勝敗なら、如何なる强盜押入ると
も、おくれを取らぬ心得ぢや。
富三　いえ〳〵圍碁の勝敗でも、なか〳〵貴方に及びませぬが、是が所謂下手の横好き、お手柔かにお

稽古を願ひますでござりまする。

治兵　もう一足先生がお早くおいでになりまするとお續き合の幸兵衞樣に、お逢ひのところでござりました。

良作　なに、幸兵衞が參りしとは。

富三　承れば手前共の地面内に居られまする、船津樣とおつしやるお方と、お續き合ひと申すこと全く左樣でござりまするか。

良作　されば、お聞き下されい。あの船津幸兵衞は手前が以前劍道の、指南を受けし師匠の忰、今は何れに居ることかと、永年尋ねをつたる所、盡きぬ縁とて我宅の窓下へ來て乳に困り、難儀を致すものありしを、妻が見兼ねて小兒を抱入れ、乳を吞ませてやりし折、謝禮の印と內職の筆を一把置いて行きし包みの反故の紙面にて、やう〳〵無事と知れしかど、住所が何れか分らねば、在所を尋ね居つたる所、新聞紙上へ薄命者の履歴をのせし姓名にて、はからず住所が相分り、尋ね參つて名乘り合ひしが、それに付けて御當家よりも厚きお惠み受けたる由、其お禮をも申し度く、實は出向いて參つてござる。

富三　いえ其お禮にわざ〳〵と、お娘御迄お連れなされ、今方是へ幸兵衞樣が、おいでになつて慈善者

の惠みを受けし廉々へ、禮に廻ると仰しやつてお歸りなされてござりまする。

治兵　お歸りなされしお跡にて、お噂致してをりましたが、流石は以前が以前だけ、御零落をなされまして も、士族の果は又別段、親御樣といひお二人のお娘御迄お人柄、相成べくはお妹御をこちらの お內の御養女に、お貰ひ受けになりましたら、御緣續きで宜しいと、旦那へお勸め申しました。

良作　いや左樣なされて下されば、手前に於ても悅ばしいが、併しお奧の御家內が、御不承知ではござ らぬか。

富三　いえ子の出來ぬ性質故、どうか素性の宜しいのを、貰ひくれとの彼が賴み、お文に申し聞けまし たら、悅ぶことでござりませう。（ト爰へ奧より丸吉出て、）

丸吉　失禮ながら先生に、お奧へおいでになります樣お待受けを致しますと、おかみさんが仰しやいま した。

富三　さ、どうか奧へおいで下さりませ。

良作　いや、御細君のお待受けとは、それは千萬忝ない。（ト富三郎以前の折を取上げ、）

富三　幸兵衛樣がお土產の、此の菊重をお茶菓子に。

治兵　丁度宜しうござりました。

良作　御縁者となる吉兆を、菊重ねとは好もしい。

富三　それでは見世を氣を付けて下さい。

　　ト唄になり、富三郎先に良作奥へはひる、跡に丸吉思入あつて、

丸吉　もし治兵衛さん、先生と旦那が碁の勝敗と來た日にやあ、何があつても無我夢中、胡散な奴が付けると知れては、今夜はよつぽどお前さんが、しつかりしにやあいけません。

治兵　貴樣如きに言はれねえでも、己に如在があるものか、默つてそつちへ引込んで居ろ。

　　ト是にて丸吉こなしあつて、

丸吉　はてな、藏でも破つて居ると見えて、何だかがち〳〵音がする。

治兵　そいつあ少しも知らなんだ。（ト聞耳を立てる。）

丸吉　よく〳〵聞いたら、鼠であつた。

治兵　えゝ人を馬鹿に、（ト丸吉の天窓をはるを道具替りの知らせ、）しやあがるな。

　　ト此模樣稽古唄にて、此道具廻る。

（裏手の場）――本舞臺一面の黑塀、竹の忍び返し、上手へ寄せて三尺の切戸口出這入りあり、塀の内に

二つ並びし土藏、其外瓦屋根の住居、此後ろ黒幕よき所に見越の松、日覆より同じく釣枝、總て質店裏手の體、爰に夜番人千五郎、仁兵衞尻端折り象股引にて火の番と記せし弓張提灯と、割竹拍子木を持ち立掛り、下手に以前の蠟燭屋らふそくをすゝめ居る、時の鐘にて道具留る。

蠟燭 蠟燭屋でございい。

千五 此町内で泥坊の目掛ける内は爰のお店、夜番の者へも別段に心付けて下さるから、其氣で此方も氣を付けるのだ。

仁兵 千五郎さんの言ふ通り、地獄の沙汰も金次第で、心付のある家は氣を付けるのが人情だが、併しそれも火の番ばかりだ。

千五 いや付火より藏破りを、氣を付けるのが肝腎だが、御政事向きが行屆くので、其藏破りの噂も止み、是で夜番は仕合せだ。

蠟燭 おい、蠟燭を買つておくれよ。

千五 絲心の蠟燭は暗くッていけねえから、火の廻りには入らねえよ。

仁兵 深川あたりを商ひしねえで、煉瓦通りへでも行くがいゝ。

蠟燭 親方の内が高橋だから、なるたけ近所で商ひして寒いから早く歸るのだ。

九郎　文と使が續々と、日毎に參るに當惑いたすが、網を張つたるあの罠へ知りつゝこれより、

五人　參ると致さう。

トやはり右の合方にて、皆々舞臺へ來る。化七出迎ひ床几を出し、

化七　これは旦那樣方、いらつしやいまし。

九郎　夕刻から非番ぢやから、晝の疲れの憂を晴らしに、當驛へぞめきに參つた。

軍八　一服呑んで宿境まで、一廻り廻りませうかな。

化七　いえ、それはなりませぬ。晝間からお玉さんが、待ち人をかけてお待ち兼ねでございます。

九郎　待たれる株は持たないが、當家に於ては板頭の、お玉の所へこれまで參るに、つひに一度帶紐解き、肌を穢したことのないは、實に話すも面目ない。

伴作　是は緣者の證據とやらで、ちと受取りにくい儀でござる。

九郎　いやそれと申すもお玉めは、同勤の眞三郎と深き仲と申すこと、尤も小山が若黨なる、與惣次が妹ゆゑ、以前小間遣ひに居りし頃、互ひに思ひ思はるゝ仲といふこと聞及んだが、それはそれ、今は賣物、始終は身共が手に入れねば、思ひ立ちたる望みが果されぬ。

伴作　それは仰せまでもなく、金さへ積めば自由の身の上、共々力を添へるでござる。

ト爰へ暖簾口よりおいし、更けたる鬘、着流し二階廻しのこしらへにて出來り。

いし　表で話しをなさらないで、早くお上りなさいまし。

九郎　いや今宵は一廻りぞめいて廻る。

いし　そんなことをおつしやらずと、お連樣も皆お馴染、

化七　ぢらさないでお上り下さりませ。

運平　實の所は身共等も、早く當家の二階へ參り、馴染に顏を見せたうござれば、

軍八　直にお上り下さらば、此上の悦びなし。

九郎　それ程までに仰せあるなら、御一緒に上らうかな。

作作　左樣仰せ下さらば、今宵は女郎の跡より、

傳八　身共等四人で隱し藝の、

運平　潮來出島を、

四人　御覽に入れん。

化七　それは樂しみでございます。

九郎　然らば各。

て今夜廓を拔けて來たのは、あれから跡へ探索方がお前のお金の遣ひ高や、身元を內證へ調べに來て、胡散な者と目串が付き此後來たら留めて置き、直に分署へ知らせろと言付けて歸つた故、文で知らせて上げたいにも、若し其文から居所が知れ、お前の大事に及んでは私が手引も同じこと、それ故今夜暮合の忙しい紛れに內を拔け追手の者に知られまいと、辻車を二度迄途中で乘替へやう／＼と今上總屋へ行つたれど、一足違ひで其處へ出たと聞いて追ッかけ來ましたが、斯よくおまへに逢ふといふは、私の念が屆いたのであります。（ト是にて要次郎思入あつて）

要次　それぢやあいよ／＼目が付いて、網を張つて待つて居るとか。

小雛　さあ、それ故うか／＼東京に足を止めても居られまいから、今夜の內に何處へでも私を連れて逃げておくれな。

要次　一緒に連れて逃げてくれとは、怪しい者だと分つても、己に愛想が盡きねえのか。

小雛　さあ初會においでの其時に、蒲團の下へこつそりと、お前が隱した匕首を、見たのでそれと氣が付いても、言はないで居た私の心、察して見たら分りませう。

要次　いや知らねえ內なら兎も角も、それと悟つて人でなしに惚れるといふのは分らねえ。

小雛　私も我身で分らぬ程、お前の足の遠い時は、氣が揉めてならなんだが、廓を拔ければもう是から

要次　外に頼みはありませんから、お前の女房と思つておくれ。

小雛　いや其志しは嬉しいが、今にも己が喰ひ込めば、又何年か土摑ぎ切ねえ苦役をする身體、そんな危い盗人の女房になつて苦しむより、聞きやあおまへは東京に一人の親があるとのこと、堅氣な客に身を任せ、身儘になつて一生涯樂に暮すがよからうぜ。

要次　それでは私に愛想が盡き、見捨てる心でござんすか。

小雛　いや、見捨てたくはねえけれど、己に連なりおぬしに迄、苦勞をさせるが氣の毒だ。

要次　いえ其苦勞も心柄、斯うして逃げて來たからは、お前が連れて逃げられずば、大川へでも身を投げて死ぬより外はござんせぬから、荷にもならうが若し要さん、一緒に連れて逃げておくれ。

小雛　さう又肚胸を据ゑられちやあ、己もどうにかしにやあならねえ。

ト爰へ上手より以前の傳次出來り、こちらを透し見て、

傳次　おい、其處に居るのは兄貴ぢやアねえか。

要次　おゝ傳次、遲かつたな。

傳次　遲い所か先へ來て、どの位待つたかしれねえ。

要次　己もさうだらうと思つたが、氣色がさつぱり直らねえので、爰へ來るのが遲くなつた。

小雛　さうして爰で待合せ、何處へ行くのでござんすえ。（ト此辭を聞き、）
傳次　兄貴お前の知つた女か。
小雛　傳次さん、私でござんす。
傳次　なに、私とは。
要次　いつか廓で近付にした、千歳樓の己が馴染だ。
傳次　おゝ違えねえ小雛さんか、どうして今夜出て來たのだ。
小雛　ちつと居惡い譯があつて、今夜廓を抜けて來ました。
傳次　はゝあ、それで兄貴は遲かつたのか。
要次　いや、こいつに逢つたはたつた今だが、遲くなつたのは外の譯だ。（ト是にて傳次思入あつて、）
傳次　ときに時刻も丁度いゝから、ちつとも早くやッ付けよう。（ト要次郎も思入あつて、）
要二　まことに手前に氣の毒だが、小雛をどこぞへ伏せ玉に預けて置かにやあならねえから、どうか明日の晩にしてくれ。
傳次　それぢやあ今夜も又無駄か。
要次　實は己も此間から、無常氣になり盜人に這入らうといふ氣が乘らず、今日迄ぐづ〳〵して居たが、

悪事をすりやあ段々と、首が細ると氣が付いちやあ、乗切つたことは出來ねえものだ。

小雛 ほんにお前も東京に、うか〳〵しては居られぬ故、少しも早く旅へ出て、私に安心させておくれな。(ト是にて傳次むつとして、)

傳次 大方そんなことだらうと、己も疾から思つて居たが、それ程爰へ這入るのが、進まねえなら頼まねえ、併し己が奥州行の路用位ゐは、拵へてくれても、いゝ譯があるから頼むのだ。

要次 傳次手前はおつなことを言ふが、拵へてくれてもいゝ譯とは、そりやあいつてえどんな譯だ。

ト合方きつぱりとなり、

傳次 女に陷るお前だから、忘れて居るかは知らねえが、三年跡駿河臺の、邸の土藏を破つた時、金氣の物を引浚ひ、お前は先へ逃げたらうが、己アあの時雜物の衣類を盗んで逃げようとして夜番の奴等に見咎められ、たうとうあの晩喰ひ込み、直に二局へ送られたが一人で己が罪を背負ひ、お前のことはおくびにも出さずにしまつて佃へ行き、二年半の苦役をしてやう〳〵此頃出て來たのだ。其の達引を思つたら、五十と百兩高飛の手當ぐれるはしてくれても、いゝと思つて無心を言ふのだ。

要次 それぢやあ手前はあの時に、自業自得で喰ひ込み、どぢを組んだを言草に、己へ因縁付る氣か。

傳次　さうよ、逃げそこなつて捉まつたは、そりやあ己がどぢだけれど、あの時盗んだ雜物と共に悪事を背負つて立ち、叩いて見りやあ値打のある金氣を盗んだ同類を、口から出任せごちやまかし、言はなんだのは達引だ。

要次　其友達の誼みがあるから、己が疾から覗つて居る、金目な仕事を半口載せ、立たせてやらうと思つたが、足手まとひが出來たから、明日の晩迄待てといふのに、それが手前に分らねえか。

傳次　分らねえといふこともねえが、女に心が引かされて、友達仲間の義理をかく、達引のねえお前たから、おらあ呆れて賴まねえのだ。（ト是にて要次郎是非なき思入にて、）

要次　これ小雛、今聞いた通りの譯だから、上總屋へ行き泊り込み、己の歸るのを待つて居ろ。

小雛　さあ、私一人で行つたとて、向ふで泊めてくれゝばよいが。

要次　ナアニ、そつちこつちする内に、直に己達が歸るから、泊めるも泊めねえもありやあしねえ。

傳次　そんなことを案じずに、一足先へ行つてくんねえ。

小雛　それぢやあ行つて待つて居るから、ちつとも早く來ておくれよ。

要次　手間を取つちやあこつちも困らあ。

傳次　直きに行くから案じなさんな。

小雛　そんなら早く來ておくんなさいよ。（ト小雛ツカ〳〵と花道へ行くを、要次郎小聲にて、）

要次　おい〳〵。（ト是にて小雛花道へ立留る。）如在なからうが、道を氣を付けねえ。

小雛　大丈夫さ、お案じでないよ。

ト新內の合方にて四邊へ思入つて、花道へはひる。兩人跡を見送り、後ろへこなしあつて、

要次　傳次、肩を貸しねえ。

傳次　おい〳〵。

ト誂への合方になり、傳次後の塀際へしやがむ、要次郎傳次の肩へ乘り、塀へ手を掛ける、傳次其儘立上る故、要次郎見越の松ケ枝へ手が屆き、忍び返しを乘越え、塀の內へはひる。

傳次　小天狗といふ異名だけ、こんな仕事は得手物だ。

ト四邊を見廻し居る、此時上手の切戸口を明け、要次郎顏を出し、

要次　おい、爰だよ。

傳次　よし〳〵。

ト四邊を見廻しながら切戸口へはひる。是にて內より開きしめる、此の模樣時の鐘にて知せなしに消具廻る。

（奥座敷の場）――本舞臺眞中三間常足の二重、本庇下手へ折廻しの本椽、よき所に石の沓脱、下の方跡へ下げて一間の厠、此前手水鉢建仁寺の袖垣、其外植木の好み宜しく、上の方土藏にて見切り、二重の正面上の方一間の床の間、續いて地袋違ひ棚、下の方襖の出入り、いつもの所枝折門、總て質屋の奥敷座の體、よき所へ短檠を照し、眞中へ碁盤を置き、以前の良作上手に住ひ、富三郎下手に住ひ碁を圍み居る。下手におふみ半元服の若い女房にて、座敷火鉢を控へ、茶を入れて居る、此見得合方時の鐘にて道具留る。

良作　こちらの隅が活きさへ致せば、どうか手前が勝利の樣ぢやが、覗かるゝといふ手があれば、爰は一つの工風物ぢやて。

富三　私としても其石が活きられましては全敗故、こちらの石を捨てましても、覗いて置いて押へさせ、一眼潰して置きませぬと、かゝり地面がござりませぬ。

良作　いやそれなればこちらの方へ、伸びて置かねばなるまいわえ。

富三　はて、伸びられては大變故、どうでも切らねばなりませぬが、此一目がむづかしい。

ト兩人考へながら碁を打居る、おふみ前へ出て、

ふみ　先づお息つぎにお茶一つ、お上りなされて下さりませ。

良作　いや、御家内にはお構ひなく、どうかお寐み下されい、最早夜更でござらうに、左様にお手厚い饗應では、却つて痛み入りまする。

ふみ　いえ、夜長の儀でござりますれば、十二時から臥りましても、寐あきる程でござりますれば、餘り早く臥りましては、目が冴えまして困りまする。

富三　彼めは此程千歳座の芝居をねだりをりますれば、二晩三晩夜明しを致させましても見物に、やりさへ致せばかれが本望、決して御心配には及びませぬ。

良作　扨は先日開場のあの千歳座を御見物に、おいでなされたきお望みとな、いやお女中のお樂しみは劇場に上越すものはござらぬ。

ふみ　斯様に良人とあなた樣と、碁をお圍みでござりまするを、お側で拜見致すに付き、今度高島屋が碁盤忠信を致すさうでござりますが、嘸宜しからうと存じられます。

良作　手前は劇場が嫌ひ故、何を致すか噂などを、承はつたことがない。

富三　芝居が立派に出來ましたと申すことでござります故、其内お誘ひ申しますが、御見物は如何でござりまするな。

良作　それはお斷り申しませう、狂言綺語の拔けはあれど、無學な作者が書く事故、とんとたわいもな

いもので、あれは婦女子に限るもの、手前なども一兩度見物を致したが、傍痛いものでござる。

富三　狂言はお嫌ひか存じませぬが、落しばなしが好と見えて、よく聞きにおいでなされますな。

良作　話しは昔の落語と違ひ、當時有名の三遊亭圓朝などの話す所は勸懲の教になりて、生なかの說教を聞くよりはるかにましでござる。

ふみ　今度圓朝が話します、鹽原多助一代記と申す本が出ましてござります。

良作　あれは若林坩藏といふ仁が、速記法をもつて書綴り、此程一部求めましたが、まことに高座で話す通りぢや。

富三　それでは、嘸面白いことでござりませう。

良作　多年圓朝が苦心致し、取調べたる物語、喜怒哀樂の眞情に迫り、なか／＼見でのある本なれば、必ず求めて御覽なさい。

富三　今仰しやつた速記法は、何でも直に書取れて、重寶ださうでござりますから、覺えたいものでござります。

良作　それはあの本に記しある、下谷御徒士町の速記法研究會へ、お出なされてお學びなされい。

ト此時後で八角時計の十二時を打つ。

最早今宵も十二時なれば、殘念ながら勝負を殘し、手前は歸宅と致すでござる。

富三　いえ、今晩はお泊りを願ひたいと存じますが、お聞き濟みにはなりますまいか。

良作　そりや早斯樣に好める道、願うてもなきことながら、それでは却つて御迷惑故。

富三　いえ、有樣は先達てより私方を賊が覗ひ、今宵も先刻胡散な奴が表に窺ひ居りし樣子、相成るべくは先生が、今夜お泊り下さりますと、心丈夫でござりまする。

ふみ　ほんに先刻お話しの、船津樣の娘御が養女にお貰ひ申されますれば、お續き合の先生故、御親類も同じ事、決して御遠慮なされませず、お泊りなされて下さりませ。

良作　然らば緣者の心得にて、御厄介になりませうか。

富三　早速のお聞き濟み、それにて安心致しました。こりやふみ、どうせ夜が更けようから、見世の者は先へ寐かすがいゝ。

ふみ　左樣致すでござりませう。（トおふみ奥へはひる、是より下座の謠になり）

〽東南に風立つて西北に雲靜ならず、夕闇の夜風烈しき山陰に梢木の間や騷ぐらん。

ト良作是へ聞耳立て、

良作　あの謠は、何れでござるな。

富三　あれは隣家の一軒先に、浮世を安く暮されまする能樂師の隠居がござりますが、老人の身の窮られぬ儘に、何時といふ限りなく、折々謠をうたはれますが、却つて賊の用心などには、宜しいものでござりまする。

良作　なにさま左樣でござらうが、ありや熊坂の謠故、かの青墓の旅籠にて、御曹子牛若が賊を退治せし件にて、それと知つては賊共が、尻込み致すに相違なし。

富三　それではあれが熊坂の、謠の文句でござりまするか。

良作　手前は賊にあらねども、中手を一目入れて見ませう。（ト碁を打つ）

富三　いや、是は油斷がなりませぬ。

ト富三郎は石を持ち考へ居る、良作石にて碁笥を打ち鼓の拍子を取り、思はず謠ひし心にて、

良作　此赤坂の宿に着く、爰こそ究竟の所なれ。（ト碁笥を打ち考へる思入、下座にて）

〽引場も四方に道多し、見れば宵より遊君すゑ數百の遊びに時をうつす、

ト此内兩人碁を打居る、よき程に下手垣根の間より、以前の要次郎傳次頰冠り尻端折りにて、匕首の拔身を提げ出で來り、下手より二重を覗き込み、傳次に囁く、是にて傳次默頭くをきつかけに、

〽機嫌はよきぞ早入れと、いふこそ程も久しけれ。

ト此内下手へ心を配るこなし、要次郎は拔足にて二重下手へ上り窺ふ、良作富三郎は是に心付ず、矢張碁を打つて居る、要次郎思入あつて兩人の側へ近寄り、拔身を差し付ける、是にて富三郎心付き、

富三 や、こなたは。(ト言ふを冠せて、)

要次 聲を立てると、叩ッ切るぞ。

富三 えゝ、(トびつくりして震へ居る、良作要次郎をじろりと見て、石を打ちながら、)

良作 手前は、何だ。

要次 何でもねえ、盗人だ。(ト是にて良作につこりと思入あつて、)

良作 なに盗人ぢや、こりや、其方命が惜しくはないか。

要次 えゝ文句を言はず有金を、殘らず爰へ出してしまへ。(ト良作是に構はずこちらを向き盤面を見渡し、)

良作 御主人、あなたの手でござる。

富三 へい。(ト矢張震へて居る、要次郎思入あつて、)

要次 えゝ惡肚胸に落付かずときり／＼金を出さねえか。

良作 いや、わいらにやる金はない。

要次 やい手前が爰の主人なら、早く金を出さねえか。(ト言へども富三郎俯向き默つて居る。)やい、爰に

なけりやあある所へ案内しろ。

良作　いや、手前が爰になくば知らず、何で案内致さうや、無駄を申さず早く歸れ。

ト是にて下手より傳次顔を出し、

傳次　わる肚胸のある其奴から、兄貴ばらしてしまひなせえ。

要次　むゝ、さうだ。（ト是より又謠になり、）

〽いらつて熊坂左足を蹈み、鐵壁も通れと突く長刀を、はッしと打つて弓手へ越せば、追つかけすかさずこむ長刀にひらりと乘れば刄向きになし、しさつて引けば馬手へ越すを追取り直してちやうと斬れば、中にて結ぶをほどく手にかへつて拂へば飛上つて、其儘見えず形も失せて、爰やかしこと尋ぬる所に、思ひも寄らぬ後より具足の透間をちやうと斬れば、こはいかにあの冠者に切らるゝ事の腹立ちさよと、言へども天命の運のきはめぞ無念なる。

ト此内下座の鼓をあしらひ、要次郎切つてかゝるを、良作鐵扇にてあしらふ立廻り、要次郎敵はずたぢたぢとなる故、傳次切つてかゝる、良作兩人を相手に手の利きし立廻り宜しく、富三郎は此體を見て氣丈夫になりしこなしにて、襦袢片肌脱ぎ向ふ鉢卷にて、下手緣側に掛けてある箒を取り身構へして居る、此内良作鐵扇にて兩人の拔身を打落し、傳次を當て、要次郎を取つて押へる。是を見て富三

郎は傳を打据ゑ、ト、側へ寄つて打据ゑる、立廻り一ぱいに下座の謡切れる。富三郎後へ向ひ、一

富三　これ、盗人を捕押へたから、みんな起きろ／＼。

ト呼ぶ、ばた／＼になり、奥より以前の治兵衛丸吉佐七、下男權七、何れも寐てゐて起きたる、思ひ思ひのこしらへにて、用心棒細引縄を持出來り、

治兵　それでは宵から付けて居た、盗人がはひりましたか。

佐七　お捕押へになつたとは、何より結構でございます。

權七　早く知つたら權七が、叩き伏せてやるだものを。

丸吉　それよりお前の鉢巻の、越中褌でもとんなせえ。

治兵　何に致せお怪我もなく、先づ／＼お目出度う、

皆々　ございまする。

良作　繩があるなら爰へ下さい、此奴を搦めて置かねばならぬ。

治兵　へい／＼、是にございまする。（ト件の細引を出す、是にて良作要次郎を縛ること宜しく、）

富三　爰にも一人押へて居るから、繩を出せ／＼。

丸吉　へい／＼、爰にございます。（ト繩を持つて行く、富三郎取つて縛らうとするを丸吉見て、）や、此盗人は死

んで居ります。

富三　なに、死んでゐるとな。

治兵　何に致せ殺しては、跡が面倒でござりませう。

良作　其奴は當身で死んだの故、活を入れゝば生返る。

丸吉　それではやつぱり先生が、お當てなすつたのでござりますか。

富三　えゝ、誰が當ても同じことだ。

良作　捕逃さぬ樣此奴めを、庭へ引据ゑ置かつしやい。

治兵
丸吉　へい〳〵、宜しうござりまする。

ト治兵衛丸吉にて要次郎を引立て平舞臺へ下ろ、良作傳次に活を入れろ、傳次息を吹返し四邊を見て、

傳次　やあ、こいつァたうとう喰ひ込んだか。

富三　此奴も庭へ引据ゑろ。

佐七
權七　へい〳〵宜しうござります。

ト佐七權七にて傳次を平舞臺へ引下す、此時奥より以前のおふみ手雪洞を持出來り、

ふみ　先生のおいでがなくば、金子を奪はれ其上に、如何なる難に逢はうも知れず、お蔭樣にて無難に

脱れ、有難いことでござりまする。

富三　危い難を脱れましたは、貴方樣のお働き。

治兵　私共に至る迄、難を脱れし身の仕合せ、

富三　一統お禮を、

皆々　申上げまする。（ト辭儀をなす、時の鐘、床の淨瑠璃になり、）

上るり　へ折柄告ぐる鐘の音も、三つは其身を捨鐘と覺悟極めし盜賊を、荻原は見返りて、

ト良作要次郎を見て、

良作　さるにても匹夫にしては惜しき膽の据りし奴、いかなる賊か灯しにて面體を改め見ん。

ふみ　此雪洞で二人の顏を、

治兵　野郎め面を上げやあがれ。

へ差出す灯りに良作は、顏をとつくと打見やり、

ト治兵衛雪洞を差出す、良作要次郎の顏をぢつと見て、

良作　見受けし所年齡は、三十年に至らぬ樣子、兇器を持つて忍び入れば申さずとしも強盜故、此儘最寄の派出所へ訴へ出て二人共巡査へ渡す其時は、必ず處分も受けるであらうが、兇器を持つて強

殊更紅色を帶びたるは、高貴の人の助けを得て、必ず富貴の身とならん。唯日月角の異なるは、吉相の缺にしてこれを表せば片親に早く離れる事ならんが、先づ此相の表では、少女は立身出世をなさん。

すが　田舍者の此孫が、さういふ身分になられますとは、嬉しい事でござります。

畑作　そこで女は氏なくて玉の輿に乘らるゝ譬、此子も早く江戶へ出し〳〵

田六　藝者にしたら高位のお方の、お目に止まつて出世が出來よう。今の世界は女の事だ。

赤岩　かゝる娘を儲けたる、母御は唯の人ではあるまい。その面上を見たいものだ。

畑作　此子の母は此村で、一と云つて二のない女、器量ばかりか氣立がよく、親孝行で甲斐々々しく。

田六　田畑を耕す片手間に、綿を繰つたり機を織つたり、天晴女一人前に勝れた嫁女でござりまする。

赤岩　定めて左樣なことでござらう。此娘御の相を見ても、母御の勝れし事は知れます。

畑作　お袋殿も辭退せず、よい序ゆゑ身の上を見て貰つたがようござる。

田六　又先生樣がこちらの方へ、いつお出でなさるか知れぬ、早うお願ひ申すがよい。

すが　おゝ二人の衆の云ふ通り又とお願ひ申されねば、御面倒ながら私も、御覽なされて下さりませ。

赤岩　決して遠慮をさつしやらずと、さあ〳〵前へお進みなさい。

すが　御免なされて下さりませ。
ト合方きつぱりとなり、おすが前へ出る。赤岩齋天眼鏡で顔を見て、
赤岩　先づ天庭に山紋ありて準頭豐に法令正しく、目は細眼にして波紋長く、口は四字口に丹脣なるは、老女の相も吉相なれど、天庭より中正かけ黑氣色を帶びたるは、開くる運を妨ぐる。これ禍の凶相なり、これにて判斷なす時は、中年よりして今年迄、長く苦勞をなされたらうが、その替り晩年は必ず福祐の身とならん。今此家の樣子を見るに、朦朧として屋中に黑氣のあるは障りのしるし、これを消除致さねば、御子息の運も開けませぬ。
すが　成程あなたのおつしやる通り、六七年此方は煩ひ勝でござります。
畑作　なんと、今晴明と言はれるだけ。
田六　能く當るではござらぬか。
すが　それについて先生が、障りがあるとおつしやるは、如何なる事でござりまするな。
赤岩　其障りと申すのは、日月角を黑氣で蔽ふは神佛を、憚かるべき此家の内に汚れがござるが、心當りはござらぬかな。
すが　何も汚れますものはござりませぬが。（ト赤岩齋思入あつて）

傳次　どなたも眞平御免なせえ。
　　　〽逃足早く立掛るを、（ト兩人立つて行かうとするを）
良作　いや兩人共、先づ待つた。
要次　え、何ぞ御用で、
要次
傳次　ございますするか。
良作　向後惡事をせぬといふ、精神ならば今爰で其身の素性を打明し、犯せし罪の懺悔に及び、改心面に現はれなば、兩人共許しくれん、たゞ此儘では許されぬぞ。
兩人　へい、
　　　〽是非なく兩人座に付けば、良作席を進み出で、
　　　ト要次郎傳次思入あつて元の所へ住ふ、誂への合方になり、
良作　一時此場を脫れん爲め改心なすと申すであらう、それでは生涯兩人共、人交りが出來ざるぞ。斯く兇器を携へて强盜なす上からは、定めて是迄惡事を働き、懲役などにも兩三度參つた者と思はるゝ、舊幕時分と事變り、假令千圓盜むとも、今は死罪の處刑なく、何ヶ年か懲役にて再び晴天白日の此世へ出らるゝ有難さ、人命惜しむ寬典の上の御處置は外ならず、惡しきを懲して善を

勸め、正路の人になさん爲め日曜日には教導職の僧侶が參りて說教あるよし、然るに賊をなす者はかゝるお慈悲を辨へず、改心なす者稀にして、一度徒罪に參りし者滿期になれば又直に、惡事の友をかたらひて、窃盜なせしも兇器を持ち强盜なすに至るといふは、是忠信孝貞の誠の道を知らざる故なり、學術なり工藝なり其身一心に勉强なさば、終に江湖へ美名顯れ、五本の指に折らるゝ程の名譽の人も其方等も、同じ三千七百萬の同胞の內なるぞ、天下へ美名を輝すも又惡名を觸れらるゝも只一心の置所、人間界へ生れ來て鬼畜に等しく人非人と、人に忌み嫌はるゝは、此上もなき恥辱なるぞ、先非後悔致しなば、眞もつて改心なせ。

要次　何の由縁もござりませぬ私共へ旦那樣が、事を分けての其御說諭、一々胸にこたへますれば是から心を改めて、再び盜みは致しませぬ、仰しやる通り是迄は喰ひ込んだら懲役と高をくゝつて居ります故、好な酒は朝から呑み買ひたい女郎は每晚買ひ、榮耀がしたさに止められず、小天狗といふ渾名迄取ります程の賊となり、惡事を致してをりましたが、是に付けても此間途中で乘つた車屋が、以前佃で一つに居て同じ鎖で繫がれた三五郎といふ者で、今は堅氣に立返り車を曳いて居りましたが、骨が折れても氣が樂だから、惡事を止めて堅氣になれと、それに異見をされたので止める心になりましたが、又友達の義理づくでしなけりやならぬ場合になり、今夜忍び込みまし

たが、腕まへ勝れた貴方に出合ひ、おどし文句もぶる〲もの、直に取つて押へられ、南無三文
もや懲役と、實にうんざり致しましたが、助けて遣ると旦那樣のお慈悲深いお詞で、蘇生致した
心持、今日を限りにふッつりと惡い心を改めまする。

良作　親はいかなる者か知らねど、賊になさうと育てはせまい、其身の惡しき行ひから、遂には賊にな
つたであらう。して、兩親は存命なるか。

要次　いえ、兩親共に死にまして、今は此世にござりませぬ。

良作　世の諺に申す如く、片輪な子程可愛いと定めて冥土で兩親が、汝を案じて中有に迷ひ行く所へも
行かれまい、此上もない不孝だぞ、今某が申すのは亡き兩親が異見と思ひ、改心なして正業に
付き年季佛事を弔ひて、成佛なす樣致すのが是子たる者の道なるぞ、如何なる惡事をなすものも、
性は善なる者なれば、惡いと悔悟致しなば速に改心せよ。

〽鬼をも挫ぐ劍道の勇氣に引替へ荻原が、物柔かに言諭せば、流石の賊も涙を浮め、

ト此内良作宜しく思入にていふ、要次郎段々俯向き涙を拭ひ、

要次　あゝ有難い其お詞、親にもまさる貴方の御教諭、思はず涙がこぼれまする、實の事は只今迄改心致
すと申しましたは、此場を體よく脱れん爲め、眞から惡事を止めまする心で申しは致しませぬが、

段々との御異見に今といふ今さつぱりと、曇つた空の晴れた如く、今日を限りに盗みを止め、全く改心致しまして、是から肩へ棒を當て、擔ぎ商ひいたしてなりと、正路な稼ぎを致しまする。

傳次　こりやあお前の言ふ通り、此有難いお詞を、聞いちやあどんなろくでなしでも、改心せずには居られねえ、實の親せえ見限つて家出をしたを幸ひに、逃亡届をされた故、今は無籍の茨木傳次、鬼にも負けねえ己でせえ、有難涙をこぼしました、札びら切つて遊びてえのが病で盗みも致しましたが、是からふッつりと止めてしまひ、堅氣になれば男一匹、車を曳いても今日がおくられますから私も、共々改心致します。

〽兩手を突いて兩人が、心の誠顯るれば、（ト兩人手をつき思入）

良作　すりや兩人共改心なすとか、それは何よりよいことぢや、説諭をなした甲斐あつて、手前に於ても悦ばしい、して小天狗と申す其方は、何れに於て出生なし、又姓名は何と申す。

要次　何をお隱し申しませう。生れは士族でござりましたが、實は親の名前さへ存じませず育ちましたが、守袋にはひつて居た臍緒書で知りました、親は駒形片町で、荻原と申す士族にて、私は父其次男良次郎と申します者、

富三　むゝ、すりや先生と御同姓、はて不思議なこともあるものだ。（ト言ふを冠せて、）

良作　いや廣い世界に同姓を名乘る者は幾らもある。して其方は幼年より何故あつて他國へ行きしぞ。

要次　委しいことは育てられた後の親に聞きましたが、何辨へぬ五ツの暮、神田の市の人込で、迷兒になつたを連れて行かれ、歸りたいにも内は知れず、泣明したもいつか馴れ育てられた其親は旅を稼ぎの因果物師、成人なすに隨つて惡い事を段々覺えかゝる身分になりましたが、實の親は駒込と聞いて故鄕が戀しくなり、七年跡に東京へ臍緒書の名前を知るべに、早速駒込片町を尋ねましたが瓦解後に、兩親共に此世を去り、家督の兄も轉宅なし其行先がしれぬと聞き、せう事なしに其儘に打過ぎましてござりまするが、斯う改心をして見ますと、親なき後は兄は親、どうぞ逢ひたうござります。

良作　して其臍緒書を所持して居らば、手前に見せい。

要次　只今お目に掛けまする。

〽腹に結びし守より、臍緒書を取出し、いざと出せば開き見て。

ト要次郎腹卷の守より臍緒書を出し良作へ渡す、良作開き見て、

良作　「安政四年丁巳二月十日の誕生、江戸駒込片町之住、荻原良左衛門次男良次郎、」

〽扨は程經し弟かと、あまりの事に胸轟き、（ト良作臍緒書を讀みびつくりなし）

思ひ掛なきことなりしぞ。（ト此内富三郎始終不審の思入あつて、）

富三　左様なら、あなたは此仁を、お心當りでもござりまするかな。

良作　いかにも、尋ぬる弟でござる。

要次　え、そりやまことのことでござりまするか。

良作　此臍の緒書は父の自筆、是に記せし良左衛門の、我は長男良作なるぞ。

富三　えゝ、そんなら御兄弟でござりましたか。

要次　あゝ面目次第もござりませぬ。

〽我身を恥ぢて頭を抑へ、さし俯向けば良作も、あたりの人に面目なく、

ト要次郎天窓を抑へ俯向く、良作も皆々に面目なき思入、

良作　そちより手前が面目ない。

富三　それでは常々貴方樣が、お尋ねなされし御舍弟樣は、此お人でござりましたか。

ふみ　盡きぬ御緣といひながら、思ひ掛けなくお一人の弟御樣が知れるといふは。

治兵　災ひ却つて幸ひとなり、お目出たいことでござりまする。

傳次　思ひがけなく尋ねて居た、兄御に廻り逢ふといふは、改心した故天の惠みだ。

佐七　弟御さんと知れましたら、先づ〱こちらへお上りなさい。
權七　えゝ、胡麻すりはよさッせえ。
丸吉　あゝ、爰が四海兄弟だ。
治兵　口出し致すな。（ト叱る）
〽暫し默せし良作が、有合ふ繩を取上げて、（ト良作思入あつて立上り、繩を取つて）
良作　兇器を持つて押入りし、科を主人に請受けて許しやらんと思ひしが、弟とあれば許されぬ、尋常に繩に掛れ。
〽又もや弟へ繩かくれば、（ト良作要次郎に繩を掛ける。）
富三　こりや先生には何故に、
ふみ　お許しなされし弟御樣へ、
治兵　又もや繩を、
皆々　お掛けなされしぞ。
良作　他人なれば慈悲を以て許し遣はす賊なれど、我弟なる上は繩掛けて差出さねば、百人有餘の門弟を預る荻原良作故、道を立てねば師範がならぬ。

富三　すりやそれ故に御舍弟樣を。

良作　此場の事情を知らざる者は、弟ゆゑに助けしと言はんことは必定なり、數代續きし荻原の家名の瑕瑾に相成れば、許すことは相成らぬ。

へ武士道磨く良作が、義を立通す一言に、良次郎は打默頭き、

要次　明日にも直に召捕れゝば、苦役をせねばならぬ罪科、兄の手づから警察所へお渡しなされて荻原の、家名の瑕瑾にならぬやう、お計らひ下さりませ。

良作　無慈悲な兄と思ふであらうが、物の師範をなすものは依怙の沙汰は致されぬぞ。

ト富三郎思入あつて、

富三　今更返らぬことながら、最前お留め申さずば、斯樣なことにもなるまじきに、あなたへ對して濟みませねば、良次郎樣を此儘に、お許しなされて下さりませ。

良作　一緒に參りしそれなる者は、他人故に許さんが、我弟は許されぬ。

傳次　其思召は身にとつて、有難うござりますが、今夜爰へ忍び込んだも、此傳次が頼みし故、申さばわつちが發頭人。

要次　いや、兎やかう言ふには及ばねえ、是で日外こなた一人へ、背負はせた罪の帳消しだ。

傳次　それぢやあどうも義理が濟まねえ。
要次　濟まずば跡から自首をしやれ。
　〽折柄迎ひの杢藏が、（ト下手へ以前の杢藏出で、）
杢藏　只今お迎ひに上りました、樣子はお次で私も承つてござりまするが、お尋ねなされた御舍弟樣故、此場のことを御内分に、
良作　悪事千里の世の譬、後日に世間へ漏れる時は、此良作が名折なるぞ。
杢藏　すりやどうあつても、
良作　許すことは相成らぬ。
　〽にべなき詞に杢藏が仕方なく〳〵投首なし、（ト良作きつといふ、杢藏ぢつと思入あつて、）
杢藏　是に付けても旦那樣へ、私迄が顏向のならぬことがござりまする。
良作　なに、其方が顏向ならぬとは。
杢藏　さあ、只今こなたへ參りがけ、橋の袂で出合つたは夜目ではあれど吉原で、勤をさせし娘のお雛、他出の出來ぬ御規則を、背いて出たは不思議ぢやと、段々詮議を致せし所、御舍弟樣と約束して安泊で待合すと、聞いてびつくり致しましたが、斯ういふことに成行きますと、私迄が穴へでも

入りたうござりまする。

良作　扨は弟が馴染し女郎は、杢藏そちが娘なるか。

杢藏　是にも深いお話しがござりまするが、三年跡、まだ御奉公に上らぬ前、女房に死なれた其時に、取付方に差支へ、餘儀なく娼妓に致しました實の娘でござります。

要次　そんなら小雛の親といふは、

傳次　おめえさんでござりましたか。

富三　それでは今頃安泊りで、待ち草臥れて居なさるだらうか。

杢藏　いや安泊へはやりませぬ、あれも御規則を背いたやつ、第一御主人へ濟みませぬ故、旦那を送つて歸る迄、糊賣のお百どんの内へ預けて置きましたから、今晩にもお暇を貰ひ、娘を送つて行かねばなりませぬ。

富三　いや良次郎様のお馴染でござりますなら、私が小雛殿の前借を主人へ濟まして身請なし、杢藏殿へ進上致せば、時節を待つて先生のお許し受けて末々は、夫婦になしたうござりまする。

ふみ　其時こそは私共が、お媒人を致しまする。

良作　すりや山岡殿には杢藏が、娘の身請をなされるとか。

富三　是も今宵の災難を脱れました御恩送り、

杢藏　へえ左樣ならあなた樣が娘の苦界を、お助けなされて下されますとな、えゝ有難うござりまする。

要次　斯く情あるお宅とも、しらず盗みにはひつた報いは、忽かゝる此身の縄目。

傳次　滿期で出たら堅氣になり、御恩送りをするがいゝ。

良作　おゝ、其時こそは改めて絕えて久しき兄弟の、名乘りを目出度くするであらう。

要次　先づそれ迄は御處置を受け、

傳次　土を擔いで苦役を仕ようか。（ト兩人ぢつと思入、本釣鐘を打込む）

良作　一度貧苦に迫りたる、船津氏は正直ゆゑ、

富三　發狂なして入水せし、

ふみ　危い命も助かりて、

治兵　所々の惠みで苦を忘れ、

杢藏　樂になりしは神の加護、

要次　それに引替へ惡心故、

傳次　佛も助けぬ、

要次　身の罪科、

良作　實に勸懲の、（卜良作繩を取り、要次郎と顔を見合せるを木の頭）いましめぢやなあ。

卜兩人ぢつとこなし、皆々引張り宜しく、熊坂の謠の切れへ、本釣鐘を冠せ、

ひやうし幕

筆賣幸兵衛　（終り）

加化稲荷月朧夜

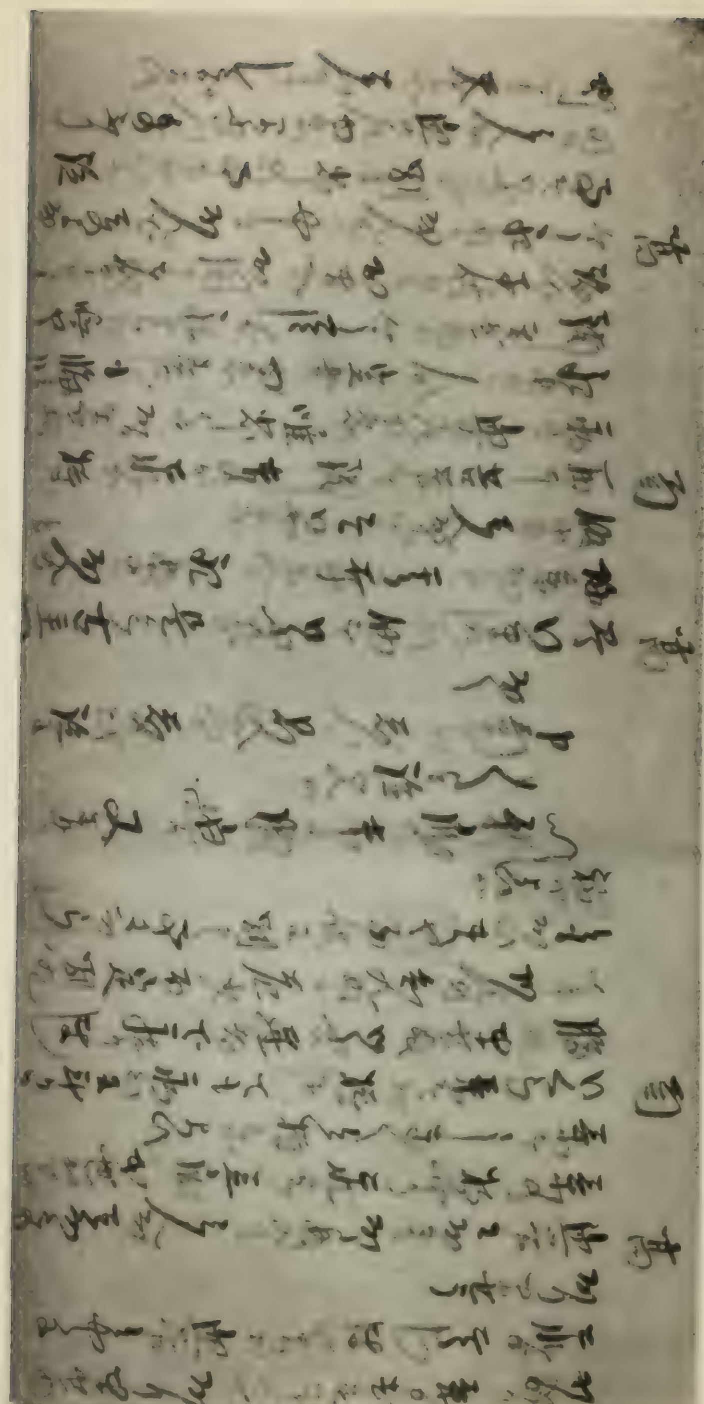
軍書の後の世話物は新葛の葉と夕暮に根本が原で助けたる狐が命の恩返し母のお菅が大病の看病の世話が媒に縁を結びし常陸帶二人の子迄儲けたるお秋が夫忠三郎は元が武家出に劍術の手練は外に荒川氏左門止へ執持に御前試合の曠勝負爭ふ腹の九郎兵衛へ盗みし傳書をかせにしてゆする下部の彌三平が惡事を知られ信三をむごい殺しの潮來川岸船でこがる丶眞三郎とお玉は二世を掛守り起請を反故に與惣次が主人思ひの異見の縁切別れともなき妻や子に一首の歌を形見となし秋の名殘の哀にも姿を隱す芒原露の玉屋と思ひしは是化されし野中にて寶も元へ返り忠惡人ほろびて善人のさかふるしぐみの狂言綺語も實事をうつす利根川圖志

「女化稲荷」は明治十八年五月、市村座に稿下された、作者七十歳の時である。常陸國の女化稲荷神社の傳説を劇化したもので、一面「葛の葉」の趣向を摂取せるもの。此作の上演に際して、菊五郎は門人登美松雀に狂言作者竹柴其水を伴ない、女化ヶ原に到り、稲荷神社に參拜し、書割の參考として寫眞を取り、根元村へ行つて大徳某に就て來由を聞いて來たことが傳られてゐる。「…芒原の道具も餘程注意したものと見え、殆ど眞に迫り子別れの所もごく、あつさりにてよし、下部彌三平此人に當てはめ書いたといふ役、申分なき出來なり、潮來を玉屋で化されてゐるをかしみ、仇な聲で都々逸を唄ふ所此丈の得意、言外の妙とも言ふべし」と當時の劇評に見えてゐる。

書卸しの時の役割は、五世尾上菊五郎（女房お秋實は女化狐、下部彌三平）、九世市川團十郎（家老荒川道之進）、助高屋高助（曾根忠三郎）、先代市川左團次（小山の下部與惣次）、坂東家橘（小山眞三郎）、河原崎國太郎（忠三郎母おすが）、尾上松助（牛窪九郎兵衛）、現中車事市川八百藏（磯貝左市郎）、尾上菊之助（小山の若黨信三）、岩井松之助（玉屋の抱へお玉）、市川猿十郎（玉屋の若い者化七）、市川壽美藏（人相見赤岩齋等）であつた。

挿繪にしたのは默阿彌自筆稿本（横書き）の一部である。

大正十三年十一月　　編者誌す



女化稻荷月朧夜（女化稻荷――三幕）

序幕

常州浮島ヶ原の場
同　潮來玉屋の場

〔役名――牛窪の下部彌三平、小山の下部與惣次、百姓忠三郎實は曾根忠三郎、家老荒川道之進、信田左門正、小山眞三郎、牛窪九郎兵衞、磯貝左市郎、小山の若黨信三、玉屋の若い者化七、信田の臣大橋軍八、同鹿倉伴治、同森山專藏、同堂島運平、同片倉與市、同與澤富藏、同寺崎三吾、小原竹七、庄屋杢兵衞、玉屋の若い者鍵藏、忠三郎一子千代松、辻占賣半太。玉屋の抱お玉、同内藝者おこん、同抱おいれ。同およれ。同おみき、同おしほ、百姓數人等。〕

（常州浮島ヶ原の場）――本舞臺上寄り二間白木の社、本庇正面兩扉三方本緣附、後ろ在體、廣野の遠見、所々に松の立木、日覆より同じく釣枝、總て常陸香取在野邊の體。爰に庄屋、羽織袴にて書附を持ち、○△の百姓兩人、やつし裝、股引草鞋にて「遊獵止」の立札を持ち立ちかゝり居る、此見得在鄉唄、大拍子にて幕開く、

○今一枚は半里先の土橋の際と、大曾根村の境へ立て、

△　もう此一枚で殘らず濟みました。

ト此内庄屋書附を調べながら、

庄屋　けふ一日は御領主の信田樣のお觸出しで、獵人は言ふに及ばず、遊獵たりとも鐵砲打つは一切ならぬといふ御達し、殊に御家來の牛窪樣が、此原のお掛りで、殊の外嚴しいから、よく落ちのないやうに氣を附けてくらつしやれ。

○　庄屋樣の言渡しがあるのみならず、此樣に建札にて成らぬと言うたら、よもや鐵砲打ちはござりますまい。

△　あやにく喧しやの牛窪樣が、嚴しく見廻りさつしやるから、どんな事を言ひ出すか、今日一日は實に心配ぢや。

庄屋　早く殘りの一枚を此緣へ立てゝしまひ、心を附くるにしくはない。是が所謂泣く子と地頭、主と病ひには勝たれぬたとへぢや。

○　それでは庄屋樣、此邊へ穴を掘つても、

兩人　ようござるか。

庄屋　又見廻りの來ぬ内に、早く立てておかつしやれ。

ト矢張在郷唄大拍子になり、庄屋指圖なし、百姓兩人件の立札を埋ける。此内花道より、牛窪九郎兵衞切半纏、大小草鞋がけにて、弓矢を持ち、後より信田の家臣大橋軍八、鹿倉件作、同じく切半纏大小草鞋にて出來り、直に舞臺へ來る。この内庄屋向ふへ思入あつて、二人平伏する。九郎兵衞上手へ通りあたりを見廻し、

九郎　まだその方等はこの邊に、立札抔を致しをるのか、最早殿樣この下に、御出張に相成りをるぞ。

庄屋　お觸れ廻りのかど〳〵へ、只今書附と合せながら、殘る所なく立てましたれば、最早遊獵たりともいたしませぬ。

九郎　殘る所はないと申すが、爰が殘つてをつたではないか、たはけものめ。

軍八　今日御上の御出張は、何時のお觸出しだと思ふ。正午と申す達しではないか。

件作　かれこれ八ツにも近いのに、まだ此樣な事をいたしをるとは、いかに百姓どもは優長でも、いや呆れたことでござる。

九郎　今日御遊獵の御道筋、並びに當浮島ヶ原御獵の場所は、某が見廻りの役、それをおぬし等存じながら、かやうに等閑に致すのは、我を恐れぬものと見える。

庄屋　いえ、なか〳〵もちまして、左樣な譯ではござりませぬ。此處のみ殘りましたが、それも殿樣お

出での前に、かやうに間に合ひましたる上は、何卒御勘辨を願ひまする。（ト百姓共々詫びる。）

九郎　江戸表御上屋敷より内命受けて參りし牛窪、かやうな不都合ある時は、農民ならば知らぬこと、役目を勤むる庄屋であつては、聞き捨てはいたさぬぞ。

軍八　其方等が役を上げるも、又無事にて勤むるも、牛窪氏の胸一つ。なう鹿倉。

伴作　さやう〳〵、役目を大事と思ふなら、願ふやうにして願ふがよい。もし申しにくき儀があらば、

軍八　身共等より惡しからず、取次ぎのもつて執成しやらう。

伴作　篤とそこらを勘考いたせ。（ト兩人庄屋に呑込ませる。）

庄屋　若し此後過ちのござりましたその時は、あなた方へお願ひ申上げまする。

軍八　むゝ、それさへ心得をるならば、此立札の遲刻せしも、よく執成して身共等より、

伴作　ことなきやうに計らひくれん。

庄屋　それは有難うござりまする。

ト在鄕唄ばた〳〵になり、花道より信田の家臣森山專藏、堂島運平、切牛纏大小草鞋弓矢を持ち、百姓忠三郎一子千代松やつし裝、藁草履を履き、泣きながら兩人に引立られて出る、跡より信田の家臣寺崎三吉、小原竹七同じく切牛纏大小弓矢を持ち、千代松を庇ひながら皆々花道に留り、

千代　どうぞ、御免なされて下さりませ。
專藏　えゝ無禮致した不屆き奴。
運平　吠えずとあれへ一緒に參れ。
三吉　小兒のこと故、各には、
竹七　見脫しておやりなされい。
專藏　いや、見脫すこと相成らぬ。
專藏 運平　さあ、うしやあがれ。
ト引立てながら舞臺へ來る。皆々是を見遣り、
軍八 作作　何事でござるな。
專藏　只今殿樣お通りの節、お供先を切つたる小兒、
運平　何れの者か不分明ゆゑ、是へ引立て參つてござる。（ト九郎兵衞きつとなつて）
九郎　こりや庄屋、只今其方が不行屆を戒め居るその內に、最早是なる一儀出來、かゝる事に成り行くも、矢張其方が行屆かざる故。さ、是なる小兒は何れの者だ。
ト庄屋おづ／＼出で、泣き居る千代松を見遣り、

庄屋　田舍のことゆゑ、近在の子供位は直知れますが、竟にこの子は見たことのない、何れの者でござりまするか、一向に存じませぬ。

九郎　いやその言譯は呑込めぬ。おのれの越度を遁れんため、言拔けようとする不屆き奴、知らぬとは申させぬぞ。

庄屋　それぢやと申して、存じませねば。

九郎　申さぬとあればもう是迄、傍の見せしめ此處で、餓鬼が首を刎ねてくれん。

ト刀を拔放す。庄屋びつくりなし、

百姓兩人　そりや大變ぢや／＼。

ト△〇の兩人逸散に下手へ逃げてはひる。庄屋は千代松を庇ひ、下手へ逃げようとするを、軍八、作作にて是を捉へる。此内ばた／＼になり、花道より磯貝左市郎割半纏、大小切緒の草鞋、塗笠を持ち出來り、

左市　暫くお止まりなされ、暫く／＼。（ト舞臺へ來る。皆々見遣り）

九郎　磯貝氏には何ゆゑに、此場の一儀を、

皆々　お止めなさるぞ。（ト左市郎下手へ住ひ。）

左市　小兒が一命絶たんとなすを、お止め申すは外ならず、上の御爲を思ふゆゑ。

九郎　なんと。

左市　只今御供先を切つたるは、重々濟まざることながら、何辨へぬ童のこと、命を絶つ程の咎めはあるまじ、わけて今日のお觸出しは何たるや御承知あらん。

九郎　御道筋の役目を蒙る拙者が、お觸の趣きを知らいでなんといたさうや。

左市　御存じあらば小兒が一命、お取りなさるには及ぶまい。

九郎　いや取つても苦しうござらぬ、殿の御先を切つたやつ。

左市　さ、そこでござる、今日お觸出しの向は、御遊獵の小鳥狩、御遊の二字のござる上は、大人なれば知らぬこと、かゝる小兒の無禮位は見脱しやるが領主の慈悲、それも御遊の二字がなくんば、そりや是非もなきことながら、申さば御遊びの小鳥狩、さしたる咎めもござるまじ。

九郎　そりや早御遊の二字がござれば、慈悲を垂れるも宜しけれど、近頃小前の農民共、領主の威光を恐れぬ輩まゝござる故、此無禮をこのまゝ見脱すその時は、よいことにして增長し、猶々無禮の振舞あらん。さすれば殿の御恥辱ゆゑ、以後の見せしめ首打ち落し、懲らしてやるがようござる。

左市　かゝる暴威の振舞なすより、助け遣はし慈悲をもつて、寛仁大度の計らひなすが、殿のおためと

存ずるが、身共が意見は非でござるか。

九郎　さ、それも一理はござれども。

左市　それとも無慈悲に一命絶ち、我意を通す御所存なるか。

九郎　さあ、それは。

左市　一人貪戾なれば一國亂を起す、領主が非道の振舞よりつひに支配の農民共、一揆を起せしこともござれば、僅かこれなる小兒が一命、取らんよりも助け遣はし、寛仁の沙汰に及びなば、殿樣のみか御身迄を、彼が親は神佛とも必ず思ふに疑ひなし、さすれば當御領地配下の者は、その恩澤を忘却なさず、上を慕ふは當然なり。それゆゑ身共がお止め申すも、やはり御身のおためでござる。

トよろしく思入、九郎兵衞ぢつとこなしあつて、

九郎　一命絶たんと存ぜしも、磯貝氏の扱ひ故、汝はこのまゝ助け遣はす。（ト思入あつて、）こりや庄屋、その餓鬼汝へ引渡すぞ。

庄屋　へい〳〵、有難うござりまする。

ト庄屋悸へながら、千代松を介抱なし、下手へ下る。大小入りの合方になり、花道より信田の臣片倉

與市、與澤富藏切半纏大小草鞋にて、弓矢を持ち、次に信田左門正ぶつさき羽織、大小紐附草鞋騎射笠、殿の拵へ、續いて家老荒川道之進打割羽織、大小紐附草鞋、同じ拵への近侍兩人附添出來り、直に舞臺へ來る。是にて皆々出迎へ、信田左門正、荒川道之進上手へ通る。此内社の本緣へ床几を置き是へ掛ける。皆々左右へ宜しく居並び、磯貝左市郎下手に手を支へ、

左市　上には御機嫌麗はしくならせられ、臣等一統如何ばかりか、

九郎　恐悅至極に、

皆々　存じ奉りまする。

ト皆々辭儀をなす、道之進思入あつて、誂への合方になり。

道之　只今殿の供先を切りし、小兒は如何いたされしぞ。

專藏　はッ直樣是へ引立て參り、牛窪九郎兵衞殿へ引渡しましてござりまする。

九郎　少年とは申しながら、他の見せしめと存じまして、成敗致す心得にござりまする。

道之　はゝ、すりや未だ成敗は致されぬか。

九郎　只今首級を刎ねんとせしを、磯貝遮り止めます故、餘儀なく控へましてござりまする。

○　是と申すも御領分、當浮島ケ原の支配致す、庄屋を始め農民ども、

□ 上を恐れぬ振舞あつて、既に今日御觸出しの、御道筋も不行屆きに、
△ 我々此所を見廻らずば、遊獵禁止の立札さへ、立てずにおきし位ゆゑ、
◎ それらの者へ見せしめに、小兒が首を刎ねんとせしは、則ち役目を守るゆゑ。
九郎 拙者が心中御上にも、御推察の下さりませう。
左門 流石は聖賢の道を守る左市郎、成敗を止めたるは適れなるぞ。
九郎 何と仰せらるゝ。

ト九郎兵衛不審の思入、誂への合方になり、

左門 實は只今小兒をば引立て參る樣子ゆゑ、あれなる寺崎小原の二人に言ひつけ、同道致させしは若しその方等が權威をもつて、無慈悲な計らひなさんかと、それを止めん其爲めに、同道させしものなるぞ。
九郎 えゝ。(トびつくりなし、皆々顏見合せぢつとこなし。)
與市 御慈悲深き思召しに、小兒が命に事なきやう、
富藏 密々仰せ付けられしは、下を哀れむ思召し。
三吉 既に一命危かりしを、止め兼ねたるその所へ、

竹七　磯貝氏の御入來にて、小兒が命に恙なく。
與市　誠に彼れが、
富藏　幸福でござりまする。
左門　して小兒は、何れにあるか。
左市　あれに控へさせましてござりまする。
左門　苦しうない是へ呼べ。
左市　はッ。小兒をこれへ。
庄屋　へい〳〵。（ト庄屋千代松を介錯なし、下手へ出す。）
左門　道之進、姓名を問うて見よ。
道之　はッ。（ト下手へ寄り、）こりや、そちは幾つになるぞ。（トやはらかに聞く。）
千代　あい、五つになりまする。（ト手を廣げて出す。）
道之　五歳にしては形も大きく、なか〳〵利發さうな產れぢやな。して、そちの家は何と申す所ぢや。
千代　あい、家の名は守の中に這入つて居ります。
庄屋　さあ〳〵、ちよつと出してお目にかけるがよい。

ト庄屋千代松の巾着より、所書の書附を出し、道之進の前へ出す。

道之「常陸國信田郡根本村農民、曾根忠三郎悴千代松」（ト書附をちよつと見遣り。）はて、見覺えのあるこの手蹟。こりや、そちの父は劍術をいたすか。

千代　あい、村の人に毎日稽古をいたしまする。

道之　むゝ、扨は曾根氏の子息でありしか。（ト思入。左門正是を見遣り。）

左門　道之進、存じたものか。

道之　はッ、此所書に記しある、手蹟は慥に見覺えある、御先代へ劍道の、御指南をいたしましたる、曾根又左衞門が悴忠三郎にござりまする。

左門　むゝ、すりや父上が指南を受けし、曾根が悴の一子なりしか。

道之　彼は弓馬槍劍に秀でたるものなりしが、その頃上へお暇願ひ、西國筋へ赴きし、其後所在も不分明なりしが、如何いたして當國に、かく農民をいたし居るか、一圓合點が參りませぬ。

左門　こりや小兒、そちは父と參りしか。

ト言へども千代松默つて居る故、庄屋心配なし。

庄屋　これ坊や、お前はお父さんと來たのか。

千代　あい、父さまと香取樣へ、お參りに來た歸りぢやわいな。

庄屋　へい〳〵、此通りにござりまする。

　　ト ばた〳〵になり、花道より半纏の侍走り出來り、

侍　はツ申上げます、只今是なる小兒の父、悴が御供先を切りましたるを承り、供頭の控所へ參り、ひたすら詫をいたしまするが、如何計らひませうな。

左門　なに、小兒の父が參つた。こりや道之進、同道せいと申付けい。

道之　はツ。（ト侍に向ひ）して其者の、面ざしはな。

侍　鼻筋通り色白にして、中背なる方にござりまする。

道之　むゝ、それぞ正しく彼ならん、直樣是へ召連れられよ。

侍　はツ。（ト引返してはひる。九郎兵衛思入あつて）

九郎　無禮の小兒が一命を絕たんといたした其父が、直樣是にて御目見得とは、御慈悲深き思召し、實に恐れ入りましてござりまする。

　　ト苦々しきこなし、誂への合方になり、花道より侍先に立ち、すつと跡より百姓忠三郎やつし裝、脚袢竊草履にて附添ひ出來り、直舞臺へ來り、下手へ平伏する。

侍　仰せに任せ、農民忠三郎、召連れましてござりまする。

千代　や、父様か。

　　ト千代松、忠三郎に縋る。忠三郎是を制しながら、傍へ住はせる。道之進思入あつて、

道之　忠三郎殿、絶えて久しき對面でござるな。

　　ト是にて忠三郎頭をあげ、

忠三　我子の愛に溺れまして、御上の御前も憚りませず、仰せに任せ罷り出、荒川樣に計らずも拜顏を得まするは、面目次第もござりませぬ。

左門　又左衞門が忰忠三郎とやら、苦しうない、近う。

忠三　はッ。

左門　さ近う〳〵。

忠三　はッ。(トやはり平伏する。)

左市　上のお詞、お進みなされい。

忠三　はッ、眞平御免下さりませ。

　　ト合方きつばりとなり、忠三郎千代松の手を引き、少し前へ進み出で、

左門　忰の無禮が御縁となり、計らざる御目見得、恐入りましてござりまする。父又左衛門が在所を道之進再度尋ねし由、如何いたしてその方は、當國に來りしか。して父も一つに住ひ居るか。

忠三　お詞に隨ひ申上げまするが、先殿樣へお暇願ひ、先祖が出でし舊地ゆゑ、親子三人九州路へ赴きましたる其砌、肥前唐津におきまして、又左衛門病死なし、餘儀なく京地へ戻りしところ、又候母が病氣となり、其看護さへろく〳〵に行屆かざる混雜に、御返事さへも出しませず、打過ぎましたる其内に、舊朋友の手引にて仕官の口も得ましたれど、さする時は一人の、母の病苦も助け難く、いつそ氣安く暮さんと、再仕官の望みもなく當地へ參り十年此方、樂に浮世を送りまするが、下賤に落ちしを恥ぢまして、荒川氏へも訪れませず、今更お詫の致しやうもござりませぬ。

道之　して是なる小兒はそこ許の、御實子でござるかな。

忠三　老母が看護の手助けに、七年跡妻を迎へ、是とも二人の子供を儲け、今は農家の住居をなし、誰知るものもござりませぬ。

トよろしくこなし、道之進思入あつて、

道之　家に勝れし御身が武術を、農夫となつて捨てられしは、實に殘念至極でござるな。

忠三　小鳥を得まするその外は、弓矢手に取る事もなく、槍長刀も鋤鍬と、替る浮世の農夫の世渡り、とんと武術を忘却仕りました。

ト額を押へ面目なきこなし、九郎兵衞忠三郎を見下し、

九郎　先殿樣の御指南番たる、又左衞門殿が子息とあれば、弓馬槍劍柔術まで、定めて勝れてござらうが、見るから形も小兵にて、さのみな業とも思はれず。

軍八　まして十年此方は、鋤鍬の外持たぬとあれば、弓矢は案山子の鳥脅しか。

伴作　矢羽根は鳴子の綱につけ、風にゆられてふは／＼と、身も輕々しき水吞百姓。

専藏　以前の槍に引替へて、藁でつくねた長刀草履、履いた姿の哀れさは。

運平　山倉村の鮭ではないが、厄病除けの御守で、追拂はれる今の身の上。

九郎　武術も大概知れてござる。

皆々　はゝゝゝゝ。（ト嘲けるを。）

左市　いや、御前でござる。お控へなされ、今は下賤の身の上でも、以前は當家の御指南番、又左衞門が御子息なるぞ。

與市　能ある鷹の例もあり、うかつに粗言は申されぬ。

富藏　ましてや上が御直々に、お目通りを許されし、申さば以前の御家來筋。
三吉　さすれば一統舊友なれば、敬ひこそすれ粗忽はならず。
竹七　最前といひ只今の仰せ、
與市　ちとお役柄には、
皆々　相違致さう。
九郎　いや、假令詞が過ぎようとも、高の知れたる今は農民、何程の事があらう。
　　ト是にて左門正道之進立腹のこなしあつて、
左門　こりや九郎兵衛、
九郎　はツ。
左門　今日遊獵の催しにて、此廣野迄出張せしが、計らず是にて忠三郎に、面會せしは幸ひのゑ、その方始め家臣のもの、忠三郎を相手となし、劍術柔術の試合をなし、その勝敗を見度う思ふが、どうぢやな。
九郎　免許皆傳の家柄なる曾根の子息がなれの果、お慰みにもなりますまいが、御所望とござりますなら、立會ひまするでござりませう。

左門　忠三郎もいなやはあるまいな。

忠三　どういたしまして、私風情が、以前御當家の勤仕中なれば、願ふ所にござりますれど、只今にては農夫の私、所詮及びもないことにござりまする。

左門　いや予も武藝は好みの道。遊獵よりも試合が所望ぢや、卑下致さずと立合ひくりやれ。

道之　よし又敗をとらるゝとも、今は恥辱にござらぬ身分、辭退致さずお立合ひなされ。

忠三　折角のお詞故、左樣なれば何れもと、立合は致しまするが、十年振りの武術ゆゑ、恥辱は御容赦下さりませ。

九郎　然し此場に、竹刀とても。

庄屋　いえ、それは當節劍術流行に、村中持つて居りますから、直取つて參りまする。

九郎　然らば是へ、取寄せてくりやれ。

庄屋　へい〳〵、畏りました。（ト下手へはひる。）

左門　劍術の前方、柔術の手並を見せい。

忠三　はッ。

左門　それ、誰ぞ掛れ。

諸士
皆々　はあ――　ト諸士前へ出で、ヤ聲をかけて忠三郎の片腕をとる、忠三郎思入あつて、片手にて千代松を下手へ寄せながら、

忠三　御免。　トちよつと立廻つて見事に投げる。此時敵役四人一時に、ヤツと前後より組附く、是にて忠三郎四人を相手に柔術の立廻りあつて、皆々を投げ、ずつと下手に下り平伏する。

左門　見事ぢや。左市郎、立合ひいたせ。

左市　はツ。（ト爰へ庄屋竹刀を五六本持ち出來り）

庄屋　御入用なれば、まだ幾らもござりまする。　ト出す。侍此内を二本出し、眞中へ直す。左市郎支度をなし、双方眞中へ出で、よろしく見合ふ。是にて白囃子になり、兩人烈しき立廻りあつて、トヾ双方へ別れ、

左市　御手の內、恐れ入りましてござりまする。（ト控へる、皆々感心せし思入。）

九郎　日頃美男子と女中方に、噂さの高き小山氏、遊藝などゝ事替り、敗を取られし見にくさ、ても苦苦しきことでござる。（トよろしく思入。）

左門　此度は九郎兵衞、立合ひいたせ。

九郎　はッ、畏つてござりまする。（ト敵役手傳ひ支度をなし、眞中へ出て、）只今御身が太刀筋を、慥しかと見受けしところ、正しく神影流と見極めしが、幸ひ身どもゝ神影流、隨分心を附けて打込まれよ。

忠三　それは猶更修業になり、願ふところにござりまする。（ト双方見合ひ、）

九郎　いざ。

忠三　いざ。

ト白囃子になり、立上り兩人別れきつと見得、是にて三絃入り白囃子になり、互に竹刀を差付け氣味合の思入、トヾ忠三郎打込まうとする時、九郎兵衞思入あつて、

九郎　暫く。（ト是にて忠三郎竹刀を引く。九郎兵衞苦痛のこなしにて、）あいたゝゝゝ。

忠三　如何なされましたな。

九郎　俄の腹痛、あいた、あいたゝゝゝ。

ト是にて敵役の諸士立ちかゝり介抱しながら、

敵役四人　御合藥でも御所持でござるかな。

九郎　別に持参はいたさぬ、あいたゝゝゝゝ。（ト胸を押へながら、左門正に向ひ）失禮御容赦下さりませう。

軍八　然し、幸ひなるは忠三郎殿とやら、折のよい牛窪氏が御腹痛にて、試合は此のまゝ。

作作　是が双方打込みなば、相手は名に負ふ常陸一國に、並ぶものなき遣ひ手ゆゑ、

專藏　竹刀の先が一寸でも、當るが最後そこ許は、氣絶なさんも計られず。

運平　牛窪氏の御難儀は、忠三郎殿のもつけの幸ひ、

軍八　然し此まゝ試合をなさねば、上のお慰みも薄きゆゑ、

敵役四人　拙者共が名代仕らう。

ト軍八竹刀を取つて打つてかゝる、忠三郎是を受止める。爰へ作作又打つてかゝる。是を見事に胴へ入れる。是にて專藏運平一時に打つてかゝる。ちよつと立廻つてきつと見得、大小入り誂への鳴物になり、忠三郎四人を相手に竹刀打ちの立廻り、トゞ皆々を打伏せる。九郎兵衞是を見遣り口惜しきこなし、

道之　以前に替らぬ適れ御手練、感心仕ッてござる。

忠三　上の御前に失禮いたし、眞平御免下さりませ。（ト皆々に向ひ）何れも樣、何卒御容赦下さりませ

う。（ト詫びる。）

左門　たゞ口惜しきは目途といたした九郎兵衛と、勝負せねば殘りをしう存ずるゆゑ、明後日邸內に於て見事試合を致して見せやれ。

忠三　有難い仰せながら、牛窪樣には忠三郎、及びもない儀にござりまする。

左市　いや其仰せ御尤もながら、御遊獵より御意に入りし今日不意の此立合、上御直のお詞なれば、明後日出勤なさるがよい。

道之　九郎兵衛殿、腹痛とあれば此場を御免蒙りて、服藥の手當をなされい。

九郎　仰せに隨ひ暫時の內、あいたゝゝゝ、休息お聞捨て下さりませ。

道之　各、介抱致されよ。

敵役四人　はッ。（ト九郎兵衛苦痛を怺へ立上り、やう〳〵に下手へ來り、）

九郎　かくの次第で今日は、此場は此まゝ別るゝが、何れ明後日は御庭前で、立合のいたし遣はす、腕を磨いてござらつしやれ。

忠三　はッ、有難き仕合せに存じまする。（ト辭儀をする。九郎兵衛上手へ向ひ、）

九郎　失禮の段、平に御容赦下さりませ。あいたゝゝゝ。

ト下に居るを、諸士四人兩手を取り、介抱する。

是は各お世話でござる。

ト誂への合方になり、四人九郎兵衛の介抱をしながら下手へはひる。道之進思入あつて、

道之　各方は左右へ別れ、暫く見張りいたされよ。

敵役四人　はツ、畏つてござりまする。

ト立役の諸士、半纒の侍皆々上下へ別れはひる。

忠三　私も、御遠慮いたすでござりまする。（ト立上るを、）

道之　いや、其許には密々に、お談じ申す一儀あれば、暫らくお控へ下されい。

忠三　して私へお談じとは。（ト合方になり、）

道之　お談じの筋餘の儀にござらぬ。唯今牛窪九郎兵衛が、御身と立合致せし時、自ら神影流と申せしが、あれは同流と思はるゝか。

忠三　表に神影流の構へはなせど、私が鑑定にては、未だ未熟と存じまする。

道之　いや遉は御鑑定、身共と符合いたしたり。（ト左門正に向ひ、）是にて思ひ當りましたは、先頃紛失いたしたる御當家傳來、神影流免許の一卷、正しく牛窪九郎兵衛が、仕業に相違ござりませぬ。

左門　よくぞ心を附けたるぞ。それと申すも一家中に、壯年の者多く、彼が武術に及ばざる故、自然と慢心増長なし、權威にほこる憎き奴。明後日忠三郎に打込まるゝその時は、鼻高々としてもゐられまい。

左市　必ずともに忠三郎殿、御勝利あつて御當家へ、再び仕官いたされよ。

忠三　仕官などゝは思ひも寄らず、最早生涯農家にて、世を送ります所存でござる。

道之　いやそれは御身に似合はぬ詞、下賤で果つるは先祖へ對し、人たる道に恥づる所、再び武士に立ち歸り、名を後世に殘されよ。

左門　父が因みに仕官なし、共々忠節盡しくれなば、つひには佞人立ち去つて、我も安堵の思ひをなさん。

左市　兎にも角にも明夕刻、荒川氏のお宅へ越され、何かは共々打合さん。

忠三　忝なき御仰せ、左様なればお宅迄、上りまするでござります。

ト時の鐘鳴る。

道之　最早申の刻にござりますれば、御遊獵は是ぎりに、御歸館あつて然るべう存じまする。

左門　忠三郎といふよい獲物、是に上越す悦びなし、後日の試合を相待ちをるぞ。

忠三　恐れ入りましてござりまする。

ト此内千代松下手にて、立木の根へ寄りかゝり居睡りなして居る。左市郎心付き、

佐市　おゝ、よい心持に睡つてをらるゝな。（ト忠三郎千代松を起し）

忠三　ようお殿様に、御禮を申せ。

千代　有難うござりまする。（ト忠三郎辭儀をさせ）

忠三　左様なれば、御前様。

左門　おゝ、待つて居るぞ。

忠三　はゝあ。

ト左門正始め荒川道之進に挨拶なし、千代松の手を引き花道へ行く。

新之　あゝこれ、忠三郎殿。

忠三　はい。（ト花道下に居る。道之進下手へ行き）

道之　流儀の事は密々に。（ト忠三郎へ氣味のこなし、忠三郎呑込む。道之進氣を變へ）御立ち。

ト上下へ揚幕にて、

大勢　はゝあ。（ト辭する。是にて千代松びつくりなし）

千代　あれ、怖いわいなア。（ト忠三郎に縋る。）

道之　おゝ、（ト千代を見遣りうなづくを、道具替りの知せ。）利口ものだわい。

　ト千代松を愛す。左門正立上る、左市郎辭儀をなし、忠三郎千代松を連れ、花道へはいる、太鼓入り行列三重にて、此道具廻る。

（常陸潮來玉屋の場）——本舞臺三間常足の二重、本庇前側二階の張物、二重の蹴込、一面の式臺、正面玉屋と記せし暖簾の出這入、此上神棚、上手一間の戸棚、此前帳場格子、朱塗りの行燈、下手板羽目、遊女の名札を張りし黑塗りの重ね簞笥、式臺に下足札、平舞臺の上手板塀の張物にて見切り、下手へ長床几一脚出し、總て潮來宿玉屋の體。爰に玉屋の若い者化七着流し若い者にて、神棚に燈明を上げ、上り端へ切火を打ちかけて居る。二重においわ、およね仕掛裝、女郎にて立ちかゝり、平舞臺下手に辻占賣半太、吉原冠り、着附尻端折り、大黑煎餅の籠を首にかけ、提灯を持ち居る。此模樣潮來の囃子にて道具留る。

半太　江戶名物、蛤の辻占入りでござい。

化七　ちう〳〵〳〵。

　と鼠鳴をしながら、あたりへ頻りと切火を打つ。

いね よね ちよいと、辻占やどん。
半太 へい、御用でございますか。
いね 心意氣のいゝ、がら／＼のいゝのを、二つとつて下さんせ。
半太 へい／＼。（ト蛤のがら／＼を二つ出し）
いね ちよつと化七どん、縁起に清めて下さんせ。
化七 今夜はどなたがお出でなさるか、御信心が肝腎だ。（ト言ひながら切火を打ち、兩人蛤を明ける。）
いね おや／＼、鉛細工の鋤と鍬が出たわいな。
化七 鋤と鍬なら、新内の田吾作さんか、山際の久根八さんかな。
ト此内おいね辻占を開き讀む、
いね 掘出しものだよ。
化七 成程鋤鍬で掘出しものは、何が付いて居ります。（トおよね蛤をあけ）
よね おや鍋釜と竈が出たわいな。
半太 それは種がいゝから、心意氣もよろしうございませう。
化七 いゝ所ではない。お前さん方が年が明けると、こんな立派な臺所道具で、一生樂に暮すといふ、

辻占が前表でござりませう。

半太　中がよかつたら辻占屋に、御褒美を願ひます。

いね　捻出しもの〻跡だから、又よかつたら買つて上げるが、

よね　悪いとあしたの晩から、買はぬわいな。

半太　そこが辻占の吉凶判斷、明ける前の御信心が肝腎、鹿島の要石で重い輕いは神の告、先づ當國で筑波山、隣國下總成田山、上總で芝山仁王尊、當れば日光街道瘦馬に一駄、筋は廻し直してござります。

化七　え〻やかましい小僧だ、是でお里が顯はれたの。

半太　是でも江戸を喰詰めて、此常陸へ流れて來た、實はどつこい〳〵屋の半太といひます。

いね　面白い辻占屋どん、もつと何ぞやつてお聞かせ。

半太　さう長いと、商ひを仕損ひます。

化七　先鍋釜竈の辻占を、私が讀上げて見ませう。

半太　けんけんこうり〳〵。（ト化七開き、）

化七　親分の引越としてあります。成程鍋釜竈か。

いね　おやまあ、好かない。
いね
よね　辻占屋どんだよ――。（ト兩人ついと奥へはひる。）
化七　あゝもし〳〵、好いても好かなくつても、錢をやつておくんなせえ。
半太　もし、掛り合ひだ、立替へておくんなせえ。
化七　悪い風た。（ト錢を出し。）女郎衆の立替へものは、つひに返したためしがねえ。（ト半太に渡す、）今夜はふりの客でも引込み、此埋草をしにやあならねえ。
半太　江戸名代、蛤の辻占入り。
トやはり潮來の囃子になり、半太呼びながら上手へはひる。化七は板羽目を叩き、鼠鳴きして客を招くこなし、花道より以前の牛窪九郎兵衛、羽織着流しにて、跡より侍四人附添出來り、
九郎　何と各見さつせえ、今日御供の小鳥狩より、羽根を延ばした玉屋の見世先き、
軍八　比翼連理の玉の床、獲物は鶴にも勝つたる。
作作　飾る錦の相方は、錦鶏鳥の打掛に、差す鳥影を待ち兼ねて、
專藏　いゝ鳥などゝ囃すとも、こつちもはやぶさ一寸も、引けは取らざる腕前に、
運平　手管のもちにくッつかぬ、氣合ひに女郎が惚込んで、

九郎　文と使が續々と、日毎に參るに當惑いたすが、網を張つたるおの罠へ知りつゝこれより、

五人　參ると致さう。

トやはり右の合方にて、皆々舞臺へ來る。化七出迎ひ床几を出し、

化七　これは旦那樣方、いらつしやいまし。

九郎　夕刻から非番ぢやから、晝の疲れの憂を晴らしに、當驛へぞめきに參つた。

軍八　一服呑んで宿境まで、一廻り廻りませうかな。

化七　いえ、それはなりませぬ。晝間からお玉さんが、待ち人をかけてお待ち兼ねでございます。

九郎　待たれる株は持たないが、當家に於ては板頭の、お玉の所へこれまで參るに、つひに一度帶紐解き、肌を穢したことのないは、實に話すも面目ない。

伴作　是は緣者の證據とやらで、ちと受取りにくい儀でござる。

九郎　いやそれと申すもお玉めは、同勤の眞三郎と深き仲と申すこと、尤も小山が若黨なる、與惣次が妹ゆゑ、以前小間遣ひに居りし頃、互ひに思ひ思はるゝ仲といふこと聞及んだが、それはそれ、今は賣物、始終は身共が手に入れねば、思ひ立ちたる望みが果されぬ。

伴作　それは仰せまでもなく、金さへ積めば自由の身の上、共々力を添へるでござる。

ト爰へ暖簾口よりおいし、更けたる鬘、着流し二階廻しのこしらへにて出來り。

いし　表で話しをなさらないで、早くお上りなさいまし。

九郎　いや今宵は一廻りぞめいて廻る。

いし　そんなことをおつしやらずと、お連樣も皆お馴染、

化七　ぢらさないでお上り下さりませ。

運平　實の所は身共等も、早く當家の二階へ參り、馴染に顏を見せたうござれば。

軍八　直にお上り下さらば、此上の悅びなし。

九郎　それ程までに仰せあるなら、御一緒に上らうかな。

作作　左樣仰せ下さらば、今宵は女郎の踊りより、

傳八　身共等四人で隱し藝の、

運平　潮來出島を、

四人　御覽に入れん。

化七　それは樂しみでございます。

九郎　然らば各。

四人　さ、御同作仕らう。

化七　お上んなさるよ。

トやはり右の鳴物にておいし案内して、皆々わや〳〵と暖簾口へはひる。化七下駄へ札を結び、帳場の内にて帳場を附ける。此鳴物にて花道より小山眞三郎、羽織着流し、頭巾を冠り出來り、少し跡より信三若衆髷、袴一本差し、若黨にて手丸を袖にて隠し窺ひながら出來る。

信三　もし、若旦那樣々々。

眞三　わしを呼ぶのは誰ぢや。

信三　へい、信三にござりまする。（ト手丸を出す。）

眞三　え。

信三　どちらへお出でなされますな。

眞三　さあ、その行先は。

トぎつくり思入あつて、つか〳〵と舞臺へ來るを、信三跡を附けて來り、袖を捉へ、

信三　默つて是へお出でなさるは、お遊びでござりますな。

眞三　實はさうぢや。

信三　いえ、そりやなりませぬ。私はお袋様から言附かつて、見え隠れにお跡へ附いて参りました。

眞三　さういふことなら猶更ぢや、今宵は一緒に遊んで行きやれ。

信三　何でそんなことが出來ますものか。

ト腹の立つ思入、宿場騒ぎになり、暖簾口よりお玉仕掛裝、女郎のこしらへ、以前のおいしと共に出來り、

お玉　若旦那、何をしておいでなされます。

化七　おゝ、よく似たお聲と存じましたら、

いし　さあ、早くお上りなさいましよ。

眞三　さ、上らうとは存じてをるが。

信三　わたくしが上らせませぬ。

ト眞三郎の袖を押へゐる。お玉舞臺へ下り、

お玉　何の御用か知りませぬが、急ぎでないならお前も一緒に。

化七
いし　お上りなすつたがようござりませう。

信三　なに、いゝことがあるものか。

眞三　そんならどうでも止めるのか。

信三　お袋樣のお詞ゆゑ。

眞三　えゝ、（ト袖を拂ふを道具替りの知せ、）爰は色里ぢやわえ。

ト此模樣、宿場騷ぎにて道具廻る。

（玉屋二階廣間の場）――本舞臺一面の平舞臺、上手一間床の間、次に三尺地袋、違ひ棚、この下一面二階櫺子の裏、下手板羽目、廊下の出這入り、いつもの所階子の上り口、總て、玉屋二階廣間の體。爰に以前の牛窪九郎兵衞上手に住ひ、諸士四人頻りと踊つてゐる。側におこん內藝者にて三絃をひき、以前のおいね、およねの女郎、仕掛裝にて火鉢の傍に住ひ、眞中に臺の物、燭臺を置き、此模樣潮來出島にて道具留る。と諸士踊りあつて納まる。

こん　ヨウ／＼あなた方お四人の、潮來出島は實に恐入りました。

いね　いつでも踊りが初まると、外のお客へ行くのを忘れ、

よね　爰へ落着いてしまひますわいな。

九郎　おぬし達は落着いてゐるが、お玉は如何いたしたか、早く爰へ呼んでくれ。

こん　お玉さんは今延方の百姓衆のお客で、それで歸る所でござりますから、直にお出でござりませう。

九郎　いや惣體身共の座敷へは、顏を出さぬ癖だから、內藝者の言譯は當にならぬ。

軍八四人　これ、二階廻しはいかゞいたした。お玉を呼べ〳〵。（トわや〳〵と手を叩く。）

こん　あれさ、何ぼ隣り國に印幡の沼や、利根川があるというて、大きな聲ぢやァありませんか。

軍八四人　來ねえから大きな聲を出すのだ。

ト手を叩く、宿場騷ぎになり、階子の口より以前のお玉出來り、直九郎兵衞の傍へ行き、

お玉　そんなに大きな聲をせずと、靜かにしてもいゝぢやあござんせぬか。

ト是にて九郎兵衞氣を替へ、

九郎　身共は大きな聲はいたさぬ。只少々手を打つたばかりだ。

お玉　生憎今夜はお客が落合ひ、今延方へ歸るお客と富田へ歸る連初會と、一緒になつたところから、見世まで送つていつてゐる內、さう手をお叩きなさんすと、何だか廻りが惡いやうで、人聞が惡うござんす。

こん　それ御覽なさい。今夜お客も落合つたことは、今さう申したところでござんす。

軍八　幾らそちが言譯しても、何だか一人牛窪氏が、振られたやうでお氣の毒ゆゑ、

諸士四人　それで共々呼んだのぢや。

お玉　假令誰がなんと言はうと、牛窪さんの程のいゝのは、今外のお客に聞きましたよ。

諸士四人　ヨウ〳〵色男さま〳〵。

九郎　なに、外の客に聞いたとは、そりや何を。

お玉　今日殿樣の御供にて、御遊獵のその御場所で、餘所の百姓衆と試合をなさつたと申すこと。

九郎　え。

お玉　其時のお裝といひ、殿樣の御前におき、お立合の烈しいのと、お手の内の達した所は見物事たつたと聞きましたわいな。

ト當付けて言ふ。九郎兵衞ぎつくり思入あつて、

九郎　はて、惡い所を。

お玉　え。

九郎　いやなに、惡い事でないからいゝが、盛り場などゝ申すところは、直左樣に知れるものか。

ト腕組をなし、ちつと思入。

こん　その程のよい所で、一つお上りなさいまし。

ト九郎兵衞に猪口をさす。騷ぎ唄になり、二階の口より化七出來り、

化七　只今御家來の彌三平樣が、お出でござります。

九郎　おゝ苦しうない、是へ呼んでくれ。

化七　へい〳〵畏りました。

ト化七はひる。此内お玉ちよつと目くばせする。

いね　お玉さん、六番の一座がもう歸る時分でござんす。

お玉　おゝ、そんならちよつと顏出しして。

ト立ちかゝるを九郎兵衛留め、

九郎　これ、今來たばかりでもう行くのか。

お玉　それでもちよつと、歸るお客を。

九郎　まあいゝから、ちよつと爰に居やれ。

お玉　それでもちよつとでござんすから。

九郎　えゝ、やることはならぬ〳〵。

お玉　ほんに好かない、いえ、少しの内でも困るねえ。

トぢつと下に居る。やはり右の唄にて階子の口より、化七先に牛窪の下部彌三平、紺看板一本差し、

中間のこしらへ、少し酒に醉ひたるこなしにて出來り、

彌三　旦那樣、彌三平でござります。

九郎　おゝ、よく參つた。

諸士
四人　さゝ、是へ來やれ〳〵。

彌三　眞平御免なすつて下さりませ。（ト下手へ住ひ。）

軍八　まあ一つ呑むがよい。（ト猪口をさす。）

彌三　早速頂戴いたします。

化七　御家來樣のお相方は、如何いたしませう。

九郎　彌三平は初會だから、よいのを見立て出して遣はせ。

化七　それは有難うござります。直お引附けをいたします。（ト立ちかゝるを、）

彌三　おい〳〵、まあ待つてくんねえ。

化七　へい。（ト下に居る。）

彌三　女郎はおれが勝手に買ふから、まあ構はずに置いてくんねえ。

ト皆々不審の思入あつて、

軍八　して何ぞ外に、御用でもあつて參つたか。

彌三　へい、ちつと御用の筋で參りました。

九郎　然らば、歸宅いたさずばなるまい。

彌三　へい旦那はこゝにお出でなすつても、宜しいのでございます。

九郎　して用事とは、如何なる譯ぢや。

彌三　その御用と申しますのは、實は彌三平の御用でございます。

伴作　何を申す、かゝる遊興の場所にて、左樣な洒落は申さぬものだ。

彌三　いえ、洒落ではございませぬ。眞劍でございます。

九郎　して、その用事は。

彌三　實は御無心に參りました。

九郎　何だと。（ト彌三平諸士へ思入あつて）

彌三　定めし度々うるさい奴と、思召しもございませうが、それも實は困るからお願ひ申すのでござります。

伴作　何をかどにその方は、幾度となく、無心々々と、よく主人に言はれたものだ。

彌三　別に科もござりませぬが、お借り申す其譯は、（ト煙草入の間より手紙を出し、）是でござりまする。

ト是にて九郎兵衛びつくりなし、

九郎　こりや〳〵何をそれへ出すのだ。他見もあるぞ。懐中してをらぬかい。

ト彌三平へ目くばせにてしまはせる。お玉是に心附き思入あつて、

お玉　何のお文か知りませぬが、こゝで隠せとおつしやるからは、大方色のお文であらう。もし彌三平さん、ちよつと見せて下さんせ。

九郎　あこれ〳〵、そんな事は大丈夫だ、爰構はずと今歸ると申した、外の客へ行つてくりやれ。

お玉　いえ文を隠さうそのために、其のてれかくしは喰ひませぬ。

いね　あれさ、お玉さんに見せない内は、

よね　こゝは行くことぢや、

皆々　ござんせぬ。

化七　こりやお相方のちん〳〵は、生業柄の當り前、何だか種をおつしやらずば、事濟みにはなりますまい。

こん　それとも何ぞお奢りなすつて、内濟がようござんせう。

九郎　それは承知ぢや。これ各々、彼等を先へお連れなされ、最早引けといたすがよい。
軍八　なるほど、是は望む所。
伴作　牛窪氏は御用もあれば。
専蔵　さ、一緒に先へ、
四人　引けといたさう。
お玉　それでも、あれを見ないうちは。
軍八　ハテ、よいから先へ、
四人　まゐれといふに。
お玉　そんならきつと、奢らないと、
いね　みんなして、
皆々　いぢめますよ。
軍八　あゝいぢめられて、
諸士
四人　貰ひたいな。（トお玉立上り）
お玉　どうやら様子の、

彌三
九郎　え。
お玉　さあ皆さん、行かうわいな。

ト宿場騒ぎになり、諸士四人お玉をせり立てながら、女郎皆々は下手廊下の口、化七は階子の口へはひる。九郎兵衛ほつと思入あつて、階子の口を窺ひ、誰もゐぬといふ思入あつて、

九郎　これ大勢の人の居る所で、なぜつか／＼と物を申す。（ト合方になり）
彌三　言ひたいことはござりませぬが、大橋様を初めとして、やれ無心々々と滿座の中で恥をかゝせる物の言ひ様、ついこつちも浮々と、この手紙まで出しました。
九郎　今こゝで女郎も買はせ、身と一緒に遊ばせようと致せしところを斷つたは。
彌三　其御馳走より旦那さま、現金でお貸しなすつて下さりませ。
九郎　そりや貸してやるまいものでもないが、もうたゞは貸されぬ。
彌三　へえ、たゞ貸されぬとおつしやいますは。
九郎　只今持參の一通を、此方へ求め度いのだ。
彌三　いや、こいつあちつと賣りにくい。
九郎　なぜ又、それが賣りにくいな。（ト誂への合方になり）

彌三　寒の師走も御仕着の紺看板一點で、僅か許りの給金貰ひ、片足もちやけてどぶろくが關の山の徒中間、生涯旨え酒も呑めず、死んだがましだと思つたところへ、わしを見掛けて頼みなすつた信田の屋敷の藏破り。（ト大きく言ふ。）

九郎　これ。（トあたりへ思入、彌三平口を押へ。）

彌三　つい、大きな聲になつてならねえ。首尾よく盗んだ神影流の、祕傳を記した御家の一卷、其故實とかこきうとかを、覺えなすつた所から、今御當家の御指南番、もつちやうされる其許が、盗んでくれと書きなすつた、わしを名宛の頼みの一通。（トちよつと出して見せ。）さ、こいつを賣つちやあ此後に、借りる手蔓がなくなります。

ト　ぢう／＼しきこなし、九郎兵衞腹の立つ思入あつて氣を替へ、

九郎　其の一通を證據にして、是れまで身共に借りたことは、幾度なるか數知れず、これ、もう賣つてもよいではないか。

彌三　こいつを賣ればもと／＼の、又主家來となる體、さうしたならば指をさすことも出來ねえ草履取り。まあ、賣るのはよしにいたしませう。

九郎　賣れずば身共も買ふまいが、その一通をおとりにしてあまり惡事が募る時は、一部始終を訴へ出

て、そちに罪科を着せねばならぬが、さうならぬ前心付き、手紙は吾へ戻した上、改心したからよいではないか。

彌三　その御異見は眞もつて有難うはござりますが、改心すればまことの人、惡事も御用に立ちますまい。

九郎　何と申す。

彌三　神影流の達人と、御前を始め家中の眼をくらます旦那は手品遣ひ、玉子が忽ち鷄と替つて一時に羽根を伸ばすのも、極意を記した祕傳の一卷、その種廻しの彌三平故、蒸籠から出す達磨同樣、おうるさからうが十か十五、きれいに出して下さりませ。斯う申すのも外ではねえ、不思議な手練と人が言ふのも、生れついてのお喋りに、つい口上を言ひ過ぎて、わつちが種を割つたらば、それこそ直に首切の首と胴との放れ業、つひにやあ臺へ乘りませう、先づ今晩はこれきりと惡事のハネが附かうとも、そこは眞打と出方だけ、訴人の功に當物の和歌の神の歌ぢやあねえが、島隱れ行く島行きも御慈悲があつて輕けりやあ、千枚通しの入墨と高をくゝつてをりますから、危ねえ劍の刄渡りもさのみ恐れはいたしませぬ、あなたにヤンヤとやらせるもやらせねえのも胸一つ、四文あたまと安くせず、割をよくしてお遣ひなさるがお德用かと存じます。長く云ふのは御退屈、

ちよつとこゝらでお中入、お茶でもいつぺえ呑みませう。

ト ずつと立つて下手へ行きかける、此内九郎兵衛紙入より金を出し紙に包み、

九郎　さ、望みの金子を貸してやるほどに、穏便に受取りやれ。

彌三　それは有難うござりまする。（ト件の包を受取り、開き見やり、）たつた五兩でござりますか。

九郎　五兩なれば言分あるまい。

彌三　五兩ばかりの端た金ぢやあお返し申しませう。とさあ言ひてえ所だが、そこは主人と家來のこと默つてお貰ひ申しますが、又直きにお貸しなすつて下さい。

九郎　塵積つて山となる。是れまでそちに渡せし金子は、なか／＼多分の事なるぞ。

彌三　それは死ぬまで旦那には、御厄介になる積りだから、其時迄〆め上げたら、隨分高になりませうよ。

九郎　はて困つたやつに。

彌三　え。

九郎　いやなに、困るから參つたらうが、滿座の中では氣を付けてくりやれ。

彌三　そりやあ大丈夫でござります。

軍八　それ承知なら身と一緒に寢所で一ぱい呑みなはすがよい。
彌三　御馳走酒は旨かねえから、又明日の朝お目にかゝりませう。
九郎　いや、贅澤極つた奴だ。
彌三　こゝらが折介の附目といふのさ。
　　ト件の金を懷中する、九郎兵衞手を叩く。おいし下手より出て、
いし　大層しんねこでございましたが、女郎衆はゐないのでございますか。
軍八　いや、勝手について外へやつたが、もう一統引けたかな。
いし　疾うにお引けになりましたから、あなたもあちらへいらつしやいませ。
四人　いかにも寢所へ案内してくりやれ。
いし　はい、畏りました。(ト階子の口へ行き、)中どん、奥二階の十疊へ御一緒に床を入れておくれ。さあ、かうお出でなさいまし。
　　ト やはり宿場騷ぎにて、おいし先に九郎兵衞四人下手へはひる。彌三平殘り、
彌三　おい、誰か來ねえか、お客樣だ〳〵。
　　ト手を叩く、下より化七出來り、

化七　お前さんお一人でござりますか。

彌三　肴を誂へて、酒をどん／＼持つて來い。

化七　いえ御酒もお肴も、旦那方の寐所に澤山廻つてをりますから、をれへ行つてお上りなされませ。

彌三　供だと思つて見くびるな。金はこの通り前金だ。（ト以前の五兩を前へ出し）さ、これで手前の祝儀も取つて、女郎をおれに出してくれ。

化七　へゝへゝゝゝ、前金とは恐入りましてござります。左樣なら是でよいやうに計らひませうか。

ト金を改める。

彌三　錢を見たら急に胡麻を擦るが、その代り女郎に望みがあるぜ。

化七　そりやあお名ざしのお客は通例のこと、誰でもお望みなされませ。

彌三　いゝかえ。

化七　よろしうござりますとも、大よしでござります。

彌三　おれが望みは、お職のお玉だ。

化七　えゝ。

彌三　何をびつくりしやあがるのだ。

化七　お玉さんはあなたの旦那へ、馴染でお出でなさいますから、御一緒ではお斷り申します。
彌三　それぢやあなぜ、望通り、たつた今出すとぬかした。
化七　それでも一つ女郎衆を、一座廻しは出來ません。
彌三　出來てもも出來なくても、誰でも買はせると云つたぢやあねえか。
化七　それでは御無理でござります。
彌三　無理ならどうとも勝手にしろ。

ト ふんぞり返り、大の字形になる。爰へ下手よりおいし出來り、

いし　もし彌三平さん、何を云つてるなさんす。
化七　旦那の相方のお玉さんを、出せと云つて此通り腹を立てゝゐなさるのだ。
いし　そりやあお前が無理といふもの、一座廻しの女郎衆は、何でお前に出されるものかね。

ト 是にて彌三平起上り、

彌三　出されねえのは知れてゐるのに、錢を前錢に取りやあがつて、此野郎が出すと云つたのだ。

ト 化七を足蹴にする。

化七　そりやあ出すと云つたとて、一座を出すと言やあしない。

彌三　手前達では判らねえ、此金を持つて主人に掛合ふ。さあ、主人の居間へ一緒に來い。
ト金を懷へ入れ立ち上るを、
いし　お客をぢかにお部屋へやると、二階廻しの恥になります。はい、やることは私がなりませぬ。
彌三　ならざあお玉を買はせるか。
いし　一座廻しは出來ぬといふに。
彌三　えゝ、ならざあ止しやあがれ。（トおいしを毆る。）
いし　あいたゝゝ。
ト太鼓入り騷ぎ唄になり、彌三平行かうとするを、化七おいし捨臺詞にて止める。爰へ下手より若い者行燈を提げ出來り、此中へはひり、共に止めるを振拂ひ、爭ひながら四人階子の口へはひる。跡合方替つて、下手より以前の眞三郎出來り、下を窺ひ、
眞三　惡と仇名の中間彌三平、見付けられじと忍んでゐたが、晝の病ひに引替へて、牛窪殿もゐる樣子。どうか人目にかゝらぬやう、お玉に逢つてこの金子を、渡してやりたいものぢやな。
ト懷中へ思入、此前より下手へ信三窺ひ出て、
信三　若旦那樣、お玉にやるとおつしやります、御所持の金子は何れから、お持ちなすつたのでござり

ますな。

眞三　え。（ト信三を見遣り、）それでは先刻戻らなかつたか。

信三　戻りませぬもありやうは、あなたの樣子を探るため。さ、その金子の出どころを、どうぞお明し下さりませ。

眞三　さあ、是れは。

信三　まだ前髮の私ゆゑ、御異見などは申されませぬが、御所持の金もお家から、お斷りなしに御持參と、星をつけて參つた信三、女郎などにやる金子を、親御がお渡しなされまする筈はないと存じますから、こりやあ私がさせませぬ。

トきつと言ふ。これにて眞三郎ぢつと思入あつて、

眞三　實は母が佛檀の、下段に置きたる高野山の祠堂金の五十兩、お玉へ約束したるゆゑ、今更やらぬとわしの口から、斷る譯にも行かぬわえ。

ト此時下手にお玉立掛り居て、

お玉　いえ、そのお金は入りませぬ。

眞三　あゝ、お玉、なぜ金子がいらぬのぢや。（ト合方になり、）

お玉 思召しは有難いが、仕合せと外のお客に無心を言うたお金をば、今夜貰ひましたから、どうぞそれは元々へ、お納めなされて下さりませ。

眞三 わしがためを思うてくれる信三が詞を聞き、入らぬと申すは忝いが、言はゞ是は家來筋、其酬には及ばぬから、遠慮なく取つて置きやれ。

ト懐中より胴卷の金を出し、お玉の前へ置くを、

お玉 いえ決して遠慮ではござんせぬ。よしんばお金が間に合はずとも、何で是れが使はれませう。まだ勤めをせぬ前方、お袋樣には一方ならぬお世話になりし私ゆゑ、斯うしてお呼び申すのさへ道ならぬと思ふ位、ましてや入らぬお金ゆゑ、是はお返し申しまする。

ト押返す。

信三 それ程いらぬ金子なら、私が預つて、お家へ持つて歸りまする。

ト胴卷のまゝ信三受取る。此時階子の口へ、彌三平顏を出し窺ひ居る。

さ、若旦那、金子の御用が濟みましたら、御一緒に戻りませう。

お玉 ちつと外に話しもあれば、必ず長うは引止めませぬ、直に後からお歸し申せば、お金を持つてツイ一足、先へ歸つて下さんせ。

信三　金を返すこんたの心體、無理にはお連れ申されまい。そんならきつと御歸宅を。

眞三　そちが詞に免じても、今宵は戻らねばならぬわえ。

お玉　そんならお前は、道を氣をつけ、

信三　きつとお歸りを賴みましたぞ。

ト唄になり、信三金を受取り懷中する。彌三平は頷きはひる。信三暇乞をして階子の口へはひる。兩人ほつと思入あつて、

お玉　若旦那、わたしや詰らぬことを話し、お氣の毒でござんしたな。

眞三　あの堅藏には困つたわえ。（ト是にて外座の獨吟になり、）

ウタ〽便り待つ雁に暮れ行く秋の末、夜露にしめる袖に猶、思ひます穗の篠すゝき、

ト此内眞三郎思入あつて二階の口を窺ふ。お玉は燭臺を吹消し、以前の行燈をよき所へ持て來り、あたりへ思入あつて兩人よろしく住ひ、獨吟の合方。

これお玉、おとゝひの晩來た時に、此物前の移り替りに、金が入ると話した故、態々持つて參つたのを、いらぬと云うて受取らぬは、どうもわしには合點が行かぬが、全く金は出來たのか。

お玉　實はお金は出來ませぬが、あの世へ行くには入りませぬわいな。（ト泣く。）

眞三　何と言やる。（ト合方きつぱりとなり。）

お玉　まだあなたのお宅にて御奉公する時分から、互ひに思ひ思はるゝ仲とはなれど下賤の身の上、引續いての不仕合せに、苦界へ落ちし私をお目にかけて下さるのは、涙の出るほど嬉しけれど、聞けばあなたは御家老の荒川樣のお娘御がお許嫁と申すこと、それをわたしが此樣に、一日逢はねば手紙やら、使ひを上げてお呼び申すは、親御樣へ濟まぬわけ、まだそれのみか兄さんは、年來勤めし御主筋、とても始終が添ひ遂げねば、いつそのこと思ひ切り、死ぬる心でござりまする

眞三　それは惡い了簡ぢや、その許嫁の娘とて、いまだわしは篤心せぬを、親が無理にも添はさうと、既に近々婚約も取極めるというて居れど、肝心のわしが不承知、なんでそなたと緣切れて、妻を迎へてよいものか。

お玉　さ、それも並の女郎なら、そんならさうと承知はすれど、元は御主の若旦那、共々御異見申してもそのお許嫁と添はせねば、浮世の義理が濟みませぬ。

眞三　すりや、それ程に決心して。

お玉　あい、私の心は是れでござんすわいな。

〽風に揉まれし村雲に、晴れぬ心の薄曇り、

ト此文句の内お玉懐中より書置を出す、眞三郎行燈の下にて是を讀む、此時下手廊下の口へ小田の下部與惣次、着流し一本差し、中間のこしらへにて窺ひ居る、眞三郎は讀み終りびつくりなし、

眞三　すりやわしと添はれぬ事を苦に病みて、そなたは死ぬる覺悟なるか。

お玉　あの世へ行つて待ちますから、未來は必ず女夫ぢやと、思召して下さんせ。

眞三　いや、そちは思ひ切る氣でも、わしは思ひ切れぬわえ。

お玉　すりや、お嫁御が極まるとも。

眞三　一旦そなたを女房と、思ひ詰めたる上からは、何で心が替るものか。

お玉　それではどうでも、親御様へ。

眞三　不孝と知りつゝ思ひ切れぬ。

お玉　すりやそれ程までに。えゝ、お嬉しう存じまする。

〽流れの水の音さへも、微かになりぬ手枕に、

ト　お玉眞三郎に寄添ひ、よろしく思入、文句の止り、

與惣　その御了簡は、お惡うござりませう。

眞三　え、さういふは與惣次。

お玉　兄さん、どうして爰へ。
與惣　さ、若旦那のお迎ひ旁、今方爰へ來たところだ。（ト下手へ住ふ。兩人思入あつて）
眞三　そんなら今の話をば。
お玉　お前は聞いてゐなさんしたか。
與惣　委しくあれで聞きました。
兩人　え。（ト思入。）
與惣　これ妹、おぬしの胸も察してゐるが、まあ此兄の言ふことを、とつくりと聞いてくれ。（と誂への合方になり、）おれが親父は信田樣の御領分の小百姓、人の田畑へ雇はれて僅な賃に今日を、送る微な暮し故、おぬしもおれも幼年より小山樣へ奉公なし、足手を延ばしてお貰ひ申したその甲斐もなく親父が死に、それから續いてお袋が苦勞が増して長煩ひ、看病をする人手はなし、無據お暇願ひ、宿へ下げたがおぬしの不運、段々溜る借財の濟し方がなく親類の勸めに潮來へ勤め奉公、苦界へ沈む上からは、よい客ならば引留めておくのが女郎の手管とやら、道に缺けたるなりはひを兄が許してさせ乍ら、異見をするは無理なれど、聞いて貰はにやならぬといふは、殿樣よりのお差圖にて御家で一の御家老職荒川樣のお娘御を若旦那樣へ御婚姻、御家に取ては上もなき

後世での譽れ御沙汰を聞いて御隱居樣は、一方ならぬお悦び、是をお斷り申すときは、如何なる不首尾にならうも知れず、若旦那樣も妹お玉を思ひ切つて下さりませ。又妹も是れまでの御縁、起して若旦那を、再びお呼び申さぬやう、さつぱり思ひ切つてくれ。定めし別れともなからう、縁談よりして御恩になつた御隱居樣への御恩送り、必ず死なうなどゝいふ無分別は出さぬがよい。假令一旦別るゝとも、空行く月の廻り合ふ又の時節があらうからどうぞ思ひ切つてくれ。是程の頼みを聞入れず、今身を捨て死ぬ時は、未だ年季のある體、その償ひは一人の母、此の與惣次が身の難儀、爰の道理を聞き分けて、無理なことだが若旦那を思ひ切つて幼年より、御恩になつた小山の御家の、譽れになるやうにしてくりやれ。

ト與惣次よろしく思入あつて言ふ、お玉ぢつとこなしあつて、

お玉　言を分けてのお前の異見、しみじみ心にこたへました。貧しい親に幼少より御恩を受けた御主樣の御家へ、譽となることを、お邪魔をしては濟まぬわけ、命を捨てれば母樣やお前に苦勞掛けねばならず、切ないわけ故異見に附き、別れともなうござんすが、今宵限り若旦那をわたしや思ひ切りまする。（ト泣き伏す。）

與惣　おゝ、よく聞き分けた、忝い、おぬしがさういふ心なら、若旦那も御家の爲、妹お玉を今日限り

眞三 思ひ切つて下さりませ。（卜眞三郎思入あつて、）此の縁談のない內に言交した此のお玉、言はゞ夫婦の先約故、思ひ切られぬ所なれど、縁につながる與惣次が、双方兼ねての此の心配、否と言はれぬわけなれば、お玉が思ひ切るならばおれも思ひ切らうわいの。

與惣 そのお詞を承り、まことに安心いたしました。

お玉 元より賤しい身の上に、御新造様になられぬのは、初手から承知でござりまするが、末々年が明けましたら、せめてお側で御奉公をいたし度いのが身の願ひ、時節が來たらその時は、兄さんお賴み申しまする。

與惣 おゝ、そりやおぬしの言ふ通り、賤しい勤めをした上は、御新造様にはなられぬが、御奉公なら願つてやらう。

眞三 そりや賴まずとも此の儘に、見捨てる心は更にない、年が明けた其時は、宅へおくとも又外へ圍つておくとも仕ようわいの。

お玉 それはまことでござりますか。

眞三 神々掛けし二人が仲、何で僞り言はうぞいの。

お玉　えゝ嬉しうござりまする。

與惣　案じるよりは産むが安いと、若旦那も妹もよく思ひ切つて下すつた。思案にあまつた時の案へがさつぱりとなりました、善は急げと申しますれば、早く御歸宅なされませ。

眞三　おゝ、居れば居るほど、名殘りが惜しい。

お玉　そんなら、お歸りなされまするか。

眞三　未練殘さず、歸宅いたさう。

お玉　それに就いて油斷のならぬは、さつき座敷で牛窪さんとあの中間の彌二平が、人目を憚る手紙を出して、何かひそ〳〵話をなせば、お歸り道を氣を附けて、必ず油斷なさいますな。

眞三　よくぞ知らしてくれたるぞ。その儀も不斷目をつけをれば、決して油斷はいたさぬわえ。

ト此時階子の口にて、

若者　お玉さん、ちよつと見世迄お出でなすつて下さいまし。（トお玉ちよつと思入あつて、）

お玉　人の心も知らないで、宿をぞめきの騷がしく、

眞三　賣る辻占や按摩の聲、それと是とは裏表、

お玉　その辻占の末、と又の時節を樂しみに、

眞三　綺麗に別るゝ今夜の二人、

お玉　しがらむ筆の書置は、（ト以前の書置を引裂き、）

眞三　此場で反故となるからは、

お玉　どうぞあなたも御機嫌よう。

眞三　おゝ。又逢ふ時節を待つてゐやれ。

〽寐覺淋しく結ぶ仇夢。

ト眞三郎お玉愁ひの思入あつて、ぢつと寄添ふ。獨吟の上げにて此道具廻る。

（潮來道川端の場）――本舞臺一面の平舞臺、正面低き土手の張物にて見切り、後ろ潮來川より向う川岸を見たる夜の遠見、上下蘆原、柳の立木、日覆より同じく釣枝、總て潮來道川端の體、三味線入り禪の勤にて道具留る。と花道より以前の信三手丸を提げて出來り、

信三　今夜は雨氣を持つたせゐか、月がないので此土手は、素見に行く在方の百姓にも逢はないが、是につけても若旦那は、今宵はお歸りなされればいゝが。

ト舞臺へ來る。此時向うにて、

彌三　おい〳〵、信三待つてくれ〳〵。

信三　わしを呼ぶのは。

ト花道より彌三平、頰冠り、尻端折りにて出來り、

彌三　牛窪の彌三平だ。（ト頰冠りをとる。信三振返り見て、）

信三　おゝ彌三平殿か、して何ぞ用でござるか。

彌三　ちつと借りてえものがあつて。

信三　あゝ提灯の明りかな。

彌三　いゝやそんなものぢやあねえ。おぬしが持つてゐる懐の金をおれが借りてえのだ。

ト是にてぎつくり思入あつて氣を替へ、

信三　何の間違ひか知らないが、わしは金を持つては居ぬ。

彌三　いゝやそりやあいけねえ。玉屋の二階で主人から、胴卷ぐるみ預かるのを、慥に見留めて附いて來たのだ。

信三　そりやあ猶更間違ひだ。金を使ひに行く女郎屋から、受取つて來る譯がねえ。

ト此内思入あつて懐中より、胴卷のまゝそつと後ろへ投り、

それともこなたが疑ぐるなら、どこでも改めて見るがいゝ。
彌三　むゝ、ねえといふなら改めてやらう。（ト彌三平捨臺詞にて信三の體中を捜し、金なきゆゑ）うぬは、こかしたな。
信三　何でそんなことをするものだ。
彌三　いゝやこかしたに違えねえ。さあその在所を言つてしまへ。
信三　わしは知らねえ、覺えはねえ。
彌三　うぬ、云はねえけりやあ。（ト木刀をぬき、打たうとして）こんな物ぢやあこたへねえ。（ト有合ふ小石を拾ひ）さあ、言はねえか。（ト信三の眉間を打つ、是にて信三額を押へながら）
信三　あいたゝゝ。それではまだ、疑ひが晴れないのか。
彌三　金を出さねえ其内は、毆き殺しても言はせるぞ。
信三　すりやそれ程迄に疑ぐるのか。
彌三　金せえ出しやあなぐりやあしねえ。餓鬼同然な手前などを、相手にするのは成人氣ねえが、玉屋の二階で見込んだ金、見遁すことが出來ねえから、わざ〳〵爰迄附けて來たのだ、言譯せずと出してしまへ。

信三　元より所持せぬ五十兩、よしや命を取られるとも、こなたに渡す金はない。それを疑ぐり手向ひなさば、其分には致さぬぞ。

彌三　えゝ、しやらツくせえ事を言やあがるな。

ト又木刀にて打つ。

信三　あいたゝゝ。（ト糊紅になり、是を探り）やゝ、こりや面體を。

彌三　言はねえけりやあ、面どころか、毆き殺しても構はねえのだ。

信三　さう聞く上は。

ト信三刀を拔き切つてかゝる。此内糊紅顔へかゝり、目くらむこなし。此の隙を見て彌三平後ろへ廻り白刃を取らうとして、兩人爭ひながら信三の肩先を切る。此の機白刃を後へ投る、此時灯入りの半月を下し、彌三平是を見て、

彌三　や、こいつあ手疵を負はしたか。（ト信三はどうとなり）

信三　爰で命を取らるゝとも持つて生れた我身の因果、口惜しけれど是非もないが、先刻二階で黒はゞも立聞きをした牛窪の惡事を屋敷へ歸りなば、旦那に知らせ申さんと、思つたことを言はぬが殘念、二階で言へばよかつたに。

彌三　むゝ、その一大事を聞かれたら、もう生かしちやお置かれねえ。

ト立かゝらうとして落ち散りある白刄を尋ねる。此内信三は苦痛のこなしにて、花道へ脫れ行き。

信三　人殺し〳〵。

ト是にて彌三平白刄知れぬ思入あつて探り取り、追ひかけ行き、襟上を取つて引戻し、ちよつと立廻つてきつと見得、一つ鉦の合方になり、兩人立廻りあつて信三糊紅になり、トヾ苦しみ死に落入る。
彌三平尻邊にたうとなり、ほつと思入あつて、

彌三　刄物が知れねえばつかりに、ひどい骨を折らせやあがつたが、旦那の悪事を聞いたとあつちやあうつかり油斷はならねえが、此儘どこぞへ突走るにも、見當の金をほしいものだ。

トあたりを尋ねる。時の鐘、合方、月へ雲掛り、下手より以前の與惣次出來る、此の人影に彌三平後へ向く、與惣次眞中へ來り信三に躓きびつくりなし、

與惣　や、こりや人が。（と此時彌三平下手へ行くを）正しく曲者。

ト彌三平の腰を捕へ引戻す、これを振拂ひちよつと立廻つて左右へ別れきつと見得。時の鐘忍び三重模樣の合方にて、兩人探り合ひの立廻り、此内下手より以前の眞三郎出來り、此中へはひり、三人暗がりダンマリの立廻りあつて、トヾ眞三郎足に觸る胴卷を取り上げる、彌三平は花道へ脫れ行く。

眞三　や、此の金は。

彌三　や。（ト花道にてちよつと止まるを、）

與惣　待ちやあがれ。

ト此聲に彌三平下にゐるを木の頭、眞三郎胴巻をすかし見る、與惣次向ふを窺ふ。彌三平花道に走りはひる。此模樣よろしく、賑やかなる鳴物にて、

ひやうし幕

二幕目

根本村曾根宅の場
同根本原子別の場

〔役名――荒川道之進、百姓曾根忠三郎、人相見赤岩齋、百姓畑作、同田六。忠三郎妻お秋實は女化狐、忠三郎母おすが、娘おき、悴千代松等。〕

（根本村曾根宅の場）――本舞臺一面の平舞臺、向ふ眞中一間古障子の出這入り、上手一間押入戸棚、張交の襖、下手一間鼠壁、此前に爾爐裏、自在竹に罐子かけあり、傍に粗朶茶碗を入れし籠杯を置き、上の方、九尺中窓のある附屋臺、内に機道具を飾り、例の所藁葺き竹簀戸の門口、下の方、門口の外に、

例の低き井戸、簀の子の臺へ、釣瓶を載せ、この後ろ田圃の遠見、總て常陸根本村百姓家の體、上手に忠三郎の母おすが、やつし裝更けたる母親のこしらへ、眞中に赤岩齋、撫附髱、道行振、人相見のこしらへ、天眼鏡を包みし袱紗包を置き、下手に畑作、田六、着流し百姓のこしらへにて住ひ、おきくやつし裝小娘のこしらへにて、盆へ茶碗を載せ鑵子の茶を汲みゐる。此見得在郷唄にて幕明く、

きく　はい、お茶をお上りなさりませ。(ト皆々へ茶を出す。)

赤岩　これは〳〵忝い、咽が乾いてをつた所、何よりの馳走でござる。

畑作　ときにお袋、今日爰へお連れ申したは、忠三殿に此間ちよつと話をしておいた、阿部の晴明跣足といふ人相家の先生樣だ。

田六　法印樣ではないけれど、善いも惡いも見通しさ、あんまり不思議に當るから、お前方も行末を見て貰はつしやるがようござる。

すが　成程、此間悴から其のお話を承りましたが、それではあなたが人相で、吉凶を御覽なさる先生でござりまするか。

赤岩　いかにも手前は江戸表で、觀相を業となす赤岩齋素白と申す者、諸侯方に御出入の多く、朝たつから七つ迄とても寸暇のない身、今般鹿島香取から、銚子へ招きに應じて參るが、當地に知己の

人あつて、一兩日逗留中、望みによつて觀相いたすが、始めは一人二人なりしが、おひ〳〵其名を聞傳へ、近鄕近在から參られるので、朝から人の山をなします。

畑作　それといふのもよしあしが不思議に當りますからで、こちらの内も六七年兎角に煩ふ者があつて引續いての不仕合せ、忠三殿もお秋殿も、人に勝つた孝行者だが、何で天の惠みがないか。

田六　これには何んぞ祟りでも、あつての事か知れぬゆゑ、先生樣に見て貰うたら判るだらうと思ふから、お暇の折をお願ひ申し、お連れ申して來ましたのだ。

すが　それはまあ御親切に有難うござりますが、悴は今日朝早う、以前勤めし信田樣へ御召しによつて出ましたれば、いつ歸りますか知れませぬ。それに又嫁のお秋も今しがた、買物に近所迄參りよして、折角のお出でなれど二人ともに居りませぬ。

畑作　忠三殿が信田樣へお召しになつて出たことは、隣の甚太に聞きましたが。

田六　以前勤めた御屋敷では、これは惡い事ではあるまい。必ず吉事に違ひない。

赤岩　さういふ事がござるなら、猶更吉凶を見て進ぜたいが、お留守とあれば是非がない。しかし折角參つたれば、母御の相を見て進ぜよう。

すが　有難うはござりますが、最早餘命のない私、立身出世も好みませねば、私よりも是になりますが生

赤岩 先長い此孫を、御覽になつて下さりませ。

強ひては申さぬから、そちらの隨意にさつしやるがよい。どれ〳〵その子を見て進ぜませう。

ト袱紗包みより天眼鏡を出す。

畑作 さあ〳〵お菊坊、もつと前へ出るがよい。何も怖いことではない。

田六 そなたの運が善いか惡いか、人相を見て下さるのだ。

きく わたしや顔を見られるのが、恥しいわいな。

畑作 えゝ、ちひさな形で小癪なことを。

田六 恥しいも何も入るものか。

すか ずつとあなたのお傍へ出て、よう見てお貰ひ申しやいの。

きく あい〳〵、そんなら見てお貰ひ申しませう。

ト合方きつぱりとなり、おきく赤岩齋の前へ出る。赤岩齋捨臺詞にて前へ引きよせ、天眼鏡で顔などつくり見て、

赤岩 凡そ觀相の法とするは、一面を百部に分ち、上を三才にとり下を五岳に配す。額を以て天となし頬を以て地となす、今此少女の相を觀るに天庭より印堂迄、豐滿潤明にして、四瀆皆吉相なり、

殊更紅色を帯びたるは、高貴の人の助けを得て、必ず富貴の身とならん。唯日月角の異なるは、吉相の缺にしてこれを表せば片親に早く離れる事ならんが、先づ此相の表では、少女は立身出世をなさん。

すが　田舎者の此孫が、さういふ身分になられますとは、嬉しい事でござります。

畑作　そこで女は氏なくて玉の輿に乗らるゝ譬、此子も早く江戸へ出し、

田六　藝者にしたら高位のお方の、お目に止まつて出世が出来よう。今の世界は女の事だ。

赤岩　かゝる娘を儲けたる、母御は唯の人ではあるまい。その面上を見たいものだ。

畑作　此子の母は此村で、一と云つて二のない女、器量ばかりか氣立がよく、親孝行で甲斐々々しく。

田六　田畑を耕す片手間に、綿を繰つたり機を織つたり、天晴女一人前に勝れた嫁女でござりまする。

赤岩　定めて左様なことでござらう。此娘御の相を見ても、母御の勝れし事は知れます。

畑作　お袋殿も辭退せず、よい序ゆゑ身の上を見て貰つたがようござる。

田六　又先生様がこちらの方へ、いつお出でなさるか知れぬ、早うお願ひ申すがよい。

すが　おゝ二人の衆の云ふ通り又とお願ひ申されねば、御面倒ながら私も、御覧なされて下さりませ。

赤岩　決して遠慮をさつしやらずと、さあ／＼前へお進みなさい。

すが　御免なされて下さりませ。

ト合方きつぱりとなり、おすが前へ出る。赤岩齋天眼鏡で顏を見て、

赤岩　先づ天庭に山紋ありて準頭豐に法令正しく、目は細眼にして波紋長く、口は四字口に丹脣なるは、老女の相も吉相なれど、天庭より中正かけ黒氣色を帶びたるは、開くる運を妨ぐる。これ禍の凶相なり、これにて判斷なす時は、中年よりして今年迄、長く苦勞をなされたらうが、その替り晩年は必ず福祐の身とならん。今此家の樣子を見るに、朦朧として屋中に黒氣のあるは障りのしるし、これを消除致さねば、御子息の運も開けませぬ。

すが　成程あなたのおつしやる通り、六七年此方は煩ひ勝でござりまする。

畑作　なんと、今晴明と言はれるだけ。

田六　能く當るではござらぬか。

すが　それについて先生が、障りがあるとおつしやるは、如何なる事でござりまするな。

赤岩　其障りと申すのは、日月角を黒氣で蔽ふは神佛を、憚かるべき此家の内に汚れがござるが、心當りはござらぬかな。

すが　何も汚れますものはござりませぬが。（ト赤岩齋思ひ入あつて、）

赤岩　既に唯今開ける運の目前へ來つて居れど、此障りゆゑ開けませぬ。

すが　さうおつしやれば思ひがけなく、今日悴が信田樣へお召しによつて出ましたは、よい身の運の開け時と、悦んでをりますが、御首尾は如何でござりませう。

赤岩　委しき事は御子息の相を見ねば判らねど、母御の相によりましては、多分不首尾でござりませう。

すが　すりや、不首尾にござりまするか。

赤岩　それが不淨の障りでござる。（トおすがちつと思入。）

畑作　忠三殿が信田樣の今日お召しになつたのは、歸參が叶ふ時であらうと、わしらも共々悦んでゐたが。

田六　多分不首尾であらうとは、心掛りな御判斷、早う屋敷の便りをば聞きたいものでござります。

赤岩　今に便りがござりませう。

ト時の鐘、床の淨瑠璃になる。

〽結び目も堅き妹背の常陸帶、解けぬ思ひに唯さへも物哀れなる秋の末、お秋は我子伴うて立歸りたる我家の門。

ト花道よりお秋好みの鬘やつし裝、在所女房のこしらへ、やつし裝の千代松を連れ出來り、花道へ留り、

お秋　今日信田様へお召になつた忠三殿の身の上に、凶事のないやう稲荷様へ、お願ひ申しに行く道も
そなたが一緒で遅うなつた。嘸お内で婆様がお待ちなされてゞあらうわいの。

千代　かゝ様、とゝ様はまだかえ。

お秋　おゝ父様のお歸りは道も遠いゝ事なれば、大方日暮にならうわいの。

千代　もう今に日が暮れるかえ。

お秋　まだ七つをば打たぬゆゑ、なんぼ短かい秋の日でも、まだ〳〵滅多にくれはせぬ。

千代　坊は足が痛いから、かゝ様おんぶしておくれ。

お秋　つい向ふが内なれば、おぶふ間もない、早う來や。

〽手を引連れて立ちかへり、戸口の簀戸を押し明けて、（トお秋千代松の手を引き舞臺へ來り）

すが　おゝお秋戻つたか。（ト千代松おすがの傍へ行き）

はい、只今戻りましてござります。

千代　ばゝ様、父様はまだかえ。

すが　まだお歸りでないわいの。

トお秋下に居る百姓二人へ向ひ、

お秋　これは〳〵、畑作殿に田六殿、ようお出でなされました。
畑作　おゝお前の歸りを待つてゐたのだ。
田六　丁度よい所であつた。
お秋　わたしをお待ちなされしとは、何ぞ御用でござりまするか。
畑作　別に何も用はないが、これにおいでなさるのは、今晴明と人のいふ人相見の先生様。
田六　こちらの内も引續き、病人が多いゆゑ、何ぞ祟りでもありはせぬか、見て貰うたらよからうと、お連れ申して來ましたのだ。
お秋　え。（トお秋ぎつくり思入あつて、）それではあなたは人相を、御覽なさるお方でござりまするか。
赤岩　手前は江戸で五本の指へ當時折らるゝ人相見、赤岩齋と申す者だが、今娘御を見ましたが、世に珍らしき吉相ゆゑ、母御の相は如何なる相か、見度く思ひをつたる所、さゝこれへお進みなさい。
お秋　いえ有難うはござりますが、私は御免を蒙りまする。
　トお秋後ずさりなして、顏を見られぬ樣俯く。
赤岩　若い女中は恥しがり、誰しも厭がるものなれど、身の一生を見て貰へば、幾らかお前の德になること、遠慮をせずとこれへござれ。

すが　折角あのやうにおつしやれば、よく見てお貰ひ申しやいの。
お秋　母様にお詞返し、濟まぬ事でござりますが、小さい折より私は人に顏を見られますのが、大嫌ひ
でござりまする。
赤岩　ではござらうが僅かな内、ちよつと手前にお見せなさい。（ト傍へ寄る。）
お秋　いえ／＼、何とおつしやりましても、御免なされて下さりませ。
〽恥かしさうに顏かくし、千代松作ひとつかはと、納戸の内へ入りにけり。
トお秋袖にて顏を隠し、千代松を連れ奥へはひる。赤岩齋はお秋へ思入あつて、
赤岩　はてさて、女子といふものは、遠慮深いものでござるな。
すが　ちよつとお願ひ申せばいゝに、若い者といふものは、兎角に顏を見せますを恥しがるものでござ
りまする。御免なされて下さりませ。
畑作　お秋どのが厭とあれば、先生様には私共へこれからお出で下さりまして、
田六　近所の者の人相を、御覽なすつて下さりませ。
赤岩　然らば同道いたすであらう。
〽言ひつゝ相見は小首を傾け、（ト赤岩齋思入あつて、）

しかと面は見ざれども、世の常ならぬ内儀の異相。

ト赤岩齋合點の行かぬ思入にて、奥の方を振返り見る。此時上手窓よりお秋顔を出し窺ひ、赤岩齋と顔見合せ、はツと窓の障子を立切る。赤岩齋扨はといふ思入あつて、

〽一間の方を振返る、途端に窓より窺ふ妻、思はず顔を見合せてはツと障子を立切れば、

いや、稀なる相もあるものだ。

すが　嫁女もよろしうござりまするか。

赤岩　ずんとよろしき相好なれど、此家にとりては不淨の障り、近きに異變がござらうから、よく心をつけられよ。

畑作　異變があるとは命にでも、

田六　拘はる事ではござりませぬか。

赤岩　決して左樣な事ではないが、ことによりなば夫婦の仲に。

すが　え。

赤岩　いや夫婦仲もようござれば、必ず氣遣ひさつしやるな。どれ、お暇いたさうか。

すが　お茶さへ碌々差上げませず、御免なされて下さりませ。

赤岩　又明日息子殿の、相を見て進ぜませう。

すが　有難うござりまする。

畑作　左様なれば、

兩人　先生様。

赤岩　いざ御同道いたしませう。

〽打連れ門へ立出でしが、相見は跡を振返り、

ト三人門を出て花道へ行きかけ、赤岩齋跡へ思入あつて、時の鐘。

三才四讀異なる人相、此家に不淨の障りのあるは、むゝ、まさしく今の。

兩人　え。

赤岩　いや、今打つたは七つか知らぬ。

〽日影と共に人相見は、小首傾け歸り行く。

ト赤岩齋考へる思入。百姓兩人跡へつき花道へはひる。

きく　ばゝ様今の小父様は、ぢろ／＼人の顏を見て、氣味の惡い人ぢやわいの。

すが　人相見は人の顏を、見るのがその身の生業ゆゑ、氣味の惡い事はない。

〽歸る影をば見送りて、お秋は奥より出來り、

ト奥よりお秋出て、向うへ思入あつて、

お秋　人相を見る今のお方は、もうお歸りでござりましたか。

すが　村の衆と連立つて、たつた今歸られたが、なぜそなたは今のお人に、よしあしを見て貰はぬのぢや。

お秋　見て貰はうと思ひましたが、身の上のよしあしもよいと言はれゝばよいけれど、もし悪いと言はれまするど、却つて心に掛りますゆゑ、何事も知らぬが佛と、見てお貰ひ申しませぬわいな。

すが　成程そなたが言ふ通り、今の相見が此家に汚れの障りがあるゆゑに、開ける運も開けねば、今日信田樣へ御召しになりしも多分不首尾であらうと云うたが、聞かぬ先は十分に手柄をなして歸るであらうと、心嬉しく思うてゐたが、さういふ事を聞いてみると、案じられてならぬわいの。

〽母の言葉に我が身の上、はつとなせしも色目に見せず、（トお秋よろしく思入あつて）

お秋　それゆゑに見て貰ひませぬが、なんと相見が申さうとも、必ずお案じなされますな。そのよし悪しを見分けまするは、上手と下手によりまする。見るからどうか下手さうな、田舍上りの人相見決して當にはなりませぬから、心におかけなされますな。

すが　わしもさうは思ふけれど、烏鳴きの悪いので、心にかゝる矢先ゆゑ、どうかかうかと案じるので胸騷ぎがしてならぬわいの。

ト言ふを聞きゐるおきくがさかしく。

きく　いつものやうにお背中を、わたしが擦つて上げませう。

すが　そんなら少し、擦つてくりや。

きく　あい／＼。（トおすがの後ろへ廻る。）

お秋　ようそなたは心附いて、お擦りなしやるの、常は機を織るゆゑ、お擦りをする事がならぬが、今日は機を休んだれば、わしが代つてしませうわいの。

すが　いやそなたは用のある體、決してそれには及ばぬわいの。

お秋　最早お夕食の支度もしたれば、何も用はござりませぬわいな。

すが　用がなくば少しばかり、そなたに擦つて貰はうか。

お秋　はい／＼、畏まりましてござります。

きく　わしは力がないゆゑに、母様揉つて下さりませ。

トおきく、下手へ來る。お秋後ろへ廻り肩を擦りながら、

お秋　かういふ休んだ時でなければ、ゆつくりお擦りが出來ませぬわいな。

へ背中をさする手の先も、心と同じやはらかさに、悅ぶ母に引きかへて、お秋は胸に迫いたる事がありてか一雫、こぼす涙を娘が見て、

ト此の内お菊背中を擦る。おすが嬉しき思入、ちつと思入あつて泣く、これを娘見て、

きく　母樣、お前は何で泣くのぢや。

お秋　なんでわしが泣くものぞ。(ト涙を拭ふ。)

すが　いや、さう云へばたつた今、襟へ冷たく當つたは、そんならそなたの涙であつたか。

お秋　いえ〳〵涙ぢやござりませぬ。あの雫は、おゝそれ〳〵、昨夜の雨が家根裏へ、廻つてゐたのでござりませう。

へ言ひ紛らして顏反け、涙を隱す胸の內、晴れぬ思ひは空くせの秋の習ひの曇りがち、塒へ歸る鳥ならで、忠三郎もしほ〳〵と我家へ歸る田圃道、

ト時の鐘、花道より忠三郎木綿紋附の羽織、おしよぼからげ、脚袢草履一本差しにて出來り、花道に留り思入あつて、

忠三　馬で途中を急がせたれど、五里の道ゆゑ遲うなつた。嘸母樣や女房子が、家で待つて居るであら

う。御前の様子を話したら、待つ甲斐のない今日の仕儀、本意ない事であらうわい。

〽心の内を思ひやり、内へ來りて扉をあけ、

ト思入あつて本舞臺へ來り、簀戸をあけ、

お秋、今戻りしぞ。

お秋　おゝ、お歸りでござりましたか。(ト門口へ來て、)夜に入りませうと思うたに、大そうお早うござりました。(ト奥より千代松も出て、)

きく　父樣お歸り、

兩人　なされましたか。(ト辭儀をする。)

忠三　おう、おとなしくしてをつたか。

千代　父樣、おみやを下さりませ。

忠三　今に何ぞ買うてやるぞ。

きく　買うてやるとおつしやるから、おとなしうしやいの。

お秋　假初にも五里の道、嘸お草臥れなされましたらう。

忠三　馬に乘つて歸つたゆゑ、草臥れはいたさぬわい。

〽塵打ち拂ひ座につけば、

ト忠三郎端折りをおろし、塵を拂ひ眞中へ住ふ。

すが　悴、戻りしか。

忠三　嘸お待ち兼ねでござりましたらう。

すが　おゝ、待ち兼ねた。して〳〵けふの御首尾はどうであつたか、早うそれが聞きたいわいの。

お秋　母樣初め私や、子供等迄も門へ出て、今か〳〵とお歸りを、お待ち申してをりました。

忠三　定めてさうであらうと思ひ、途中を馬で急がせたが、五里の道ゆゑ歩いたら、暮れねば家へ歸られませぬ。

〽路次の話も聞終らず。老母は心せはしくも、（トおすが前へ出て、）

すが　故主の御家信田樣へ、今日劍術の試合があつて、計らず御召しになつたのは、其身に運の極りし所、試合に勝ちを取る時は、歸參が叶ふといふ事ゆゑ、早う樣子が聞きたいわいの。

お秋　相手は未熟な者とあれば、定めてあなたが勝をとり、お手柄なされたでござりませうな。

忠三　御前に於てのけふの勝負は、

すが　そなたが勝を取つたるか。

忠三　さあ、それは。

お秋　勝負は如何でござりました。

〽問詰められて詮方なく。（ト忠三郎思入あつて）

忠三　面目ないが、不覺をとつた。

兩人　えゝ

すが　不覺をとつたと。

お秋　おつしやるのは。

忠三　事の見事に負けました。

兩人　えゝゝゝゝ。

〽聞いて親子は打ち驚き、

すが　して／＼それはどういふ事で。

お秋　譯を聞かせて下さりませ。

忠三　今日の試合のあらましを、今お話し申しますから、母人もお聞き下され、お秋も共に承れ。

〽おもひ見廻し座を進み、（ト忠三郎前へ出て、誂への合方にて）

今朝馬にて路次を急ぎ、故主の館へ參上せしに、荒川氏の指圖にて案內の者に伴はれ、御庭口へ廻りしところ、疾より試合の設けありて、軒に色濃き紫の御家の幕を打ちしぼり、あたりきらめく金屛を立廻したる正面に、殿樣羽織袴にてお褥の上に座し給ひ、左右に麻の袴を着せし近習の方々居並び、緣側近く荒川殿、小山殿が左右に座し、扨緣下に若手の武士、後ろ鉢卷襷にて、列を正して扣へ居る。

〽既にその日も巳の上刻、四つの時計を合圖となし、呼出されて出でたるは、

當時御上へ劍道の御指南致す牛窪九郎兵衞、相手は則ち我等にて、一禮なして座に進めば、一本の竹刀を十字に置き、いざ〳〵と立上り、上段下段の身構へなし、暫らく呼吸を窺ひて、えいと打込む太刀筋は、未熟の業と思ひの外、神影極意の鋭き手練。

〽實に電光のきらめく如く、前後左右へ飛びかふ早業。

あしらひ兼ねて途を失ひ、

〽しどろもどろにたぢ〳〵〳〵、遂に竹刀を打ち落され、

ひるむところを背をかけて、骨も折れよと打据ゑられ、御前を初め一家中居並ぶ滿座のその中で恥辱をとつてござりまする。(トろしくこなし。)

すが　すりや、試合の相手の牛窪に、

お秋　勝をとられたまひしか。

忠三　けふの試合に勝つ時は、故主の御家へ歸參が叶ひ、以前の武士になるべきを、我劍術の未熟ゆゑ不覺をとりて衆人の、物笑ひとなり劍道の、名高き家名へ疵をつけ、申譯がござりませぬ。

〽我身をかこち差し俯向き、暫し詞もあらざれば、聞く母親や女房は、口惜し涙おし拭ひ、

ト忠三郎ちつと思入、おすがお秋は悔しき思入あつて、

すが　十分けふはそなたの手柄と思ひしゆゑに最前も、位牌へ向ひ亡き夫へ悴の武藝が世に出でゝ、故主へ歸參になりますれば、お悅び下されと御吹聽をいたせしも、その甲斐もないそなたの不覺、草葉の陰で亡夫にも、嘸御殘念にござりませう。

お秋　相手は未熟と聞きしゆゑ、正しく夫の勝と思ひ、堅唾を呑んで吉左右をお待ち申してをりましたに、不覺をお取りなされしとは、悔しい事でござりまする。

忠三　我も前日牛窪が手並の程を存じをれば、勝を得る氣であつたれど、いざと立合ふその時に、思ひ設けず前日に、打つて替りし彼が手練、申さば不意を打たれし如く、遂に手前が負けとなり、思はぬ恥辱を殘したが、これにて武士を思ひ切り、竹刀にかへて鋤鍬取り、生涯氣樂に百姓で、果

つる所存にござりまする。

ヘ常と替りて言ひ甲斐なき、我子の詞老いながら以前は武士の妻ゆゑに、鋤鍬取つて生涯を送ると言ふが口惜しく、

ト忠三郎思入あつて言ふ。兩人悔しき思入あつて、

すが　武藝勝れしそなたゆゑ、いつかは天の惠みを得て、仕官いたす時もがなと、明暮れ神や佛を念じ專らお願ひ申せしゆゑ、思ひがけなく故主の御家へ御召しになりしは身の出世、これぞ日頃の御利益と今の今迄悦びしに、相手に負けしそなたの不覺、鋤鍬とつて生涯を送る我子を不便と思はば、なぜ冥土にて亡き夫には御守りなされて下さりませぬぞ。

お秋　今更言うてもかへらねど、近所の衆も噂を聞き、今朝から内へ悦びに來る人毎に自慢して、けふの試合に手柄をすれば、故主の御家へ歸參して、元の武士になられますと、つい嬉しさにたれかれへ、言うたが今更面目ない。おとゝひ故主の殿樣へ、途中で御目見得なさらねば、かういふ事もありますまいに、神や佛も賴み甲斐なく、なぜ守つては下さりませぬ。

ヘ母女房が右左、悔み歎けば子供等も、

トおすがお秋さめ〲と泣く、おきく千代松も思入あつて、

きく　なんでそんなに婆様も、又母様もお泣きなさる。どういふ譯か分らねど、わたしも悲しくなりまする。（ト顏へ袖を當て泣く。）

千代　姉さん、そんなにお泣きでない。坊がお詫びをしてあげよう。

〽父樣許して下されと、譯もなきいる我姉を、庇ふ千代松引寄せて、

ト千代松忠三郎に縋る、そのまゝ引寄せ顏を見てぢつとこなし、

忠三　何頑是ちないそち達に、此苦勞をかけるのも、皆此父が不運ゆゑ、以前とても有福と言ふではなけれど今日に、さのみ困りもせざりしが、八年此方年々に、勞孩病みの瘦せるが如く、僅かに貯ふ金も遣ひ、かくまで零落なしたるは、如何なる宿世の因果なるか。

すが　これといふのも此母が、來る年毎に煩うて物入り多きその上に、かてゝ加へて四五年跡から、旱魃水損凶年續き、秋の實入も十分ならねば、内の暮しも足らぬ勝ち。

お秋　それと申すも以前と違ひ、二人の子供に五人口、萬事に餘計掛りますゆゑ、せめては少しの手助けと、夜業仕事に絲を取り、機を織れども僅かの價。

忠三　腕に覺えし劍術で、世に出ることもあらうかと、時節を待ちしに計らずも、此千代松が疱相より故主の殿に御目見得なし、

すが　けふ御屋敷へ御召しになり、試合の勝負に勝つ時は、歸參が叶うて元の身にならるゝことゝ悦びしも、今となりては水の泡、

お秋　お悔み申すも勿體なけれど、明暮れお願ひ申したる神や佛も聞えませぬ。かくお惠みのないと云ふは。

忠三　惡い心は持たねども、なんぞ此身に御罰でも、蒙むる事があつてのことか。

すが　これにつけても人相見が、開ける運の開けぬは、物の障りがあるとやら。

お秋　してその障りと申しまするは。

忠三　いかなる事でござりますか。

すが　障りは汚れがあるとの事。

お秋　心にかゝるそのお詞。（トお秋思入。）

忠三　兎にも角にも親子とも、

すが　神や佛の、

お秋　助けもなく、

忠三　思へばはかない、

三人　身の上ぢやなあ。

〽親子八歳の年立ちし、過ぎ越し方を思ひ出で、浮ぶ涙の雨催ひ、曇りし空に暮近く、道を急いで道之進、家來を連れてほとりに彳み、

ト此内忠三郎お秋、おすが三人愁ひの思入、よき程に是へ驛路の鈴を冠せ、花道より前幕の荒川道之進打割羽織、野袴大小草履にて出で、跡より紺看板脚袢の中間、附添ひ出來り、花道にて、

道之　こりや磯平、曾根が宅は向ふの小家か。

磯平　はッ只今跡の百姓家で承りましてござりますが、井戸端の前と申しますれば、たしかに向ふでござりまする。

道之　その方まゐつて案内いたせ。

磯平　畏つてござりまする。

〽苔むす井戸を目印に、こなたへ來り門口より、（ト道之進舞臺へ來り、磯平門口より）

賴まう〳〵。（トお秋門口へ來て、）

お秋　はい〳〵、どちらからお出でなされました。

磯平　曾根忠三郎殿は、こちらでござるか。

お秋　はい、手前でござりまする。
磯平　して御在宅でござりまするか。
忠三　いかにも宅にをりますが、どなた樣でござりまする。
　　ト忠三郎前へ出る。道之進中間と入替り、
道之　荒川道之進でござる。
忠三　や、思ひ設けぬ荒川樣、見苦しくはござりますが、これへお通り下さりませ。
道之　然らば許しめされ。
　〽刀を提げて打通れば、お秋が手早く敷く花蓙、（トお秋上手へ花蓙を敷く。）
　いや、その心配には及び申さぬ。
お秋　あまりむさうござりますから。
すが　御遠慮なされず、此上へ。
　〽言ふに委せて座に附けば、老母は前へ進み出で、
　荒川樣には久々にて、お目もじを致しまするが、御年も寄らず御健勝にて、お目出たうござりまする。

道之　當所に御住居あるを知らず、御無音に打過ぎましたが、先は御無事で重疊でござる。
お秋　申し母様、あなた様にはお初ゆゑ、
すが　おゝそなたはお目もじいたさぬ筈。これは忰忠三郎へ、迎へし嫁女でござりまする。
道之　扨は御内室でござるよな。
お秋　秋と申す不束者。お見知りおかれ下さりませう。
道之　初めて今日お目に掛るが、鄙には稀なるよい御器量。
お秋　お恥しうござりまする。（ト俯向く。）
道之　して又、これなる娘御は。
すが　忰が娘でござりまする。
道之　いや此母御に此娘あり、成人なさば天晴なよき娘になられるでござらう。
すが　有難うござりまする。

〽孫を褒められほく／＼と悦ぶ母に引きかへて、忠三郎は不覺をとり、面目なさにさし俯向き、

トおすが悦ぶ思入、忠三郎ちつと思入あつて、

忠三　扨今日は未熟なる、劍術ゆゑに不覺をとり、御取持下されし、貴殿迄へ御恥辱與へ、申譯もござりません。（ト手をつき詫びる、道之進思入あつて、）

道之　その儀について主人より、內命受けて某が、馬上で御身の跡を追ひ、只今これへ參つてござる。

忠三　そりや何ゆゑでござりまする。

道之　さ、その仔細と申すは。（ト思入あつて、）こりや磯平、その方は最前の立場へ參つて、殘しおきし馬丁共と休息なし、後刻これへ迎ひに參れ。

磯平　畏つてござりまする。

〽はツとばかりに立つて行く。跡を見送り座を進み、（ト誂への合方になり、道之進思入あつて、）

道之　內命受けて某が、只今これへ參りしは、則ち外の事ならず、最前御前で何ゆゑに、お身は勝を讓られしぞ。

忠三　思ひがけなきそのお詞、何しに勝を讓りませうぞ。最前不覺をとつたるは、我劍術の未熟ゆゑ。

道之　いやその申譯は誠ならず、殿樣初め某も神影流の極意を學ぶ、免許皆傳受けし者、竹刀を取つて上段下段に構へしその身の備へでも、勝れし業は直に見ゆる、双方同じ神影なれど、その太刀筋は雲泥の遙かに違ひし御身と九郎兵衞、唯一討に打たれんと思ひの外に勝ちとなりしは、これ誠

の試合にあらず、何か仔細のある事ならん。その方參つて心中を、承はれとの内命受け、態々參りし道之進、何ゆゑ勝を讓られしか、包み隱さず明かされよ。

忠三　それは貴殿の御目違ひ、幼年の折に學びし劍術、十年此方田家に住居、竹刀をとりし事なければ自然に業も下りしそれがし、それ故手もなく牛窪氏に打たれましたる忠三郎、態々負けしと御覽ありしは、免許皆傳受けられし荒川樣に似合はぬお詞、御疑念お晴らし下さりませ。

〽詞巧みに忠三郎が、言譯なすを聞きもあへず、

道之　いやその申譯は聞き難し、試合の内に三度迄打つべき隙を打たずして、彼に手柄を讓りしは、正しく仔細のある事ならん。

忠三　して試合の内三度迄、隙のありしと仰せあるは。

道之　我目にしかと見屆けしは、そも立合つて二三合渡り合ひたるその時に、たゞ一討と牛窪が打込む竹刀を左へ拂ひ、十分隙のあつたるを、打たずに見脫し入違ひ、後ろへ體を隱せし早業、その折も又打込むべき隙のありしを打たずして、左右に別れて二三合、激しき打合ありし折、御身が突出す梢に恐れ、たぢ〳〵と退きし此處を打たば十分に勝を得べきをさはなくて、態と竹刀を打落され、かれに手柄を讓りしは、仔細あつての事ならん。武藝にさとき御主人ゆゑ、早くもこ

れを察し給ひ、窃に參つて仔細を問ひ、御身の本心承れと、内命受けて取敢へず馬上で是へまゐりしそれがし、御主人が御身を惜しみ給ふゆゑ、今日不覺を取られたる仔細をあかして下されい。

忠三　別に仔細もござりませぬ。今日不覺をとつたるは、拙者の業が未熟ゆゑ。

道之　いや未熟にあらぬ手練の程は、一昨日の手並にて我が御主人も御存じゆゑ、試合の勝を功となし御身を歸參いたさせんと思召しての事なるに、思はぬ不覺に手に持ちし玉を失ふ如くにて、いと殘念に思召し、その場で窃に手前へ内命、此有難き思召しを無にいたされが半途へ、勝を讓りし仔細をば、包まずお聞かせ下されい。(ト忠三郎俯向き居る。)

すが事をわけてあのやうに、荒川樣が仰せあるに、有無の返事をなさぬは失禮、仔細があらば申さぬか。

忠三　さあ、それは。

お秋　仔細をお話しなされましたら、御取成もござりませうに、なぜおあかしなされませぬ。

忠三　さあ、それは。

道之　手前も貴殿の親父とは、水魚の交りなせしゆゑ、一方ならず思ふのに、なぜ明かしては下されぬ

ぞ。

忠三　さあ、それは。

すが　疾々言はぬか。

忠三　さあ。

お秋　おつしやりませぬか。

忠三　さあ。

道之　さあ。

忠三　さあ。

四人　さあ〳〵〳〵。

道之　内命受けし某が、今日の役目を立て下され。

へ主命受けし荒川が信義を盡す一言に、母女房も傍らより、添へる詞につゝみ兼ね、忠三郎は吐息つき、（ト此内忠三郎術無き思入あつて、）

忠三　君の内命蒙りて、物數ならぬ拙者めへ、かく忝き仰せをば、無に致すのは不本意ゆゑ、今は何をか包み申さん。お眼鏡の如く勝つべき試合を、牛窪殿へ讓りしは、母へ孝行いたさんため。

すが　なに、わしへ孝行なすためとは。
お秋　それは如何なる仔細あつて。（ト誂への合方になり、）
忠三　今日御前の試合にて、手前が勝たばその功にて、直に御家へ歸參が叶ひ、以前の身分に立歸らば試合に負けし牛窪氏、我を憎しと恨むは必定、もし御指南でもいたすに至らば、何吏のこと如何樣なる企みをなさんも測られず、さある時には御家の騷動、就ては手前が一命も奸者のために失はん。年老いたりし母人へ歎きをかけるが不孝ゆゑ、仕官の念を思ひ斷ち、鋤鍬取つて一生涯土民で居らば歎きも掛けず、長く孝行つくされますゆゑ、相手へ勝を讓りしは、かくの次第でござりまする。
道之　むゝ、すりや母御へ孝を盡さんため、仕官を思ひ止まりて、相手へ勝を讓られしか。
忠三　如何にもそれ故不覺をとり、主君を初め貴殿をば、欺きましたる身の科は、御免なされて下さりませ。
へ隱す心を打ちあけて、身の僞りを詫びければ、母は聞くより氣色を變へ、
ト忠三郎よろしく思入にて言ふ。おすがこれを聞き、きつとなつて、
すが　我へ孝行盡さんため、けふの試合に負けしといふは、それはそなたの心得違ひ、武士の家に產れ

し者が、故主の御家へ歸參なすは此上もない身の譽れ、それを自ら不覺をとり、生涯土民で終るとは、言ひ甲斐のない不所存なり。母に孝行仕ようとて、冥土にござる父上へ、不孝になるな心附かぬか。

お秋 今母樣のおつしやる通り、故主の御家へ御歸參あらば、父上樣のお悦びはどのやうでござりませう。荒川樣へお願ひ申し、御前に於て今一度試合をなされてその折に、お勝ちなされて御歸參の叶ふやうになされませ。

すが それが何より亡父へ孝行。これにつけても荒川樣へ、親子の者が一つのお願ひ、何卒再度の試合をばお許しなされて下さりますやう、お願ひ申上げまする。

道之 それはいとより易き事、内命うけて參りし某、此儀を殿へ申上げなば、直に願ひを御許容あつて、再度の試合を仰せつけられん。その時見事に勝を得て、故主へ歸參いたされよ。それがしよしなに取成し申さん。

すが 何分ともに、御前よろしく、

お秋
兩人 お願ひ申上げまする。

道之 その儀は氣遣ひいたされるな。お取成しいたすでござる。

兩人　有難うございます。

　　ヽ親子が頼みをうけがひて、忠三郎に打向ひ、

道之　それにつき其許へ、それがし竊に尋ね度きは、今日牛窪が試合の太刀筋、手練は未だ未熟なれど神影流の祕傳の極意を、會得なせしと思はるゝ、御身は如何思はるゝぞ。

忠三　仰せの如く某も合點行かずと思ひしは、先年我父父左衞門が、神影流の祕傳の極意を自らそれを書認め一卷となし我君へ、献納なせし事ありしが、我に傳授せしのみにて、他へ洩らさゞる祕傳の極意を、如何いたして牛窪氏が、それを存じて居りまするか、凡天下に存ぜし者は、御前と拙者其許のみ。して我父が献納せし、祕密の傳書は今以て、御上に御所持でござりますか。

道之　世にも稀なる傳書ゆゑ、御寶藏へ祕め置きしが、然も昨年五月の末、降りつゞいたる雨上り、御寶藏へ賊入つて、その一卷を盗まれたり。

忠三　え、すりや盗賊入つて紛失せしとか。

道之　外に金銀鏤めし器物ありしをその儘に、一卷のみを盗みしは傳書を目がけて這入りし賊、竊に詮議いたせども、是といふ手掛りなく、今に傳書の行方知れず、爰に不審は牛窪が未だ未熟の身を以て、祕傳の極意を存じ居るは、彼が仕業と思へども、盗みしといふ慥かなる證據なければ詮議

もならず。

忠三　紛失せしとあるからは、その一卷を盜みとり、祕傳の極意を牛窪が會得なせしと存ぜられます。

道之　我もさこそと存ずるゆゑ、殿へ此由申上げ再度の試合をなせし折、彼れを見事に打据ゑて、極意の問答いたしなば、元より思慮なき九郎兵衞ゆゑ、うか〳〵傳書の趣きを答へいたすに疑ひなし。その折いづれで學びしと申さば答へに差支へん、深く問詰め一卷を、盜みし事を見顯はさん。

忠三　獻納なしたる一卷を盜みとつて極意を知り、廣言吐くは憎き牛窪、我父多年辛苦なし、書綴りたる祕傳の極意、人の譽れを奪ふ曲者、最早許しておき難し、再び試合の御許しあらば、その時こそは打据ゑて、彼に恨みを返してくれん。

〽面に怒りを顯して、勢ひこみし有樣に、道之進は打悦び、

ト忠三郎煙管を持ち、キット思入。道之進もこなしあつて、

道之　その所存申し上げなば、殿にも嘸かし御滿足、手前においても大慶なり、是より直に立歸り、けふの樣子を申上げ、再度試合の日を取極め、使者を以て申し送らん。

忠三　何分ともに、御前よろしく。

道之　承知いたした。

すが　それでは再び試合を願ひ、けふの恥辱をすゝぐとか。
お秋　とは言へ勝負は時の機み、再びおくれをとる時は、返す〲も恥辱なり。
忠三　母へ孝行盡さんと、態と負けたるけふの試合。
道之　その儀は氣遣ひいたされな。必定勝つに疑ひなし。
すが　さうなる時は御歸參叶ひ、
忠三　以前へ返る忠三郎。
お秋　悦びあれば悲しみと。(ト思入あつて、)一つ叶へば又一つ、苦勞の絶えぬことぢやわいな。
〽妻は心にかゝる雲、日ざしも落ちし夕暮に、以前の家來立ちかへり、
ト お秋ぢつと思入。ばた〱にて下手より以前の中間出來り、
中間　最早夕景にござりますれば、いまだお歸り遊ばしませぬか。
道之　丁度よい所へ參つた。直に歸宅いたすであらう。
忠三　すりやお歸りでござりまするか。
道之　殿にも嘸かしお待ち兼ね、片時も早く立歸り、此趣を申上げん。
すが　何卒御前の御取成。

お秋　よろしうお願ひ申しまする。

道之　委細承知いたせしぞ。

ト合方きつぱりとなり、荒川道之進門口に出る。

忠三　左樣なれば荒川樣。

道之　後日の使者を相待ちめされ。

〽暇を告げて荒川は、道を急ぎて立歸る。〔ト荒川道之進に磯平附き、花道へはひる。〕

〽跡見送りて母親は、一人ほた〳〵打悦び、〔トおすが悦ばしき思入あつて、〕

すが　再度の試合にそなたが勝てば、故主の御家へ歸參が叶ひ、元の御扶持を賜はらば今の貧苦に引替へて、樂に此世を送らるゝ。けふの今迄年老いて生き甲斐のない事なりと、明暮れ愚痴に悔みしが、此上もない身の仕合せ、此樣な嬉しい事はない。

忠三　長年御苦勞掛けましたが、仕官いたせば主人のため、いつ何時一命を、捨てねばならぬが武士の道、さすればあなたへ孝行をいたすことがならざれば、仕官を思ひ切りましたが、父へ不孝と仰せゆゑ、再度の試合をいたしまする。

すが　思ひがけなく殿樣の、お召しになるも亡き夫が冥土でお守りなさるゆゑ、歸參をなして元々の武

士になるのが家のため、子供のためでござるわいの。

きく　それではこれから父様は、お侍になるのかえ。

すが　大小さして歴々の、お侍になるのぢやぞ。

きく　それは嬉しうござりまする。これ千代松、お侍の子になれば、今にとう〳〵さすのぢやぞ。

千代　早うとう〳〵さしたいわいの。

〽悦ぶ子供に妻は猶、物思ひげに差しうつ向く顏を娘はさし覗き、
ト此内お秋ぢつと思入。おきく傍へ來て、

きく　母樣、お前も嬉しうござりませうな。

お秋　おゝ、嬉しうなうて何とせう。（ト思入にて言ふ。おすがこなしあつて、）

すが　何は兎もあれ故主の御家へ、歸參になるを亡夫の位牌へ、お知せ申さうわいの。

きく　ばゝ樣奧へお出でなら、

千代　坊も一緒に行かうわいの。

すが　おゝ、おぢい樣にお目にかゝりや。

〽二人の孫を引連れて、奧の佛間に入りにける。（トおすが二人の手を引き奧へはひる。）

〽跡見送りて女房が、顏を覆うて忍び泣き。

ト お秋顏へ袖を當てゝ泣く。忠三郎是を見て、

忠三　これお秋、再度の試合に勝つ時は、歸參をなして又元の、武士になられる身の仕合せ、母人などは一方ならず御悦びなさるゝに、何でそなたは泣きやるのぢや。

お秋　そのお悅びが我身には、誠に悲しうござりまする。

忠三　なに悲しいとは。（ト誂への合方になり。）

お秋　思ひ出せば八歲跡、亡き父母の菩提のため、はる〴〵遠き奧州より、坂東三十三番の觀音樣の靈場を順禮なさんと來る途中、杖と賴みし供のものが、路用の金を持逃げなし、その夜の宿りに困りしを、不便と思うてわたしをば、お留めなされて下すつたお情深き母樣が、その以前からお不快ゆゑ、御恩返しに逗留してお世話をなせしが緣となり、庄屋樣のお媒人で夫婦となりて二人まで、可愛い子まで儲けまして、友白髮の末々迄、添ひとげる氣でござりましたが、晝は田畑の農業なし、夜は絲とり機を織り、髮もいつしか結びしまゝ、汚れし衣類を洗ふ間もなく取亂したる此姿、農家にかうして居ればよけれど、故主の御家へ御歸參なされ、立派なお身になられましたら、連添ふ此身も御新造と、人に言はれませうけれど、餘りと言へば賤しい身に、大方わたしに

[illegible]

[illegible] [illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible] [illegible]
[illegible]

[illegible] [illegible]
[illegible]

[illegible] [illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible] [illegible]

な事をいやるな。

お秋　取り越し苦勞をいたしますのが、これが持病の血の道の爲、たゞ悲しくてなりませぬ。死ぬのは人の定業の爲、少しも悔みはいたしませぬが、今わたしが死んだらば、嘸や跡で子供らに、お前がお困りなされませう。

忠三　今死ぬかなんぞのやうに、なんでその樣な事を言ふのだ、別に悲しい事もないに、泣くのはみんな血の道の爲、早ういつもの藥出しても、呑んですつきりしたがよい。

お秋　血の道の爲に泣くまいと、思ひましても悲しくなり、涙の止度がござりませぬ。

〽泣き入るお秋を引寄せて、背を撫でて介抱なす、折から立出る子供らが、

ト お秋咽び入るを、忠三郎引寄せ、背中を撫る。此時奥よりおきく千代駈出來り、これを見て。

千代　やあ、父樣と母樣とはうやらはやら、いゝふや〳〵。（ト手を叩きはやす）

きく　これ、そんな事を言はぬものぢや。

ト これにて兩人放れて、

忠三　えゝ喧しい、何を言ふのだ。

お秋　そんな事を是から言ふと、お父を叱つてやりますぞ。（トきつと言ふ）

千代　母樣、堪忍して下さりませ。

〽兩手を合せいたいけに、詫びる我子にいとゞ猶、又悲しさに泣きければ。

ト千代松手を合せあやまる。お秋是を見て、別れを惜しむ思入にて泣く。

忠三　いつまでそなたは泣いてゐるのだ。早う藥でも呑まぬか。

トきつと言ふ。これにてお秋泪を拭ひ、

お秋　常からわたしの血の道は、泣くのが癖でござりますゆゑ、御苦勞かけて濟みませぬ。どれ藥を買うて參りませう。

忠三　それではいつもの藥はないのか。

お秋　つい、切らしましてござりまする。

忠三　もう今に暮れようから、おれが買つて來てやらう。

お秋　えゝ勿體ないお前さんを、なんでわたしが使はれませう。立場の内にござりますから、ちよつと買つて參ります。（ト立ち上る。）

千代　母樣、坊も一緒に行かう。

お秋　そなたは内に待つてゐや。

千代　厭ぢや〳〵、おんぶして行きたいわいの。

お秋　そんなら一緒に來やいの。

〽千代松背負ひ門口へ、出ればおきくが送り來て、

ト　お秋千代松を背負ひ門口へ出る。おきく門へ來て、

きく　母様、早くお歸りなされませ。

お秋　おとなしう留守をしや。

〽これが別れと夫や子の、顔打ちまもり胸先へ、せき來る涙呑込みし哀れを告ぐる鐘の音に、

追はれてこそは急ぎ行く。

ト　お秋よろしく愁ひの思入あつて、時の鐘、風の音にて花道へはひる。

〽折から立出る母親が、あたり見廻し、座につきて、

ト　奥より以前のおすが出來り、あたりへ思入あつて、

すが　お秋は何處へか行きましたか。

忠三　血の道が發りまして、藥を買ひに千代松つれ、立場迄參りました。

すが　何かしく〳〵泣き聲が、聞えるゆゑに遠慮して、こゝへ出ずに居ましたが、心に障ることでもあ

つてか。

忠三　何もあれが心に障る、左樣な事はござりませぬ。

すが　いや障ると言へば今し方、畑作殿と田六殿と人相見を連れて來て、是非見て貰へと言ふゆゑに、お菊とわたしが見て貰うたが、お菊は勝れたよい相で、此子を産んだ母御の相を、見たいものだと言ふ所へ、丁度お秋が歸つて來て、相を見ようと言うたれど、恥かしいから厭ぢやと言うて、奥へ逃げてはひつた跡で、相見は不審な顏をして、世にも稀なる人物ぢやと、お秋がことを言ひました。

忠三　我女房を褒めるぢやないか、十人並に勝れた器量、相見が不審な顏をせしとは、變つた事でもござりまするか。

すが　そればかりでなく此わしが、相を見て貰うた時は、此家に汚れの障りがあるゆゑ、開ける運も開けぬと言うたはどういふ事なるか。

忠三　開ける運も開けぬと、言はれて見れば八年此方、引續いての不仕合せ。

すが　それが汚れの障りなるか。

忠三　その障りになる汚れと言ふは。

すが　如何なる物が汚れるか。

卜兩人合點の行かぬ思入。此時おきく頤のとれし狐の面を出し、

きくや、こりや千代松が腹を立たう、狐の頤がとれました。（卜兩人の中へ出す。）

忠三　狐の頤がとれしとか。（卜兩人面へ思入あつて、）

すが　怜し

忠三　母人、心ならざる、

兩人　ことぢやなあ。

へもしやと二人うなづきて、暫し詞も。

卜時の鐘三重にて、兩人よろしく思入あつて、此道具廻る。

（根本ヶ原子別れの場）――本舞臺一面の平舞臺、眞中に榎の大樹、日覆より同じく釣枝、正面上下共一面の芒原、此後同じく芒原、夜の遠見、これへ灯入りの月を出し、總て根本ヶ原夜の體、時の鐘、三重にて道具留る。卜知らせにつき、上手霞幕を切つて落す。爰に竹本連中居並び、出語りの淨瑠璃になる。

〽嵐吹く、根本が原の一里塚、茂る榎の邊りには枝道多き芒原、誰が招くか狐火の影さへ凄き夜の道。

ト本釣鐘、床の合方、かすめて風の音にて、花道より以前のお秋、千代松を背負ひ出來り、花道へ留り、

〽我身もけふは秋の末、惜しむ名殘に幾度か、心引かるゝ道のべの、鳴子の音におどろかれ、榎のもとへ辿り來て、

ト此内跡へ心の引かるゝ思入にて、行きつ戻りつ迷ふ思入。よきほどに鳴子の音する、これに驚き本舞臺へ來り、

千代　かゝ樣、あんよが痛い、おんりして歩かうわいの。

お秋　おゝさうであらう〳〵。どれ〳〵おろしてやりませう。(ト千代松をおろし)こゝは榎の一里塚、幸ひあたりに人も居ず、一休みして行かうわいの。

〽木の根の上に腰を掛け、見れば木の間の月影も、風に叢立つ浮雲に、憂き事積る胸の内、晴れぬ思ひに袖濡らす、時雨に近き寐覺め月、

ト本釣鐘、風の音、此内お秋千代松をおろし、榎の根へ腰を掛け、ちつと思入、遠見の月へ村雲かゝ

る。お秋は顔へ手拭を當て泣く。千代松これを見て、

千代　かゝ樣、なんで泣くのぢやえ。

　〽縋る我子をぢつと見て、

お秋　おゝ、これが泣かずに居られうか。（ト思入あつて涙を拭ひ）これ千代松、そなたは賢い產れゆゑ、今かゝ樣の言ふ事を、幼心によう聞きやや。（ト床の合方に竹笛を冠せ、）此母は元人間ならず、あさましい身の者なるが、八とせ跡の秋の末、根本が原の芒原に寐てゐた所を狩人に既に打たれて死ぬところ、そなたのとゝ樣忠三郎殿に、危ふい命を助けられ、その恩返しを仕ようため、坂東三十三ヶ所の靈場廻る順禮と、姿をかへて宿りを乞ひ、一夜の奉謝にあづかりし、その折母御の病氣にて、看病なすも男の手一つ、人手の入るを幸ひに逗留なして恩返しに、まめ〳〵しく働きしを、庄屋殿の目に止り、嫁にしたらばよからうと、媒人をして下さりまして、遂に夫婦のかたらひなし、おきくとそなたを儲けしゆゑ、疾にも故鄕へ歸るべきを、子の恩愛に引かされて、徒に月日を送りしは、

　〽そら恐しい此身の罪、

荒川樣の御取成にて、再び試合の御免あつて、その時勝てば歸參が叶ひ、以前の武士にならるゝ

夫、高位の御前へ出づるゆゑ、汚れのあつては出世の妨げ、それを思へば添伏しも、

〽昨夜の床が名残りにて、いとしい夫や可愛い我子に、別れにやならぬ果敢ない身。それを思へば悲しうて、どうも泣かずに居られぬわいの。

千代　かゝ樣、お前がそんなに泣くと、坊も泣きたうなるわいの。

お秋　おゝ尤もぢや／＼親子一世の別れぢやもの、蟲が知して悲しからう。おきくは最早や七つゆゑ、少しは物の辨へあれど、僅か五つの此の千代松。

〽嘸あしたから泣き入つて、歸らぬ母を探すであらう。

八歳この方我子の如く、お目かけられて下さりました、お情け深き母樣へ、御恩も送らず子供らの、御厄介をかけねばならぬ、それを知りつゝ此儘に、おのが古巣へ歸りますは、夫のためを思ふゆゑ。

〽とは言へ此儘歸らずば、何が不足で夫子を捨て家出をせしと我身をば、お恨みなさるでござりませうが、お許しなされて下さりませ。

まだ年ゆかぬあのおきく、此の千代松もあなたのお世話、どうぞ人となりますやう、手習學問裁縫の道をお教へ下さりませ。

〽我家の方へ手を突いて在すが如く伏し拜み、

ト此内お秋よろしくこなしあつて、

長の年月けふ迄も、人に素性を氣どられねど、別るゝ時が來りてか、思ひがけなく最前來た、相見が不審を立つたのは、人と違ひし我相ゆゑ、長居をなさば怪しまれ、化生の者と悟られん。

〽誠に汚れの障りにて立身出世の妨げと、聞いては片時もゐられぬゆゑ、最前夫へ餘所ながら、暇乞ひして出づる折、

此の千代松が跡を追ひ、是非なく一緒に連れて來たれど、今となりては足手纏ひ。これ千代松、かゝ樣は遠い所へ、これから行かねばならぬから、そなたは利口者ぢやゆゑ、今來し道を早う歸りや。

千代　一人では道が知れぬ、かゝ樣一緒に歸つて下され。

お秋　これから内へは一筋道、眞直に歸りやいの。

千代　厭ぢや／＼、一緒でなくては厭ぢや／＼。

お秋　それではどうでも歸らぬか。

千代　一緒でなくては歸らぬ／＼。

〽袖に縋りて放れねば、不便な者と思へども、心弱くて叶はじと、

ト千代松袖に縋る。お秋思入あつて、

お秋　此か丶樣の言ふ事を、聞かずば不斷そちが怖がる、根本の狐に喰はしてしまふぞ。

千代　根本の狐は怖いから、堪忍して下され。

お秋　そんなら一人で內へ歸るか。

千代　あい、一人で歸ります。

お秋　內へ歸らば忘れずに、今か丶が來る道で、休んだ折に認めた、此の書附を父樣へお目にかけてくりやいの。

千代　あい〳〵。

〽言ひつ丶取出す一通は、子の恩愛の血の淚、消入る思ひ放れ得ず。

ト半紙へ書きし、封じ文を出し、千代松の附紐へ結び、

お秋　さあ、狐の來ぬ內、早う行きや。

千代　あ丶い。

〽是非もなく〳〵千代松が、淚ながらに立歸る、後姿を見送りて、

ト千代松是非なく泣きながら花道の方へ行く、お秋これを見て、

お秋　狐と聞いて身を震はし、道も知れざる原中を、一人で歸る千代松が、

〽恐るゝ根本が此原に、幾歳ふりし、

ト雷序を打込み、薄ドロ／＼にて、お秋狐のこなし、

〽現在親を狐とも知らぬ我子の千代松が恐れて歸る不便さに、行きつ戻りつ恩愛の、きづなに引かれ穂芒の、風に亂るゝ、

ト床二挺の合方にて、千代松泣き／＼花道へ行く。お秋跡を追ひかけようとして又立歸り、子に迷ふ思入、始終狐のこなしにて、狐の狂ひよろしくあつて、

〽如くなり。

ト お秋泣伏す。千代松怖き思入にて、つか／＼と戻り來て、お秋に縋りつき、

千代　かゝ様、狐が怖いから、一緒に行つて下され。

お秋　まだ／＼そんな事を言ふか、根本の狐が喰ひに來るぞ。（ト狐のこなし。）

千代　あれ、怖いわいの。

お秋　怖くば早く、内へ歸りや。

千代　あい〳〵。

〽あいとは言へども行き兼ぬれば、いつそ姿を顯して、脅して內へ歸さうか、それより此身を隱すにしくなし、さうぢや〳〵と立上る、折から木陰に窺ふ忠三、

トお秋千代松をとらへよろしくあつて、ばた〳〵になり、以前の忠三郎出て、

忠三　やれ待て女房、暫く待て。

お秋　や、我夫か。（ト袖にて顏を隱す。）

忠三　今そなたが影を隱さば、二人の子供が不便ゆゑ、よしや狐であらうとも、成人なすまで待つてくれ。

お秋　八年此方包みたる素性をあかせし上からは、最早や面は合されませぬ。

忠三　それぢやと言うて。

お秋　我夫、さらば。

〽とゞむる袂を振拂ひ、人影隱す穗芒の茂みへひらりと飛入りて、姿は見えずなりにける。

トドロ〳〵のやうな風の音、忠三郎の留めるを振拂ひ、仕掛にて芒原へひらりと飛び入る。千代松これを見て、

千代　かゝ様いなう〳〵。

忠三　おゝ跡を慕ふは尤もだが、再び母は歸らぬぞ。（ト附紐の書物を見遣り）や、そちが附紐に結付けあるは。

千代　こりや父様や婆様へ、お目にかけろと言うたわいな。

忠三　なに、是を見せろと言うたのか。

〽紐とく〳〵と父親は、取る間遲しと開き見て、

ト千代松封じ文を出す、忠三郎開き見て、

「みどり子の母はと問はゞ女化の、原になく〳〵伏すと答へよ。」血汐をもつて記せし書置、扨は八歳その跡に、此原中で助けたる、女房お秋は狐にて、おのが古巣へ歸りしか、やゝゝゝ。

〽餘りの事に打驚き、尻邊にどうと坐す折柄、木陰を出づる母娘、

ト忠三郎どうと下に居る。ばた〳〵になり下手よりおすがおきく出來り、

すが　木陰で樣子は聞きましたが、扨は嫁女は此原で、

忠三　八年跡に我助けし、恩を報はんその爲めに、

すが　姿をやつして妻となり、母が看病なしたるか。

きく　わしやかゝ樣に逢はぬから、どうぞま一度逢ひたいわいの。

忠三　子ゆゑに迷ふは親の常、いまだ爰らに居ようから。

すが　二人で呼んで見やいの。

きく　かゝ樣、顔を見せて下され。

兩人　かゝ樣いなう〳〵。

ト兩人うろ〳〵と呼び歩く。

忠三　そなたを慕ふ二人の子供、不便と思はゞ今一度。

すが　母にも姿を見せてくりやれ。

〽くどき歎けば恩愛に、引かれて又も顯はす姿。

トドロ〳〵雷序になり、芒原より以前のお秋、ひらりと飛出て狐のこなしにて、辭儀をする。

忠三　や、女房か。

すが　お秋か。

子供二人　かゝ樣いなう。

〽縋る二人を拂ひのけ、さらばとばかり秋霧に、姿は消えて、

トドロ〳〵にて子供二人縋るを拂ひのける。これにて鬘衣裳とも引拔き、白の好みのこしらへになり、雷序を打込み、狐火をあまた出し、お秋眺への烟にて立木の内へ消える。忠三郎は千代松、おすがはおきくを止め、これを見上げる。引張りよろしく、右の鳴物三重にて、

幕

三幕目

信田家辻番の場
藩中小山宅の場
潮來里玉屋の場
同堤下田甫の場

〔役名――牛窪の下部彌三平、曾根忠三郎、小山の下部與惣次、牛窪九郎兵衛、小山眞三郎、玉屋の若い者化七、大橋軍八、鹿倉伴作、森山專藏、堂崎運平、辻番足輕李藏、火の廻り權平、同伴助、駕籠舁庄中塚三次、同地藏の六介。玉屋のお玉、若黨信三の幽靈、玉屋の小じよく小玉、同小宮、同小でん、同小島、忠三郎一子千代松、內藝者おこん、朋輩女郎おいれ、同およれ。小山の下女おすぎ等。〕

（信田家辻番の場）――本舞臺眞中に九尺の辻番所、本庇式臺附、跡へ下げて常足の二重、上下幅狹き、間半棧の戸、向う板羽目、六尺棒をかけ、前に膝隱しの衝立、角行燈あり、平舞臺下手へ辻行燈、

後ろ一面の練塀見越しの松、總て、信田家塀外の體。二重にしやうぶ革の足輕、辻番の前に四人の足輕、菖蒲革の袴、股立をとり弓張提灯と六尺棒を持ち立ちかゝりゐる。時の鐘、合方にて幕明く。

○　おい杢藏殿、まだ今夜は船が出ねえな。

□　酒と言ふ汐がそこりで、居睡りの船は出ねえ。

○　おら達もまだやらねえから、四つの廻りに來た時に、どぶろくを一升提げて來よう。

△　鮪の刺身と言ふとこだが、そんな贅澤は言はねえから、何んぞ肴を奢んなせえ。

□　さつき鹽物屋の權兵衞が、うるめ鰯をおつ付けていつたが、それを肴にしてはどうだ。

○　うるめ鰯は油濃くて、こちとらの口には何よりだ。

△　それぢやお後にこつそりと、三人で一杯やらう。

□　然し廻りを怠たつたら喧しやのお頭が、あした小言を言ふだらう。

○　なに、今夜は風は少しも吹かず、穩かな晩だからお頭も宵から寐て、廻りの惡いを知りやあしまい。

△　かういふ晩に廻りを拔き、酒でも呑まにやお續かない。

□　ほんに貴樣も此のおれも、いつがいつまで足輕で、辻番や夜廻りをするも、意氣地のねえことだ。

○一足飛びに出世をして、知行取りになりてえと、及ばぬことを思つてゐるが、
△元より智慧のない上に、腕に覺えは少しもない生涯うだつのあがらぬ體だ。
□どうで、上から見出されて、立身をする身ぢやあなし、好きな酒でも呑むのが徳だ。
○いや人の運とはいひながら、今度御當家へお抱へになつた曾根殿といふ人は、以前親御が劍術でお抱へになつて居たさうだが、腕がいゝのでお目にとまり、三百石でお抱へになるとは、運のいいことだ。
△それといふのも神影流の、祕傳の極意を極めてゐるゆゑ、御前試合で牛窪殿を打据ゑる程の腕があるから、劍術柔術は及ばねど、酒なら誰にも負けやあしねえが、見出してくれる人がねえ。
□その忠三郎殿といふ人は、根本村に居た時分、狐が女房に化けてゐて、而も二人まで子供が出來夫へ貞節姑へ孝行、人恥かしい所業ゆゑ、社を建てその狐を、女化稻荷と祭つたさうだ。
○信田の森の葛の葉は、作り物だと思つてゐたが、その女化の事を聞くと、昔もあつた事と見える。
△どうか狐を女房に持つて、おれも出世をしてえものだ。
□こなたは睾丸が大きいから、狐より狸がよからう。
○狸も福を授けるもの、文福茶釜の福々と、

□　腹太鼓でも叩くがいゝ。
△　それより一晩潮來へ行つて、腹太鼓をば叩きてえ。
□　そいつも出來ない相談だ。
○　早く廻つて一杯呑まう。
兩人　火の廻り〱。

ト矢張り時の鐘、合方にて兩人下手へはひる。上手より序幕の牛窪九郎兵衛、羽織着流しにて出來り。

九郎　こりや、杢藏は居るか。
□　これは〱牛窪樣、何ぞ御用でござりますか。（ト敷臺へ出て下に居る。）
九郎　ちとその方に賴みがあるが、火急な事で此手紙を、中田村の庄屋方まで、持つて行つて貰ひたい。

ト懷中より手紙を出す。

□　お安い御用でござりますが、相役がをりませねば、爰を明けて參りましては。
九郎　それは決して氣遣ふな。その方が歸るまで、身共が番をいたしてやらう。
□　近頃恐入りますが、左樣なすつて下さりますれば、安心いたして參られます。

ト九郎兵衛、懷中より紙包みの金を出し、

九郎　歸りに一杯呑んで參れ。

□　これは御酒代迄頂戴いたし、有難うござります。

九郎　急がずと行つて參れ。

□　へい〳〵畏りました。こんないゝお使はない。おれも運が向いて來たわえ。

ト合方にて下手へはひる。九郎兵衛跡を見送り、上手へ向ひ手招ぎをする。是にて合方きつぱりとなり、上手より序幕の下部彌三平、頰冠りにて出來り、

九郎　辻番の杢藏に、使を言ひつけやつたれば、最早誰に遠慮もない、先づ爰へ來やれ。

彌三　御免なされて下さりませ。

ト合方替つて、九郎兵衛二重に掛ける、彌三平手拭をとり、式臺へ上る。

九郎　手前に逢ひたい所であつたが、何處へ今迄行つてをつた。

彌三　慾に迷つて先達、小山の若黨信三が、金を持つて居るのを見てから、歸る所を附いて行き、取らうと思つたその金を、こかされたのが癪に障り、殺す氣もなく殺しましたも、あの夜あなたと私が、話を蔭で信三が委しく聞いたと申しますゆゑ、無據殺しましたが、露顯をすれば人殺しに死罪の仕置を受けねばならず、それから直に逐電して、布川の在の知邊を便り、暫く隠れて居り

ましたが、御恩になつた御主人へ、もう一度お目にかゝり度く、爰へ忍んで參りました。
九郎　むゝ、おれに手前が逢ひたいとは、又お定まりの無心であらう。
彌三　いえ、左樣ではござりませぬ。
九郎　いや無心でないとは珍らしい。道理で雨が降りさうだ。
彌三　今晩あなたを此裏手へ、お呼び出し申したは、お暇乞ひをいたさうと、存じましてござります。
九郎　暇乞ひに來たといふのは、上方へでも行く心か。
彌三　いえ、上方ではござりませぬ。行けば再び此世では、お目にかゝらぬ遠い國へ、參ります氣でござりまする。
九郎　それではめつたに行きかひならぬ、樺太へでもそちは行くのか。
彌三　此彌三平の參りますのは、十萬億土でござりまする。
九郎　え、冥土へ行くといふからは、扨は命を捨てるのか。
彌三　へえ、首でもくゝるか身でも投げて、死する心でござりますから、是まで長々御恩になつた、御禮旁々今生のお暇乞ひに參りました。(ト彌三平しほ〳〵と言ふ。)

九郎　そりや、何ゆゑに世を捨てるのだ。

彌三　潮來川岸で信三を殺した事が知れますれば、言はずと此身は死罪の兇狀、然しこれといふ證據がなければ、詮議になるとも申しませぬが、其日を送る稼ぎに困り、最早隱れてゐられませぬ。御仕置うけて切られるより、自身に命を捨てまして、死ぬのがましと思ひ詰め、覺悟を極めましたゆゑ、此世でお目にかゝりまするは、今宵限りでござりまする。隨分あなたは御機嫌よく、百萬年經ちまして、冥土へお出でなされた時、御恩返しをいたします。

九郎　それではいよ〳〵、そちは死ぬ氣か。

彌三　今申します譯ゆゑに、是まで惡事をいたしました、罪亡ぼしに死にまする。思へば度々御無心申し、御迷惑をかけましたれば、憎い奴と思召しませうが、假令僅かのその內でも、主となり家來となるは、前世からの深い緣、不便なやつと思召さばお胸に浮んだその時に、たゞ一遍の念佛をお手向けなされて下さりませ。これが此世のお別れと、思ひますれば淚がこぼれ、お名殘り惜しうござりまする。

ト彌三平しほ〳〵と手拭で淚を拭ふ。九郎兵衞思入あつて、

九郎　いや、此結構な世を捨てゝ、死ぬといふのは無分別、命を捨つるは止めにいたせ。今日食に困る

とあらば、手前が合力してやるから、他國へ參つて忍んでゐやれ。

彌三　それは有難うございますが、是まで度々御無心を申した上に又候や、御合力を受けましては、人の道に缺けまする、矢張り此身の罪亡ぼしに、首でもくゝつて死にませう。

九郎　それはあんまり短氣なことだ。死ぬのはいつでも死ねるから、合力いたす金を持つて、いづれへなりとも立退きやれ。

彌三　人でなしをそれ程までに、思召して下さりますも、御主樣なればこそ、そのお志しを無にしては勿體なうございますから、御合力を頂戴いたし、生延びますでございます。幸に上總の木更津に身寄りがあればそれへ參り、晝は田畑の助けをなし、夜は夜業に草鞋でも、作りましたら一人口樂に暮して參られませう。

九郎　手前がさういふ心なら、幸ひこゝに十兩あれば、此金子を遣はすから、これを持つて當所を立ち退け。（ト懷より紙包みの十兩を出してやる。）

彌三　それではこれを下さりますとか、えゝ有難うございまする。（ト頂き。）これから直に潮來へ行き、踊りを踊らせ騷ぎましたら、たゞ一晩で十兩は、酒の泡に消えますが、これから草鞋を作る氣で十兩あれば一生涯、樂に暮らして行かれます。これと申すもあなたのお蔭、旦那樣有難うござり

まする。

ト式臺へ頭を附け禮を言ふ。

九郎　これからいよ〳〵改心して、百姓業をいたす氣か。

彌三　一旦死なうと思つた所を、お助けなされて下すつた御恩を忘れず今日から、生れ替つた了簡で、きつと改心いたします。

九郎　むゝ、まこと改心いたすなら、折入つて頼みがある。

彌三　そのお頼みと、おつしやりますは。

ト合方きつぱりとなり、九郎兵衛あたりへ思入あつて、

九郎　頼みといふは外ではない。先年手前に盗ませし、神影流の極意の傳書、我が仕業とは誰あつて知る者もなかりしが、この程御前で忠三郎と、試合をなせしその時に、如何いたして神影の極意を會得いたされしと、彼が問ひしはその父が、獻納なせし一巻ゆゑ、向ふが委しく存じ居れば、極意は手前存ぜぬと、言ひ紛らして歸つたが、荒川初め家中の者が、神影極意の一巻は、我が盗みしと悟りし樣子、もし家搜しでもされし時は、忽ち露顯いたす故、今宵こつそり何れへか、隱さんものと一巻を是へ所持なし參つたが、實は隱すところに困り、如何はせんと思ふ所、其方上總

へ參るなら、暫く預つてくれまいか。（ト懷より袱紗包みの一卷を出す。）

彌三　お困りなれば私が、お預り申して、竊に隱して置きませう。

九郎　然らばそちに渡すから、しつかりと預かりくれ。（ト渡す、彌三平受取り。）

彌三　せめての事の御恩報じ、人の心の附かぬ所へ、こつそり隱しておきまする。

九郎　事によりなば信田家をば、手前も出奔なすかも知れず、さすれば上總へ尋ねまゐるが、そちが參るその先は、なんと申す名前なるぞ。

彌三　上總の國木更津村で、漁夫を渡世にいたします、網七と申します堅氣な者でござります。

九郎　むゝ、漁夫をいたす網七ぢやな、

彌三　左樣にござりまする。

九郎　これで手前も安堵いたした。今宵は門弟打ち寄りて、忠三郎を片附ける密談あれば別るゝぞ。

彌三　左樣なれば御機嫌よろしく。

九郎　いづれその内尋ね參るぞ。

彌三　お待ち申してをりまする。

九郎　氣をつけて參れ。

ト時の鐘合方にて、九郎兵衛上の方へはひる。彌三平跡を見送り、

彌三　旦那樣、有難うござりまする。御恩は死んでも忘れませぬ。

　トちつと跡をながみ、辭儀をなし氣をかへて、

忘れたら又參ります。（ト時の鐘替つた合方になり、思入あつて煙草入から手紙を出し）極意の一卷盜んだ時、褒美代りにくれた禮狀、これをかせに五兩三兩度々無心を言つたゆゑ、所詮たゞぢやお役すめえと、急拵への新狂言、誠に迫つて死ぬやうに、空涙をこぼしたが、九郎兵衛樣がすつかり瞞され、いつもは五兩と刻むところを、てんから十兩金をくれ、まだその上に思ひがけねえ神影流の極意の一卷、うつかりおれに預けたは、こんな旨え話はねえ。受目になつたところだから、此十兩で潮來へ行き、お玉を口說き落してえが、何をいふにも人殺しの兇狀のある體だから、行くのも何だか險難だ。止してこれから歸らうか。思ひきつて駕籠で行かうか。爰が潮來の思案橋だ。（トよろしく思入あつて向うを見て）や、向うへ誰やら來る樣子、見咎められては身の上だ。どれ、ちつとも早く立退かう。

　ト時の鐘、合方、彌三平頰冠りをして花道へ行きかける。右の合方にて、花道より小出貞三郎、羽織着流し大小にて出來り、花道にて行合ひ、双方避け合ひ、貞三郎舞臺へ來る。彌三平は花道へ這入る。

あらうわいな。

與惣　それには何ぞ證據があつてか。

すぎ　昨夜お召物を疊む時、お袂から出たその文は、今日お目にかゝりたいと迎への文でござんしたわいな。

與惣　あれ程行かぬとおつしやつたに、はてさて困つたものだな。

すぎ　わたしや御隱居樣のお迎ひに、大橋樣へ參りますから、後をお賴み申しますぞえ。

與惣　後はおれが留守をするから、早くお迎ひに行くがよい。

すぎ　まだお歸りなされませねば、お湯を頂戴して來ますから、遲くなるかもしれませぬ。

與惣　おゝゆつくり行つてござれ。

ト合方にておすぎ下手へはひる。跡に與惣次思入あつて、

先達潮來にて、若旦那と妹へ事を分けて異見なし、二度と再び足は向けぬと、そのほとぼりのさめぬ內は、何處へもお出でなされぬゆゑ、御緣女も取極り、御結納も濟みたれば、月を越したら御婚禮と、指折りかぞへて待つところへ、又此頃は種々な名をつけ、絕えず他出をなされまするが、妹に未だお心殘り、お通ひなさるに違ひない。もしこの事が御隱居樣の、お耳へ入つたその

時は、申譯のない與惣次、いつそのことに妹を殺したならば若旦那の、御放埒も止まうと思へどいまだ年季のある體、さうした日には主人の迷惑、就ては親のことなれば、母へ難儀をかけるは必定、今にもお歸りなされたら、篤と御所存承はり、矢張り妹に御未練殘り、潮來へお通ひなさるゝなら、いくら御異見申したとて所詮糠に釘なれば、御隱居樣への申譯、我が命を捨つるより最早外に思案はない。

ト與惣次ちつと思入、合方きつぱりとなり、下手より以前の眞三郎出來り、直に門口をあけ、

眞三　與惣次今歸りしぞ。

與惣　おゝ若旦那樣でござりますか、お待ち申して居りました。

眞三　待つてゐたとは、何ぞ用か。

與惣　最前私が出ましてから、直にお出かけなされたと、申す事でござりますが、何れへお出でなされました。

眞三　與惣次、そちには濟まぬことだが、昨日是非にとお玉から、迎ひが來たゆゑ潮來へ行つた。

與惣　え、すりや妹から迎ひが參つて、

眞三　謠の師匠へ行くと僞り、實は逢ひに行つたのだ。（ト與惣次きつと思入あつて、）

與惣　え丶お情ない若旦那樣。（ト誂への合方となり、）先達も申せし如く、荒川樣のお娘御と御婚姻は、有難くも殿樣よりのお指圖、御家老樣と御縁を組めば、此上もない御家の譽れ、一家中にて肩身も廣く、御立身の種なれば、願うてもない幸ひゆゑ、一日も早く御婚禮をなされますするが御身の御爲め、潮來通ひをなされますを、御隱居樣も御存じにて、既に先頃私へそちが忰へ異見して女郎の方を思ひ切らせ、荒川殿の娘御を嫁に貰うて安心したいと、そのお頼みを承はる、身の苦しさは御存じか御存じないか知らねども、相手は現在我が妹、先づ兎も角も御異見を申上げんと此間、妹と丶もに申せし所、お聞濟み下されて、其後御他出なきゆゑに、御安心をなされませと、自慢心で申し上げた、まだその口の乾かぬ内、潮來へお出でなされては、此與惣次が御隱居樣へ申譯がございませぬ、妹の事より御婚姻がもし御破談にでもなりましたら、申譯に私は、命を捨てねばなりませぬ。身の切なさを若旦那、御推量なされて下さりませ。

ト思入にて言ふ。眞三郎も思入あつて、

眞三　その腹立は尤もだが、もう心配には及ばぬぞ。

與惣　なに、心配に及ばぬとは。

眞三　昨日お玉のところから、是非逢ひたいと文が來たゆゑ謠の師匠へ行くといつて、玉屋の二階へ行

つたところ、感心なのはお玉が心。

與惣　あれ程異見を言つたのに、あなたをお呼び申すのが、何で感心しませうぞ。（ト腹の立つ思入。）

眞三　實はお玉に未練が殘り、あれから一二度行つたれど、行く度毎に兄へ濟まぬと、常に違つて早う歸れと、我身を思ふその親切、迎ひの文にけふ行けば、御婚姻も取り極り、御結納が參りましたと申すことゆゑ私は、惡い噂のないやうに、あなたを思ひ切りまする、證據はいつぞや取換せし起請をお返し申しますから、あなたの方をも私へ、お返しなされて下されと、涙ながらに守袋より起請を出して我へ返し、此後お出でなさるとも、再びお目に掛りませぬと、流石はそちが妹とて、我身を思ふお玉が貞節、兄も案じてをりませうから、これを屆けて下されと、認めおきし此文を、我へ頼んでよこせしぞ。（ト眞三郎懷より文を出す。與惣次思入あつて、）

與惣　いつぞやあれ程思ひ切り、再び逢はぬとおつしやつたが、その後度々逢ひしとあれば、心までが泥水の女郎になりし妹お玉、何を書いて寄越せしか、見るのは無駄でござりまする。

眞三　まあさう言はずと、讀んで見やれ。

ト眞三郎文をさしつける。與惣次是非なく手にとりて、

與惣　さうおつしやれば主と家來、お詞はそむかれませぬ。どれ、何を書いてよこしたか。（ト文を開き

見て、」「一筆しめしまゐらせ候、兎角時候悪しく候へども、母様御前様も御機嫌よく、御目出度く存じまゐらせ候。さ候へば先達て私への御異見、しみ〴〵と身にこたへ。」えゝ、身にこたへもねえものだ。うはの空で聞いた證據は、又若旦那を呼んだではないか。

眞三　こりや、さう腹立てずと、跡を讀むがよい。

與惣「しみ〴〵と身にこたへ、跡にて考へ候へば、幼き時より一方ならず厚き御恩を蒙りし御主様へ御苦勞かけ、誠に〳〵濟まぬことに候まゝ、朝夕御屋敷の方へ向ひ、御詫び申上まゐらせ候。」それ程主人へ濟まぬなら、なぜ若旦那を呼んだのだ。えゝ此不忠ものめが。（ト思はず眞三郎の胸づくしをとり、きつとなつて心づき、）是は眞平、御免なさりませ。

眞三　さ、その後を。

與惣「又今日若旦那樣を、お招き申し候は、互ひの起請をお返し申し、二世をかけし縁を切り、再びお目もじいたすまじくと、神々樣を誓ひに立て、お別れ申し候まゝ、御安心下さるべく候。」むゝ、こりやちつと感心した。「是まで長々御苦勞かけ候へば、定めて憎いやつと私を、お恨みも御座候はんが、たゞ〳〵お許しの程願ひ上まゐらせ候。」こりやあ詫びるも尤もだ。むゝ、さうだらう〳〵「別れともなき若旦那樣とお別れ申し候も、御隱居樣への御恩返し、よろしく御取成し下さるべく候。

まだ〳〵申上げたき事御座候へども、涙のみ先だち候へば、御目もじの節と書殘しまゐらせ候。先はあら〳〵、目出度かしく、御兄様、玉より。」（ト讀終り思入あつて）むう、すりや妹は御恩を思ひ、あなたを思ひきりましたか。ても、感心なことだな。

眞三　今感心せぬと言やつたが、お玉がけなげな心を聞いては、感心せずばなるまいが。

與惣　おつしやる通りけなげな奴、これでこそ我が妹、おゝ出かしたお玉、感心々々。

ト與惣次文を持ちよろしく思入

眞三　此心根を我も聞き、未練殘さず起請を返し、我が送りしも此如く、その場で互ひに引裂きて、再び逢はぬ誓ひを立てゝ、けふを一期に歸つたれば、そちも安心してくりやれ。

ト袂より引裂きし起請を出し見せる。

與惣　さういふ事と存じませねば、御隱居樣へ申譯に、既のこと命をば、捨てる覺悟でござりました。危い命を助かりましたが、これにつけても不便なは、非業に死んだあの信三、今日は立日でござりまするが、中有に迷つてをりませう。

眞三　その信三を殺せしかと、疑ふ下部の彌三平に形恰好の似た者に、裏門前で出合ひしが、我に恐れて逃げ行きしは、まさしく彼に相違ない。

與惣　今宵こゝらを立廻るは、逐電なして錢に困り、主人へ無心に參りしならん、行方を捜して引とらへ、非業に死んだ信三の、敵をとつてやりませう。

眞三　それのみならず神影の、極意の一卷盜みしは、彌三平なりと申す噂。

與惣　兎にも角にも引捕へ、惡事をばらしてやりませう。

眞三　未だ近くに徘徊なさん。

與惣　遠くへ行かぬその内に。

眞三　いそふれ與惣次。

與惣　心得ました。

ト尻を端折り、きつと見得、時の鐘、早き合方にて、此の道具廻る。

（潮來の里玉屋の場）――本舞臺一面の平舞臺、向ふ中切の襖、上の方一間障子折廻し、下の方廊下口の片遠見出這入り、總て、潮來玉屋廣間の體。爰に臺の物、白鳥の德利、酒道具を置き燭臺を燈し、上手に以前の彌三平酒に醉ひし思入にて住ひ、傍におこん內藝者のこしらへにて三味線を持ち、おいれ、およれの女郎住ひ、下手においしの二階廻し、化七の若い者住ひ、皆々酒を吞み居る體、流行

唄にて賑かに道具留る。と彌三平有り合ふ茶碗をとつて、

彌三　さあ、もう一ぺいついでくれ。

こん　もうよい加減になされませ。そんなに上つて醉つてしまつては、肝腎の時にいけませんよ。

彌三　いくら酒を呑んだつて、醉ふやうなおれぢやあねえ、こぼれるやうについでくれ。

トおこん酌をする。彌三平呑みながら、

そりやあさうと、今夜名差しのお玉は、いよ〳〵おれに出るか。

化七　お玉さんが出なさいますは、きつとお受合ひ申します。お前樣の旦那樣、牛窪樣も此頃の時雨同樣ふり通され、根負けしてお出でなさらず、間夫と噂のぱつと立つた、小山樣には御家老から、嫁御が來るのをお玉さんが、話しを聞いて大腹立、すつかりいや氣になつた樣子。

いし　今此玉屋の板頭、一と云つて二のないあの子、さつきちよつと話したら彌三さんならば疾うからして、いゝ人たと思つてゐたのだから、出してくれと大悅び、三社參りの旅人を歸すと直に行きますから、少しの間座敷をば、つないでくれとわたしへ賴み。

こん　お玉さんの來なさんす迄、御酒をちつと止めにして。

よね　なんぞ賑かな事をして、遊はうぢやあござんせぬか。

彌三　また此土地で名物の、潮來の踊りを見ねえから、惣揚げにして踊らせよう。
こん　わたしどもは形が大きく、どたばた埃が立つばかり、
よね　それより子供の踊りの方が、よつほど器用でようござんす。
いね　子供の踊りになさいまし。
彌三　それぢやあ子供を呼んでくれ。
いし　はい〳〵畏まりました。七どん、子供を集めてくんな。
化七　今奥座敷で踊つたばかり、支度も出來てをりますから、直に連れて參ります。
　ト化七廊下口へはひる。
いし　どれも〳〵よい器量で、粒が揃つてをりますから、まあお慰みに御覽なさい。
彌三　早くそれを見てえものだ。（ト下手奥にて、）
化七　さあ〳〵、みんな早くおいで。
子供四人　あい〳〵。
　ト右の鳴物にて、廊下口より小じよく小玉、小宮、小でん、小鳥、何れも好みの鬘、振袖、對の衣裳にて化七附き出來り、下手へ住ひ、

お客様、今晩は有難うござります。（ト辭儀をする）

彌三　成程こりやあどれも綺麗だ。もう二三年で見世へ出たら、銚子通ひの船頭や、此の近在のせなあ達が、夢中になつて來るだらう。

こん　お客様のお待ち兼ね、支度がよくば直に踊りを。

彌三　一番野暮に、所望だ〳〵。

四人　あい〳〵。

ト太鼓入りの潮來節になり、四人手拭を冠り、振になる、彌三平これに見とれ、

彌三　こいつあ面白い〳〵、おれも一緒になつて踊らう。

ト手拍子を打ち、囃しながら立上り踊る、子供彌三平を留め、

小玉　お前様はおとなだから、

小宮　背丈が高くていけません。

小で　わたしどもと揃ふやうに。

小鳥　背丈を低くなさいまし。

彌平　おッと、合點だ〳〵。

ト彌三平頰冠りをなし、背丈を低く蹲み、四人の中へはひり踊り、四人早めて踊る、彌三平踊れば思入にて、

いし　お前さんが此やうな、隱し藝があらうとは、ほんに今迄存じませなんだ。

化七　一寸法師の踊などは、實に感心いたします。

いね　まだ此外にござんせうから。

よね　なんぞお出しなさいまし。

彌三　まあ息つぎに大きいもので、一杯呑まにやあ何も出來ねえ。（ト茶碗を出す。）

こん　お酒は止しになさいまし。お玉さんがお出でなさいました。

彌三　なに、お玉が來た。

化七　早くお前樣の顏が見たいと、いそ〳〵して來なさいました。

ト流行唄になり、下手廊下口より、序幕のお玉、潮來女郎好みの拵へにて出來る。彌三平ちよつと見れを見て、上手を向き、鬢のほつれを撫で、襟を合せなど、いやらしきこなし。

化七　お玉さん、大層けふは美しうござりますね。

お玉　そりやあ、見せる人があるからさ。

化七　念入れのお作りと見えますね。
いね　此間からお玉さんが、どうかしてお客にしたいと、蔭で惚けてゐなさんした。
よね　彌三平さんがお出でなさんして、嘸嬉しうございませう。
お玉　皆さん察しておくれ。
こん　玉屋の内の板頭、引手あまたのお玉さんに、かう惚れられるとは彌三平さん。あやかりものでござんすね。（ト彌三平の背中を叩く。）
彌三　そんなことを言はれると、逆上せて耳が聞えねえ。
小玉　逆上せて耳が聞えずば。
小宮　聞えるやうにわたしらが。
こん　よいことをして上げますから、
小鳥　ぢつとしておいでなさいよ。（ト左右から彌三平に取付き、其の側へ口を寄せ）
四人　耳ッとう。
彌三　猶々ぐわん〳〵言つていかねえ。
化七　もし彌三さん、お玉さんがお前さんに見せるつもりでこつてりと、作り立てた美しさ。

いし　それに目元がほんのりと、ほろ醉ひ機嫌の櫻色、ほんに色氣がこぼれるやうだ。
こん　知らない顏をなさらずと、こつちをお向きなさいましよ。
彌三　なに、見ずともそりやあ知つてゐる。
いね　そんな事を言はないで、
よね　お玉さんを御覽なさいよ。
彌三　おらあこつちを、向くのが勝手だ。

トちよつとお玉を尻目に見て、嬉しき思入にて上手を向き居る。お玉思入あつて、

お玉　牛窪様のお迎ひに二階へお出での時分から、彌三平さんに惚れたれど、何を言ふにも御主と家來、せうことなしに辛抱して、ぢつと怺へて居た所、牛窪様はいたちの道、さつぱりお出でなさらぬ所へ、鼠鳴きする今夜の嬉しさ、誰憚らずお客にして、日頃の思ひを晴らさうと、樂しみにして爰へ來たのに、顏をそむけて詞もかけず、かうしてぬしに振附けられるも、わたしがお氣に入らぬゆゑ、どれ、お邪魔にならぬやう行きませう。

トお玉腹の立つ思入にて、ずつと立つて下手へ行きかける。彌三平びつくりして、留めたき思入あつて脇を向く、化七おいしとお玉をとめ、

化七　これお玉さん、何を腹をお立てなさるのだ。

いし　今お前に行かれると、此場の花が散つてしまふ。

こん　折角惚れた彌三さんが、今夜お出でなすつたに。

いね　まあこゝへ來て、機嫌直しに、

よね　一つお上りなさんせいな。

お玉　あんなに蔭で惚けてゐた、彌三さんに嫌はれたから、朋輩衆へ對しても、外聞が惡いから、いつその事身でも投げて、わたしや死んでしまひたいわいな。

化七　いや、飛んだことを言ひなさる。玉屋の内の一の客取り、

いし　お前に死なれてなるものか、そんな無分別を出さないで。

こん
いし　まあ〳〵爰へ、お出でなされませ。（ト皆々お玉を留め、無理に引据ゑる。）

お玉　それだといつて死ぬほどに、惚れてるわたしに顏も見せず、あんまりすげなうござんすから、悔しくッてならぬわいな。

いし　こりやあお前の言ふのが尤も、まあ〳〵わたしに任せなさんせ。（ト彌三平の傍へ來り、）もし彌三平さん、お玉さんへお前さんが、顏をお見せなさらないから、死ぬと言つてゐなさいます。

化七　惚れた一途に身でも投げて、死んだら直にドロ〳〵で、取殺しに出なさいませう。
彌三　えゝ縁起でもねえ、鶴龜〳〵々々。（ト信三を思ひ出し、氣にかゝる思入。）
こん　それが怖くばお前さんの、顏を早くお見せなさんせ。
彌三　誰も見せねえと、言やあしねえ。
こん　そんなら早く。
皆々　お見せなさんせ。
彌三　そんなに見たくば、ゆつくり見ろ。（ト彌三平お玉の方を向いて、顏を見せる。お玉思入あつて）
お玉　わたしに見せるがいやだから、わざとそんな怖い顏をして。
彌三　なにも、怖い顏をしやあしねえ。
お玉　お前がわたしに惚れたやうな、顏をしなさんせ。
彌三　惚れた顏は、こんな顏か。（ト彌三平横目を遣ひ、妙な顏をする。）
お玉　いえ〳〵、さうぢやありませんよ。
彌三　さうでなくば、こんな顏か。（ト又顏をかへて見せる。）
化七　まだ〳〵、そんな顏附きでは。

いしお玉さんの氣には入るまい。
彌三どんな顏をすりやあよいのだ。
こん惚れた顏をなさるなら、目尻を下げなくてはいけませんよ。
いし彌三目尻を下げるはむづかしい。
いねなに、むづかしいことはありません。
よね指で引張ると下ります。
彌三むゝ、それぢやあ、かうか。(ト兩の手で目尻を引張る。)
お玉それで口をアンとあきなさい。
彌三アヽン。(ト口をあき、)
小烏坊はいゝ子だ、アワヽをおしよ。(ト口を叩く。)
彌三アワヽヽヽ。(アワヽをする。皆々笑ふ。)
お玉是程わたしが見たがるのに、わざッとそんな顏をしてみんなに見せて、私に見せるがいやならば見なくつてもようござんす。えゝ、腹の立つ。
ト烟管を投り出す。

化七　これさ〳〵お玉さん、そんなに腹を立つてはいけない。
いし　機嫌をおなほしなさいまし。
お玉　いえ〳〵、ぬしに嫌はれたら、腹が立つて〳〵ならぬわいな。（ト鼻紙を顔へ當てゝ泣く。）
彌三　誰がおぬしを嫌ふものか、これおつかあ、お玉の機嫌を直させてくんねえ。
いし　お前さんがをかしな顔をして、おからかひなさるからだ。
化七　こりやあやまるより外、しやうはござりませぬ。
彌三　おゝあやまつて濟むことなら、おれがお玉にあやまらう。
こん　さあ〳〵早くおあやまりなさいまし。
彌三　今のはおれが惡かつた、腹がたつたら堪忍してくれ。（ト頭を下げて詫びる。）
お玉　いえ〳〵、そんなあやまりやうでは、わたしや堪忍ならぬわいな。
彌三　どうすれば、堪忍なるのだ。
お玉　もつとあたまを下げなさんせ。
彌　　おつと合點だ。（ト疊へ頭をつける。）
こん　まだ〳〵、高うござります。

彌三　これよりあたまの下げやうがない。
化七　縁の下へ穴をあけて、首をおいれなさいまし。
彌三　えゝ、そんな事ができるものか。
お玉　わたしやぬしに振附けられ、悔しくツて〳〵疳の蟲が起つたから、なんぞ嬉しいと思はなければ急に蟲はをさまらぬわいな。
いね　その蟲の納まるのは、お玉さんが大好きな、江戸で流行の都々逸だ。あれを一つお唄ひなさい。
彌三　おらあ聲が悪いから、唄を唄つたことがない、
いね　あつてもなくても都々逸を、お前樣が唄はねば。
よね　お玉さんがいつ迄も、腹を立てゝ居なさんすから、
こん　さあお前さんの心意氣を、何ぞお唄ひなさいまし。
彌三　それぢやあどうでも唄ふのか。
小宮　遅いとみんなで。
こん　擽りますよ。（ト四人立ちかゝり彌三平を擽る。）
彌三　あゝ唄ふから、堪忍してくれ。

こん　さあ、早くお出しなさいまし。

彌三　おこんさん、彈いてくんねえ。

こん　あい〱。（トおこん三味線を彈く。）

彌三　〽五分もすかない緒〆の玉を、結ぶ縁の女夫鋲。」（ト都々逸を唄ふ。）

皆々　ヨウ〱。

お玉　とてものことに字あまりを、最一つわたしに聞かしておくれ。

彌三　おゝ字餘りなら、かういふのがある。（ト字餘りの長い都々逸を唄ひ、）もう堪忍してくれ〱。

お玉　お前さんの都々逸で、すつかり蟲が納まりました。

彌三　そいつは何より有難い。

こん　ほんに彌三さんの咽は、いゝ咽でござりますね。

いね　此の都々逸には、どんな者でも。

よね　岡惚れに惚れますよ。

お玉　こんな調子のいゝ人は、又と外にありやあしないね。

いし　此の調子には浮々と、わたしでも惚れたくなります。

化七　ヨウ〳〵、色男様々々々。

彌三　あゝ、あつい〳〵。（ト手拭で胸をあふぎ、汗をふく。）

お玉　みんながあんなに惚れるから、猶更わたしや惚れましたよ。

ト お玉彌三平の背中へ取付く、彌三平逆上せし思入にて、

彌三　あゝ、あつい〳〵。（ト汗を拭く。）

化七　ときにお玉さんの蟲がをさまり、御機嫌が直つたら、長くゐるのは氣が利かない。

いし　媒人は宵の内、お開きとしようねえ。

こん　ほんに、それがようござんす。

お玉　七どん、爰へ床を廻しておくれ。

化七　はい、そのつもりでござります。

ト 拾ぜりふにて上手屋體より夜具を出し、よき所へ敷き、屛風を立てる。

いし　さあ〳〵、お邪魔にならぬ内。

いね　そんならお玉さん。

よね　今夜はしつぽり。

皆々　お樂しみなさんせ。

お玉　あしたなぶつておくれでないよ。

いし　思入れなぶつて、

皆々　上げませう。

ト潮來騷ぎになり、皆々下手廊下口へはひる。跡彌三平お玉殘り。

お玉　もし彌三さん、疾うからお前に焦がれてゐたに、よく今夜來ておくんなすつたね。

ト言ひながら、彌三平によりかゝる。彌三平嬉しき思入、誂への合方になり、汗を拭きながら。

彌三　おれもぞつこんおぬしに惚れ、とうからこつちへ來たかつたが、何をいふにも都合が惡く、今夜思はず金が手に入り、直に駕籠で飛ばして來たのだ。

お玉　金の事なら是から先、必ず心配おしでない。お前の都合の惡い時は、仕掛を脱いでも達引く氣だよ。

彌三　それぢやおぬしは、仕掛を脱いでも達引いてくれるとか。

お玉　仕掛どころか命でも、お前ゆゑなら上げる氣さ。なぜこんなに惚れたらうね。

トお玉彌三平の顏を指で突く。彌三平ぞく／＼嬉しき思入。

彌三　守宮の黑燒は持つてゐねえが、なんでおぬしに惚れられたか。

お玉　なんで惚れたとは言はずとも、そりや知れたことでござんす。男振りと氣前のいゝのに、疾うから惚れてゐたゆゑに、鹿島樣や香取樣へ茶斷をしたり鹽斷をしたり、無理な御願をかけましたが、その御利益で思ひがけなく、今夜お前が來なさんしたので、わたしや嬉しくて〱、手に物がつかぬ位、一晩位ぢやあッけないから、どうぞあしたもあさつても、居續けをしてたんのうする程嬉しがらせて下さんせ。

彌三　おぬしがさういふ心なら、二日も三日もぶん流して、嬉しがらせてやりてえが、ちつときざな事があつて、長く爰に居られねえ。

お玉　そりや、何ゆゑでござんすえ。

彌三　なんぼ惚れてゐるおぬしでも、うつかりこれは言はれねえ。

お玉　言はれないとは彌三平さん、水臭いぢやありませんか。わたしや女房の氣でゐるのに、隱し立てをしなさんすは、他人がましいお前の仕方、さあそれを言ひなさんせ。

ト彌三平の胸づくしを取り、こづく。

彌三　あゝよく言ふやつだが、咽佛がつぶれる〱。

お玉　さあ、早く言ひなさんせ。
彌三　女房と思ふおぬしだから、大事をあかして聞かせるが、人に言つてはならねえぞ。
お玉　何で人に言ひますものか。
彌三　言はずば明かして聞かせよう。（ト懐から以前の一卷を出し、）爰に持つてゐる此の一卷は、信田の御家の寶物、神影流の極意の傳書。
お玉　そんなら、それが。（ト一卷を見て思入。）
彌三　此の一卷はその以前、牛窪樣に頼まれて、窃におれが盗んだが、此頃詮議が嚴いから、爰にうかうか足を留め、うつかり持つて居られねえ。
お玉　それでは何處かへ行きなさんすか。
彌三　是から上總の木更津へ、暫く行つて隱れるつもりだ。（トお玉思入あつて、）
お玉　さういふ事ならわたしも一緒に、連れて逃げておくれでないか。
彌三　なに、一緒に連れて逃げてくれ。
お玉　逢はぬ昔は知らぬ事、かうして今夜逢つたからは、片時放れともないから、どんな所でも厭はぬゆゑ、どうぞ連れて逃げておくれ。

彌三　それぢやあ、眞實上總へ行つて、おれと一緒に居てえとか。
お玉　連れて行つて下さんせねば、わたしや死んでしまひます。（ト泣く。）
彌三　それほどおれに惚れたとあれば、置いて行くのも氣掛りだ。これから直につれて逃げよう。
お玉　これから直では夜更けゆゑ、一番雞の鳴く時分、夜明に逃げて下さんせ。
彌三　夜明になれば人目にたつが、夜更ぢやあ惡いのか。
お玉　幽靈が怖いから。
彌三　え、幽靈が怖いとは。
お玉　潮來川岸で先達て、非業に死んだ信三さんが、中有に迷つて夜更になると、毎晩出ますと言ひます
から。（ト彌三平ぎよつと思入あつて、）
彌三　むゝ、あの信三の幽靈が潮來川岸へ出るといふのか。そいつア氣味の惡い話しだ。
お玉　それだから明方に、連れて逃げて下さんせ。
彌三　さういふことなら夜明けにしよう。
お玉　きつと連れて行つておくれだね。
彌三　連れて行かねえで、どうするものだ。

お玉　それぢやあ路用の都合をするから、ちつとの內待つてゐておくれ。（ト立上る）

彌三　路用の都合は有難え、早く行つて來てくんねえ。

お玉　お前の傍に居たいから、直に行つて來ますよ。（ト流行唄になり、お玉下手廊下口へはひる。）

彌三　旦那の供で二階へ來た時、ろく／＼物も言はねえお玉が、こんなにおれに惚れたといふは、どういふ風の吹き廻しだか、これから直に帆をかけて、上總へ行つて夫婦となり、なんと一緒に居てえとは、こんな嬉しいことはねえ。

ト天窓を叩き嬉しき思入よろしく、時の鐘、風の音になり、彌三平思入あつて、

今夜はまだ引前だらうに、今の間にひつそりと、何處も彼處も靜になつたが、何だか後ろが見られる樣で、一人でゐるのはどつとしねえ。

ト氣味の惡き思入、一つ鉦を打込む。彌三平びつくりして、

や、あの鉦はなんだらう。近所に死人でもあつたか知らぬ。襟元がぞく／＼して、氣のせゐか障子から吹込む風が、生臭いやうだ。

ト風の音、凄き合方になり、彌三平氣味の惡き思入にて、

おらあ怖いといふ事を、今迄ちつとも知らなんだが、今夜は滅法氣味が惡い、お玉が早く來れば

いゝが。

ト凄き合方ドロ〳〵にて、下手屏風の蔭より、序幕の信三髪を亂し、序幕の衣裳、薄色好みのこしらへにて俯向き出る。

おゝ、そこへ來たのはお玉か、早く爰へ來てくんねえ。

ト信三の幽靈の傍へ行き、手をとり、

さつきおれが顔を見せず、じらした意趣を返すのか、早く顔を見せてくんねえ。

信三　わたしの顔が見たいのか。

彌三　や、さういふ聲は。

信三　潮來川岸で非道にも、こなたに酷く殺された、小山の若黨信三だ。

彌三　えゝ。(ト彌三平びつくりしてひつくり返り、)や、信三か、堪忍してくれ〳〵。

信三　浮みもやらず中有に迷ひ、爰へ姿を顯はしたは、おのれが命を取らうため。

彌三　おれを恨むは尤もだが、ふつと金がほしくなり、殺す氣もなく殺したのだ。これも前世の二人が因果、死ぬ定業とあきらめて、堪忍してくれ〳〵、これこの通り手を合はして、拜む〳〵。

ト手を合して信三の幽靈を拜む。

信三　いや／＼、取殺さねば腹がいぬ。

トドロ／＼にて、彌三平の傍へ來る。彌三平跡ずさりして、

彌三　あゝこれ／＼、傍へ寄つてくれるな／＼。（トこなしあつて、）追善供養をしてやるから、取殺すのは堪忍してくれ。

信三　今更そんな事を言つて、いくらおのれがあやまるとも、命を取らねば料簡せぬ。

彌三　そんなことを言はねえで、早く爰を消えてくれ。

信三　いや／＼、消えぬ／＼。

トドロ／＼にて、彌三平を附け廻す。彌三平懐から一卷を出し、

彌三　神影流の極意の一卷、怨敵退散々々。

ト一卷を振廻す。ドロ／＼にて信三の幽靈跡ずさりに屏風の傍へ來る。彌三平「怨敵退散」と一卷を差附ける。ドロ／＼掛煙硝にて、信三の幽靈屏風へ消える。彌三平ほつとして。

やれ、幽靈が退散したか。爰に一人ぢや居られねえ、誰ぞ來てくれ／＼。

ト手を叩く、下手にて、

子供四人　あい／＼――。（ト以前の小じよく四人俯向きにて出て、）

小玉　なんぞ御用で、

四人　ござりますか。

ト顏を上げる。附ものにて、一つ目、三つ目、四つ目、五つ目等化物のこしらへ、彌三平見てびつくりなし、

彌三　や、見れば一つ目三つ目五つ目、こりや本所へ行つたやうだ。

小玉　お客さん、

四人　嘗めて上げませう。

彌三　えゝ、嘗められてたまるものか。

ト彌三平逃げにかゝるを、四人にて追廻し。トゞこしらへものゝ長き舌で、彌三平の顏を嘗める。これにてうんと言つてバツタリ倒れる。皆々指さし笑ひながら、下手へはひる。これにてドロ〳〵打上げ、合方になり、下手より以前のお玉出來り四邊を窺ひ、彌三平の懷より傳書の一卷を出し、押頂きにつこり笑ひ、懷へ入れる。これをきつかけに、大ドロ〳〵掛煙硝になり、お玉屏風へ消える。知せにつき、道具、居所替りに替る。

（同土手下田圃の場）——本舞臺向ふ高二重の土手、上下芒原、樹木の張物にて見切り、土手の上に

垂を下せし四つ手駕籠、後ろ打拔き、在所夜の遠見、よきところに松の立木、日覆より同じく松の釣枝、彌三平の側に石地藏、古土瓶、缺茶碗、松の枝へ掛稻かけある、好みの道具に納まる。と、ドロドロにて、石地藏の蔭より縫ぐるみの狐出て、芒原へはひる。これにてドロ／＼打上げ、本釣鐘、風の音になり、彌三平心附き起上る。びつくりしてあたりを見廻し、思入あつて、

彌三　や、こりやどうしたのだ、人目を忍んで駕籠に乘り、上總へ行く氣で出かけたが、爰は潮來の田圃道、こいつあ狐に化かされたか。（ト誂への合方になり、眉毛へ唾をつけ、）もう化かされてしまつた後だ。つばきをつけても初まらねえ。今迄お玉と思つたは、お定まりの石地藏、又幽靈と思つたは、枝へかけた掛稻か、何處から爰へ持つて來たか、古土瓶に缺茶碗、酒と思つて呑んだのも、こいつア胸の悪い話しだ。（ト思入あつて、）何にしろ大事の一卷、又旦那から貰つた十兩、あれを落しては大變だが。（ト懷を搜して見て、）さあ、ねえわ／＼。扨はさつきの駕籠舁きに、金も一卷も盜まれたか。こいつはつまらねえ目にあつた。

ト彌三平腕組みをして、ほつとしたる思入。此時合方きつぱりとなり、後ろの芒原を押分け、與惣次半身出し窺ひ居る。

それともこゝちへ、落しやあしねえか。

ト本釣鐘、合方にて彌三平あたりを尋ねる。與惣次前へ出て、

與惣　彌三平、何を尋ねるのだ。

彌三　や、さういふわれは與惣次か。

與惣　手前は屋敷を逐電したが、今ぢやあ何處に隱れてゐるのだ。

彌三　何處に居ようとおれが勝手だ。居所を言ふにも及ばねえが、さういふ手前は何しに來たのだ。

與惣　おれも尋ねる者があつて、今しがた爰へ來た。

彌三　それぢやあもしや獨言を。

與惣　芒原で、聞いてゐた。（ト彌三平思入あつて、）

彌三　むゝ、扨は手前が盜んだな。

與惣　なに、盜んだとは。

彌三　いゝ、しらをきらずと出してくれ。

與惣　出せとは何を。（ト合方替つて、稽古囃子を薄く冠せ、）

彌三　おれが持つて居た、神影流の極意を記した、傳書の一卷。

與惣　むゝ、先年御家で紛失した、其一卷を持つてゐたからは、扨は主從なれ合ひで、彌三平手前が盜

んだな。

彌三　おゝ、さう知られたら隱しやあしねえ。三年跡に主人から盜んでくれと賴まれたは、而も五月の末の事、長降りのした五月雨も、夜風に晴れて物凄き、二十三夜の片割月、茂る若葉に蔭暗き、御殿を放れた奥土藏、稻荷の社を足代に土藏の壁を切破り、用意の灯りで盜み出し、外から賊の這入つたやうに、裏手の塀を毀しておいたは、神影流の傳書より、こゝらが惡事の極意の傳授、今日まで人にも言はなんだが、かう打ちまけて言ふからは、もう生かしてはおかねえぞ。

與惣　かねて御家老荒川樣が、心に角ある牛窪九郎兵衞、彼が仕業と鑑定ありし、目利は違はぬ寶の盜賊、其夜は暗い皐月闇、跡を晦まし知れねえと、思ふは手めえが身の愚、柾目の桐の二重箱、主從心を合せ袱紗に、人目を包んで隱すとも、蟲除けにする樟腦の匂ひはいつか外へ洩れ、疾うから尋ねてゐた所だ。眞田の紐でぐる〳〵巻き、縛られぬ内一巻を、すべよくおれに渡してしまへ。

彌三　その一巻は主人から、さつきおれが預かつて、慥に持つてゐた所、日頃は人をかすり目で化した狐に化かされたか、欲と色とのずりをかけ、潮來のお玉を張込んで、すつかり受けたと思ひの外、野原で飛んだ馬鹿を見たが、うぬが盜んだ傳書の一巻、四の五の言はずとおれに返せ、厭だと言やあ一六勝負、命をとるからさう思へ。

與惣　さういふ手前の命をば、こつちへ取らにやあならねえのは、角の曲つた牛窪が家來に名うての人喰馬、爰で狐に化かされて、音羽屋もどきの幽靈に手前が恐れた信三は、おれとは犬も朋輩中、昔話しのかち／＼山、一番兎が手柄をして狸の命を取らにやあおかねえ。先づ其前に極意の一卷、それをおれに渡してしまへ。

彌三　しらばッくれた事を言ふな。その一卷は今爰で、慥に手前が盗んだらう。

與惣　何んでおれが盗むものか、傳書は手前がどめて居よう。

彌三　どめて居ると思ふなら、おれが體を改めて見ろ。

與惣　おゝ、改めねえでどうするものだ。

彌三　先づその先に手前が體を、此彌三平に改めさせろ。

與惣　さういふわれから、改めさせろ。

彌三　どつちを先へ改めるか、

與惣　手前とおれの腕づく勝負、

彌三　所も潮來の土手續き、

與惣　茂る芒によしあしの、

彌二　善と惡との二道は、
與惣　娑婆と冥土の別れ道、
彌三　しかも河原の地藏前、
與惣　一重二重積む石より、
彌三　惡事を積んだ、
與惣　下部の彌三平、
彌三　爰で命の、
兩人　やりとりしようか。

ト尻を端折り、きつと見得。是より潮來節の入りし鳴物になり、土手を遣ひ立廻りあつて駕籠を持ち出し、これを拔けつ潛りつ立廻りあつて、兩人にて駕籠を差上げ、きつと見得。鳴物替つて兩人一腰を拔き、はげしき立廻りあつて、與惣次土手を辷り、平舞臺に落ちる。

彌三　此間に、さうだ。（ト上手へ逃げてはひる。）
與惣　うぬ、逃げるとて逃がさうか。

トばた〳〵にて跡を追つかけ、土手を上り、上手へはひる。やはりばた〳〵にて、下手より〇△の駕

籠舁き兩人、尻端折り、草鞋にて出來り、

○さつき乘せた中間が、駕籠から落した煙草入、重みは金と思つたから、一杯機嫌で寐たを幸ひ。

△そつと盜んで立場へ行き、祝ひ酒を呑みながら明けてびつくり小判で十兩。

○僅か一里のところをば、五兩づゝとはいゝ仕事、その上端た錢まで卷上げ、

△からは踏まねえ伊勢紙ゆゑ、後日の證據にならねえやう、往來ばたへ捨てたれば、

○殘しておいた駕籠を擔いで、

△ちつとも早く出かけよう。

○こんな間のいゝことはねえ。

ト時の鐘、風の音にて兩人駕籠を擔ぎ、足早に下手へはひる。合方ばた〳〵にて、上手より以前の牛窪九郎兵衞出來り、跡より序幕の大橋軍八、鹿倉伴作、森山專藏、堂島運平出來り、

四人 牛窪氏。

九郎 これ、(トあたりへ思入あつて、)御前試合の太刀筋で、神影流の極意の一卷、我が盜みしと荒川が、竊に詮議なす樣子、うか〳〵屋敷に足を留むれば、繩目の恥辱を受けた上、いかなる仕置に逢はんも知れず。

軍八　我々共は門弟なり、殊に貴殿の大望へ、荷擔なしたる上からは。
伴作　露顯に及ばず四人共、搦め取られて拷問受け、とも〴〵仕置に逢はねばならぬ。
專藏　それゆゑ今宵申し合せ、屋敷を逐電しましたが、
運平　先づさしあたり行く所の、目當がなければ何れへなりと。
軍八　お連れなされて、
四人　下さりませ。
九郎　手前とても當がなければ、一先づ是より木更津の彌三平方に參る心。各方にも一緒にござれ。
軍八　それは何より忝ない。
伴作　これ〳〵、四人は牛窪氏へ、
專藏　一味合體なす上は、
運平　死生を共に、
四人　なす所存。
九郎　然らばこれより木更津へ。
軍八　お供いたすで、

四人　ござりまする。

ト此以前上手へ前幕の曾根忠三郎、袴大小にて出で、窺ひ居て、

忠三　牛窪氏、お待ちなされい。

九郎　待てと身共を呼び留めたは。

忠三　信田家へ歸り新參の、曾根忠三郎でござる。（ト前へ出る。）

九郎　成程貴殿は曾根殿か。

軍八　待てとは、何ぞ、

四人　用でもあつてか。

忠三　呼び留めたるは外ならず、先年我父又左衛門が、獻納なしたる極意の一卷、こなたが盜み所持なす由、手前へ渡して縄にかゝれ。

九郎　やあ、身に覺えもない盜人呼はり、何を證據にそのやうな、我に言掛けいたすのだ。

忠三　何ゆゑ言ひ掛けいたさうぞ、慥な證據があつてのことだ。

作作　してその證據と、

四人　申すのは。

忠三　牛窪汝が盜ませし、件の下部彌三平へ、恩賞なさんと送りし一書、何と慥な證據であらうが。

ト懷より彌三平が持つてゐたる手紙をさし附ける。九郎兵衞びつくりなし、

九郎　どうしてそれが、手に入りしぞ。

忠三　汝が逐電いたせしと、聞きたるゆゑに盜みたる、極意の一卷取りかへさんと、跡を慕うて來る途中、足に障りし煙草入、中より出し一通の名前は牛窪九郎兵衞と、記しあるゆゑ取上げて、見れば汝が送りし一通、これにて汝が盜みしと慥かに知れしは是天命、白狀なしてきり〳〵渡せ。

九郎　あゝ、その一書が汝が手へ、這入りし上は最早是れ迄、如何にも極意を會得なさんと、下部彌三平に申附け、盜ませたは手前が仕業と、荒川が悟つた樣子に一卷は、疾うに外へこかしたわ。

忠三　して又何れへ渡せしぞ。

九郎　それを何で、言ふものだ。

忠三　たとへ言はぬと申すとも、それを言はせずにおくものか。

軍八　かく露顯なしたる上は、荷擔なしたる我々共。

伴作　遲かれ早かれ繩目にあひ、上の御仕置受けねばならぬ。

專藏　とてもの事に行きがけの、駄賃に試合の意趣返し。

運平　此の忠三郎を討つて捨て、恥辱をとつた、

四人　腹癒せなさん。

九郎　いづれも、かれを打たッせえ。

四人　心得ました。

忠三　ならば手柄に、打つて見よ。

四人　何を小癪な。

ト早き合方にて、四人拔きつれて打つてかゝる。ちよつと立廻つてよき見得より竹笛入り、誂への合方、忠三郎四人を相手に土手を遣ひ、烈しき立廻りよろしくあつて、四人叶はず下手へはひる。九郎兵衛拔いて切つてかゝる。立廻つて刀を打落し、取りかゝるを、どんとあてる、九郎兵衛うんと下に居る。忠三郎懷中をさがし見て、

忠三　や、こりや一卷は、所持なしならぬか。（ト九郎兵衛心附き）

九郎　詮議いたすを察したゆゑ、なんで持つてゐるものだ。

忠三　して〳〵いづれへ、渡せしぞ。

トばた〳〵になり、土手の上より彌三平、與惣次立廻りながら出來り、

與惣　その一卷はこいつめが、持つてをつたと申すこと。
忠三　すりや、それなる彌三平が。
彌三　牛窪樣から預かつて、おれが大事に持つて居たが、此原中で狐に化かされ、路用の金も一卷も、盜まれてしまつたわ。
九郎　やゝ、すりや一卷を盜まれしとか。
彌三　あなたへ對して私が、申譯がございませぬ。
忠三　扨は極意の一卷も、今は何れへ奪はれしか。
與惣　尋ね搜すも雲を當。
ト思入、うすドロ〳〵になり、狐火を出し、下手より前幕の千代松走り出來り、
千代　父樣爰でございましたか。
忠三　そちは千代松、何しに來たぞ。
千代　今母樣が父樣へ、これを上げろとおつしやいました。
ト懷から一卷を出す。忠三郎取つて見て、
忠三　やゝ、こりや我父が獻納せし、神影流の極意の一卷。

與惣　さては、それを母御樣が。
九郎　むゝ、忠三郎が女房は、根本の狐と聞きたるが、
彌三　それではお玉と思つたも、又信三が幽靈も、
千代　皆母樣の通力なるぞ。（トドロ／＼にてきつとなり。）
彌三　えゝ、化されたのか、いめえましい。
忠三　父が丹誠盡したる、傳書の一卷再び手に入り、
與惣　嘸殿樣にも御滿足。
彌三　是といふのも女化の、
九郎　狐が仕業であつたるか。
忠三　あら有難や。（ト一卷を頂くを木の頭。）忝なや。

ト九郎兵衞取りにかゝるを留める。彌三平立掛るを與惣次引留める。此見得よろしく、ドロ／＼・カケリにて、

ひやうし幕

女化稻荷（終り）

御定連の御好に随ひ
乍未熟も端物を選て　寫本當書場立讀

頃は慶安三年打込む櫓の春角力に盛る若木の櫻川が上見ぬ關の黒鷲を投し遺恨に橋場迄歸るを待乳の暗試合晴れぬ思ひに母親のお牧が探る裏問も表向にて婚姻を結ぶ甲斐なき腹切に娘お花が憂き別れ跡の菩提を唐犬も無罪と成りし出牢に武士の意氣地を立通す野守之助が悪計を諫むる主膳も仇と成り命を捨に行末を頼む忰や女房のお時に諭す一言に極樂十三清兵衛もとゞめかねたる血のなみだ雨にちり行く花川戸が水尾の屋敷の湯殿にてみがきあげたる男の本阿彌

極附幡随長兵衛

「極附幡随長兵衛」と「湯殿の長兵衛」には、明治十四年十月、作者六十六歳の時、春木座に上演された「一番目の長兵衛」は在來のものとは全然異り、事實談に據り、三幕と櫻川が鈴ヶ森の道場に原出し白柄組の頭領水野十郎左衛門の屋敷へ招かれ、浴室に於て殺害さるゝといふ筋、花やかに而も締りのある團洲世話物中では屈指と稱すべき傑作なり」と年代記に述べられてゐる芝居の道具を相撲の道場としたのは作者の創案であらう。後に三世河竹新七が芝居の金平法問を書添へて發端としたが、その後は相撲の件の代りにその發端と共に上演されるやうになつた。團十郎の家代長兵衛がその任であつて好評を得たばかりでなく、市川權十郎の十郎左衛門も亦適役であり、小團次の子分出ッ尻清兵衛が特に評判であつたことも傳へられてゐる。尚長兵衛が湯殿で槍に突かれてからの唸り聲は、團十郎の養父權之助が賊の爲めに惨殺された時のことを模したのだといふ逸話もある。

書卸しの時の役割は九世市川團十郎（幡随長兵衛）、市川權十郎（櫻川五郎藏、水野十郎左衛門）、坂東家橘（唐犬權兵衛）、岩井紫若（伊勢清お花）、市川小團次（近藤野守之助、出ッ尻清兵衛）、市川壽美藏（黒鷲官太夫、用人水尾主膳）、現中車事市川八百藏（子分極楽十三）、岩井小紫（長兵衛女房お時）、中村錄之助（高巻吉右衛門、黒澤庄九郎）等であつた。

口繪の着色木版は右田年英事梅斎筆の錦繪であり、挿繪にしたのは九世團十郎の舞臺寫眞である。

大正十三年十一月

編者誌す



極附幡隨長兵衞（幡隨長兵衞――四幕）

序幕　藏前八幡角力の場
並木巴屋二階の場

〔役名――角力櫻川五郎藏、男達唐犬權兵衞、角力黒鷲官太夫、行司志村庄之助、白柄組進藤野守之助、幡隨子分出尻淸兵衞、同極樂十三、黒鷲弟子渦卷吾右衞門、同黒骨扇藏、同雲の峯夏八、角力札賣長助。札差伊勢淸娘お花、同下女お民、巴屋の女お濱、角力茶屋娘お竹、其他。〕

（八幡社内角力の場）――本舞臺正面角力小屋滑り入口、よき所へ取組の札を掛け、上手に屋根附き石の手水鉢、納め手拭、此の傍奉納の石燈籠、下手に九足の角力茶屋、見附きに貼ビラなど大分に張つてあり、軒提灯、花暖簾、前に角力の板番附、ずつと上手神樂殿の横を見たる張物にて見切り、下手に建仁寺垣、櫻の立木、日覆より同じく釣枝、總て藏前八幡社内角力場の體。爰に見物の仕出三人○□△床几に掛け、半纏着流しの札賣立ちかゝり居る、お竹茶屋娘にて皆々へ茶を出して居る、此の見得角力太鼓へ大拍子を冠せ賑やかに幕明く。

○　今度の角力は天氣は好し、滅法當つたではないか。

□　此の前成田の不動樣の、開帳の時も豪氣に好かつた。

△　爰で興行する角力は、何時でも外したことはない。
お竹　それといふのも御近所に、御贔屓のお客さまが多いゆゑでございます。
札賣　今日の取組の內で見物といふのは、中入前の黑鷲關と櫻川、是れが大評判でございます。
○　大關の黑鷲は白柄組の旗本衆が、御贔屓になさるといふことだ。
□　又櫻川は町奴の男達が肩を入れ、是れも當時の賣出しだ。
△　櫻川は年も若し男は好し、おまけに手取りで人氣があるから、女が惚れるといふ噂。
お竹　ほんに櫻川關は女贔屓が多いので、方々の藝者衆やおいらん方も血道をあげ、毎日場所の出入りには、御近所の娘御さんが大騷ぎでございます。
札賣　その最負強い櫻川に當時名うての黑鷲關、この取組を初日前から御見物もお待兼でございます。
○　實はわたし共も此の取組を當に、見に來ましたのさ。
□　この一番の勝負により、旗本衆と町奴と、
△　どんな喧嘩が出來ようも知れないぜ。
札賣　それゆゑ年寄衆も心配をして居なさるさうだが、かういふ結びを極めるのも、勸進元をする生月關の、爰が山でございます。

お竹　生月さんは年寄衆でも、よい恰幅でございますねえ。

札賣　若い時はあの體にもう一嵩大きくつて、好い角力であつたが女が好きなばかりで、早く年寄りになりなすつた。

○　角力にはよく女が惚れるものだ。

△　おれも角力になりやあよかつた。

札賣　なつたところが褌擔ぎ、いえなに、褌擔ぎから、色をする櫻川のやうになるまでの辛抱が大變さ。

○　それよりやッぱり賭けをして、

□　儲けた上で女郎買。

札賣　それでは場所へお出でなさいまし。

○　姐さん歸りに置くよ。

お竹　よろしうございますから、お早くいらつしやいまし。

□　それぢやあ札賣さん、

△　一緒に行きませう。

札賣　さあ、おいでなさいまし。

ト角力太鼓になり、札賣先に三人わや／＼言ひながら小屋の口へはひる、此の鳴物にて花道より一、二、三の旗本三人羽織袴大小にて出來り、

一　何と御兩所、斯樣に毎日角力に參るも、最屓にいたす黑鷲に引けを取らせまい爲ばかり、さてさて彼れは仕合せなものでござる。

二　そりや我々ばかりでなく水尾氏を始め進藤氏、白柄組の旗本は皆黑鷲が最屓ゆゑ、

三　一口彼れの面を見ぬと、酒を過しても發散いたさず、其の日は心地惡しうござるゆゑ、角力へ來ずに居られぬて。

一　然らば早く參るといたさう。（ト三人舞臺へ來り、床几へ掛ける。）

お竹　旦那いらつしやいまし。（ト茶を出す。）

一　口々に參るこの茶見世、角力内とは申しながら、繁昌なことだわえ。

お竹　お蔭樣で興行中は、私一人では廻らぬ程でござります。

二　そちも角力が好きと見えるが、そちや誰が最屓だな。

お竹　私は櫻川が、いえあの、櫻川より誰より、一番黑鷲關がようござります。

三　黒鷲がよいとは頼もしい、して、黒鷲は參つて居るかな。
お竹　先程土俵入りが濟みまして、此の先きのお客さまの所へ呼ばれておいでなさいました。
一　おゝさうか〳〵、彼れも贔屓が多いゆゑ。
二　諸方の客で引つ張り凧と見えるわえ。
三　黒鷲が是れへ歸るまで、待合すといたさう。（ト爰へ角力小屋より、以前の札賣出來り、）
札賣　是れは番町の殿樣方、今日は大分お遲うござりました。
一　誰かと思へば札賣の長助か、今日は中入前が當てなれば、それで遲く參つたのだ。
二　承はれば黒鷲は、今客先きへ參つて居ると申すこと。
三　彼れが是れへ戻り次第、同道いたして入る積りぢや。
札賣　左樣ではござりませうが、御同役樣方は皆お棧敷で、あなた方をお待兼でござります。
一　おゝ左樣か、然らば各、直樣棧敷へ參らうではござらぬか。
二　いや、中へ參つた所が、肝腎の黒鷲が居りませんでは、
三　女郎買に參つて女が居らぬも同じこと。（ト此の内お竹向うを見て、）
お竹　もし、黒鷲關がお歸りなされました。（ト皆々も向うを見て、）

黒鷲　櫻川との取組に、頼むことゝおつしやりますは、どのやうなことでござりまする。
一　どうか櫻川に、勝つて貰ひたい。
黒鷲　それなればお頼みなくとも、土俵へ上れば敵味方、負ける心はござりませぬ。
一　さゝ、そこを念入れ頼むのぢや、（ト合方になり、）豫てそちの知る通り、櫻川五郎藏は、幡隨長兵衞を始めとして町奴が腰押しするゆゑ、是非勝つてくれぬ時は白柄組の名折になるゆゑ、そこでくどくも頼むのぢやて。
二　よく申す勝負は時の運、又どういふ機だの、やれ物のへいへいうりぢやなどゝ危げのないやうに、ちよつと念を入れて見たのぢや、決して氣にさへてくりやるな。
三　必ずそちに限つて左樣なことはあるまいが、萬一彼れに後れを取らば、常から武士を武士と思はぬ町奴が増長なし、如何なる無禮をなさんも知れぬて。
一　櫻川を土俵の砂へ埋めてしまへば町奴が、向後廓内で出合ふとも、尻尾を卷いて逃げるは必定。
二　さすれば我々ばかりでなく、旗本衆の鼻も高く、第一そちの手柄ゆゑ、
三　只今までに輪を掛けて、引立つて遣はせば、是非五郎藏を、
三人　投げてくりやれ。（ト黒鷲思入あつて、）

黒鷲　その事でござりますなら、必ずお案じなされますな、今賣出しで贔屓が多く、隨分巧者に取りますが、何といつてもまだ若年、下の者と取りましたら可なり幕の内に遣へますが、上の角力と立合うては、やう〳〵二段目がせいぎりな五郎藏、今度小結にしましたも年寄衆が幡隨はじめ男達への追從輕薄、口廣い申し分だが、此の黒鷲の目から見ると、櫻川は小雀同樣、羽根ツぱたきもさすことぢやござりませぬ、落着いておいでなされませ。

一　それ承はつて、

三人　安堵いたした。

渦卷　今親分が言ふ通り、なんぼ贔屓が多くても、娘子供がわや〳〵いうて人氣ばかりの櫻川、その證據は呼出しが黒鷲といふ名乘りを、上げるが最期氣後れがして、容易に取れることではござりますまい。

黒骨　所詮內の師匠には、及ばぬ今日の角力ゆゑ、

雲峰　寐るのは向ふも覺悟の前、したがお關取、投げ殺しては、

三人　いけませぬぞ。

黒鷲　そこはおれも承知ゆゑ、隨分扱うてやる氣だが、今のお賴みを聞いて見ると、大人けないが櫻川

を砂へ埋めてやらねばならぬ。

渦巻　可愛さうだと言ひたいが、稼業づくなら是非がない。

黒骨　なんぼ男達が腰押しでも、ほんの最屓の引倒し、

雲峰　斯ういふ時の役には立たず、氣の毒なことでござんす。

ト此の内旗本三人は悦ぶ思入、札賣前へ出て、

札賣　お連樣もお待兼ねゆゑ、兎も角もお場所へおいでなされませ。

一　然らば、黒鷲同道にて、

二　棧敷へ直に、

三　參るといたさう。

黒鷲　お供いたすでござりませう。

一　今日は供といふがあるものぞ、先きへ立つて、斯う威張つて參れ〳〵。

黒鷲　それではあまり失禮でござりまする。

二　なに、失禮なことはないから。

三　遠慮なく大手を振つて參れ。

黑鷲　左樣なら旦那方、お許しなされて下さりませ。

ト角力太鼓になり、黑鷲先に旗本三人、弟子、札賣附いて角力小屋へはひる。

お竹　如何に黑鷲關に贔屓ぢやとて、櫻川さんを今の惡口、どうで大關と小結では大關の強いは當り前、其の代り櫻川さんは男も好し程もよし、それに引替へ髭むちやで、見るから好かない黑鷲關、どうか櫻川さんが勝てばいゝね。

ト三味線入り大拍子になり、花道よりお花札差の娘のこしらへ、お民の下女日傘を持ち、丁稚三太小風呂敷包を背負ひ出來り、花道にて、

お花　これ民や、そなたは芝居と角力では、どちらが好きぢやえ。

お民　私はどちらも好きでござります。

三太　兩方見ようと思つて、ずるいお民どんだ。

お民　あれ、さうではないが、本當にどちらも好きでございます。

お花　三太は角力より芝居が好きであらう。

三太　私は芝居を見る時は、芝居が好きで、角力へ行けば角力が好きでござります。

お花　何を言やるぞいなう。(ト三人舞臺へ來り、床几へ掛ける。)

お竹　是れはお孃さま、お參りでござりまするか。
お花　今日は觀音さまへお願ひ申すことがあつて、お參りに行つた戾りでござんす。
お竹　それはようお參りなされました。（ト皆々へ茶を出す。）
お民　姐さん、角力中は嘸お忙しうござりませうな。
お竹　關取衆の出入りで、見世がごた〳〵いたしまする。
お民　今日はもう櫻川さんは、場所入りをしなさいましたかえ。
お竹　いえまだでござりますが、もう程なくおいでゝございませう。
お民　それでは爰でお花さま、待合さうではござりませぬか。
お花　ほんにさうしませうわいな。
三太　爰に居ると角力が見られてようござります。
お竹　お前さんも角力がお好きと見えますな。
三太　私も大好きでござりますが、內では旦那を始め、見世でも奧でもみんな角力が好きでござります。
お民　其の內にもお孃さんは、櫻川さんが大層御贔屓でございます。
お竹　ほんに櫻川さんは、役者のやうに女中衆が大騷ぎでございます。

お花　芝居と違うて角力へは、女子が行くことならぬので、遂に見たことがござんせぬゆゑ、どうかして見たい〳〵と思ふせゐか、昨夜わたしや角力の棧敷に居た夢を見たわいな。

三太　お孃さんは櫻川さんさへ見れば、外の角力はどうでもいゝのさ。

お竹　こりやさうでございませう、私のやうなものでも、櫻川さんはようございます。

お民　私も櫻川さんは、大好きでござります。

お花　さうみんなが贔屓では、油斷がならぬわいな。

ト太鼓入り米山になり、花道より櫻川羽織着流し、一本ざし、雪駄にて出來り、花道にて、

櫻川　今日は大關との結びゆゑ、勝たぬとて恥ではなけれど、負けては贔屓の男達へ明日から顏が合はされねば、一生懸命神佛へお願ひ申して來たからは、運に叶つて勝てば重疊、せめて分でも取りたいものだ。(ト舞臺へ來る、皆々見て。)

お竹　おゝ櫻川關、だいぶ御ゆるりでござりました。

櫻川　今朝出しなに寄らねばならぬところがあつて、それでいつより遲うなつた。

お竹　それでもまだお早うござりますから、まあお掛けなされませ、それに伊勢淸のお孃さまが、あなたをお待ちなされてゞござります。

お民　櫻川さん、此の間はおそう〳〵でござりました。

櫻川　これはお店のお民どん、さてはお花さまと八幡宮へ、お參りでござりましたか。

お竹　關取さん〳〵、私は向うのお手水鉢にちよつと用がござりまして、行つて參りますが、少々お願ひ申します。

櫻川　ゆるりと行つて來さつしやれ。

お竹　御用がござりましたら、お呼び下さいまし、直に歸つて參ります。

トお竹辭儀をして上手へはひる。

三太　關取、お茶をお上んなさい。(ト出す、櫻川取つて、)

櫻川　これは憚りでござんす。(ト床几へ掛け、お花へ思入あつて、)　お花さま、今日はよう御參詣でござりました。

お花　櫻川さん、好いお天氣でござんすなあ。(ト恥かしき思入、媚いたる合方になり、櫻川思入あつて、)

櫻川　仕合せと天氣も續き、今度の角力も評判よく、初日より此の大入、一同悦ばぬ者はござりませぬ。是れも偏に御贔屓さまのお蔭、その內にも私はお店の旦那樣にお引立の御厚恩、寐た間も忘れはいたしませぬ、又この度の興行に小結にまで出世したは、矢張あなたの親御さまや、花川戸の親

分始め男達の皆樣が、未熟なわしを身に引受けお世話下さる有難さ、此の間もお店へ上り厚い御馳走になつた上、母にまでも下されもの、まだ其の上に私が出世した祝ひとて、丁度着て參つた此の羽織を旦那さまから下さりました、何とお禮を申してよいやら、どうかあなたさまからも旦那さまへ、よくお禮をおつしやつて下さりませ。

お花　その事はわたしから父さんへ言ひますが、其の代り櫻川さん、わたしもお前さんにお願ひ申すことがござんすが、聞いて下さんすかえ。

櫻川　五郎藏が力に及ぶことならば、聞くも聞かぬもござりませぬ、してお賴みとは、どの樣なことでござりまする。

お花　さあ、そのわたしが願ひといふは。(ト言ひ難きこなし。)

櫻川　まあ、おつしやつて御覽じませ。

お花　どうも爰では、(ト顏を隱す。)

櫻川　爰でおつしやれぬことなら、改めて私がお店へ伺ひに出ませう。

お花　いえ〳〵、内では猶言はれぬことでござんすわいな。

櫻川　はてな、爰では言はれぬこと、又お内では猶おつしやれぬとは。(ト考へる思入あつて、)讀めまし

た。
お花　えゝ。
櫻川　もしお民どん、お花さまは戀人が出來ましたかな。
お民　櫻川さん、當りましたぞえ。
三太　序に手の筋といふところでございますね。
お花　えゝも、そなたは默つて居やいなう。
三太　へい。(トうつむく。)
櫻川　さうしてお花さまの戀人は、何方のお方でござりまするな。
お民　つい、爰等においでのお方でござんす。
櫻川　爰等のお方では、お馴染でござりますかな。
お民　お馴染もお馴染、しかもお店へお出入りの人でござんす。
櫻川　なに、お店へ出入りの者、はて誰であらうな。
お民　それをお前さんへ申しましたら、きつとお叶へ下さいますかえ。
櫻川　品によつたらお世話もいたしませうが、又お爲めにならぬお人なら、御異見もいたしますが、い

つたい、どのやうなお方でござりますな。

三太　何でも役者の、川崎屋に似た人だ。

櫻川　川崎屋に似た人とは、市川權十郎に、はて妙なものがお目に止りましたな。まあお名前をおつしやつて御覽じませ。(ト始終お民に聞く。此の内お花思入あつて取組のビラへ心附き、)

お花　そのお名前は、あの内にござります。

櫻川　この取組のうち、はてな。

三太　上の段で八人目だ。(ト櫻川人數を見て櫻川に當るゆゑ思入あつて、)

櫻川　八人目は櫻川、ありや私の名でござりまする。

お花　はい、お前さんぢやわいな。(ト思ひ切つて言ふ。)

櫻川　えゝ。(トびつくりなす、合方きつぱりとなり、)

お民　今までお隱し申しましたが、實は疾うからお孃さまが、お前さんにお惚れなされましたわいな。

ト矢張り思ひ切つて言ふ。櫻川呆れし思入。

櫻川　それは怪しからぬ、併しよくお惚れ下さりました。(ト思入あつて言ふ、お花恥かしき思入にて、)

お花　これ、民や今櫻川さんがわたしの願ひを、聞いてやらうとお言ひゆゑ、どうぞそなたから言うて

たもいなう。

お民　はい畏まりました、もし關取さん、わたしが此の樣なことを申しては、旦那さまへ濟みませぬが、又お花さまのお心をお察し申せばお可愛さうゆゑ、お默かは存じませぬが、よい御返事をつい女で、お聞かせなされて下さりませ。

櫻川　否も應もございませぬ。わたくし風情を御大家のお娘御が御執心とは、冥加にあまる仕合せゆゑ有難うはござりますれど、よい御返事を申したうござりますが、左樣なことをいたしましては、御恩を仇で返すも同然、第一大旦那さまへ濟みませぬ。それ程までに私を思召して下さりまするなら、たゞ御贔屓になされて下さりませ、それが何より有難うござりまする。

お花　これ民、わたしやどうせう、どうせうぞいなあ。（ト泣く。）

お民　でも關取があゝおつしやるゆゑ、私にも仕樣がござりませぬ。

花　いやもう櫻川さんは人氣もあり、今賣出しとやらの關取ゆゑ、諸方で立派な女中さんが引手數多と聞くからは、どうでわたしのやうな不束者はお氣に入らう筈はなけれど、せめて優しいお詞くらゐはお掛けなされて下さりませと、そなた頼んでたもいなう。

ト　お民に縋つて泣く。お民困る思入にて、

お民　幾らあなたがお思ひなされても、關取はあなたを嫌つておいでゆゑ、所詮無駄でござります。

櫻川　いえ、決してさういふ譯でござりませぬが、猥らなことがござりましては、親旦那さまへ濟みませぬゆゑ。

お花　そんなら父さんさへ大事にすれば、わたしなどはどうでもよいと言はしやんすのかえ。

櫻川　めつさうな、どういたしまして、さういふ譯ではござりませぬ。

お民　それならばお花さまのお頼みを、お聞きなされて下さいまし。

櫻川　それだと申して、是ればかりは。

お花　そんならやッぱり不束ゆゑ、

お民　體よくお逃げなさいますか。

櫻川　いえ、逃げるといふ譯では。（ト櫻川困る思入、三太こちらへ來て）

三太　芝居ですれば斯ういふ所は、關取の脇差へ手を掛けて、おゝさうぢやと言ふ所でござりますぜ。

お民　えゝも、肝腎な所で、餘計な口をお出しでない。

三太　口を出して惡けりやあ、旦那へ此の事を注進しようか。

お花　父さんに知れたら、わたしや生きては居ぬわいなあ。（ト泣く。）

櫻川　必ずともに此のことを、旦那に言つてはなりませぬぞ。
三太　それでは默つて居るから、お孃さんの言ふことを聞いてお上げな。
櫻川　こなたまでが同じやうに。
三太　いやなら旦那へ注進しようか。
櫻川　あゝこれ、めつたな事を。
お民　そんなら色好い返事をば、
お花　どうぞ聞かせて下さりませ。
三太　こんな困ることはない。（ト櫻川の思入にて言ふ。）
櫻川　これは憚りさま。
ト始終困る思入、ばた〳〵になり、木戸口より呼出し造附裝にて出來り、
呼出　櫻川關、爰にござりましたか、いつもより場所入りのお遲いので、年寄衆が氣を揉んで居なさいますから、今お迎ひに行く所でござりました、お早く土俵入りをなすつて下さいまし。
櫻川　木戸口まで來てお客に出逢ひ、場所入りが延引しました、年寄衆に氣を揉ましては濟まぬ、直に連立つて入りませう。

呼出　どうぞさうなすつて下さいまし。
櫻川　左樣なればお花さま、又お目にかゝりまするが、どうぞ旦那へよろしうおつしやつて下さりませ。
お花　そんならどうでも、わたしの願ひは。
櫻川　はて、聞く聞かぬは又明日。（ト立ちかゝる。）
お民　わたしへお返事、
櫻川　きつと申すでござりまする。
呼出　さあ關取、御一緒に參りませう。
櫻川　こりや御苦勞でござんした。
　　ト米山になり、櫻川先に呼出し附いて木戸口へはひる。跡にお花本意なきこなしあつて、
お花　こりやどうしたらよからうぞいなあ。
お民　惡いやうにはいたしませねば、まあわたくしにお任せなさりませ。
お花　そんなら早う聞いてたも。
三太　はて、急いては事を仕損じます。
お民　かういふ時は神さまのお力を借りねばなりませぬ、これから直に八幡樣へお參り申して、

三太　お三十三度と一度を上げませう。

お花　そりや何をするのぢや。

三太　お百度を三人に割りましたのだ。

お民　又そんな馬鹿をお言ひか。

お花　そんなら直に八幡樣へ。

三太　おつと爰に留守番が。

お民　向ふにおいでゆゑ、斷つて行きませう。

お花　さあ、早う行かうわいな。

お民　どれ、お參り申しませう。

ト矢張角力太鼓にて、お花先に兩人附いて上手へはひる。と花道揚幕の内にて、中間丸助角内の聲にて

丸助 角内　うしやあがれ〳〵。

ト聲する。三味線入り大拍子になり、花道より進藤野守之助羽織着流し大小駒下駄旗本のこしらへ。跡より極樂十三着流し一本差し男達の裝にて、紺看板の中間二人に引立てられて出來り、花道にて、

十三　行けと言ひなさりやあ、どちらへでも行きますから、爰を放して下せえまし。

野守　左樣なことをして逃げる氣でも、その手は喰はぬ。こりやそやつを逃すな。

丸内
角助　さあ、きり〳〵とうしやあがれ〳〵。

十三　えゝ、行かねえとは言やあしねえ。

ト皆々舞臺へ來て、十三床几へかける。此の內上手より以前のお竹、木戸口より札賣出て、

札賣　これは殿樣、だいぶ御ゆるりでござりました。

お竹　お茶をお上りなさりませ。（ト出す、十三思入あつて、）

野守　こりや町人、眼も二つ明いて居ながら、何ゆゑ身共に突當つた。

十三　日が明いて居ますから、大小差したあなた方の見えぬことはありませぬ、突當つたのはそちらから突當つたに違えねえのだ。

丸助　この野郎太えことを言やあがる、手前の方から旦那樣へ、態と突當つて置きながら、

角内　それをこちらのせゐにして、言ひ掛けをする氣なら、その分では濟まされぬ。

十三　濟まずばどうとも勝手にしなせえ。（トずつけり言ふを、札賣、お竹袖を引き、）

札賣　もし親方、こりやお前さんが惡い。

十三　何が惡いのだか知りもしないで。

札賣　何さ、相手が惡い、いえ、それ、惡いから惡いね、惡いことは言ひませぬ、早く詫びた方がようございませう。(トよろしく呑み込ませる。)

十三　でも、あんまり分らねえことを言ふから。

お竹　さあ、何であらうと喧嘩になつては、私共も困るゆゑ、どうかお詫をなすつて下さいまし、お願ひでございます。(ト札賣と兩人にて賴む思入。)

十三　二人が困ると言ひなさりやあ氣の毒だ、癪に障るが詫びるとしよう。

札賣　どうかさうなすつて、

兩人　下さいまし。(ト是れにて十三腹の立つを怺ゆる思入にて、)

十三　えゝ左樣なら、わつちが惡うございました、眞平御免なさいまし。

ト立ち掛りて言ふ、中間前へ出て、

丸助　やい〳〵、そんなあやまりやうがあるものか、もつと丁寧に物を言へ、第一突立つて言ふ奴があるものか。

角内　兩手と天窓を土へ押附け、以來はきつと氣を附けますから、今日の所はお慈悲を以つて、

丸助　御勘辨を願ひますと、

角内　斯う天窓を下げて、早く言へ。(ト兩人仕方にて敎へ、顏見合せ、)
丸助　何だ此奴のすることを、
角内　二人でしてしまつた。
兩人　馬鹿々々しい。(ト野守之助思入あつて、)
野守　こりや、其の方は何者だ。
十三　わつちは花川戸の、幡隨長兵衞の子分で、極樂十三といふ町奴でござります。
野守　長兵衞が子分とあれば、幾ら詫びても許されぬ。
十三　そりやなぜでござえます。(ト合方きつぱりとなり、)
野守　知らずば申して聞かせるが、小身たりとも天下の旗本、御直參を恐れずして、やゝともいたせば町奴が、白柄組へ毎度の無禮、取るに足らぬ奴等ゆゑ、相手に爲さず勘辨せしが、日頃吉原で遺恨ある幡隨が子分とあつては、こりや此の儘には許されぬ。
十三　許されぬといつて、どうなさる氣でござります。
野守　武士に向つて慮外をすれば、切り捨ては天下の大法。
十三　それぢやあわつちを殺しなさるか。

野守　以後の見せしめ、手討ちにいたす。(トきつと言ふ、十三思入あつて、)

十三　面白い切られやせう、花川戸で人に知られた幡隨長兵衞が子分の内で、五本の指に折られるやうにやうやくなつた町奴、渾名は極樂十三だが死にやあ地獄の厄介者、白柄組で鬼も恐れる赤鰯の刀掛け、その抱角の定紋を附ける進藤野守之助、こなたが連れなら閻魔の前で、幅がきくから相手にならう、さあ切られるものなら切つて見ろ。(トきつとなる、此の内野守之助煙草を呑み居て、)

野守　素町人を相手になすも、大人げないことなれど、遺恨ある長兵衞が子分ゆゑに助け置かれぬ、覺悟いたしてそれへ直れ。

十三　誰も助けてくれとは言はねえ、早く刀を拔いて見ろ。

野守　慮外の成敗いたしてくれう。

ト刀の柄へ手を掛ける、此の時花道より唐犬權兵衞着流し一本差し駒下駄男達のこしらへにて、

權兵　その御成敗暫く〳〵、暫くお待ち下せえまし。

ト言ひながら足早に出來り、花道にて留める、野守之助見て、

野守　武士に向つて慮外をせし、此奴を只今成敗なすに、何で其方妨げいたす。

權兵　いえ、妨げはいたしませぬ、それへ參つて其の者の、お詫がしたうござりますゆゑ、暫くお待ち

下せえまし。

札賣　よい所へ親方さん、どうか無事に納まるやう、

お竹　よろしうお願ひ申しまする。

權兵　どれ、そこへ行つてお詫びをしようか。

ト權兵衞十三顏見合せ、氣味合ひの思入、是れを摺鉦入りの合方になり、權兵衞舞臺へ來り、床几へ掛ける。

丸助　譯も聞かず藪から棒、詫びをしようと爰へ來たは、

角內　いつたいどこの野郞だか、それから先きへ旦那へ言へ。

權兵　私は花川戶の長兵衞が弟分唐犬權兵衞と申す者、廓で時折殿樣にお出逢ひ申したこともあれど、輕い身分の私ゆゑ、まだお馴染にはなりませぬが、是れを御緣に此の後は、お目をお掛け下せえまし。

野守　さてはそちが聞き及ぶ、長兵衞が弟分唐犬權兵衞でありしか、未だ近附きにはならぬが、豫て吉原でその方の、面は身共も存じ居る。

權兵　御存じとござりますなら、極樂十三が慮外をした、其の御立腹を私に、お免じなされて今日は

此のまゝ、お許しなされて下さりませ。

十三 兄貴、打捨つて置いてくんねえ、遺恨のある長兵衛が子分だから殺すといふ、根のある今日のこの間違ひ。（ト言ひかけるを冠せて、）

權兵 これ、よけいなことを言はねえで、手前も爰でお詫をしろ、先きは立派な殿様だ、慮外をしたのはこつちが悪い。

十三 それだといつて。（ト立ちかゝるを、）

權兵 えゝ、おれに任せて詫びろといふに。（トよろしく留める。札賣、お竹も共々十三を留める）

野守 折角そちが頼むゆゑ、勘辨いたし遣はしたいが、今も彼れが申す如く、遺恨ある長兵衛の子分ゆゑ許されぬ。

權兵 左様でもございませうが、取るに足らぬ子分なれば、お手討ちになすつたとて、さのみお恨みも晴れますまい、今日の所は私にお免じなされて人一人、お助けなされて下さりませ。

野守 長兵衛が參つて詫びたなら、許して遣すまいものでもないが、弟分では不承知だ。

權兵 それぢやあ、わつちがお詫びをしても、

野守 一命取らねば許されぬ。

權兵　すりやどうあつても、
野守　諄いことだわ。（トずつけり言ふ、權兵衞ちつと思入あつて）
權兵　いくら詫びても口を利く、おれを先きで不承知と言やあそれまで仕方がねえ。さあ十三、骨はおれが拾つて遣るから、爰ですつぱり手討ちになれ。
十三　元よりおれは覺悟の前、切られる命は惜しくはねえが、一人で死ぬのは氣が利かねえ、叶はぬまでも旗本の命を貰つて町奴の、肚胸を見せて死にてえのだ。
權兵　さう又性根を据ゑたなら、言置くことをおれに言ひ、立派に相手になつて死ね。
十三　親兄弟も身寄もねえから、別に言置くことはねえが、世話になつた親分へよく禮を言つて下せえ。
權兵　それはおれが承知した。然し手前が切られりやあ、仲間のよしみ見ちやあ居ねえ、及ばずながら唐犬が進藤樣を相手となし、爰で命の遣り取りするから、假令死んでも行く所まで、行かずにそこらで待つて居ろ。（ト是れを聞き野守之助思入あつて）
野守　なに、そちも身共と勝負をするとか。
權兵　へい、左樣でござります。
野守　こりや面白くなつて參つた。（ト合方替つて野守之助羽織を脱いで中間に渡し、刀を拔き思入あつて）

やい町人、よく承はれ、今天下泰平ゆゑ弓は袋に太刀は鞘、治まる御代の膝元に旗本八萬騎、多くの組の其の中で嗚呼がましけれど進藤の、苗字を受繼ぐ野守之助、この程師匠の意に叶ひ、讓りくれたる新身の一刀、折がなあらば試さんと思ふ矢先きに丁度幸ひ、然し今日討たずん初見參の出會早々憎まれ口は言ひたくなけれど、我が帶刀へ突き當る無禮者ゆゑ止むを得ず刀の手前二ツには、槍一筋の家名へ對し、手討ちにせねば武士が立たぬ、是非なきこと、覺悟いたせ。

トきつと言ふ、權兵衞思ひ入あつて、

權兵　白柄組で長兵衞に遺恨はあつても手出しをせず、子分を相手になさるとは、成程けちな旗本根性わつちは高が町人ゆゑ切られて死んでもそれまでだが、萬一時のはずみにて、わしが勝つたらそつちの命取りやあ忽ち進藤の、八千石は斷絶た、さうした日にやあ氣の毒だから、口を酸くしてあやまるのに、所が丁度藏前だけ、長井兵助が齒磨の御愛敬に白い齒を見せて詫びても聞きなさらず、居合に拔いた長刀、南無三寶と白刄を見て恐れて後へ引かねえと、口中一切受合ふから、肚胸を据ゑて殺しなせえ。

十三　喧嘩の相手はおれだから、見實は後で遣つてくんねえ。さあ十三と勝負をして下せえ。

ト眞中へ割つてはひる。

野守 一人々々は面倒だ、二人一緒に殺してやらう。

權兵 わつちは卑怯に二人して、何で手出しをするものか。

十三 おれが相手だ、勝手にしなせえ。

丸助 死に急ぎをする野郎から、

角内 先きへ殺しておやんなせえ。

野守 然らば此奴を手討ちにいたさう。

ト刀を振上げる。十三柄へ手を掛け身構へする。下手に權兵衛刀の目釘をしめし、きつと見て居る、札實、お竹氣を揉んで居る、此の以前木戸口より庄之助羽織着流し、ぱつち尻端折り、一本差し、行司のこしらへにて出てゐて、此の時中へ割つて入り、

庄之 進藤様、ちよつとお待ち下さりませ。

野守 誰かと思へば、そちや行司庄之助ではないか。

權兵 小屋の前で、お氣の毒だが、

十三 ちつと根のある出入だから、

野守 見ぬ顏いたして、

三人　貰ひたい。

庄之　いえ見ぬ顔は出來ませぬ、とさあ言へば喧嘩に枝がさく、根のあることはたつた今、さあたつた今木戸口へ、出て來て何にも知らぬが佛、極樂兄ィが事よりして男盛りの花川戸、弟分と立しられる獅子の勢ひの唐犬親分、こちらは當時名うてにて人も恐るゝ白柄組、御威勢盛んのお旗下、どちらに怪我があらうとも、見て居られぬが行司の役、御不承でもござりませうが、此の勝負は引分けに、お預けなされて下さいまし。

野守　折角そちが仲裁ゆゑ、分けにいたして遣はしたいが、それがならぬは此の白刄。

權兵　血を見ず鞘へ納められずば、

十三　わつちを殺して納めなせえ。

庄之　所をわたしがさうさせぬは、武士の意地が立てたいとて、此の境內を血汐で穢さば、弓矢を守る正八幡、第一神慮に叶ひますまい、又男達のお二人も小屋に遺恨がありませずば、今日の所は角力中へどうぞ預けて下さいまし、則ち總代にわたくしが御挨拶をいたしますれば、その白刄もこの出入も、一緒に納めて下さりませ。（ト是れにて双方思ひ入あつて、）

權兵　喧嘩は留手のあるのが花、そつちが了簡するならば、

野守　此方とても庄之助の顔を立てこの白刄を、
庄之　お納めなされて今日の所は、
十三　行司に花を、
三人　持たせよう。（ト野守之助白刄を鞘へ納める。皆々ほつと思入あつて）
札賣　どうなることかと案じましたが、
お竹　お行司さまのお蔭にて、
丸助　命を拾ふ奴もあり、
角内　無事に納まる此の出逢ひ、
庄之　團扇を入れた私も、大安心をいたしました。
野守　存じ寄らざる世話になり、今日は此の儘別るゝが、何れ此の後出逢ひし時、
權兵　言分あるなら何時でも、逃げも隱れもいたしませぬ。
十三　喧嘩はこつちの定見世ゆゑ、買ひに來りやあ賣つて上げます。
庄之　その賣買も才取りの、行司が暫く預りました。
野守　預けるといへば今日の角力、中入前は肝腎な黑雲と櫻川、

權兵　勝負も時の運次第、どつちへ團扇が上るか知れぬか、

十三　贔屓の多い西東、この一番は行司も骨だが、

庄之　負けず劣らず双方互角に、引分けにしたうござります。

ト角力太鼓ばた／＼になり、木戸口より以前の呼出し出來り、

呼出　皆さま、是れにおいでなされましたか、もう中入前の結びでござりますから、お早くお桟敷へいらツしやいまし。

野守　待ちに待つた取組なれば、直に身共は參るといたさう。

丸助　それぢやあ、行司も、

角内　旦那と一緒に、

庄之　いえ、私はお後から、

野守　然らば唐犬、

權兵　その内お目に、

十三 權兵　かゝりませう。

札賣　さあ、いらつしやいまし。

ト右の鳴物にて、野守之助先に中間二人呼出し、札賣附いて木戸口へはひる。跡に皆々思入あつて、

權兵　詰らねえ間違ひから、お前さんの御厄介になりましたが、

十三　お陰で無事に濟みまして、こんな有難いことはござりませぬ。

庄之　その禮はお二人へ、わつちが言はねばなりませぬ。

權兵　そりやなぜでござります。(ト合方きつぱりとなり、)

庄之　今庄之助が仲裁を入れても双方得心なく、爰で喧嘩が始まつては、何れどつちも怪我人で血の雨が降出しては、角力は掛けになつた上、明日の興行にも拘はる仕儀、さうなる日には一同の難儀は目前知れたこと、それを無難に納まつたは勘辨強いお二人のお蔭ゆゑに、お禮はこちらで言はねばなりませぬ。

權兵　さう言はれては面目ない、角力を見に來た木戸前で、命を賭けの勝負をしたが、

十三　双方無難で引分けは、今となつては大仕合せだ。

お竹　まあお茶をお上りなさいまし。(ト銘々へ茶を出す。)

庄之　然し、肝腎の結びゆゑ、

權兵　お前さんも行かずばなるまい。

十三　こつちも行つて見物しよう。

庄之　左樣なら、御一緒に、

權兵　さあ、行きませう。

ト角力太鼓にて三人木戸口へはひる、お竹跡を片附け居る。上手より以前のお花、お民、丁稚三太、出來り、

お竹　だいぶ御ゆるりでございました、さあお掛けなさいまし。

お花　今地內の話しを聞くに、今日は黑鷲と櫻川さんの取組で、所詮大關の黑鷲には叶ふまいと言うてぢやが、どうぞして櫻川さんの負けぬやうにならぬかいな。

お民　そりやお案じなさいますな、番附を見ておいでのお方が、黑鷲は大關でも櫻川は贔屓も多し、今賣出しの手取りゆゑ、きつと勝つに違ひないとおつしやつてゞござりました。

三太　引分にならなければ、どちらか勝ちますから、お案じなさいますな。

お花　何を言やるぞいな。

お民　櫻川さんのお勝ちなさるやう、爰でもう一遍、お百度を踏みませう。

お花　ほんに、それが好いわいな。

三太　それでも緡がありませぬ。

お竹　爰に少々ござりますから、數取りになさいまし。(ト錢緡を出す。)

お花　そんなら是れで、櫻川さんの勝つやうに、

お民　八幡さまへお百度を、

三太　またやらかすのでござりますか。

ト右かしみの合方になり、出茶屋より手水鉢まで三人してお百度をふむ、此の内よき時分木戸の内にて、櫻川々々と聲して角力太鼓になり、仕出し大勢木戸口より出で、櫻川が勝つたといふ捨セリフにて花道へはひる、是れへ蒜明きの三人も混り出來り、

○　どうだ、おれの言ふ通り、櫻が勝つた。

□　鷲を投げたのは、實に感心だ。

△　櫻は今度は大關だらう。

○　姐さん、少ねえが茶代だ。(ト紙包みの金を置く。)

お竹　有難う存じます、もうお歸りでござりますか。

□　今の一番を見れば澤山だ。

△　櫻川は強くなつたなあ。（トわやわや言ひながら花道へはひる。お花緡を持つた儘嬉しき思入にて、）

お花　民や、關取がお勝ちだといいな。

お民　嗳お嬉しうございませうな。

お花　こんな嬉しいことはないわいな。

三太　小僧はさつぱり詰らない。

ト米山になり、木戸口より權兵衞、十三先に櫻川羽織を肩に掛け、跡より男達六人何れも着流し一本差し、駒下駄男達のこしらへにて出來り、皆々床几へ掛ける。お竹皆々へ茶を出す、權兵衞思入あつて、

權兵　關取今日は豪氣なことをなすつた、いくらこなたが手取りでも、流石大關との結びだから、實はどうかと思つて居たのだ。

十三　向うの棧敷に旗本が、自分が角力を取る氣になつて、力を入れて見て居たところ、

男一　黑鷲が段々に怪しくなつて來た時は、みんな顏の色が蒼くなり、

男二　たうとう關取へ團扇があがると、旗本連は青菜に鹽、

男三　みんながつかりしたと見え、こつちの棧敷で大笑ひに、

男四　笑つて手を打つた其の時は、殘らず腰が拔けたやうだ。

男五　斯うして見ると力より、角力は手取りが面白い、
男六　今日黒鷲を關取が、土俵へ投げてくれたので、
男一　わつち等の鼻が、
六人　高くなつた。（ト皆々悦ぶ。櫻川迷惑なる思入あつて、）
櫻川　御存じの通り黒鷲は、大關を取る位ゆゑ、私よりは力も勝れ角力も遙かに優つて居れど、そこが勝負は時の運、強いが勝つて弱いのがきつと負けると極つたら、御見物はござりませぬぢや、負けたが負けたにならず、勝つたとて自慢もならず、それを思ふと皆さまに、斯うしてお褒めに預ると冷たい汗が出てなりませぬ。
權兵　こなたの律義な了簡では、さう思ふのは尤もだ、然し黒鷲に櫻川が負ける時は男達の、仲間の者が明日から、肩身を狹く思ふところ、
十三　首尾よく勝つたはこちとらまで、やつぱり運がいゝといふもの。
男一　實に今日は、
六人　大出來だ〳〵。（ト皆々囃し立てる。此の内お花嬉しきこなしあつて前へ出で、）
お花　櫻川さん、よくお勝ちなされました、私も共々お悦び申しまする。

櫻川　これはお花さま、まだお歸りなされませぬか。
お民　お前さんが負けぬやうと、八幡様へお孃さまがお百度を上げておいでゝござりました。
櫻川　それは御親切に有難うござりました、其のお蔭で私も、思はぬ手柄をいたしました。
お花　角力中はわたくしが、お百度をあげて居りますから、毎日お勝ちなされませ。
櫻川　さう旨ゝいけばようござりますが、はゝゝゝゝ。
十三　かういふ娘が附いて居たから、それで今日は勝つた筈だ。
權兵　これさ、餘計なことを言はねえで、これから直にみんな一緒に。
男一　どこぞへ行つて勝祝ひに、
男二　今日はたら腹呑みあかし、
男三　酒と取組む勝負附け、
男四　力はねえが、呑む方ぢやあ、
男五　引けを取つたことのねえ、
男六　六人共に正覺坊だ。
櫻川　そんなに上つて、間違ひをなされますな。

權兵　おれが附いて行くから、喧嘩はさせねえ。姐さん、今日はお世話になりました。

ト紙入より祝儀を出し、茶代を置く。

お竹　親分さん、有難うござります。

十三　さあ關取出かけよう。（ト皆々立ちかゝる。）

お花　そんなら櫻川さんは、皆さんと、

お民　御一緒においでなされますか。

櫻川　お供をいたして參りますれば、あなた方は暮れぬ内に、お早うお歸りなされませ。

權兵　それぢやあ關取、

櫻川　まあお先きへ、おいでなされませ。（ト立ちかゝるを、）

お花　あもし、櫻川さん、（ト櫻川の袂を引くを、ちよつと振拂ひ、）

櫻川　いえ、旦那へよろしう、

男達
皆々　さあ、行きやせう。

ト米山になり、權兵衞、十三先きに櫻川六人附いて花道へはひる。お花兩人見送り居て、

お民　もしお孃さま、櫻川さんは立派でございますね。

お花　わたしや御一緒に行きたいわいな。
お民　めつさうな、遅くなりましたゆゑ、お早くお歸りなされませ。(ト言ひながら茶代を置く)
お竹　毎度有難う存じまする。
三太　明日また二百度を踏みに來ます。
お民　さあ、お孃さま參りませう。
お花　ても意地の悪い、民ぢやなあ。

ト流行唄になり、三人花道へはひる、お竹は出茶屋の内へはひる。角力太鼓ばた／＼になり、木戸口より以前の野守之助先きに、旗本三人中間二人附添ひ、立腹のこなしにて出來り、

一　進藤氏、さて／＼殘念な、
三人　事でござる。
野守　各〻も御無念にござらうが、拙者は仔細ござるゆゑ、猶々以て遺憾にござる。
一　只今まで黒鷲を、贔屓にいたし遣はしたが、
二　今日の體裁では、最早再び詞も替さぬ。
三　顔見ても腹が立つゆゑ、直さま歸宅仕つらう。

野守　片時も早くお越しなされい。

　　ト行き掛ける、爰へ木戸口より黒鷲出て、野守之助を留め、

黒鷲　進藤樣、皆樣、しばらくお待ちなされて下さりませ。

野守　最早その方に用はない。

黒鷲　さゝ、その御立腹は御尤もにござりまするが、角力は時のはずみにて、（ト言ひかけるを、）

野守　えゝそれは申さずと存じて居る、豫て遺恨ある長兵衛が腰押しにより、其の方と無理に取らす櫻川、分けに取つても殘念なる今日の角力に、手前が負けては水尾殿はじめ大小の神祇白柄組の大恥辱、まして最前この社内で唐犬との出合も行司の扱ひに了簡せしが、町奴どもに手を打つて笑はれた時の口惜しさ、數萬人の見物へ進藤面皮を缺いたるぞ、言はうやうない腰拔け角力め。

一　こりや黒鷲、いやさ官太夫、そちや先刻何と申した。我眼から見る時は櫻川は小雀と申したでないか、其の小雀に叶はずば、そちは蟲螻蛄同然だわ。

二　廣言吐いて請合ひながら、餘り意氣地のないことだ。

三　これほど弱くもなかつたが、櫻川が人氣に恐れ、

野守　立會ひ負けが、

四人　いたしたか。

黒鷲　何ほど彼に人氣があるとも、それに恐れはいたしませぬが、不圖したことが氣に障り思はぬ不覺を取りましたが、生涯櫻川に勝たぬといふ黒鷲でもござりませぬ、今日の所は怪我負けと思召して何れもさま、お許しなされて下さりませ。

野守　やあ此の期に及んで女々しき言譯、左樣な事を聞く耳持たぬ、以後は出入りも相成らず、旗本共の贔屓にせしも、最早今日限りなるぞ。（ト立ちかゝる袖に縋り。）

黒鷲　そこを何卒今一度。

野守　身共が勘辨いたしたら、そちは再び角力を取る氣か。（ト黒鷲無念の思入あつて。）

黒鷲　今日の不覺をお許しあれば、後日に彼れと勝負をなし、仕儀によつては再び此の世で、

トきつと思入。

野守　や。

黒鷲　いや、再び角力は取らぬ心でござりまする。

野守　その決心は今日の、土俵へ上らぬ前のことぢや、白痴者めが。

一　斯樣な者にお構ひなく、

二　どこぞへ參つて汲みかはし、
三　氣鬱を散じ歸宅いたさう。
丸助　角力にや負けても酒さへ呑めば、
角内　下郎は何より有難い。
野守　身共は酒も呑みたくござらぬ。
黒鷲　すりや、それ程までに。
野守　返す〴〵も、（ト口惜しき思入あつて氣を替へ、）さあ、歸宅いたさう。

ト合方早めになり、野守之助先きに皆々花道へはひる、跡黒鷲口惜しき思入にてぢつとなり、木戸口より以前の渦卷、黒骨、雲ヶ峰出て、

渦卷　もし關取、お前さんも口惜しうござりませうが、櫻川に負けたとこから仲間の者が口々に、此の渦卷をくず卷だの、やれ炭薪だのと焚附けて、こつぱ野郎に言はれますが、まことに悔しうござります。
黒骨　今も溜りで聞いて居れば、あの黒鷲も櫻川に負けては明日から大關を、辷つて取るかさもなくば、
雲峰　角力を止めるであらうなどゝ、言はれますを聞く悔しさ、又今日に限つて櫻川に、どうして負け

に、

三人　なりました。（ト三人口惜しき思入にて聞く、黒鷲思入あつて）

黒鷲　別に断うしてといふ譯もないが、立合前に櫻川へ幡随長兵衛から贈つたる、廻しの披露をされたのがちよつと氣になり、うつかり彼奴に先を取られたゆゑ、十分勝つべき今日の角力に、不覺を取つたおれの悔しさ、われ達も推量せい。

渦巻　それは察して居りますが、旗本衆の出入りを止められ、明日から角力を取りなさる氣か。

黒鷲　われも素人染みたことを言ふ、負けた者が角力を止めると極つた日には毎日の、勝負で角力の種が盡きるわ、いゝから捨てゝおけ〳〵。

渦巻　弟子に力を落させまいと、さう言うて下さるは、嬉しいことは嬉しいが、わしは捨てゝは置きませぬ。

黒鷲　捨てゝ置かぬと言うて、どうする氣だ。

渦巻　是れから直に橋場に居る、櫻川の家へ行き、勝つた祝ひを述べた上、酒を出せと言掛り、恥をかかせて明日から、わしは場所を引く氣でござんす。

黒骨　渦巻がその氣なら、此の黒骨も雲の峰も、一緒に行つて暴れちらし、

雲峰　櫻川の向ふ臑を毆き折つて明日から、彼奴も角力の取れぬやう。

渦卷　片輪者にしにやあ、

三人　腹が癒えませぬ。(トきつとなる。黒鷲思入あつて、)

黒鷲　師匠の無念を押量り、おゝ、うい奴だ／＼、おれも今から旗本衆をしくじつては外聞悪く、明日から場所へ出て居られぬ。

渦卷　それだによつて、

三人　是れから直に。

黒鷲　いや、所詮手前達の腕では及ばぬ、おれが是れから仕掛けて行き、今宵を過さず櫻川を。(ト一腰を抜きかけ中身を見る。風の音になり日覆より散り花、黒鷲向うへ思入あつて、)夜半の嵐に、(ト鞘に納めると道具替りの知らせ、)散らしてくれん。

トきつとなり、三人も身支度なす思入、此の模様時の鐘、角力打出しの太鼓にて道具廻る。

(巴屋二階の場)――本舞臺一面の平舞臺、正面宮戸川を見たる夜の遠見、所々に白魚の篝火、この前二階の手摺、上手三尺下地窓の茶壁、すつと上手一間の床の間、下手一間襖を立切り、屋體、日覆より欄形の欄間をおろし、下手に階子口、總て並木巴屋二階座敷の體、上手に以前の權兵衞眞中に

櫻川、下手に十三等男達六人上下へ別れよろしく住ひ、雪洞附きの燭臺を照し、眞中へ酒肴の道具を取りちらし、皆々酒を呑み居る、此の模樣流行唄にて道具留る。

權兵　ありがてい〳〵、今日のことを兄貴も聞いて嘸悅んで居なさるだらう。關取、今夜はゆつくり呑んで下せえ。

皆々　イヨウ――。（ト手を揃へ、しめることあつて、皆々酒を呑みながら、）

櫻川　御酒は深くいけませぬが、今晚はいつよりも餘程過してござりまする。

十三　幾ら醉つてもみんなして、今夜はこなたの守をするから、心置きなく遣つて下せえ。

男一　ちつと餘計呑みなすつても、宮戶川から吹込む風で、

男二　側から醒めるこの二階、實に並木の巴屋は、

男三　座敷がいゝに酒がよく、仲間で贔屓にしますのさ。

男四　贔屓といへば旗本が肩を入れる黑鷲を、

男五　今日關取が寐かしたので、男達の顏が立ち、

男六　こんな嬉しい、

六人　事はねえ。（ト皆々悅ぶ、權兵衞思入あつて）

權兵　關取、今日の纏頭に、何かとは思つて居るが、別に思ひ附もないから、失禮ではあるが持古した
わしの煙草入、これを今日の勝祝ひにこなたへ進上しませう。(ト提げて居る煙草入を櫻川にやる。)

櫻川　先刻も花川戸の親分初め御連中から、立派な廻しをお贈り下され、まだ〳〵お禮さへ申し上
げぬに又あなたが結構な下されもの、勝祝ひとおつしやいますゆゑ、御辭退申さず有難く頂戴い
たすでござりまする。(ト件の煙草入を取つて見て、)こりや私が提げますには、大きさも打つて附
け、まことに有難うござりまする。(ト戴いて悦ぶ、階子口よりお濱茶屋女にて出來り、)

お濱　皆さま込合つて居りますので、お構ひ申しませぬ、どうぞ御免下さいまし、さうして只今帳場へ
お連さまがいらつしやいました。

十三　連が來たとは、女か〳〵。

お濱　いえ、女中衆ではございません、清兵衞さまとおつしやるお方でござりまする。

權兵　清兵衞が來たなら、直と爰へ寄越して下せえ。

お濱　畏りました。(ト階子の口へはひる。)

櫻川　清兵衞さまとは、いつものお方でござりますか。

權兵　さうさ、出ツ尻清兵衞だから、遠慮はない。

十三　彼奴の臆病は、からかふと餘程面白いぜ。

男一　何處で聞いてやつて來たか。

權兵　なに、さつきさう云つてやつたのだ。

ト流行唄になり、揚幕の口より淸兵衞着流し一本ざし、男達のこしらへにて出來る、

皆々　おゝ、淸兵衞か。

淸兵　待つて居たノヽ。

淸兵　これは唐犬親分、さつきはお人を下さいまして有難うござります、兄イ手合今晩は。(ト皆々へ挨拶なし下手へ住ひ、)ときに關取、今日は素晴しいことをやんなすつた、さつき親分の臺所で鯛をこせへて居やした、すると關取が黑鷲を投げたといふ注進が來たので、家中嬉しがつてひつくりかへるやうな騷ぎさ、わつちもずつと夢中になり、棧敷にでも居る氣で、庖丁を入れ掛けた鯛を、「櫻川」と投げると、直に犬が銜えて行きやした、姉御に跡で叱られたが、こんな目出度いことはありません、その積りで一つ頂戴しませう。

櫻川　失禮ながら。(ト猪口を出す、男達の六酌をなし、淸兵衞呑んで、)

淸兵　勝祝ひに、今夜は是非吉原へ、ぶツくらはせるのでござりませうね。

權兵　行くなと言つても誰一人、内へ歸るものはありやあしめえ。
十三　櫻川關が勝つたので、今夜はどこへ押出しても、引けを取る氣遣ひなしさ。
男一　いつも吸込んでぐでんになり、女の居た例はねえが、
男二　この景氣ぢやあ、今夜はもてるに違えねえ。
男三　斯ういふ時に行かねえのは嘘だらう。
男四　跡は構ふことはねえ、是れから廓へ繰出して、
男五　仲の町から大一座の、
男六　總初買ひとやッつけよう。
清兵　今夜は關取も、
皆々　附合ひなせえ。
櫻川　有難うはございますが、宅で案じますから、此のお座敷でお暇いたしまする、場所を取つてしまひましたら、其の節皆さまのお馴染へお供いたすでございまする。
權兵　成程なあ、孝行な仕度い時分に親はなしと、今氣が附いても仕方がないが、みんなもちつと關取のお見習へ、お袋に氣を揉ませまいと誰しも行きたい吉原へ、行かずに内へ歸るとは、若い者には

櫻川　感心た、此の了簡だから大關を、投げるやうになんなすつたのだ。（ト感心の思入。）
櫻川　お褒めにあづかり面目なうござりますが、親方から頂戴した此の煙草入を母に見せ、悦ぶ顏が早う見たうござりまする。
權兵　さういふことなら氣儘にして、遠慮なく歸りなせえ。
櫻川　明日また早うござりますれば、是れでお暇申しまする、どうか花川戸の親分へよろしうおつしやつて下さりませ。
權兵　承知しました。それでは清兵衛、お前送つてくれ。
清兵　えゝ。（トびつくりする。）
十三　何をそんなにびつくりするのだ。
清兵　びつくりしやあしないが、今吉原へ行く積りが是れから橋場へ行くのは、淋しくッて氣味が惡い、いえなに、淋しいから送つて上げませう。
櫻川　いえ、不斷馴れて居りますから、一人でよろしうござりまする。
權兵　一人で歸してはわつちの氣が濟まぬから、是非連れて歸つて下せえ。
櫻川　それ程におつしやるゆゑ、お願ひ申すでござります。（ト立ちかゝる。）

十三　ちつとは淋しいが、關取が一緒だから大丈夫だ。

清兵　行きはいゝが、歸りがちつと、（ト空を見て、）おや〳〵雨が降りさうだ、こりやあ惡い役だ。

權兵　どうしたと。

清兵　いえなに、惡い日和癖だ。

櫻川　たんと降りませぬうちお暇いたしまする、是れはどなた樣も、今日は有難うござりました。

權兵　それぢやあ關取、

十三　氣を付けて、

皆々　歸りなせえ。

清兵　さあ、出掛けよう。

櫻川　こりや御苦勞さまでござりまする。（ト流行唄になり、櫻川に清兵衞附いて階子の口へはひる。）

十三　然し清兵衞は、後から來たに役に當つて可愛さうだ。

權兵　不斷あんまり臆病だから、今夜の役に當てようと、實はそれで呼びにやつたのだ。

十三　さうでしたか、まだそんなに更けねえが、空が曇つて居るせゐか、外はめつぽふ淋しくなつた。

男一　こつちも是れから遊びに行き、

男二　途中で雨にあつた日にやあ、
男三　ふられるといふと縁起が惡い、
男四　降らねえうちにちつとも早く、
男五　爰を切上げ、吉原へ、
男六　出掛けるとしやせう。（ト此の内權兵衞思入あつて）
權兵　おれはすつかり忘れて居たが、ちつと今夜は脱れぬ用があつて、みんなと付合ふことが出來ぬから、斯うしよう。（ト紙入より金包みを出し）是れをみんなの中へ遣るから、十三お前よいやうに捌いてくれ。（ト十三金包みを取り）
十三　是れぢやあ兄貴、氣の毒だなあ。
權兵　いゝから、早く行つて遊びなせえ。
十三　みんな兄ィに禮を言ひねえ。
男一　親分、是れぢやあまことに、
六人　濟みません。（ト辭儀をなす。）
權兵　みんなに言つて置くことがあるが、ひよつと廓で白柄組に出合ふまいものでもないが、今日の角

力の事もあるし、決してこつちから喧嘩を買ふな、それを忘れずに遊んで來なせえ。

十三　人は知らずさつきの紛れ、行司も仲へはひつて居るから、逢つても見ねえ顏をしよう。

男一　勝祝ひに遊ぶのだから、仲間喧嘩は、

六人　しやあしません。

權兵　それぢやお極樂、ちつとも早く、

十三　降らねえうちに、

七人　出掛けよう。

ト流行唄になり、十三先きになり件の金包を懷中して、六人附いてわい〳〵言ひながら階子の口へはひる。權兵衞立つて皆々を見送り、

權兵　血の氣の多い盛りだから、どれも〳〵苦勞なし、あの内が花だなあ。（ト合方きつぱりとなり、こちらへ來り思入あつて、）それに附けても今日の角力は、黑鷲は元より旗本の恥辱となれば、櫻川を遺恨に思ふに違ひない、案じられるは歸した途中で間違ひでもなければよいが、蟲が知らすか淸兵衞に逢はしてはやつたものゝ、どうも安心がならねえわい。（ト思入あつて、）こりや斯うして居るよりか、橋場へ行つて。

ト思入あつて頷き手を叩く、階子の口より以前のお濱出來り、

お濱　お呼びなされましたか。（ト此の内權兵衞考へる思入あつて、）

權兵　むゝ、（トうなづき、笑ふを木の頭、）勘定をして下さい。

ト向うへ思入あつて帶をしめ直す。お濱蠟燭の心を切る、この模樣「アレ又」のやうな早き唄へ雨車を冠せ、よろしく、

ひやうし幕

ト幕引き付けると、波の音にてつなぎ引返す。

二幕目　　今戸橋黑鷺殺の場

〔役名―― 唐犬權兵衞、角力櫻川五郎藏、同黑鷺官太夫、白柄組進藤野守之助、幡隨子分出尻清兵衞、黑鷺弟子渦卷音右衞門、同黑骨扇藏、同雲の峰夏八、其他。〕

（黑鷺殺しの場）――本舞臺向うずつと高き山の張物、裾通り石垣、下手寄心に石段の書割、山の半腹より所々に振よき松杉の立木、日覆より同じく釣枝、平舞臺よき所に石垣に用ふる石を大分散し、上寄りに竹矢來、此の内毀す仕掛、傍に待乳山普請小屋と記せし傍示杭、すつと上手今戸橋の袂を出し、下手植込みにて見切り、總て待乳山下夜の模樣。俄雨に逢ひし仕出し○□△の三人、忍び〳〵のこしらへにて立掛り居る、時の鐘雨車にて幕明く。

○花時分の日和癖で、今日は降りさうもなかつたが、夜に入つてから北風になり、たうとう雨になつてしまつた。

□角力の太鼓が廻つて來ると、明日は雨だとよく言ふが、旦那日和で藏前の角力は今度は大仕合せだ。

△悅びあれば悲しみありで、日が暮れて降出しては吉原へ行く素見もなく、此の待乳山下はめつぽふ淋しい。

○晝間なら名物の、米饅頭が出て居るが、

□今戸から此の邊は、夜降つては難澁の所だ。

△それではやつぱり名物の、、、、、、よでなんじうといふのだ。

○甘い洒落を言ひなさんな。

□然し雨はあがつたが、眞ッ闇だ。

△是れが雨やみといふのだ。

○何を詰らねえ、さあ此の内に出掛けよう。

ト時の鐘にて三人上手へはひる。跡雨車にて、ばた／＼にて、花道より前幕の渦卷、黑骨、雲の峰尻端

折一本ざしの道行にて出來り、直に舞臺へ來て向うへこなしある、凄みのやうな合方になり、

渦卷　さつき私が貴女に話した、唐犬はじめ男達が大勢揃つて櫻川を連れ、並木の巴屋で馴染ひの角力を賭いて居るとの話し、師匠の負けた起りといふは贔屓の男達の組より、櫻川へ廻しを賭つた殺合を土俵でされたので、師匠のふつと氣に障り、不覺を取つた今日の角力、

黒骨　それのみ日頃贔屓になる松尾樣の御朋友、進藤樣始め旗本の贔屓になるので進藤樣が、以ての外の御立腹。

雲峯　師匠が出來ぬを止められては角力の仲間へ外聞惡く、又この事が世間へ知れては再び土俵へ上られず、

渦卷　角力を止めねばならぬのみ、とても止める位なら櫻川を今夜殺し、旗本衆へ義理をして、師匠の男を立てねばならぬ。

黒骨　並木から五郎藏が、歸りは橋場へ一方道、

雲峯　爰へ來るに違ひない、師匠は何をして居るか。（ト向うへこなし。）

渦卷　これ。（ト兩人に囁く。）

兩人　それでは疾うに、

渦卷　これ、氣を附けろ。（ト兩人四邊を窺ふ、此の内渦卷思入あつて、矢來を毀し竹を拔き竹槍を拵へ、）是れさへあれば、たつた一突き。

兩人　爰へ忍んで、

渦卷　必ずぬかるな。

兩人　合點だ。

ト時の鐘にて三人植込みの蔭へ忍ぶ、木魚入りの合方雨車になり、花道より前幕の櫻川と清兵衛巴屋といふ番傘を相合にさし、安下駄を穿き出來り、花道にて、

櫻川　今晩は思ひがけない御厄介になりました。

清兵　わつちより關取が、雨に降られて難儀でござえませう。

櫻川　いえ私はどうでも歸る體、お前さんにお氣の毒でなりませぬ。

清兵　何の是れも恩になる親分へ奉公だ。（ト兩人舞臺へ來り、）成程待乳山下は、夜は淋しい所だ。

櫻川　もう是れからは僅かの路、爰でお別れ申しませう、更けぬうちにお歸りなされて下さりませ。

清兵　なに、淋しいと思へば淋しい、又淋しくないと思つてもちつとは淋しいが、關取の家まで送らぬと、後で唐犬親分に叱られるから、是非橋場まで送らして下せえ。

櫻川　有難うはござりますが、是れから今戸へ入りますと、寺町同樣餘程淋しうございますから、お歸りがお困りでござりませう。（ト是れを聞き、清兵衞ぞつと思入あつて、）

清兵　何の寺町などが怖いものか、そんな臆病な清兵衞ぢやあない、おれと一緒に歸りなさりやあ大丈夫だ。（ト顫へながら言ふ、櫻川成程といふ思入あつて、）

櫻川　然し、それではお氣の毒でござりまする。（ト風の音雨車烈しくなる。）

清兵　又大分降つて來た、何にしろ大きな體と相合ではお互ひに濡れるから斷つしやせう、堀へ行つて傘を一本借りて來ますから、爰に待つて居ておくんなせえ。

櫻川　大したこともござりますまい、お前さん是れをさしておいでなされませ。

清兵　それでは關取が濡れるから、ちよつと一本借りて來ませう。

櫻川　いえ、此の一本でよろしうござります。

清兵　よくはねえ、ぢきに行つて來やす。

ト清兵衞足早に橋の下手へはひる。櫻川跡を見送り、思入あつて、

櫻川　清兵衞どのは臆病だといつて話しに聞いては居たが、成程臆病なお方だ、一人で橋場から歸すは如何にもお氣の毒、氣の毒といへば今日の角力、わしは運に叶つて勝つたゆゑ馳走になつた其の

上で、唐犬親分が持料の煙草入を貰うて來たが、黒鷲は負けたゆゑ進藤野守之助どのが腹を立て、出入りを止めたといふ話し、勝負は時のはずみなるに、さて〳〵氣の毒なことだなあ。

ト嘆息の思入　此の時毀れ矢來の内より、前幕の黒鷲出で、

黒鷲　櫻川、大分遲かつたの。(ト櫻川黒鷲を見て思ひがけないといふこなし)

櫻川　唐突に誰かと思へば、黒鷲ではないか。

黒鷲　おゝ、黒鷲官太夫だ。

櫻川　今頃一人で何處へ行くのぢや。

黒鷲　どこへも行かぬ、こなたの歸りを待つて居た。

櫻川　待つて居たとは、何ぞ用でもあつてか。

黒鷲　こなたにちつと賴みがある。

櫻川　賴みとはどのやうなことでござんす。

黒鷲　外でもない、こなたの命が貰ひたい。

櫻川　何と。(ト誂への合方になり)

黒鷲　力士といはるゝ黒鷲が、負けた遺恨で五郎藏を殺したと言はれては、世間の人に顔向けのならぬ

は承知して居るが、こなたの首を持つて行かねば、今日から出入を留められた旗本衆へ詫が出來ぬ、それで命を貰ひたいのだ。

櫻川　さういふことなら遣りもしようが、こなたにわしが命を遣れば、常から最屓にして下さる花川戸の親分はじめ男達の衆の恥になるゆゑ、たゞ遣る譯にはどうもならぬ、腕づくならば遣りませうよ。

黑鷲　今日黑鷲に勝つたとこから、おれを恐れず御大層に、腕づくならば遣らうとは、手取自慢の櫻川、こなたの命の散り時か、春の末なる花角力、場所から橋場へ歸るのを待からこゝで待乳下、梢の雫を末期に呑み、今戸に並ぶ寺々の、常念物を引導に、麓の土となつてしまへ。

櫻川　兩虎爭ふその時は必ず一虎死すといふ譬と同じ角力ゆゑ、引く軍配に取組めば、どちらか一人負けるは必定、されば力士の仲間では、土俵の遺恨は土俵の上で返す習ひと承知して、砂を攫んだ悔しさに土になれとは無法な仕返し、理を非に曲げる三ツ股から直な通りも夜に入つて、雨に往來のないこそ幸ひ、邪魔の來ぬうち仕掛けて來い、五郎藏相手になつてやらう。

黑鷲　さう叉肚胸を据ゑたなら、命を賭けの眞劍勝負、

櫻川　勝つか負けるか一吹きり、筑波おろしにひいやりと、

黒鷲　襟につめたい白刃と白刃、

櫻川　そつちで先きへ拔いて來い。

黒鷲　われから拔け。

櫻川　そつちが拔け。

黒鷲　さあ、

櫻川　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。

ト櫻川羽織を脫ぎかけ、黒鷲白刃を拔き双方きつと見得、木魚の責め誂への合方になり、櫻川は傘黒鷲は白刃にて兩人立廻りよろしくあつて、よき程にとまり、植込みの蔭より以前の弟子三人鉢卷をなして出來り、

渦卷　師匠に餘計な骨を折らせず、渦卷始め三人で、荒ごなしにこなしてやらう。

黒骨　弟子が加勢に出たからは、

雲峯　もう叶はぬと、

三人　覺悟しろ。

櫻川　弟子を賴みに卑怯な黑鷲、褌擔ぎのわいらでも、相手が殖えれば面白い、さあ幾人でも一緒に來い。

黑鷲　その廣言はくたばつて、

渦卷　彼の世で勝手に、

三人　一人で言へ。

櫻川　なに、猪口才な。

ト是れより鳴物替つて、櫻川四人を相手に立廻る。爰へ以前の清兵衛傘を持つて來り、此の體を見てびつくりなし、どうとなつて顫へ居る、櫻川は黑骨、雲の峰を切倒す、渦卷は矢來の内へ逃げ入る、跡合方早めになり、黑鷲櫻川に切つてかゝる立廻り、此の内清兵衛弟子の死骸を足を持つてこは〴〵植込みの蔭へ引込む可笑味よろしく、兩人は烈しき立廻り存分あつて、トゞ櫻川黑鷲を切倒し止めを刺す、清兵衛又びつくりなし、どうと下に居て顫へる。櫻川透し見て、

そこにござるは、清兵衛どのか。

清兵　出ッ尻だ〳〵。(ト顫へる。)

櫻川　爰に居たなら掛り合ひ、少しも早く逃げて下され。

清兵　おれは逃げる氣だが、此の足のべらぼうが、

ト立ちかけてどうとなり、歩けぬ思入、櫻川心附き傘を出し、

櫻川　さあ、是れを持つて早く〳〵。

清兵　合點だ。

ト清兵衞傘を杖になし、顫へながら花道へはひる、櫻川これを見送りほつと思入、本釣鐘の頭を打ち込み、黑鷲の死骸を見て、

櫻川　よしなき事をいたしたなあ。(ト草笛の入りし合方になり)今更いうて返らぬが、昨夜顏觸れ見るまでは、互ひに意趣も遺恨もなく、西と東に立別れ同じ力士の官太夫、この五郎藏が手に掛り非業に死すも約束事、是れを思へば今日の角力にわしが勝たずば黑鷲にも、可惜命を捨てさすまいに、年寄衆を初め今度の角力へ掛り合うたる人々が、嘸櫻川を恨むであらうが、男と男の命の遣り取り、後を言せることとならず餘儀なく殺した今夜の仕儀、死ぬ身は不運生きる身も、跡に殘りて矢張り災難、是れが世にいふ天からなせる災ひぢやなあ。(ト歎息の思入、爰へ後より渦卷竹槍を持ち窺ひ出で、櫻川の股を突く、櫻川直に竹槍を切折り、きつとなり)やあ、聲をも掛けず貫きしは黑鷲の弟子よな。

渦卷　察しの通り音右衞門だ、師匠の敵覺悟しろ。

ト切つてかゝる櫻川渦卷を相手に片足を庇ふ立廻りよろしくあつて、渦卷を切倒し手拭で足を結へ、身支度なし、思入あつて腰を探り、

櫻川　南無三、大事の煙草入、

ト四邊を搜す思入、爰へ上手より前幕の權兵衞頰冠り尻端折り巴屋の番傘を持ち、櫻川を案じる思入にて出來り、櫻川に行き合ふ。櫻川びつくりして顏を隱す、權兵衞怪しく思ひ行き掛けるを引戻し、ちよつと立廻る、此の時下手より野守之助澁蛇目の傘をさし、黑鷲の跡を慕ひ出來り、兩人の中へ入りちよつと立廻つて三方へ別れきつと見得、是れより稽古の聖天になり、狸囃子をあしらひ、三人ダンマリ模樣の立廻りよろしくあつて、トゞ權兵衞は花道、櫻川は東の假花道へ傘を持つて脫に行く、野守之助は櫻川の落せし煙草入を拾ひ、思入あつて、

野守　若しや、今のは。

トこの聲を知邊に、東西より礫を打つ、是れを野守之助傘にて受ける、三方見合つて木の頭、櫻川權兵衞は花道へ逸散にはひる、野守之助は件の煙草入を透し見る、此の模樣波の音寺鐘の送りにてよろしく、

ひやうし幕

麴町水尾屋敷の場
橋場櫻川腹切の場

三幕目

〔役名——幡隨長兵衞、水尾十郎左衞門、櫻川五郎藏、進藤野守之助、出尻淸兵衞、用人水尾主膳、家主杢兵衞、合長屋喜兵衞、同與兵衞、角力世話役當助、同才六、水尾家臣久内、同伴平、同中間宅助。伊勢淸の娘お花、五郎藏母お牧、伊勢淸下女お民等。〕

（水尾屋敷の場）——本舞臺四間通し中足の二重、本庇本緣附正面上の方一間の床の間、この次地袋違ひ棚、下の方白地襖繪の襖、いつもの所枝折戸、此の外正面風雅の板塀、よき所に櫻の立木、平舞臺下手日覆より同じく釣枝、總て麴町旗本屋敷庭先きの體。二重に久内袴裝の侍にて住ひ、平舞臺下手に當助、才六勸進元の仕着せの上へ縞の羽織を引掛け、角力がゝりの打扮にて控へ居る、此の見得合方調べにて幕明く。

久内　大分早朝から參つたが、殿樣にお目にかゝりたいとは、何の用事か申すがよい。

當助　早朝から出ましたは、角力興行の儀に附きまして、殿樣にお目にかゝり、

才助　御相談を申し上げねば差支へにもなりますことゆゑ、年寄共より申し附かり、

當助　罷り出まして、

兩人　ござりまする。

久内　興行に拘はる事とは、如何なる用事か知らねども、未だ殿様は御寢なつてなれば、お目覺めまで待つたがよい。
當助　いえ、お目覺めまで待ちましては、差支へになる此の使ひ、
才六　恐れながら殿様に、早速お逢ひを願ひまする。
久内　いや毎夜お客で夜が更ければ、四つ頃でなければお目覺めがないから、其の前にお起し申しては、却つてお癇に障らうともお目覺の筈はない、まあお目覺まで次の間で一服呑んで待つがよい。
當助　いえ、お待ち申して居りましては、
才六　入盛つて居る今日の角力を、
當助　休みませねば、
才六　なりませぬ。
久内　昨夜は雨が降つたれど、明方前に上つたゆゑ、休むには及ぶまいに、
當助　いえ、雨なればよろしいが、お抱へ角力の黑鷲關が、
才六　昨晩今戸の待乳下で、殺されましてござります。
久内　なに、黑鷲が殺された。(ト びつくりなし、)して〳〵、それは何者に殺されたのか、相手は知れぬ

か。

當助　いえまだ相手は知れませぬが、黑鷲關のその外に、弟子が三人切倒され、一緒に死んで居りました。

才六　何でも相手はよつほどの、手利と見えてすつぱりと、見事に殺してござりました。

久內　それは何にいたせ打捨てゝは置かれぬ、假令お癇に障ればとて、早速申し上げずばなるまい。

卜立ちかゝる、爰へ奥より十郎左衞門好みの鬘、着流しの旗本にて出來り、

十郎　官太夫が殺害されしとは、それはまことの事なるか。

久內　殿樣には何時の間に、お目覺めでござりました。（卜十郎左衞門よろしく住ひ合方になり、）

十郎　昨日抱への官太夫が、櫻川に負けしと聞き、癇癪起り寐られぬゆゑ、今朝早く起き出でゝ同役進藤野守之助方へ罷り越して、事の次第を承はらんと存ぜしに、角力がゝりの兩人が早朝當家へ參りしは、官太夫の執成を年寄共より我が方へ申し越したるものなるかと、襖越しに承はれば存じ寄らざる昨夜の凶變、如何なる奴が殺せしか、まだ手掛りはあらざるか。

當助　いやもう年寄衆もいろ〳〵と、評議最中にござりまするが、

才六　是れぞと申して手掛りは、唯今以てござりませぬ。

久內　何でも、是れは幡隨の、子分の仕業に相違ない。
十郎　如何にもそちが言ふ如く、何かに附けて日頃より、白柄組へ楯を突く幡隨組の町奴、多分は彼等が仕業であらう。（ト爰へ奧より伴平袴裝の侍にて出で）
伴平　殿樣へ申し上げます、進藤樣が御入來にござりまする。
十郎　おゝ、よい所へ野守之助、早速是れへ通すがよい。
伴平　はッ。（ト奧へはひる。）
當助　何にいたせ、今日の興行に障りますゆゑ、
才六　年寄衆も一統に、心配いたして居ります。
ト爰へ奧より前幕の野守之助、羽織袴大小にて出來り、
野守　水尾氏、お目覺めでござるか。
十郎　早朝よりよくこそ御入來、先づ〳〵是れへ。
野守　然らば御免下され。（ト合方きつぱりとなり、野守之助よろしく住ふ。）
十郎　お茶煙草盆を是れへ持て。
久內　はッ。（ト奧へはひる。野守之助思入あつて、）

野守 角力掛りの兩人が、當家へ早朝參りしは、昨夜の次第を屆けに來たか。

才六 左樣にござります。

十郎 いやなに進藤氏、貴殿は昨日藏前へ角力見物に行かれし由ぢやが、定めて例の町奴幡隨の長兵衞なども、見物いたして居つたでござらう。

野守 いや昨日は長兵衞めは脫れぬ用でもありしと相見え、角力の場所には見えざりしが、彼れが子分の唐犬權兵衞極樂十三など言へる、何れも無賴の町奴めが見物いたし居りましたが、櫻川めに官太夫が負けを取つたる其の砌、われ〳〵共の棧敷へ向ひ、種々無禮をいたせし上、過言さへせし憎き奴等、數萬の者の前と申しわれ〳〵恥辱を取りしゆゑ、其の儘歸邸いたさんと立ち出る場所の木戶前にて、追駈け參りし官太夫を見もあれば不覺を恥しめ、向後出入りは叶はぬと申し渡して別れしが、其の節彼れも無念に思ひ、生きて再びわれ〳〵に逢はぬと申して居つたるは、角力の遺恨に櫻川を殺す所存と見受けてござる。

十郎 むゝ、さては抱への官太夫が角力の遺恨に櫻川の、歸りを待ち受け途中にて、殺害せんといたせしを、町奴どもに裏をかゝれ、再度の不覺に弟子共まで討たれしことゝ相見ゆる。

當助 それと聞いては興行も、所詮今日は出來ますまい。

才六　私共は歸りまして、年寄衆へ其の由を、申しまするで、
兩人　ござりませう。
野守　ちと此の方に所存もあれば、沙汰のあるまで興行は、見合せるやう傳へてくりやれ。
當助　左樣申すでござりませう。
才六　これは早朝上りまして、
當助　大きにおやかましう、
兩人　ござりました。

ト兩人下手へはひる。奥より以前の久内、作平の侍茶煙草盆を持ち出で、野守之助の前へ直し、直に奥へはひる。十郎左衞門思入あつて、

十郎　進藤氏、お進み下さい。
野守　はツ。（ト前へ出る。）是れより替つた合方になり、）
十郎　して此の上の御所存は、如何なさるゝ思召しか、其の御心腹をお聞かせ下さい。
野守　所存と申すは外ならず、死骸の側に落ち散りありし、證據を計らず拾ひしゆゑ。
十郎　して、其の品は。

野守　水尾氏、御覧下さい。（ト懐中より前幕の煙草入を出して見せる、十郎左衛門手に取上げ）

十郎　こりや是れ、匹夫の町奴が、好みと見えし銀ぐさり、

野守　しかも根付けは象牙にて、牡丹の彫の饅頭形、

十郎　筒も袋も對革に、目立つ仕立の本菖蒲、

野守　銀の煙管に金無垢の、前金物は狂ひ獅子、

十郎　裏座に何か彫付けあり、

野守　それぞ脱れぬ證據の持主。（ト十郎左衛門よく〳〵見て）

十郎　唐犬の二字彫付けあるは、さては唐犬權兵衛めの、

野守　仕業に相違ござらぬゆゑ、是れより一統評議の上、彼等を殘らず切捨てゝ、角力の遺恨と官太夫の敵を取つて遣る心底。

十郎　して此の品は如何して、貴殿のお手に入りましたな。

野守　されば昨日木戸前にて、官太夫めを恥しめしが、此の世で再び逢はぬと申す無念の相を顯はせしは、正しく相手の櫻川が歸りを覘ひ討果す所存と推察いたせしゆゑ、時刻をはかり橋場から今戸の邊を徘徊なし、若し官太夫の手に餘らば人知れず助力なし、晝の遺恨を晴らさんと存ぜし所、

十郎　計らずも、今戸橋にて官太夫の死骸に躓き手後れを、悔む折しも我が影を見掛けて逃げ行く曲者あり、せめて彼めを討果たさんと、爭ふはずみ思はずも、我が手に殘る其の一品。

十郎　然らば早速組合へ廻狀を出し呼び集め、日頃よりして我々へ無禮をいたす奴等を、撫で切りになし旗本の、威勢の程を見せてくれん。

野守　それぞ遺恨の仕返しと、官太夫へのよき追善。

十郎　何はさて置き、早速廻狀文を認めん。

野守　左樣ござらばお手數ながら、（ト十郎左衞門奥へ向ひ、）

十郎　こりや、誰そ居らぬか、料紙硯を持て。

ト呼ぶ、爰へ奥より主膳袴裝更けたる用人のこしらへにて出來り、

主膳　あいや、其のお催しよろしからず、何卒お止り下さりませう。（ト下手下に居る。）

野守　誰かと思へばお手前は、當家の用役主膳どの。

十郎　何故あつて催しを、よろしからずと止めしぞ。

主膳　何ゆゑとは御兩所樣、天下の恥辱に相成る事と、御存じはござりませぬか。

十郎
野守　何と。

主膳　御前、あなた樣はなあ。（ト合方きつぱりとなり。）そも天下のお旗本は、其の勢凡そ八萬騎、何れも御先祖尊靈が慶元兩度の戰ひに、神君の御馬前におき命を的のお働きを、遊ばせしゆゑ職祿賜はり、今三代の上樣まで榮をなし、諸侯の高に比べては小祿なれども御直參の家柄なりと威を揮ひ、さしたるお役を勤めずして泰平の世の時に逢ひ、鼓腹の思ひをなされまするは、皆御先祖の蔭ならずや、其の御恩をも打忘れ遊里へ通ひ亂酒に耽り、白柄組の何組のとよしなき事に金銀をお遣ひ捨て遊はすさへ苦々しく存じまするに、高の知れたる町奴と威勢を爭ひお抱へ角力が恥辱を取りしとて、それを遺恨に大切なる御身分をも顧みず、廻狀を以て徒黨を語らひ押出すなどゝは以ての外、子孫の爲めに御馬前にて命を的のお働きをなされましたる御先祖樣へ、それにて言譯立ちまするか、篤と御賢慮回らされませう。（ト思入にて言ふ。）

十郎　やあ、何ぞといふと慶元の昔の事を申し出し、異見をいたす馬鹿親仁、假令町人なればとて無禮をなすを捨て置かば、旗本仲間の名折になるわ。

野守　殊更以て侍は治に居て亂を忘れぬが君恩思ふ心掛け、武門の習ひ義の爲めに仇を報ふは當然なり、必ず異見は無用におしやれ。

十郎　達て申さば其の方とて、會議の妨げ捨て置かぬ。

野守　よしなき留め立てめされずと、次へ參つて控へてお居やれ。

主膳　いや控へては居られませぬ。是れと申すも五ケ年跡お逝れありし大殿樣、いまはの際の御遺言にも未だ血氣の忰なれば心得違ひのある時は、其の方我に成代り、異見をいたし將軍家へ、忠勤怠りなきやうにいたさせくれとの御賴み、それなればこそ家來の身で、水尾の御苗字頂戴いたし、御同姓を名乘る面目、手前の命のあらん限りは、御異見申さにや相成りませぬ。

十郎　やあまだ〳〵申すか、憎い奴。

野守　無益の留め立て控へられよ。

主膳　いや、いツかな控へて居られませねば、一旦お思ひ立たれし事後へ引かぬと仰せあらば、手前を是れにてすつぱりと、いざお手討になされませ、さすれば手前冥土へ行き、御先祖樣へ斯く〳〵と御不行跡を訴へまする。

十郎　やあ老人のゐるに無禮を許し、是れまでいたはり遣ひ居れば、よい事にして付け上り、殺せなどゝは不埒な奴。

主膳　さゝ、不埒な奴と思召さば、いざお手討ちになされませ、御幼少よりお側に居てお育て申したあなた樣に、討たれて死ねば身の本望、物の見事にお遣り遊ばせ。（ト體を突附け覺悟の思入。）

十郎　その舌の根を、（ト刀を取つて抜きかけ、切らうとして切り兼ねるこなしあつて、）やあ、老耄め次へ立たぬか。（ト是れにて主膳眼を開き、後を見返る。）

主膳　まだお手討ちになされませぬか、御猶豫あるは御未練至極、

十郎　おのれ斷うして。（ト又抜き掛け切兼ねるこなしあつてよろしく、野守之助此の體を見て十郎左衛門を留め、）

野守　あいや暫く水尾氏、先づ／＼お待ち下されい。

十郎　いや／＼お留め下さるな、無禮過言の老耄ゆゑ。

野守　はて無益の殺生なされずと、遺恨を晴らす工風がござる。

十郎　して、其の工風といはるゝは、

野守　餘の儀でござらぬ、此の品を證據となして町方の奉行へ訴へ出るときは、手をおろさずして唐犬權兵衛町奉行の手に召捕られ、吠え面かくは目のあたり、その節掛りの同心へ手蔓をもつて申し入れなば、彼れに荷擔の町奴、殘らず召捕り入牢をさせ、憂き目を見するが好き腹癒せ。

十郎　何さま左樣いたしなば、此の方共の身分にも、拘はらずして遺恨の返報、

主膳　とはいへ、それも御卑怯ゆゑ、相成るべくは此の儘に。

十郎　やあ、又差出るか。（トきつとなつて立上るを、道具替りの知らせ、）無禮者め。

ト三人引つぱりの見得、早舞にて道具廻る。

(櫻川切腹の場)――本舞臺三間の間常足の二重、上手一間の障子屋體、正面上の方中仕切りのある鏡戸の戸棚、下の方鼠壁、いつもの所門口、此の外一間の勝手口、櫻川と太字に記せし腰障子二枚竪切りあり、總て橋場邊角力家の體。よき所に長火鉢を置き、此の傍にお牧やつし裝の母親にて住ひ茶焙じにて茶をいれて居る、下手に杢兵衛半纏着流し家主にて住ひ、合長屋の喜兵衛與兵衛着流しにて住ひ、この見得稽古唄にて道具留る。

お牧　皆さん、お茶がはひりますから延喜に呑んで行つて下さい。

杢兵　いや、朝茶はその日の祈禱だといふから、一杯呑んで行きませう。

喜兵　祈禱といへば、昨夜のやうに切られて死んぢやあ詰らねえ。

與兵　何でも人は信心をして、惡事災難を除けることだ。

お牧　昨夜切られて死んだとは、人殺しでもござりましたか。

杢兵　それぢやあ、こつちのお袋は、まだ話しを聞かつしやらぬか。

お牧　どんな事やら此のやうに、内にばかり居りますゆゑ、世間のことは知りませぬ。

杢兵　知らずば話して聞せようが、今朝山谷まで用があつて起きぬけに行つた歸り、通り掛りの人の話

しに昨夜待乳下に人殺しがあつて切られて居ると聞いたゆゑ、そこは家主の役柄だけ、どんな者が切られて居るかと廻り道をして見て來たが、こつちの息子の角力仲間で、關と呼ばるゝ黒鷲官太夫、まだ其の外に弟子が三人切殺されて居ましたが、知らずばちよつと教へてやらうと、それで態々寄りました。

お牧　そんならあの黒鷲關が、待乳下で殺されしとか、其のお話しを聞いてさへ胸がどき〳〵いたしまする、ても怖しいことぢやなあ。

喜兵　さうしてこつちの息子殿は、まだ奧に寢てござるか。

與兵　定めて仲間のことだから、見舞にでも行かずばなるまい。

お牧　いえ、そんな事も知りませず、今日は親父の命日ゆゑ、場所へ出ぬ先き參つて來ると、寺參りに行きましたが、それでは今日は興行も大方休みでござりませう。

杢兵　いつも太鼓が聞えるが、今朝はさつぱり聞えぬゆゑ、昨夜の雨で休んだかと思つて居たがあの騷ぎで、大方場所は休みだらう。

お牧　悴も途中で其の話しを聞きましたなら驚いて、戻つて來るでござりませう。

喜兵　何にしろこつちの息子は、角力が上手で男は好し、その上親孝行の噂が高く、贔屓先きから女房

をいくらも世話をするさうだが、

與兵　嫁を貰へばお袋に、親孝行が怠ると皆斷つて持たぬとやら、若いにしては感心な、わしも皆も褒め
て居りますぞや。

お牧　いやもう親一人子一人ゆゑ、あれが邪險でござりますと、母も路頭に迷ひますが、孝行にしてく
れますので、大仕合せでござりまする。

ト此の内お牧三人へ、茶を汲んで出すことよろしくあつて、

李兵　どれ、早く内へ歸つて、朝飯にあり附かうか。

喜兵　わしは是れから今戸橋へ行き、殺された樣子を見て來よう。

與兵　それぢやあ喜兵衛さん、一緒に行かう。（ト三人立上る、お牧思入あつて）

お牧　若しや昨夜の人殺しが、

三人　えゝ、

お牧　いえ、人事には思はれませぬ。

李兵　實に無慚な死にやうだつた。

喜兵
與兵　そんならお袋。

お牧　お長屋の衆、

杢兵　息子どんによく言つて下さい。

ト右の唄にて杢兵衛は下手、合長屋二人は花道へはひる。跡にお牧思入あつて合方になり、

お牧　今大家さんのお話しを、聞くに附けても氣になるは、まだ年若のあの悴、昨夜戻りの遲いといひ顏の色さへ常とは違ひ、足でも挫いた樣子にてそはそはとして着物を着替へ、枕につけど終夜睡りもやらず溜息つき、其の上今朝はこの母が起きぬうち先きへ起き、親父の日ゆゑ寺參りに行つて來たいと出て行つたは、不思議な事と思ふうち、今の話しの人殺し、慥昨日の顏觸れは黑鶯關と櫻川、でも案じられることではある。（ト思入あつて立上り、後の戸棚をあけ、前幕の櫻川の着物な出し改め見てびつくりなし、）さてこそ、着物にこの血潮、（ト大きく言つて口を押へ、四邊へこなしあつて、）こりやとつくりと五郎藏に、尋ねて見ねばならぬわいの。

ト是れより床の淨瑠璃になり、

〽子を思ふ親の心の安からず、胸轟きし折柄に、今を盛りと咲き滿ちし花も嵐の障りにて、やがて散行く櫻川、昨夜の雨に打ちしをれ、我が家へ戻る枝道も、疵持つ足の思案顏、

ト此の内よき程に花道より櫻川、着流し一本ざし、足の痛むこなしにて出來り、花道に留り、思入あ

つて、

櫻川　どうしたものかと屈託に、考へながら來るうちにもう向うがわしの家、どうで昨夜の人殺しを、へし隱しにして居た所が、目と鼻の今戸橋知れずに居よう筈はない、又角力場の遺恨もあれば、此の櫻川へ疑ひの掛るは知れた穿鑿ゆゑ、いつそ名乘つて出ようかと覺悟はしてもお袋が、歎くであらうとそればかりが、心にかゝつて身の罪を、名乘つて出るにも出られぬ仕儀、あゝこりやどうしたらよからうなあ。

〽疵所こらへて門口を、明ける心も内と外、（ト櫻川舞臺へ來り、門口を明け）

母者人、行つて來ました。

ト内へはひる。この内お牧は件の着物を戸棚へしまひ居て、櫻川を見て、

お牧　おゝ悴、戻りやつたか、朝飯前に出やつたゆゑ、嘸やお腹がすいたであらう。

櫻川　いや、母者人聞いて下さんせ、昨夜遲くまで巴屋で御馳走になつて戻つたゆゑ、少しも腹はすきませぬわえ。（トよろしく仕ふ、合方になり）

お牧　これ五郎藏、そなたに聞きたい事があるが、まあ何にせい朝飯を、喰べてしまうてくりやいなう。

櫻川　いや／＼今も言ふ通り、腹が張つて居りますから、飯は欲しうござりませぬ。

ト　お牧櫻川の顏を見て、

お牧　どうやらそなたの顏の色、氣になる事でもある樣子。

櫻川　やあ。（ト　ぎつくりこなし、）

お牧　何ぞ譯でもある事なら、包まず母に聞してたも。

〽裏問ひすれどさあらぬ體、（ト　櫻川思入あつて、）

櫻川　いえなに　何ともござりませぬ、顏の色の惡いのは、嫌ひな酒をすゝめられ、無理に過して呑んだので、今朝は頭痛がいたします。

お牧　さうして昨夜巴屋から戻つて來やつた其の道で、何事もなかつたかいなう。

櫻川　えゝ。（ト　思入あつて氣を替へ、）いえ、あの時分戻りましても、そこが力士の有難さ、何事がありませうぞ。

お牧　そんなら、いよ〳〵何事も。

櫻川　はい、何の仔細がありませうぞ。

〽言ひ紛らせし折柄に、此の家を目ざし振袖の、姿も目立つ鹿の子染め、

ト　稽古唄ばた〳〵になり、花道より序幕のお花走り出來り、直ぐに舞臺門口へ來て内へ入り、胸を撫で

おろし居る、櫻川此の體を見て、

や、そこへござつたは、伊勢清のお孃さまではござりませぬか。

お花　はい、私でござりまする。(ト恥かしきこなしにて立つて居る、お牧これを聞き、)

お牧　何ぢや　伊勢清のお孃さまぢや。

櫻川　はい、わしを御贔屓にして下さる旦那樣のお孃さまゆゑ、ようお禮を言うて下され。

お牧　それはようこそいらつしやいました。穢くろしうはござりますが、まあ〳〵此方へおいで下さりませ。

お花　そんならそれへ參りましても、アノ大事ござりませぬか。

お牧　大事ないどころではござりませぬ、あなた樣さへ大事なくば、ずつとお通り下さりませ。

お花　てもまあ、嬉しい。

お牧　えゝ。

お花　いえ、有難うござりまする。(ト櫻川の側へ來てよろしく住ふ。お牧門口を明け表を見廻し、)

お牧　これ五郎藏、お供の衆も見えぬやうぢやが、何處ぞ爰等にお孃さまの御親類でもあるのかいの。

櫻川　いえ、この御近所に御親類や御別莊のある樣子も聞かぬが、お孃さまには早朝から、どちらへお

出でなされました。
お花　さあそれは、あの、觀音さまへ朝參りに來ましたゆゑ、それから廻つてこちらのお家へ、お願ひがあつて參りました。
お牧　さうしてお供のお連さまでも、御一緒ではござりませぬか。
お花　はい、民が一緒でござりましたが、途中ではぐれてしまつたゆゑ、私一人で參りました。
櫻川　やれ〳〵それは物騷な、このやうなお孃さまをたつたお一人橋場まで、寄越すといふはよくないこと、今私がお店まで送つてお上げ申しますから、暫くお待ち下さりませ。
お牧　おゝそれがよい〳〵、まあ折角のお出でゆゑ、澁茶なと差上げませう。
〽母はいそ〳〵汲んで出す、山茶も花の愛想なり。
トお牧茶を出すことよろしく、此の内お花始終櫻川に見惚れて居るこなしよろしく、櫻川思入あつて、
櫻川　さうして何か私へ賴みがあるとおつしやりますが、昨日も場所の木戸前でお斷り申しましたが、彼の一條の其の外なら、何なとお聞き申しませう、まあおつしやつて御覽じませ。
〽言はれて先を越し方の、積る思ひに恨めしく、（トお花思入あつて、）

お花　いえ、あの外のお賴みなら態々こちらのお家まで參りはいたしませぬ、どうぞ不便と思召し、わたしをこちらのお上さんに、今日から置いて下さりませ。

ト恥かしきこなしにて言ふ、お牧さてはといふこなしあつて、

お牧　そんならそれでお孃さまには、此の家へお出でなされましたか。

お花　櫻川さんの母御樣なら、今日からして姑御さま、御大切にいたしますから、どうぞあゝせい斯うせいと、おつしやつて下さりませ。

〽重い口から精一杯賴む詞に母親は、我が子の側へ進み寄り、

トお花よろしくこなし、お牧櫻川の側へ來り、

お牧　これ五郞藏、そんならそなたは旦那場の、御大切なるお孃さまを、御恩を仇にそゝのかしたか。

櫻川　何でわしが、そんなことを。

お牧　いや隱してももう叶はぬ、譯もないのに斯うやつてお出でなされう筈はない、今の今まで孝行もの、正直ものと人樣に自慢話しをした母が、此の樣なことをしやつては、世間に對して言譯がない、如何に若氣の至りとて、有らう事か有るまいことか、御贔屓うける旦那場の御大切なるお孃さまを疵物にしてそれで濟むか、さあすつぱりと思ひ切り、御異見をして歸せばよし、さもない

うちは此の母は、もう悴とは言ひませぬぞ。

へ正路一途に潔白を、立て通したる強異見、聞く五郎藏は迷惑顏、

ト お牧よろしく思入櫻川もこなしあつて、

櫻川　それだからお孃さま、昨日もあれほど木戸前でお斷りを申したのだ、そりやもうこんなわしのやうな武骨な奴をそれ程に、お思ひなされて下さりますは、まことに嬉しうござりますが、今母者人も言ふ通り日頃御恩を蒙りまする、御贔屓先きのお孃さまを、どうまあこんな汚ない内の女房などに出來ませう、それでなくても私があなたを挨うからそゝのかして、疵物にでもしたやうに疑ひ受けて母者人に小言を言はれて居りまする、斯ういふことが知れましては聟取前のお體へ疵が附くまいものでもない、さあ〳〵送つて上げますから、お早くお歸りなされませ。

へ詞優しく言ひ諭す、樣子に母は落着けど、娘は胸も安からず、

ト 三人よろしくこなしあつて、

お花　そりやもう厭ぢやとおつしやるのを、無理に斯うしてこちらから、お願ひ申す押附け業、歸つてくれとおつしやるなら、仕方なく〳〵歸りませうが、もう此の世には居りませぬ。

お牧　えゝ、そんならあなたは死ぬ覺悟で、此の家へお出でなされしとか。

お花　はい、此の身の願ひが叶はずば、死ぬ氣で是れへ參りました。

お牧　えゝゝゝ。（トびつくりなす。）

お花　親の許さぬいたづらは、不孝と知つて居りながら、何の因果でこのやうに櫻川さんが戀しいか。〽まだ生れてより男の肌しら齒娘のくせにして、手取り〳〵と評判のその關取を戀慕ふ、恥かしいのも何處へやら、忘れて無理な身の願ひ、是れが叶はぬことなれば死んで未來で添ふ心、不便とおぼさば母御さま、どうぞお慈悲ぢやお情に、お添はせなされて下さりませ。〽添はせてたべと搔き口說く、娘心ぞしどなけれ。

ト此の內お花、櫻川とお牧へ寄り添ひ、さはりよろしく、お牧も思入あつて、

お牧　あゝ勿體ないお孃さま、まあ〳〵お手を上げられませ。（と合方になり。）戀なればこそ此の樣に見る影もない老耄に、御大家さまのお孃さまがお手を下げての其のお賴み、浮世に義理がないならば此の母とても木石ならず、慈悲も情も知つては居れど、それのならぬは此の年頃御贔屓受けて櫻川が御恩に預るお出入り先き、慾に目が暮れ大切なお孃さまをそゝのかし、疵物にして引入れしと、世間の人に言はれては恥もかゝねばなりませず、又親御さまのお怒りはどのやうなりと思

はつしやる、

〽我が子憎いと思はぬは、世間の人情親心、

あの櫻川がなかつたなら、大事な娘に此のやうな心得違ひはさせまいにと、そのお恨みは如何ばかり、角力の仲間で色戀を好んでござる若者は、此の櫻川を手柄もの働きものと褒めませうが、稼業を勵み身を立つる關取衆が聞く時は、

〽天下の力士と世の人に、尊敬される身を以て、

恩を知らざる人でなし、義理知らずめと蔑まれ、もう櫻川もあれ切りで出世は出來ぬと言はれませう、それゆゑどうもお客先きの、娘は嫁には貰へませぬ、むごい母ぢやとお孃さま、必ずお恨み下さりますな。

〽事を分けたる老の身の、異見によそへ言譯も、娘心の悟り兼ね、

ト お牧よろしくこなし、お花思入あつて、

お花 それ程までに御迷惑がかゝるとおつしやることならば、内へ戻つて母さまへお願ひ申して改めて此の家へお嫁に參りますが、さうなりましたら母御さま、櫻川さんに得心させ、お置きなされて下さりませ。

櫻川　いえ、さうなつてもお前さまは、わしの女房にや出來ませぬ。

お花　そんなら是れ程慕ふのに、嫌うておいでなさんすか。

櫻川　いや／＼何でお前さまを、嫌ふの何のと勿體ない、そんな心がござりませう、表向きにて親御様が假令女房に下さるとも、お貰ひ申せぬ其の譯は、今をも知れぬ身の上に、

お花
お牧　えゝ。

櫻川　いやさ、今をも知れぬ年寄りの、母を持つたる身の上に、どうぞ二年が三年でも生き延びさせたく思ひまして、實は此の春摩利支天へ三年の間女を斷ち、大願掛けてござりますゆゑ、どうも女房は持たれませぬ、それ程までに櫻川をお慕ひなされて下さるなら、お待遠でも願明けまで、お待ちなされて下さりませ。

お牧　そんならそなたは此の母に、長生きさせたいばつかりに、女子を斷つて居やつたか。

お花　さう聞きましては又一倍、わたしの思ひが増しましたわいなあ。

櫻川　あゝ、こりやまあ困つたものぢやなあ。

〽戀の柵綾の絲、ほぐれ兼ねたる其の處へ、

ト又稽古唄になり、花道より前幕の下女お民出來り、花道にて、

お民　此の間木母寺からお花見歸りにお孃さまが、櫻川さんの家の前をお通りなさつたことがあれば、多分はあすこと思へども、若しお出でのないその時は、こりやどうしたらよからうぞいなあ。（ト舞臺門口へ來り、内を覗き、）嬉しや、おいでゝあつたわいなあ。（ト内へ入る、お花お民を見て、）

お花　どうしてそなたは、來やつたのぢや。

お民　どうして所おやござりませぬ、お堂に拜んでゐる内に、淡島樣へ折鶴を納めて來いとおつしやいまして、何處へか行つておしまひなされしゆゑ、あなたを其の儘見失ひ、お内へとては歸られず、途方に暮れて私は、大心配をいたしました。

櫻川　大方さうであらうと思ひ、今こつちから人を附けて、お送り申す積りで居ました。

お牧　よくまああなたお孃さまが、こちらにおいでと知れましたな。

お民　此の間からお孃さまが、こちらのお内の櫻川さんをお慕ひなされておいでゆゑ、多分はこちらと存じました。

お花　是れから戻つて母さまへ、お願ひ申して改めて、わたしやこちらのお上さんに、是非なりたいと思ふゆゑ、そなたもお共に母さまへ、お願ひ申してたもいなう。

櫻川　それも三年經ちますまで、お待ちなされて下さりませ。

お花　いえ、三年が五年でも、待つのは厭ひはござんせぬから、一緒に置いて下さりませ。
お牧　それではお宅の親御さまへ、やつぱり御苦勞かけますから、願解きまでお宅に居てお待ちなされて下さりませ。
お民　まあ兎も角も今日は、お宅へお歸りなされませ。
お花　そんならどうでも此の儘に、歸らねばならぬかいなあ。
〽離れ難なく、立兼ねる表の方へ家主が、色事筋を附けねらひ、
ト お花よろしくこなし、下手より以前の杢兵衞出來り、門口より内を覗き、
杢兵　お袋、息子どのは歸られたかな。
お牧　先程戻つて參りましたが、迎ひの者が見えませぬゆゑ、お察し通り今日は、場所も休みと見えまする。
櫻川　御用がなくば大家さま、まあおはひりなされませ。
杢兵　そんならどなたも許さつしやい。（ト お花を見てこなしあつて内へ入り、よろしく住ふ。）
お民　さあ、お孃さま參りませう。
お花　ならう事なら此の儘に、こちらに居たいものぢやなあ。

杢兵 〽それと見て取り家主が、儲けの種と打ちうなづき、（と杢兵衞思入あつて合方になり。）

杢兵 これ關取、すてきなものをしめさつしやつたの。

櫻川 そんならわしの化粧廻しを、大家さんには御覽なされたか。

杢兵 見たとも／＼根こそげ見たが、端出な好みの黒繻子に、緋鹿の子絞りの腹合せ、どこに一つの言分ない立派な器量の化粧廻し、是れをしめるは大手柄、大家といへば親類同然、店子といへば子も同然、どこがどこまでわしが引受け、此の貰ひ引きをしてやるから、氣に入つたら貰はつしやい。場末に住めど幡隨の長兵衞といふ親玉が、男を磨く花川戸の流れに續く隅田川、いつでも頼みにござえませ、兀鬢掻いて待つて居りやす。（トちよつと團十郎の聲色を遣ふ。）

お牧 いえ、此のお子は五郎藏の色でも何でもござりませぬ。御贔屓にして下さりまするお出入り先きのお孃さま、御用があつて此の邊までお出での歸りに此の内へ、お立寄りなされたゆゑ、今こちらからお送り申して上げる所でござります。

杢兵 いや隱しても知つて居る、今方わしが格子の内で朝飯を喰べて居ると、表をつひぞ見馴れぬ綺麗な娘が、供をも連れずたつた一人、眞崎の方へ通るから、はて合點が行かねえが、若し身投げではあるまいかと其處が所謂老婆心、格子を明けて出て見ると、こつちの内へ入つたは、當時若手

の賣出し角力、美男と噂の櫻川に惚れて駈け込む色娘と、一目見るより察したのだ、わしも疾うから女房の好いのがあつたら持たせたいと心掛けて居たところ、相手がよければ猶のこと、此の家主が渡りを附け、何うとも口を利かうから、氣に入つたら貰はつしやい。

櫻川　いえ、其の御親切は有難いが、わしは心願がござりまして、三年の間摩利支天様へ女を斷つて居りますから、三年經たねば女房を貰ふ譯にはなりませぬ。

お花　さあ其の三年が五年でも少しも厭ひはござんせぬゆゑ、女中替りに此のお家へお置きなされて下さるやう、どうぞお慈悲にお家主さま、お世話なされて下さりませ。

お民　それも一旦お家へ歸り、お袋さまへあなたからお願ひなされた其の上で、又あなたへも私からお世話をお頼み申しませう。

李兵　おゝそれがよい〳〵、斯ういふ出入りは家主が、扱ひつけて馴れてゐるから、まあ兎も角もお内までわしが送つて進ぜませう。

お牧　それではどうかこちの親子のしくじりになりませぬやう、よしなにお頼み申しまする。

李兵　はて、家主がぐつと承知だ。

櫻川　さうしてどうか櫻川が、女を斷つて居りますることも、親御さまへ言つて下さい。

李兵　はて、家主がぐつと承知だ。
お花　こちらの内の女中代りに、來られるやうに願ひまする。
李兵　はて、家主がぐつと承知だ。
お民　さうなりましては私が、御主人様へ濟みませぬ。
李兵　はて、家主がぐつと承知だ。
〽何を聞いても大摑み、ぐつと呑込み家主が附添ひてこそ歸り行く、跡は親子の差向ひ、
ト此の内皆々捨ぜりふにて、李兵衞お民、お花をせり立て花道へはひる。跡兩人思入あつて合方になり、
お牧　これ悴、思はぬお客で昨夜の樣子聞質すのも後れたが、昨日そなたと顏觸れの相手は慥黑鷲關、それがどういふ譯あつてか昨夜今戸の橋際で切られて死んで居られたと、今爰へ來た家主始め長屋の衆も噂とりぐ〵、それ故なるか今以て場所から迎ひの人も來ず、大混雜で興行も今日は休み
と思はるゝが、親孝行のそなたゆゑさういふ事もあるまいが、若しも角力の遺恨にて黑鷲關と間違ひして殺した相手がそなたなら、言はずと知れた下手人にならねばならぬ大罪人、それが苦勞で最前から、まだ朝飯さへ喰べぬわいなう。

へその替ひに食事さへ喉へ通らぬ位と言葉、言ふにいはれず五郎蔵に、話しも心で伏めんと、
ゝ櫻田思ひ入あつて、

櫻田　いや心配をさつしやりますな、わしも今宵帰りがけに今戸橋にて黒装束の切殺されて居るといふ噂はちらりと聞きましたが、昨日の角力に負けでもしたらそれを遺恨に殺さうなどゝ、無分別を出るかは知らねど違ひ時つて櫻川が昨日の勝負に勝つたのゆゑ、何にも遺恨はありませんがこつちに恨みはござりませぬ、そりやもう世間の人の口、殺したなどゝ疑ひを受けまいとも言はれぬが、微塵覚えのない事ゆゑ、少しも案じることはない、必ず心配さつしやりますな。

お牧　それならいよいよ殺したなどゝ、さんな覚えはないと言やるか。

櫻田　はい、微塵覚えはござりませぬから、まあ落着いて喜者人、頭の痛など咬はつしやりませ。

お牧　いや、それなれば今の雨、そなたに見せるものがある。

櫻田　見せるものとは喜者人、どんな物でござりまする。

お牧　今取出して見せませう。

へ言ひつゝ立つて戸棚より、以前の着物取り出し、ゝ以前の着物を出し」

殺した覚えのないものが、何でそなたの此の着物に、血潮がべつたり附いて居る。

櫻川　やあ。
お牧　是れでもそちは殺さぬか。
櫻川　さあそれは。
お牧　但しは仔細のあることか。
櫻川　さあ、
お牧　さあ、
兩人　さあ〳〵〳〵。
お牧　隱さず言うて聞かせませうぞ。
〽さあ〳〵どうぢやと詰寄りて、迫る子よりも胸せまる、親の心は慈悲の海、深くも包み隱さんと、（ト此の內櫻川じゆつなきこなしあつて、氣を替へ、）
櫻川　それでは昨夜通つた時、もう殺されて居ましたか。
お牧　なに、通つた時殺されて居たとは、（ト誂への合方になり、）
櫻川　昨夜並木の巴屋で、花川戸の子分の衆に勝祝ひとて馳走になり、嫌ひな酒を强附けられ、十分醉つた歸り道、降出す雨の橫しぶき、傘はあれども提灯の明りは消えて眞の闇、着物を厭ひ高股ま

で尻引ッからげ今戸橋を、渡つて内へ歸りましたが、そんならあの時躓いたは、黑闇の死骸にてわしの着物へその血潮が、跳上つたとも知らずして戸棚へ仕舞うて置きましたを、母者人の目に留り、よしない苦勞を掛けましたが、殺したなどゝいふことは微塵も覺えのない事ゆゑ、疑ひ晴らして下さりませ。

お牧　いや、それなれば好けれども、通り掛つて跳ねたりと、思はれぬのは此の血潮。

〽まことしやかに言ひなせど、血潮の樣子疑ひの晴れぬ思ひに打ち案じ、(ト お牧思入あつて)

櫻川　えゝ。

お牧　まだ〳〵母が今の内、日に附いたればこそよけれ、是れを他人に見られなば、其の言譯は立たぬわいの。

〽落着く樣子暫しでも僞はることの、勿體なく、いつそ打明け言はうかと心の内のとつおいつ、辛き思ひの折柄に、長屋の者が足早に、檢屍の場所より歸り來て、

ト此の内櫻川よろしく思入、お牧は件の着物を戸棚へ仕舞ひ居る、花道よりばた〳〵になり、其前の喜兵衞與兵衞出來り、直に舞臺門口へ來り、

喜兵　これ〳〵お袋、行つて來ました。

與兵　おゝ、息子どのも歸つて居たか。（ト兩人内へ入る。）
櫻川　お長屋の衆、お揃ひでどこへ行つてござりました。
喜兵　今待乳下の人殺しを、行つて見て來ましたが、定めてこなたは昨夜の樣子を、知つて居るで、
兩人　ござらうの。
ト五郎藏胸にぎつくりと、當れど態と知らぬ顏、（ト櫻川思入あつて氣を替へ、）
櫻川　いや〳〵わしはたつた今、附者人から聞きましたが、黑鷲關を殺したものは、まだ誰だか知れませぬか。
喜兵　さあ、それに附いてこちと等も、實はこなたの業ではないかと疑ふ所もあつたゆゑ、心配半分樣子をば、内々探りに行つた所。
與兵　今御檢屍の供をして手先きの衆が遣つて來て、死骸の疵を改める樣子を側で聞いてびつくり、
喜兵　あの人殺しの本人は、幡隨院の一子分、
與兵　唐犬權兵衞に相違ないと、目串が附いたと、
兩人　いふことぢや。
ト話しを聞いて、又びつくり、（ト櫻川思入あつて、）

櫻川　なに、唐犬の親分さんが、それはどういふ證據があつて、
お牧　その人殺しの本人と、目串が附いたことぢややら、
櫻川　御存じならば、長屋の衆、
お牧　どうぞ聞かせて下さりませ。
喜兵　さあ、段々樣子を聞いたところ、死骸の側に落ちてあつた權兵衞どのゝ煙草入が、
與兵　證據となつて目串が附き、權兵衞どのは今の間に、召捕られたといふことだ。
櫻川　そんなら、あの煙草入が、やゝゝゝゝ、
〽はつとばかりに驚けば、母は元より長屋の者、
ト櫻川よろしく思入、皆々この體を見て、
お牧　證據になりし煙草入を、
喜兵　どうやら知つて居る樣子、
與兵　何でそんなに驚くのぢや。
櫻川　さあ、これはあの、おゝさうぢや、昨夜場所にて唐犬の親分さんに出逢つた時、提げてござつた煙草入が證據となつて召捕られたかと、それでびつくりしましたのだ。

お牧　悪事千里を走るとやら、殺した場所へ目印を、落して行くとはこれ天命、あゝ是非もないことぢやなあ。

喜兵　何は兎もあれ、こつちの内の、息子でなくつてわしも安心、

與兵　内へ歸つてゆつくりと、朝飯でも喰ひませう。

櫻川　わしを案じて下すつたとは、御親切なる長屋の衆。

お牧　母もそれにて落着きました。

喜兵　そんならお袋、息子どの、

與兵　又出直して來ませうぞや。

〽二人は打連れ立歸る、何思ひけん五郎藏は、足のなやむを押隱し立たんとするを、母は押留め、

ト兩人よろしく文句の通りあつて、

お牧　こりや悴、そちや血相して、どこへ行くのぢや。

櫻川　さあ、日頃贔屓にして下さる、恩あるお人が人殺しで、召捕られたと聞きましては、知らぬ顏しちや居られませぬ。

お牧　そりや尤もではあるけれど、そなたが其處へ立寄つて、若し疑ひでも受ける時は、言譯立つて歸るにせよ、母が苦勞はどのやうぞ、見舞に行くなら此の母が、そちに代つて行く程に、まあ〳〵内に居てたもや。

〽母の居ぬ間に何事も、思案の臍を定めんと、（ト櫻川思入あつて、）

櫻川　そんならお前御苦勞ながら、幡隨院のお家まで、行つて樣子を見て來て下さい。

お牧　つい一走り行つて來れば、どうぞそれまで内に居て、何處へも出てはなりませぬぞ。

櫻川　いや〳〵何處へも出やしませぬ、その留守の間に何にかも。

お牧　え〻。

櫻川　いえ、何も構はず昨夜の疲れ、わしや一休みやらかします。

お牧　お〻それがよい〳〵、どれ、一走り行つて來ようか。

〽見得を捨てたる老の身は、支度も早き常着のま〻。

トお牧よろしく身支度をなし、門口へ出て、

そんなら、留守を賴みまする。

櫻川　思へば是れが、

お牧　え丶、

櫻川　いや、行つてござりませ。

〽さえぬ様子に母親は、後へ心は殘れども行かで叶はぬ名代の、見舞にとつかは出て行く、

ト　お牧思入あつて、よろしく花道へはひる。

〽跡には一人五郎藏が、門口明けて母の影、遠くなるまで見送りて、こらへ〳〵し溜め涙わつと一度に男泣き、（ト此の内櫻川よろしく思入あつて）

これ母者人、どうぞ許して下さりませ。（ト床の合方になり、）つひぞ是れまで嘘などを、言うたことなき五郎藏も、今日ばつかりは有體に言ふに言はれぬ身の切羽、何を隱さう黒鷲が角力の遺恨で櫻川の歸りを待伏せ殺さうと、身に降りかゝる大雨は脱れぬところ是非もなく、殺しましたる上からは、所詮命はなきものと覺悟を極めた此の五郎藏、丁度忌日に當るゆゑ死んだ親父の墓參りを今朝起きぬけにして來たも、老年寄つたお前さまを後へ殘して先き立つは、不孝の罪の此の上なし、詫びをする氣で一遍の、回向もせめて後の世で、此の世の恩が返したさ。

〽口は拭いても染み殘る、衣類の血潮が露顯の種、

今また長屋の衆達が死骸の場所から立歸り、話すを聞けば巴屋にて角力に勝ちし褒美にと、纏頭

に貰ひし煙草入が、證據となつて唐犬の親分さんが召捕られ、無實の罪にて引かれしと知れては片時櫻川が安閑として居られうぞ、母が見舞に花川戸へ行つたを幸ひ此の暇に、晴れぬ罪を書殘し、死んだことなら唐犬の親分さんも無罪となり、又跡々にて母者人が路頭に迷ふ當惑を、力になつて下さる樣、親分方へ書置きにて賴んで置けば是れも安心、母の歸らぬその內に、どれ、一筆書き殘さうか。（ト是より下座の獨吟になり）

唄〽叢雲は月の障りと昨夜降る雨に櫻の色褪めて、盛り短く今朝は又、風に散行く憂き思ひ、

ト此の內櫻川門口の掛金をかけ、後の戸棚より硯箱と卷紙を出し、書置を書きにかゝる、右の唄にて、花道より幡隨長兵衞羽織着流し一本ざし駒下駄がけにて、跡より清兵衞着流し一本ざしにて供をして出來り花道にて、

長兵　昨日は生憎本多樣がお立ちになるので神奈川まで、送つて行つて青木町へ、久し振りで泊つた所、今朝方江戸から早迎ひの使ひが來たので何事かと、駕籠を飛ばして歸つて聞けば、弟同樣日頃から贔屓にして居る櫻川が人殺しをした昨夜の間違え、それぢやあいよ／＼黑鷲を、殺した相手は五郎藏か。

清兵　えゝ、しかも昨日は櫻川があの官太夫を土俵の上で、見事に投げた勝祝ひに、例の並木の巴屋で

唐犬兄貴を始めとしてこつちの仲間が櫻川に、悦び酒を呑ませたが、生憎歸りは日和癖の雨が降出し途中まで、わつちが送つて通りかゝる今戸橋での大喧嘩、向うは黒鷲官太夫と弟子の奴等が二三人、それをこつちはたつた二人で、物の見事に切捨てました、昨夜の手並は出ッ尻も、實に親分、お前さんに見せてえやうでござりました。

長兵　さうして何で唐犬が、今日人殺しの一件で、揚げられたのだか譯を知らぬか。

清兵　そりやう昨夜櫻川に唐犬兄貴が遣んなすつた、名前を彫つた煙草入が死骸の側に落ちて居たのを、白柄組の進藤めに、拾はれたのから足が附き、揚げられたのでごぜえます。

長兵　それと聞いたら櫻川も知らねえ顔はして居めえが、何にしろ向うへ行て内の樣子を見てやらう。

清兵　それがようごぜえます。

唄〽花の名所もいつしかに、春の名殘りとなる鐘は淺草寺の淺き縁、

ト此の内長兵衞は舞臺へ來る、櫻川は書置を書いてしまひ、上手の障子屋體の内より小机へ載せし佛檀の三具足、手向の水の茶碗などを持つて出來り回向なして居る、長兵衞は門口を明けようとして明かぬゆゑ、

長兵　こう清兵衞、留守だと見えてしまつて居る。

清兵　内からしまりがしてあるのは、裏からでも出たのか知らん。（ト櫻川此の聲に聞き耳を立て、）

櫻川　南無三、誰やら來た樣子、

唄〽告げる無常も三ツの捨鐘、

ト獨吟の上げにて、櫻川刀を拔き腹へ突立て苦しきこなしよろしく、門口の兩人聞き耳立て、

長兵　これ清兵衞、何だか内で唸つて居るぜ。

清兵　おい、誰か居るか、お袋〳〵。（ト門口を叩く。）

竹本〽うめきの聲のいぶかしく、常事ならずと思ふにぞ、

長兵　構ふことはねえ、ぶち毀して入れ。

清兵　承知しました。

〽門の戸毀し内に入り、自殺の體を見てびつくり、（ト兩人よろしく内へ入り、）

長兵　やゝ、櫻川には腹を切つたか。

清兵　そりやこそ事だ。（トどうとなり、腰の拔けたるこなしにて、）南無阿彌陀佛々々。

〽早腰ぬけて出ツ尻が尻邊にどうと腰立たず、長兵衞手負ひを抱き起し、

ト長兵衞よろしくあつて、

長兵　これ櫻川、それぢやあ昨夜の一件で、腹を切る氣になつたのか。

櫻川　お丶親分さん、おいでなさい、この五郎藏が死にますのは、御恩になつたお前さんや唐犬親分に御迷惑を掛けし此の身の申し譯、惡筆ながら此の通り、次第を書いて置きました。讀んで賴みを聞いて下さい。

ト傍を見やり書置と覺しき一封手に取上げ、（ト長兵衞件の書置を取上げ）

長兵　これ清兵衞、門口をしめろ。

清兵　毀してしまつて戸も立たぬが、此の清兵衞の腰も立たぬ。

長兵　屛風か何かあるだらう、戸の代りに立てゝおけ。

清兵　わつちが表を見張つて居るから、腰の立つまで待つて下せえ。

ト清兵衞戸口へ這寄れば、此方は書置繰開き、（ト是れより竹笛入り、床の合方になり）

長兵　「書置を以て申し殘し候、私儀いつぞや鈴ケ森に於て親分樣にお出逢ひ申し候てより、段々とのお引立てに預り一人の母諸共一方ならぬ御厚恩を蒙り、わづかの間に出世いたし小結とまで取上げ候も、皆親分樣のお蔭と明暮御恩は忘れ申さず、いつぞは御恩の返しやうもあらんかとそれのみ心掛け居り候處、昨日の顏觸れにて、常々親分樣と其の中よからぬ白柄組の抱へ角力、黑鍬

官太夫との立合に相成り、出世角力とは申しながら元より非力の私ゆゑ、所詮勝つことは思ひも寄らず候へども、分か預りにでも相成り候へば十分の勝と心得、土俵に上り候所、親分様の御連中より過分なる御贈物を下され、纏頭觸の御助力が張合と相成り、思ひもよらぬ勝を取り候ことこの身の面目是れに過ぎず候。右の勝祝ひとて又々昨夜巴屋方にて、唐犬親分を始め御連中の方々より御馳走に預り、深更に及び歸宅の途中今戸待乳山下に於て黑鷲官太夫に出逢ひ、角力の遺恨と申し掛けられ、餘儀なく眞劍の勝負に及び候所、是れ又日頃親分様より神影流の一手御指南に預り居り候甲斐顯はれ、荷擔の者三人まで有之候へども、首尾よく相手を殺害に及び其の場は立去り候といへども、最早再び土俵へは上れぬ身分と相成り候ゆゑ、今朝母に暇を告げ候上、人殺しの罪を訴へ出で、上のお仕置を受け候覺悟に御座候所、昨日勝利の御褒美として唐犬親分より頂戴に及び候目印の御煙草入、あやまつて昨夜の場所へ取落し候一條より、無實の罪にて唐犬親分様今朝上へお召捕りに相成り候由承はり、驚き入り、速に訴へ出で、明白の御刑罰受け候はんとは存じ候へども、何分母の手前を兼ね心に任せず候ゆゑ、事の次第を書殘し切腹いたし相果て候間、跡に殘り居り候一人の母不便な者と思召され、一生涯お飼殺しにもなし下され、偏に〳〵御救育の程願ひ上げ度く候なり。」

ト流石力士に愚痴もなく、母を頼みの書置に、長兵衞とくと讀み終れば、淸兵衞やう〳〵腰も立ち、手負の側へ進み寄り、（ト淸兵衞櫻川の側へ來て、）

淸兵　これ櫻川、さういふ譯なら死なずとも外に仕樣もあらうもの、早まつたことしてくれた、おれも昨夜の人殺しに少しは手傳ひしたことゆゑ、そなたが死ねば指ぐれえは切らにやあならねえ譯合だが、それせえ厭で出來ねえのに、思ひ切つたことをしたなあ。

ト地金を明かしいたはれば、手負も苦しき顏を上げ、（ト思入あつて、）

櫻川　いや〳〵そなたは知らぬこと、わしが殘した書置で權兵衞さまの無實の罪、少しも早く脫れるやう取計らつて下さりませ、又親分へのお願ひは跡に殘つた母者人、短氣なことでもする時は猶々不孝になりますから、歎きを止めて力を附け、御助力をして下さりませ、それはツかりが五郞藏の心殘りでござります。

ト苦痛ながらに手を合せ、賴む心ぞいたはしき、（ト櫻川よろしく思入。）

長兵　おゝ其の事なら案じるな、知らぬ者さへ義に依つては、命に代へて身に引受け、どこがどこまで世話をするは此の長兵衞の心願だ、況して贔屓のこなさんの一人の母が困るのを餘所に見捨てゝ居られうか、おれのお袋同樣に一生世話をしてやるから、心殘さず成佛してくれ。

清兵　又唐犬の兄貴のことは、此の清兵衛が引受けて、無實の罪の晴れるやうに、取計らふからは安心なさんな。

櫻川　それにて思ひおくことなし、この母者人はどうしたか、息ある内にもう一目、逢つて死にたうござりまする。

長兵　さうして何處へ、お袋は、

清兵　出掛けて行つて留守なのだ。

櫻川　權兵衛さまのお見舞に、花川戸まで行きました。

長兵　それぢやあこつちは山谷から、

清兵　廻つて來たので逢はなんだか。

櫻川　どうぞ親分、逆緣ながら、末期の水を、呑ませて下さい。

長兵　あゝこれ、早くお袋が歸ればいゝが。

〽手負に水は敵藥とためらふ折柄母親が、斯くとも知らず三人連れ、

ト稽古唄になり、花道より以前のお牧先に杢兵衛の家主、お花を連れて出來る、ずつと後より宅助紺看板の中間にて附いて出來る、三人は花道へ留り、

お牧　親御さまさへ御承知なら、何で否やがございませう。

杢兵　いやもう承知も承知大承知、親孝行の櫻川ゆゑ、疾うから娘の聟に欲しいと、親御も望んでござつたとやらで、母御諸共家へ引取り、聟にしたいと言つてござつた。

お花　これといふもお家主さまが、お口を利いて下されしゆゑ、一生御恩は忘れませぬ。

お牧　まあ何にせい家へ行つて、悴と相談いたしませう。

杢兵　おゝそれがよい〳〵。（ト右の唄にて三人舞臺へ來り）

お牧　やゝ、何で戸口が毀れて居るか。

杢兵　造作の內でまだ仕合せ。

お花　泥坊の業ぢやござりませぬか。

〽呟きながら母親が、內の樣子を見てびつくり、（トお牧內を覗き）

お牧　こりや常事ではない樣子。

〽驅入る姿見るよりも、泣き出す清兵衞、長兵衞は手負を屛風で押隱し、

トお牧內へはひる。清兵衞この體を見てわつと泣出す、長兵衞は有合ふ二枚折りの半屛風にて櫻川を隱すことよろしくあつて、

長兵　おゝ、お袋、歸らつしやつたか、必ずびつくりしねえがいゝ。

お牧　こりや、どなたかと存じましたら、親分さまでござりますか。びつくりするなどおつしやるには、悴が何ぞいたしましたか。

長兵　おゝ、腹を切つて死ぬ所だ。

お牧　なに、あの悴が、えゝゝゝ。

〽驚く母に門口の、娘も聞いて打ち驚き、

お花　なに、櫻川さんが。（ト杢兵衛附いてお花内へ駈入り、）

杢兵　さうして親分、どこに居ります。

清兵　こいつア枝葉が咲いて來た。

長兵　これお袋、お前に一目逢ひたいと、さつきから待つて居れば、心を丈夫に逢つてやんねえ。

〽隱すよしなく傍なる、建てし屛風を取りのければ、

ト長兵衛屛風を取りのける、お花、お牧櫻川の體を見て、

お花
お牧　えゝゝゝ。

〽うんとのつけに兩人が差込む癪にまた驚き、水を含ませ介抱なし、

トお花お牧癪を起してのつけに反る、清兵衛はお牧を杢兵衛はお花を介抱なすことよろしくあつて、

清兵　これ、お袋やァい。

杢兵　娘やァい。

ヘ呼び活けられて心附き、母も娘も途方に暮れ、（ト兩人よろしくこなしあつて、）

お牧　もし親分どうしませう。

お花　お家主さまどうしませう。

お牧　こりやまあ、どうせう、

兩女　どうせうぞいなあ。

ヘ前後正體なかりける。（トよろしく泣伏す、長兵衛此の體を見て思入あつて、）

長兵　さあそれだから逢はせぬ内に、おれが駄目を押しておくのだ、今こなたに呑ませたやうに水を一口呑ませる時は、この五郎藏は末期の別れ、息ある内にこれお袋、心を丈夫に名殘りを惜しみ、又そこに居る娘御もどうやら譯のある樣子、此の世の名殘りを惜しんで下せえ。

ヘ言諭されて是非なく／＼、手負の側へ取縋り、（トお花お牧櫻川の側へ行き、）

お牧　これ忰、何でそなたは死ぬるのぢや。

お花　でも情ない此の有樣、一緒に死にたうござりましたわいなあ。

（言ふ聲耳に通じけん、五郎藏苦しき顏を上げ、（ト櫻川思入あつて、）

櫻川　おゝ母者人待つて居ました、お孃さまにもよくござつた、此の五郎藏が死ぬ譯は、親分さんが皆御承知、あとで仔細を聞いた上、先立つ不孝は母者人、どうぞ許して下さりませ。

お牧　そんなら若しや人殺しの。（ト言ふを冠せて、）

長兵　いや、其の入譯は長兵衞が、跡でゆつくり話さうが、先づ差當つて聞きたいは、樣子ありげな此の娘御、どういふ譯で爰へ來たか、それを聞かせて貰ひたい。

杢兵　おゝ其の譯は家主が、二人に代つて話しませうが、短く言へば櫻川に惚れて馳け込むおほこ氣も旦那場先きの娘御ゆゑそゝのかしたと言はれては世間へ濟まぬとお袋や、當人までが斷つてすけなく返すを家主が、中へ入つて取扱ひ、親御の元へ送り屆け、次第を話せば先きさまでも、日頃贔屓な櫻川親孝行の噂といひ疾うから娘も慕ふ樣子、不束なれど五郎藏が、貰つてくれる了簡ならこつちは元より望む所、嫁にやらうと話しが極り、場末の大家も花川戸の親分氣取りで鼻が高く男にならうと思つたも、聟が死んでは是れでお陀佛、わしも大きに當てが違つた。

お花　いえ〳〵假令櫻川さんが死んで彼の世へ行くとても、夫婦は二世の緣とやら、一緒に死んで彼の

世にて、わたしや女夫になりまする。

長兵　いやそれなれば長兵衞が、此の世の縁は薄くとも彼の世で縁の結ばるやうに、今櫻川と祝言の杯をさせて上げますから、親に先立ち死なうなどゝ、不孝な心は止めにして、未來を樂しみ親御さんへ、此の末孝行盡さつしやい。

清兵　わしでよければ櫻川の、代りに聟になつて上げよう。

長兵　えゝ、無駄を言はずと、引込んで居ろ。

お牧　そんなら倅、お孃さまと杯をして上げてたも。

櫻川　死ぬのを止めて親御さまへ孝行盡して下さるなら、彼の世で夫婦になりませう。

お花　さあ、彼の世で女夫になられるなら、それ樂しみに生きながらへ、お前の菩提を弔ひませう。

杢兵　それで双方整ふ婚姻。

長兵　思へば是れに有合す、蠟燭立ての鶴龜も、

清兵　時に取つての島臺代り、

お牧　手向けの用意に汲んである、

杢兵　茶碗の水の三々九度、

長兵　嫁から呑んで五郎藏へ、息ある内に早く〳〵。

〽と勸められ力なく〳〵呑む水に、結ぶ縁はありながら、解けて逢夜の定めなき愛別離苦に氷る肌、あつき涙はこぼるれど、次第に冷えて吐く息も、今はかすかの斷末魔、

ト此の内長兵衞机の上の茶碗の水を取つて、お花に一口呑ませ、櫻川に一口呑ませ、其の跡をお牧に呑ませ、またお花にお牧に呑ませ、櫻川にて呑み納める事よろしく、此の時本釣鐘を打込み皆々わつと泣き落す、爰へ以前の宅助の中間門口に窺ひ居て、刀を拔き、

宅助　長兵衞觀念。（ト長兵衞へ切つて掛るを、長兵衞立廻つて見事に切り下げるを木の頭）

〽哀れ果敢なく、

ト床の三重本釣鐘の送りにて、櫻川はがつくりとなる、お花お牧これへ縋り、清兵衞杢兵衞愁ひのこなし、長兵衞は刀の糊紅を拭ふ、此の模樣よろしく、

幕

四幕目大詰

花川戸幡隨内の場

麹町水尾屋敷の場

〔役名――幡隨院長兵衞、水尾十郎左衞門、唐犬權兵衞、出尻清兵衞、進藤野守之助、用人水尾主膳、極樂十三、黒澤庄九郎、幡隨子分閻魔の大助、同地藏の三吉、同荷守の團六、同於多福の辨次、水尾

の家臣蛇山逕八、同疋田千平、同毛倉穴藏、同戸蔭清六、中間三平。長兵衛女房お時、櫻川母お牧、水尾腰元小澤、同岸野、其他。」

（幡隨内の場）＝＝本舞臺一面の平舞臺、正面上の方一間地袋戸棚のある床の間。これへ三社大權現といふ掛物、三方へ神酒徳利を飾り、此の左右に神佛の札守立掛けあり、其眞中一間障子開閉あり、上手一間鏡戸の押入戸棚、上の方折廻し障子屋體、いつもの所門口、下の方、三尺の戸袋、一間「幡隨」と書きし腰障子、此の前に町内安全といふ常夜燈、總て花川戸幡隨内の體。爰に子分四人○△□◎齊流しにて角力の勝負附を見て居る、此の見得流行唄の合方へ、角力太鼓を冠せ幕明く。

○　角力太鼓が廻つて來たが、此の間の一件から場所もあれぎり休んで居たが、明日からまた始まると見える。

△　此の勝負附を見るにつけ、櫻川は惜しいことをした、鈴ヶ森で親分に助けられてから三年だが、

□　人に勝れた力があるのに、入間川關が仕込んだゆゑ、小手が利いて上手だから、僅の内に出世をした。

◎　此の角力も初日から、一日も寐たことがねえ、達者で居たら冬場所には、關脇になれたらうに、

○　それといふのも後立が當時江戸で一の顏役、親分への義理合で、幟が出來たり廻しが出來たり、

△　役者でいやあ花形だから、年寄手合が大事にするので、旗本贔屓の黑鷲が分を分るのを悔しがり、

□　疾うから嫉んで居た所、此の間負けた所から遂に殺さうといふ氣になり、こんな間違ひになつたのだ。

◎　これを思ふとおいらの樣に、年中人の尻に附いてぐづ〳〵して居る方が丈夫だ、何でも嫉みを受けてはいけねえ。

○　丁度おれが小格子で彼女に可愛がられるのを、手前達に嫉まれて、割を喰はせられるやうなものだ。

△　こう〳〵口にしまりがねえと言つて、いゝ加減なことを言へ、女に可愛がられたこともなけりや割を喰つたこともねえ。

○　なに、ねえことがあるものか、此の間川岸へ行つた時、おれを寐こかして先きへ歸り、一日居殘りに殘されて行燈部屋に燻つて居た。

□　殘して來る氣もなかつたが、あんまり手前が惚けるから試しに二階へ置いて來たのだ。

◎　幾日居殘りに居ようとも、眞に女が惚れて居れば、達引かにやあならねえのに。

○　どうして〳〵達引く所か、翌る晩から行燈部屋だ。

△　いや、氣のきかねえ、

三人 色男だな。

○ 氣が利いても利かなくても、もう今に年季が明けるから世帯を持つて女房にするのだ。

△ あの鼻くたをか。

○ なに、鼻くたとは。

△ いや鼻くたぢやあねえ、淺草といつたのだ。

□ あの女の名は何といふ。

○ 細見の名は笠人といふが、實の名はお八重といふ。

△ いや鼻くたにお八重は脫れられねえ。

◎ 馬琴の本なら名詮自稱だ。

○ えゝ、高慢なことをいやあがるな。

ト流行唄双盤になり、花道よりお時島田崩しの鬘長兵衞の女房のこしらへ、お牧前幕櫻川の母、淸兵衞尻端折りにて長兵衞 忰 長松を背負ひて出來り、花道にて、

お時 櫻川のおつかさん、嘸草臥れなさんしたらうな。

お牧 いえ〳〵お寺が近うございますから、少しも草臥はいたしませぬ。

清兵　いえ、草臥れたのはわつちが一番、家を出るから長松さんが少しも歩きなさらないから、おぶひ通しで草臥れました。
お時　ほんに清公は草臥れたらう、ちつと歩いてやるがよい。
長松　あい、そんなに草臥れるといふなら、歩いてやりませう。
清兵　いえもう歩かなくつてもようございます、つい向うが内でございます。
お牧　ほんにもう少しでございますから、おんぶしておいでなさりませ。
長松　それぢやお歩きたいが、おんぶしてやらう。
清兵　いや、恩に着せられてはまづぴらだ。（ト右の鳴物にて舞臺へ來り）
お時　あい、今歸つたよ。
○　おい、お上さん、
四人　お歸りなさいましたか。（ト皆々内へはひり）
お時　留守に誰ぞ來はしなんだかえ。
△　極樂十三が遊びに來まして、奥に親分と話をして居ります。
お牧　今日は忰の初七日ゆゑ、お忙しいのにお上さんが一緒においで下さりまして、嘸や忰も悦んで居

りませう。
お時　月日の經つは早いもので、昨日今日と思ふうち、もう初七日でござんすなあ。
○　お上さんのおつしやる通り、七日々々の忌日も經ち、
□　四十九日は夢の間で、
◎　直百ケ日でござります。（ト此の内下手に清兵衞立つて居て）
清兵　さあ、長松さん、お下りなさいまし。（トおろす。）
長松　あゝ、おぶさつたので足が痛い。
清兵　足が痛い所ではない、わつちはお前をおぶひ續けで、腕が痛くツて拔けさうだ。
△　魂もぬけて居るから、腕も拔けた方がよからう。
清兵　よくおれのことを拔けて居るといふが、お前達もみんな拔けて居るくせに。
○　なに、おら達が、
四人　拔けて居るとは。
清兵　先づ閻魔の大助が何を賴んでも尻へ拔け、地藏の三吉が素見に每晚こつそり內を拔け、瘡守の團六が瘡かきで鼻へ拔け、

○　類は友を集めると、よく抜け盡しを集めたが、
◎　おいらばかりは抜け目がねえ。
淸兵　なに、ないことがあるものか。
△　おたふく辨次はなさゝうだが、
□　何ぞ抜けてることがあるか、
淸兵　毎晩寐小便が疊へ抜けてる。
◎　えい、いゝ加減なことを言やあがれ、寐小便などをするものかえ。（ト淸兵衞の天窓を打つ。）
△　こいつ彌次馬に、
三人　出にやあならねえ。（ト四人で淸兵衞を打つ、お牧これを留めて、）
お牧　あゝこれ、手荒いことをなさいますな。
淸兵　お上さん、みんなを叱つておくんなさい。
お時　叱るも何もいるものか、手前の口が過ぎるからだ。
淸兵　それでも寐小便をしましたもの。
◎　まだそんなことを言ふか。（ト立ち掛るを長松留めて、）

長松　何でおれの馬をぶつのだ。
○　あいつの口が過ぎるからさ。
長松　口が過ぎるなら口で言へ、手出しをしちやあおれがきかねえ。
△　成程こつちが惡かつた。
□　どうぞ堪忍しておくんなせえ。
長松　今手前達のぶつたやうに、清公に天窓をぶたせろ。
◎　そりやあ堪忍して、
四人　下さいまし。
長松　おれが言ふことを聞かねえのか。
○　あゝ、泣く子に地頭は仕方がない。
△　さあ〳〵天窓を、
四人　ぶつたり〳〵。
清兵　おゝ、ぶたなくつてどうするものだ。（ト清兵衛怖々天窓をぶつ、お牧これを見て）
お牧　栴檀は嫩葉とやら、依怙贔屓なきお坊さんの、お捌き方には私も、まことに感心いたしました。

お時　どうでも毎日清兵衛におぶさつて歩くだけ、長松が肩を持つたのだ。

清兵　お陰でみんなの天窓をなぐり、わつちの顔が立ちました。

お時　立つも立たぬもあるものか。

清兵　それぢやあ坐つて居りませう。

ト下手下に居る。長松側へ來て遊ぶ。合方になり、花道より前幕の主膳羽織袴にて、紺看板の中間三平附添ひ出來り、花道にて、

主膳　こりや三平、幡隨の宅は何れなるぞ。

三平　唯今あれで承はりましたが、向うの家ださうにござります。

主膳　案内いたせ。

三平　はツ。(ト先きへ駈け拔け門口より、)頼まう〳〵。

○　何だ、横柄な奴が來やあがつた。

お時　これ、失禮なことを言やるな。

△　どこから來たか聞いて見よう。(ト門口へ來て、)へい、どちらからお出でなされました。

三平　幡隨長兵衛の宅はこちらか。

△　へい、手前でございますが、して、お前さんは。
三平　水尾十郎左衛門の屋敷から參つた。
□　なに、水尾の屋敷から來た。
◎　こいつあ常事ぢやあねえわえ。（ト奥より十三、同じく子分のこしらへにて出來り）
十三　何だ〱、どこから使ひが來たのだ。
○　白柄組の頭分、水尾の屋敷から、
四人　押して來た。
十三　なに、水尾の屋敷から押して來た。構ふことはねえ、ぶん毆れ。
四人　合點だ。（ト皆々鉢卷をして立ち掛るを、お時留めて、）
お時　これはしたりどうしたものだ、何のお使ひか知れもせぬものを、立ち騷がずに靜にしないか。
お牧　まあ皆さん、下にお出でなされませ。
十三　それだといつて向うから、押して來られた上からは、
お時　何も押して來たといふ譯ではない、たゞお使ひが來たばかりだ。
十三　へゝえ、それでは使ひが來ましたのか。

お牧　何の御用か知れないから、まあ聞いて御覽じませ。
○　使ひでも何でも、
四人　構ふものか。
十三　まあ〳〵みんな靜かにしろ、おれが樣子を聞いて見るから、〈ト門口へ來て、〉水尾さまのお使ひはお前さまでござりますか、〈ト此の內門口へ主膳來て、〉
主膳　如何にも手前でござる。
十三　まあ、是れへお通りなされませ。
主膳　然らば許しめされ。〈ト合方になり、主膳上手へ通り住ふ、皆々下の方にて思入〉
お時　長兵衛を尋ねておいでなされました、あなた樣は。
主膳　手前ことは水尾の用人、同姓主膳と申す者。
お時　いまだお近附きでもござりませぬが、何ぞ御用でござりますか。
主膳　長兵衛どのへ密々にお頼み申し度き儀がござつて、わざ〳〵推參いたしてござるが、御在宿でござるかな。
お時　はい、在宿にござります。

淸兵　御在宿とおつしやるのは、山の宿の間違ひか、爰は花川戶でござります。
十三　えゝ、餘計な口を出しやあがるな。
お時　何の御用か存じませぬが、手前は家內でござりますから、御用をおつしやつて下さりませ。
主膳　唯今も申す通り密々の事にござれば、どうか御面會いたしたうござる。
お時　それでは奧へさう申してくりや。
四人　畏りました。（ト此の時奧にて、）
長兵　水尾樣の御用とあらば、只今お目に掛りまする。

ト誂への合方になり、奧より長兵衞着流し好みのこしらへにて出で來り、眞中へ住ふ、

主膳　すりやお手前が名の高き、幡隨長兵衞殿でござるか。
長兵　如何にも本姓は塚本長兵衞、故あつて今にては幡隨長兵衞と申しまする。
主膳　拙者は水尾十郞左衞門が用人、同姓主膳と申す者、以後お見知り置かれ下さりませう。

ト手を突き辭儀をする。

長兵　これは〳〵御丁寧な御挨拶、して私へ御用とは、
主膳　密々お賴み申す儀ゆゑ、暫しの間何れもを、お遠ざけ下さりませ。

長兵　何御用か存じませぬが、御内用とござりますなら、これ、手前達は奥へ行け。
十三　でも、相手が相手だのに、
○　親分ばかり、
四人　殘しては、
長兵　餘計な口をきかねえで、行けと言つたら早く行け。
皆々　へゝえ。
お時　それではわたしも共々に、
お牧　ぼつちやん、奥へ參りませう。
清兵　どれ、箒でも立てゝやらうか。
ト唄になり、お時先きにお牧、長松、十三、子分四人、清兵衞附いて奥へはひる、中間は門口の外へ出て控へる。
長兵　仰せの如く皆の者を、遠ざけましてござります。して、密々の御用とは。
主膳　餘儀なきことで參つてござるが、拙者が賴みを幡隨殿、お聞き屆け下されうや。
長兵　如何なることか存じませぬが、身に叶ひしことならば。

主膳　それは千萬忝い。

長兵　して、お頼みとおつしやるは。（卜誂への合方になり。）

主膳　そのお頼みと申すのは、拙者主人十郎左衞門は、生れ立ちより短慮にして、荒々しき氣質ゆゑ、先代の十郎左衞門その行末を深く案じ、末期に拙者へ御遺言、我が亡き後は倅こと不埒の振舞いたしなば、成り代つて異見せよとくれぐとのお頼みゆゑ、これまでも幾度となく御異見をいたしましたが、追々惡しき友のみ殖え、白柄組とか名を呼びて遊里へ立入り喧嘩をなし、よからぬ風聞のみゆゑに日夜心痛いたせし所、櫻川と黒鷲が角力喧嘩の一條より、當時達師と名の高き各方と旗本の中に奥越の爭ひ出來、いつか一度は騷動にならうと専ら噂ゆゑお頼み申しに參つたは、明日にも水尾の屋敷より迎ひの使ひが參らうとも、必ずお出で下さるな、と申すは詞の爭論より、若し刃傷にでも及びなば、如何なる大事を惹起し、事によりなば家名にも拘はるまじとも申されず、左ある時には先代より遺言受けし拙者が越度、お頼み申すは爰の事、どうか波風立たぬやう迎ひが參りまするとも、必ずおいで下さるな、此の儀偏にお頼み申す。

卜よろしく思入あつて言ふ。

長兵　如何なる事かと存じましたが、御先代の御遺言にて主人の御身を大切に、思召しての御忠節、私

風情へ態々とお出でなされてお頼みは、感心いたしてござります。

主膳　未だ面會もいたさゞるに餘儀なきことをお頼み申し、まだ其の上に斯樣なことは、甚だ申しにくけれど、このほとぼりの冷める內長兵衞殿には暫しの內、日光山か江の島へ旅行なされては下さるまいか。

ト長兵衞思入あつて、

長兵　主人を大事に思召され、恥を忍んでお出でなされしお前さまのお頼みゆゑ、お聞き申して上げたいが、これはどうも聞かれませぬ。

主膳　聞かれぬと言はるゝは。

長兵　凡そ天下に八萬騎の威勢をふるふ旗本衆、人も恐るゝ白柄組ゆゑ、幡隨院も相手を怖がり旅へ逃げたと言はれては、わしが名折になりますから、是れはお斷り申しまする。

主膳　御尤もではござりまするが、仕儀によつては天下の騷動、又人命にも拘はりますれば、何卒無事を思はれて聞き屆けては下さるまいか。

長兵　私一人の事ならば忠節面に顯はれしお前樣のお頼みゆゑ、聞くまいものでもござりませぬが、此の江戸中に男を賣る町奴の名折ゆゑ、どうもこれは聞かれませぬ。

主膳　男を磨く長兵衛どの、外へ對して聞かれぬと言はれるのも無理ならず、其の言譯を聞く上は、最早強ても頼まれず、

長兵　主人の大事を思召して態々頼みにおいでなすつたお前様にはお氣の毒だが、此の長兵衛が名折ゆゑ、どうあつても聞かれませぬから、思ひ切つて下さりませ。

主膳　是非なきことゆゑ、承知しました。

長兵　その替りお迎ひが參りますれば上りますが、假令どのやうなことがあつても、お前様の顔を立つて、手前からは上りませぬ。

主膳　何分共にお頼み申す。（ト刀を取り上げるゆゑ、）

長兵　最早お歸りでござりますか。

主膳　他見かござればお暇いたす。

長兵　遠路の所を御苦勞千萬。

主膳　よしなき事で邪魔をしました。（ト門口へ出る。）

長兵　左様なれば水尾様。

主膳　これをば縁に、又その内。

長兵　ゆるりとお目に、

兩人　掛りませう。

　　ト唄になり、主膳是非なき思入にて中間附いて花道へはひる。長兵衛跡を見送り居る、奥より以前の人數皆々出て、

お時　使ひに來たは見た所から正直さうな人なれど、名に負ふ屋敷が屋敷だから、どんな事を言ひに來たかと、

十三　固唾を呑んでわつち等も、聞き耳立つて居りましたが、

清兵　明日にも水尾の屋敷から、迎ひが來ても親分に、來てくれるなといふ頼み、

長兵　あゝいふ人が側に居るのは、水尾殿の仕合せだ。

○　然しあゝして用人が、

△　態々頼みに來るからは、

□　近い內に親分を、

◎　迎ひに來るに違ひない。

長兵　元より遺恨のある上に、此の間の角力から白柄組と町奴の間に不和の風が立ち、揉め合ふ客の納

りは荒月といふ二月は過ぎたが、血の雨降らして大あれに一あれしにやあ片附くめえ、颶風の迎ひを待つがいゝ。

清兵　今にも水尾の屋敷から迎ひが來たら其の時は、この淺草はいふに及ばず、下谷神田芝浦まで直に仲間へ觸れを廻し、人數を集めて押掛けたら、

十三　假令向うが八萬騎でも喧嘩にかけては素早いこちとら、今も頭のいふ通り、きらめく白刄の稻妻に血の雨降らして町奴の、

○

威勢を一番、

皆々　見せてやらう。

長兵　これに附けても片腕の、兄弟分の唐犬權兵衞、今日人殺しの疑ひ晴れ、赦免になつて歸るよし、十三を始め若い者は、番所へ迎ひに行つてくれ。

十三　わつちもさう思つて居た所、是れから直に行きませう。

長松　おいらも一緒に行きたいな。

清兵　おんぶして行きませう。

長兵　おゝ、おれが代りに連れて行け。

清兵　お連れ申してようござりますか。
長松　清公嬉しいな。
清兵　お前よりこつちが嬉しい。
お時　御番所が込合ふだらうから、怪我をさしてくんなさんなよ。
清兵　そりあ大丈夫でござります。
お時　あんまり丈夫なこともない。
十三　それぢやあ親分、行つて來ます。
長兵　赦免の者は早いから、途中で唐犬に逢ふかも知れねえ。
清兵　さういふことなら、
四人　ちつとも早く、
十三　どれ、出掛けようか。

ト木遣崩しになり、清兵衛長松を背負ひ、十三等四人わや〳〵と花道へはひる。此の内お牧はうつ向き涙を拭ふ、是れを長兵衛見て、

長兵　これお袋、何をお前泣いて居るのだ。

お時　たつた一人の五郎藏さんゆゑ、思ひ出すのも尤もだが、もう斯うなつた上からは、泣いても返らぬことだから、あきらめてしまひなさんせ。

お牧　いえ忰のことは約束事と思ひ切つて居りますが、今もこれにて承はれば、旗本衆と揉め合ひも元の起りは櫻川、是れまで厚いお世話になつた御恩も返さず親方さまへ、斯樣の御苦勞掛けますのは濟まないことでござります、これに附けても便りにする忰は先立ち年取つて、生き甲斐のない體ゆゑ、早く死にたうござりまする。

長兵　白柄組と町奴は、櫻川のことからして遺恨に思ふ譯ぢやあない、先達て吉原で小ッ旗本の二番生と若い奴等が喧嘩をして、それから遺恨に思ふのだ、決していらぬ義理立てに死なうなどゝいふやうな、惡い了簡を出しなさんな。

お時　便りない身に女の事ゆゑ心細くもござんせうが、お前の體はこつちへ引受け、生涯苦勞をさせぬから安心して居なさんせ。

お牧　便りない身を其のやうにお二人樣とも御親切に、おつしやりまして下さりまするは、何とお禮を申しませうか有難うござりまする、冥加に餘る御厚恩、死んでも忘れはいたしませぬ。

トお牧嬉し泣きに泣く。

長兵　又死ぬと言ひなさるか。
お牧　もう取る年でござりますから、順に參れば私が、お先きへ死なねばなりませぬ。
長兵　年を云へばお前が先きだが、人間の身は老少不定、斯ういふおれが今夜にも先きへ死ぬまいものでもねえ。（ト長兵衞思入。）
お牧　えゝ、忌はしいことおつしやりますな、まだ五十にもおなりなさらぬお前樣に、そんなことが今からあつてなりますものか。
お時　おつかさんの言ふ通り、今お前に間違ひでもあつた時は悴は小さし、わたしが難儀はどの位、はんに泣いても泣きあかされぬから、どうぞ體を大事にして長生きをして下さんせ。
お牧　それはお案じなされますな、常から丈夫な親方さん、殊には人を憐んでお情深いお心ゆゑ、天道さまのお惠みでも、御長命でございませう。
長兵　弱い者を助けるが男達の性根ゆゑ、隨分是れまで人を助け、禮をいはれたこともあるが、其の代り又強い者なら假令大名旗本でも後へ引かねえ町奴、賣る喧嘩なら何時でも買ふので、幾ら遺恨を受けるか知れねえ、それゆゑ斯うして達者で居ても、明日も知れねえおれが體。
お時
お牧　え。（ト思入。）

長兵　いやさ、明日ありと思ふ心のあだ櫻、花も散るとき散るのが花だ。
トよろしく思入にて云ふ、兩人もぢつとこなし、合方ばた／＼にて花道より庄九郎羽織袴大小紺看板の中間附添ひ、足早に出來り、直に舞臺へ來て、
庄九　賴まう／＼。
お時　はい、どちらからおいでなさいました。
庄九　手前は水尾十郎左衞門より參つた。
お時　え、水尾さまから、（トおどろく。）
お牧　若しやそれでは。（ト兩人立ち掛るを、）
長兵　これ、何の御用かお聞き申せ。
庄九　長兵衞殿御在宿なら、御面會いたしたうござる。
長兵　長兵衞これに居りまする、何の御用か存じませぬが、是れへお通りなされませ。
庄九　然らば御免下され。（ト合方きつぱりとなり、內へはひり下手へ住ひ、手を突き、）手前は水尾十郎左衞門の家來黑澤庄九郎と申すもの、今日推參いたせしは豫て主人十郎左衞門貴殿の名前高きを知り、いつぞは面談いたし度くと疾くより申し居りましたれど、能き折なくて打過ぎしが、當節庭前の

藤の盛りに、親友打ち集ひ酒宴を催しますにつき、御面會の上粗酒を獻し長く貴殿と御懇意を結び度き主人の心底、甚だ差し附けがましけれど、何卒今日拙邸へ御入來なし下さりますやう、願ひに推參いたしてござる。(ト丁寧に辭儀をなし、敬ふこなし、)

長兵　これは〳〵遠路の所を御苦勞千萬、殊には高が町人風情の數なりませぬ私を、お歴々の其の中へ御招待に預かり、有難う存じまする。

庄九　して御入來下さりませうや、如何でござりまするな。

長兵　冥加に餘る事なれば、仰せに任せお屋敷へ、後刻參上仕つりまする。

庄九　すりや御入來下さりますか、それは千萬忝けない、使ひに立ちし拙者めも、大慶至極にござりまする。

トお時氣遣ふ思入あつて、長兵衞の袖を引く。

お時　もし、お前忘れなさんしたか、今日は脱れぬ用事のあるのに。

長兵　えゝ、入らぬ口出し控へて居ろ。(ト目で叱る、お時是非なく控へる。庄九郎悦び、)

庄九　嘸かし主人も大慶ならん、片時も早く歸邸いたし、おいでの赴き申し上げん。

長兵　左樣なれば、お歸りでござりますか。

庄九 最早お暇いたすでござる。（ト辭儀をなし門口へ出る。）

長兵 憚りながら御前へよろしく。

庄九 後刻お目に掛るでござる。

ト唄になり、庄九郎思入あつて中間附き、花道へ足早にはひる。お時跡を見送り、

お時 をとゝひござんせ。（ト門口をしめ、こちらへ來て）もし、なぜお前、水尾の尾敷へ斷つたらばよいことを、今日行くと言はしやんした。

長兵 約束したといふでもなければ、斷つてもいゝけれど、態々迎ひに來たものを仔細を言つて今日行かねば、白柄組に恐れるやうで長兵衞ばかりか町奴の、名折になるゆゑ速かに、後に行くといつてやつたは、爰が男の魂だ。

お時 そんならお前はどうあつても、水尾の屋敷へ行かしやんすか。

長兵 一旦行くといつたらば、假令命を取られゝばとて、今更行かずに居られるものか。

お時 言出したら一寸でも後へは引かないお前の持前、達てとは言はぬけれど權兵衞さんも赦免にて、今に歸るといはしやんすれば、それまで待つて下さんせ。

長兵 赦免をするも上のこと、いつ歸るか知れはしねえ、それまで待つて居られるものか。

お牧　そりやさうでもございませうが、もう程もございますまいから、暫くお待ち下さりませ。

お時　誰を見せにやらうにも、生憎みんな迎ひに行き、

お牧　年寄りながら私が、御番所へ行つて參りませう。

長兵　いゝや行くには及ばねえ、その間に早く着物を出せ、是れまで芝居や吉原で顔を見知つて居るけれど、表向きで逢ふのは初めて、向うを崇めて紋附の羽織に袴を附けて行くから、銀拵への脇差も一緒に出して持つて來い。

お時　そんならどうでも着物を着替へて、

長兵　えゝ、ぐづ〳〵せずと早く出せ。（トきつと言ふ。）

お時　えゝも、誰ぞ歸つてくれゝばよいに。

お牧　どれ、私が見て參りませう。

ト合方にてお時是非なく奥へはひる。お牧とつかはと花道へはひる。跡長兵衛、ムヽ、と思案の思入。床の淨瑠璃になり、

上るり〽跡には獨り長兵衛が思案に胸も晴れやらぬ、雨持つ空の卯の花月死出の田長の鳴く音さへ、我が身を導くよすがゝと、歎息なして吐息をつき、（ト長兵衛思入あつて、）

長兵　先達てから吉原や角力芝居で幾度となく、若い奴等が喧嘩をした白柄組の旗本衆、恥辱を取つた仕返しの目的にするは此の長兵衞、いつか一度は一命を取られることがあらうと思ひ、疾うから覺悟をして居たゆゑ、左のみ驚きもしねえけれど、おれが死んだと聞いたらば唐犬始め江戸中の兄弟分や子分の者が指を銜へて見ても居めえ、命をきりに旗本の百萬騎を相手にして、喧嘩をしたら天下の騷動、附ては多くの死人も出來、妻子の歎きが不便だなあ。

へ捨てる其の身は苦にもせず、跡の難儀を思ひ遣り、暫し詞の中の間より、涙片手に女房が死出の晴着に一腰を、添へてなく〳〵携へ出で、

ト此の内長兵衞ぢつと思入、奥よりお時廣蓋へ袷襦袢帶袴脇差を載せ、泣きながら出來い、よき所へ置く、

お時　一世の晴れゆゑ新らしいのを揃へて持つて參りましたが、羽織は染めて仕立たばかり、何ぞ目出度ことがあつたら其の時着初めと思つたも、今日の晴着になるといふは悲しい事でござんすなあ。

ト羽織を取つて泣く。

長兵　え丶延喜でもねえ、何を泣くのだ、若い時から此の年まで片生業に喧嘩をしたが、高の知れた町

人同士、今度は命を取らるゝとも相手は天下のお旗本、八千石の知行取りこんな晴なことはねえから、目出度く羽織の着初めをする氣だ。

お時　さういふ心でござんしては、所詮わたしが留めたとて、止りなさんすことでもなければ、今日をば晴れに襦袢まで、すつぱり着替へて行かしやんせ。

〽跡は詞もなく〳〵に憂きを重ねる肌襦袢、着せる袷も妹と背の薄き縁に二重の帶、あの世を結ぶ誓ひさへ心に堅き石疊み、羽織袴に一腰をさすが以前の忍ばるゝ武家に育ちし幡隨院、

ト此の内お時なく〳〵長兵衞に、着物を着せ替へることよろしくあつて、一腰を差し、

長兵　遲刻をなさば此の身の恥、再び迎ひの來ぬ內に、水尾の屋敷へ赴かん。

お時　お前の恥と言はしやんすれば、決して留めはしませぬが權兵衞さんが來なさるまで、暫く待つて下さんせ。

長兵　兄弟分の事なれば、おれも逢つて行きてえが、何時歸るか知れねえものを、浮々待つては居られねえ。

お時　そりやさうでもござんせうが、

〽暫し待つてと取り縋り、止むる所へ唐犬が知らせに宙を駈來り。

と長兵衛行かうとするをお時留める。ばた〳〵になり、花道より權兵衛男達好みのこしらへ尻を端折り草履にて駈け來り、直ぐに内へはひり長兵衛を見て、

權兵　兄貴、まだ内だつたか。

長兵　權兵衛か。

お時　よい所へ來て下さんしたなあ。

權兵　樣子は途中で櫻川の、お袋から聞いたゆゑ、先きへ駈け拔け飛んで來た。

長兵　聞いたとあれば改めて、手前に仔細は言はねえが、權兵衛跡を賴んだぞ。

〽言ひ捨て行くを引止め、

權兵　いゝや、お前は遣られねえ。

長兵　なに、遣られねえとは。（下諷への合方になり。）

權兵　遺恨重なる白柄組、水尾の屋敷へ行つたなら所詮たゞは歸られめえ。わつちを代理に遣つて下せえ。

長兵　代りを遣つては長兵衛が水尾に恐れて行かねえやうで、世間へ對してみつともねえ。

權兵　そりやさうでもあらうけれど、戰でいはゞ兄貴と水尾は敵と味方の兩大將、外に人もねえやう

に自身に出馬は輕々しい、此の權兵衞が先陣に向うの陣へ踏込んで詞戰ひ打合せ、一戰したその上で討死をしたことならば、後詰はお前が出馬して、骨を拾つてくんなせえ。

長兵　兄弟分の誼を思ひ、おれに代つて行かうといふ志しは忝ないが、一旦使ひの侍に約束をした上からは、おれが行かにやあ男が立たねえ。

權兵　假令何といはうとも兄の命に拘はることを、弟が餘所に見られるものか、櫻川へ纒頭に遣つた煙草入から人殺しの、疑ひ受けて假牢へ入れられたのも五郎藏が、身の言譯の書置で明りが立つて今日出たは、兄の代りに行けといふ天の許しを受けたのだ、どうぞ代りに遣つて下せえ。

へ止むる折柄門口に、窺ひ居たる子分の者、お牧も共に内に入り、

ト此の以前よき程に下手より清兵衞長松を背負ひ、十三、子分四人お牧附きて出來り、門口にて囁き窺ひ居て、此の時内へ入り、

十三　様子は門で聞きましたが、相手といふは山の手で弱い稼業の茶屋小屋を亡者のやうに責めるといふ閻魔に等しき十郎左衞門、小ッ旗本の牛頭馬頭が鐵の棒の用意をして待つて居るのは淨玻璃の鏡に掛けて見る如く、研ぎすましたる劍の山へ業の秤にはかられて行くのは危ねえことだから、爰は唐犬親分より地獄に緣ある極樂十三、わつちを遣つて下さいまし。

○　口から先へ生れたか、跡に子分のねえやうに、
△　手前ばかりが好い男に、ならうといつてもさうはいかねえ。
□　一人だけぢやあ行けねえが、
◎　四人一緒に親分の、
○　代りに屋敷へ、
四人　行きませう。（ト長松、四人を搔退け、前へ出で、）
長松　此の春年始におとつさんの代りに出たからお屋敷へも、おいらが代りに行きませう。
清兵　流石は達師の後取りだけ、おとつさんの代りに行くとは小な形で大きな言分、是れが譬にいふ通り、山椒は小粒でひりゝと辛い、大きな形だがおいらは甘い。
長兵　えゝやかましい靜かにしねえか、權兵衛でさへおれが代りに、遣らねえといふに手前達が、何で代りに遣られるものか、口出しせずとすつこんで居ろ。（トきつと言ふ。）
〽只一聲に子分等は、天窓を押へて控へれば、權兵衛は進み寄り、
權兵　言出したらば一寸でも後へは引かねえ兄貴に向ひ、嘴青いおれが異見は口幅つたいことなれど、是れから水尾の屋敷へ行き喧嘩の上で殺されても、お前は覺悟のことなれど、跡に殘つた姉御は

元より可愛盛りの長松も親がなけりやお肩身が狹く、人の後に附かにやあならねえ、一人を不便と思ふなら女房もなけりやあ子もねえ權兵衞、跡で歎く者もなけりやあ、わしが代りに遣つて下せえ。

〽いふ尾について女房が、

お時　權兵衞さん、よう言うて下さんした、わたしも行くのを留めたいけれど、幾らわたしが留めたとて、留らぬ氣性は此の年月連添ふゆゑ知つて居れば、口へも出さず言ふなりに着物を着せる胸の內、どの樣に切なうござんせう、わたしは兎もあれ長松を、お前可愛う思ふなら、權兵衞さんの詞についてどうぞ留つて下さんせ。

お牧　最前から私も申したいのをお邪魔と存じ、差控へて居りましたが、たつた一人の悴に死なれ天にも地にも世の中に便りに思ふは親方樣、あなたにお別れ申したら誰を便りにいたしませう、遂には身でも投げます氣になりませうも知れませぬ。老先き短い此の婆を、不便と思召しましてお留まり下さりませ。

清兵　おゝそりやお前ばかりぢやない、此の出ッ尻は町奴の數には入れど臆病者、たゞ親分の光りにて天窓數になつて居るゆゑ、今親分に別れたらみんなに頭を毆られて瘤だらけになりませう、此の

お袋と出ッ尻を可愛さうだと思ふなら、どうぞ親分思ひ直して、屋敷へ行かずに下さりませ。

十三　こりや出ッ尻ばかりでなく、十三をはじめ子分の者後楯がなくなれば、白柄組に負けにやァならねえ、如何にもそれが悔しいから、

○　諄いやうだが、わつちらも、

△　共々お留め、

皆々　申します。

權兵　これ程までに口を揃へ、みんなが頼むに聞かれねえのか。

長兵　むゝ。

お時　さあ、權兵衞さんの詞について、

お牧　思ひ止つて下さりますか。

長兵　むゝ。（ト長兵衞默つて居るゆゑ）

十三　それぢやあどうでも約束ゆゑ、

○　水尾の屋敷へ、

四人　行かつしやるか。

清兵　どうか親分思ひ直して、
權兵　行かずに止つて、
皆々　下さいまし。

〽頼む詞に長松は、年はゆかねどさかしくも、

ト此の内皆々思入にて言ふ、長松これを聞き前へ出で、

長松　みんながあんなに頼むから、聞いて遣つて下さいまし、おとつさんに別れるのは、誰よりわたしが悲しいから、どうぞ行かずに下さりませ。

〽男を磨く權兵衞はじめ子分の者や妻老婆、右と左りにかき口說かれ、切なき胸に愛し子のたつた一人の長松に、縋り歎かれ長兵衞も、我れ一人にて多人數の難儀は不便と思へども、男の意氣地捨て難く、

ト此の内長兵衞切なき思入、長松長兵衞に縋る、これを見て不便なといふこなしあつて氣を替へ、誂への合方になり、

長兵　兄弟分の誼を思ひ、水尾の屋敷へ權兵衞が命を捨てに行かうといふ志しは天晴た、是れでこそ達師の魂、反故にされねえこなたの異見、就いては女房お時が頼み、又櫻川の老母の歎き、愚の

生れの出ッ尻が愚痴に引替へ十三をはじめ、子分の者が命を賭け、代りに行かうといふ健氣さ、唯の者なら詞を用ひ思ひ止らにやならぬのを、餘儀なく厚い志しを水になすのも花川戸で、人に知られた幡隨長兵衞、昨日今日まで盛りで居た隅田の櫻も散る時が、來れば思はぬ夜嵐に清く散るのが世の習ひ、一旦行かうと使ひの者へ詞を番へた上からは、命惜しさに長兵衞が代りの者を寄越したと言はれた日には是れまでに、世間へ賣つたおれが名折れ、それゆゑみんなの異見もきかず、血の餘りなる長松が頼みをきかねえ上からは、此の後風神雷神が阿吽の仁王の力を借り留めに來るとも留りやあしねえ、是れ程いふにきかねえのは、さりとは分らぬ親分と恨まば恨め是非がねえ、武家と町家に日頃から遺恨重なる旗本の、白柄組に引けを取つちやあ、此の江戸中の達師の恥、おれが男の立つやうに、二度と再び留めてくれるな。

ト二言とあとは留められぬ、思ひ切つたる長兵衞が男を磨く一言は、天晴達師の鑑なり、聞く人々も今更に、是非も涙の其の中に、唐犬きつと氣色を替へ、

ト此の内長兵衞よろしく切なき思入あつて云ふ、皆々愁ひの思入、權兵衞うつ向き居て、此の時きつと思入あつて、

權兵　兄貴の言ふのも尤もだが、斯ういふ時の身代りになるのが弟の當り前、それゆゑ代りに遣つて

くれと言ふのを聞いてくれなけりやあ、血汐を呑んで兄弟の因みを結んだ甲斐がねえ、今日を限りに元々の、おらあ他人になりてえから、緣を切つて貰ひたい。（ト長兵衞思入あつて、）

長兵　むゝ、水尾の屋敷へおれの代りに行くといふのを留めたのが、癪に障つて兄弟の緣を切るといふならば、望み通り切つてやらう。

權兵　それぢやあおれが望み通り、緣を切つてくんなさるか、そりやあ何より有難え。

〽いふに女房は不審に思ひ。

お時　これ權兵衞さん、何でそんなことを言ひなさんす、兄弟分も多くある中でもお前を長兵衞殿が、力に思つて居るゆゑに、善いに附け惡いに附け相談掛ける中ではないか、さりとは分らぬことでござんす。

お牧　まだお若いがお情深く御親切なお前さんが、降つて湧いたお内の騷動、それを見掛けて緣を切るとは、どういふ譯でござりまする。

權兵　どうもかうもありやあしねえ、假令義理ある兄弟でも弟といふ名が附いて居りやあ、兄の死ぬのを見ちやあ居られぬ、それゆゑ今日ぎり緣を切り、あかの他人になつてしまひ、高見で見物するつもりだ。

十三 それぢやあこなたは難儀を見掛け、兄弟分の緣を切り高見で見物するといふのは、あんまり不實な、

四人 事ぢやあねえか。

權兵 不實な者といはれても、苦厄介を背負はねえはうが、爰等が當時の流行だらう。

〽愛想づかしの言ひたいがいに、清兵衞側に聞ね兼ねて、

清兵 これ權兵衞殿、いやさ唐犬殿、如何にお前は犬といふ名を取つた人だとて、餘りといへば義理知らず、三日飼へば飼主の恩を犬も知つて居るに、今唐犬の親方と人にもつちやうされるのも、みんな親分のお蔭ゆゑ、その大恩を打ち忘れ難儀を見捨てゝ他人となり、高見で見物するといふは犬に劣つた權兵衞殿、どうしてそんな氣になつたぞ。

〽正直一途に清兵衞が胸倉とつて引き据ゑるを、振拂つてせゝら笑ひ、

ト此の內清兵衞悔しき思入にて、權兵衞の胸倉を取るを、權兵衞振拂つて、

權兵 兄弟分の緣を切れば、あかの他人の唐犬權兵衞、義理も絲瓜も入るものか。

清兵 えゝ、まだ〳〵そんなことを言つて、

〽むしや振り附くを突倒し、(ト又清兵衞むしや振り附くを、振拂つて突倒し、)

權兵　これから高見で見物すりやあ、死なうと生きようと構ふものかえ。

〽いふに十三も怺へ兼ね、

十三　やあ、取るにも足りねえ淸兵衞を、手籠めにすりやあ、

四人　見ちやあ居られぬ。

〽勢ひこんで立ちかゝれば、（ト十三、四人立ち掛るを）

長兵　あこれ、靜かにしねえのか。

十三
四人　それだといつて、

長兵　立ち騷がずと、控へて居ろ。

十三
四人　はゝい。（ト是非なく控へる、）

權兵　これでおれもさば〳〵した。

〽口と心の裏表、門の戸明けて立ち出るを、（ト權兵衞思入あつて門口へ出るを、）

長兵　權兵衞待て。

權兵　何ぞ用か。

長兵　手前はおれと緣を切り、他人となつて水尾の屋敷へ、切り込む所存であらうがな。

權兵　むゝ。（トぎつくり思入、誂への合方になり）
長兵　今日に迫るおれが難儀を、見捨て他人になるやうな、そんなけちな了簡でねえのはおれが知つて居る、水尾の屋敷へ切り込んで花々しく死ぬ氣だらうが、とても捨てる命なら、此の長兵衞に男を立てさせ、跡で骨を拾つてくれ、それがまことの兄弟だ、一途に逸る了簡を思ひ止つて此のおれが、殺されたらば仕返しに、其の時命を捨てゝくれ。（トきつと云ふ、權兵衞も思入あつて）
權兵　むゝ、兄貴が行かねえ先きへ切込み水尾が今日の企らみを水に仕ようと思つたも、鋭いお前の眼力に見透された上からは、もう仕方がねえ思ひ止まり、如何にも詞に隨つて跡へ殘つて仕返しをする時立派に命を捨てよう。
長兵　おゝそれでこそ我が弟、よく得心をしてくれた。
清兵　同じ眼玉でありながら、おれにそれが見えなんだが、緣を切らうといつたのは、切り込む爲であつたるか。
お時　さうとは知らず權兵衞さんを、そでない仕方と思つたも、
お牧　親分さんの命をば、助けう爲めでござんしたか。
十三　斯ういふことであるからは、今日の次第で唐犬諸共、水尾の屋敷へ切り込んで、

〇　跡へ引かねえ町奴の、
△　膽玉を、
四人　見せてくれう。
　　〽血の氣の多き子分等が、勇み立つたる其の處へ、又もや水尾の追ひ使ひ、
　　　ト皆々よろしく、ばた〳〵になり、花道より以前の庄九郎出來り、直に門口へ來て、
庄九　先刻より御入來を、お待ち申して居りまする。
長兵　思はぬことにて大きに延引、只今參上いたしますれば、左樣仰せ下さりませ。
庄九　畏まつてござりまする。
　　〽言ひ捨てゝこそ引返す、（トばた〳〵にて庄九郎花道へ引返してはひろ。）
長兵　再度の使ひが來た上は、猶豫しては居られねえ。
清兵　そんなら是れから水尾の屋敷へ、
お牧　もうおいでなされますか。
長兵　延引してはおれの恥、駕籠を飛ばして急いで行かう。
權兵　もう斯うなつたら留めねえから、ちつとも早く行きなせえ。（ト長兵衞思入あつて）

長兵　權兵衞手前に賴んで置くは、日が暮れたれば四ツまでに、早桶を持つて水尾の屋敷へ、おれを迎ひに來てくりやれ。

權兵　承知しました。

お時　すりやどうあつても水尾の屋敷で、死ぬる覺悟でござんすか。

お牧　あゝ悲しいことでござります。

淸兵　こりやどうしたらよからうなあ。

へわつとばかりに泣き出せば、（トお時お牧顏へ袖を當てゝ泣く、淸兵衞わつと泣く。）

長兵　何をめろ〳〵そんなに泣くのだ、おれが死んだら權兵衞を、おれだと思つて世話になれ。

三人　はゝい。

ト長兵衞も不便だといふ思入にて立上る。長松つか〳〵と行つて長兵衞に縋り、

長松　これおとつさん、早く內へ歸つておくれよ。

長兵　おゝ。

へ縋る我が子を引き寄せて、これが別れと長兵衞が、猛き心も恩愛にほろりとこぼす一雫、餘所の見る目も哀れなり。

ト長松の顏へ手を掛け、ぢつと見てほろりと思入。これを見てお時、お牧、淸兵衞泣く、踈皆々愁ひの思入、

權兵　斯うして兄貴が死ぬ覺悟で、水尾の屋敷へ出掛けるも、達者で居ろよ。（ト長松を突放す。）

お時　向うが重い身分ゆゑ、

お牧　案じるよりは産むが安く、

淸兵　男は當つて碎けろと、

十三　思ひの外に解け合つて、

○　目出度く笑ひに、

皆々　なるかも知れねえ。

お時　さうなる時は、

お牧　事なくお內へ、

長兵　それは譬の煎豆に、花が咲かにやあ歸られねえ。

お時　そんなら是れが。（ト側へ行かうとするを、「これ」と權兵衞隔てゝ）

權兵　さ、兄貴は早く。

長兵　權兵衛、跡を。（ト脇差をさすを道具替りの知らせ。）頼んだぞ。

ト　お時、お牧、長松へ思入、權兵衛はお時を押へてうなづく、此の模様合方寺鐘にて道具廻る。

（水尾屋敷の場）――本舞臺一面の平舞臺、眞中九尺塗框の床の間、狩野家の掛物、砂鉢へ杜若を活け、上の方袋戸棚金地墨繪の襖、下の方違ひ棚、これへ香道具を飾り、上下銀地水に澤瀉の畫の襖出入りあり、花道の揚幕杉戸の出入り、舞臺花道とも一面に薄縁を敷き、總て水尾屋敷客殿の體、爰に諸士四人袴裝にて住ひ、時計の音合方にて幕明く。

一　只今黒澤氏が歸られたが、直に跡より長兵衛が參ると申すことなれば、最早程なく參るでござらう。

二　長兵衛は元寺澤家に奉公をいたせしゆゑ、凡そ武藝一通りは心得居ると申すこと。

三　如何さま左樣でござらう、先達て吉原でお組の衆が喧嘩をせし時、散々に投げ附けられ、

四　何れも諸所へ疵を蒙り、會所の者の留めるを幸ひ、悄々其の場を立ち歸り、大きな恥をかいてござる。

一　それが遺恨の始めにて、其の後芝居花見などで、出合ふ度毎喧嘩をなして、遺恨に遺恨が重なり

し、

二　果てが抱への黑鷲が、町奴が贔屓にする櫻川に負けた上、聖天下で殺害され、

三　其の場に落ち散る煙草入が、進藤樣が藏前で喧嘩をなされし唐犬の、所持の品ゆゑ訴へ出で、

四　彼れが仕業と召捕られしも、櫻川が殺せしと腹を切りたる書置に、明りが立つて出牢せし由、

一　今日幡隨長兵衞を、當家へ呼び寄せ饗應なすも、

二　お組の衆が町奴に、度々恥辱を受くるゆゑ、

三　その根を斷つて葉を枯らす、旦那樣の深き御所存、

四　先刻より餘程の間、最早見えさうなものでござる。

トばた／＼になり、花道より袴裝の侍走り出來り、花道にて、

侍　はッ、申し上げます、只今幡隨長兵衞參りましてござります。

一　おゝ、其の幡隨をお待兼ね。

二　御前へ申し上げるでござる。

三　長兵衞事は此の席へ、

四　案内なして連れ參れ。

侍　其の儀は只今黑澤樣が、御案内をなされまする。

ト ばた〳〵にて引返してはひる。諸士一人奥へ立つてはひる。と花道揚幕の內にて、

庄九　いざ、御案內いたすでござる。

ト 誂への合方になり、花道より以前の庄九郎先きに、跡より長兵衞出來り、花道にて、

長兵　未だお出ではござるまいと、存じ居つたに思ひの外、お早いことでござつたな。

庄九　餘儀なき用事で遲刻せしゆゑ、駕籠を急がせ參りました。

長兵　大方左樣なことでござらう、花川戶からは餘程の道、駕籠でなければ今時分、當家へお出でになれぬ筈。

庄九　遲刻の段は貴殿より、お執成をお賴み申す。

長兵　その儀は承知いたしてござる。（ト兩人よろしく本舞臺へ來り）何れも、殿がお待兼ねの幡隨どのが參つたれば、此の趣きをお奥へ早く。

一　只今申し上げたれば、是れへお出で、

三人　遊ばされませう。

庄九　然らば、暫時お控へ下され。

長兵　畏まつてござりまする。（ト長兵、舞臺中に住ふ、此の時上手屏風の内にて、）

十郎　なに、幡隨が參りしとか。

長兵　や、あのお聲は、

庄九　則ち殿でござる。

長兵　はツ。

ト辭儀をする、是れなきつかけに、張扇の入りし誂への合方になり、上手襖を明け、十郎左衞門羽織袴のこしらへ、以前の近習刀を持ち出來り、上手へ住ひ、

十郎　今日は遠路の所、迎ひに應じよくこそ入來、未だ面談はいたさねど面は豫て存じ居る、我等は水尾十郎左衞門、以後懇親にいたしてくりやれ。

長兵　いや恐れ入つたる御挨拶、手前事は花川戸にて人入稼業をいたしまする、塚本長兵衞と申す者、お見知り置かれ下さりませう。（ト長兵衞丁寧に辭儀をする。）

十郎　當時江湖に名の高き町奴の幡隨院、これまで吉原芝居角力で、見受けしことは度々なれど、未だ近附きにならざるゆゑ疾くより御身に面會なし、永く親友同樣に水魚の交りいたし度く、それゆゑ甚だ失敬ながら聊か悦び事あつて酒宴の催しなすにつき、迎ひの使者を立てし所、早速入來下

され千萬忝なう存ずる。
長兵　お招きゆゑに取敢ず參上いたしてござりますが、元よりがさつの業體に禮儀作法も存じませねば、無禮勝ちでござりませうが、其の儀は御容赦下さりませ。
十郎　それはこなたも同じこと、身分は幕府の旗本なれど、久しく天下泰平に、壯年の者は武道を忘れ只遊興にのみ耽り、日夜遊里へ立ち入れば自然と武家の古例を失ひ、失敬な事もござらうが、其の邊は許してくりやれ。
長兵　身分も輕き私へ左樣仰せられましては、恐れ入つてござりまする。
ト合方きつぱりとなり、上手より野守之助羽織袴一本ざし、刀を提げて出來り、
野守　水尾殿大きに遲刻いたしてござる。
十郎　おゝ、進藤氏、遲うござつたな。
野守　駕籠に乘らうといたす所へ、親父の代より出入いたす、學問の師匠が參り、聞き度くもない野暮な話しで、思はず延引いたしてござる。
十郎　さゝ、これへお進みなされい。
野守　許しめされ。（ト十郎左衞門の次へ住ふ。）

十郎　まだ幡隨には初めてゞござつたな。
野守　如何にも初めてゞござる。
十郎　これは手前が朋友、進藤野守之助でござる。
長兵　かねて御高名は伺ひ居ります、以來お見知り置かれ下さりませう。
野守　斯く面會の上からは、是れより入魂にいたしくりやれ。（ト挨拶なして、）時に御主人、御酒宴はまだでござるか。
十郎　貴殿をお待ち申して居つた。
野守　それは恐れ入つたことだ。
一　酒肴をこれへ出しませうや。
十郎　おゝ、腰元どもへ申し附けい。
四人　畏まりましてござりまする。

ト合方になり下手襖の内へはひる、此の内捨ぜりふにて下手襖を明け、小澤、岸野旗本の腰元にて杯臺へ杯を載せ、銚子を持ち出で眞中へ置く、跡より諸士四人掛盤へ積みし口取、廣蓋の三ツ物を持ち出で、よき所へ置く、庄九郎杯臺を十郎左衛門の前へ出し、

庄九　御前お取上げ遊ばしませ。

十郎　如何さま、亭主役に始めようか。

腰元　どれ、お酌をいたしませう。（ト十郎左衛門杯を取上げる、腰元酌をなす、十郎左衛門呑んで、）

十郎　幡隨、近附のしるし。（ト杯をさす。）

長兵　先づ進藤樣へ。

野守　いや〳〵こちらは内輪のこと、今日はお手前が客なれば、其の遠慮には及ばぬことだ。

長兵　左樣なれば仰せに隨ひ、お先きへ頂戴いたしまする。（ト長兵衛杯を取上げる。）

庄九　それ、お酌を。

腰元　はッ。（ト腰元酌をする、十郎左衛門次の杯を取つて、）

十郎　進藤氏には、別にこれで。

野守　左樣いたすでござる。（ト杯を取り、腰元酌をする、長兵衛呑乾し鼻紙で杯を拭ひ、）

長兵　憚りながら、御返杯いたしまする。

十郎　お〻目出度く受けるであらう。（ト十郎左衛門杯を取り、腰元酌をする、一口呑んで下へ置き、思入あつて、合方きつぱりとなり、）さて幡隨、今日其の方を招きしは、外のことでもあらざるが、我が

旗本の組の白柄の者共が、當時流行の白柄を好み、其の黨調出立ちとやらで華奢風流を專らに、富士編笠で面を隱し、新吉原へ立入りて鷄格子に立並ぶ遊女をぞめきに歩くのみ、爭ふことなく廓中で、白柄組と名に呼ばれ、渾名に申すとりんは同樣、雨の降る日も行かざることなし。然るに町奴と名を呼べる俠客の若い者多くは幡隨の子分の由、先達て廓中にて行違ひに突當り喧嘩口論に及びしも、仲裁あつて其の折は事故なく濟んだれど、兎角双方敵の如く遺恨に思ひ居るゆゑ、度々喧嘩もある樣子、長き内には大事を引き出し廓中の迷惑になることなれば、今日よりして入懇を結び以後白柄組と町奴、朋友同樣厚く交はり、喧嘩なきやういたしたいが、聞濟んではくれまいか。

ト十郎左衞門思入あつて言ふ。長兵衞も思入あつて、

長兵　それは何より願ふところ、私方にも壯年の子分の者が大勢ござつて、吉原町へ立入りますゆゑ、決して喧嘩口論を遊里に於ていたすなと、精々申し附けますれど、後先見ずの者共なれば身分違ひも顧みず喧嘩口論なすことを承はつてござるゆゑ、仰せの如く騷動になるを厭ひて此の程より、心痛いたし居る所、あなた方と御懇意を結びまするは身に取りて、冥加至極にござりまする。

十郎　すりや幡隨には此の方の、頼みを承諾いたしくれるか。

長兵　願ふ所にござりますれば、御前の仰せに從ひまする。

野守　早速の承知忝けない、然らば近々兩國か又は王子か目黑にて、双方打寄り懇親結ぶ酒宴を催し末長く、水魚の交りいたすでござる。

長兵　それは千萬有難うござりまする。

庄九　殿の仰せを長兵衞殿が得心あれば無事なれど、若し得心なき其の時は、拔いた刀の納り附かず、

一　如何なる變が起らうかと、

二　實に家來のわれ〳〵共、

三　心痛いたし居つたるところ、

四　得心あつて大慶至極、

腰元　お席に列なる私共まで、

同　お嬉しう存じまする。（ト皆々思入。）

野守　手前も懇親結ぶ爲め、この杯を受けてくりやれ。（ト杯を差す。）

長兵　頂戴いたすでござります。（ト杯を受ける。）

十郎　それ、お肴を取つて上げぬか。

腰元　畏まりましてござりまする。（ト皿へ肴を取つて出す）

長兵　御丁寧なるお持成、恐れ入つてござりまする。

ト長兵衛呑み、野守之助へ差す、野守之助杯を受け、

野守　いや異なことを承はるが、長兵衛御身は其の以前、寺澤家に奉公をいたし居つたと申すことぢやな。

長兵　誰が申し上げましたか御存じの上からは、お隱し申し上げませぬ、如何にも輕き奉公をいたし居りましてござりまする。

野守　何か飼犬の事よりして隣家の者と爭論なし、主人の暇を取りしとやら、劍術業に勝れし町人となすは惜しきものと、さる方より聞き及ぶ。

長兵　武家奉公はいたしましたが、若黨風情にござりますれば、劍術などを改めて學びしことはござりませぬ。

野守　いや能ある鷹は爪を隱すと、學びしことがなきといふを、身共まことゝいたさぬは、いつぞや仲之町で浪人共が亂暴なせし其の折に、町奴が喧嘩を買ひ、多人數切り合ふたゞ中へ白刄を恐れず躍り入り、双方止めし手練の早業、われ〳〵其の節七軒の茶屋の二階で見物なし、舌を卷いて居

つたのぢや。
長兵　双方怪我のなきやうにたゞ止めましたのみ、手練などゝ仰せあつては總身に汗が出でまする。
十郎　いや隱しても此の方共、よく手練は存じ居る。して、何流を學びしぞ。
長兵　いや、何流などゝ師を取つて、學びしことはございませぬ。
庄九　兎も角も貴殿の手の內、後學の爲めわれ〳〵ども、
一　拜見いたし度き、
四人　ものでござる。
野守　竹刀を早く持つて參れ。
一　畏まつてござりまする。（ト下手襖の內より竹刀を二本持つて出で、舞臺眞中へ置く。）
庄九　未熟ではござりますが、拙者お相手仕つりませう。
野守　さ、お身が手練を見せてくりやれ。
長兵　その儀は御免下さりませ。
十郎　斯く懇意を結ぶ上は、包み隱すは賴もしからず。
野守　平に此の場で一勝負、

庄九　さあ〳〵早く、
四人　立合ひめされ。
長兵　これは迷惑千萬な。
腰元　どれ、お肴を、
兩人　片附けませう。（ト腰元兩人肴を下手へ片附ける。）
長兵　なか〳〵以て未熟の私、あなた方のお相手などは。
庄九　左樣なことを言はれずと、
一　是非とも此の場で、
四人　一勝負。（ト長兵衞を前へ引出し、無理に竹刀を持たせる。長兵衞是非なく、）
長兵　然らば、お相手いたしまする。
ト白囃子のやうな合方になり、長兵衞竹刀を持つ、庄九郎出しぬけにエイと打つて掛る、長兵衞身を開き又打ち込むを受け留め、これより兩人立廻りよろしくあつて、庄九郎を打ち据ゑる、
十郎　はゝお、天晴々々、黑澤如きの及ばぬ手練。
野守　身共が代つて勝負なさん。

長兵 すりや進藤樣が。
野守 不承であらうが、相手いたせ。
長兵 はツ、御免下され。

ト合方替つて野守之助、長兵衞と上下へ立別れ、竹刀を構へきつと思入、誂への鳴物になり兩人立廻り、此の内十郎左衞門は長兵衞の手練に目を附け居る、野守之助危くなり長兵衞打込む透のあるを見脱す立廻りよろしく、十郎左衞門は感心のこなし、野守之助は恐れし思入にて、

野守 驚き入つたそちが手練、なか〳〵及ばぬことなるぞ。
長兵 それは手前が申すこと、天晴勝れしあなたの御手練、恐れ入つてござります。
十郎 餘り見事な手の内ゆゑ、今一杯受けてくりやれ。（ト末の杯をさす。）
長兵 元より下戸の私なれば、其の大杯は御免下され。
十郎 折角さした此の盃、一杯呑めずば半杯なりと、
庄九 跡に控へし私が、幾らなりともお助け申す。
長兵 然らば頂戴いたしまする。（ト末の杯を取上げる。）
庄九 手前がお酌いたすでござる、（ト銚子を取つて滿々とつぎ、態とこぼし、長兵衞の膝へ掛りし思入。）こ

れは粗相をいたしました。
十郎 見れば衣類が濡れたる様子。腰元共、着替を持て。
腰元 はッ、畏まりました。
長兵 些細なことでござりますれば、決してそれには及びませぬ。
腰元 でもお氣味が悪う、
兩人 ござりませう。
長兵 いえ、直乾きますでござります。
腰元 左様なれば斯様なされませ、お風呂が沸いて居りますれば、
同 一風呂おはひりなされませ、其の間に洗うて乾かしませうわいな。
十郎 こりやよき所へ氣が附いた、一風呂入つて乾かしたがよい。
長兵 有難うはござりますが、是れでよろしうござります。
庄九 そちらがよくても、それではこつちが。
十郎 これ。(ト押へ、)早く風呂場へ案内いたせ。
庄九 はッ。いざ、御案内いたしませう。

長兵　ではござりますが、此のまゝに。
野守　はて今日より懇意を結び、水魚の交りなすからは、遠慮いたさずはひられよ。
十郎　はひつてくれねば隔てがあつて、懇意を結びし甲斐がない。
野守　但しはやはりわれ〳〵を、こなたは遺恨に思つて居るか。（トきつと言ふ。）
長兵　まつたくもつて。
庄五　さなくば一風呂、
四人　はひりめされ。（ト長兵衞是非なき思入あつて、）
長兵　然らば仰せに隨ひまして、
庄九　入湯あらばお湯殿へ、
腰元　御案内、
兩人　いたしませう。
長兵　どれ、御造作になりませう。
ト唄になり庄九郎先きに長兵衞、腰元諸士四人附添ひ下手へはひる。跡十郎左衞門、野守之助殘り、
野守　水尾氏。

十郎　これ。（ト跳への合方になり、）よもや今日參るまじと思ひの外にたゞ一人、怯めず臆せず參りしは、流石は當時町奴の頭と言はるゝ幡隨長兵衞、懇意を結ぶと僞りて酒宴を開き大杯の酒をば態と膝へ掛け、衣服を脱がして風呂へ入れ、身に寸鐵のなきを窺ひ、彼れを討取る我が手段。

野守　萬事首尾よく參つたが、かね〳〵手者と聞きしゆゑ手練を試し見たるところ、なか〳〵勝れし彼が早業、容易なことでは討たれますまい。

十郎　浴衣一つになりし折、四人の者に申し附け、召捕らす手配りなり。

野守　いや、我が手に餘る手練ゆゑ、四人の力に及ぶまじ。

十郎　若し手に餘るその時は、家に傳はる百足丸、大身の槍にてたゞ一突き。（ト下手より以前の主膳出で、）

主膳　さては拙者の御異見を御採用なく長兵衞を、これにて殺害なされまするか。

十郎　彼等に是れまで組の者が、度々恥辱を受けしゆゑ、討つて捨てねば一分立たぬ。

主膳　今日是れへ幡隨をお呼び寄せなされましたは、深き遺恨を水に流し懇意を結ぶと仰せあるゆゑ、此の上もなきよき事と悦びました甲斐もなく、懇意を結ぶは僞りにて、元より殺す御所存とは、見下げ果てたる御了簡。

野守　懇意を結ぶと僞りしは所謂軍の謀計、武士たるものゝ習ひゆゑ、主人の意に附き野暮堅き異見は

止しにしたがよい。

主膳　いえ〳〵止しにいたされぬは、唯今是れにて長兵衛をお討ちなさらば其の群が、押して參るに疑ひなし、さある時にはお上へ濟まず、附いては末期にお賴みありし御先代の御位牌へ、申譯がござりませぬ。

十郎　言譯なくば切腹なし、冥土へ行つて詫びをいたせ。

主膳　そりやおつしやるまでもなく、御異見お用ひなき時は、切腹いたすは豫ての覺悟。

十郎　死んでもかれこれよい年配、異見は決して用ひぬから、死ぬなら勝手に死ぬがよい。

主膳　すりや、何程申しても。（ト縋るを、）

十郎　えゝ諄いわい。（ト振拂ひきつと言ふ。）

主膳　是非に及ばぬ。（ト肌をぬぎ、差添を拔き腹へ突き立てる。）

野守　あゝ、こりや早まつたことをいたしたな。

主膳　これも忠義を思ふゆゑ。

野守　死なずと仕樣もあらうのに。

十郎　世にもたはけた、（ト刀を突くを道具替りの知らせ、）奴だなあ。

ト主膳は無念の思入にて引廻す、十郎左衛門、野守之助は馬鹿な奴だといふ思入、早々合方にて道具廻る。

(湯殿の場)――本舞臺二間の間平舞臺、正面兩棲折廻し板羽目、眞中に箱風呂、下手上り湯の箱、掛樋の水槽小桶五ッ程あり、上下杉戸の出入り、上の方に衣桁姿見の鏡臺櫛箱あり、所々に大蠟燭を附けし燭臺を置き、總て水尾屋敷湯殿の體。時の鐘床の三重にて道具留る。

上るり〽入側の廊下傳ひに腰元の、案内に連れて長兵衛が、心ならずも湯殿へ來り、仔細あらんと燭臺の火影に四邊見廻して、

ト此の内下手より以前の腰元雪洞を持ち先に立ち、跡より長兵衛着流しにて出來る、續いて腰元澤瀉の模様の浴衣扱き帶を持ち出來る、長兵衛四邊を見廻し、思入あって、

長兵　華奢風流をお好みなさる、水尾様のお湯殿だけ、見事なことでござりますな。

腰元　御普請好きでござりますゆゑ、年中大工がはひりまして、御造作をなされまする。

同　此のお湯殿も二月から、二月あまりかゝりまして、やう〳〵出來いたしました。

長兵　時候は未だ四月ながら、此の二三日は俄に暑く、殊に今日は氣が詰り、思はぬ汗になりましたから、お湯は何より御馳走でござりまする。

腰元　只今お加減を見ましたが、丁度よろしうござりますれば、お早うお召しなされませ。
同　その間に濡れしお召物を、干してお上げ申しませう。
長兵　高の知れた此の衣類、お手數には及びませぬ。
腰元　何の造作もござりませねば、御遠慮なされますな。
同　〽まあお浴衣をおめしなされませ。
長兵　左樣なれば、憚りながら、

〽帶を解く〳〵腰元が携ふ浴衣着替へれば、一間を立ち出る黒澤が目配せなすを心得て、衣類を纏め入りにける。

ト長兵衞着附を脱ぎ浴衣を着る、此の時奥より黒澤出來り、腰元に目配せする、腰元心得長兵衞の着物を持つて下手へはひろ、黒澤は風呂の加減を見て、

庄九　丁度加減が宜しければ、いざ長兵衞殿、おはひりなされ。
長兵　湯の辭儀は水とやら、お風呂を穢すでござりませう。
庄九　やあ、遣ひ湯早く取らざるか。（ト奥にて）
四人　はあゝ。

〽はッと答へて廊下より、襷鉢巻いかめしく股立取りし侍が、ばら／＼と立出て、

ト下手より以前の諸士四人、襷鉢巻袴股立にて出來り、長兵衞を取卷き、

一　いざ、お流し、

四人　申すであらう。（ト長兵衞の手を取り、引立てるを振拂ひ、）

長兵　こりや何れもには、何となされる。

庄九　最前汝が劍術は、試合をなして手並を見たが、未だ柔術を知らざるゆゑ、是れにて四人が捕方の學びをなして試すのだ。

長兵　衣類へ掛けし酒を名として、好まぬ風呂へ無理に入れるは、何か仔細のあることゝ疾くより察せし此の長兵衞、譜代か雇ひか知らねえが、取るにも足りねえ木片侍、大方これも主命だらう、さあ捕れるものなら幡隨を、搦め捕つて手柄にせよ。

庄九　言ふにや及ぶ。ソレ何れも。

四人　心得申した。

〽心得たりと組附くを、身を躱して右左へ突退け蹴退け投げ退ける、飛鳥の如き早業に、

ト四人長兵衞に組附くを、身を躱して右左へ投げ退け、ちよつと立廻つて、よき見得より誂への鳴

物になり、長兵衛四人を相手に面白き立廻りよろしくあつて、庄九郎の立ち掛るを、長兵衛小桶の水を浴びせ、立廻つて庄九郎を當てる、庄九郎うゝんと倒れる。

〽脾腹を打たれて悶絶なしうんとばかりに倒るゝを、見るより四人は叶はじと、跛引き〳〵逃げ込んだり、跡を見送り長兵衛が、

ト四人手足を痛めし思入にて、下手へ逃げてはひる、長兵衛思入あつて、

長兵　返す〴〵も御丁寧な水尾様の今日の御馳走、長兵衛身に取り忝ない、どれ一風呂はひらうか。

〽恐れげもなく悠々と風呂場へ行かんとなす所へ、槍を小脇に搔い込んで、一間を出づる十郎左衛門、

ト上手より十郎左衛門白の襷、袴を端折り、大小にて誂への大身の槍を持ち出來り、

十郎　長兵衛待て。

長兵　はツ、御用でござりますか。（ト兩人顔見合せ、氣味合の思入、誂への合方になり、）

十郎　これまで數度の喧嘩より、白柄組と町奴、互ひに敵同様に遺恨に思ひ居つたるも、水に流して今日より長く懇意を結ばんと、酒宴を催し招きしに、只今家來が柔術の試合を望み立合ひしに、未熟の業といひながら、是れなる黑澤庄九郎を眞の當身で殺せし上は、一旦結びし親友の因みも最

早是れまでなり、汝が命は某が、今日の土産に貰ひしぞ。
ト血相替へて言ひ放せば、元より覺悟の幡隨が、びくともせずに座をしめて、
ト十郎左衞門きつとなる、長兵衞思入あつて下に居て、

長兵　如何にもあなたへ差上げませう。兄弟分や子分の者が、留めるをきかず只一人迎ひに應じて山の手へ、流れる水も溯ぼる水尾の屋敷へ出て來たは、元より命は捨てる覺悟、百年生きるも水兒で死ぬも、持つて生れた其の身の定業、卑怯未練に人手を借りずこなたが初手からくれろと言やあ、名に負ふ幕府のお旗本八千石の知行取り、相手に取つて不足がねえから、綺麗に命を上げまする。殺されるのを合點で來るのはこれまで町奴で、男を賣つた長兵衞が命惜しむといはれては、末代までの名折れゆゑ、熨斗を附けて進ぜるから、肚胸の据つたこの胸をすつぱりと突つせえ。

十郎　流石は以前が武家出だけ、下司下郎の町奴には膽の据つた幡隨長兵衞、殺すは惜しいものなれど、汝の子分と吉原で白柄組が數度の喧嘩も、素早き土地のとりんぼに引けを取るのが口惜しく、いつぞは意趣を返さうと思へど取るに足らざる族、頭と頼む幡隨を殺してしまへば自から其の根を斷つて葉を枯らす、所存で今日我が屋敷へ汝を呼んで殺すのだ、脫れぬ所と覺悟して、淸く往生してしまへ。

長兵　それはこなたが言はずとも、覺悟で來たる此の長兵衞、逃げも隱れもしねえから望み通り殺させえ。然しながら根を斷つて葉を枯らすと言はしッても滅多に枯れねえ町奴、血酒を呑んで兄弟の因みを結んだ俠客は、旋毛も曲つた神田から後へ引かねえ車町、濱の眞砂の芝浦かけ數の知れねえ子分子方、嘘はつかねえ本所深川ふるつて出たら何千人、そつちも旗本八萬騎叩き合つたら天下の騷動、果ては奉行の捕方に珠數繫ぎに繫がれて、重き仕置を受けるとも輕い身分の町奴、たとへば喧嘩は兩成敗、そつちへ響きが行つたらば小脇に搔い込む槍よりか、八千石の知行所を棒に振らざあなるめえぜ、その氣でおれを殺させえ。

十郎　子分子方が江戶中に何千人あらうとも、長兵衞おのれを槍玉に揚げてしまへば泣寐入り、ぐづぐづ寐言をいはうとも、誰しも命は惜しいから仕返しをする者はねえ、若し又血の氣の多い奴等が押して來たらば七八人、切つて捨つれば逃ぐるは必定、假令何人殺さうとも無禮をしたゆゑ切捨てたと、いへば濟むのが武士の德、その手初めに某が家重代の百足丸、切れ味鋭き大身槍で、たゞ一突きに田樂差し、時候も丁度木の芽時、茂る樹木に行く道も闇き旅路の十萬億土、道を急いで早く行け。

長兵　おゝ先へ行くとも一筋道、六鄕ならぬ六道の札の辻から眞直に三途の川の川端に、死出の山駕籠

こせえさせ、こなたの來るのを待つて居るから、早くおれを殺さつせえ。

十郎　今殺すから覺悟しろ。

長兵　さあ、何處からでも突かつせえ。

〽胸を開いて差附くれば、いで一突きと槍取直し、突かんとすれど長兵衛が、瞬きもせぬ大丈夫に、氣後れなして突き兼ぬれば、小陰に窺ふ進藤が、見るに忍びず飛んで出で、

ト此の内長兵衛胸を開き、爰を突けと手で敎へる、十郎左衛門槍を取直し、突かうとして突き兼ね、両人睨み合ひぢつと思入、此の時下手杉戸より、野守之助半身出し窺ひ居て、つか〳〵と前へ出で、

野守　やあ未練なり水尾殿、なぜ一突きに突かつしやらぬ、但し彼れめに後れてか。

十郎　何で彼れに後れうぞ。

〽勵ます詞に突きかくれば身を開いて長兵衛が、死を極めたる無刀の働き、暫し挑み戰ひしが勝れし手練に突き兼ぬれば、進藤見るに忍び兼ね、隙を窺ひ切り附くる、途端に突き込む太股の深手も屈せず刎ね返し、槍を手繰ればたぢ〳〵〳〵、よろめく足を踏み止り、振拂つて又一突き、脇腹突かれてどうとなり、無念の齒嚙に眼は血走り、髮逆立ちて物凄し、

ト此の内文句通り長兵衛胸を開き爰を突けといふ思入、十郎左衛門槍を拔いて突掛け突き兼ねる思

入り両人よろしく。下手に控へし野守之助見兼れて一刀切る。此の隙に十郎左衛門長兵衛の股を突く、是れにて長兵衛糊紅になり、誂への鳴物を冠せ、三人立廻りよろしくあつて、又野守之助切附け、十郎左衛門脇腹を突く、これにて長兵衛どうとなり、齒嚙をなして十郎左衛門をきつと見る。

野守　もう叶はぬぞ、幡隨長兵衛。

長兵　ちえゝ、(ト無念の思入。)

野守　今日おのれをこれへ呼び寄せ、水尾氏が殺すのは、白柄組の抱へ角力黒鷲始め弟子三人、今戸橋にて殺したる櫻川の尻押しは、幡隨、唐犬、夢幻、その外數多の町奴、先づ手はじめにおのれを殺し、日頃の遺恨を晴らすのだ。

十郎　これより唐犬、夢幻、追々仲間を殺すから、草葉の蔭から見物しろ。

ト言ふに苦しき息をつき、

長兵　おゝ殺さば殺せ旗本とて、非道に殺さば天下の政道、上より咎めのあるは必定、重くて斬罪輕くて遠島、屋敷へ草の生えるのを、冥土へ行つて見物せう。

十郎　譬にもいふ、引かれ者の小唄とやらで、何とでも此の世の別れに勝手に吐かせ。

野守　然し聞くのも大儀ゆゑ、長く苦痛をさせぬやう、

十郎　どれ、息の根を止めてくれう。

〽槍取直し長兵衛が、胸元突かんとなす所へ、

ト十郎左衛門槍を取り直し長兵衛の喉を突かうとする時、ばた〳〵にて下手杉戸より諸士一出で、

一　はツ、申し上げます。

十郎　誰ぞ來たか。

一　はツ、幡隨が子分の者、早桶をもつて、迎ひと申し參りましてござりまする。

十郎　なに、早桶を持つて長兵衛の迎ひに子分が參りしとか、門前に控へさせよ。

一　はツ、（ト引返しはひる。）

野守　すりや長兵衛は、豫てより、

長兵　命を捨てに爰へ來たのだ。

十郎　迎ひの者が早桶を、持つて來たのはいゝ覺悟だ。

野守　いや、敵ながらも天晴だ。（ト本釣鐘）

〽最早近附く身の知死期に、

長兵　早く止めを刺さねえか。

十郎　むゝ、殺すは惜しき、（ト槍を突く、長兵衛はがつくりとなるを木の頭、）ものだなあ。

ト突き兼る思入、長兵衛うつとりとなりしを、きつと眼を明く、野守之助ぎよつと思入、本釣鐘の寺鐘、誂への合方にて、

ひやうし幕

極附幡随長兵衛（終り）

四千兩小判梅葉

しせんりやうこばんのうめのは

去る御方より御指圖の投書に基く安政奇談而も四ツ谷の御堀端深き巧みの藤岡が底意を勘づく燗酒賣り田樂ざしの架も承知で進め大膽にも御金藏から盗みたる金は分れど分隔てなき繼母や丹次郎が異見を餘所に徳太郎お辰を連れて心中の命を救ふ富藏が熊谷堤の饂飩屋で離別なしたる女房のおさよに逢ど六兵衛の手前も忍ぶに忍び兼謀書と知りつゝ眼八へ渡す包の破れ口唐丸籠へ慕ひ寄る雪に哀れな親子の別れ斯とは更に白布の帶の祝ひに木更津の千治がゆする三百兩最早露顯と藤十郎が覺悟に兄の正三郎へ送るおみさが離縁狀義理にしがらむ捕繩に引るゝ地獄の牢じやくりすつてん踊の有樣迄目先を變れど拙作に見劣りのする一座の無人たゞ御ひいきの御引立をひとへに願ふ小春狂言

松廼千代田綠林

「四千兩小判梅葉」は明治十八年十一月、作者七十歳の時千歳座に書卸された。藤木實説の御金蔵破り一件を題材にしたもので、田村成義氏の許にあつた書類を基礎とし、恰も當時朝野繪入新聞に千代田城噂白浪と題して連載された讀物があつたので、それこれ參酌の上で構案された。作者晩年の世話物中、最も傑出せるものとの評がある。特に御牢内の場は寫實的要素に富んでゐたし、珍奇でもあり、好評であつた。富蔵と藤十郎との出會するお堀端といひ、饂飩屋の世話場といひ九藏が久しぶりに東京へ出演し菊五郎と提携したことや、適材適所におかれてあつたことやで、異常の好評を以て迎へられた作であつた。

書卸しの時の役割は五世尾上菊五郎(野洲無宿の富藏、千歳講題目の七兵衛)、故團藏事市川九藏(藤岡藤十郎、千歳講まんだらの十右衛門)、先代片岡我童(牢名主松島貫五郎、千歳講長房の玉藤)、坂東家橘(伊丹屋倅德太郎、定廻り尾林藤太郎、千歳講立花の紋次郎)、尾上松助(髪結木更津の千治後に藤岡手代千治、饂飩屋六兵衛、隅の隱居音羽の勘右衛門)、河原崎國太郎(富藏女房おさよ)、岩井松之助(辰巳屋の抱へおたつ、藤十郎妻おみさ)、尾上菊之助(伊丹屋次男丹次郎、巾着切隼長太)、中村傳五郎(伊丹屋德右衛門、博徒生馬の眼八)、尾上竹次郎(中間じぶくり九助、藤岡の小使十助)、尾上尾登五郎(牢屋見廻り九郎藏)等であつた。

挿繪にしたのは、大正四年六代目尾上菊五郎、中村吉右衛門等の一座によりて複演された時の舞臺寫眞で、御牢内の場である。

大正十三年十一月

編者誌す



四千兩小判梅葉（四千兩――六幕）

序幕

新宿辰巳屋の場
四谷御門外の場

〔役名――燗酒賣り富蔵實は野州無宿入墨富蔵、藤岡藤十郎、伊丹屋息子徳太郎、髪結木更津の千治、伊丹屋の次男丹次郎、中間ぐでんの傳次、同じぶくりの九助、辰巳屋の若い者喜助、同太助。伊丹屋女房おつぎ、辰巳屋の抱へお辰、同おとみ、内藝者おこま、其他。〕

（新宿辰巳屋の場）――本舞臺四間中足の二重本庇此上二階格子の張物二重の前側三尺常足の式臺、正面辰巳屋と記せし柿の暖簾、左右中障子を立切り、上手帳場格子下手下足札、同じく箱を置き平舞臺の上手黒塀、下手出格子の張物、裾通り笹ら子の下見、此前用水桶、總て新宿辰巳屋見世先の體。平舞臺に○△吉原冠り着附尻端折り、脚絆草履、堀の内歸りの裝にて、辨慶飴の袋を提げ立掛り居るを、喜助着流し遊女屋の若い者にて兩人の袖を引き居る。二重に太助同じく若い者にて明臺を見世先へ出して居る、此の見得騷路の入りし宿場騷ぎにて幕明く、

喜助　先達てから度々のお手紙を、今日お出掛にもお見掛け申しまして、又お歸りに素通りは、チトお恨みでございます。

○けふの連は堅氣だから、遊ぶ譯には行かねえから、よく相方にさういつて下せえ。

喜助　それでもちよつとお立寄りがないと、わたくしがお辰さんをしくじります。モシあなたもちよつとで宜しいから、お上りなすつて下さりませ。

△イヤ、わしは女郎買などは大禁物、喰氣一方の道樂で、今日も出掛に三丁目谷でお鐵を七盃ぺろり込んでそれから四ツ谷の馬方は我慢して通り過し、淀橋の坂で團子を喰ひ信樂の中食ものつぺいのお替りをする位だから、女郎買などは見るのもいやだ。ノウ淸三郎さん。

喜助　お跡のお樂しみはお喰氣より婦人の方へお模樣替で、是非御一緒にお上りなすつて下さりませ。

○上り度いが今日の連では、所詮話しは折合ねえ、まだ是から茶碗鉢へいつて草臥休めに一風呂飛込み、それからずつと麹町へ行つて丹波屋で鰻といふ國を出る時の約束だから、是につゞく模樣替はむづかしい。

卜又袖を引くを、

喜助　鰻なら此宿にも大宗寺前の荒川が、いゝ魚を遣ひますから、お好通り申附け、お相方なしのお喰事ばかりで、どうぞお上りなすつて下さりませ。

○あれ程迄に進めるから、女なしで一トロ呑んで行かうぢやアありませんか。

△　何だかちつと覺束ないが、若しも今夜女人濟度をすると、高祖さまへ申し譯かごさらぬぞ。
○　なに、決して長くは居ませぬから、二時ばかり附合つて下さい。
△　アヽ此附合ひは高祖さまへ對し、實に辰之口の御難といふのだ。
喜助　さういふお洒落がだぶ〳〵出ては、旦那は隅へは置かれませぬ。
○　鍋屋横町へでも、地面を買ひませうかな。
喜助　そんな旨いことをいふと、女に惚れられますぜ。
△　外面如菩薩内心如夜叉、南無妙法蓮華經々々。
○　それじやァちよつと案内して下せえ。
喜助　有難うござります。（ト見世へ向ひ、）お上りなさるよ。
兩人　南無妙法蓮華經々々。

トやはり右の宿場騒ぎにて、○△題目を唱へながら喜助案内して三人奥へはひる。太助下足を附ける。
奥より子じよく豆どん短き着附にて出て來り、

豆　藤岡さんが髪結の千さんを、もう一遍呼びに遣つてくれろと言ひなんしたよ。
太助　へい〳〵と返事をして置きねえ。

豆　いえ〳〵、直來いといつてやれと、言はしやんしたわいな。

太助　それはわかつて居るが、今方使が歸つて來たから、行かねえでも來るに違えねえ。

豆　そんなづるい事をいふと、言付けるよ。

太助　えゝ言附けられてたまるものかえ。（ト子じよく奥へはひる、入替りて喜助出て來り）

喜助　今の初會へお辰さんを掛けたら、頭痛がして出られねえと何だかふさいで居なさるので、二階廻しが困つて居る。

太助　それは大方昨日から藤岡樣が流して居るから、それで内々ふさぐのだらう。

喜助　隨分藤岡樣はいゝ男だが、あんなにお辰さんがいやがるのは、大方床でもしつこいのか、それとも又、いやがらせを言ふのかしらぬ。

太助　なに、あれは本郷の徳さんをよく取つて居て、末は互ひに女房と言ひかはす程あついから、外の客人はおのづから麁末になるのは尤もだ。

喜助　何にしろお辰さんは、此頃のやうに片廻りをされると、二階廻しと若い衆難儀だ。

ト此内喜助は帳場の内にて帳を附ける、太助は神棚、見世行燈へ灯りを附ける、やはり右の合方にて花道より髪結木更津の千治着流し駒下駄にて、襷を手に持ち足早に出て來り、

千治　昨夜の勞れで睡いのと日の短へので仕事が出來ねえ、もう今の間に暮れてしまつた。（ト舞臺へ來り。）ヘイ、今晩は。

ト二重へ上ろ、お辨更けたる二階廻しのこしらへにて出て來り、

豆　千さんよくお出でなさいました、さつきから藤岡樣がお待兼でござんした。

千治　仕事をしまつて湯へはひり、めかし込んで來る積りの所、急に來いと使が來たから、丁場を仕舞つて、直來ました。

喜助　まアお上りなさいまし。

千治　御免なせへ。（ト二重へ上り、帳場の前へ中腰になり、）旦那は晝の内來なすつたかね。

お辨　なに、昨夜から居續で、お辰さんがいそがしい所からちつと御立腹の樣子故、それでおまへさんに迎ひが出たのさ。

千治　太鼓持には無口で向かないが、久しい馴染の旦那だから、始終どこへも一緒に行きます。

喜助　藤岡さんは一つ橋の御小人を勤める時分から、わたしも堅氣で馴染だつたが、あの時分から見ると此頃は大そう都合がよいやうだ。

千治　其工面の直つたのは矢來下の御家人のお賄ひを勤めて居る、金滿家の淸水の娘が神樂坂の毘沙門

さきの晩に旦那を見初めて話しが出來、とう／＼女房に貰つたが其縁引で此頃は今井が諸方へ貸してある、貸金の取立方で金が自由になる所から、こつちなどへも遊びに來るのだ。

喜助　其清水の娘御は、樋内のお辰さんに似て居る人だと思つたが、

太助　似て居るとも／＼、野暮と意氣の違ひだけ、瓜を二ツといふ女だ。

千治　よく座敷でお辰さんをとらへ、女房氣取をしなさるのは、内々のろけて居なさるのだ。

ト爰へ奥より以前の子じよく出て來り、

豆　千さん、藤岡さんが待つて居ますよ。

千治　つい話し込んで居た、今直行くよ。

お辨　千さんの來たことを、お富さんに知らせて上げな。

豆　アイー、（ト奥へはひる。）

喜助　何にしろ藤岡樣がお待兼ね、

太助　お早く二階へお出でなさいまし。

千治　皆さん御免なさい。

お辨　サアお出でなさいまし。

トやはり右の合方にて、お辨先に千治、豆附いて奥へはひる、喜助は見世先へ切火を打ちながら鼠啼をして羽目をたゝく、此合方にて花道より伊丹屋女房おつぎ少し更けたる鬘商人女房のこしらへ、雪駄にて先に立ち、跡より伊丹屋次男丹次郎羽織着流し、同じく息子のこしらへ雪駄にて出て來り、花道にて四邊へ思入あつて、

つぎ　大木戸から爰迄來る内、辰巳屋といふ女郎屋はまだ見えぬやうぢやの。

丹次　晝はどうも極りが惡く、覗く譯にも參りませぬが、もう灯りが附ましたから、ゆつくり見ながら參りませう。

つぎ　惡所場は馴れぬこと故、同じ様な内ばかりで、とんと知れ難いものぢやの。

丹次　向うの前を通りながら、家名を讀んで參りませう。

トやはり右の合方にて、兩人舞臺へ來り、見ぬ振をしながら上手へ通り越し、おつぎ丹次郎の袖を引き、

つぎ　コレ〳〵悴、爰の内ぢやわいの。

丹次　ハイ、（ト見ようとして極りの惡きこなし、兩人上手にてもぢ〳〵して居る。喜助、太助は不審の思入。）

つぎ　そなたちよつて聞いて見やいの。

丹次　ハイ、（ト見世先へ行き、もぢ〳〵して居るゆゑ、）
喜助　何ぞ御用でござりますか。
丹次　へイ、少々御用でござりまする。（ト言難きこなし、おつぎ氣をもみ、）
つぎ　コレ、御用でござりますとは、何のことぢやぞいの。（ト小言を言ひながら小腰をかゞめ、）辰巳屋さまとおつしやるのは、こちらさまでござりますかな。
喜助　へイ、上にも一軒ござりますが、手前は下の辰巳屋でござります。
つぎ　いえ、上のことではござりませぬ、江戸の新宿のことでござりまする。
喜助　イヤこいつアこつちが惡かつた、此の宿は下町と上町がありますから、其事でござります。
つぎ　左樣ならこちらのお內に、お辰さまとおつしやるお女郎さまは、おいでゞござりますか。
太助　お辰さんならこつちの內の奉公人でござりますが、何ぞ御用でござりますか。
つぎ　ハイ、わたくしはお辰さまの所へ遊びに參る、本鄉の德太郎と申す者の母と弟でござりますが每度悴がお世話になるお禮をちよつと申したいと、やう〳〵こちらを尋ねましたが、どうかお客分とやらにして、お目にかゝることは出來ますまいか、お聞きなされて下さりませ。
喜助　若旦那のお袋さまなら、お客にならずとよろしうござりますが、お辰さんはあいにくと今日は晝

からの居續のお客が、立込んでをりますから、お目に掛るか掛らぬか、ノウ太助、
太助　ちよつと、お辰さんに聞いて見て上げねえか。
つぎ　どうか左樣願ひたうございます。
喜助　こちらへお掛けなすつて、少々お待ちなすつて下さりませ。
　　と喜助奥へはひる、此内おつぎ、丹次郎は式臺へ腰を掛け、
丹次　氣のせゐか存じませぬが、けふお兄イさまが晝後から鳴子の三川屋へお出掛故、若しやお歸りに此の二階へおいでかもしれませぬ。
つぎ　二階に居れば丁度幸ひ、共々話しを仕ようわいの。（ト兩人よろしく思入、奥より喜助出て來り、）
喜助　お辰さんがお目に掛ると申しますから、直お上りなさいまし。
つぎ　左樣ならお邪魔ながら、客分とやらで二人を、
丹次　お通しなされて、
つぎ　下さりませ。
喜助　まアこちらへお上りなさりませ。
つぎ　眞平御免下さりませ。（ト兩人二重へ上り、丹次郎履物を片隅へやると、）

太助　いえ、それはこちらで始末をします。

丹次　それは憚りでござります。

つぎ　そんならお若い衆、

丹次　御案内を願ひます。

喜助　お上りなさるよ。（ト奥にて、）

○　アイー。

ト宿場騒ぎになり、喜助案内しておつぎ、丹次郎奥へはひる、太助は下足を附ける。此模様宜しく道具廻る。

（お辰部屋の場）――本舞臺一面の平舞臺、眞中二間欞子格子、上手一間附家體、下手中仕切り、下簞笥上夜具棚、此下手廊下の片遠見掛行燈、總て辰巳屋二階お辰部屋の體。爰に藤岡藤十郎着流し平ぐけ裝にて、座蒲團の上に住ひ前に臺の酒肴を並べ、下手に以前の千治内藝者おこよ三絃を彈き、お辨の遣手酒の相手をなし、後ろ長火鉢の側におとみ朋輩女郎の裝にて、持紙にて火をあふぎ居る、此のもやうやはり前の騒ぎ唄にて道具留る。

こま　サア千さん、何ぞ心意氣を一つおやんなさいよ。

千治　おらァ梅吉か順三郎の三味線で、清元を語るより外に藝は何にもねえ。
こま　それぢやァちよつと清元を彈きませう。（ト調子を合せろ。）
千治　おい〳〵調子を合しても無駄だ、何ぼ山の手の髪結でも、さう安く語る清元ぢやあねえ。
こま　大そう貫目を附けなさんすが、斯ういふ所ではやられませぬかえ。
千治　さうよ、清元大切に語るのだ。
藤十　あんまり洒落が旨へから、こりやァ褒美をやらざァなるめえ。
お辨　おやまあ、うらやましうござんすねえ。（ト此内藤十郎金を紙に包み）
藤十　サ、洒落の褒美だよ。
千治　え〳〵、御褒美とは有難い。それではもつとしやれようか。
藤十　イヤ、實はそんな洒落はよして貰ふ口ふさげ金をやつたのだ。
お辨　どうかわたしも御褒美に、有附くようなことをしたいね。
とみ　お辨さんは評判の、いつもの事をしなさんせ。
お辨　なに、いつものことゝはえ。
とみ　ソレ、新宿の名物さ。

お辨　ア、新宿のお婆アさんの事かえ。
こま　本とうに不思議な人でござんす。
千治　そいつア見てえ。
藤十 千治　やつたり〳〵。

ト是にてお辨立上り、丼のふたをたゝき子供の身振にて盆々をうたひ、トゞ手拭を天窓へのせ、立膝にてだつゑ婆のこなし。

皆々　ヨウ〳〵〳〵。（ト千治有合ふ盆を出し、）
千治　お賽錢は是へ上げられませう。（ト是にて藤十郎財布の錢を紙に包み、）
藤十　ソレ、お賽錢だ。（ト盆へ載せる。）
千治　こりやア世話人の儲としよう。（ト取らうとするを、お辨あわてゝ盆ぐるみ引きとり、）
お辨　おやまア、千さんは常談ものだよ。（トひらき見やり、）おや、本とうにお捻りでござんす。
藤十　せうづかの婆アさんじやア、十二銅が關の山だ。
千治　旦那がお賽錢を出しなさるのは、婆さんより井之頭の辨天さまの方だらう。
お辨　布袋様なら知らぬこと辨天様にはなりにくいから、こりやいつそお辰さんを名代へ行つて引張つ

て來よう。

藤十　今朝から座敷へ上干で、どこへ行つたかちつとも來ねえが、此の骨折がいつち出せるの。

お辨　叉もや御意の替らぬ内、ドレお連れ申して來ませう。

トお辨立掛る、宿場騷ぎになり、廊下の口よりお辰宿場女郎好みの拵へにて出て來る、お辨行合ひ、

えゝしまつた、叉御祝儀を取りそこなつた。

お辰　何だえ。

お辨　いえなに、お前さんがお出でなすつたから、旦那へ御祝儀を申上げまする。（ト辭儀をしてまぎらす。）

藤十　いや、おつうごまかしたの。（ト此内お辰藤十郎の側へ住ひ、）

お辰　藤岡さん、大きに遲くなりました。

藤十　愚痴をいふのも野暮のやうだが、あんまりうつちやつて置き過ぎるぢやアねえか。

とみ　そりやア藤岡さんが野暮といふもの、初會や裏なら氣を附けて座敷へ廻つて來るけれど、足の近いお前さんのこと。

お辨　いゝ人とか惡い人とか、浮名の立つた客衆となれば、一人で居ることもありまさあね。

こま　それにお辰さんは見立てがお利きなさるから、初會が多く掛るので、本當においそがしいからさ。

　トお辰煙草を吸ひながら、

お辰　けふは紀州さまのお屋敷のお客で、今歸ると言ひなさんして引除けて置かれたので、方々廻るのが遲くなりました。

藤十　イヽヤ、そいつは受取れねえ、其紀州の客といふのも、大方本郷の伊丹屋の息子徳太郎のことだらう。

お辰　イヽエ、徳さんはけふは見えませぬわいナ。

千治　イヤ、來ないとは言はさないぜ、現在さつき大木戸でわつちが慥に見掛けたよ。

お辰　そりやア廣い江戸のこと、こつちの方へ御用があつてお通りかも知れぬけれど、爰の内へは來なさんせぬ。それを嘘だと思ひなさんすなら、見世へ行つて玉帳を見なさんしても知れること、ほんとに疑ぐり深い人だね。

お辨　徳さんがおいでなさればわたしに第一知れますから、其のお疑ひには及びませぬわいナ。

藤十　一ツ穴のむじなめが、何をいふか知れたものか。

こま　お辰さんがおいでなさんしたら、そんな論はさらりと止め、お燗のよいのをお廻しなさいまし。

とみ　それに千さんはよいけれど、藤岡さんは晝間から呑續けでござんすから、チトお休みなさいまし。

千治　なに、ちつともいゝ事はない、假令今來たばかりでも、引ける方がこつちの勝手だ。
こま　まアいゝから一ツお上りなさいまし。（ト藤十郎と千次に猪口をさし、酌をする。）
お辨　お相方が揃ひましたから、一旦お引けになさいまし。
千治　お引けつかう、待つて居ました〳〵。
とみ　ほんとに好かない床急ぎだよ――。
千治　急がないと丁場を廻るのが、遲くなるからよ。
とみ　とんだ髪結さんだよ、ほんとに口がへらないね。（ト千治をつねる、千治悦び。）
千治　ア、痛いが有難い、もつとやつてくれ〳〵。（トおとみの側へにじり寄る。）
とみ　エ、好かない下劑だよ――。
千治　イヤ、是は御挨拶だ。
藤十　引けるならお駒さんを、明けてやんねえ。
お辨　ハイ〳〵かしこまりました。（ト廊下の口より太助出て來り、障子の外にて。）
太助　へイ、藝者衆のお直し。
お辨　ア、モウ明いたよ。

太助　さやうでござりますか。（ト行かうとするを、）

お辰　アヽモシ太助どん、お床を入れておくれ。

太助　へいかしこまりました。

　ト太助はひる、此内お駒三絃の調子をさげる。

お辨　千さん、お床が廻つたら直迎ひによこします。

千治　なるたけ早く頼みたいな。

　ト合方きつぱりとなり、廊下の口より喜助出て來り、下手にて、

喜助　お辨さん、ちよつと顔を貸して下さい。

お辨　アイ〳〵。（ト下手へ行き、喜助お辨に囁く、お辨思入あつて、）ちよつとお富さん、顔を貸して下さい。

とみ　アイ〳〵、

　ト下手へ行き、お辨三人にて小聲に話しをするこなし、藤十郎はお駒の酌にて酒を呑み居る、おとみ思入あつて、

　ちよつとお辰さん。

お辰　アイ〳〵。（ト下手へ行く、おとみ小聲にて、）

とみ　北澤の大旦那がおいでなすつたから、ちよつと顏を出して下さんせ。

お辰　エヽ北澤の甚助かえ。（ト藤十郎へあてゝいふ。）

とみ　連衆迄あの一卷は、實に好かない客でござんすナ。モシ、ちよつと行つて上げて下さんせ。

ト藤十郎へ隱すこなしよろしく、お辰態とこなたへ聞えろやうに、

お辰　それでも藤岡さんへ、あんまり濟まないから。

お辨　直でござんすから、お富さんと一緒に行つて上げて下さんせ。（トこちらへ來り、下に居て、）ちよつとお馴染がお出でになりましたから、少々おかしなすつて下さりませ。

藤十　又行くのか。

お辰　いやだけれど、ちよつと行つて直來ます。

とみ　すこしの間寐て居て下さんせ。

こま　お二方さま、御ゆるりおやすみなさいまし。

藤十　仕方がねえ、引けて待つて居よう。

お辰　テモまア好かない。

藤十
千治　エヽ、

お辰　イエなに、好かない田舍客でござんすねえ。

ト流行唄になり、お辰、おとみ皆々附いて廊下口へはひる、藤十郎、千治殘り、跡を見送り思入あつて、

千治　モシ旦那、今のそぶりを御覽なすつたか。

藤十　なに、見たかとは。（ト端唄の合方になり）

千治　あのお辰はいふに及ばず、おとみ迄たゝきなぐつて半死半生にしてえけれど、外と違つて遊所場の甚助も下さらねえから、虫を怺へて我慢はするが、わつちは扨置おまへさんは男はよし氣前はよし、何一ツ言分ねえこんないゝ客を馬鹿にして、こけ扱ひにするあまのそぶり、何で又こんな所へ足を近くお出でなさるのだ。

藤十　サ、そこが男の意地づくで、いやがられるも合點で足を近く通ひ詰めるも、實はお辰の間夫だとかいゝ人だとかいふ本鄕の酒屋の息子の向ふを張り、むだな金を遣ふのもくどき落す了簡故だ。

千治　高が髮結だから心持が違ふかも知らないが、爰らは疾に見切所だが、そこが旦那は屋敷育ち俗にいふ世間見ず、みす〳〵行かぬとしれてるものを金を遣ふも無益なこと、それよりとても蒔散すあぶく錢なら所を替へ、北廓へでも押込んで、わつさり遊ぶが上分別、いつでもお供はいたします。（ト思入にて言ふ、藤十郎もこなしあつて）

藤十　なに、あぶく錢を蒔散すとは。（ト合方きつばりとなり、）

千治　是が博奕や盗賊をしなさるといふ譯ぢやアないが、御新造さんの實家の金の諸方へ出て居る取立方に、困つて居たをおまへさんが頼まれたのは猫に鰹節、其取立の融通から自然と金の廻りもよく、此間から爰のうちでお遣ひなさる金ばかりも、〆上げたらば大したこと、何とむだぢやアござりませぬか。

藤十　そんなら是迄遣ふ金を、おぬしは疾に知つて居たのか。

千治　パツパと旦那が遣ふのは、御新造様のお里の金と疾より目串は附けましたが、そんなむだをなすつたら、とゞの詰りは大穴がきつと明くに違へねえが、それより惚れておいでなすつた御新造様を可愛がる方が、穴の明いた用心にはよからうと思ひますが、それに附けても爰の内は、思ひきつたがようござりませう。

藤十　さう一點張に當てられては、芝の石龍子もはだしだが、是もおれが乗掛つた船、今更となり何のつけに、指をくわえちやア引込れねえ。

千治　そりやア一番際立つた何か事をしなけりやア引込みも附きますめえが、まアそれよりは御新造を可愛がつてお上げなさるか、それとも不斷わつちが行く上へ巣替をなせへますか、爰でむだに遣

ふより、先づ無事でござりませうぜ。

藤十　そりや無事に濟むだらうが、モウかれこれ二三本穴を明けた揚句だから、何か法を替へねえ内は所詮此儘引込みは附かねえ。

千治　さうして何ぞ是ぞといふ、見込んだ山がござりますかね。

藤十　サ、意氣地を立拔く了簡だが、何に附けても、先立つ金、

千治　サ、其金の算段には何の見込みがござります。（ト藤十郎思入あつて、）

藤十　別に見込は附ねえが、少しは胸に浮んだ事も、

千治　ム、、若しもあつたら其時は、

藤十　一番ヤンヤとやるつもりだ。

ト藤十郎じつと思入、千治も考へるこなし、太皷入り騷ぎ唄になり、下手より幕明の豆目たこすりながら出て來り、立つたまゝ、

豆　お富さんのお客さん、座敷へおいでなさんせいナ。

千治　今用があるから、先きへ行きな。

豆　一緒に行くから待つて居るよ。

千治　いゝから先きへ行きな。
豆　おいらアいやだ、待つて居るよ。（ト藤十郎臺の物のくわゐを挾み）
藤十　豆、是れを喰ひな。
豆　叱られるからおいらアいやだ。
藤十　いゝから爰で喰ふがいゝ。
豆　それぢやアだまつて居ておくれ、有難う。（ト立つたまゝ手でつかみ、一ト口に喰ふ兩人是を見て）
千治　豆はいつ爰の内へ來た。
豆　此間鳴子から奉公に來たヨ――、（トむしや〱喰ふ、藤十郎是を見やり）
藤十　イヤ、こいつを見ちやア、（ト箸を下へ置くを道具替りのしらせ）
千治　辛抱する氣になりますね。
ト豆は立身にてむしや〱喰ふ、兩人是を見て笑ふ、此模様太皷入騷唄にて道具廻る。

（廻し部屋の場）＝本舞臺一面の平舞臺、上手一間床の間、此下手九尺地紙の張壁、是より下手へ斜に塗骨障子の見切り、此下廊下の片遠見、蒲鉾行燈を點し、廊下能き所に階子の昇り口、上手の襖唐紙の襖出這入り、總て前の二階續き廻し部屋の體。燭臺を照し、上手に以前のおつぎ、丹次郎下手

にお辰仕ひ、兩人の前へ掛盤の菓子の臺を置き、急須煎茶ちやわんなど宜しく、端唄の合方にて道具留る。

お辰　却つて御散財を掛けまして、お氣の毒でなりませぬ、此お金は殘りましてござりまする。

ト　お辰紙に包みし金をおつぎの前へ出す。

つぎ　どうぞ能く行屆くやう、皆の衆へ心附をして下され。

お辰　惣花をいたしましたから、是で宜しうござんすわいナ。

丹次　大きにお手數でござりました。（ト丹次郎慇懃に禮を云ふ。）

つぎ　斯ういふお世話になるといふも、不思議な緣で德太郎がお前の所へ通ふ故、一度は禮を言はうと思ひ、幸ひけふは四ツ谷迄佛參に來た戾り掛け、是へお寄り申しましたわいな。

お辰　初めてお目に掛りまして、嘸あつかましい女ぢやとおさげすみもあらうかと、實に面目なう存じまする。（トお辰心配のこなし、）

丹次　わたくしなども產れまして初めて斯ういふ所へ參り、行屆かぬ勝でござりますれば、定めしおさげすみもござりませうと、こちらも面目なうござりまする。（ト辭儀をする、お辰もぢ〳〵する。）

つぎ　それに附いてお辰さんに、ちと折入つてわたくしからお話し申したいことがあつて、親子二人で

來ましたが、何と聞いては下さるまいか。

お辰　其のお話しとおつしやりますは、大方若旦那をわたしの所へ呼ぶなとおつしやる親御さまの、お賴みでござんせうな。

つぎ　いえ／＼決してさうではない、いくら呼ぶなと賴んでも、忰より來る時に遊ばせるのはこちらの生業、其樣な事は申しませぬが、今お話し申すのは、實は親子が切ないわけ。

お辰　して、其譯とおつしやりますは、

つぎ　コレ、廊下をちよつと見てくりやれ。

丹次　はい、（ト立掛るを、）

お辰　イエ、爰は隅の廻し座敷、誰も來はいたしませぬから、御心配には及びませぬ。

つぎ　さういふことならお辰どの、まあ一通り聞いて下され。（ト合方になり、）元わたくしは伊丹屋へ仕事に參りし奉公人、其折丁度德太郎は五ッになつた一粒者、下へも置かず育てし所其年母御の大病に、段々重る枕邊へ旦那を呼んでおつしやるには、若し一命の亡き跡はわたしを後へ後妻に直して德太郎を育てゝくれと、それが末期の遺言にて、遂にはかなき旅の空、其後佛の日柄も立ち表向にて親類へ披露をなして夫婦となり、御恩になりし佛さまの御內意を堅く守り、養育せし德

太郎を大切にして暮す内、五年目にて儲しは是へ參りし丹次郎、二人の男に旦那殿も蝶よ花よとする内に、モウ年頃に仲間のものとフト參會の崩れからこちらへ來たが初めにて、一度が二度と内を明け初めの内は執成して能きやうに言うたれど、もうそう〳〵は隱されず殊の外の御立腹にて、所詮あゝいふ悴には此家督は讓られぬから、弟の丹次郎にわたすと言うて、既に親類へ勘當の相談をしようと迄なつたを一時押鎭め一寸退れをしましたわいの。

　トしんみりと言ふ、丹次郎も思入あつて、

丹次　さうなる時は亡き母が養育頼むと申されし其遺言も反古となり、腹違ひのわたくしが家相續を致しては道にかけます其上に、世間の人の口の端も、現在兄がありながら弟が相續するといふは我田へ水を引くのぢやと、噂をされるは必定にて、左する時はお袋と此丹次郎はあの内に居られぬ場合になります故、

つぎ　呼んでくれなではなけれども三度のものは一度にして、なるたけ内を明けぬやう異見を頼むと申すのは、ちと無理なお頼みなれど、親が眞身の異見より、必ずこなたが言うてくれるを用ひようと思ひまして、他人と思はぬ打明話し。

丹次　お女郎屋樣にて、此樣なことを申しては濟みませぬが、親子が心を汲みわけて、

つぎ　どうぞ悴に、

丹次　言うて下さりませ。（ト兩人宜しく賴む、お辰じゆつなきこなしにて、涙をぬぐひ、）

お辰　高が宿場のわたしなぞへ、事を分けての其のお詞、よろしうござります。此後おいでになりましたら、あなたがせつない入譯をとつくりお話し申した上、此後おいでにならぬやうきつと御異見しますれば、必らずお案じなされますな。

丹次　スリヤ御得心下さりまして、異見をおつしやつて下さりますとか、ゑゝ有難うござりまする。

トおつぎ是を聞き心遣ひの思入あつて、

つぎ　アヽモシお辰どの、然しぱつたり來ぬやうといふのもどうやら不便ゆゑ、たまにはよいと程よくして、どうぞお賴み申しまする。

お辰　テモまあ粹な御新造さま、德さんばかりかわたし迄、ほんに嬉しうござりまする。

つぎ　悴が首尾よく辛抱したら、どうせ持たせる女房故、旦那殿の樣子を見合せおまへの身分の相談を仕ようと思ふ心ゆゑ、それがよしや纏らずとも、末始終は身受けして必らず樂にさせますから、わたしの賴みも眞身になつて、悴に言うて下さんせ。

お辰　不仕合なる身の上に、便る所さへなきわたしを、それ程迄におつしやつて下さりまする御親切、

嬉し涙がこぼれますわいな。

ト愁ひの思入、おつぎ、丹次郎も氣の毒なるこなしあつて、

つぎ　おゝまだ宵とはいひながら、水戸樣前が淋しいから、もうお暇いたしまする。

お辰　是が素人の内なれば、お留め申す所なれど、何を申すも惡所場と惡い名前の遊女屋ゆゑ。

つぎ　其惡所場の内なれど、こなたのやうな親切な、心立のよいお人もあり、

丹次　とはいふものゝ、兄さまが、是迄通ふにだまされて、（ト思入あつて氣を替へ）いやなに、だますといふも生業柄、

お辰　其の生業も道ならぬ堅氣なお人の目から見れば。鬼とも思ふ苦界の勤め。

つぎ　やがてのがれて、樂々と、

丹次　其身をかためたことなれば、

お辰　今の苦界の物語りを、

つぎ　話す時節に、

三人　なりませうなア。

トよろしく思入、端唄になり、下手階子の口より喜助太助掛盤に煎餅を少し盛りたる菓子臺を持ち、

お辨の遣手、若い者兩人附出て來り、見切りの障子を明け閾の外にて菓子の臺を出し、

喜助　先刻は一統へ御祝儀を下さりました、

お辨　ちよつとお禮に、

皆々　上りましてござりまする。（ト是にて、おつぎ、丹次郎もぢ〳〵しながら）

丹次　是は御念の入りましたことでござりまする。

お辨
皆々　ちよつと〆ます。

つぎ　いえもう歸りますから、明いて居ても宜しうござりまする。

お辰　いえ、惣花の祝ひに、手を〆るのでござりまする。

お辨
喜助　ヨーイ、

皆々　ヨイ〳〵〳〵、ヨイ〳〵〳〵、ヨイ〳〵〳〵ヨイ。

ト皆々手を打つ、丹次郎も迷惑さうに一緒に手を打ち、

丹次　是は御苦勞さまでござります。

ト叮嚀に辭儀をする、皆々顏見合せびつくりなし、挨拶をなし、若い者兩人下手へはひる。跡お辨、喜助、太助も立たうとすると、

お辰　ア丶モシ、もうお客さまがお歸りなさんすわいナ。

お辨　おや、もうお歸りでござりますかえ。

喜助　お駕籠を申付けませうか。

丹次　いえ、わたくしが一緒でござりますから、それには及びませぬ。

つぎ　（お辰に向ひ、）お座敷通りとやらの、勘定をお賴み申しまする。

お辰　それは先程の內で濟みましたわいな。

つぎ　そんなら何分、（トじつと思入あつて、皆々へ氣を兼ね、）よろしうお賴み申しまする。

お辰　承知いたして居りますわいな。

丹次　道が知れませぬが、お見世迄お敎へなされて下さりませ。

お辨　さあ、斯うお出でなされませ。

ト端唄になり、おつぎ、丹次郎皆々附いて階子の口へはひる、此時上手の襖の內より伊丹屋息子德太郎羽織着流し、商人息子のこしらへにて出て來り、階子の口へ行き、下たじつと見やり思入あつて、

德太　ア丶濟まないことをした。堪忍して下さりませ〳〵。

ト手を合せ詫びるこなし、合方になり階子の口よりお辰出て來り、德太郎を見やり、

お辰 や、德さんには、いつの間に。
德太 今し方見世へ來て、お袋が居ると聞いたゆゑ裏階子からそつと上り、隣り座敷で委細の話しを聞けば聞く程濟まない譯、今歸つた跡を見て、實は詫をして居たのだ。
お辰 始終を聞いたと言ひなさんすりや、別に言ふにも及ばぬが、弟御さんとお二人で義理に迫つたお話しに、わたしや穴へも這入り度く、あつい涙を內へ呑込み、ほんに苦しうござんしたわいな。
德太 五ツの年から養育受け、實の親より恩の深い其の恩返しもせぬ內に、又も今度苦勞を掛け爰迄來ておぬしへ賴み、繼母の鑑といつてもいゝ、勿體ないお袋故、義理にも是から辛抱して安心させねば濟まぬわえ。
お辰 わたしもどうした惡緣やら、あなたの事が忘られず外のお客へ廻しに出ても、氣が落付ずそはそはと廻り仕舞にしつぽりと積る話しも盡きぬうち、憎い烏に起されて朝の別れのきぬぐ〳〵に、又逢ふ夜さを樂しめど、
德太 義理と浮名にせばまれて、そなたは月の玉高も去年に今年と少なくなり、わしは親父の立腹に既に此身は勘當と、互ひにつまる今の身の上、
お辰 遣手衆の强異見と、今又親御のお情あるせつない異見と二筋にからまれたのが互ひの幸ひ、別れ

たうはござんせぬが、わたしも死んだ氣になつて一先づ思ひ切りますから、どうぞ一旦足を抜き親御さまへ御安心をおさせなされて下さりませ。

德太　そりやもうそちが言はいでも、義理故餘儀なく別れるが、然し今の樣子では又逢ふ時節が來りなば、身受を仕ようといふ樣子、それを待つより外はない。

お辰　弟御さんと同じ樣な、堅いあなたを此樣な放蕩者にさしたのも、元はと言へばわたしから、

德太　それはこなたも同じこと、此の新宿でも一二と言はれ、馴染客の多かりしも、わし故今はひまになり、

お辰　物日節句や移り替の、苦勞をするのも心柄、決して厭ひはござんせぬ。

德太　サ、それが胸に支へるゆゑ、疾からわしは氣をもんで居たのぢや。

お辰　そりや水くさい若旦那、假令此世で添はれずとも、未來は夫と思ふお方、

德太　そんならおぬしはそれ程迄に、

お辰　知れたことで、(ト德太郎に寄添ひ、)ござんすわいなア。(トじつとしめ泣きに泣く、德太郎思入あつて、)

德太　ア、それでさつぱり胸も晴れ、わしや當分爰へ來ぬぞよ。

お辰　えゝ、そんなら得心しなさんして、

徳太　そちが心の變らぬ故、何よりわしは安心した。

お辰　わたしも嬉しうござんすわいな。（ト此内徳太郎懷中より風呂敷包みの財布を出し、）

徳太　それに附いて此間から浮名が立つたそれ故か客に言うた無心の手遊ひ、そなたは今日迄隱して居れど薄々聞いて氣の毒と思ふ矢先へはからずも、今日鳴子の三川屋から掛を取つた金があれば、是で一先づ移り替や近所の借を返してくりやれ。（ト出すを、お辰押戻し、）

お辰　いえ〳〵是は受けられませぬ、假令無心のお金が來ずとも、それはわたしの心柄、あなたは是からお内にて辛抱なさるお體ゆゑ、潔白になさらねばお爲に惡うござんすわいな。

徳太　イヤ、さう言やるは忝ないが、是迄遊んだ其内でも、無心を言うたこともなく、多分の金を立替させ、苦勞をさせた舉句故、不足なれども此の百兩、どうぞ取つて置いてくりやれ。

お辰　假令何とおつしやつても、お袋さまの思召しやあなたのお爲を思ひましては、是はどうも受けられませぬ。

徳太　スリヤ是程に申しても、そなたは是は受けられぬとか。

お辰　今が大事の御身ゆゑ餘儀ないことになりましたら、文を上げてお賴み申せば、それ迄お預け申しまする。

ト徳太郎へ返す、此以前より時分に上手の襖を明け、藤十郎ちよつと窺ひ、そつとしめる、徳太郎思入あつて、

徳太　そんなら無事に此金は、内へ持つて歸るけれど、若しも急場に支へなば、

お辰　其の時お頼みに、上げますわいな。（ト是にて徳太郎安堵せしこなしにて、）

徳太　そんなら今夜は、是れから直に、

お辰　お歸し申すもお身の爲め、

徳太　氣のせるか別れるのが、

お辰　もしや是切りにならうかと、

徳太　行くに行かれず、居るに居られず、

お辰　是が苦界と言ふものかいな。（ト愁ひのこなしあつて、）

徳太　二人揃つて泣顔で、まさか見世へも行かれぬから、

お辰　未練が殘れば送りませぬ。

徳太　おゝ、ちよつと湯へ行くつもりで表へ出れば、

お辰　調子を合して置きませうわいな。（ト徳太郎金を懐中なし、）

徳太　そんならお辰、
お辰　若旦那、
徳太　時節を待つて居やれよ。
お辰　ハア丶丶丶。
ト泣伏す、是にて端唄の合方になり、兩人別れを惜しむこなしあつて、ト丶思ひ切つて階子の口へはひろ、此時上手より藤十郎出て來り、ツカ〳〵と下手へ行かうとするをお辰心附き、
アヽもシ藤岡さん、どこへお出でなさいますえ。
藤十　今ちよつと下へ行くのだ。（ト行掛るを、）
お辰　お手水なら、御一緒に行きませう。
藤十　ナアニ、それには及ばねえ。
ト足早に階子の口へはひろ、お辰胸を押へじつとなる、下手よりおとみ出て來り、
とみ　お辰さん、何をふさいで居なさんす。
お辰　サ徳さんの一件で、胸の痞えが下らぬわいなア。
とみ　そんならさつきおつかさんが、おいでなさんした其の時に、

お辰　餘儀ない義理にからまれて、
とみ　そんならもしや德さんと、
お辰　當分別れましたわいナ。（ト泣伏す。）
とみ　わたしも隨分覺えがあるが、實にお察し申しますよ。
　　トじつと思入。廊下口より千次寢卷裝にて、目をこすりながら出て來り、
千治　おゝおとみは爰に居たか、床の番は仕度くねえの。（ト少し立腹のこなしにて言ふ。）
とみ　床の番もないものだ、今出て來たばかりの所、極りで千さんの甚助でござんす。
千治　イヤ、甚助ぢやァねえ千藏だ。
とみ　何を寐ぼけて居なさんす。
千治　おゝお辰さん、藤岡さんの座敷はどこだえ。
お辰　藤岡さんならたつた今、急いで下へお出でござんす。（ト千治是を聞きハッキリとなり、）
千治　なに、下へ行つた。（ト大きくいふ。）
とみ　えゝ、びつくりしたわいなァ。
千治　そいつァおれも支度して、（ト下手へ行かうとするを、おとみ袖をとらへ、）

とみ　藤岡さんに用があるなら、今呼んで上げますよ。
千治　いや、それを待つちや居られねえ。
とみ　え丶、待つてといつたら、（ト千治を後ろより抱しめ、）待ちなさんせいなア。（トお辰是を見て、）
お辰　廊下鳶は、（ト千治の肩を打つを、道具替りの知らせ、）止しなさんせいな。

ト千治、おとみに止められしま丶氣をあせろこなし、此模様太皷入甚九にて道具廻る。

（御堀端の場）――本舞臺一面の平舞臺、向う松並木草土手、お堀端の中遠見、裾通り蒲鉾棕櫚伏の土手、是へ杭にしゆろ縄を通せし堀端の隔て、上手植込み、下手材木を立掛けし張物の見切り、總て四ツ谷見附外市ケ谷寄りの體。爰に中間ぐでんの傳次同じくじぶくりの九助、紺看板の折助にて、頬冠りをなし中腰にて、かます煙草入にて煙草を呑み居る、此の見得合方水の音にて道具留る。

傳次　粉末煙草ばかりぱく／＼喰つても、なか／＼腹の足にならねえの。
九助　どこへいつても今夜のやうに、錢を呉れねえ晩はねえ。
傳次　せめて馬方蕎麥でも構はねえから、五ンつくも引掛けてえが、二人で二百にならねえ錢ぢやア、どこへいつても話しが附かねえ。
九助　夜明しか夜鷹蕎麥が來たら、腹ツぷさけに喰はうと思ふが、それにもおひにく出逢はねえ。

傳次　アヽどうか敵に廻り逢ひてえものだ。

ト此時花道揚幕の内にて、燗酒賣り富藏の聲にて、

富藏　おでん燗酒、甘いと辛い。（と兩人聞耳立て、）

傳次　ヤア、おでん屋の聲がするぞ。

九助　アヽ、是が地獄で佛といふのだ。

ト花道際へ行き、しきりと向うを見込み居る、新内の合方駕屋の聲になり、花道より富藏やつし裝尻はしをり雜股引、わらんじ掛にて行燈を附けたるおでん屋の荷を擔ぎ出て來り、

富藏　おでん燗酒、甘いと辛い。（ト呼びながら舞臺へ來る。）

傳次　おい〳〵おでんや、辛いのを一本くんねえ。

九助　酒もあつくしてくれろ。

富藏　へい〳〵、かしこまりました。（トよき所へ荷をおろし、澁團扇にて七輪の下をあふぎながら、兩人をすかし見やり、）や、お客かと思つたら、傳次に九助ではないか。

傳次　お祭しの通り、ぐでんの傳次にじぶくりの九助と、お二人さまだ。

九助　おゝ富藏か、以前は同じ折助でも、錢せえ出しやアお客さまだ。

傳次　そんな呼びッこにしねえで、
九助　客取扱ひにしてくれろ。
富藏　あんまり錢を拂ふ風でもあるめえ。（ト兩人思入あつて、）
傳次　實は拂はねえのだ、現金ならば外で買ふが、あひにく今夜は一文なし、
九助　ほんの所は宵ッからぐれはまになつて方が附かず、おめへの來るのを、
兩人　待つて居たのだ。
富藏　大方そんなことだらうと、思つて居たのだ。（ト此内富藏田樂を拵へ、酒を茶碗へついで、兩人の前へ出し、）へイ、お誂へ。
傳次　さう改まられちやァ面目ねえの。
富藏　なに、是は商人の口くせだ。（ト兩人受取り、一ト口呑み、）
傳次　アヽ有難へ、是で二人が生返つたやうだ。
九助　富藏、手めへは命の親だぜ。
富藏　おつウごまをすらァ。（ト合方きつぱりとなり、七輪をあふぎながら、）斯うして仲間がより合ふと、以前のことをおもひ出すが、もと赤城の御先手組で、折介をして居た時分、ずゐぶん面白いことも

あつたの。

傳次　いつであつたかおめへが一所で、毎日お城へ辨當を運ぶ時に、仲間のもので丁半をしたことがあつたツけ。

九助　あいつが段々増長して、日溜りの芝の上で大きな聲でやつたので、おら達は旨くごまかしたが、富藏は逃げそこなつたの。

富藏　あの丁半の一件で、どう／＼おれは罰を喰ひ、お拂箱になつてしまひ、遊んで居ても仕方がねえから、親分へ泣附いて、細くもやう／＼世帶を持ち、今ぢやア堅氣のおでん燗酒、からッきし形はねえ。（ト此内兩人田樂をくひ、酒の茶碗の端をなめて居る。）しみッたれたことをしなさんな。（ト德利を出し、）さ、茶碗を出しねえ、いくらでも呑ませらアな。

傳次　何だか錢を拂はねえと、肩身が狹いが、

九助　それじやア替りをついでくんねえ。

富藏　惜しまねえから、遠慮しなさんな。（ト酌をしてやり、田樂をこしらへて居る。）

傳次　さうして今は堅氣になつて、どこに體を落着けて居るのだ。

富藏　今いふ親分の厄介で、築土下の白銀町に、九尺二間の家を借りた。

傳次　敷が出來りやア何よりだ、此頃に出掛けて行くから、

九助　久しぶりで知つた顏で、小皿でも振らうぢやアねえか。

富藏　いや、そいつアいけねえ、大家がめつぽう堅人だのに、おれが見向もしなくなつたから、人寄せは禁物だ。（ト田樂をこしらへて出し）サア芋が出來た、唐辛子は此箱にあるよ。

ト兩人へ酒をついでやる、兩人田樂を喰ふ。

傳次　おめへがそう堅人になつちやア、おら達は附合ひ難いの。

九助　ごまぢやアねえが、お前の味噌は、めつぽうけへ味がよく附いて居る。

富藏　代物がよくなけりやアどうしても賣れねえから、永代の乳熊迄わざ〳〵おれが買ひに行くのだ。

傳次　道理で味がいゝと思つた。味噌は乳熊に限るなう。

九助　自身に乳熊へ買ひに行くとは、それでは不斷話しにした國に居る女房子は、まだ江戸へ呼ばねえのか。

富藏　それも歸し度く思ふけれど、不仕末をして國に居る時、夫婦別れをして來たのだから、嬶は女の餓鬼を連れて、親父の内へ歸つたが、せめてこつちが人らしい身分になつたら呼ぶ積りだ。

傳次　おでん燗酒でも馬鹿にならねえのは、世間にいくらも金持の夜商人があるといふから、おめへも

しつかり拵いだ上で、

九助　國の女房や子供を呼び、夫婦共拵ぎとするがいゝぜ。

富藏　女房の事は忘れるが、子供に逢ひ度く思ふことは、時々出てならないものだ。

傳次　是から段々賣込むと、おれ達もともに悅びだ。

九助　第一呑倒しに行く都合がいゝ。

富藏　ありがたく出來て居る。（ト此の内兩人は酒に醉ひたるこなしにて、）

傳次　アヽ、いゝ心持になつた、ごうせい陽氣になつて來た。（ト手びやうしを打ちながら、）煮込のおでんでやつちよろね。

九助　傳公、此勢ひで宿へでも押出さうか。

富藏　錢もねえくせに止すがいゝ。それより此勢ひで、無事に部屋へ歸つて寐込むがいゝぜ。

傳次　老込んだことを言つてるぜ、斯う見えても、まだそんなんちやアねえ。

九助　宿より揚場の川岸へいつて、引張でもひやかさう。

傳次　むゝ、そいつアいゝ。（トひよろ〳〵立上り、）おい富藏、今夜は借りだよ。

富藏　今夜ばかりか、いつでも借のくせに。（ト兩人持つたる茶碗を荷の上へ置きながら、）

傳次　そんなに馬鹿にしなさんな、一番いゝ目が出た日にやア、のう九ス公、

九助　さうよ、おでんやなぞに借りはしねえ。

富藏　こいつァ餘程當にならねえ。

兩人　そんなら富藏、

富藏　又お願ひ申しますと言ひてへが、なるたけ逢ひ度くねえの。

傳次　えゝ、人をけち〳〵だと、

兩人　思つてるやアがる。

トやはり新内の合方にて、兩人生醉のこなしにてひよろ〳〵しながら上手へはひる、時の鐘富藏跡を見送り、

富藏　山の手の商ひもいゝが、時々昔の仲間に出逢ひ呑倒されるには閉口だ。アヽモウ市ケ谷の四ツを打つか、今夜は宵から淋しいから、そろ〳〵宿の方へくり込まう。

ト頬冠りをなし、田樂のくしなどまとめ、茶碗を洗ひ居る、やはり新内の合方になり、上手にて駕屋の聲してばた〳〵になり、上手より○△の駕舁四ツ手駕をかつぎ、新宿の看板提灯にて走り出て來り直舞臺へ來て杖をする、此時駕籠の内にて、

藤十　若い衆、爰へおろしてくれ。

○　へイ、まだ爰は四ツ谷御門外でござります。

藤十　そりやア知つてる、いゝからおろしてくれ。

△　へイ、かしこまりました。

ト駕舁不審のこなしにて垂を上げ、雪駄を出す、内に以前の藤十郎着流し大小にてぬつて立上り、

藤十　明りをちよつと見せてくれ。

○　へイ〳〵。

ト駕舁提灯を出す、是にて藤十郎紙入より一朱出し、紙に包み。

藤十　一ぺい呑んでくれ。

○　是は有難うござります。棒組、お禮を申せ。

△　旦那ありがたうござります、先迄お供致しませう。

藤十　いゝから爰で歸つてくれ。

○　へエゝ、それぢやア爰からお徒歩ひで。

△　お淋しいではござりませぬか。

藤十　いゝといふに。

○　左樣なら、お靜においでなさいまし。

ト駕舁兩人挨拶して上手へはひろ、藤十郎は身仕度なして向うを見込む思入あつて、おでん屋を見やり、差合だといふこなし、此の内富藏始終藤十郎の樣子を窺ひ居て、藤十郎は上手へ行かうとするを、

富藏　アモシ〳〵、藤岡の若旦那さま。

藤十　えゝ、おれの名を呼ぶのは、

富藏　中間をして居りました、富藏でござりまする。

ト頬冠りなとり、行燈の側へ顏を出す、藤十郎よく〳〵見て、

藤十　おゝ富藏か、思ひがけない所で逢つたの。

富藏　久しくお目に掛りませぬが、いつもお替りはござりませぬかな。

藤十　今夜爰にゐようとは、ちつともおれは氣が附かなんだ。

富藏　今時分駕籠でお歸りは、新宿でござりますか。

藤十　察しの通り昨日から、ぶん流して居た所、まさか白晝歸れもせず、今夜遲く歸るつもりだ。

富藏　それにしても解せぬのは、何で、こんな淋しい所で駕籠からお下りなさいました。

藤十　なに、内迄乘つて行く氣だつたが、少しもくろむ事があつて、それで爰へ下りたのだ。

富藏　人通りのないお堀端で、もくろむ事とおつしやいますのは。

　　　トちよつと考へるこなし、藤十郎ぎつくりこなしあつてまぎらし、

藤十　なに、別にもくろむといつても、外の事ではないけれど、待合せる者があるのだ。

　　　ト富藏扨はといふこなしあつて、

富藏　へエ、、左樣でございますか。（ト宜しく思入、藤十郎向うを見渡し、）

藤十　富藏、貴さまはさつきから爰に商ひしてゐたか。

富藏　へい、一時の餘居りまする。

藤十　若しや爰へ商人風の、若い男は通りはしねえか。

富藏　一向に氣が附きませぬが、其のお人に御用でございますかな。

藤十　ちつと受取る物があつて、其の男を待つて居るのだ。（ト言紛れるこなし、富藏四邊を見廻し、）

富藏　旦那、あなたは仕事をするのだね。（ト小聲にて言ふ、藤十郎びつくりなし、）

藤十　コレ、（ト押へる。）

富藏　おでん燗酒、甘いと辛い。（トあたりへ思入、誂への合方になり、藤十郎思入あつて、）

藏十 富藏、貴さまは勘附いたか。

富藏 中間奉公した頃に博奕をしました其外は、惡い事は知らぬわたくし、若し間違ひかは知れませぬが、先づ素人考へにしても此の淋しいお堀端で今時分駕籠からおり、何だかそわ〳〵なさるのは何でも仔細のある事と心を付けて居ましたが、旦那さまも富藏も生れは野州の都賀郡犬塚村で育つた者、親父が喰ふに困つた時あなたの親御に助けられ、藤岡樣は命の親だと死ぬ迄申して居りました、其の若旦那故わたくしはお主同樣思つて居れば、善惡共にお力は添へる心でござりますから、若し違はずばわたくしへ、譯を話してお聞せ下されませ。

ト宜しく思入、藤十郎のつ引ならぬこなしにて、

藤十 さういふ貴さまが了簡なら、隱さず割つて話しをするが、實は此頃新宿の辰巳屋へ通ひ詰め、少しの事の意氣張りで芝居で言やアおれは不破、名古屋といふのは本鄕の伊丹屋といふ升酒屋の息子が間夫と浮名が立ち、雨の降る夜も濡燕、扨斯うなると止められぬ心の稻妻消え兼ねて、大門ならぬ大木戸を通らぬことは一ト夜もなく、段々詰る此體に途方に暮れた其所、舅が諸方へ借込んだ取立方を受合つて、集めた金で凌いだが、こいつもとう〳〵遣ひ込み、其やツきりに困りし矢先、今夜測らず其息子が掛先から取つて來た百兩といふ金を、持つて來るのを見留めた故、本

鄕へ行く歸り道と心をつけて來た所、麴町へ廻ると聞き先へ驅拔け待伏して戀の遺恨と二ツには身にふり掛るやりくりを、附ける心で道ならぬ惡事を働く其矢先、貴樣に樣子を見出されては、實に面目次第もねえ。

富藏　それでは爰に待伏せして、そいつの金をお取んなさる氣か、然し素直に其金を渡さない其時は。

藤十　譬に申す武士の習ひ、切捨ても取らねばならぬ。

富藏　へエヽ、左樣なら人殺しをなさるのか。

藤十　切つて捨ても、金を取るのだ。

富藏　えヽ、(トびつくりなし、震へながら。)もし、そりやア惡うござりませう、戀の遺恨ばかりでなく金を取つた其上に、人殺しをなすつたら重い科目を受けませう、其の人殺しはお止しなされませ。

ト氣味の惡きこなしにて言ふ。

藤十　武士が一旦言出したら、跡へは引かぬ男の意地、思ひ止まる譯には參らぬ。

富藏　それはさうでもござりませうが、まア人などを殺さずに、穩便になされませ。

藤十　コレ只今貴さま何と申した、同じ所の產れ故親父の恩を返す爲め、善惡ともに力になると、立派に身共へ言つたではないか。

富藏　ヘイ、そりやア申すには申しましたが、
藤十　そんな臆病な了簡では、斯ういふ場所には却つて邪魔だ、早く外へ行くがよい。
富藏　そりあ行けなら行きますが、善惡共にお力にならうと申した上からは、今夜のことは殺さずとも
持つてる金を取るのみで、片腕になりますれば其の事ばかりは止めになされませ。
藤十　臆病もの、片腕が、何で役に立つものか。
富藏　大した役には立ちませぬが、今夜のお役に立ちませう。
藤十　なに、その片腕で役に立てるとは。
富藏　えゝ、其の片腕といつたのは、
ト立上り、あたりへ思入、是を誂らへの合方犬の聲になり、富藏荷の上にある藥味箱を取り、藥味を
ぶちまけ腰掛臺になし、づう〱しく片肌を脱ぎ、藤十郎の目先へ突附け、
是でござります。
藤十　ハテ、見事なる龍の彫物、此の片腕にて助力をするとは、ハヽアそんならもしや其方は、堅氣に
なつたといつたのは。（ト合方きつぱりとなり、）
富藏　今年で丁度八年跡、野州に居た時盗みをして八州廻りの手先に上げられ、引ぱたかれて隠しされ

す、白狀して代官所の牢へ初めて這入りましたが、名主が知つてる博奕仲間で、直に役附き樂をして入墨の上百敲きの仕置を受けた此の富藏、それから土地にも居難いのに女房の舅が堅氣で、兎や斯ういふゆゑ離緣をして、諸所方々ほッつき歩いた其内も、表向には洗湯へもおッけ晴れては這入れねえ、人交はりの出來ねえ體に、はだかで外へ出られぬ所から、惡いと知りつゝ筋彫からぼかしてごまかす雲龍の墨を流した黒雲に、跡をくらます入墨もの、此の片腕で助ける時は、青二才が持つて居る百兩ばかりのはした金なら、なぐり倒しても取つて見せます、何の造作もねえことだ。

と肌を入れづう〳〵しきこなし、是にて藤十郎びつくりなし、

藤十　以前盜みをしたことを、人の噂に聞いて居たから實は惡事を打明けたが、其の片腕の話しを聞き是でおれも安心した、萬事貴樣を頼むから、おれが力になつてくれ。

富藏　旦那がさういふ了簡なら、八年跡娑婆へ出たぎり當時は仲間もねえ富藏、是から互ひに腹を合せ目ざましい働きをして、一番相場を狂はせようか。

藤十　貧乏ゆゑ以前から、人の金は借倒したが、まだ盜みをした事はねえ。是から貴樣を力に頼み大きな事をしたいものだが、先づ手初に腕相應小さなことから敎へてくれやれ。

富藏　そいつがけちな了簡だ、仲間も少ねえ小人數で、どんな向うが大敵でも負けずおとらずやらかすにやア、大きな事をしにやアいかねえ。

藤十　なに、大きな事とは、（ト合方替つて、富藏思入あつて、）

富藏　近い頃の盗人だが、鼠小僧次郎太夫は町家などの金を盗み、難儀をさせては氣の毒だと盗みに這入つた其先は皆大名と旗本のみ、上の仕置になつた後もごうぎな者だと噂をしたが、とんだ石川五右衛門だがわつちの目から見る時は、まだ〳〵あんな小さな事ぢやア盗人のうだつは上らねえ。とてもやるなら大敵をふみ倒すといふ勢ひで、腕に縒を掛けにやアならねえ。（ト宜しく思入）

藤十　さうして貴さまが惡事をする、大きな事と申すのは。

富藏　わつちが大きな事をするのは、（トあたりを窺ひながら、行燈の側へ行き、）おでん燗酒、甘いと辛い、（トじつとあたりを見廻し、思入あつて元の所へ來り、）わつちが目差す所といふのは、公方樣の御金藏さ。

藤十　えゝ、（トびつくりなす。）

富藏　コレサ、靜にしねえか。（ト制す、藤十郎ほつと思入あつて、）

藤十　成程、鼠小僧もはだしだ。（ト感心せしこなし、富藏思入あつて合方きつぱりとなり、）

富藏　御金藏へ忍び込めば八百萬石の身上だから、五千や一萬盗んだとて別に障りになるめえから、先づ手初めから大所へ、わつちと一所にお出なせえ。

藤十　丁度幸ひ、以前御天守番の今井の所に奉公をして居た時、主人の供で御金藏の前は度々通つたが晝でもあるか夜の事、どうして忍び込む積りだ。

富藏　そりやアこつちもお先手の折助をして居た時、辨當を運んで知つて居るから、二重三重輪りの附き、嚴しく番を仕ようとも裏からこつそり忍び込み、きつと錠は明けて見せます。

藤十　シテ御金藏の錠前を、そうたやすくは明くまいが、どうして貴樣明ける氣だ。

富藏　そりやア決して御案じなさるな、蛇の道は蛇で餓鬼の時、年季を入れた錺職、鍵位なら拵へるから、人手などは借りはしませぬ。

藤十　それじやア前に一度這入り、鍵の穴を合はした上か。

富藏　そこはわつちの胸の掛引、仕上げて見る迄お任せなせえ。（ト藤十郎安心のならぬこなしにて、）

藤十　そりや、貴樣のことだから、萬々仕上も仕ようけれど、若し露顯した其時は、おれも共々科目を受け、重き仕置を受けねばならぬが。（ト心遣ひの思入、富藏せゝら笑ひ、）

富藏　何だ、まだやりも仕ねえ内から、そんなけちを附けなさんな。金を取られねえ其内に、若しおれが

お手に逢つても、抱込むやうな事はしねえよ。

藤十　いや、あつぱれ見上げたやつぢやわえ。

　トほつと思入し此時荷の中にて桶の箍はね、ポンと音する、藤十郎びつくりなして飛退き、）

今のは何だ。（ト氣味の惡きこなし、富蔵腰を掛けたまゝ煙草を呑みながら、）

富蔵　桶の箍がはねたのだらう。

藤十　そんならいゝが、びつくりした。

富蔵　イヤハヤ、あきれ返つた臆病だ。

　ト此時上手にて泥坊々々と聲して、ばた〳〵になり、以前の千治頬冠り尻はしをりにて逃げて出る、跡より德太郎はだしにて息を切りながら追掛出て來り、

德太　どろはう〳〵。

　ト舞臺へ來り、千治に追付きむしやぶり付く、千治是れを振拂ふはづみに懐の財布を落し、おでん屋の荷物へ突當る、是にて灯い消えてくらがりの思入、時の鐘忍び三重になり、千治財布を探り取り、上手へ逃げにかゝる。是迄富蔵、藤十郎後ろにしやがみ窺ひ居て、此時富蔵つか〳〵と出て千治を捉へる、德太郎は藤十郎へ立掛る、是にて世話ダンマリの立廻り宜しく、トゞ千治の財布を富蔵引きと

る、德太郎此中へはひり、千治をとらへるを振拂ひ、千治つか〳〵と花道へ隠れ行く、德太郎是をすかし見て跡を追掛行き、花道にてばつたり轉び手の痛むこなし、此間に千治花道へ走りはいる。富藏作の財布をさぐり、

富藏　あゝ、是れか。（ト思はず言ふ。）

藤十　えゝ、（ト寄るを富藏へだてる。是を木の頭。）

富藏　おでん燗酒、甘いと辛い。

ト氣を替て言ふ。藤十郎は向うを見込み、德太郎ひぢを押へながら、ひよろ〳〵と跡を追ひかけてはひろ。此模樣よろしく、合方風の音にて、

ひやうし　幕

二幕目

本郷伊丹屋の場
代官町堀端の場
牛込寺門前の場

【役名――野州の富藏、藤岡藤十郎、伊丹屋息子德太郎、伊丹屋德右衛門、同丹次郎、傳次、九助、手代善兵衛。伊丹屋女房おつぎ、其他。】

(伊丹屋の場)——本舞臺三間常足の二重鐵網の蹴込、正面大阪格子の出這入り、上手一間押入戸棚是へ角樽同箱入りなど書割り、此下諸帳面をかけ、前に釣錢をさしてある帳場格子、内に掛硯大帳此側に朝顏附の大錢箱、能き所に現金小判六拾匁と記したる定書、下手九尺の落間、此の正面酒醤油の樽を書割、此内に呑口の附きし眞物の酒樽、大小の升、したみの桶、土間に味噌の樽、鹽笊など並べあり、下手に洗桶を圍つたゝ駒寄せ、軒口に伊丹屋と染拔きし紺の暖簾、ずつと上下土藏の張物にて見切り、總て本郷外酒屋見世先きの體。樫の角火鉢、同じたばこ盆、茲に手代善兵衛着流し前かけなりの手代、丁稚住ひ、前幕の傳次、九助の中間生醉の思入にて、箱に腰をかけ居る、此もやうけいこ唄飴屋の摺鉦にて幕明く。

傳次 それぢやア何か、こんな大きな家體骨を張つて居ながら、たつた一升の酒が貸されねえといふのか。

善兵 まことにお氣の毒さまでございますが、當節は皆現金で、貸賣りは一切致しませぬ。

九助 それはさうでもあるだらうが、きつと後に樽と錢を持つて來るから、ついでくんねえ。

丁稚 あいにく樽が出拂つて、今一つもありません。

傳次 樽がなけりやア徳利をよくいすいで、ついでくんねえ。

善兵 一升徳利もみんな出拂ひ、一本もございませんから、又いらしつて下さいまし。

傳次　べらぼうめ、一升には限らねえ、二升樽でも角樽でも、酒せへついでくれりやァいゝのだ。
九助　しみッたれなことを言はねえで、器用に一升ついでくんねえ。
善兵　いくら何とおつしやいましても、どちらさまのお中間だか、お馴染でもないおなた方に、お貸し申すことは出來ませぬ。
傳次　おめへの方ぢやァ知るめえが、こちとらは年びやく年中此界隈の大名へ、それからそれと渡り中間。
九助　どこへ行くにも二人揃つて、いつも酒の氣が放れねえから、おみき徳利と綽名に呼ばれ、こつちの見世の定得意だ。
傳次　本郷二丁目の伊丹屋が、たつた一升の酒を因業に、
九助　貸さねえといはれたら、爰の暖簾にさはるだらうぜ。
善兵　御尤もでござりますが、主人へだまつてお貸し申すと、私共がしかられます。
丁稚　おゝさうだ〳〵、内の旦那はおまんまより小言をいふのが好きだから、一升貸せばその小言を一生聞かねばなりません。
傳次　惡くしやれるばうずだ、サア、それぢやァ早く主人へ斷つて來い。

善兵　今日は主人が留守でございますから、又此の頃においでなさい。
九助　何だ留守だ、それぢやァ歸るまで待つて居よう。（ト兩人上り端へ寐ころぶ。）
丁稚　商人の見世で、晝寐をしちやァいけません。
傳次　寐て惡けりやァ一升貸せ。
九助　さもなけりやァ起きねえぞ。
善兵　おまへさん方もわからない人だ、貸されぬといふを無理に貸せといふのは、早く言やァ押借り同然だ。（ト是にて兩人起上り、むつとして、）
傳次　何だ押借りだ、ヤイおら達を見そくなつたか、今も言つて聞せる通り金箔附の渡り中間、只の折助とは譯が違ふぞ。
九助　八百萬石の大手先で、面を知られた傳次九助だ、押借りだと言はれちやァ、酒を借りても歸られねえ。
傳次　さあ、押借りなら押借りにして、
九助　二人ともに突出してくれ〳〵。（トふんぞり返る。）
善兵　いえ、さういふ譯ではございませぬが、

傳次　譯もへちまもいるものか。
九助　さあ、突出してくれ〳〵。
傳次　
トあばれて居る、合方きつばりとなり、奥より伊丹屋の主人德右衞門羽織着流し、少し更けたる酒屋の亭主にて出て來り、捨ぜりふにて兩人をなだめ、火鉢の側へ住ふ。
德右　是はどちらの中間衆か存じませぬが、こんなに腹をお立てなさるは、定めし見世のものが何かい
ひ違ひでござりませう、惡い所はわたくしが詫るから、どうか了簡して下さい。
傳次　お前は番頭か何だ。
德右　わしは爰の主人さ。
九助　なんだ、内に居たのか。
德右　いえ、たつた今歸つて來て、何も樣子は知らないが、わしに免じて勘辨しなさい。
ト是にて兩人顏見合あつて思入、
傳次　仕方がねえ、折角御亭主の挨拶だから、しにくい所だが了簡しようよ。
九助　そのかはり二人へ、よいのを一升貸してくんねえ。
德右　僅一升や五合は貸して上げてもいゝけれど、おまへ方へ貸して上げると、叉外の中間衆が借りに

來た時斷れず、それを器用についであげればいくら貸しても切りのないわけ、それでお斷り申すのだ、然し二人共言出してまさか只も歸れまい、斯うしませう、一升は貸されないから、そこでいつぱいづゝ呑んで行きなさい。

傳次　流石は伊丹屋の亭主だ、さう譯道をつけて言はれちやア、たつて借りて行かうとも言はれねえ。ナア九助。

九助　さうよ、爰で呑んでも身にならねえが、仕方がねえ、それじやア五合ばかりついでくんねえ。

善兵　身になるほど呑まれてたまるものか。

傳次
九助　何だと。

善兵　いえなに、呑みくちのよいのを上げませう。（ト五合升へ半分づゝついで遣る。）

傳次　たゞだと思つて、つぎが悪いぜ。（ト兩人升の隅から酒を呑みながら、）

九助　小僧、立つて居ねえで、香々でも持つて來てくれろ。

丁稚　ぜいたくなことを言はないで、そこにある生味噌でもなめねえ。

傳次　失禮なことを言ふな、裝こそ看板一枚だが、年中口が奢つて居るから、それで錢が持てねえのだ。

善兵　錢を持たずに只酒を呑みなさるとは、奢つた方は違つたものだ。

徳右　コレ、よけいなことをいはずとそこらを片附けてしまへ。

善兵　ヘイ、（ト下手の桶にて洗ひものをし初める、丁稚は竹ばうきを持ち四邊を掃きにかゝる）、

徳右　コレ三太、氣をつけて掃けよ。

丁稚　ハイ。（ト下手を掃く、此内兩人酒を呑んでしまひ、もつとつけて貰ひたき思入、徳右衛門見て、）

徳右　商人の見世は日暮になると、ごた／＼してならぬから、酒を呑んだら早く歸りなさい。

傳次　もう一杯づゝ呑みてえが、邪魔になつちやァ氣の毒だから、そろ／＼と出かけようか。

九助　あの若い衆に押借りだと、難癖を附けられたので、ツイ尻が長くなり、

傳次　烟草を粉までふかしてしまつた。

九助　旦那烟草を買ふから、十六文おくんなせえ。（ト徳右衛門釣錢の錢をぬき、）

徳右　そらよ。（ト青錢を四ツ出す。）

傳次　とてもの事に二人前貰ひてえ。

徳右　不足ならよせ。（ト引込ますを、九助引ッたくり、）

九助　くれざァ是でまけてやらう。（ト兩人ひよろ／＼としながら下手へ來て、）

傳次　たつた十六文ばかり、

九助
傳次　しみツたれめ。
　ト飴屋の鳴物になり、兩人ひよろ〳〵しながら下手へはひろ、此内善兵衛、丁稚は二重へ上り、
善兵　とんだ奴が舞込んで、とう〳〵五合吞倒された。
徳右　酒屋料理屋その外の、喰もの生業の見世へ掛り、ごた〳〵しては厭がらせ、わづかな物をゆすつて行くとは、いやなやつもあるものだ。
丁稚　あんなものに一合でも貸してやつては徳利まで、ツイに返つたことがない。
徳右　返らぬといへば、善兵衛悴はまだ歸らぬか。
善兵　昨晩小石川の御別家に、御法談がござりまして、お泊りなされましてござりまする。
徳右　何の法談かわしは知らぬが、泊つたにしてももう日暮、疾に歸らねばならぬ筈だに、出ると內へ歸るを恐れ、よい氣になつて遊び歩くが、どこへ行つて居るか知らん。
丁稚　大方新宿でござりませう。
善兵　コレサ、よけいなことを。
丁稚　なに、大方御親類で、何かお話しがあるのでござりませう。
徳右　どうでろくな話しではあるまい。ドレ、帳合をして置かうか。

ト帳場格子の内へはひり、帳合なして居る、けいこ唄になり、花道より前幕の徳太郎羽織着流し酒に醉ひし思入、これを丹次郎の弟連立ち介抱しながら出て來り、花道にて、

徳太　よく早速來てくれた、それぢやアお父さんは、昨晩寐ずにゐなすつたとか。

丹次　よい鹽梅に此頃は、辛抱をする氣になり、久しく内を明けぬからおそくも歸つて來るだらうと、お待ちなすつてゞござりました。

徳太　所を一晩明けたから、是から内へ歸つたら、又親仁の小言だらう。

丹次　どうでお小言はござりますが、お母さんがよいやうにお執成しをいたしますが、こんなにお醉ひなさらねばよいに。

徳太　醉ひでもしなくつては歸られぬ。（トひよろ〳〵しながら兩人ぶたいへ來り、徳太郎わざと言葉強く）親仁は、奥か見世か。

丹次　見世においでなされまする。

徳太　南無三、それではは ひられぬ。（ト行掛けるを、丹次郎むりに引留め）

丹次　ハテまア、お這入りなされませ。

ト徳太郎を二重の方へ引張つて來る、是にて是非なく二重へ上り、眞中へ住ふ。

善兵　これは若旦那さま、お帰りでござりますか。

徳太　おゝ、今帰つた。（ト徳右衛門前へ出て、）

徳右　徳太郎帰つたか。

徳太　大きに遅くなりました。

徳右　コレ悴、きのふ四ツ谷へ葬式に行つて、今までどこへ行つてをつた。

徳太　へイ、私は、（ト言ひかけるを、）

善兵　小石川の御別家に御法談がござりまして、それへおいでなさいましたのでござりますか。

ト思入にて言ふ。

徳太　なに、小石川へ行きはしない。

善兵　いえ、それでも人をお遣はしなさいましたらう。

徳右　どこから人をよこしたのだ。

善兵　いえ、あの人に誘はれて、御法談を聞きにおいでなさいましたか。

徳太　わしは御法談などは大嫌ひだ。

丁稚　清元はお好きでござりませう。

丹次　コレ、（ト押へる。丁稚口を押へて跡へ退る。）

徳右　コレ徳太郎、手前にはとつくり言聞すことがあるから、しつかり致せ。

徳太　それはあんまり聞度くござりません。

徳右　聞きたくなくも、言はずには置かれぬぞ。

丹次　アヽモシおとつさん、爰は見世先きで人立がしますから、二階へおいでなされませ。

徳太　同じ二階へ上るのでも、内とは大した違ひだなア。

徳右　それはどこの二階だ。

徳太　どこだか當て御覽なさい。

徳右　知るまいと思つて、親を馬鹿にしをるな。（ト立ちかゝるを留め、）

善兵　まア〳〵お待ちなされませ。

徳太　いえ、なか〳〵馬鹿には致しませぬが、全體あなたが、

丹次　ハテまア、おいでなされませ。

ト丹次郎、善兵衞兩人にて徳太郎を引張り、奥へ連れてはひる。跡に徳右衞門困つたものだといふ思入あつて、

徳右　親に似ぬ子は鬼のやうにいふのも愚痴か知らぬけれど、この徳右衛門は若い時から生業向の損益を見るのが何より面白く、何にも道樂をした事なく小供を大事に育てたが、誰を見習つて德太郎は放埒ものになりをつたか、アヽいふ悴の出來たのは自然此家の傾くしるし、打捨ておいては御先祖のお位牌へ濟まぬゆゑ、とつくり小言を言はねばならぬ。（ト此内丁稚下手に聞いて居て、）

丁稚　なるほどお内が酒屋だけ、とつくりお小言は御尤もだ。

徳右　えゝ、小僧までが馬鹿にしをるか。

丁稚　いえ、左樣ではござりませんが、ぜんたい若旦那が、（ト言ひながら側へ寄るを、）

徳右　えゝ、口出しいたすな。（ト天窓を打つを道具替りの知らせ、）にツくいやつめが。

ト奧と小僧へかけていふ思入、時の鐘けいこ唄にて道具廻る。

（二階の場）――本舞臺上手一間の床の間、次に三尺地袋違ひ棚、跡一面中窓の半障子、此裾通り茶壁、上手折廻し一間の障子家體、下手いつもの所上下へ小壁をとりし荒き格子の境界、此外に頑丈なる階子の上り口、此向う明けはなしの家體、正面茶壁、すつと上下同じ壁の張物にて見切り、總て伊丹屋二階座敷の體。よき所に行燈を點し、以前の德太郎住ひ、下手に丹次郎德太郎の羽織を疊んで居る、

此見得しつくりした合方にて道具留ると、徳太郎目をこすりながら、

徳太　折角面白い夢を、肝腎な所で起された。

丹次　それはいけない事をいたしました、さうしてお酒の醉は、少しはおさめなされましたか。

徳太　(やはり半醉の思入にて、)何だか二階がぐる〳〵廻り、そなたの顔が三ツばかりに見えるやうだ。

丹次　それではまだ醉つておいでだが、どんな夢を御覧なされました。

徳太　こんな夢だと話した所が、面白いといふ事を知らぬものが聞いたとて、所詮わかることでない。

丹次　面白いこと位は、私にもわかります。

徳太　そりや一通りの面白いは知つても居ようが、どうして〳〵ほんとうにしんから底からしみ〴〵面白いといふことは、まだおぬしにはわかるまい。

丹次　それはどんなことでござります。

徳太　聞いても無駄だから、止すがよい。

丹次　そんな事をおつしやらずと、お話しなされて下さいまし。

徳太　それではわしが教へて遣るから、まづ女郎を買つて見るがいゝ。こんな面白いものはない。それを此間おつかさんとおぬしが異見で、一ト月餘り足を拔いてしんぼうしたが、きのふ仲間の葬式

で四ツ谷までいつたのでちよつとお辰の顔が見たく、新宿へ行つた所、久しぶりゆゑ是までの積る話しに夜を更かし、泊る氣もなくつい泊り、今朝早く歸つたが何だか内へ歸りにくゝ、髪結床の親方を誘つて湯嶋でいつぱいやり、内の樣子が聞きたいからそなたを迎ひによこしたが、案の定親仁の腹立、今夜も大方極り文句の面白くない小言だらう、義理をかくのも言ふに言はれぬ面白いことがあるからだ、一晩一緒に行くがよい、わしがよいのを見立てやらう。

丹次　まだ子供同樣な、私などが新宿なぞへ、參りましては濟みませぬ。

德太　自分は子供同樣に思つて居ても年頃ゆゑ、そなた位の柄があれば、人が子供にはしないから、今度わしが行く時に、一緒に行つて遊ぶがよい。

丹次　今度行くとおつしやるが、どうぞ新宿へおいでなさるを、當分お止め下さいまし。

德太　遊びの味を覺えぬ内は、是だから話せない。

ト此内よき程に階子の口より前幕のおつぎ、着流し商人の女房のこしらへにて出かゝり、此時前へ出て、

つぎ　どうで此子は話せぬから、いくら遊びをお勸めでも、所詮無駄でござります。

トよき所へ住ふ。德太郎びつくりしてかしこまり、

德太　是はおつかさん、いつの間においでなされました。

つぎ　今方二階へ上つて來ました。

德太　それでは今の常談を、

つぎ　聞いて居ました。

德太　それは面目次第もない。（ト合方になり、おつぎ思入。）

つぎ　常談かは知りませぬが、いかに面白いことがあるとて、義理を缺いても新宿へ遊びに行くとは情ない、おまへにいくら異見をしても只の一度もきかぬゆゑ、先頃あれほど辰巳屋のお辰どのに譯を話し、くれぐ〲賴んで置いたのに、なぜ昨夜歸してくれぬか、見た所ではしとやか、隨分物の理もわかり、末賴母しいと思つたに、わたしまでをだますとはいかに勤めの習ひでも、あんまり薄情者、ほんに女郎などゝいふものは、賴みがひのないものじやなア。（ト悔しきこなし、德太郎思入。）

德太　いや〱それはさうでない、昨夜は酒にひどく醉ひ、實はあんまり夜が更けて今から歸すは物騷だから、餘儀なくお留め申しますがおつかさまへ濟まぬから、あすは早くお歸りなされと寐ると間もなく東がしらみ、櫺子へちよつと日がさすと、むつくり起きてかへれ〱と追出すやうにお辰が言ふゆゑ、よんどころなく歸つたのだ、お辰が留めればもう一日ぶん流して、迎ひ酒に藝者

を上げて遊ぶのだが、おそらく女郎でお辰位、義理の堅いものはない。

つぎ　お辰どのがそれほど義理の堅いを、おまへは何と思はしやんす。

德太　別に何とも思ひませんが、たゞ感心だと思ひます。

つぎ　義理がたいのを感心だと、氣の附くお前がなんでまた、義理を缺いても遊びにお出でだ。

德太　や。

つぎ　それでは口と心とが、丸で違ふではござんせぬか。

德太　むゝ、（トうつむく。）

つぎ　うるさいとお思ひだらうが、今わたしのいふ事をとつくり聞いて下さんせ。（ト合方さつぱりとなり）おまへも承知でおいでゆゑ、改め言ふには及びませぬが、元わたしはこちらのお宅へ、お前の實のおつかさんが御病氣でおいでの時分、御別家のお世話にて中働きとお針を兼ね御奉公に上つたのが、御緣となつて旦那さまが後妻になされたは御先妻の御遺言、末期の際におつしやるには、わたしが死んだら今年五ツの德太郎の世話を賴むと、おつしやる間もなくお亡なりゆゑ、それからお前を大事にかけ育てる內に此子が生れ、義理ある中の腹違ひも胤は一ツの兄弟ゆゑ、こちらに隔てる氣はなけれど何が心に叶はぬか、先頃よりの不身持に度々異見もしたなれど、三日にあ

けず内を明け、おとつさんの前もあれば女の身にて間の悪い女郎屋へ行きお辰どのに、大事いふて頼んだは、お前に辛抱させたいばつかり、定めしお辰どのからわたしの心を聞しやんしたでもあらうなれど、二人ともに好合うた深い中ゆゑ行く〳〵はどうか夫婦にしたいものと、こちらは心配して居るに、言ふに言はれぬ面白い事があるゆゑ義理をかき、遊びに行くとはどういふ譯、サそれを聞かせて下さんせ。

徳太　サア、その譯は、

丹次　是には何か兄さんに、深い御了簡がござりませう。誰も遠慮な者もなし、お隱しなさるにも及びませぬ、どうぞお明しなされませ。

徳太　サア、それは、

つぎ　義理を缺くのは、どういふわけ、

徳太　サア、

丹次　爰でわたしとおつかさんに、

つぎ　隱さずお話して下さんせ。

ト詰寄る。徳太郎困る思入、此時上手の障子を明け。以前の徳右衛門煙草盆と少し長いきせるを提げ

出て來り。

德右　いや、その譯を聞くには及ばぬ。(ト合方かはつて上手へ住ふ、德太郎見てびつくりなし、)

德太　や、おとつさん、まだお休みなされませぬか。

德右　馬鹿野郎め、そちの様な不孝な悴が、内にをつては樂々と、枕を高く寐られぬわえ。

德太　お父さん、うそばかりおつきなさる。

德右　何をおれが嘘を言つた。

德太　さつき弟に聞きましたら、昨晩私が歸りませぬゆゑ、あなたは夜通しおよらずに、起きてお出だと言ひましたが、さうして見るとわたくしが、内に居ても居ないでも、寐られないのでござりませう。

德右　こんな馬鹿でもなかつたが、一日增しに馬鹿が積み、どこまで馬鹿になるか知れぬ。

德太　二言目には馬鹿々々と、私の事をおつしやりますが、まだあなた程にはなりませぬ。

德右　それではおれも、馬鹿だといふのか。

德太　あなたばかりではござりませぬ、世間いつたい親馬鹿だと申しますではござりませぬか。

德右　その親馬鹿といはれるのも、そちがやうな悴があるから、それで世間の人が言ふのだ。たとへ何

と言はうとも公方樣の事さへも蔭では人が噂をするから、そこに頓着は少しもないが、此の伊丹屋が衰微になるを、見て居られぬはそちが不身持、去年からの新宿通ひも若いものゝありうちと最初は大目に見て居たが、夜る晝となく内を明け、とめどのない放埒も、影になり日向になり妻と弟がそちのとりなし、二人の心根を思ひやつて涙を隱し勘辨したは、是まで幾度のことか知れぬ、昨夜も出入を調べて見るに、帳尻の合はぬのも何百兩といふ高だ、なんぼ家督の惣領でも家の爲にはかへられぬ。サア、改めて此親が、勘當するからさう心得ろ。

トきつと言ふ、德太郎矢張生醉の思入にて、

德太　おとつさんのお小言は、重々御尤も千萬、まことに申譯もなき次第なれど、そこに少しばかりお話し申して見たいといふは、まづあなたがお若い時女郎買をなされまして酸いも甘いも御存じなら、ちよつとお小言をおつしやつても、色氣があるから何となく味ひがござりますが、丸で色里を御存じなく、たゞがみ／＼とやたらにお小言をおつしやるから、終には斯ういふことになり、勘當なさるあなたもつまらず、受ける私は猶つまらぬ、尤も元々私の身持が惡さに是非がないが、忰の身にもなつて御らうじませ、内にをれば明けても暮れても、おとつさんの苦い顏とおつかさんの澁い顏を見て居るばかりでつまらないが、新宿へ參りますと、美しい女郎が大勢居て、二階

へ上れば下へ置かず、若旦那よく入らつしやいましたお辰さんが待つて居ると、話しの内に酒と肴が出ると、そこへ藝者が來て面白い騷ぎになり、それが引けるとお辰と二人差向ひの床の內、是から先きが言ふに言はれぬ面白みのあるところだが、なか〳〵ちよつと話し位でその味ひはわかりませぬから、おとつさん一晩お附合ひなすつて、此味をお覺えなさると、勘當なさらないでも濟みませう。

ト始終生醉の思入にて言ふ、德右衞門あきれしこなしにて腹をたて、

德右　いゝかげんにだまされ、そちには取附きものでもして居るな。

德太　辰巳屋のおたつといふ女郎が附いて居りますが、外に何も怪しいものに、取りつかれた覺えはござりませぬ。

德右　親の前でさへ是だから、蔭ではどんな眞似をしをるか。

德太　酒さへ呑めば藝者を上げ、陽氣に浮れて女郎を買ひ、面白い眞似をいたします。

德右　さうか、今から異見も小言もいはねば、勝手な眞似をするがよい、その替り七生迄勘當をするから出てうせろ。（トきつと言ふ。）

つぎ　御尤もでござりますが、餘程の御酒を呑んだと見え、まだ醉がさめませぬから、今のはよもや本

性で申した譯ではござりますまい、御勘當をなさるのは、暫くお待ち下さりませ。

丹次　どうぞ兄さん醉をさまし、お詫をなされて下さりませ。

徳太　親に勝たうとは思はぬから、謝れといふなら詫もしようが、そのかはりお父さんに、一晩新宿へおいでなさいと、そなたから進めてくれろ。

丹次　そんな事は申されませぬ。

徳右　生醉本性たがはずと、いくら醉つて居ようとも、丸で夢中で言ひもしまい、いよ〱親の小言も聞かず、

つぎ　わたしの異見も用ひねば、佛の顔も三度とやら、おとりなしさへ出來ぬ仕儀、どうかさうなく心を改め、

丹次　今日から辛抱なさるやう、お詫をなすつて下さりませ。

徳太　辛抱しようと思つても、酒を呑むとあれの顔を、見ずにはどうも寐られませぬ。

徳右　それでは親より女郎の方が、そちはよいと思ふのか。

徳太　苦い顔のあなたより、お辰の方が美しいから、誰しもよいと思ひませう。

つぎ　（聞兼れし思入にて、）是はしたりどうしたもの、おとつさんへ對して其やうな口答へをしては濟みま

すまい。

德太 デモ有體に言はなければ。

丹次 それがお惡うございます。

德右 もうよい〳〵。サ、今言ふ通り勘當するから、たつた今出て行け。

德太 たゞ出て行けとおつしやつても、勘當の身になりましては一家親類でも置いてはくれず、賴る所がござりませぬ。

德右 それはおのれが心がらだ、身から出た錆と後悔して、どこへでも出てうせう。

德太 どこといつて當がなければ、さしづめ新宿の辰巳屋へ參らなければなりませぬが、殘らず遣つて金がないゆゑ、當分遊んで居られるだけ、せめて百兩ばかり金をお貰ひ申したうござりまする。

德右 なに、百兩くれ、途方もないことを言ふ、遊びに行く金を持たせて悴を勘當する親が、どこの國にあるものか、その百兩で思ひ出したが、今日鳴子の三河屋へ拂ひを取りに遣つた所、先月末に御子息へ百兩お渡し申しましたと、そちが書いた受取を證據に出して見せたとのこと、その金は如何いたした。

德太 其の百兩は新宿のお辰に遣らうと思ひまして、歸りに持つて參つたところ、なか〳〵義理堅い女

ゆゑその金を受けませず、早く持つてかへれといふので、そのまゝ持つて歸る途中、四ッ谷見附で落しました。

德右　なに、四ッ谷見附で落した、

德太　左樣でござります。

德右　べらぼうめ、落したところを承知して落す奴があるものか、そんな嘘をいつて隱しても、新宿通ひの放埒に遣ひ捨てたに違ひない、遣ふことばかり覺えをつて、稼ぐことを知らぬからそちは何とも思はぬが、百兩といふ大金が容易な事で儲かるものか、まだ此上に百兩くれと、よくづうづうしく言はれたものだ、嘸やあの世でお袋がくやし淚にくれて居よう、なんでこんな子が出來たか、おのれはこの家をつぶしに出たか。（ト悔しき思入にて、德太郎を引附け、持つたる長ぎせるで打すゑ、）不孝ものめが。（ト突放す。德太郎痛いといふ思入にて、）

德太　斯う色氣なく打たれては、いつも別れのきぬ〴〵に、背中をたゝかれるよりは、よつぽど痛い。

德右　まだそんなことを言ふか。

ト立ちかゝるを、おつぎ丹次郎捨ぜりふにて留める、爰へ階子の口より以前の善兵衞に下女附いて出て來り、德右衞門をとめて、

善兵　旦那の御立腹は御尤もでござりますが、
下女　おかみさんにお預けなされて、下へおいでなされませ。
德右　手前達の知つたことではない、留めずと下へ行つて居ろ。
善兵　參ることはまゐりますが、長崎屋の番頭さんが、あなたに御相談があると申して、今見世へおいでなされました。
德右　留守だといつて歸せばよいに、氣の利かぬやつだ。
善兵　ホイ、とんだお小言のお相伴だ。
下女　若旦那さまのお相伴なら、わたしやお小言でも何でも聞きます。
つぎ　アヽコレ、もう四ツを打つたゆゑ、下へ行つて早く休みや。
下女　はい、（ト跡へ退る。）
德右　サア、もう一時も置かれぬから、たつた今出て行け、行かすばおれが、（ト立ちかゝろをとめて、）
善兵　まアノ＼下へ、
下女
善兵　おいでなされませ。
ト善兵衞と下女とにて德右衞門をむりに連れて階子の口へはひろ。此内德太郎横になり、煙草を呑ん

て居る。おつぎ丹次郎ほつと思入あつて、徳太郎の左右へすり寄り、

つぎ　コレ徳太郎、今までの放埒は過ぎしことゆゑ是非なけれど、是から心を改めて家業の道に精を出し。せめて一年半年でも辛抱をして、おとつさんが御安心をなさるやう身持を直して下さんせ。おまへが勘當になる時は、わたしが産んだ此の丹次郎が跡をつがねばなりませぬ、それでは死んだお前の母御へ、わたしがどうも濟みませぬ。

丹次　弟の私がこんなことを申しましたらお氣にさはるか存じませぬが、繼子ゆゑに母が憎み少しの事を御大層におとつさんへ告口して、勘當させて此家をわたくしに嗣がせる巧みなどゝ世間の人の口の端に、掛りますれば二人とも此家の内には居られませぬ、さうなる時はおとつさんに、御難儀掛けねばなりませぬ。

つぎ　爰の道理を汲みわけて、此伊丹屋を大事と思はゞ、

丹次　今からお心入れかへて、

つぎ　ちつとの間辛抱を、

丹次　どうぞなされて下さりませ。

ト此内徳太郎寐てしまふゆゑ、兩人顏見合せ本意なきこなし。

つぎ　何を言うても高いびき、これ程までに生根の替るも誰ゆゑぞ、
丹次　皆新宿のお辰どのゆゑ、
つぎ　憎むまいとは思へども、
丹次　つい恨まねばなりませぬ。
つぎ　とはいふもの、、是もみな、
丹次　見世で商ふ元は酒ゆゑ、
つぎ　なるほど人の言ふ通り、
丹次　氣違ひ水とは、
つぎ　よく言うた。(ト突いて居た煙管を放すを、道具替りの知らせ、)
ト兩人歎息のこなし、合方にて道具廻る。

(堀端の場)――本舞臺うしろ一面跡へ下げて石垣の張物、此上より所々に振よき枝垂の松を出し、此の裾通り後を少し上げてお堀の水を書き割りし布を前へ張出し、此の見切り低き上手板、所々に捨石、ずつと上下石垣の張物にて見切り、總て代官町堀端の體、水の音にて道具留ると本釣鐘すごみやうの合方になり、花道より前幕の富藏、着流し好みのこしらへ、細引を風呂敷に包みて、是れを脊

負ひ、跡より藤十郎着流し、黒ちりめんの頭巾、大小にて、前後へ氣を配りながら出て來り、花道にて、

富藏　よい鹽梅に爰まで來るうち、一人も人に逢はなんだ。

藤十　人には逢はぬが時々に、鳥の羽音でおどされた。

富藏　その筈さ、爰らは江戸中の烏の巣だ。

藤十　烏はよいが鵜の目鷹の目、よく氣を附けてやつてくれ。

富藏　なに、烏は夜目が利きやアしません。

藤十　違えねえ。（ト兩人舞臺へ來り、四邊を見廻し、）

富藏　まだ早いと思つたら、丁度よかつた。

藤十　今打つたのは九ツだな。

富藏　これからが仕事の時刻、肚胸をすゑてゆつくりと、一服やつて掛りませう。

ト包みをおろし、兩人捨石へ腰をかけ、富藏叺煙草入より摺火打を出し、煙草を附けろ、是にて兩人煙草を呑みながら、

今夜で爰へ十度の餘も、忍び込むのに見咎められぬは、お前さんもわつちも運がいゝのだ、まだ

そればかりでなく運強いは、先月四ツ谷の御門外で、思はずわつちが拾つた百兩、たしかあの晩その金は、おまへさんが附けて來た酒屋の息子が落した金、斯う幸先のよい時は、きつと旨く行きますぜ。

藤十　いつか新宿の辰巳屋からあいつが金を持つて歸るを、ちよつと見たので惡心が出たのも元はお辰を張合ひ、向うへ取られて悔しいから、その意趣ばらしにおどして取らうと思つた所をおぬしの意見で、一旦止めたも緣があるのか、あの金ゆゑに當座を繕ひ、遣ひ込みの尻尾も見せず、斯うも運よく行くものか。

富藏　わつちも毎晩生業に出るつもりでは辻番へ、いつぱい吞まして荷を預け、すつかり錠の鍵をこしらへ、今夜斯うして本望を遂げることになつたのも、あの金があつたからだ。

藤十　今思ふとあの金は、おぬしとおれと二人に授つて居たに違えねえ、その又金が元手になり、爰まで運よくやつて來れば、まだ此の上に大した金が、きつと二人にさづかるだらう。

富藏　さづからなけりやアつまらねえが、お前さんも慾の方は、このお堀よりよつぽど深いね。

藤十　おれの慾の深いより、おぬしの巧みの深いには、今度は實に感心した。

富藏　別に巧みも仕組みもねえが、盜人をするだけが、わつちの持前でござへます。

藤十　何にしろ、此の石垣をのぼるのがむづかしい。

富蔵　わつちが先きへ上へのぼり、細引を下げるから、それを腰に結び附け、大丈夫にして上りなさい。

藤十　合點だ。（ト此時上手にて、）

○　火の廻り〱。

ト棒の音するゆゑ、兩人びつくりして下に居て、隱れる思入、また下手にて、

火の廻り〱。

ト棒の音二三度あつて止む、是にて兩人起上り四邊を見て、富蔵細引を出してしらべ、風呂敷包みを直しながら、

富蔵　跡の廻りは、これから半時、

藤十　その間を覗つて、ちつとも早く、

富蔵　忍び込むのが一ツの仕事、

藤十　二人で首尾よく御金藏へ、

富蔵　這入れば金を持てるだけ、

藤十　かつぎ出したらこつちのもの。

富藏　ドレ、わつちが先きへ、(ト包みを脊負ふを道具替りの知らせ、)やツつけよう。

ト尻をはしをりきつとなる、藤十郎も身支度する思入、草笛の合方、水の音にて道具まはる。

(伊丹屋二階の場)――本舞臺元の二階の道具、以前の徳太郎枕をして掻卷を引掛け寐て居る、合方あんま笛にて道具留まる。と階子の口より、以前の下女箱入りの油さしを提げ出て來り、

下女　宵にあんまり居睡りを身にしみてしたせゐか、ツイにない目がさめて、手水に起きたらおかみさんに油の御用をいひつけられたが、もう何時だ知らん。(ト行燈へ油をさし、)こんなに油が減つて居るから、何でも夜更に違ひない。(ト徳太郎を見て、)昨夜のお勞れと見えて、よくおよつておいでなさる、寐顔でさへもほれ〴〵と女に好かれる若旦那が、お金を持つてお遊びに、おいでなされば女郎衆が、歸さないのも無理はないねえ。

ト此時徳太郎目をさまし、横になつたまゝ、

徳太　誰だそこに居るのは、大きなものへ水をいつぱいくれ。

下女　おや、お目がさめましたか、只今持つて參ります。

徳太　(四邊を見て、)イヨウ、辰巳屋かと思つたら、爰は内の二階だな。

下女　さやうでござります。

德太　女の聲にお辰かと、目がさめて見たら大違ひだ。

下女　何がそんなに違ひますえ。

德太　何でもいゝから、早く水を吞ましてくれろ。

下女　そんなにお急ぎなさるなら、水澤山な私を。（ト傍へ寄添ふ。）

德太　えゝ、早く下へ行かないか。（ト起上りながら突放す。）

下女　ほんに邪慳な若旦那、今お冷を上げますから、およらずにおいでなさいよ。

トいやらしきこなしにて、油さしを提げ、階子の口へはひる、跡に德太郎醉のさめし思入にて、

德太　不孝と知りつゝ身を持崩し、酒を吞み女郎を買ひ、どうした緣かあのお辰と、深い中になつたゆゑ、是をしほに隱居をして、五ツの年から世話になつた養母が實子の丹次郎へ、此家督を讓りたいと、思へど死んだお袋へ義理を立て得心せず、親仁が今のお袋へ同じやうに義理を立て勘當するといふのも尤も、儘にならぬが浮世といへど、何かよい思案がありさうなものだなア。

ト合方きつぱりとなり、階子の口より丹次郎盆へ水指と湯吞を載せ持つて出て來り、

丹次　兄さん、お目がさめましたか、おひやを持つて參りました。

徳太　醉ざめの水とは氣が利いて居るな、早速いつぱい貰はうか。（ト丹次郎水をついで出し、）
丹次　澤山お上りなされませ。
徳太　見ても旨さうだ。（ト半分ほど呑んで、）あゝ甘露々々酒呑の口くせだが、此の味ばかりは下戸は知るまい。（トぐつと呑干し、）アヽ旨い〳〵、もう一ぱい貰ひたい。（ト出す、）
丹次　畏りました。（ト又水をついで出し、）兄さん、醉がさめましたか。
徳太　今とろ〳〵と寐たので、少し醉がさめたやうだ。（ト水を呑み居る。上手より以前のおつぎ出て來り、）
つぎ　醉がさめたら又わたしが、言はねばならぬことがある。（ト上手へ住ふ。徳太郎思入、）
徳太　いえ、まださめかゝりでござりますから、あまり何かおつしやると、またカツとして持越しの醉が出るかも知れませぬ。
つぎ　なんぼ言ふなとおいひでも、わたしがだまつて居られぬは、さつき言つたおまへの詞、なぜあのやうにおとつさんへ口ごたへをしなさんした、親へ對して自慢さうに自分の身持放埒を竝べ立た揚句の果、お金を呉れとは何事ぞ。たとへ勘當なさるとあつても、お詫をするのが親子の情合、酒の上とはいひながらあんまりな言ひ過し、わたしが是からお詫をするゆゑ、一ッの趣意を立てなさんせ。

徳太　そうして趣意とおつしやるのは。

つぎ　おまへの心の狂ふのも、畢竟酒が過ぎるから、是はわたしが頼みゆゑ、何卒心を改めて禁酒して下さんせ。

徳太　折角あなたのおたのみだが、どうも酒は斷たれませぬ。

丹次　酒のよくないその人が、禁酒をするのは世間にありうち、それをなんで兄さんには、斷たれないとおつしやいます。

徳太　いくら止めようと思つても、生業が酒屋ゆゑ、ぷんと匂ひをかぐ時はつい呑みたくなり、利酒の猪口で三ツ四ツ呑むのがはじまり、それから二合が五合とうなぎのぼりに小料理茶屋、一人は淋しく藝者を呼び、意氣な端唄や都々一の心いきからおもひだし、そこから駕籠で新宿へいつも行く氣になりますが、此病ひの根といふは見世で商ふ酒なれば、惡いと知れど生業だけ止めることが出來ぬ、そこでよく／＼考へますと、わたしが家督をつぐ時は末は大きな身代を呑みつぶすかも知れませぬ、それゆゑ跡は丹次郎、そなたがついでくれるがよい。（ト双方へかけて言ふ。）

丹次　いえ／＼なんとおつしやつても、兄さんのあるにそれをさし越し、どうして弟の私が、此家の跡をつがれませう。

つぎ　コリヤ悴のいふ通り、たとへおまへの賴みでもわたしが產んだ丹次郎に、此家の家督を立てさせては、御恩になつたお上さまへ、わたしが義理が立ちませぬ。（トきつといふ、德太郎思入あつて、）

德太　それほどまでに、（トほろりとなし、氣をかへ、）以前の恩をお忘れなく、身持だじやくな此わしを家督にしたいと思し召すは、淚の出るほど嬉しいが、わしが家をつぐ時は數代つゞきし伊丹屋の、家をつぶさにやならぬから、恩になつた家を思はゞ、どうぞわしを隱居させ、コレそなたが跡をついでくれ、是は兄が一生の賴みだ。

丹次　親なき後は兄は親ゆゑ、是までついにお詞をそむいたことはござりませぬが、これはツかりは背きまする。（ト泣伏す、おつぎ尤もだといふ思入あつて、）

つぎ　おゝ丹次郎よく言うた、母もそなたと一ツ心、いくら弟へ迫るとも、

丹次　外のことゝ違ふゆゑ、

つぎ　是ばツかりは、

兩人　聞かれませぬ。

トきつばり言ふ、此時上手の障子を明け、以前の德右衛門愁ひい思入にて出て來り、

德右　二人とも、もう何にも言ふな。（ト眞中へ住ふ。）

つぎ　すりや、あなたには、最前から、

丹次　聞いておいでなされましたか。

德右　樣子はあれで殘らず聞いた。

德太　又お小言でござりますか。

德右　いやもう、そちに小言は言はぬ。

德太　お小言がお止めなら、早くおよればよろしいに。

德右　おれも起きて居たくもないが、目は睡つても樂々と寐られぬ因果な德右衞門、それに連添ふ女房が貞節、又次男の丹次郎は兄と違つて孝心厚く、今まで二人の心を聞き思はず袖を濡らせしぞ。

ト泣く、おつぎ思入あつて、

つぎ　勿體ないことおつしやりませ、私こそ御當家の厚い御恩になりましたは、詞に申しつくされませぬ。

丹次　まだ御恩返しも私には、いたすことが出來ませぬから、せめておとつさんや兄さんへ、孝行するのはあたりまへ。

德右　さう思つてくれる此親の、身の成立を三人とも睡くもあらうが聞いてくれろ。（トかはつた合方に

なり、」何を隱さう此のおれは、元この見世へ若い折樽拾ひに來た奉公人、御主大事と正直に御奉公を勤めたが大旦那のお目に留り、家の娘のそちが母おたよが聟に引上げられ、家督をつぎし德右衞門、なるほど德太郎がいふ通り女郎買をしたことなく、まだ吉原の大門はどつちを向いて居ることか白髮交りになるまでに、只の一度も惡所場へ立寄つたことのない野暮な產れに、商賣が何より好で稼いだゆゑ、御先代から讓られた地所は其儘我になつても、又四五ケ所もふやせしは奢りを禁じ節儉を第一に守りしゆゑ、德太郎は惣領なり此家に大事の血統なれば家督を讓るは當然なれど、大酒を好み放蕩をいたす上は是非がない、最前言つた勘當もしたい事はなけれども、家の爲にはかへられぬ。サア心を改め禁酒なし、家督をつぐかそれとも又勘當受けてもしんぼう出來ぬか、二ツに一ツの挨拶いたせ。

ト德右衞門思入にてなんどりと言ふ、德太郎じつとこなしあつて氣をかへ、

德太　その御挨拶は、どうあつても酒ばかりは斷たれませぬ、それゆゑどうぞ此の家督は、酒嫌ひな丹次郎へお讓りなされて下さりませ。

德右　そなたがさういふ心なら、弟へ讓らにやならぬけれど、死んだおたよへ義理をたて、よも得心はいたすまい。

つぎ　そのことばかりはどのやうに、おつしやりますとも此家の、

丹次　家督になるは私も、おつかさんも不承知ゆゑ、

つぎ　現在徳太郎の頼みでも、

丹次　御免なされて、

兩人　下さりませ。

徳右　それ見ろこの通りだ、さうして見ると此家は夫婦養子でも入れざれば、つぶして仕舞はにやならぬゆゑ、それを他家から貰ふにしても實子があるに養子をするは、へんな譯と不審を打たれ、容易に世話のしてもあるまい、茲に至ると御先祖へ濟まぬけれど伊丹屋を、おれが代につぶさにやならぬ、親兄弟に難儀を掛けるも又安心をさせるのも、そなたが一ツの了簡だ、悪いことは言はぬから禁酒をなして改心せよ。

ト徳太郎困る思入にて、わざと生醉の思入になり、

徳太　持越し酒の醉が出て、何をおつしやるかわかりませぬが、酒ばかりは止められませぬ。

つぎ　そりやおとつさんが是ほどに、おつしやることがわからぬとか。

丹次　いかにお心が狂へばとて、テモあんまりなそのお詞。

德右　スリヤどうあつても止められぬか。

德太　酒屋に止めろといふのは無理だ、ハヽヽヽ。（ト笑ひに紛らし、生醉の思入にて倒れる。）

つぎ　こりや本氣の沙汰ではござりますまい。

丹次　どうか仕樣はござりませぬか。

德右　實におれもあきれかへつた。

つぎ　旦那さま、

德右　はてさて困つた、（ト腕組をするを道具替りの知らせ、）ことだなア。

ト三人當惑の思入、合方にて道具廻る。

（藤岡内の場）――本舞臺三間の常足、廻しいつぱいに前へ出し、向う眞中に三尺の床の間、此上手地袋違ひ棚、二枚引の障子下手唐紙の張壁竹格子中窓の棲、上手附家體の所跡へ下げて一間茸おろしの臺所、此内に竈、誂への水瓶、其外勝手道具よろしく、下手いつもの所板家根の門口、生垣のへだて此外古びたる寺の門、練塀の見切り、すつと上手、低き建仁寺垣の上より隣りの家根を見たる張物にて見切り、二重へ緣付の疊を敷詰め、此内一疊上げる誂へ、行燈を灯し、側に風呂敷に包みし金箱をすゑ、總て寺門前藤岡住居の體、臺所に以前の富藏今歸りし心にて雜巾で足を拭ひ居る、藤十郎は火鉢

の火なかき起して居る、此の見得木魚入りの合方にて、道具留る。

富藏　隣の寺ぢやァ夜中ぽく／＼やつて居ますか。

藤十　和尚が老年で寐られぬと見え、八ツを打つと初めるのだ。

富藏　慣れたらどうか知りませんが、耳について厭なものだ。

藤十　そのかはりよいことには、賊の用心に奇妙だ。

富藏　その用心はこつちの敵藥だ。

藤十　いかさま、是はさうであつた。

ト此内富藏足を拭ひ、下手へ住ひ小壁にて、

富藏　旨くいつたじやァござりませんか。

藤十　實にこりやァおぬしのお蔭だ。

富藏　此間からたび／＼忍び、二重締りの錠前を、釣鐘黑土で形をとり同じ錠と鍵を拵へ、その鍵を土臺にしてすつかり合して來たおかげ、今夜はなんなく手に入つたが、是までにするにやァ、忘れもしねえ、十二度忍び込んだ。

藤十　容易に人の行かれねえ嚴重なところを、十二度も忍び込むにやァ、大した肚胸がなけりやァとても行

かねえ仕事だ、まづ無難にいつて安心した。
富藏 おめへさんも重かつたらうに、慾といふものは豪氣なものだ。
藤十 初めはさうでもなかつたが、持重りがして神樂坂で、どうしようかと思つた。
富藏 それより課役の廻りを見附け、薪屋の蔭へ隱れた時は、どつきり胸へこたへました。
藤十 もう内へ持込んで來れば、隣り知らずの寺門前、どこへ氣づかふところもないから、おぬしも安心するがいゝ。
富藏 (思入あつて、)シテ御新造は、どうなされました。
藤十 丁度もつけの幸ひは、里のお袋が大病ゆゑ、病氣見舞に夜伽を兼ね、二三日泊つて來るがいゝと下女を附けて里方へ、晝から女房は行つてしまつた。
富藏 そりやアよい都合でした、たしかこちらは一軒建で、うしろは寺の土塀だから、何も憚る事はねえが、隣りの内は何者だね。
藤十 隣か、隣は聾の女隱居で、こんな事にやアうつてつけだ。
富藏 それぢやアどこも大丈夫だ、まづ斯う安心をして置いて、早速わつちが聞きてえのは、お前さん此金を、これからどうする了簡だ。

藤十　どうといつて約束通り、いくらあるか箱をこはし、二ツ山にわける氣だ。
富藏　ヘエヽ、それぢやァ直に此金を遣ひなさるつもりかえ。
藤十　それは言はずと知れたこと、まづ此金で辰巳屋の、お辰を直に受出して、近所へ圍つておくつもりだ。
富藏　（思入あつて、）是だから素人は怖い。
藤十　え、
富藏　もし、そんな素人了簡では、直に足がつきますぜ。
藤十　ムヽ、さうしてこなたはどうする氣だ。
富藏　わつちの了簡は、此金を、（ト四邊を見廻し、）當分二朱も遣はぬ氣だ。
藤十　なに、遣はぬとは、
富藏　盜人をする者の、茲が祕密でござへます。（ト合方かはつて、）まづわつちの了簡は、箱をこはして椽の下へ瓶を埋けて、その中へ金を入れてうづめておき、こはした箱は焚いてしまひ、不斷貧乏なら貧乏でやつぱり質屋へ質を置き、金に困るふりをして、どこまでも苦しがりで辛抱をしておいでなせへ、わつちも又その通り是から毎日荷を擔ぎ、おでん燗酒を賣りながら世間の噂を聞

く積りだ。その内にやァどうかすると、天變といふかはりものがしねえとも言はれません、いつかのやうに富士の山が流れ出したつなみの騷ぎ、それでなけりやァ嵐か洪水、何でも世界がどうかしてひつくり返るやうな大騷動が、あつたらそれこそしめたものだ。然しこりやァ當にはならぬが、日柄もたつてほとぼりの冷めた時分にこつそり掘出し、こいつを銀と取換へて遣ひやうにも祕傳があります、そりやアゆつくり傳授をしませう。（ト思入にて言ふ、藤十郎感心のこなし）

藤十　成程おぬしに言はれて見りやァ、今夜手に入る此金は、うつかり一兩も遣へぬ譯だ、おれも今の意見を守り當分しんぼうして居よう、何をいふにもこつちはまだ盜みをしたは初めてゆゑ、いはば駈出しの素人だが、そつちは腕に入墨の黑人だけにぬかりがねえ、爰らが數年の功だなア。

富藏　よいことなら褒められると惡い心持はしねえものだが、盜人ばかりは功がつんでも、あんまり自慢も出來ませんのさ。

藤十　假令盜人でも功がつむにやァ、なか／＼容易なことぢやァあるめえ。然し盜みを覺えたら、こんな重寶なことはあるまい。

富藏　重寶だと思つてたび／＼やると、此重寶な首が飛びます。

藤十　それせへなけりやァ極いゝが、

富藏　首を元手にした日にやア、

藤十　やつぱりしちやア合はねえ盜人て

富藏　それがわつちに備はるとは、

藤十　産れつきとはいふもの、、

富藏　因果なことぢやアございませんか。

ト此時藤十郎富藏を殺さうといふ心にて、刀を拔きかける、刄の光りに此方を見て、

富藏　旦那、何をなさるのだ。

藤十　ム、、これは、（ト刀を鞘へ納める。）

富藏　見りやア刀を拔きかけて、此の富藏を切る氣だね。（ト藤十郎思入あつて、）

藤十　あんまり肚胸がよすぎるので、實は手前がこはいから、

富藏　それでわつちを切りなさるのか。

藤十　おゝ首を貰つた、覺悟しろ。（ト拔打に切つてかゝるを、身をかはして、）

富藏　そんなことぢやア首は切れねえ。

藤十　なに。切れぬことがあるものか。

ト又切つてかゝる、富藏有合ふ物を投附け、藤十郎のひろむ所を金箱で刀を押へ、此上へ乘り兩人きつと見得、

富藏　おれの親仁がその以前、おめへの親御に助けられたこつちは恩を忘れずに、命掛けな今夜の仕事おれが口から暴れようかと、それを怖がり殺さうとは、天理にかけた盜人でも、あんまり義理を知らねえわけだ、あすが日御用にならうとも石を抱いても言はねえ氣だ、それをあやぶみ殺すなら、サアすつぱりと切りなせへ、首が落ちりやア喉笛へ喰へつくからさう思へ。

ト藤十郎所詮及ばぬといふ思入あつて、

藤十　今こなたを切らうとしたのは、實は心を引いて見たのだ、武士も及ばぬ丈夫な魂、疑つたのはおれが誤り、コレ手をついて詫びるから、富藏どうぞ堪忍してくれ。（ト藤十郎手を突き詫びる、）

富藏　盜んだ金を山分けに持つて行かうといつたらば、殺してたんまり取るもいゝが、金はそつくり預けて置くに、何が不足で殺すのか、こんなわからねえことはねえ。

藤十　それだから藤十郎が手をついて誤るのだ、今の麁忽を水にして、生死を共にしようから、萬事力になつてくれ。

富藏　男は當つて碎けろだ、あやまるならば是限りに、跡でぐづ〳〵言やアしねえ。（ト金箱を取る、）

藤十　まことに今更面目ない、(ト刀を納める。)

富藏　それぢやア此後今の樣な、卑怯なことはしなさらねえか。

藤十　神を誓ひに、此の通りだ。(ト小柄を拔き金打をする。)

富藏　盗人仲間に金打は、あんまり時代なことだねえ。(ト此の時、楽屋にてぽつたり音するを聞きとがめ、)今の音は。

藤十　鼠が神酒徳利を落したのだ。

富藏　アヽ、さうであつたか。(ト行燈を向うへむけ、臺所の水瓶に目をつけ思入あつて、)丁度こつちの水瓶が、小さいのは幸ひだ、あれへ入れてうづめて仕舞ひ、割つたつもりで新しいのを、あした買つて置けばいゝのだ。

藤十　成程是は持つて來いだ、蟲が知らしたか此間毘沙門さまで買つた松を、植ゑる時に穴掘から鍬と鋤を借りたのを、返さずにあつたは幸ひだ。

富藏　何にしろ善はいそげ、ちつとも早くうめてしまはう。

藤十　鋤と鍬を出して來るから、瓶の水を明けてくれろ。

富藏　合點だ。

ト藤十郎奥へはひる、富藏瓶の水を明ける思入あつて、こちらへ持つて來る、爰へ奥より藤十郎鋤と鍬を提げて出て來り、

藤十　どれ、蠟燭を附けよう。

富藏　暗へことをするに、明るくしちやアいけません。

藤十　それでは箱をこはすから、そつちは穴にかゝつてくれろ。

富藏　ドレ、穴掘をやらかさうか。

ト よき所の疊を一疊上げ、鋤にて根太板を放す、びしりと大きな音するゆゑ。

藤十　コレ、（ト留める。富藏あたりを見て、）

富藏　おでんやおでん。

藤十　シイ、往來ぢやアねえわ。

富藏　違えねえ。（ト矢張根太板を放しながら、）ほんに盗んだ此金を、直に遣ふと埋めて置くのは、

藤十　たとへていはゞ田樂の、

富藏　ムヽ、甘いと辛い（ト根太板を向うへ倒すを木のかしら、）心だなア。

ト又跡の板を放しにかゝる、藤十郎は箱をこはして居る、此の模様合方木魚のせめにてよろしく、

ひやうし　幕

三幕目

上槇町貸附所の場

【役名――野州の富藏、手代千治實は髮結木更津千次、新宿の判人善六、小使十助、入舟屋忠吉、百足屋金助、榮屋富藏、藤岡藤十郎。藤十郎妻おみさ、藤岡下女お花。】

（貸附所玄關の場）――本舞臺眞中二間常足の二重、瓦家根板庇式臺、正面白地中形の暖簾、上下の褄同じく中形の張壁、是れへ刀掛よろしく、下手の褄障子建切り、二重の上の方九尺瓦家根、半窓のある前面、三尺の戸袋、一間の間半障子建切りあり、裾通り板羽目、此上手一面の建仁寺垣、内より見越しの松、二重の下の方土藏の横手の張物、此下手板塀、總て貸附所の玄關の體、式臺の所に五本骨の紋の高張を立て、二重の上手に机を控へ千治の手代羽織着流しにて住ひ、下手に町人の金借り〇△□の三人羽織着流しにて控へ、此見得稽古唄の合方にて幕明く。

千治　折角のお頼みだが、此節は借手が多く會所も金が拂底で、貸附けを休んで居るから、外で間に合せて貰ひたい。

〇　左樣でもございませうが、お前さんのお骨折りで、どうかお差繰り下さいまして、此長休みの御難場をお救ひなすつて下さいまし。

△　不斷とは違ひまして、春興行が芝居町の儲け時でございますから、當月一杯の凌ぎさへ附けてし

まへば大安心。

□それから先きの錢儲けは、目先きへぶら〳〵ぶら下つて見えるやうでござりますから、月々納める御返金に、決してお世話はやかせません。

千治　花の三月を控へて居れば、滯ることもあるまいが、休んで居る貸附けを差繰つて貸して遣るには餘程手數のかゝるわけだが、そこを承知なら、何うにかして間に合せまいものでもない。

○いえもう、それは斯うやつて御無理なことを願ひまして、

△長い休みの御難場を、助かりまする私共、

□お禮の所は如何樣とも、お差圖次第にいたしまする。

千治　お前方も知る通り、役所の金は利が安く、なし崩しにして返金も外の金より樂な代りに、五分の禮は極つて居るが、餘計な手數を掛けて見れば、一割禮を取らねばならぬ。

○それでは三十兩お借り申せば、お禮が三兩引けますな。

千治　一割だから其筈だ。

△さうして見ると三人して三十兩借りた所が、一人前が八兩なにがし、

□利分とお禮で五兩ばかり、直に引けてしまふけれど、お願ひ申して借りると仕よう。

○ 左様なら千治さま、何分お願ひ、
三人 申しまする。
千治 よし〳〵、それが承知ならどうか差繰つてやらうから、明日出直して來さつしやい。
○ やれ〳〵、それで來月までの、どうか凌ぎが附きさうだ。
△ 時にわしは歸りがけに、魚河岸へ一軒寄つて行きます。
□ わたしも是れから客先きへ、一軒寄つて歸ると仕よう。
千治 いや無駄足をせず銘々に、客先き廻りは感心だ。
○ 左様なら千治さま、
△ 是れにてお暇。
三人 いたしまする。
千治 それでは明日出て來なさい。
○ 何分お頼み、
三人 申しまする。（ト稽古唄きつぱりとなり、三人は花道へはひる、千治跡を見送つて、）
千治 足元を見て禮金を、つい口先きで一兩二分、餘計なものが手に入れば、明日は一杯呑めるわえ。

ト爰へ奥より下女お茂、島田髷着流し前垂掛けにて出來り、

お茂　もし千治さん、うまいお話しでござりますね。（ト前へ出る、千治びつくりして、）

千治　おゝお茂どん聞いて居たか、斯ういふうまい儲けがあるから、おれの女房になりさへすれば、お前も一生樂ができるが、夫婦約束する氣はねえか。

お茂　人の困るを附込んで、あこぎに儲けた其金で樂をする氣はござんせぬから、まあお斷り申しませう。

千治　何であこぎをするものか、こゝらが金貸の附目といふものだ。

お茂　今のお人は芝居町のお茶屋の衆でござんせうから、そんなあこぎな事をせず、なるたけ利分を安くして、貸してやるが當り前、弱い稼業のお茶屋などを苛めてお金を儲けるのは、却つて罪でござんせう。

千治　なに罪な事があるものか、芝居がどんどん大入りだと、荒ツぽい錢を儲ける奴等、いくら取つても構ふものか。

お茂　御新造さんはお芝居好きゆゑ此事を申し上げて、やつぱり例の極り通りで、お貸附けになるやうに、旦那へお話し申させますから、其お積りでおいでなさい。（ト奥へ行かうとするを留めて、）

千治　えゝそんな事をされてたまるものか、明日あの手合に頼み込んで芝居を一幕覗かせるから、今の事は默つて居なせえ。

お茂　いえ、それよりは御新造さまのお供で行つて、あの衆に悦ばせてやりませう。

ト又行きかけるを、

千治　えゝさりとては情なし女だ、芝居がいやなら前垂でも買つてやるから、默つて居てくれ。

お茂　前垂などは入りませんから、あゝゝこぎな事をなさらずに、お金を貸しておやりなさい。

千治　さて〳〵女といふものは、芝居の肩を持つものだ、どうにか明日してやるから、今日のことはだまつて居ろ。

お茂　ほんにわたしもお金があると、芝居町のお茶屋になり、毎日芝居が見たいものだ。

千治　おれのいふ事を聞きさへすれば、茶屋ぐらゐは出してやるから、うゝんといつて聞いてくれ。

ト手を握るを振拂ひ、

お茂　えゝもう、知らぬわいなあ。

トつんとして奥へはひる、此以前下手より小使十助着流し脚袢尻端折り草履にて出來り、下手にてこれを窺ひ居て、此時前へ出て、

十助　千治どの、いつもながらお茂どんに彈かれましたね。
千治　え丶手前の知つたことぢやあねえ、大きにお世話だ、默つて居ろ。
十助　默つて居てあげる代りに、足料の取れさうな催促の口はありませんか。

ト是れにて千治端紙の書附を出して、

千治　芝口の松屋へ貸した百五十兩の納め金が、今日で三日おくれて居るから、これを持つて行つて來い。(ト書附を渡す。)
十助　芝口までゞは足料が二百ばかり取れる使ひだ、千治どの默つて居ますぜ。
千治　え丶無駄を言はずと、早く行け。
十助　それぢやあ默つて、行つて來よう。(ト花道へはひる。)
千治　あのお茂めがうんと言やあ、女房に持つてやる氣だが、おれのやうな働き者を嫌ふといふは馬鹿な奴だ、それに附けても新宿の阿魔めは何と言つて居るか、明日一杯やつた跡でちよんの間遊びに行かにやあならねえ。

ト机に向ひ書き物をして居る、稽古歌きつぱりとなり、花道より判人の善六、羽織着流し草履尻端折りにて出來り、花道にて、

善六　外の相談に行くのと違つて、女郎の身受けの相談は、小指に内證で旦ツクを呼出すといふ仕打だから、よつぽど呼吸がむづかしい、どうか手代の千治でも玄關に居てくれゝばいゝが、ト門口へ來り思入あつて）千さんにはいつもながら、お忙がしうござりますね。

千治　おゝ、誰かと思つたら善印か、まあ〳〵こつちへ上んなせえ。

善六　左樣なら、御免なさい。（ト二重へ上りよろしく住ふ。）

千治　お前の方へも久しく行かぬが、相變らず繁昌かな。

善六　吉原の假宅に押されますかと案じましたが、又新宿は新宿だけで、お陰で繁昌いたします。

千治　地震からこつちは、職人手合に錢があるから、どこの盛り場も仕合せだ。

善六　おつしやる通り新宿なども、お武家の客が三分なら、職人手合が七分あります。

千治　さうして何ぞこつちの方へ、用でもあつて出て來たのか。

善六　ちつと此方の旦那さまに、お話しがあつて來ましたが、お宅にお出でゞござりませうか。

千治　丁度今日はお宅だから、用なら爰へ呼んでやらう。

善六　御新造樣のお側では申し難い御相談ゆゑ、憚りさまでござりますが、そこの所をよろしきやうにお取次ぎ下さいまし。

千治　御新造の居る前では言出し難い相談とは、さては身受けの一件かな。

善六　御存じの通りあの子には、本郷の伊丹屋といふ酒屋の息子で德さんといふ青二才が、情人筋で深い中、親掛りではあるけれど、末始終は受出して女房に仕ようならうといふ約束がしてあるとのこと、それをこつちの旦那さまが、意氣張づくで横合から受出さうといふお頼みで、わたしも段段掛合ひつめ、身受けの直〆が極つたからお話し申しに來ましたが、何にしても情人があつて當人が不承知と知れて居るのを、大金で受出すといふ相談は、無駄なことだと思ひます。

千治　いやわしもそれを知つて居るから、およしなさいと留めたけれど、知つての通りの氣性ゆゑ、意地に掛つて身受けして、言交して居る德太郎の、鼻をあかしてやらうといふ、醉狂な思ひ附きで夢中になつて居る樣子、さうして幾らで受出せると相場の直〆が極つたか、爰へ呼出すまでもなく、奧へ行つて極内で旦那へ取次ぎしてやらう。

善六　お前さんが旦那さまへこつそり話して下されば、猶いゝ都合でござりますが、內證へ段々掛合ひ詰め、親元身受けの積りにして、少しも懸直のない所が二百兩と相場が極りました。

千治　成程當時新宿で辰巳屋のお辰といつては、流行ツ子の女郎だから二百兩がものはあるだらう、それぢやお奧へ取次いでやらう。

善六　何分お頼み申します。

ト千治立たうとする、爰へ奥より藤十郎羽織着流し、貸附所の旦那のこしらへにて出來り、

藤十　いや取次ぎには及ばねえ。善六、大きに御苦勞だつた。（ト前へ出てよろしく住ふ。）

千治　それではお聞きでござりましたか。

善六　お無駄なやうだと思ひましたが、段々譯をお聞き申すと、決して無駄ではござりませぬ。

千治　さうとも〳〵、乘りかゝつて後へ引かぬは男の意地、醉狂なことは少しもない。

ト言紛らすこなしよろしく、誂への合方になり、

藤十　いや今も二人が話す通り、夫婦約束したといふ外に馴染の客があつて、身受けをされる當人が進まぬものを横合から、受出すといふ相談は、元より無駄な醉狂と知つては居るが意地づくに、かかつて見れば千金も惜しく思はぬ氣性だが、今辰巳屋で一二といふ暖簾名の附く女郎だから、三百兩ともいふかと、思ひの外に善六の掛合ひ方がよかつたか、二百兩との切出しは、大きに相場が安かつた。

善六　いえもう、そこはわたくしが旦那のお名を出しませんで、親元身受けの積りにして内證へ當つて置きまして、實は是れ〳〵斯う〳〵だと、跡で旦那のお身受けだとお名を明して聞せましたが、

先きへ旦那のお名を出しては、三百兩より下の金では、めつたに相場が立ちますまい。

千治　旦那が安いとおつしやれば、もう附込んで御褒美の、種蒔三番と出掛けたな。

善六　いえ〳〵さういふ譯ではない、操り三番のうんのんは、させぬ積りでござります。

藤十　いや全くの骨折りで、思ひの外安いから、何れ貴公へ禮はするが、先づ兎も角も五十兩手附けの金を渡してくれ。（ト懐より紙へ包みし二分金を出し、善六に渡す。）

善六　へい〳〵畏まりました、（ト金を改め見て、）こりや二分金で五十兩、慥に渡すでござりませうが、わたくしからお預りの一札を書いて參りませう。

藤十　いや〳〵それには及ばぬから、手附の印に渡してくれ。

千治　でも念の爲め一札を

藤十　はて間違つたら善六へ、遣つたと思へばことが濟む。

善六　流石はこちらの旦那樣、大腹中には恐れ入りました。

ト此内上手の半窓の障子を明け、女房おみさ人柄よき丸髷好みの裝にて半身出し、是れを窺ひ居て、よき程にそつと障子を建てる、善六は件の金を懐中へしまひ、

然しお身受けをなされても、御新造さまがござりますから、直にお家へあの子をば入れる譯には

行きますまい。

千治　そこは早速わたくしが、此近邊をかけ歩き、こつそりとした借宅をこしらへることにいたしませう。

藤十　いや、借宅をこしらへて、心配するには及ばぬことだ。

善六　それではお家へお入れなさる、思召しでござりますか。

藤十　これが以前の身分なら、主人へ對し濟まぬとか重役へ遠慮をするとか、憚ることもあるだらうが町方へ出て貸附所の主人になつて暮して居れば、どこへ遠慮がいるものか、身受けをすれば其晩から家へ連込み女房にも、よく言聞かして置く積りだ。

千治　それでは奥の御新造が、氣を揉む種でござりませう。

藤十　昨日今日の中ぢやあなし、何で彼奴が氣を揉むものか。

善六　實はそれゆゑ今日も、こちらへ上つて御相談も、氣兼ねをいたして居りましたが、御新造さんに障りがなければ大安心でござります。

藤十　まあ何にしろ奥へ行つて、茶でも呑んで歸るがいゝ。

善六　いえ、今日は此外にも用を抱えて居りますから、是れでお暇いたします。

千治　こりや御新造に逢はぬ方が、こなたも無事といふものだ。
善六　お察し通り其方が、實は勝手でござります。
藤十　そんなら何れ禮はするから、萬事貴公が引受けてくれ。
善六　承知いたしてござりますが、さうして何時頃お身受けをなさるお積りでござります。
藤十　明日にも都合次第で出て行く氣だから、其積りで。
善六　へい〳〵よろしうござります。
千治　善六どの其序に、きやつに逢つたらよく言つて下せえ。
善六　何ぞお言傳はござりませんか。
千治　旦那のお供で身受けの時、行くかも知れぬと言つて下せえ。
藤十　おれの身受けと同じことで、やつぱり無駄な言傳だ。
善六　どういたして千さんのは、よつぽど惚れて居ります。
千治　何ぞといつて舌出し三番か。
善六　おつと、そこらはおゝさえ〳〵。（下二重より下りる。）
藤十　それでは善六、頼んだぞ。

善六　外へはやらじでござりまする。（ト誂への稽古唄になり、善六は花道へはひる、跡に千治思入あつて、）

千治　もし旦那、それではいよ／＼あのお辰を、あなたは身受けをなされまして、お家へお入れなされますか。

藤十　德太郎といふ靑二才の足さへなけりやあ妾宅をこさへて、外へ圍つて置くが、いはゞ惡足油蟲の相手があつちやあうつかりと、外圍ひにはして置かれぬ、家へそつくり引取つて妾にして置く積りだ。

千治　いえ／＼それは世間にもよくあることでござりますが、御新造さんが修羅を燃し、ごたつく基でございますから、それよりやつぱり外圍ひに、なさるとお極めなさいまし。

藤十　いや、女房がかれこれいへば實家へ返してしまふまでだ、あいつに恐れて妾宅をこしらへるのは無駄なことだ。

千治　無駄なやうでも其方が、天下泰平でござります。（ト此時後の襖を明け、以前のおみさ出て、）

みさ　千治どの、何で天下が泰平でござんす。

千治　えゝ、（トびつくりして氣を替へ、）去年のやうな大地震がござりませんので、世の中は泰平でござりまする。（ト間の惡きこなし、おみさよろしく住ひ、）

みさ　ほんにそなたー　り、地震がなければ世の中は泰平でござんせうが、其大地震が毎夜のやうにあつては穏かなアまいわいなあ。

千治　さては地震の搖る話しを、いえなに、去年の大地震はもう搖ることではござりませぬ。

みさ　ちと内々で旦那さんに、お話し申すことがあれば、そなたは奥へ行つて下さい。

千治　そりやこそ到頭搖り出した、いえ御ゆるりとお話しなさいまし。（ト立たうとするを、）

藤十　いや内々の話しがあるなら、千治を奥へやらずとも、おれが奥へ行つて聞くと仕よう。

みさ　さうなさつて下されば、猶よろしうござりまする。

千治　御夫婦合のお話しなどは、奥がよろしうござりまする。

藤十　それではおみさ、奥へ行きやれ。

みさ　誰が來ようとも千治どの、奥へ寄越して下さるな。

千治　心得ましてござりまする。

藤十　どんな話しか知らねえが、何れ口舌の、

みさ　えゝ、

藤十　どりや、奥へ行つて話しを聞かうか。

ト唄になり、藤十郎先きにおみさ附いて奥へはひる、千治は鼻調べなして居る、誂への端唄になり花道より野州の富藏、着流し尻端折り山附きの脚袢麻裏草履にて、割掛けの包みを肩へ掛け、菅笠を持ち出来り、花道にて、

富藏　土一升に金一升と、昔からの譬にいふ日本橋は日本橋だけ、いつ来て見ても賑かだ、併し又江戸の眞中に兇状持の喰せ者が潜し込んで居るといふは、爰らが燈臺元暗しの人目を晦す秘傳だらうが、肚胸がなけりやあ出来ねえ仕事だ、何にしろ向うへ行つて、家の様子を見て遣らう。(ト舞臺へ来り千治を見て)千治さん、此間は久しくお目に掛りません。

千治　おゝ富藏どの、久しく逢はぬが、何處へ行つて居さしつた。

富藏　熱海へ湯治に行きまして、大きに御不沙汰をいたしました。

千治　成程、熱海は夏向きより冬の湯治がいゝさうだが、それはいゝことをさつしやつた。

富藏　ときに千治さん、奥でもお替りはごぜえませんか。

千治　旦那も御新造もお達者だが、今内々のお話しで取次ぐ譯に行かぬから、玄關で一服呑みなせえ。

富藏　いやそれでわしも安心だ、一服やつて待ちませう。(ト二重へ上り、よろしく住ふ。)

千治　聞けば熱海は寒中でも暖かい所といふことだが、いつ頃から行かしツた。

富藏　地震でくぢいた腕が痛み、長く打身にならねえやうに、あれから急に湯治に行き養生をして居ましたが、北の方へ山を背負つて南を受けて居ますから、江戸よりよつぽど暖かで、第一魚が自由だから寒い時分に行つて居るにやあ、いゝ所でごぜへます。

千治　熱海からの歸りではまだ假宅を知るまいが、本所深川淺草は吉原の假宅で、夜るになつての賑かさはすばらしい繁昌だ。

富藏　熱海に居ても其話しは聞き及んで居ましたが、そんなに賑かでごぜへますか。

千治　案内をしてやるから、一晩行つて見るがいゝ。

富藏　田舍の道者がぽん引につかまつた格で、行つて見ませう。

千治　いやこんな道者を引掛けたら、ぽん引は逆捻だ。

富藏　それはさうと、内々の話しをして居なさるとは、奥に取込みでもありますのか。

千治　所がどこでも極つて居る、燒餅の一件だから、聞かねえ方がよつぽどいゝ。

富藏　燒餅の一件とは、何ぞこちらの大將に、おつな者でも出來ましたか。

千治　何さ、燒くほど持てもせぬ新宿の女郎一件で、口舌が起つて居る所だ。

富藏　それぢやあ此節こちらの旦那は、新宿の女郎とやらに熱い〳〵で居なさるか。

千治　いゝ人があつて振られて居る女郎を、男の意地づくで受出さうといふ無駄穿鑿、それを聞きつけ御新造が、角を生して異見でもして居る樣子に違ひない。

富藏　さういふ話しを聞くのが附目。

千治　えゝ、

富藏　いえなに、そりやあ意氣事なお話しでごぜへます。

千治　何にしろ奧へ行つて、樣子を見て來るから、待つて居さツし。

富藏　よろしくお賴み申します、（ト千治奧へはひる、富藏跡を見送り思入あつて、）あいつも元は牛込の廻り髮結をした奴だが、藤十郎へ摺込んで今ぢやあ爰の貸附所の手代になつて濟し込み、大きな面はして居ても木更津產れの喰ひ詰め者、兇狀持ちに違ひはねえが、こつちの目からはまだひよツ子矮鷄の所へも行きやあしめえ。（ト爰へ以前のお茂、茶を汲んで出來り、）

お茂　お茶をお上りなさいまし。（ト茶臺で出す、富藏びつくりして、）

富藏　これぢやあ矮雞になつたと見える。（ト茶碗を取つて茶を呑み居る、）

お茂　富藏さんにはお久し振りで、どこからお出でなさいました。

富藏　お前の顏が見てえから、高い山から飛んで來た。

お茂　烏ではありますまいし、いつも極りで常談ばッかり。

富藏　いつでもお前は、（ト茶碗を下へ置くを道具替りの知らせ、）愛敬ものだ。

ト此模様稽古唄にて、道具廻る。

（貸附所座敷の場）――本舞臺一面の平舞臺、正面上の方一間の床の間、好みの掛物、茶花の花活、續いて地袋違ひ棚、此下手腰張りの茶壁、ずつと上の方畫心に葦骨の障子を四枚建切り、此外は緣側の心、同じく下の方畫心に更紗形の襖を四枚建切り、此外次の間の心、舞臺一面に茶緣の薄緣を敷き詰め、總て貸附所の座敷の體、後地袋の戸棚の上に刀掛、貸附金を載せる三方などを並べ、上の方に以前の藤十郎褥の上に住ひ、手あぶり火鉢を控へ居る、下の方におみさ住ひ、此見得にて道具留る。

藤十　おれに内々の話しとは、どんな話しか早く言やれ。

みさ　外の事でもござりませぬが、あなたは以前の御身分をお忘れなさいましてござりまするか。

藤十　なに、以前の身分を忘れたかとは。

みさ　以前をお思ひなされましたら、身のお愼みもあるべきに、如何に御運に叶ひしとて世間の手前も顧みず、餘りお道樂が過ぎますゆゑ、御異見せねばなりませぬ。

藤十　いや、其異見は聞かずとも、百も承知をして居るから、何もいふにやあ及ばねえ。

みさ　いえ〳〵言ふなとおつしやつても、申し上げねばなりませぬ。
藤十　それではやはりあのお辰を、身受けをするのがお氣に入らぬか。
みさ　そればかりではござりませぬ、總體不斷の御行跡が、あなたのお爲めになりませぬ。
藤十　なに、行跡が爲めにならぬとは、（ト合方きつぱりとなり。）
みさ　不束なわたくしゆゑ、斯樣なことを申しますと悋氣嫉妬で、兎や斯うと申すやうに當りまして、あなたの思惑、二つには、奉公人の手前もあれば、今日まで怺へて居りましたが、捨て置きがたい今度のお身受け、そりやもうあなたのお働きで、何不自由なき暮し向きになりましたゆゑ、どの樣なお道樂をなされませうとも、申す所はござりませぬが、薄々世間で噂いたすを承はれば、昨年の地震について大金を儲けしゆゑの俄分限、元は僅かな扶持人にて一橋のお小人組、お天守番の今井殿の家來でありしも暇となり、お作事方の天野殿へ取入つたのが仕合せにて、地震の時に秩父の山の諸材木を買占めて、山師の玄關であゝ見えても、長いことはあるまいなどゝ陰で譏つて居るとのこと、其評判を聞きましても快いとは思ひませぬに、女郎を受出し家へ入れ、御愛妾になされましては、猶々世間の口の端が、うるさいばかりかお貸附けの、御名目にも拘はりませうと、悋氣嫉妬は取りおいて內々御意見申しまする。お爲めにならぬと申すのは、右の次第

にござりまする。

藤十　さう事を分けて言はれては、おれもどうやら面目ないが、運に叶つて相應の身上になり氣が弛み増長した譯ではねえが、名目金の貸附所で世を渡る氣になつて見れば、役所仲間の附合で、僅五百か千兩の金を貸出す藤十郎も、萬兩分限の貸附けも同じ仲間のことだから、人に山師といはれても大きなことも言はねばならず、又身受けをする女郎とても現をぬかして金を積み、妾に仕ようといふ氣なら外へ圍つて人知れず樂しむ趣向もあるだらうが、ほんの座興の張合ひから、德太郎といふ邪魔者のあるを承知で受出すのは、引くに引かれぬ男の意地、家へ引取り三日でも妾にすりやあ追出して、おぬしに苦勞は掛けぬから、心配するには及ばねえ。

みさ　いえ其樣になされませんでも、此後は萬事を控へ目にお愼みなされますれば、世間の噂も自然と止み人の譏りもござりますまい、それと申すも里方の父は常から儉約家で、質素を好んで居りますれば、金貸などがあの樣な行跡をして居る時は、始終は身代破滅の元と心配いたしてわたくしから、異見をしろとの心附け、御行跡さへ改まればそれで安心いたしまする。

藤十　おぬしの親の清水殿は、金滿家にて小金を貸し暮しの助けになされしゆゑ、浪人中に雇はれて利分を取立て歩いたが、今で思へば貸附所の主人になるもあれが前表、まだ其頃は牛込の赤城下に

て流浪の身に、毘沙門天へ開運を祈る心で參りしも、

みさ　千里を駈ける寅の日に、行くも歸るも摺違ふ袖は他生の御緣日。

藤十　交す詞も中々に、群集の人に隔てられ、

みさ　お別れ申せど、其後に逢瀨嬉しい中となり、

藤十　運を開いて樂々と、暮せるやうになつたのも、

みさ　百足小判を澤山に、お儲けなされしお働き、

藤十　是れもあの時毘沙門へ、祈願を掛けた利益であらう。（ト是れにておみさ四邊へ思入あつて、）

みさ　いえ、それなれば宜しけれど、何如に昨年地震の節、秩父のやまにて材木をお買占なさればとて、合點の行かぬ此分限、

藤十　やあ。（トぎつくりこなし、）

みさ　一足飛びの分限者は、滅びることも亦早いと、父が心配いたしますゆゑ、なるたけ內端になさいまし。

藤十　子を案じるは親心、其心配も尤もだが、以前と違ふ附合に、たまには端手を賣つて置かねば、大きな金は儲からぬ。

みさ　それに附けても去年まで、燗酒賣りをして居つたあの富藏へあなたには、時折金子をお遣はしになりまするのは何ゆゑか、一圓合點が參りませぬ。

藤十　いや、あの男はおれが在所と同じ野州の産れにて、犬塚村の農夫の悴、以前の誼に日なしを貸す元手を廻してやつたのだが、今度どうか取附いて高利貸でもして居るか、久しく家へ見えぬやうだ。

みさ　それならよろしうござりますが、貸したものでも取るやうに、いつでも奥へ參りまして金子を借りる樣子ゆゑ、不審に思つて居りました。

藤十　いや／＼あれは同國で昔馴染の心安立て、遠慮のないのは性分ゆゑ、必ず心に掛けぬがよい。

みさ　それでどうやらわたくしも、安心いたしてござりまする。

ト此時下手の襖を明け、以前の千治出來り、

千治　御内談のお話しは、もう濟みましてござりますか。

藤十　こちらは濟んだが、何ぞ用か。

千治　お願ひの筋があると申して、富藏が參りました。

藤十　なに、富藏が參つたとな。

みさ　又極りの御無心に、參つたことゝ見えまする。

千治　どうか左樣な樣子にて、熱海へ湯治に行つて居つたと、久々にて參りました。

藤十　逢はぬ譯にもなるまいから、案内して通すがよい。

千治　へい／＼、畏りました。（ト下手へはひる。）

藤十　湯治に行つてをつたとあれば、聞かずと知れた金の無心、今日は斷り歸す積りだ。

みさ　それがよろしうございまする。

ト此時下手より以前の千治案内して、富藏小風呂敷の土産物を持ち出來り、下手に住ひ。

富藏　旦那さま、大きに御不沙汰いたしました。（ト辭儀をする、）

藤十　おゝ富藏か、よく出て來た、今もおみさと二人して、そちの噂をして居たのだ。

富藏　道理でお玄關で嚏が續けて出ましたが、こんな奴でも噂をして下さいますとは、何にしろ有難いことでござります。

みさ　聞けば久しく富藏さんには、熱海へ湯治にお出でとやら、よいことをなさんした。

富藏　湯治に行つたと申しますと、榮耀らしく聞えますが、去年の地震で腕を痛め、據なく錢なしで寒湯治と出掛けましたが、やう／＼此節體が直つて、江戸へ歸つて參りました。

藤十　體が直つて歸つたとは、獨身者の仕合せだ、是れからみつちり稼ぐがいゝ。

ト富藏包みの內より、雁皮紙の半切を出し、

富藏　何ぞお土產と思ひましたが、御不自由のない此方さまへ、湯元細工の挽物などは却つてお邪魔になりますから、詰らぬ物ではござりますが熱海へ行つたお土產の、ほんのしるしでござります。

藤十　土產なんぞはよせばいゝに、其心配では氣の毒だ。

富藏　いえ、御心配をなさるやうな、お土產ぢやあござりませぬ。

みさ　御無用になさらないで、有難うござります。

千治　熱海は雁皮の半切が名物だと聞きましたが、成程こりやあ上製だ。

藤十　まあ兎も角も久し振りだ、ゆつくり一杯呑まうから、今夜は泊つて行くがいゝ。

富藏　有難うござりますが、體の直つた足ついでに、是れから加賀の金澤へ出掛ける積りでござりますから、さういたしては居られません。

千治　それぢやあ江戶の假宅を、見ずに田舍へまた行くのか。

富藏　假宅などは見ませんでも、一人の親にめぐりあひ、貢いで遣りたうござへます。

藤十　一人の親へ貢ぎてえとは、そりやあ好い心掛けだ。

みさ　さうでも言はねば、又お金を。

富藏　えゝ。

みさ　いえ、また金澤へお出掛けとは、急なことでござんすなア。（ト よろしくこなし、）

富藏　いつかもお話し申しましたが、產れは野州の都賀郡犬塚村でござりますが、親父が死んで世帶を疊み、其後一人のお袋がどこへ行つたか行方知れず、逢ひたく思つて居ました所、不圖したことから在所が知れ、今加賀の金澤で材木屋をして居ります加賀屋平兵衛といふものが、かすかな緣家でそこを便り、世話になつて居りますさうだが、ぶら〳〵病が重くなり、苦勞は掛けたが親子の情で息のある內逢ひたいと、迎ひの手紙が來ましたから、湯治で體の直つたは丁度物怪の幸ひゆゑ、苦勞をかけた恩返しに尋ねて行つて逢つた上、生涯困らぬ手當をして、先きの家へもそれ相應禮をしたうござりますから、ちつとも早く金澤へ、出掛ける積りでござりまする。

藤十　そりやあ何よりいゝことだ、尋ねて行つて逢つたらば、嘸お袋が悅ぶだらう。

みさ　聞けばお前のお上さんも別れたまゝで、今以て行衞が知れぬといふことゆゑ、成らうことならお上さんの在所も尋ねておやんなさい。

富藏　其かゝアめも此間、熊谷邊で見掛けたと友達から聞きましたが、何をするもお定りで、先立つ物

が肝腎ゆゑ、それに附けて旦那さまへ、お願ひがあつて參りました。

藤十　頼みの筋があるといふは、大方金の無心だらうが、生憎此節は貸附所も借手ばかりで金が出拂ひ當分休んで居る位だ。

富藏　いえ、たんとのことは申しませぬ。女郎をお身受けなさる位も、あればよいのでござります。

千治　どれ、今の内貸金の帳を調べて置きませう。（ト立ちかゝるを藤十郎留めて）
ト是れにて皆々顔見合せ思入、千治間の悪きこなしにて、

藤十　いや帳合より芝口へ、催促に行つて貰ひたい。

千治　いえ芝口の松屋へは、十助をやりました。

藤十　それぢやあ神田の荒木屋へ、催促に行つて取つて來い。

千治　畏りましてござりますが、十助が歸りませんでは、お玄關に誰も居りません。

藤十　いやおれが居れば大丈夫だ、早く行つて來るがいゝ。

千治　左樣なら行つて參りませう。富藏どのお話しなさい。

富藏　大きに御苦勞でござります。（ト千治下手へ來り）

千治　何だか樣子が。

富藏
藤十 えゝ、
千治 いえ、何だか陽氣の加減かして、耳ががん〳〵してならぬ。（ト思入あつて下手へはひる。）
みさ ほんにわたしも陽氣のせいか、目が霞んでなりません。
富藏 目なら越後の菅谷の不動さまへ願を掛ければ、どんな目でも直ります。
藤十 いや御緣日ではないけれど、藥研堀の不動尊へ代參に行つて貰ひたいが、お茂を連れて今の内に參つて來てはくれまいか。
みさ さうして何ぞ御願掛けでも、なされてあるのでござりますか。
藤十 別に願などは掛けてないが、毎月缺かさず參るのに、先月は參らぬから代參に行つて貰ひたい。
富藏 毎月參る神佛へ、參らぬといふものは、氣になるものでござへます。
みさ 左樣ならわたくしは、御代參に行つて參りませう。
藤十 どうかさうして貰ひたい。
みさ 富藏さん、御免なさい。
富藏 さあ〳〵お仕度なせへまし。（トおみさ下手へはひる。藤十郎小聲になり、）
藤十 これ富藏、留守になるまで待つて居ろ。

富藏　大方さうとは思つて居ますが、以前と違つて貸附所の御新造さんに仕揚げて見ると、又別段に器量を上げた、いゝお上さんがありながら、お前さんには新宿の女郎を受出し近々に、妾にお置きなさるとやら、お羨ましい一件だ。

藤十　誰がそんなことを言つたか、妾などを置きやあしねえ。

富藏　いや、隱しても知つて居ます、しかも相手は新宿の馴染を入れるといふことで、口舌が起つて居ることまでよく知つて居ります。

藤十　そんならあの千治めが、餘計なことを喋べつたか。

富藏　千治どんから聞かねえでも、そこは蛇の道はへびとやらで、直き探つて知つて居ります。

藤十　言はずともいゝことを、忌々しいお喋べり野郎だ。

富藏　時にわつちも三百兩ばかり。（ト側へ寄らうとするを、）

藤十　えへん／＼。

ト咳拂ひをして押へる、富藏心附いて下手へ下る、此時下手よりおみさ着物を着替へ、以前のお茂附いて出來り、

みさ　左樣なら今の内、ちよつと行つて參ります。

藤十　御苦勞でもさうしてくれ。

お茂　千治どのも十助どのも、お使ひに出て居りませぬが、御新造さまのお供をして、參りましてもよろしうござりますか。

藤十　いや十助の歸るまで、富藏どのに居て貰ふから、跡に構はず行くがいゝ。

みさ　それでは行つて參ります。富藏さんお話しなさい。

富藏　話しこんで居りますから、御ゆるりと行つてお出でなさい。

お茂　お茶をこれへ持つて參つて、お側へ置いて行きませう。

富藏　いや、そんなことはわたしがするから、跡に構はず行きなせえ。

みさ　どれ日の暮れぬ其内に、急いでお參りして來よう。

お茂　それがよろしうござります。

　　トおみさお茂下手へはひる。富藏捨ゼリフにて跡から附いて下手へはひり、よき程に歸つて來て。

富藏　籠から出た鳥のやうに、羽根を伸して出て行つた。

藤十　家中殘らず出拂つたから、遠慮はいらねえ、此方へ來い。

富藏　それぢやア眞平御免なせえ。（ト側へ來りよろしく住ふ。是れより替つた合方になり）

藤十　そんなら今日は、三百兩持つて行かうといふのだな。
富藏　たんとあつても邪魔だから、三百兩ばかり貰つて行かう。
藤十　そりやあいつぞや手前から、二箱金を預つたから言ふなり次第に去年中、ちび〳〵出して遣つて居たが、微塵積れば山の譬で、是れまで渡した金高は千七百七十五兩、殘り二百二十五兩、今三百兩渡してやれば七十五兩行き過ぎるが、今日その金を持つて行きどういふことに遣ふのだ。
富藏　そりやお前が言はねえでも、わつちも大概胸算用で殘つた高も知つて居るが、四千兩といふ金を二つに分けて二千兩、あの時わつちが持つた日にやあ、直に惡事のいくが割れ喰ひ込むのは知れたこと、その儘そつくりお前へ預け、ちび〳〵貰つて遣つて居たが、今度は遠い旅を抱へ加賀まで行つてお袋に、手當の金が百兩に緣家へ禮が五十兩、跡の殘りを路用にして越前越後出羽奧州所々を廻つて來る積りだ。
藤十　それぢやお物は相談だが、二百二十五兩といふ殘りの金へ肉を附け二百七十五兩足して五百兩にして遣らうが、それを手切に此後は、こつちの閾を跨がぬといふ證據を置いて行く氣はねえか。
ト富藏思入あつて、
富藏　こりやお旦那はわつちの手を切り、種の知れねえものを使ひ、諸方へ金を貸し附けて一生樂をし

なさる氣かえ。

藤十　それは言はずと知れたこと、今日互ひに苦勞をするも、一生樂をしたいからだ。

富藏　そりやあ惡い了簡だ、理道なことをしてさへも旨く行かねえ世の中を、盜んだ金で一生邪樂をせうとは蟲がいゝ、わつちなどは斯うして居ても、今にも御用と聲がかゝりやア文句なしに死罪の兇狀、斯ういふ短い命になつて悠長らしく白髮になるまで、暮さうといふ心持で、僅かな金で邪魔になる此富藏を追ツ拂はうとは、あんまり呑氣な了簡だが、旦那もわつちも是れから先き、まあ長くは覺束ねえ。

藤十　むゝ。（ト思入。）

富藏　碌でなしでもお袋が產んだ時にやあ眞人間に、育てゝくれる氣と見えて、富藏といふ名を附けたも始終は富貴に金藏でも建てさせる氣で居たらうが、建てる力がねえ替り破る心があつたから、盜みを働き墨が入り、土地にも居られず女房を去り江戶へ出て來て中間奉公、そいつもしくじり錢はなし、せう事なしの夜商ひ、僅か二貫か一貫の元手に困る位ちやあ、所詮うだつは上らねえと堅氣を止めて橫道へ、曲つた稼ぎをしたからは、手馴れたものは博奕か盜み、算盤玉は手拭の染めと極め込む遊び人、それといふのもお前といふ金の出所があるからだ、きざなことをいふや

うだが立關構への貸附所、旦那々々と立てられて榮耀な暮しをして居るのも、此富藏が勸め込み命を切りにやらかした仕事が旨く行つたからだ、今日日になつて片腕のおれが荷になり體をよく三百兩にも足らぬ金で追ッ拂はうとは藤岡さん、あんまり蟲が好過ぎるだらう。

藤十　誰も手前の其金で、追ッ拂はうとは言やあしねえ。

富藏　追ッ拂はうと言はねえでも、閾を跨いでくれるなと言やあ理窟は同じこと、拂はうといつても拂はれねえせんびり蟲のおれだ、其氣で生涯貢ぎなせえ、邪魔なやうでもあの晩の提灯持ちの一件は、闇い所へはひらうとも滅多に口は明きやあしねえ。

藤十　そりやお肚胸の据つた、手前のことゆゑ喰ひ込み、石を抱いてもあの晩の、惡事の口は明くめえが、同じ榮耀をしながらも盗んだ金の遣ひ振を物に例へて言はうなら、さつき土産に持つて來た此雁皮紙の半切だ、これも熱海の名物に糊つぎにして巻紙で半紙の用を足す時は、立派に世間を通用して半年位は使へるが、駿河半紙も同樣に手拭きにしたり鼻紙の代りにされては十日と持たず、紙屑籠の撚り物、用ひる所へ用ひぬと第一人の不審を受け、長く世間が渡れぬから、おれは秩父の材木で儲けたといふ狂言で、金を摺替へごまかしたが、手前はおでん燗酒を賣つた身分で金を使ひ、無生業で居る時は忽ち手先の不審を受け、喰ひ込まにやあならぬから、堅氣になれと

勸めたが、追ッ拂はうとは言やあしねえ。

富藏　言はざあそれでいゝにして、決して此後安穩に暮せると思ひなさらねえかい。

藤十　むゝ、それぢやあ露顯をするだらうと、手前は待つて居る積りか。

富藏　露顯を待つといふぢやあねえが、大事に使へば能事のある命は誰も惜しいから、見え盛んで居る内に、行きてえ所へ飛び歩き、揚句に捉まる覺悟をするのさ。

藤十　成程惡事に巧者だけ、又あきらめの附けやうも据つた根性の思ひ切り、それを聞いては此おれも、覺悟しにやあなるめえが、始終は露顯を仕ようとも脱れるだけは脱れて居て、榮耀な眞似が仕てえから、手前は江戸に立廻り喰ひ込まねえ用心して、當分高飛びしてくれろ。

富藏　それゆゑ加賀に居ると聞く、一人の親を尋ねながら、旅へ出る氣になりました。

藤十　それぢやあ手前のいふ通り、三百兩やらうから、それを路用にするがいゝ。

富藏　いくらふざけた眞似をしても、一人旅で三百兩持つて行くのも餘計だが、鼠小僧を信仰で難有な者と見る時は、幾らか惠んで置いたなら、十日でづきの廻るのも二十日と延びて此婆婆に居られることもあらうかと、曲つた心の盜人も身の用心をして居ます。

藤十　陰德あれば陽報と同じ惡事をしながらも、善根をした證據にやあ、未だに殘る囘向院の鼠小僧の

富藏　墓の前に、線香などの絶えねえのは陰德をした報いだらう。其代りにやあ石塔の、缺片を袂へ入れて行くと、無盡が當る禁厭だと石になつても打ッかゝれ、痛い思ひをしにやあならねえ。（ト此内藤十郎有合ふ手箱の内より、百兩包みを三つ出し、）

藤十　生憎二分を貸切つて、小判だがよからうか。

富藏　江戸の内ぢやあ遣えねえが、加賀だから大丈夫だ。

藤十　それでよければ女房や、手代が歸つて來ねえうち、

富藏　早くしまつて置きませう。（ト腹卷を出し是れへ包んで懷へ入れる。）

藤十　然し是れから立つといつても、もうかれこれ七つ前だ、今夜はこゝへ泊るとして、早立ちにすると極めてはどうだ。

富藏　いえ此内へ泊つちやあ、わつちも何だか氣詰りだ、是れから直に蕨宿までも踏出してから泊ると仕よう。

藤十　何さまそれも尤もだが、金を持つちやあ盗人でも夜道をするのは物騷だ、無理をしねえで泊るがいゝ。

富藏　人間違ひで切られりやあ、却つてこつちの仕合せだと、わつちあ思つて居ますから、夜道は何よ

も思はねえ。
藤十　門出を祝つて久し振り、一杯呑ませて別れてえが、急ぐとありやあ仕方がねえ。
富蔵　呑むとふら〳〵氣が替り、引掛る氣になりますから、呑まずに江戸を放れよう。
藤十　成程當時は吉原の、假宅流行でけんのんだ。
富蔵　これが無疵な人間なら、一晩遊んで出掛けるが。
藤十　濡れる燕と引きかへに。
富蔵　花を見捨てゝ行く雁だ。
藤十　旅中は隨分大事にしろ。
富蔵　お前も達者で居て下せえ。
藤十　どれ、玄關まで送つてやらう。
富蔵　こりやあ憚りでごぜえます。
ト兩人立上る、是れにて知らせなしに道具廻る。
（元の玄關の場）――本舞臺元の玄關の道具へ戻り、稽古唄にて道具留る。と奥より富蔵先きに藤十

郎送つて出て來り、富藏玄關にある割掛けの包みと菅笠を持ち、平舞臺へ下りる、藤十郎見て、

藤十　其のこしらへぢやあ長旅を、抱へた旅人とは見えねえから、又こしらへを替へざあなるめえ。

富藏　江戸の内せえ放れりやあ、すつかり態を替へる積りだ。

藤十　そんなら富藏、氣を附けて行け。

富藏　素目ぢやあ油斷をしねえ積りだ。（ト右の唄にて富藏花道へはひる。藤十郎跡を見送り思入あつて、）

藤十　流石はおれより上手だけ、不義の榮華は長からずと見切りを附けて居る富藏、こつちも其氣で今のうち、覺悟を仕にやあならねえ。（トじつとこなし。此時下手の棲の障子を明け以前の千治出て、）

千治　旦那さま、行つて參りました。（ト是れにて藤十郎びつくりして、）

藤十　おゝ千治か、いつ歸つた。

千治　今しがた歸りましたが、御内談の御樣子ゆゑ、お次に控へて居りました。

藤十　先方で何と言つたか、大層歸りが早かつた。

千治　生憎留守でござりますから、言ひ置いて參りました。

藤十　大方留守といつたのは、先きの虛言であらうわえ。

ト大事を聞かれたといふ思入、千治此樣子を見て、

千治　それに引替へ富藏は、馬鹿正直な奴ではある。

藤十　なに、富藏が正直とは。

千治　堅氣になれば五百兩元手に遣らうとおつしやるのを、入らぬと言つて歸つたは、此節柄には珍らしい、無慾な奴でござります。

藤十　そんなら樣子を聞いて居たか。(トぎつくり思入)

千治　いえ、其外は存じません。

藤十　外のことは聞かねえとか。

千治　へい。

藤十　む丶、(ト頷くを木の頭。)さうであつたか。

ト思入よろしく、此模樣大小の入りし早き唄にて、

ひやうし　　幕

三幕目返し

（淨瑠璃）庚申塚の森影に、塒に迷ふ二人連、巣鴨里比翼道行（淸元連中）

【役名――野州の富藏、伊丹屋德太郎、巾着切隼長太、辰巳屋の若い者市藏、同仁助、同三八。辰巳屋の抱へお辰。】

（巣鴨庚申塚の場）――本舞臺一面の平舞臺、正面榎の大樹、上の方石の庚申塚、前後に松の立木下の方樹木の張物打返し淨瑠璃臺、後在體夜の遠見、日覆より榎、松の釣枝、灯入り霞附の月を下し總て巣鴨庚申塚の體、こゝに市藏、仁助、三八紺の股引尻端折り半纏を引掛け、辰巳屋といふ弓張提灯を持ち立ちかゝり居ろ、此見得風の音迷兒の鉦太鼓にて幕明く。

市藏 さつき追分の團子茶屋で、駈落者と見えるやうな、女と男の二人連れを見掛けたといふからは、慥にこつちに違ひない。

仁助 それともあれから右へ曲つて、駒込通りを眞直に王子の方へ行つたか知らぬが、連が酒屋の息子だから左の方に違ひない。

三八 詰らぬ洒落を言ふぢやあないか、連は兎もあれ逃げたのが女郎衆なれば流れの身、又流れに緣もあれば、おれは板橋の方だと思ふ。

市藏　餘計なことをいふ手間で、もう半道も捜して見て、知れずば家へ歸ると仕よう。
仁助　何で又お辰さんは、身受けの客があるといふのに、今夜内を逃げたのだらう。
三八　其身受けをする客といふのは、貸座敷會所の藤岡さん、行けば出世になることだが、
市藏　それを嫌つて行かねえのは、伊丹屋の徳太郎さんといふ、深い情人があるからだ。
仁助　そこで極りの道行筋、手に手を取つて二人連れ、
三八　當りは蕨の在方に、身寄りがあるといふことだ。
市藏　まあ何にしろ板橋まで、行つての上のことに仕よう。
仁助　宿へいつたら何屋でか、聞いて見ろと言ひ附つたが、
三八　先きの家名を忘れたが、市公お前覺えて居るか。
市藏　先づ桃園の三傑に例へていはゞおれは玄徳、そこらに拔りがあるものか。
仁助　いや御大層な事をいふが、
三八　其行先を知つて居るか。
市藏　おゝ、忘れぬやうに書いて置いた。（ト懷より淨瑠璃觸れを出す。）
仁助　大方それが出るだらうと、

三八　さつきから思つて居たのだ。
市藏　どれ、其行先きを讀んでやらう。（ト淨瑠璃觸れを開く。）
仁助
三八　「東西々々」
市藏　「淨瑠璃名題――」（ト名題を讀み上げ、）
仁助　「淨瑠璃太夫清元延壽太夫、ワキ清元――」（ト太夫連名を讀み、三八に渡す。）
三八　「相勤めます役人坂東家橘、尾上菊之助、岩井松之助、尾上菊五郎。」
仁助　いや紋切形の淨瑠璃觸れは、
三八　作者もあんまり智惠がない。
市藏　然し、相變らずでお目出度いのだ。
仁助　これさへ讀めば用はない。
三八　更けないうちに出掛けよう。
市藏　出掛けるならば、いつものやうに。
仁助　「いよ〳〵此所淨瑠璃始まり、」
三八　「其爲め口上。」

三人「左様。」

ト風の音にて三人上手へはひる、知せに附き下手の張物を打返す、爰に清元連中居並び、直に浄瑠璃になる。

〽まだ雪は空に残るか風寒く、梢を落す林町、時も五つか四つ辻を、跡に藥研の中越えて出中塚の木下蔭、

ト本釣鐘を打込み、合方かすめて風の音、花道より徳太郎頬冠り尻端折り、草履、お店縞物の着附、巻帯男の羽織を着、吹流しに手拭を冠り草履にて手を引かれ出て来る、遙跡より長太三尺帯に尻端折り、草履、鼻の先きへ手拭を冠り、いゝ、いなせのこしらへにて跡を附けて来る、両人花道へ留り、

〽暗き朧の月影に、駕屋町をば餘所に見て、こゝへたどりて如月の春さへ若き二人連、縺ぶ梅の色香をば、隠す人目に枯れ残る、道の邊の穂芒も、若し追手かと振返り、忍び〳〵て来たりける。

ト此内両人後先を氣遣ふ振りにて徳太郎振返る、長太は往来の人の心で揚幕の方へ行き振返り思入あつて附いて来る、両人舞臺へ来りお辰ちよつと躓くを徳太郎留める、此間に長太は樋の蔭へ隠れる。合方になり、徳太郎思入あつて、

徳太　これお辰、思ひがけなく新宿から今夜おぬしが迯げて来たので、心も漫に後先きの考へもなく蕨

在の知邊を使つて相談仕ようと爰まで來たは來たものゝ、どうしたものと來る道々身の成行を考へれば、此儘二人はいつまでも所詮一緒に居られぬ譯、今にも追手の者が來れば引戻される勤めの身、殊にはおぬしのお袋が嘸かし案じて居ようから、思ひ直して主人方へこれから歸つた方がよからう。

お辰 其の母さんの苦勞をするのを思はぬことはなけれども、主人方へ歸る時は藤岡さんへ身受けされ妾にならねばならぬゆゑ、日暮れに紛れて裏から抜け、大木戸に居た辻駕に酒手を遣つて道を急がせ、お前に逢うて相談せうにも跡の見らるゝ駈落者、おちおち話しもならぬ身に、藪在の伯母の所でゆつくり話しをしませうと、心も空に來たものを、今更主人へ歸れとは、どういふ譯でござんすぞえ。

德太 今言はずとも其譯は初手から知れたことなれど、身受の高の二百兩に幾らか餘計に金を添へ、主人方へ償はねば先づ勾引し同樣ゆゑ、言ひ立てられゝば召捕られ繩を受けねばならぬ譯、今本鄕で指折りの居附地主の桝酒屋、百や二百の其金に困らぬ身なれど親掛り、就いては遊びに耽けることが世間へぱつとして居れば、何所で借りよう當もなし、さりとは意氣地のないことゝ思ふであらうが仕方がない、おぬしも歸り難からうが、主人へ歸つて藤岡へ身受をされて行くがよい。

つゞまる所は其身の仕合せ。

お辰　假令この身の仕合せでも、それが厭さに家を拔けお前の所へ來たわたし、外に便りにする人は婆さんの外一人もなし、お前一人を力に思ふに今更主人へ歸れとは、そりやあんまりでござんすぞえ。

へまた吹き出る叢雲に、月も涙の雨催ひ、濡るゝ袂にしよんぼりと、

トお辰泣き伏す、徳太郎もじつと思入あつて、

徳太　恨みをいふは尤もだが、金の都合が出來ざれば所詮此儘居られぬ譯、別れる心は更々なけれど、身の行末を考へれば、別れにやならぬ今日の仕儀。

お辰　それではわたしが厭になり、それで歸れと言はしやんすか。

徳太　何でそなたが厭にならう、二世も三世も言ひ交せし、夫婦約束した二人。

お辰　そんなら何所がどこまでも、なぜ連れて行て下さんせぬ。

徳太　連れて行くのは安けれど、其身の爲めにならぬゆゑ。

お辰　假令是れから引戻され、どんな憂き目に逢はうとも、

徳太　そなたは厭はぬ心なるか。

お辰　詰りは死ぬと覺悟ゆゑ、何でそれを厭ひませう。（ト口說になる、）
〽勤めする身は鶯の、夜飼の夜を晝となし、啼くがしよざいに出ることの、ならぬ苦界の籠の鳥、その三光の月と日をもう何年と指折りて、年が明けたら梅の實を〽結ぶ時節を樂みし甲斐も、涙に暮れにける。（ト お辰德太郎を捉へ、口說のふりよろしくあつて、）

德太　詰りは死ぬる覺悟とは、それは何より無分別、いつぞや一緒に堀の内へお參りに行つた其時に、取りし御鬮は末の吉、祖師のお告げに僞りなければ、今別るゝとも又末は必ず一緒になられようから、どうぞ主人へ歸つてくれ。

お辰　再び家へ歸らぬ氣で、今夜家を出たからは、どの顏さげて歸られませう。

德太　歸らぬ上は引戾され、どんな憂き目に逢はうも知れぬ。

お辰　其時こそは此世の名殘り、

德太　それではどうでも死ぬ心か。

お辰　覺悟は疾うからして居ります。
〽所に古き六地藏、夜の勤めの鐘の音も、いとゞ哀れに鳴いて行く、惜しむ別れの鴈の聲、
ト此内一つ鉦をおしらひお辰死ぬといふ覺悟のこなし、德太郎是れを見て不便だといふ思入よろしく

あつて、

徳太　それ程までに思ふなら、一先づ伯母の所へ行き、主人へ渡す身の代の金の都合をして見よう、

お辰　どうぞさうして下さんせ。

徳太　とはいへ、それも以前と替り、世間の噂が悪ければ、金の都合の出來ぬ時は、

お辰　わたしは身を投げ死にますから、跡の囘向をして下さんせ。

徳太　あの世を掛けて言交し、夫婦約束したからは、そなたばかりは殺しはせぬ、おれも共々身を投げて、

お辰　そんなら死んで下さいますか。

徳太　そなたと一緒に死ぬ氣なれど、

〽五つの年から育てられ、産の親にも勝りたる義理ある母へ恩返しも、弟へ家督を讓らんと
わざと遊所へ通ひしも、そなたと深く言交し、今はまことの身の放埒、

ト徳太郎よろしく振りあつて、

情死をなさば親仁さま、母が歎きは如何ばかり。

お辰　そりやわたしとても同じこと、子飼の折から辰巳の上さんのお世話になり、御恩も送らず餘

まぬ譯。
德太　それも前世の皆約束。
お辰　今更いうて返らねば、
德太　兎にも角にも爰を立退き、
お辰　少も早く伯母の所へ、
德太　夜の更けぬうち行かうわいの。
〽野邊に萌え出し早蕨の、手に手を取りて立上る、こなたの藪の小蔭より塒放れし小雀が、
あなたこなたと、立舞ひしが、夜風はげしく飛び行きし、
ト兩人身支度をして上手へ行き掛ける、此前長太上手へ廻り、往來の人の思入にて行合ひ、左右へ避け、トゞ德太郎の肩へ行當り紙入を拔く、德太郎心附き、取返さうと引留める、長太德太郎を突き放し、ばた〳〵にて逸散に花道へはひる。
えゝ、紙入を盗まれしか。（ト此時花道の揚幕にて）
富藏　おれと一緒にうしやあがれ。
〽秩父の山もまだ白く、餘寒を凌ぐ溫め鳥、氣もあら鷹の旅人が、襟上摑み引來る。

ト花道より前幕の富藏、菅笠を頭へ掛け、長太の襟上を掴み出て来る、長太振放し逃げようとするを
捉へ、是れを振りにて舞臺へ來り、引張る。

徳太　何れのお方か存じませぬが、よく捉へて下さりました。

お辰　有難うござりまする。

富藏　もし、此の小僧は何を取りました。

徳太　わしが紙入を拔きました。

富藏　さあ、其紙入をこゝへ出せ。

長太　はい〳〵、出します〳〵。（ト紙入を出す、富藏取つて、）

富藏　中を改めて御覽じませ。

ト出す、徳太思入捨ゼリフにて紙入の中を改める、此時紙入の間からお辰の文を落す、富藏是れを拾ひ
見て懐へ入れる。

徳太　入れておいた金も其儘、何も紛失はござりませぬ。

富藏　それはよろしうござりました。（ト此時長太手拭を取る、若衆鬘、尻を下し下に居て、）

長太　今拔きました紙入をお返し申しましたから、どうぞ此儘わたくしを、お見脱しなされて下さりま

せ。

ト手を突いてあやまる。

富蔵 見りやお手前はまだ若衆、小悴の癖に太え奴だ。(ト合方になり、)

長太 太え奴だと思召すは御尤もでござりますが、全く餘儀なき貧の盗み、以前は巣鴨の植木屋で相應にして居りましたが、親仁が死んで引續き血癆で母が長煩ひ、十歳に足りない妹と弟がござりまするので粥を喰べても四人口、其日々々の買藥に煎じ詰つた痩世帶、

へ今更返らぬことながら、幼い折から兩親の教へが惡く野育ちに、手に覺えたる職もなく、晝は世間の使ひをなし、

夜は毎晩寐て居る母の、撫で摩りをいたしますが。

へ病ゆゑにか愚痴のみに、乾かぬ袖の雨の日は、使ひもなければ粥を炊く僅かなお錢に差支へ、兎やせん角と思ふも知らず、

兄さんひもじい／＼と、二人の者に泣き立てられ、是非なくいたす貧の盗み、不便な者と思召し如何様なりとお慈み下されし、親子四人が命をば、お助けなされて下さりませ。

へ染井へ續く大根畑、野芝に交る若草の霜に萎れし風情なり、

ト長太涙を拭ひじつと思入、徳太郎お辰は可愛さうだといふ思入あつて、

徳太 聞けば聞く程哀れな話し、さういふことなら此金を、少しなれども恵みませう。

ト紙入の金を出して紙に包む。

お辰 早うそれで兄弟の、二人の小供に御膳をば、どうぞ喰べさせて下さんせ。

長太 それは〳〵有難うございます、嘸お袋や兄弟が、悦ぶでございませう。

ト徳太郎遣らうとするを富蔵思入あつて、

富蔵 いえ、遣るのは止しになされませ。

徳太 なに、止しにせよとは。

富蔵 今こいつが哀れツぽく、言ふのは嘘でございます。

徳太
お辰 え、(トびつくりする。)

長太 もし〳〵、何で嘘を申しませう。

富蔵 えゝやかましい、默つて居ろ、世間知らずの人達だから、哀れな話しを實と思ひ、恵んでやるとおつしやるが、おれが側で聞いて居ては、百の錢でも遣られねえ。

長太 百の錢でも遣られぬといふ。

富藏　おれを手前が化かさうとは、如何に小僧ッ子だつて、あんまり目先きが見えねえ奴だ。
長太　え、（ト長太ぎつくり思入。）
富藏　盛り場稼ぎの巾着切りと、種を明かしたことならば、おれが幾らかくれて遣らう。
　ト是れにて長太、これまでといふ思入あつて、
長太　さう見抜かれた上からは、もう隱しはいたしませぬ、おつしやる通り盛り場稼ぎの巾着切の駈出しで、隼長太といひますものだ。
德太　え、それでは今の哀れな話しは、
お辰　ありや僞りでござんしたか。（ト兩人驚く。）
富藏　こんな奴らがいツくらも、世間にあるから油斷はならねえ、斯う見た所がまだ手前も年のいかねえ小僧だが、親の躾が惡いからこんな者が出來たのだ、巾着切でも盜人だから、喰ひ込んだら其體へ疵を附けにやあならねえぞ、今の内に心を入替へ擔ぎ商ひでもするがいゝ、斯うして掏摸を働くのをまさか親が許しもしめえが、手前の親は何者だ。
長太　えゝ、親は寺島の松五郎といひます。
富藏　むゝ、植木屋か。

長太　いえ、巾着切でござります。

富藏　むゝ、それぢやあ親仁も巾着切りか。

長太　仲間うちでも評判の巾着切でござります。それゆゑわつちも親仁を見習ひ巾着切をいたします。

富藏　惡い事を見習ふな、手前なども段々と是れから人になるのだから、何でも人のいゝ事をよく見習つて堅氣になり、天から授る其體へ疵を附けねえやうにしろ、巾着切をするやうな親仁の眞似をする日にやあ、どうで碌なものにやあなるめえ。

長太　取るにも足らねえ小僧ッ子に、御親切にその御異見、まことに有難うござります、是れから心を入替へて堅氣な者になりまする。

富藏　そりやあ何よりよいことだ、堅氣になるといふことなら、こりやあ少しばかりだが元手に遣るから、商賣しろ。（ト財布から金を出し、半紙に包み長太へ遣る。）

長太　これは有難うござります、家へ歸つて親仁にも此事を話しまして、巾着切を止めさせます。

徳太　思ひがけなくよいお人に、出逢つてお前の仕合せだ。

お辰　是れから惡いことを止め、眞面目なことをしなさんせ。

長太　今日を限りにすつかり止めます。

富藏　それぢやあ早く行くがいゝ。
長太　お禮は詞に盡されませぬが、是れでお別れ申しまする。
〽田川に張りし薄氷も、解けて流れて水清く、曲りし道を直に取り、染井の方へ急ぎ行く、
ト長太よろしく禮を言ひ、思入あつて花道へはひる。跡合方になり、
富藏　さて是れからはお前方、夜道に若い二人連れ、駈落者と見拔いたが、よもや違ひはありますまいね。
徳太　お察しの通り二人して、今宵駈落いたせし者。
お辰　何をお隱し申しませう、連立ち參りしわたしらは、
富藏　其名前は聞かずとも、伊丹屋の徳太郎さんに、又新宿で當時流行の辰巳屋のお辰さん、これも違ひはありますまい。
徳太　ついぞ是れまで逢はぬお方が、
お辰　どうして二人が其名をば、
富藏　知つて居るのは今しがた、紙入を見る其時に落しなさつた此文でさ。
ト懐から以前の文を出し、徳太郎に渡す。

徳太　そんなら是れで、

富藏　其以前からお前方が深い中だといふことは、人の話しに聞いて居ますが、どういふ譯で馴染をしなすつたのかあらましを、袖振り合ふも他生の縁、わたしに話してお聞かせなさい。

〽情も深き木の間より、さす月影に兩人は、風に亂れし青柳の姿繕ひ側へ寄り、

ト兩人こなしあつて、富藏の側へ寄り、合方になり、

徳太　さう御存じの上からは最早お隱し申しませぬ、今日測らずも此お辰を身受けなさうといふ客が、出來た所が其先きへ行くのを嫌ひ辰巳屋を、迯げて來たので跡先きの考へもなく二人連れ、葛西の知邊を便り、參りますものでござります。

富藏　して、其身受けの客といふは、何所の人でござります。

お辰　元牛込に居た人にて、去年十月地震後に日本橋の上槇町へ立派な家を拵へて、今では金の貸附けをする、藤岡藤十郎といふお人。（ト此内富藏よろしく思入あつて、）

富藏　大方さうであらうと思つた、其藤岡なら身受けをされて、行かぬはうがお前の爲めだ。

お辰　お前さんは藤岡さんを、御存じでござりますか。

富藏　知つてるどころか、おれの仲間だ。

お辰　え。

富藏　いや仲の好かつた友達だつたが、不圖したことから運が向き、世間で難儀な大地震に秩父の山で買込んだ其材木が高値に賣れ、滅法界な金を儲け、今ぢやあ玄關へ定紋附の高張を立てさせて、貸附所の旦那だが、明日をも知れねえ(ト思入あつて、)高の知れた出來星だから、明日のことは分らねえ、こりやあ行かねえ方がいゝ。

お辰　それゆゑ今夜駈出しましたが、心に掛るは藤岡さんから身受けの手附けに五十兩、持つて來たといふ話し。

富藏　そりやあ持つて來ようとも、お前の體がない日には、向ふで金も渡すまいし主人方でも受取るまい、其間に早く德太郎さんのお家へ出入りの頭を頼み、主人方の辰巳屋へお掛合ひなされたら、そこは頭の顔を立て忽ち話しが纒りませう、所で百兩倍にして手附の金を渡したら、抱へは我が子も同然ゆゑ、其當人が惚れてゐるこつちへ團扇のあがるは必定、定めてお家で親御さんが憎い奴だとおつしやらうが、それは世間の人前で、さぞお心でどの位お案じなさるか知れやあしねえ早く歸つて頭を頼み、此の子も安心するやうにお掛合ひをなされませ。

　トよろしく思入で言ふ、德太郎途方に暮れし思入にて、

徳太　見ず知らずのわたし共へ、親身も及ばぬお心添へ、何とお禮を申さうやら有難うござりますが、
富藏　詞の濁るは何ぞ外に、歸りにくいことでもござりますか。
徳太　さあ歸りましても差當り、手附の金の才覺が、
お辰　何所でか都合は出來ませぬか。
徳太　先頃からの放埓に、親類中へも不義理が出來、
お辰　わたしもお客へ無心も言はれず、
徳太　はて、どうしたら、
兩人　よからうぞ。
　〽思案に暮れて打つ時も、胸に響きてとつおいつ、涙に濕る無常音、又もや身をば捨鐘と覺悟きはめて吐息つき、（ト此内徳太郎お辰、思案に暮れし振りよろしくあつて、）
徳太　どう考へても思案に盡き、
お辰　死ぬより外はござんせぬ。ト富藏思入あつて、
富藏　如何に年が若いとてお前方は無分別な、死ぬといふがあるものか、差當つて辰巳屋へ渡す手附の當がなくば、わたしが貸して上げませう。

徳太　え、すりやお前さんが、
お辰　その金を、（ト兩人驚く。）
富藏　血道をあげて居なさるから、僅かばかりの其金に、迫つて二人死なうとは餘りといへば跡先き見ず、聞かねえ先きは兎も角も、死ぬと聞いては此儘に見脱せねえのがわつちの性分、幸ひこゝに入らねえ金が百兩あるから貸して上げよう、是れを持つて早く歸り、頭を賴んで主人方へ掛合つたらば、向うも悦び、直に話しが附きませう。（ト此内胴卷から百兩包みを出し、）
徳太　厚い御異見なされし上金まで貸して下さりますとは、世にも稀なるお志し、實に淚のこぼれます程有難うはござりますが、些細な金でもあることか百兩といふ纒りし、金をお借り申しましてはどうも心が濟みませぬ。
富藏　其御遠慮は御尤もだが、此百兩は返すも同然、
徳太
お辰　え、
富藏　いや、返す〳〵も御遠慮なく此百兩をお使ひなさい、決してお氣遣ひなものではござりませぬ。何を隱さうわたくしは、野州の、いや野州ではない加州の百姓、富藏といふ者だが、久しく江戸に居りまして一生懸命稼ぎ溜め、思はぬ金が出來ましたから今度國へ歸りますが、生れついて人

の難儀を見脱すことの出來ぬ性分、是れまで幾人人の難儀を助けましたか知れませぬ、人でなしの巾着切をまことの人にして遣りたく、異見をなして僅かでも金を持たして遣りました、盗人にさへ遣りますもの、色ゆゑ迷ふお前方、まして命に拘はること少しも惜しくはござりませぬ、心が濟まずば加州から出て來た時に本郷の、お家をお尋ね申しますから、其折お返しなされませ。

トよろしく思入、兩人嬉しきこなしあつて、

お辰　それ程までにおつしやつて下さいますゆゑ其お金を、お借り申して是れから歸り、頭を賴んで主人方へ話しをつけて百兩の、金を渡したことならば、わたしの體も片附きませう。

富藏　噂を聞けば辰巳屋の主人は分つた人だとあれば、先きの身受けを斷つてこつちになるに違ひない。

德太　折角の思召しゆゑ、此百兩をお借り申して、身受けの埒を明けますから、加賀からお歸りなされたら、必ずお出で下さりませ。

お辰　其時お金をお返し申し、厚くお禮を申しまする。

富藏　それまでおれも此娑婆に、（ト思入あつて、）いや、娑婆と冥土の別れ道、六地藏から一丁行くと、駕屋があるから更けねえうち、駕籠に乘つて歸りなさい。

德太　左樣なれば此儘に、

お辰　是れでお別れ申しまする。
富藏　そこまで送つて上げたいが、こつちも先きを急ぐ身に、
德太　いえ〳〵それには及びませぬ。
お辰　早う加賀からお歸りを、
德太　お待ち申して、
お辰　居りまする。
富藏　さあ〳〵早く行きなさい。
兩人　有難うございます。
〽今は心の雲晴れて、あした待たるゝ曙町、月夜烏や夜霞に手を引連れて急ぎ行く、
ト兩人嬉しき思入にて花道へ行く、振返り〳〵禮をいふこなしあつて花道へはひる。富藏跡を見送りて、
富藏　いつぞや四谷で拾つた金を、思ひ掛けなく今夜返し、危ない二人の命を助けた功德でおれが命も亦二年位はもつだらうが、是れにつけても藤岡は情も知らねえ高利貸し、長へ命がありやあい、が、（ト本釣鐘思入あつて、氣を替へ）月のあるのを幸ひに、少しも早く板橋へ、泊つてゆつくり夢

でも見ようか。

ト此以前下手へ長太窺ひ出で、富藏の金を取らうといふ思入にて、つか／＼と側へ來る。

や、手前はさつきの掏摸の小僧か。

長太　ちよつとお禮に參りました。（ト懐へ手を差入れるを拂ひ退け、）

富藏　大人そばへをしやあがるな。（トきつと見得、長太恐れしこなし、）

〽川水早き板橋の、驛路さして、

ト富藏笠を肩へかけ、せゝら笑ふ。長太あやまるこなし。本釣鐘に驛路を冠せ、よろしく三重にて、

幕

四幕目

熊谷饂飩屋の場
同明神縄手の場

【役名——野州の富藏、饂飩屋六兵衛、博徒生馬の眼八、眼八子分女鹿の六藏、同野狐の勘六、駕舁ちばの仁助、同やみの三治。六兵衛娵おさよ實は富藏女房おさよ、おさよ娵お民等。】

（熊谷宿饂飩屋の場）——本舞臺三間の間茅葺の家根丸太柱、一面の土間、正面三尺縄暖簾の出入り口、上手板羽目酒樽を二つ積み、側に燗徳利を置ひ、下手板羽目膳棚、爰に饂飩箱、丼、膳を載せ、

此前平舞臺に平釜を掛けし土竈、此脇置流し水桶手桶小道具を置く、三尺幅の床几を所々に並べ、上の方九尺常足の二重障子家體、下の方生垣、後在體の遠見、門の柱に二六うんどん盛かけといふ行燈を掛け、總て熊谷宿饂飩屋の體、こゝに六兵衛白髪鬘袖無半纏股引にて火を焚き居る、此側にお民銀杏髷前垂掛け小娘にて盆を持ち立ちかゝり居る、眞中の床几に△○半合羽脚絆草鞋旅人のこしらへにて菅笠を側へ置き、燗德利と丼を載せし膳を控へ饂飩を喰つて居る、側にちばの仁助、やみの三次半纏股引草鞋の旅の駕舁にて、門口へ四ツ手駕籠を置き息杖を持ち立ちかゝり居る、此見得追分節にて幕明く、

仁助　もし旦那、極く安く參りますが、深谷まで乘つて下さいましな。

三次　昨夜の雨で此先きは、大層道が惡うございます。

△　鴻の巣から四里の丁場を、乘つて來たので腰が痛い。

○　どうで今夜は深谷泊り、ぶら〳〵是れから歩く積りだ。

仁助　そりやあさうでもござりませうが、今朝から暇で二人とも錢の顏をまだ見ませぬ。

三次　幾らかくらは、一杯呑まして下さいますりやあ、それでよいのでござります。

△　おい姐さん、湯を持つて來てくんな。

お民　はい〳〵畏りました。

六兵　其土瓶は冷めたらうから、熱いのをお上げ申せ。（ト釜の湯を土瓶へ入れる、お民是れを持つて來て、）

お民　はい、お湯を持つて參りました。（ト兩人顔を見て、）

△　此子は大層よい器量、お孃さんといつてもいゝ。

○　江戸にもこんな子は少ない、田舍へ置くのは惜しいものだ。

仁助　熊谷の饂飩屋の娘といつては、此道中で大評判でござります。

三次　もう二三年たつたらば、豪氣な金になりませう。

△　爺さん、是れはお前の子かえ。

六兵　いえ、是れは孫でござります。

○　大方さうであらうと思つた。

ト合方になり、奥よりおさよ前垂掛け世話女房のこしらへにて出來り、

さよ　父さん、出しがらを干して置きましたよ。

六兵　おい〳〵、それは御苦勞だつた。（トおさよ旅人に向ひ、）

さよ　これはお客さま、よう入らつしやいました、春になつても雪が多く、まだお寒うござりまする、若い衆さん、釜前へ行つてお當りなさい。

駕籠二人　あい〳〵、有難うございます。

△　それでは此のお上さんが、其子のおつかさんだね。

六兵　はい、左樣でございます、

△　鳶が鷹だと思つたが、是ではいゝ子が出來る筈だ。

○　定めて是れぢやあ御亭主も、いゝ男に違ひない。

仁助　所がどんな男だか、亭主は別れて今はなく、

三次　これで若後家だから氣が惡い。（ト△思入あつて、）

△　爺さん、お前の所では旅人は泊めないかえ。

六兵　旅籠屋でございませぬから、お泊め申すことは出來ませぬ。

△　お前の所で泊めるなら、今夜爰へ泊りたいのだ。

仁助　いや、お客さまも助平だな。

△　凡そ生きとし生けるもの、助平ならざるものなしだ。

さよ　あなた方のお詞では、お江戸のお方でございますな。

○　詞は國の鑑にて、お察し通り江戸ッ兒さ。

△　越後の方に川があつて、八百八後家を買つて見ようと、助平心で出掛けるのだ。
六兵　もし、何ぞ江戸に珍らしい、變つた話しはござりませぬか。
○　替つた話しは、去年の十月二日の晩の大地震。
六兵　方角附けや何やかやで、それは存じて居ります。
仁助　聞けば江戸で公方樣の、金を盗んだ大泥坊が、あつたさうでござりますな。
△　おゝ、御金藏から四千兩盗み出した者があるが、未だにそいつの行方が知れぬ。
三次　はひる所もあらうのに、そんな所へはひるとは太え奴でござりますな。
六兵　定めし嚴しい守り手のある事でござりませうに、そこへ忍び込むといふは、守り手の暇でござりまするな。
仁助　然し天の網がかゝつたら、今にそいつも捉へられ、お仕置になりませう。
六兵　斯ういふ者はどのやうな、御刑罪になりまする。
△　盗んだ場所が惡いのに、四千兩といふ金ゆゑ。
○　先づ刑罪は、江戸中を引廻しの上磔だ。
さよ　え、それでは盗んだ其者は、磔になりますのか。

六兵　さういふ重い刑罪にお上でなさらずば、世の人の見せしめになるまいわいの。

△　ときに、勘定は幾らだな。

六兵　はい、饂飩が四杯に酒が二合、百三十二文でござりまする。

△　天保を二枚上げるから、釣残は其子にやつて下さい。

ト財布から百錢を二枚出しておさよに渡す。

さよ　それは有難うござります。これお民、お客さまへお禮を申しや。

お民　はい、有難うござりまする。（ト辭儀をする、と旅人兩人立上る）

さよ　まあお靜かにいらつしやりませ。

仁助　もし旦那、深谷まで乘つて下さいましな。

△　今もお前にいふ通り、四里の丁場で飽きたから。

○　是れからぶら〳〵歩くのだ。

仁助　そんな事をおつしやらずと、

三次　どうぞ乘つて下さいまし。

ト追分節になり、旅人先きに駕舁明き駕籠をかつぎ、捨ゼリフにて附いて上手へはひる、跡時の鐘に

方、お民は膳の上へ丼と燗德利を載せ片附ける、跡におさよ何か心にかゝる思入にて傍へ居る、六兵衞是れを見て、

六兵　これ娘、何をそちは考へて居るのだ。

さよ　さあ今の話しを聞くに附け、心に掛りますするゆゑ。

六兵　そちが心に掛るといふは、いつぞや別れた破落戸富藏が事であらうがな。

さよ　きのふけふのやうなれど算へて見ればもう八年、あれから江戸へ行つたといふ話しを人から聞きましたが、何の便りもないからは、眞面目な人にならずして、やはり盜みを。（ト言ひ掛けるを、）

六兵　えへん〳〵。（ト咳に紛らし言ふなといふ思入、お民茶碗へ湯を汲み持ち來り、）

お民　ぢいさん咳が出ますなら、お湯をお上りなさりませ。

六兵　おゝ、よく氣が附いた、忝ない。（ト湯を呑む、おさよ思入あつて、）

さよ　別れたけれど子まである夫婦の中は忘られず、今では何をして居なさんすか。

六兵　どうで心の曲つた奴、碌なことはして居るまい。

お民　かゝさんわたしのとゝさんは、江戸に居ると言はしやんしたが、なぜ歸つては下さんせぬか。

さよ　そのとゝさんは譯あつて、かゝさんと別れたれば、家へは歸つておいでゞない。

お民　ちいさい時ゆゑ、とゝさんのお顔をしつかり覺えねば、どうぞ逢して下さりませ。

六兵　委しい事を聞かさぬから、さう思ふは尤もだが、そちが親仁は破落戸、それゆゑ別れてしまうたれば、今ではあかの他人同然、若し又ひよつと來ようとも、おれは物をも言はぬ積り、小供心に逢ひたいといふのは更々無理ではないが、逢はせることはならぬから、死んだと思つてあきらめやれ。

お民　それでは別れたとゝさんに、逢ひますことはなりませぬかいな。（ト泣く。）

さよ　心が直つて人らしい身分にならねばお詫もならず、幾らそなたが逢ひたがつても、逢はせることはならぬわいの。

お民　悲しいことでござりまする。（トおさよに縋り泣く、六兵衞不便だといふ思入にて）

さよ　まだそれよりか悲しいは、夫のない身に此邊で疫病神といやがられる生馬の眼八が、女房に呉れと父さまへ毎日迫る無理難題、惡い人でも夫があればあのやうな事は言はれまいに、悔しいことでござりまする。

六兵　あいらが何と言はうとも、恐るゝことはなけれども、いつぞや粉の仕入に困り、眼八から五兩借りたが未だに金が返されず、それゆゑ強いことも言はれず、程よく言つて延ばして居るも、手ひ

どく言はゞ無法者、そちを山へ擔いで行き手籠めにせまいものでもない、それが何より氣遣ひなれば、晝はよけれど夜に入つては、必ず外へ出ぬがよい。

さよ　ほんにそれを思ひますと、夜の目もろくに寐られませぬ。

六兵　事によつたら此土地を、又引越さずばなるまいわいの。

さよ　あゝ苦勞の絶えぬことぢやわいなあ。（ト時の鐘、床の淨瑠璃になる。）

〽遠山の雪は解くれどとけやらぬ、小川の岸の薄氷、春とはいへど、まだ梅も殘る寒さにとぢられて、花咲かぬ身の親と子が、蕾のまゝの娘をば、不便と胸も曇り勝ち、降らぬ内にと旅人が、

ト此内六兵衞おさよ、お民を不便だといふ思入。時の鐘。花道より前幕の富藏笠を冠り出來り花道にて、

富藏　人の話しに野州にて、娘を附けて離縁した女房が舅と三人で、今熊谷に居ると聞いたが、何所に居るか雲を當て、幸ひ向うの饂飩屋で一杯喰つて餘所ながら、話しのやうに聞いて見よう。

〽軒へ掛けたる行燈を、目當に門へ來かゝりて笠を脱ぎ捨て内へ入り、

ト富藏思入あつて舞臺へ來り、笠を脱ぎ、

おい、饂飩の盛りを一杯と、酒を一本附けてくんねえ。

六兵 はい〳〵畏りました、これへお掛けなされませ。これお寒いからお火を上げろ。

さよ あい〳〵。

富藏 どれ、草臥を休めようか。

〽掛ける床几も緣の端、火鉢へ竈の火を取りて、おさよは思はず顏見合せ。

ト富藏床几へ腰を掛ける、おさよは古びたる火鉢へ竈の火を取りて、富藏の所へ持つて來て顏見合せびつくりなし、

さよ や、お前は、

富藏 おゝ、おさよか。

さよ 富藏さん、逢ひたうござんした。

お民 それではお前はとゝさんか。

〽思ひがけなく女房が、嬉しき餘り取附くを、親仁は見るより引分けて、

トおさよお民、富藏に取附くを、六兵衛見てつか〳〵と行き、おさよお民を下手へ遣り。

六兵 これ〳〵おさよ、どうしたものだ、そちが亭主の富藏は離緣したればあかの他人、何所のお方か知れもせぬお客さまへ失禮な、何をづか〳〵物を言ふのだ。

〽昔氣質に離別なし、夫婦にあらぬ道を立て、態と他人のあしらひに、

ト六兵衛おさよに呑み込ませ、よろしく思入あつて、

へゝゝゝ、お客樣へ對しまして失禮なこと申しまして、御免なされて下さりませ。

富藏　お前の堅い了簡では、さういふのは尤もだが、月日もたつたことなれば、今更そんなこと言はずと。

六兵　いえ〳〵言はねばなりませぬ。（ト合方になり、）是れなる娘にお前樣によく似た亭主がござりましたが、酒が好き博奕が好き女郎買も大好きで、自分一人遊び歩き女房子に難儀を掛け困りものでござりましたが、年を取つたら直らうと辛抱して居りますうち、金に詰つて盜みをなし、終に其身に疵を附け、人交はりのならぬ身に一度江戸へ行くといふゆゑ、離縁をなして去狀取り、娘と孫を引取つてわしが育てゝ居りまする。今お話し申す其男が爰へ尋ねて參らうとも、敷居内へは入れまいと錠を下して居りまする、お前さまは似たお方、見ず知らずのお客さまゆゑ、ゆつくりお休みなされませ、餘計な事をお話し申し御免なされて下さりませ。どれ饂飩をこしらへませうか。

詞を殘し釜前へ、行く年寄りの心根を、思ひ遣りて餘所々々しく、

ト六兵衛思入あつて下手の釜前へ行き、膳立なするゝ富藏も思入あつて、

富藏　もしお上さん、お茶を一杯下さいな。

さよ　はい〳〵。

〽茶を汲み取りてかたへなる、盆を鏡に鬢の毛の、そゝけを搔くも我が夫に、見する女子の身嗜み、

ト　おさよ土瓶の茶を茶碗へ汲み、傍にある黑き盆を取りちよつと顏を見て櫛で髮をかき、盆へ茶碗を載せ持ち來り、

お客さまには今日は、どちらからお立ちなされました。

富藏　上尾から立ちましたが、もう何時でござりますな。

さよ　まだ八つ半でござりませう。さうして是れからどちらの方へ、お出でなさるのでござりまする。

富藏　今加州の金澤の身寄りの所にお袋が、世話になつて居ますが、長の病氣で逢ひたいと態々手紙が來ましたから、もう取る年に今生の別れにならうと思ふから、是れから加州へ行きますのだ。

さよ　え、すりやおつかさんが御病氣とか、わたしがお側に居つたらば御看病をいたさうもの。

六兵　これ〳〵娘、何を言ふのだ、お客さんの女房か何ぞのやうに、入らぬことを。

さよ　つい此身につまされまして、お上さんがあつたらば、今わたしが言つたやうに、おつしやいませうと存じまして。

六兵　そんな餘計な苦勞をするから、年中癪で煩らふのだ。

富藏　それぢやあお前は癪持ちかえ。

さよ　今お聞きなさる通り、八年後までわたくしも夫がござりましたれど、仔細あつて別れてから便りにするは父さんばかり、是れとても最う年の上、もしもの事があつたらば、誰を力に仕ようと思ひ、それを苦にして四五年此方、癪が持病になりましたわいな。

六兵　これ孫よ、お客さまへこれを上げろ。

　トぢつと思入、此内六兵衞饂飩をこしらへ、膳の上へ饂飩箱、燗徳利猪口を附けて、

お民　あい〳〵。

　〽返事も輕くまめ〳〵しく、膳を携へ差出せば、（トお民膳を持ち富藏の前へ出す。）

富藏　これが今いふ破落戸の、お前の亭主の娘だね。

さよ　はい、左樣でござりまする。

富藏　お前の年は幾つだえ。（トお民に聞く、）

お民　はい、今年十二になりまする。（ト富藏ちよつと指を折り考へる思入あつて、）

富藏　年より形は大きい方だが、利口さうないゝ娘、親のない子を此のやうに馬にも踏ませず育てるのは、なか〳〵大抵なことぢやあねえ。

さよ　これもみんな父さんの、お蔭でやう〳〵育ちました。

富藏　これ、爰へ來て顔を見せねえ。

お民　あい〳〵。

〽側へ引寄せ顔打ち守り、親はあれども其甲斐も、長い浮世に居られぬ體、不便のものと恩愛に、思はず落す一雫、

ト富藏お民を引寄せよろしく思入あつて涙をこぼす、是れをお民見て、

若しお客さま、何でお泣きなされます。

富藏　おいらも丁度お前のやうな娘が一人あつたけれど、夫婦別れをする時に女の子は女に附くが大法ゆゑに、女房に附けて離縁したが、今頃はお前位になつて居ようと思ふと、我が子に逢つたやうで、つい涙がこぼれたのだ。

お民　わたしにも父さまはありますさうでございますが、餘所へ行つてお出でゆゑ、まことに逢ひたう

ござります。

富藏　それぢやあ手前も、いや、お前も親に逢ひてえとか、そこが眞實親子の情合、こりや斯うなくてはならねえことだ。

お民　お客さまが父さんなら、嘸嬉しうござりませう。

さよ　おゝ、嬉しい所ぢやないわいの。

富藏　おれも二人が女房子なら、長年逢はずに居たことだから、どんなに嬉しいか知れやあしねえ。（ト思入あつて、）曾我狂言のせりふにいふが、親はなくとも子は育つと、よく大きくなつたなあ。

へ背撫でさすれば子は賢しく、（ト富藏背中を摩る、）

お民　もし、饂飩が冷めたくなりますから、お早くお上りなされませ。

富藏　思はぬ話しで胸がつかえた、先づ饂飩より一杯やらう、お上さんついで下さい。

さよ　はい／＼、（ト合方にて、酌をなし、）たゞ饂飩ばかりゆゑ、何もお肴がござりませぬ。

富藏　何も肴はいりやあしねえ、此子が何より今日の肴だ、（ト呑んで、）お上さん一つ上げよう。

ト猪口をさす。

さよ　有難うはござりますが、お酒は斷つて居りまする。

富藏 そりやあ何で斷ちなすつた。
さよ 別れました其夫と一つになられまするやう、金毘羅さまへ斷ちました。
富藏 むゝ、それでは酒の相手もないか。
六兵 お一人でお淋しくば、お合をいたしませう。
〽襷を取りて釜前より、ほく〳〵親仁が立ち出れば、（ト六兵衛思入あつて上手へ出る、）
富藏 それぢやあ爺さん、お前へ上げよう。（ト猪口をさす、六兵衛受けて、）
六兵 有難うござりまする、（トおさよ酌をして六兵衛呑み、）御返盃をいたしまする。
ト富藏猪口を受けて、
富藏 どれ、酒の肴に饂飩を喰はうか、（ト一口喰つて、）こりやあ大層いゝ饂飩だ。
六兵 粉のよいのを使ひますから、二六にしてはようござります。
富藏 なか〳〵出しもいゝ出しだ。（ト合方、捨ぜりふにて饂飩を喰ふ。）
六兵 お客さまもお娘御がござります樣子ゆゑ、面白くないお話しだが、年を取ると兎角我が子の自慢が仕たうござりまする、
〽心は淸き塵紙に、鼻打ちかみて座を進み、（ト六兵衛鼻をかみ思入あつて、）

さつきもお話し申しましたが、娘が亭主と別れましたは丁度今年で八年あと、年も若けりや綺麗に見え、所々から貰ひに來ましたけれど、何所で聞いて來たことか貞女兩夫に見えずと、操を守つて縁談の話しは堅く斷りまして、是れが成人したならば聟を取つて家を立てさせ、生涯後家を立てますと、若い身そらで髮も結ばず、朝から晩まで水仕の働き、我れは知らずにしまうたれど子には覺えさせたいと、毎晩夜業に絲を取り、其賃錢で手習讀物三味線までも師匠で習はせ、手前がわきへ方附けば樂の出來る體をば、八年此方身を苦しめ、何も知らぬおれゆゑに敎へはせぬけれど親に勝つた此おさよ、別れた亭主は是れほどに、貞女を立てると知りますまい。

富藏　それはまことに感心だ、別れた亭主が聞かれたら、どの位嬉しからう、あかの他人のわしでせえ實に涙がこぼれます。（ト富藏よろしく思入）

さよ　只今親仁が申す通り、よくもない器量なれど年頃ゆゑに袖褄引かれ、實にうるさうござんすからいつその事に奉公に出ようと思ひましたれど、此子を連れて出られもせず、跡へ殘せば年取りし父さんの御厄介、又父親がござりませねば、明け暮れわたしの側を放れず附纏ふのが不便さに、八年此方辛抱して辛い浮世を送りますも、緣があつたら又一緒になられることがあらうかと、神や佛へお願ひ申し、果敢ない月日を待ちまする。

わたしは毎晩か、さんより先きへ床へはひりますが、一寐入りして目が覺めても、まだか、さんは夜業をして、神さまや佛さまへ早う元々になりますやうにと、お願ひなされてゞござりまする。

六兵　まだ感心なは日に一度、わしに隱して蔭膳を、別れた日より今日までこなたへ、いや、別れた亭主へ供へる眞心、度々目には掛つたれど、咎めたならばあしたから供へることがなるまいと、見ぬ振りをして居りました。

富藏　聞けば聞くほど貞節な、又と世間にない女房、いや、亭主に別れたこなたの娘御、はて感心なことだなあ。

〽貞女を立つる女房の、話しに流石惡黨も、心は善に恩愛の絆に吐息つき出す、鐘に哀れぞ添へにける。

ト富藏濟まねえことをしたといふ思入、時の鐘になり、六兵衛氣を替へて

六兵　今打つたのは七つの鐘、明日の仕込みに穀屋まで、おれはちよつと行つて來るから、跡でゆつくり、いや、お客様へ饂飩のお替り、お燗が冷めたら溫めて、よく氣を附けて上げてくれ。

さよ　あい〳〵承知しましたわいな。

六兵　明日の仕込みに參りますから、お客さまには御ゆるりと。

富藏　それではお前は宿場まで。

六兵　粉を貰ひに參ります。

〽跡で娘に遠慮なく、積る話しをさせようと、それとは言はねど親の慈悲、心殘して出で、行く。（ト六兵衞よろしく思入あつて花道へはひる。）

〽跡見送りて女房子が、物をも言はず縋り附き、

トおさよお民門口より向うを見送り、嬉しき思入にて富藏に縋り附き、

さよ　こちの人。

富藏　おさよ。

さよ　よう尋ねて來て下さんしたな。

お民　かゝさん、もう父さんというてもよいかえ。

さよ　おゝ、ぢゝさんが内に居ねば、父さんと言うてもよい。

お民　父さん、逢ひたうござりました。

富藏　おゝ尤もだ〳〵。

〽右と左に取縋る、別れ程經し妻と子に、大膽不敵の富藏も浮世の義理に締搦まれ、悄し涙

に暮れたりしが、（ト富藏兩人を引寄せよろしく思入あつて、）

おれも人らしい身になつたら、誰か頼んで詫をばなし、元の夫婦にならうと思つて種々雜多な事をしたが、する事なす事思はしからず、それゆゑ便りを仕ようにも面目ねえからしねえのだ、不實な者と思ふであらうが、實は難儀を、いや、何と言譯しようとも、みんなおれが悪いのだ、過ぎたことは堪忍してくれ。

〽頭を下げて詫びければ、妻は涙を押拭ひ、

さよ　お前の心が直つたら、父さんへはどの様にも、わたしがお詫びをしませうから、

〽どうぞ是れから爰に居て、又睦まじう元々の夫婦になつてわたしらの、力になつて下さりませ。

達者なやうでも取る年ゆゑ、

〽もし父さんに間違ひの、あつた時にはまだ年も、行かぬ娘とたゞ二人、

跡に殘つてどうしませう。

〽どうしませうとかき口説けば、娘も共に泣きながら、

お民　今ぢや樣がなくなつても、わたしが十五か十六なら、

〽どんな奉公いたしても、力になつて上げますれど、今年やう〳〵十二ゆゑ、機屋へいても

機織に、なられませねば給金も、

ほんの僅かなことなれば、

〽皆か〻樣の御苦勞ゆゑ、持病の癪が重るのみ、どうぞ此儘內に居て、

力になつて下さりませ。

〽年は行かねど母の苦を、思ふ心のいぢらしさ。

さよ　わたしら二人を不便だと、思ふ心があるならば、去狀戾して元々の夫婦になつて下さりませ。

〽妻と娘がかき口說く心の內を察しやり、

トこれまでおさよお民よろしくあつて、富藏も切なき思入にて、

富藏　元別れたもおれが惡さ、そつちの科はないことゆゑ、疾うから堅い爺さんに詫びをせねばならぬわけ、今更いふも言譯らしいが、まだ年若な身の上だから大方二度の亭主を持ち、立派に暮して居るだらうと、實の所は思つて居たが、今日思はずも逢つて聞けば碌でなしの此おれに、義理を立て、亭主も持たず、夜の目も寐ずに內職して、子に手習や讀物から三味線までも敎へたとは、實に見上げた心立て。

〽なぜ此樣な貞女をば、人でなしの富藏と、出雲で緣を結んだか、さりとは神も分らねえ、然しおれも不圖したことから今では困らぬ身になつた、おぬしも知つてる藤岡さまの息子さんが、御作事の御用達になられたので、おれも幸ひ下役に遣つて貰つて、先づどうか人間らしくなつたから、近い內に爺さんへ詫びを仕ようと思つた所、思はず爰で逢つたのは、分らぬ神の引合せ、直にも足を止めたいが、餓鬼の折から苦勞を掛けたたつた一人のお袋が加州の緣者へ引取られ三年越しの永煩ひ、片輪な子ほど可愛いと息ある內に富藏に、明け暮れ逢ひたい〳〵といふので態々手紙が來たゆゑ、是れから加賀へ逢ひに行くのだ、早くは廿日か廿五日、遲くも來月末までには、必ず爰へ歸つて來るから、それまで待つて居てくりやれ。

〽事を分けたる富藏の、詞におさよも是非なく〳〵、

さよ　今までさへも長の年月、便りのないのに待つて居たゆゑ、僅か一月そこらのこと、待たれぬことはないけれど、親子が脫れぬ難儀があれば、ならうことなら五六日逗留して下さりませぬか。

富藏　親子が脫れぬ難儀とは、それはどういふ譯あつて。

さよ　此近邊で人のいやがる、牛馬の眼八といふ破落戶がわたしに惚れ、是非女房に貰ひたいと此間から父樣を、毎日責めて居りまする、何と言譯いたしてもいふ事きかぬ無法者、以前の夫が歸りま

したと、申さば向ふも仕方なく再び何とも言ひますまい、其斷りを言ふ間爰に居て下さりませ。

富藏　加州へ行くのが外の用なら、頼みを聞いて逗留仕ようが、年の上の大病に明日をも知れぬとあるからは、四五日たつて行つた時昨日死んだと言はれたら、餓鬼の折から苦勞を掛けた不孝の詫びも出來ぬわけ、それゆゑ直に行かねばならねえ、然しこつちも差掛るさういふ難儀があることだから、加州へ行つてお袋に、逢つたら直に歸るから、少しの間待つてくれ。

さよ　さういふ譯を聞きましては、又無理にとも言はれねど。

お民　あの眼八がぢゞ樣を、責めるが悲しうござりまする。

富藏　二人が難儀を見捨てゝ行くも、心にかゝることなれど、親が此世の別れゆゑ。

さよ　まことに是非もないことなれば、

富藏　行かねば先きの身寄りへ濟まず、

さよ　こちらもつゞまる身の難儀、

富藏　四鳥にかゝる苦しみも、

さよ　是れみな二人が身の因果、

富藏　惡い心を改めて、

さよ　再び元の夫婦となり、
お民　父さま母さま揃ふたら、
さよ　嘸や嬉しいことであらう。
富藏　それも此身の、(ト思入あつて、)おさよ、
さよ　こちの人、
富藏　義理ほど辛い、
兩人　ものはない。

〽親子三人手を取交し、今に惡事が露顯なし苦勞を掛けるが悲しやと、身の果敢なさをかこち泣く、涙の雨の小止みなく、川水增る如くなり。

ト富藏我が身を思ひ、三人よろしく愁ひの思入あつて泣落す、

〽折から爰へ牛馬か、親仁を引摺り出來り、

ト追分節の合方へ稽古囃子を冠せ、花道より眼八着流し一本ざし、雪駄、長脇差のこしらへにて出來る、跡より六藏、勘六着流し一本ざし、雪駄、子分のこしらへにて、以前の六兵衛の手を取り出來り、花道にて、

六兵　どうぞ御免なされて下さりませ。

六藏　えゝ、やかましい、

兩人　きり／＼うせろ。

ト右の鳴物にて六兵衛を引立て舞臺へ來て、六兵衛を突放す、富藏は旅人の積りで後の床几へ掛ける

おさよ前へ出で、

さよ　こりや父さんを、どうなさんすのぢや。

六藏　どうするものか知れたことだ、後の月から今日明日と、お前をくれる返事をせず、

勘六　此界隈で人の恐れる生馬の眼八親分、よくも馬鹿にしやあがつたな。

六兵　何でわしが親分を、馬鹿などにいたしませう。（ト眼八上手床几へ腰を掛け、）

眼八　なに、しねえことがあるものか、こなたの娘を女房にくれろと言つたは後の月、粉の仕入れに困るといふから元手を貸して遣つた後、しかも十日前のこと篤と娘に言ひ聞かせお返事をいたしますと言つてそれから二月越し、木折で行かぬが色の道ゆゑ、短い氣をば長くして、是れまで返事を待つて居たのだ。

六藏　熊谷土手の吹きさらし、僅な見世の商ひに運も傾く茅葺屋根、一杯二六の饂飩屋より頭の女房に

なる時は、姐御々々と立てられて親仁も直に一緒に引取り、蒲團の上の樂隱居。

勘六　廿四拜や善光寺へ參る道者の立場茶屋、胼を切らして茹で揚げた饂飩を水で洗ふより、髮も姿もさつぱりと仕立おろしに洗ひ髮、內が博奕の大賭場に何でもいふ目の出ることだ。

六藏　それを厭だと斷るのは、貧乏神に取附かれたのか。

勘六　此せち辛い世の中に、あんまり慾を知らねえことだ。

眼八　是れまで二人の子分の者に任して置いたが、べん〳〵とあんまり埒が明かねえから、今日は自身に生胸の鐙を踏張り乘り出したは、否と言はうが應と言はうが、轡をはめて引いて行き、落馬をしても怪我のねえやう、蒲團の上の長馬場で、假令ぴんしやん跳ねようとも此の眼八が乘り試すからさう思へ。

六兵　此間から申す通り娘に願ひがござりまして、どうも只今あなたの方へ上げますことがなりませねば、御免なされて下さりませ。

眼八　どういふ願ひか知らねえが、おれが願ひを破らせて、是非とも女房に貰はにやならねえ。

六兵　そりや親分にも似合ひませぬ、御無體でござりまする。

眼八　おゝ無體合點、無理承知、言ひ出したからは何所までも、言ひ條立てにやあ了簡しねえ。

六藏　二人の者をもどかしく、頭が自身に出て來たからは、

勘六　今日はいなやの返事をば、すつぱり仕にやあ濟まねえぞ。

六兵　その御返事はもう少々、お待ちなされて下さりませ。

六藏　その少々も聞き飽きた。

勘六　今日は少しも待たれねえぞ。

眼八　親仁がぐづ〳〵言はうとも、娘が得心すればいゝのだ。（トおさよに向ひ、）さあ、おれが女房になつてくれるか。

さよ　さあ、それは、

眼八　但しは、いやか。

さよ　さあ、

眼八　得心するか。

さよ　さあ、

眼八　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。

眼八　器用な返事をしてくりやれ。
〽笠にかゝつて眼八が脅しかゝれば是れまでと、おさよは胸に思案を極め。
ト眼八きつといふ、おさよ思入あつて、
さよ　この御返事は出來ませぬ。
眼八　なに、出來ねえとは、何ゆゑに。
さよ　わたしや亭主がござりますゆゑ、お斷り申しまする。
六藏　此小娘を拵へた親があつたといふは聞いて居たが、
勘六　久しい跡に離縁して、今ぢやあ後家の一人身だ。
さよ　いゝえ、立派な亭主があります。
眼八　むゝ、亭主があれば無理にとも言はれぬ譯だが何所にある。
さよ　さあ、其亭主は、
眼八　何所の誰だか、それを吐かせ。
〽退つ引きならぬ手詰の詞、始終後に窺ひし富藏怺へず前へ出で、
ト おさよ富藏と言はうかと富藏を見る、富藏も是れを見兼ね、

富藏　其の亭主は是れに居ります。

三人　や、（トびつくりなす、合方きつぱりとなり、富藏前へ出る。）

眼八　そんならこなたが、

六藏　おさよの、

兩人　亭主か。

富藏　野州產れの富藏と申し、名もない者でございます、則ち是れなる娘の親おさよが亭主でござります。

眼八　いよ〳〵それに違へねえか。

富藏　何で僞りを言ひませう。

六兵　八年以前故あつて、夫婦別れをいたしましたが、

さよ　今日此家へ歸りました、わたしの亭主でござります。（ト是れにて六藏お民を引附け。）

六藏　これ娘、これは手前の實の親か、

勘六　但しは此場の間に合せか。

六藏　噓をいふと、

兩人　殺してしまふぞ。
お民　いえ〳〵嘘ではございませぬ、實の父さんでございまする。
六藏　それではまことの親であつたか。
富藏　お疑ひは晴れましたか。
眼八　何ぼ横紙破りでも、亭主があれば首ッたけ惚れて居ても仕方がねえ、おさよはすつかり思ひ切つた。
六兵　それでは娘をすつぱりと、
さよ　思ひ切つて下さりまするか。
眼八　おゝ如何にも思ひ切つた代り、色氣を捨てゝ是れから慾だ、いつぞや貸した五十兩あれをそつくり返してくれ。
六兵　えゝ、（ト六兵衛びつくりして、）めつさうなことおつしやりませ、五十兩といふ大金を何でわしが借りませう。
六藏　これ〳〵爺さん、如何に年の上だといつて、こなたは耄碌したといふのか。
六兵　年は取つても借りた物を、忘れるなどゝいふやうな、そんな耄碌はいたしませぬ。

眼八　これ、書いた物が物を言ふが、それでも借りぬと強情いふか。
六兵　書いた物が物をいふとは。
眼八　此證文をとつくり見やれ。

〽巧みも深き紙入より、證文取出し目先きへ突き附け、

ト紙入より證文を出し、開いて六兵衞に見せ、

これでも覺えがないといふか。（ト六兵衞證文を見てびつくりなし、）
六兵　やゝ、こりや五兩の證文へ十を加へて五十兩、
さよ　ても恐ろしい巧み事。
眼八　それぢやあ是れを謀書といふのか。
六兵　筆を加へた證文ゆゑ、それは謀書でござりまする。
眼八　うぬ、いけ太え親仁だなあ、（ト合方きつぱりとなり、）高が二六の饂飩屋で釜の煙りも立兼ねて、そこら爰らに借りが出來、輕井澤へおさよを賣り、それで始末を附けるといふゆゑ、元より惚れてる女のこと女郎にするも可愛さう、救つてやる氣で五十兩貸して遣つたも魚心、水心ありやそつくりと五十兩は元より遣る氣だ、女房にくれぬ上からは金を取るのは當り前、耳を揃へて取られ

ろゝ親子の心にあることだ。

六兵　娘を女郎に賣るのなんのと、よくもそんな僞りがこなたはのめ〳〵言はれたことだ、粉の仕入に困つた時。斯ういふ人とも知らずして、五兩借りたはわしが誤り。

さよ　こちらで證文書かぬゆゑ、初手から中へ十の字を加へる積りで書いた證文。

六兵　うか〳〵巧に落入つたは、あゝ口惜しいことだなあ。(ト兩人悔しき思入)

眼八　是れを謀書といふならば、代官所へ訴へ出で、砂利の上で明りを立てよう。

六藏　爰は一番亭主が引受け、

勘六　金を返して濟ませるか。

眼八　但しはおれの女房にくれるか。

六藏　何と言つてもまじ〳〵と。

勘六　晝の木菟見るやうに、

眼八　こいつも大概相場が知れた。

六藏　金がなけりやあ代官所へ、

勘六　親仁め一緒に、

六藏
勘六　うしやあがれ。

〽兩腕取つて引立つるを、見るに忍びず富藏が、親仁をかばひ投げ退くれば、

ト六藏勘六、六兵衞の手を取り引立てるを、富藏つか〳〵と出て兩人を突き退け、六兵衞を圍ひ足を搔く、これにて兩人どうとなり、直に起き上り、

六藏　やあ、いけふざけた木兎め。

勘六　何で二人を、

兩人　投げたのだ。(トきつと立ち掛る。)

富藏　決して投げはいたしませぬ、お前方が床几へ躓き、それで爰へ轉んだのだ。

眼八　そりや轉んだといふならば、轉んだにして了簡しようが、貸した金の五十兩こりやあ何うして方を附ける。

富藏　貸した借りぬと爭つても、證據になるべき證文に舅が首と釣替への印が押してあるからは、兎やかう言はず五十兩、綺麗にお返し申します氣だ。

眼八　むゝそれぢやあ、爰で五十兩。

富藏　數をかぞへて受取りなせえ。

腹に附けたる胴巻より、紙に包みし五十兩、時まだ早き山吹の花を見るより口なしに、
ト富藏胴巻より五十兩包みを出し眼八に渡す、眼八開き見てにつこり思入あつて、
眼八 慥に金を受取つたれば、此證文は返してやる。
ト證文を六兵衛へ投げて遣る、六兵衛開き見て悔しき思入。
六兵 みす〳〵借りた五兩の金、
さよ それをまざ〳〵五十兩とは、(ト兩人悔しく立ちかゝるを、)
富藏 これ、假令何と言はうとも、舅どのゝ印形が据つて居れば仕方がない。
ト兩人を留める、眼八立上り、
眼八 一旦おれが女房に仕ようと思つた其縁で、利息は取らずに負けてやらう。
六藏 今投げられはしねえけれど、床几へ躓き轉んだ時、
勘六 向う臑と肱を打つたが、疵が附いたが二人の儲け。
眼八 小判形の膏藥を張つて遣るから、默つて居ろ。
六藏 そいつア何より、
兩人 有難い。

眼八　もう此家に用はねえ、是れから歸りに宿へ行つて、
六藏　今夜は夜通し、
勘六　呑み明かしませう。（ト下手へ來り思入あつて、）
眼八　とはいへ思つたあの女。
富藏　まだ念が殘るのか。
眼八　いや、念よりも遺恨が殘る。
〽肩を怒らし眼八は上見ぬ鷲の勢ひに、子分引連れ歸り行く。
トこれへ稽古囃子を冠せ、眼八先きに兩人附き花道へ行き、六藏に囁く、六藏引返して下手へはひる
眼八勘六は花道へはひる。
〽跡に親子は打ち悦び、
さよ　あゝ有難うございました、お前のお陰で今日の難儀を、
六兵　思ひがけなく脱れました。
さよ　父さん、どうぞ去狀を、返して二人を元々の、夫婦になされて下さりませ。
六兵　おゝ、これを規模に濯ぎ去つた事は殘らず水になし、以前の如く親子夫婦。

お民　それではわたしも父さんと、言うても大事ござんせぬか。
六兵　おゝ大事ないとも〳〵、父に可愛がつて貰ふがよい。
お民　こんな嬉しいことはない。
〽親子の者が悦ぶも、後の歎きの先立ちて、鬱がる胸にうつむけば、おさよは顔を差覗き、
ト三人悦ぶ、富藏思入あつて俯く、おさよ合點のゆかぬ思入にて、
さよ　久しい願ひの今日叶ひ、わたしや嬉しうてならぬのに、何でお前は濟まぬ顔、なぜ悦んで下さんせぬ。
六兵　こなたの心の晴れるやう、以前寄越した去状を、今改めて返します。
〽一間の内より小文庫を、取り出し中より選出して、
ト六兵衛せりふを言ひながら上手の家體へはひり、小文庫を持ち來り、中より上包みをせし去状を出し、
さあ、是れ受取つて下さりませ。（ト富藏の前へ出す。）
富藏　この去状は先づ暫く、そちらへ置いて下さりませ。
六兵　此の去状をこちへ置けとは。

さよ　いえ〳〵、是れはお前の方へ、どうぞ取つて下さんせ。
富藏　仔細あつて去狀は、そちらへ置いて下さりませ。
六兵　それはどういふ譯あつて。
富藏　今加州に居るお袋が、其折腹を立てまして子まであるのに舅どのが、離緣をするは無慈悲なことと、重々惡い富藏の最屓をするは親子ゆゑ、今日一存で元々の夫婦になつてはお袋へ義理が惡うございますから、一應屆けて參るまでお待ちなされて下さりませ。
六兵　おゝ、成程それは尤もだ、それでは加賀から歸つて來るまで、わしが預つて置きまする。
さよ　斯うなるからは元々の、夫婦なれども去狀が、こつちにあつては心掛り。
富藏　それも僅かなうちなれば、決して心に掛けるに及ばぬ。
六兵　何は兎もあれ久し振り、風呂を焚くから湯へでも入り、ゆつくり今夜は泊るがよい。
富藏　色々これまで過ぎ去つた話しもあれば、さうしたけれど、十死一生のお袋に少しも早く逢ひたいから、是れから夜を掛け駕籠に乘り、遲くば新町早ければ倉賀野までも行く積り。
さよ　おつかさんの御病氣では、無理にとも申されませず。（ト泣く。）
お民　あれ母さんが泣かしやんす、今夜は泊つて下さりませ。（ト富藏にすがる。）

富藏　お丶、そちまでが同じやうに。
六兵　どうでも泊つて行かれぬか。
富藏　行かねばならぬ急ぎの旅。（ト富藏立上る、）
さよ　そんなら此儘、
お民　早う歸つて下さりませ。（ト富藏にすがる、腮へ手を掛け顔を見て、）
富藏　直に歸つて來る氣だが、（ト是れが別れになるかも知れぬといふ思入あつて、）土產を買つて來て遣るぞ、
〽言ふを名殘りに立出る、今ぞ親子の別れとも知らぬ心の不便やと、子の愛情に引かされてこぼす淚の一雫、道を早めて、
トお民袖にすがる、富藏行き兼れる思入あつて、トヾ袖を振拂ひつか〳〵と花道へ行き、笠を冠る、舞臺の三人は跡を見送る、寺鐘三重にて富藏花道へはひる。是れと一緒によろしく、

幕

五幕目　上槇町貸附所の場

【役名──藤岡藤十郎、定廻り尾林藤太郎、清水正三郎、手代千治、小使十助、家主德兵衞、手先六人。藤十郎妻おみさ、藤岡下女お茂、唄の師匠杵屋お六、飴屋娘お鶴、茶屋の娘お龜。】

（台附の座敷の場）――本舞臺一面の平舞臺、三幕目の台附所の座敷の道具、こゝに酒肴の道具を置き、上手に本膳二の膳、座蒲團二枚を敷き、手あぶり火鉢煙草盆などよろしく、爰に三幕目のお茂の下女、十助の小使、お六の唄の師匠、稽古娘二人酌に頼まれし心にて住ひ、此日得意なる稽古唄にて、幕明く。

お茂　お師匠さんのお手傳ひで、助かりましてござりまする。

お六　何のお役にも立ちませんで、却つてお邪魔さまでござりまする。

十助　どうして〳〵邪魔どころか、お前さんで大助りだ。

お鶴　さうして只今お出でになつた、お侍のお客様は、

お龜　どちらのお方でござりますか、我童によく似て居りまする。

お茂　あれは御新造様のお兄様で、お里方の若旦那でござりまする。

お六　ほんにお前方がさうお言ひだと、松島屋に似たお兄様、今日のお出でを幸ひに、お近附きになら
うわいなあ。

十助　我童兄といへども容せざれは、其交りを知らずだ。

お茂　それは一體何のことでござんす。

十助　はて忠臣藏の大序の洒落だ。

ト爰へ下手の襖を明け、三幕目の藤十郎羽織着流しにて先きに立ち、清水正三郎同じく羽織着流し大小にて出來り、

藤十　さゝ、お席が取つてござるから、あれへお着き下されい。

正三　いや上席では恐れ入る、お手前あれへお着き下さい。

藤十　いや今日の祝ひには、御上客の舅どのゝ御名代の其許なれば、是非にあれへお着き下され。

正三　然らば父の名代ゆゑ、御免を蒙るといたさうか。（ト正三郎は上手藤十郎次席へ住ふ。）

お六　お茂どんから承はれば、御新造さまのお里方の若旦那樣でいらつしやるとのこと、よい折柄の此お目もじ、どうぞ御贔屓をお願ひ申しまする。

正三　手前も當家の御主人から、只今別間で承はつたが、今日のお手傳ひ終日御苦勞至極にござる。手前は清水正三郎と申し、おみさの里の兄でござれば、以後はお見知り下されい。

お六　御叮嚀なる御挨拶、お前方もお兄御さまへお願ひ申しておかしやんせ。

お鶴
お龜　はい。（ト耻しきこなしにてもぢ〳〵して居る。）

正三　してそれなるお弟子衆は、何といふ名でござるよな。

お鶴　はい、わたくしは鶴と申して通り四丁目に居りまする、鮨屋の娘でござりますな。
お龜　又わたくしは此先きの横丁に居りまする、鯣屋の娘で龜と申しまするもの。
正三　いやお鶴どのにお龜どのとは、目出度い席によい名前ぢや。
お鶴　不束者にござりますれば、
お龜　よろしうお願ひ申しまする。
正三　いや鰻行の御弟子とは、杵屋の師匠のお心入れ、大慶に存じまする。
お茂　まだ此外にお松さんもお竹さんも、お弟子内にござりますと申すこと。
十助　お好みならば、松竹梅も、此十助が呼んで參りませう。
お六　いえ、餘り大勢出ましては、却つて御厄介でござりまする。
藤十　十助お茂兩人は、勝手へ參つて女房の手傳をしてやつてくりやれ。
お茂　ほんにわたしとしたことが、うつかり長居をいたしました。
十助　臺所へ行きますから、お師匠さんお頼み申します。
お六　さあ〳〵どうぞ、お前さん方は御用を達して下さいまし。（トお茂十助下手へはひる。）
藤十　さて兎も角も御上客から、目出度く一盞お開き下され。

正三　いや〳〵どうか御亭主役ゆゑ、其許からお開き下さい。
藤十　然らば御免を蒙ります。（ト猪口を取上げる。）
お六　お酌は二人の鶴龜に、どうぞおさせ下さりませ。
藤十　いや鶴龜のお酌とは、師匠の御趣向恐れ入つた。

ト捨ぜりふよろしく、二人の娘酌をして酒を呑んで居る、爰へ下手の襖を明け三幕目の千治羽織着流しにて出來り、下手下に居て、

千治　旦那、行つて參じましてござります。
藤十　雪の降るのに太儀であつた、して先方の樣子はどうぢや。
千治　やう〳〵のことで今日は、寄越しましてござりまする。
藤十　いやそれは大きに骨折りであつた。（ト千治懷中より金包みを出し、）
千治　證文は引替に戻してやつて參りましたが、金子をお改め下さりませ。

ト藤十郎金を受取り改め居る、正三郎猪口を呑干し、

正三　こりや千治太儀であつた、目出度く一杯呑んでくりやれ。（ト猪口をさす。）
千治　これは矢來下の若旦那樣、御挨拶もいたしませんで、失禮御免下さりませ。

ト此内お鶴燗徳利を取次ぎ、こちらへ持つて來り、

お鶴　お一つお上りなさいまし。

千治　これはお鶴さんか、僅りでござります。（ト酒を呑むことよろしく。）

正三　嘸表は寒かつたであらう、二三杯重ねるがよい。

千治　近年には珍らしい大雪でござりまして、春の雪ではござりますが、少しも解けずに積ります。

お鶴　もう一つお重ねなさいまし。

千治　お辭儀なしに戴きませう。（ト酒を呑み居る、藤十郎は金を改めてしまひ、）

藤十　三百兩慥に受取つた、貴樣も今日は祝ひ日だ、次へ行つて呑むがよい。

千治　此お目出度に附きまして、旦那さまへ内々で少々お願ひがござりまする。

藤十　どのやうな願ひか知らぬが、何れ跡にて聞かうから、次へ行つて休息しやれ。

千治　お客來の其中へ心ないやうでござりますが、差掛りました早急なお願ひでござりますれば、失禮ながら旦那さま、お顏をお貸し下さりませ。

藤十　どんな用かは知らねども、顏を貸せとは何のことだ、次へ行つて控へて居ろ。

ト腹の立つ思入、正三郎是れを見て取り、

正三　いや、何か餘儀ない用事でも出來たやうに見受くれば、手前は別間へ遠慮いたせば、是れにてお談じ下されい。

藤十　いえ御正客の兄上に、御別席を願ひましては、主人の役が濟みません。

正三　はて他人ではござるまいし、手前に御遠慮なさるゝな。

藤十　左樣に仰せ下さるを、背きまするも他人行儀、然らば暫時藏前の四盤半にて御一獻、どうかお上り下されい。

正三　失禮御免下されい。

お六　お鶴さんもお龜さんも、手傳うて下さんせ。

お鶴　お煙草盆とお褥は、わたしが持つて行きますぞえ。

お龜　それではわたしがお銚子と、お盃洗を持つて行きませう。

正三　身共は自身の膳を持ち、間違はぬやうにいたさう。

お六　これは憚りでござりまする。

ト　お六下手の襖を明ける、正三郎膳を持ちお鶴褥と煙草盆を持ち附添ひはひろ。跡よりお六酒肴の道具を持ち、お龜手傳ひ下手へはひる、跡に藤十郎思入あつて、

藤十　今日に限つていゝ急に、客のあるのも構はずにおれに顔を貸せなどゝは、何の貴様に相談事がある。

千治　さうおつしやられて見ますると、申し譯もござりませんが、急に世帯を持たせねばならぬ次第になりまして、御無理をお願ひ申しまする。

藤十　そんな事の頼みなら、跡で言つても分ることだ。

千治　そこを猶豫のなりませぬのは、只今金を渡しませんと、女が向うへ引戻され憂き目に逢はねばなりません。

藤十　それでは貴樣が買馴染の、女郎でも出て來たのか。

千治　御苦勞人の旦那さま、お察し通りでござりまする。（ト天窓を掻いて居る。）

藤十　どこの女郎か知らねえが、幾らあれば方が附くのだ。（ト是れより替つた合方になり。）

千治　旦那さまのお供をして度々參つた辰巳屋の、いゝすべた女郎でござりますが、つい一杯も呑みますと大きなことを言ふ氣になり、手前が女房になるならば、旦那に願つて貸附所の通ひ番頭で店を借り、お蠶包みて一生泝樂な暮しをさせて遣ると、ぽんついたことを向うでは眞に受けたかして其晩から、勤めはなれた持成振り。いえ、あなたの前で斯樣なことを申しましては濟みませんが、きつとさうかと首ッ玉へ噛り附いたこともござりますが、赤い蒲團の上へ寐て雲と雨との約束は

夢の寐言と高を括り、お辰の逃げた一件から鼬の道で居りましたが、二三日跡に新宿を駈出して來て泣き附かれ、厭と言はれず神田邊へこつそり伏せて置きましたを、昨日たうとう嗅ぎ附けられ、金が出來ざあ主人方へ玉を返した其上で、内濟金を出せといふ掛合ひ方で血道をあげ、それ程實のある奴ならば年季の殘りの金を濟ませ、約束通り貸附所の通ひ番頭の女房に、持つとはいへど奉公人、爰は一番旦那さまへ縋つて願ふの外はないと、一時脱れも今日中にせり詰めました金の都合、それゆゑ急に願はねば、女の始末が附きませぬ。

藤十　いやそれだけのことならば、何も周章て早急に騷ぐにやあ及ばぬことだ、幾らあつたらあの女の方が附くかは知らねえが、お辰でせえも二百兩出せば身受けが出來たから、百五十兩もあつたなら綺麗に方が附かうから、おれが萬事を含んだと安心させてやるがいゝ。

千治　いえ、私も其位で方が附くかと思ひましたが、年季の外に買掛りが百兩足らずもござりまして、二百兩なければさつぱりと、綺麗な體になれぬといふあいつの話しに、段々向うを探つて見ましたがそれに相違はござりませぬ。

藤十　それぢやあ直に二百兩、渡して遣らねばならぬとか。

千治　へい女の身受けが二百兩に、世帯を持つのが三百兩、あなたへ願つて五百兩拜借をいたしませ

んでは、あいつと一緒になれません。（ト是れにて藤十郎むつとせしこなしにて、）

藤十　これ千治、手前はどこぞの鳥居へでも、面相をして來やあしねえか。

千治　へえ、鳥居へ面相をしましたとは。（ト合方きつぱりとなり、）

藤十　よもや正氣でそんなことが言はれた譯ぢやアあるめえと、思ふはこつちの不覺か知らぬが、此間まで山の手の帳場髪結をした奴が、おれの眼鏡で引上げられ、今ぢやお散した刷毛先きも纏めた髪の堅油、三尺帶も角帶と替る役所の名目金、借りた身分が貸方の手代となつてエツを附け、耳ツくぢりの一本も極め込むやうになつたのは、誰の蔭だと思つて居る、主人に向つてそんな熱が吹かれた義理ぢやアあるめえと、おれは思ふがどんなものか、手前の胸に聞いて見ろ。

千治　いえ段々のお小言で重々恐れ入りましたと、只の髪結の千治なら申す所でござりますが、わつちも元は木更津で漁夫を相手に銀張りの船丁半の筒を取り、乘るか反るかの遣り取りから、いかさま賽のもくが割れ、すんでに簀巻になる所を脱れて江戸へ氣まぐれな、廻り髪結と化け果せ、出入る大家の獸物がしけ込む穴でも見出したら、尻尾を押へて喰物のぱくつく種と狼が、皮を冠つて居たゞけに、轉んで只は起さねえ四千兩の大仕事。（ト大きく言ふな、）

藤十　あこれ。（ト押へて四邊へ思入れ、千治小聲になり、）

千治　もし遠吠なさあしませんから、此月初めに富藏に、遣つた積りで五百兩、お貸しなされて下さりませ。（トよろしく思入、是れにて藤十郎こなしあつて、）

藤十　あの一件を知られたから、拵へ事も合點で女郎を受出す二百兩出してやらうと言つたのだが、それで不足といふならば、今持つて來た三百兩、これをそつくり遣らうから何にも言はず持つて行け。（ト件の金を千治の方へ出す。）

千治　いえ是れだけお貰ひ申すのなら、態々持つては歸りませんが、もう二百兩なくつては十分なことが出來ませんから、お願ひ申しに歸りました。

藤十　三百兩で不足ならお臺場一つもやれねえから、訴へるとも喋るともそりやあ手前の勝手にしろ、犬でも三日飼はれりやあ三年恩は忘れぬと、よく世間でもいふ口だが、去年中から世話になり、假にも主人と名の附いたおれの尻尾を押へたな、いゝ事にしてゆすり掛け勝手な熱を吹かれちやあ、默つて聞いちやあ居られねえ、手前の口から事が暴れ、おれが手當になる時は抱いて行くからさう思へ。（ト是れにて千治思入あつて、）

千治　そんなにお怒りなさらねえでも、訴へようとは言ひません、そんなら當金三百兩で跡は毎月なし崩しに、お貰ひ申すといたしませう。

藤十　借金がやアあるめえし、誰がなし崩しに遣るものか、それで悪くば止してくれ。

千治　いや悪いとは申しません。（ト金を取つて懐へ入れ思入になり）然しわつちに百両でも、余計に渡して置きなさりやあ、悪いことはござへませんが、今にも手当となつた日にやア、皆あつても闕所金、みんなお上へ揚りものだ。

藤十　えゝ、余計なことを言はねえで、早く玄関へ行かねえか。

千治　只今も申しました玉を預けた中宿へ、ちよつと行つて参りますから、暫くお暇を下さりませ。

藤十　晩には仲間の客があるから、日の暮までに帰つて来い。

千治　其客よりは、役人が、

藤十　やあ。

千治　いえ、お客来がありますなら、早く帰つて参ります。

藤十　若しや世間の風聞でも、

千治　えゝ、

藤十　いや、世間の手前を兼ねてくりやれ。

千治　いいえ、如在なくやらかします。（ト千治思入あつて下手へはひる。是れより床の浄瑠璃になり、）

出て行く人の心は白雪や、直なる民は豊年の貢と變る賜物も、曲りし身には降り積る惡事の年貢納め時、それと悟つて聲ひそめ、

ト藤十郎四邊へ思入あつて、床の合方になり、

藤十　今のあいつの口振では、ゞきが廻つて居るかも知れねえ、是れから旅へふけるにも足手纏ひはあのおみさ、姙娠になり五月の今日が祝ひの岩田帶、結ぶ縁とはいひながら解くに解かれぬ網縄の、掛らぬ内にどうかして、別れる都合にしたいものだ。

ト藤十郎よろしくこなし、よき程に下手の襖をあけ、三幕目のおみさ女房好みのこしらへにて出來り、

みさ　御用濟になりましたら彼方へおいで下さるやうにと、兄か申して居りますればお迎に參りました。

藤十　いや用濟みにはなつたれど、まだ酒などを呑んでは居られぬ、おれに代つて正三殿へ澤山馳走をしてくりやれ。

みさ　いえ肝腎の主人が居ねば、おいしくないと申しますれば、行つてやつて下さりませ。

藤十　いや妹のそちか側に居て、相手をすれば十分だ、おれは却つて居ぬ方が遠慮がなくていゝ筈だ。

みさ　いえ／＼男は男同士でお猪口の取り遣いたしませぬと、話が合はぬと申すこと、御迷惑でもござりませうが、常と違つて今日は、帶の祝ひに雪中を厭はず參つた兄上ゆゑ、悦ばせて下さりませ。

藤十　向うは祝うて來たであらうが、こちらは却つて厄介だ、早く呑まして歸すがよい。
みさ　それではあなたは私が、帶をいたして目出度いと悦んで居るあの兄が、御厄介でござりまするか。
藤十　おゝ厄介とも／＼、どうして子などが出來たかと、今は後悔して居るのに帶をしたから目出度いの、姙娠したから祝ふのと玉子の折の一つ位で、兄風を吹かされては聞いて居るも太儀だから、早く歸して貰ひたい。(トおみさこなしあつて、)
みさ　どうして子などが出來たかと、そりやお情なうござりまする、(ト合方になり、)不束な私ゆゑ、所詮お氣には入りますまいが、御縁があつて連添へば、どうぞいたして家嗣の胤を宿して安々と平産がいたしたいと、神や佛に祈りましてやう／＼儲けし此身重も、どうして子などが出來たかとおつしやりますのは、お恨めしい御一言でござりまする。
〽早差迫る女氣の愚痴が常なる恨み泣き、こなたは是れを好きしほに、離別の種にせんものと、胸に浮めて立上り、
藤十　おれが一言いつたのを、いゝ、とつこに取つて其述懐、聞いては居られぬ合羽を出せ。
みさ　合羽を出せとおつしやつて、あなたは何所へいらつしやる。
藤十　どこへ行かうとおれの足で、おれが勝手に出て行くのに、手前が知つたことではない。

みさ　只今申したお恨がお氣に障らばどの樣にも、後でお詫をいたしますから、お宅においで下さりませ。
藤十　いや今日ばかりのことではない、不斷からして氣に入らぬ、留めずと早く合羽を出せ。
みさ　いえ／＼どうでも今日は、あなたを外へは出されませぬ。
藤十　やあ出されぬなど〻は、ふざけた奴だ。
　ト留めるを無理に拂ひのけ、行くをやらじと又縋る折から出合ふ正三郎、夫婦の中へ割つて入り、
　ト此内兩人よろしく爭ふ、下手の襖をあけ、以前の正三郎出て、是れを留め、
正三　如何なる儀かは存ぜぬが、夫婦喧嘩はよろしくない、御主人お下においで下され、屆かぬ所は此兄が妹に代つてお詫びいたせば、先づ／＼お下においで下され。
みさ　常と違うて今日の、此雪中にお客を控へて外へ、參ると申しますゆゑ。
正三　いや留めるのがよくないことぢや、假令客來あればとて一軒の主人となれば、用達しにも出ねばならぬ、それを兎やかう申すは悋氣のやうでよろしくない。御主人、身共が名代に客あしらひを仕つれば、構はず用を達してござれ。さて／＼何れへ御他行か、此雪中を御太儀千萬。
　ト藤十郎思入あつて、

藤十　此留守中に手前とても他行したいことはなけれど、これが不斷の行跡と申し、聟のよいのを鼻に掛け、餘り增長いたし居れば、此上子でも出來ましたら、どんなふざけたことをいたすか。

みさ　いえ〳〵何で私が、ふざけた眞似をいたしませう。

正三　はて、それが惡い、控へて居やれ。(ト思入あつて、)いや餘のことは取りおいて、聟がよいのを增長せしと、聞いては捨て置かれぬが、如何なる行跡いたして居るか、お聞かせなされて下されい。

藤十　さあ、それは、(ト替つた合方になり、)さう改つて聞かれまするど、何から先きへ申してよいか、不斷のことが胸へ込み上げ書き立てゝもお目に掛けねば、箇條の數は分りませぬが、先づ第一に悋氣深く、朝寐が好きで宵ッぱり、氣位ばかり高く止り、どこを洗ふか湯が長く、女の癖に大酒を好み、針仕事は大嫌ひ、芝居位は替り目に見に參つても一年に、替へる程でござるゆゑ、許して置けばよいことゝ、毎夜のやうに寄席步き、咄しはござれ浮れ節、やれ義太夫の人形のと、出席へまで參るのを異見いたせば膨れ出す、引摺り女房の機嫌かひ、これでは如何なる二本棒でも我慢をしては居られますまい。

みさ　いえ〳〵、それは一つとして、まことの事ではござりませぬ。

正三　はてまあ、兒に任せて置きやれ。(ト思入あつて、)成程左樣な行跡では、愛想の盡きるは御尤も、

然し何ゆゑ里方へ、今までお聞かせ下されぬ、父が聞きなば當人へ疾くと異見を仕つる。

藤十　いや里方へ申した所が、いはゞ片輪も同樣な惡たれ娘を押附けた舅殿では何事も、無駄と存じて默つて居ました。（ト是れにて正三郎むつとなし、）

正三　いや片輪娘を押附けしと承はつては、某も、父に代つて申さにやならぬ。（ト合方きつぱりとなり、）改め申すに及ばねど、父善左衞門は小祿ながら旗本の家に列なれば、神君の御遺言なる御條目を守る由にて儉約質素を旨となし、所有の金子を諸方へ貸出し、矢來下にて内福の聞えを取りしゆゑなるか、是れなる妹も諸方より緣邊の儀を言ひ込みしに、いつの程にかお手前と親の許さぬ不義徒ら、是非なく御緣は結べども生計に迫る御浪人、無生業では暮せじと諸方へ出した貸金の、取立て方をお手前に任せしゆゑに取附く身代、又作事方の今井殿へ調べ方に取入りしも、父なるものが内々にて言ひ込みしゆゑ身の出世、それより今の身分になり、開運の時來られしは御器量人とは申せども、一つは手前の親共が絲を引きたる里方の恩儀ならんと存じ居るに、片輪者を押附けしと承はつては心外至極、ちとお詞が違ふでござらう。

藤十　さゝ、それだから困りまする。

正三　何ゆゑこれが困り申す。

藤十　何ぞといふと某が浪人いたして居つたのを、女房ゆゑに取附いたといはぬばかりの其話し、それでは猶々増長をいたしますのもこりや尤も、亭主を尻へ敷くやうな女房は持つて居られねば、御入來あるこそ丁度幸ひ、連れてお歸り下されい。

正三　さては以前の恩を忘れ、最早身代出來しゆゑ、女房を去つて外々より氣に入る妻を迎へるのか。

藤十　以前を知つた女房は、兎角ふざけてなりませぬから、持ちかへる氣になつてござる。

正三　おゝ、其一言で相分つた、恩を知らざる人でなしめが。

藤十　何の恩があるものか。

正三　えゝ言はせて置けば。（トきつとなるをおみさ留めて、）

みさ　まあ〳〵待つて下さりませ。

正三　えゝ、未練を言はずと去られてしまへ。

みさ　いえ、お腹立ちではござりませうが是れには何ぞ譯あること、暫くお待ち下さりませ、

〽兄をなだめて女房が、夫の側へさし寄つて、（トよろしくあつて、）

先程まで、何事も常に替らぬ御様子が、俄に打つて替りましたは、こりや千治どのと御内談中、あなたの好いた女子より傳言でもござりましたか、又は女房にしてくれとの頼みの文でも參りし

かと、やう〳〵思ひ當りました。そりやもう世間の手前がなくば、妾てかけはある習ひ、御不自由のないお暮しゆゑに、御異見などはいたさねど、

〽浮いた稼業に花咲いて、人のながめとなるものは、襟に附いてもさめ易き僞紫といふ事を知らぬお方で内證の、身受けが仇となりしのは、爰であらはに岩田帶。

それやこれやもござりますれば、どうぞ不便と思召し、去らずに置いて下さりませ、又兄上にも私を不便と思召しますならば、此儘置いて下さりませ、神さま掛けて私に不行跡のないことは、家に勤めて居るものも世間の者も存じて居れば、跡にて分るでござりませう。

〽夫を宥め又兄を、宥めて詫びる心根は、貞操見えて哀れなり。(トおみさよろしくこなし。)

〽折から襖引きあけて一統の者進み出で、

ト此留り、下手より以前のお六先きに娘二人、お茂、十助附添ひ出來り。

お六 その御行跡のよろしいことは、私共がみんな證人。

お鶴 此近邊でも御新造さまの、

お龜 お湯の早いは評判もの。

お茂 芝居は御覽なされますれど、寄席なんぞへはついに一度、お出でのことはござりませぬ。

十助　それに引替へ旦那さまには、毎晩のやうに新宿へ。
みさ　あゝこれ、左樣な餘計なことは、必ず言うてはなりませぬ。
十助　申すまいとは思ひましたが、あんまりあなたがお可愛さうゆゑ、つひ口が辷りました。
正三　證人一統これへ出て、不行跡ではないと申すが、是れでも離別をしめさるか。
〽それとあらはに分れども、弱身を見せじとあざ笑ひ、
藤十　斯ういふ時は不斷から、女房が飼ひし鼻藥に口を合せし證人立て、お茂十助兩人も不忠な奴ゆゑ女房と、一緒に只今暇をやる、とツとゝ早く出てうせう。
みさ　すりやどのやうに申しましても、御機嫌は直りませぬか。
藤十　おゝ一旦離別と言ひ出したら、誰が詫びても無駄なことだ、去狀やるから出てまゐれ。
〽取つても附けぬ勢ひに、人々呆れて控ゆれば、小者の十助こらへ兼ね、
十助　此三月はお暇を貰ふ氣で居る十助ゆゑ、御新造さんやお茂どんに、代つて旦那の御所行を笑で竝べて申しませう。
みさ　これ〳〵十助、そりや惡い、お茂早く連れて行きや。
お茂　御新造さまが御心配ゆゑ、お前は勝手へ行かしやんせ、如何に今日のお目出度で、御酒を一口喰

べたとて、それではお前濟むまいぞえ。
十助 濟むも濟まぬもあるものか、お暇を貰へば五分の人間、日割で僅かの給金を償へば其でいゝのだ。
お茂 はてまあ、お次へお出でといふに。
　　ト爭ふ體を押し留め、
正三 こりやお茂、先づ待ちやれ、俄に替りし主人の樣子、譯があらうと存ずれど、妹を始めそち達が隱して居るゆゑ相分らぬ、十助身共に言つて聞かせい。
十助 へい／＼、どうぞ御迷惑でもお聞きなさつて下さりませ。
　　ト爰ぞと思ひ遠慮なく、（ト合方になり、）
あなた樣へ申し上げるも沙汰の限りでござりますが、旦那樣には新宿の辰巳屋のお辰といふ女郎に熱くおなりなさつて、聞けば向うに色男が疾うから出來て居りますのを、振附けられた悔しんぼうに二百兩にて身受けをして、妾に仕ようといふ積りで五十兩の大金を手附けに渡した其晩に、色男と手に手を取り女郎は逃げて道行筋、踏んだり蹴たりの目にあつてもまだ化されてお出だと見え、さつき何だか千治めがお話しをして出て行つたは、大方女郎の居所が知れ、内へでも入れるといふ御不了簡でござりませうが、お慈悲深い新新造さんが、御離緣になり其跡で、狐の女郎や

ごま摺りの古猫に追ひ遣はれ破れ太鼓を叩くのは、馬鹿々々しうござりますから、此三月で暇を取り出て行く心になりました。譯と申すはお兄御さま、ざつと斯樣でござりまする。

ヘ酒の癖とて口輕く、喋べり立つるを聞き取りて、

ト此内おみさは氣の揉めるこなし、藤十郎は袋戸棚より手箱を出し去狀を書いて居る、正三郎思入あつて、

正三　おゝそれで樣子が相知れた、左樣なたわけな者とも知らず、一人の娘を緣附けたは父上のお眼鏡違ひ、仔細を聞いては此後に呼戻さうと申しても、我が方で不承知だ、然らば妹離別を受け、直に一緒に里へ參れ。

みさ　いえ〳〵夫の惡いのは跡でお詫びをさせますれば、此儘置いて下されませ。

正三　いや〳〵それは宜しからず、父の許さぬ徒らから夫婦になりし夫ゆゑ、かやうな憂き目に逢はねばならぬ、但し此上勘當うけ、親に不孝をいたしても藤十郎と添ひ遂げて、因果が見たいと申す氣か。

みさ　さあ、それは。

正三　父に代つて勘當仕ようか。えゝ未練を殘すは不覺ぢやわえ。

みさ　はあゝ。（ト泣き伏す。）

〽不便を胸に押し怺へ、書き認めし去狀へ手當の金子取添へて、

ト藤十郎作の去狀と金包みを持つて前へ出て、

藤十　十助めが喋べりしゆゑ、その御立腹は是非なき次第と申すもの、それでは是れが暇のしるし。又少々の金子なれど懷胎させた身の不承に、二百兩金差出せば產入費としてお持ち下さい。

みさ　いえ、其樣なお金などは、わたしや欲しくはござりませぬ。

正三　あこれ〱、それは入らぬ遠慮だ、懷胎の身で離別を受け手當の附かぬことはない、辭退いたさず持つて參れ。えゝ、そちが未練で取り得ずば、兄が預かり持ち歸らん。

ト作の金と去狀を取つて懷中する、藤十郎手箱の內より證文を二本取出し、

藤十　又お茂にも十助にも三月までの貸越しあれど、それは綺麗に負けてやる、荷物はあとで下げるがよいが、此證文を持つて行け。（ト投げてやる。）

お茂　左樣なれば私まで、あのお暇でござりまするか。

十助　こつちは是れで望み通り、然しそれはお氣の毒だ。（ト兩人證文を取つて懷中する。）

お六　どうやらこちらもお暇の、出さうな所でござんすゆゑ。

お鶴　お師匠さんと御一緒に、

お龜　内へ歸るといたしませう。

藤十　酒も肴も澤山あれば、どうか、お宅へお持ち下さい。

みさ　それではいよ／＼離別を受け、歸りませねばなりませぬか。

正三　荷物を取りに寄越すまで、蹰躇のないやう纏めて行きやれ。

藤十　どうかそれまで持てばよいが。

皆々　えゝ。

藤十　いや、持てるものだけ、（ト立ち上るを、道具替りの知らせ、）持つて行きやれ。

ト此模様合方にて道具廻る。

（玄關先きの場）――本舞臺三幕目の玄關先きの道具、殘らず雪持になり、舞臺花道とも雪布を敷きつめ、稽古唄、雪おろしにて道具留る。と右の唄にて以前のお六先きに、稽古娘二人を連れ奧より出來り、

お六　内に居ては分らないが、外を見ると此大雪、お前方にもお氣の毒な詰らぬ譯になりましたが、わたしの内まで行つて下さい。

お鶴　ほんに今日はお目出度い、お祝ひだと思ひましたら。

お六　さつきはお目出度のお悦びを、新新造さまに申したと思へば、歸る時は御離縁の悔みを言つて歸るとは、

お龜　御新造さんの御離縁で、お氣の毒なことになりました。

お鶴　御婚禮とお葬ひが、一緒になつたと同じこと、

お龜　歸りますのも何とやら、極りが惡うござりまする。

お六　今にわたしがお料理をこちらへ貰ひに寄越すから、内へ行つて喰べて下さい。

お鶴　旦那お一人になりましたら、誰も喰べ手がござりませぬから、

お龜　お師匠さんのお家からでも、貰ひにお寄越しなさいませんでは、

お鶴　却つて困るで、

兩人　ござりませう。

お六　大方晩にはお女郎の、新御新造でも來ませうから、困ることはありやしまい。

お鶴　おやまあ、それは憎らしい。

お龜　本當のことでござりますか。

お六　まあ一旦家へ歸つて、樣子を見るとしませう。

お蔦　そんならお内へ、

兩人　御一緒に、

お六　まあ兎も角も來て下さい。（ト三人一緒に相合傘にて下手へはひる。）

へ歸り行く、離別の際の妻はたゞ、殘る未練に何事も纏り附かぬ品調べ、兄は不實を責立てて何一品と纏め置く、中に身輕の兩人は、玄關へ出で、打ちこぞり、

ト奥より以前のお茂、十助、正三郎おみさの傘と下駄を持ち出來り、式臺の前へ直すことよろしくあつて、

お茂　ても遠慮のない十助どの、お前がつか〳〵旦那樣のお耻を言つたばつかりで、兄御樣には御立腹御新造さまも御離緣にて、わたしまでがお暇のお相伴をしたわいなあ。

十助　いや千治といふ奴が爰の內に居る間は、所詮外の奉公人が長く居られぬ內だから、御新造さんが居ないと知つたら、暇を貰つて出て行くのが先見明かといふものだ。

お茂　兄御樣さへあのやうに御立腹をなされねば、御新造樣も御離緣にならずに濟んだでござんせう。

十助　いや兄御さんの御立腹より、わしが第一御立腹だから、こんな內には御新造を置かない方が爲だらう。

お茂　お前のやうな奉公人は、お主思ひの主倒しでござんす。
十助　何でわしが主倒しだ。
お茂　御離縁うけてしまつては、御新造さんが困るわいなあ。
十助　何であんな御新造さんが、離縁をされて困るものか、聟に成り手がなかつたら、わしがなつてやりますわ。
お茂　えゝもう、お前と旦那さまと比べものにならうかいなあ。
〽主人の噂取り〳〵の、折から兄が迫り立てゝ、嫁のおみさは泣く〳〵も、身仕度なして立ち出づる。
ト奥より以前の正三郎長合羽大小にて、おみさ同じく合羽を着て迫り立てられて出る。
正三　其方達も踟蹰なきやう、荷拵へをいたし置いたか。
お茂　御新造さまから戴きました頭の物は大切ゆゑ、葛籠の底へ入れまして、是れから宿へ参りますれば、道までお送り申しませう。
十助　私などは是ぞと云大事な物もござりませねば、いざといつても世話のない奉公人でござりまする。
みさ　親の許さぬ徒らはせまじきものと知りながら、斯うしたことにならうとも、知らで嫁したる夫の

家へ、子までまうけて去られますのは、是れもやつぱり親の罰、茂も夫を持つならば親の指圖を受けずして、めつたに縁組みせまいぞや。

お茂　わたしのやうな不束者は、亭主になつてくれまする男とてもござりませねば、親の指圖がござりませんでは、縁附くことは出來ませぬ。

十助　それでもこなたにあの千治が、首ツたけ惚れて居たではないか。

お茂　えゝもう、あんな氣障な奴を誰が亭主に持ちませうぞ。

十助　それ〳〵はわしも無駄か知らん。

正三　いや何事も縁づくだが、當家の主人藤十郎は、あんな奴ではなかつたが、身共も大きに見損なつた。

みさ　それも惡魔の女子ゆゑ、色に迷つて御亂暴を、おつしやるお氣になつたのぢや。

お茂　何れ後日にお目が覺め、お呼戻しになりますれば、

十助　お里へ行つて旦那さまの、御樣子を御覽なされませ。

正三　然らば荷物は後として、先づ兎も角も立ち歸らう。

みさ　ても折惡しく今の間に、雪が止んでしまひました。

正三　なに、止んだのが惡いとは。

みさ　傘にて顔を隱しませねば、此近邊は通られませぬ。
お茂　それではなるたけお後から、
十助　放れてお送り申しませう。
正三　いや、左樣な氣兼ねはいらぬことぢや。
みさ　此家も是れが、見納めなるか。
〽涙で道も見えわかず、迫り立てられて是非なくも、下りる式臺穿く下駄に、二世の二の字は踏み出せど、交せし甲斐も泣き別れ、跡に附添ふ兩人も、勝手を出で、めぐり降る巴のしるし門内に、惱むを兄が氣を勵まし、雪ふみ分けて歸り行く。
ト此内おみさ式臺へ下りて跡へ心の殘るこなし、正三郎是れを迫り立て花道へかゝる。お茂、十助は奧へ入り勝手口を廻りし心にて下手より出る。よき程に雪おろしになり、日覆より雪を降らせ花道にてよろしくこなしあつて、トゞ皆々花道へはひる。
〽妻の歎きを一間にて、じつと怺ゆる辛抱は、道に缺けたる强惡も、夫婦の情の捨て難き影見送りてほつと息、
ト此内玄關の上手の半窓の障子を明け、以前の藤十郎半身出し、是れを見送り、雪おろし床の合方に

なり、

藤十 正三殿にも女房にも見下げし者と思はれんが、今の歎きの別れより繋がる縁のある時は其に讓日。の縛め受け、引かれにやならぬ我が積惡、今にも露顯と覺りしゆゑ心にもなき無法を唱へ、離別なせしは其身の爲め、包む惡事も白雪に辛き思ひも暫しのうち、頓て次第が相分れば其折にては と悟りくりやれ。

へ他聞のなきを幸ひと、跡伏し拜み詫び入る折、多人數引連れ門內に入り來る者の見えければ、（トよろしく思入あつて、）

や、門口俄に騷立ちて、入り來る者のある樣子、手當の人數と覺えたり、最早未練に臆るゝとも迯げ退く道のあらざれば、仕度いたして、さうぢや。

へうなづき奧へ入相の、夕暮れ近く多人數の手先を後に家主を、先きへ案內に乘込むは、其頃市中に隱れなき、出役尾林藤太郎。

ト此留り雪おろしになり、藤十郎窓の障子を立切る、花道より羽織着流し下駄がけの家主德兵衞番傘をさし先に立ち、尾林藤太郎好みの鬘長合羽大小紺足袋、爪掛の足駄にて蛇の目の傘をさし出る、跡より脚袢草鞋裝の供一人包みを背負ひて附添ひ、其跡より手先大勢草鞋裝にて十手を腰に差して出

來り花道に留り、

德兵 如何なる惡事がござりまするか、此大雪にお手當とは、御苦勞さまにござりまする。

藤太 承はれば其以前公儀の祿をも穢せし奴、武藝の嗜みあらうも知れぬ、其心得にて油斷いたすな。

手先 其儀は承知、

皆々 いたしました。

藤太 兎も角も案內いたせ。

德兵 斯うお出で下さりませ。

〽手分けをなして取圍めば、家主玄關へ差掛り、

ト此內皆々舞臺へ來り、手先の內四人程裏へ廻る心にて下手へはひろ、跡の人數は上下へ別れて窺ひ居る、德兵衛內へ向ひ、

十助どのはござらぬか。賴まう〳〵。

〽いへど返事のあらざれば、

藤太 靜まり居るは合點行かず、奧へ踏ん込み詮議いたせ。

手先
皆々 はッ。

〽踏み入らんとする奥の間にて、（ト手先皆々立ちかゝる、正面の奥にて、）

藤十　只今それへ參るでござる。（ト斯して以前の藤十郎出來り、式臺へ下に居て、）手代共が出拂ひしゆゑ、思はぬ失禮御免下さりませう。（ト氣味合の思入。）

藤太　こりや町役人、かれが主人の藤十郎か。

德兵　左樣にござりまする。

藤太　調べの筋で參つたから、立ち騒がずと神妙にいたせ。

ト二重へ上りよろしく住ふ、藤十郎德兵衞に向ひ、

藤十　して、御出役はどなたでござる。

德兵　旦那は尾林藤太郎樣だが、お調べ受ける覺えがあらば、有體に申し上げて下さい。

藤十　はゝあ、それでは是れが尾林さんか、（ト藤太郎へ向ひ、）して、お調べの筋と申すは、如何やうな儀でござるよな。

ト此内藤太郎供に持たせし包みの內より用箱を出し、書面を開き前へおき、

藤太　これ藤十郎、去年三月七日の夜賊にはひつた覺えがあらうな、いやさ、御公儀の御金藏へ忍び入り、內四千兩盗みしは、われに相違あるまいな、速かに申し上げてしまへ。

ト是れにて藤十郎思入あつて、

藤十　何事のお調べかと、思ひの外なる其お尋ね、如何なる次第で其のやうな御嫌疑を受けまするか、毛頭覺えはござりませぬ。

藤太　いや、如何やうに陳じても、われが同類富藏といふ者、此度加賀の金澤にて御用辨になつたに附き、殘らず露顯に及んだから、陳じても無駄なことだ。

藤十　さては加賀にて富藏が、御用辨になりましたか。

藤太　われと二人で惡事を働き、土中へ埋けて置いた事まで殘らず白狀いたしたから、もう陳じても叶はぬことだ。（ト是れを聞き藤十郎是れまでといふこなしあつて、）

藤十　え丶喰ひ込んでも同類の、名は出さねえと言やあがつたが、到頭白狀してしまつたか。

德兵　それではいよ〳〵、あのこなたが、

藤十　尾林さまなら八丁堀で當時名高い同心衆、陳じて見ようと思つたが、あの富藏めが喋べつては、もう無駄だから止めにする。如何にも相違ござりませぬ。

德兵　いやはや、是れは驚いた。

藤太　流石はわれも惡黨だけ、脫れぬことを早くも知り、手數を掛けぬは感心だ、それ繩打つて番屋へ

引け。

手先　はッ、神妙にしろ。

ト藤十郎に繩を掛けろ、此時又雪おろしになり、花道より手先一人以前の千治に繩を掛け引いて出て直に舞臺へ來り、

手先　こいつは上總の喰詰め者、風を喰つてふけましたを、ふん捕へて參りました。

德兵　おゝ、千治どんも同類か。

藤十　そんなら手前も喰ひ込んだか。

千治　噂を聞いてふけようと思ひの外に手が廻り、とう／＼繩目に逢ひました。

藤太　家内は殘らず封印なし、町内預けにいたすから、一人たりとも取り迯がすな。

藤十　あいや、女房は疾くに離縁なし、其餘の者は暇を出し、内には誰も居りませぬ。

手先　さては今方、

皆々　出逢ひしものが、

千治　きはどい所で脱れたか。

藤十　いざ／＼、お引き下さりませう。

勝太　はて、覺悟のいゝ、（ト用箱の蓋をするを木の頭、）奴ぢやなあ。

トにつたり思入、藤十郎は縄附きにて立ち上る、跡皆々引ばりよろしく太撥の時の太鼓にて、

ひやうし　幕

ト雪おろしにてつなぎ、直に引返す。

五幕目返し　　中仙道熊谷驛の場

【役名】――野州の富藏、八州同心濱田右内、饂飩屋六兵衛、生馬の眼八。富藏女房おさよ、同娘お民、其の他。】

（中仙道熊谷土手の場）――本舞臺常足の二重八枚飾り、雪の積りし草土手の蹴込み、後在體雪降の遠見、眞中に屋根のある石地藏、前に線香立ての石、水向けの茶碗樒などよろしく、上の方に葭簀にて圍ひし藁葺の茶見世ありて今は休んで居る體、下の方風除けの掛稻、よき所に松の立木、此道具何れも雪持ちにて、舞臺花道とも雪布を敷詰め、總て中仙道熊谷土手の模樣よろしく。爰に百姓〇△□◎の四人簑笠草鞋にて立ちかゝり、雪おろしにて幕明く。

〇　此寒いのにお前らも見廻りの役に當つて、大きにハア御苦勞だ。

△　アンデモ世間に事切れで、唐丸籠が通るといつては、代官所へ呼び附けられ。

□　街道筋に囚人の同志の者でも待伏せして、亂暴騒ぎのないやうに。

◎　見廻り歩いて氣イ附けろと、雪の降るのに追ひ使はれ、どうでも樂は出來ねえこンだ。

○　いつたい今日の囚人は、何處の產れの奴だんべい。

△　おらも委しく知ンねえが、野州の奴だといふこンだ。

□　野州の奴ぢやあ、爰イらを通る間がけんのんだ。

◎　大方それで代官所から、氣イ附けろといふのだんべい。

○　通つてしまふそれまでは、

△　安心なンねえこンだから、

□　是れから鴻の巣の立場へ行き、

◎　焚火にあたつて待つて居べい。

ト花道の方へ行きかける、此時上手の茶見世の蔭より前幕の眼八、流着し尻端折り草鞋にて絲立を引つかけ、笠を冠り出來り、

眼八　熊谷の百姓衆、まだ唐丸籠は見えねえかな。

○　誰かと思やア生馬親分、

△　何所へこなたは、
四人　ござらしやつた。
眼八　今日こゝを通る囚人の富蔵といふ奴に、言分のあるおれだから、さつきから待つて居るが、赤城颪の雪風で横ツ面が切れるやうだ。
○　それぢやあ今日の囚人を、
△　親分さんには、
四人　知つてござるか。
眼八　此月初めに饂飩屋の六兵衛の家で出合つた奴だが、あいつが江戸の御金蔵へはひつた奴とは知らなんだ。
○　さうして御金蔵といひますは、
△　アンのこンで、
四人　ござります。
眼八　江戸の公儀の金蔵へ盗みにはひつて四千兩、取りやあがつた大泥坊だ。
○　そりやハア、魂消た太い奴だ。

△　親分さんには、おんで又、

□　そいつの通るを此寒いに、

◎　こゝらで待つてござらつしやる。

眼八　今度どこぞで出逢つたら、意趣返しをしてやらうと思ひ、蟲を怺へて居たところ、そいつが加賀の金澤で悪事が知れて召捕られ、江戸へ差立て入牢となりやあ、再び娑婆へ出られぬやつ、途中で待つてあの野郎を、病え附せてやらねえぢやあ腹の蟲が承知せぬから、鴻の巣へ来た是ついでさつきから待つて居たが、定めて大事な囚人に役人達も附いて居ようが、目明しをして代官所の用にも立つたおれだから、それを言立て役人に、猶豫を頼んで逢はにやあならねえ。

○　さういふ譯ならいゝけンど、

△　馴染の誼に待伏せして、

□　籠破りでもさつしやつては、

◎　みんなが迷惑しやすぞや。

眼八　其疑ひの掛らぬやう、長い物は脇へ預け、無腰でこゝに待つて居るのだ。

ト此時百姓四人上手を見て、

○　あれ〳〵、向うへ遣つて來るのは、

四人　唐丸籠だ〳〵。

眼八　おらあ爰で待ち受けるから、みんなは早く行くがいゝ。

○　そんなら親分、

四人　又逢ひます。（ト雪おろしにて百姓四人は花道へはひる。眼八思入あつて、）

眼八　雪の降るのに此土手の、長丁場ぢやあ役人も、爰で休むに違えねえ、そこへ出掛けてさうだ〳〵。

ト上手の茶屋の蔭へはひる、是れより床の淨瑠璃になり、

〽降りしきる雪に往來も、途絶えたる中仙道の長繩手、菱に搦めし富藏を、差立つ道も唐丸の籠に附添ふ一統も、吹雪に笠を取られじと、惱む足元踏みしめて、地藏の前に差かゝる。

ト此内雪おろしをあしらひ、上手より濱田左内の役人、野半纒の上へ加賀簑を纏ひ大小切緒の草鞋にて騎者笠を冠り先きに立ち、跡より桐油の掛りし唐丸籠を人足二人にて擔ぎ、是れへ野半纒簑笠大小切緒の草鞋の下役二人附添ひ、其跡より番太四人何れも簑笠草鞋にて十手を腰に差し、出來り、

左内　こりや〳〵人足共、あまり降りが烈しいから、暫時是れにて休むがよい。

人一　へい〳〵、爰で立てますのが、いつも極りでござります。

人二　天氣でさへも此丁場は、四五度立てねば越せません。〔トよろしく駕を下ろす。〕
下甲　かの熊谷の土手に於て、地藏が物を言つたといふ、
下乙　名代の地藏の前なれば、休んでゆくもよき戒め、
番一　今日のやうに晝中でも、雪の降るのに人足絶え、
番二　囚人などを連れまして、通るは凄い長丁場、
番三　そこを無暗に旅人が、夜道を掛けて打ち越すのは、
番四　金を持つても持たなくとも、無氣味な所でござります。
〽摺火を打ちて燻らする、煙草の火さへ濕り勝ち、時分はよしと眼八がぬつと出れば打驚き、
ト此内皆々摺火打をして、捨石へ腰を掛け、煙草を呑み居る、上手の陰より以前の眼八出るゆゑ、皆皆びつくりして、
左内　それ、油斷いたすな。
皆々　心得ました。
〽身構へすれば飛びすさり、〔ト眼八下手下に居て〕
眼八　いえ、わたくしは怪しい者ではござりません。

人一　おゝ、生馬の親分さん、
人二　何で爰にをりなすつた。
左内　人足共が知つて居るは當所の者と相見えるが、此雪中に何用あつて物蔭に居つたのぢや。
眼八　御不審を受けまするも御尤もなる其お尋ね、それに居ります人足にお問合せになりますれば、分かることでござりますが、私事は相馬屋の眼八と申し、破落戸の防ぎをいたす當所の者にござりまする。
左内　すりや眼八と申し當所の者とな、こりや人足共、相違はないか。
人一　へい、生馬の眼八さんといふ、
人二　當所の顏役でござりまする。
左内　して何の用事あつて、此所に居つたのぢや。
眼八　唐丸籠で囚人をお差立ての途中にて、狼藉などのないやうに是れへ出張つて居りまずるも、四里八丁の長丁場、毎度こゝらで間違ひのござりますのを案じまして、御冥加の爲め此所で張番をして居りました。
左内　神妙なる心掛け、是れまで參れば鴻の巣の宿へ參るも僅の道、其の氣遣ひもあらざれは勝手に引

取り休息いたせ。

眼八　其儀に附いて旦那樣へ、お願ひがござりまする。

左内　願ひとは何事ぢや。

眼八　外の儀でもござりませぬが、あれなる囚人富藏は、懇意な者にござりますゆゑ、皆さんのお目こぼしでお逢はせなすつて下さるやう、お願ひ申し上げまする。

下甲　やあ、富藏事は一方ならぬ、大切なる囚人ゆゑ、

下乙　假令當所の者にせよ、濫りに逢はすことはならぬ。

番一　斯ういふ手にて唐丸籠を、破りし奴は幾らもある。

番二　街道筋でも熊谷の、丁場を越すは大事の場所、

番三　逢ひたく思はゞ鴻の巣の、泊りへ願つて出るがいゝ。

眼八　いえ、狼藉でも働くかとお疑ひを受けぬやう、御覽の通り丸腰で刄物は一切持ちませぬ、御間亂ならば懐をお改めにてお目こぼしの、御沙汰をお願ひ申します。

へ雪に手を突き頭を下げ、さも神妙に願ふにぞ、（ト眼八手を附き願ふ、左内思入あつて、）

左内　此雪中に待受けて、強ひて對面願ふのは懇意の者と思はるゝ、途中に於ては叶はぬことだが、情

を以て許し遣はす、雨具を取つて逢はせ遣はせ。
下こ　それでは桐油を、
下甲下乙　取らせまして、
左内　幸ひ雪も止んで居れば、桐油を取つて逢はせ遣はせ。
番一　承知いたして、
四人　ござりまする。

ト番太が寄つて唐丸へ、掛けし桐油を取りのくれば、軍鶏に等しき〆鳥の、羽がひ叶はぬ富藏を、こなたはそれと打見やり、

ト此内番太四人にて籠の桐油を取る、内に富藏好みのこしらへにて繩に掛り、足へほだをはめて居る
眼八思入あつて、

眼八　これ富藏、見るも不便なことだなあ、（ト合方になり、）是れといふも大膽な惡事を手前がしたからだ、百里からある加州まで逃げても脱れぬ天の網、お上のお繩に引括られ唐丸籠で江戸表へべそツ面で引かるゝは、こんなみじめなことはねえ、然し手前が斯うなつたので、此眼八は胸が晴れた、どうで始終は高ものゝ、兇状持の富藏ゆゑ、再び面を見られねえから、お慈悲を願つて逢つ

たのだ。

〽いふに富藏身の科に、許し置いたが殘念と、思へど怒りを押鎭め、

ト富藏籠の内より首を出し、

富藏　誰かと思へば眼八か、うぬも爰らで御判形の裏を稼業の博奕打ち、かすり取りとか親分とか、出來星ながら言はれて居りやあ、悪黨仲間の附合ひもちつたア見たり聞いたりして、知らねえこともねえ筈だが、取るに足らねえ奴だな。

眼八　天下一般御はつせきの、博奕はしても此土地で、亂暴者の防ぎをして、少しはお上のお爲めになる生馬の眼八だ、斯ういふ悪事があると知つたら、あの時手前を引括つておれが手柄にしようもの思へば悔しいことをした、其替りにやあおさよをば、自由にするからさう思へ。

富藏　そんな事を手前達に言はせるおれぢやあねえけれど、引合になる人達の難儀を思つて言はねえが、言つたら手前を大地へ埋め、積つた雪に面形の外道は出來てもでつくりの、天窓は容易に隱されめえ、跡先き見ずに口を利くなえ。

眼八　いや、利かねえで置くものか。（ト立ちかゝる。）

左内　やあ眼八とやら控へぬか。（トきつと言ふ、是れにて眼八心附き下に居る。）懇意な者ゆゑ對面を願ふと

あるゆゑ目こぼしで、許して遣りしに私の、遺恨を以て富藏へ兎やかう申すは不埒千萬、對面叶はぬ立ち去り居らう。

眼八 恐れ入つてはござりますが、彼れめに遺恨がござりますゆゑ。

左内 遺恨があらば江戸表へ、共々參つて願ひ出よ。

眼八 そこを何卒お慈悲を以て、

左内 願ひは叶はぬ、立てと申すに。(トきつと言ふ。)

眼八 へゝい。

〽鶴の一聲是非なくも、立つかと見れば白鷺の、田の面の方へ下りて行く。

ト眼八思入あつて下手へはひる。

下甲 たわけな奴が是れに居り、

下乙 聞きたくもなき爭ひ立て、

番一 降らぬ其うち、

三人 出掛けませう。

左内 人足共、急いで參れ。

人足兩人　へい／＼、承知いたしました。

〽駕引き上げんとなす所へ、（ト人足兩人よろしく、此時上手の後にて、）

六兵　もし／＼、暫くお待ち下さい。（ト聲する、皆々上手を見る）

下甲　足弱連れし老人が、

下乙　是れへ望んで來る樣子。

番一　構はず早く、

二人　出掛けませう。

左内　いや、雪に悩みし者であらう、暫く待つてやるがよい。

〽猶豫も慈悲を白妙の、道踏み分けて親と子が、娘を伴ひ三人連れ、こけつ轉びつ駈け來り樣子ありげにひれ伏せば、こなたは不審と立留り、

ト此内雪おろしをあしらひ、上手より前幕の六兵衛先きに、おさよお民何れも着流しにて、前垂を冠り素足にて出來り、下手へ廻り下に居る、左内思入あつて、

見れば三人の足弱を、引連れ參りし下民の親仁、願ひの筋でもある樣子、如何なる次第か申聞けい。

大兵 〽問はれておづ〳〵顔を上げ、
恐れながら申し上げます、私共は熊谷の宿外れに居りまする饂飩屋六兵衛と申すもの、娘と孫を連れましてお跡を追掛け參りましたも、今度江戸へお差立てのそれなる囚人富藏に、緣を結びし聟舅。

さよ 又わたくしは富藏の女房さよと申しまする者、仔細あつて八年此方久しく別れて居りましたが、承はれば恐ろしい御金藏とやらへ忍び入り、多くの金を盜みました惡事の科でお捕へに、相成りまして江戸表へ、お差立てとの風說も始めはよもやと存じまして、案じましたる其內は人違ひではあるまいかと、まだしも賴みがござりましたが、いよ〳〵それと極りまして恥しいやら悲しいやら、お跡を慕ひ名乘りまするも恐れ多うはござりますれど、夫婦の中に娘まで儲けましたる身の因果。

お民 どうぞお上のお慈悲にて、それに居ります父さんに、お逢はせなされて下さるやう。

六兵 お願ひ申し、

三人 上げまする。

〽雪に頭を摺附けて、願ふを聞いて富藏が、首差出して聲はげまし、

ト双方よろしくあつて、

富蔵　あゝこれ/\、そりやお何を言ふのだ、昔は夫婦聟舅、親子であつたに違えねえが、縁が切れりやアあかの他人、詰らぬことを騙つて出て、餘計な苦勞を求めるのは、入らねえ義理といふものだ、早く家へ歸んなせえ。

六兵　おゝ富蔵どの、聞かつしやつたか、わしらに難儀をさせまいと、さう言はつしやるは知れて居れど、此街道を通るのを知つて親子が知らぬ顔で、こなたに逢はずに居られうぞ。

さよ　どういふ譯で大それたお前は盗みをさしやんしたか、恨めしいと悲しいとで此二三日といふものは、此子もわたしも父さんも、何をするのも手に附かず、泣いてばつかり居りました。

お民　父さんどうぞ言譯が、あるなら早う申し上げて、おぢいさんや母さんの肩身が廣うなるやうに、内へ戻つて下さりませ。

六兵　いや言譯が立つ程なら、お上へ御苦勞掛けはせぬ、どうぞお慈悲を持ちまして、

さよ　暫くお待ち、

三人　下さりませ。

ト始終を聞いて役人も、捨て置く譯にならざれば、（ト思入あつて、）

左内　こりや富藏、何と申す、あれへ參りし三人のものは緣の切れたる他人とな、それに相違はあらざるか。

富藏　へい、八年以前に離緣をいたし、今は由緣のござりません、あかの他人でござります。

左内　然らば離緣をせしといふ、何ぞ證據が彼れ方へ渡してあるか、それを申せ。

富藏　慥な證據は彼れ方へ、離緣狀がやつてござります。

左内　いやそれなれば仔細ない。こりや六兵衛とか申す親仁、今富藏の申すには八年以前に離別なし、證據が渡してあると申すが、それに相違はあるまいな。

六兵　いえ、離緣狀は取りましても、今では反故も同然だ。

左内　こりや、うろたへて何を申す、一旦取りし離別の狀、反故になるべき謂れはない、そりや早や年月經ちしゆゑ反故と間違ひ遣ふことも、世間にはまゝある例、麁忽を詫びて彼などに、由緣のないが其身の爲め、いやさ、最早由緣はあるまいな。

〽一目にそれと見て取りて、諭す理解ぞ有難き、（ト左内よろしくこなし、）

六兵　いえ〳〵内に去狀はちやんとしまつてござりますが、由緣がないと申しましたら、逢ひますことが出來ぬかと、うろたへました申し損ね、まつぴら御免下さりませ。

さよ　假令離緣は受けましても、一旦緣を結びました以前の夫にござりますれば、どうぞお上のお慈悲にて、暫しの間の御猶豫を、下さりますやうお役人さま、偏にお願ひ申します。

お民　親子でないと申しましても、其の父さんがわたくしの、やつぱり親でござりまする。

〽ませたやうでも辨へのないて名殘りを惜しむにぞ、左內も不便と打ちうなづき、

ト よろしくあつて、

左內　いや妻子にてある時は、囚人諸共江戶表へ引立て參り、落着まで牢舍を申し附けねばならぬ、假令以前は親子にせよ、母が離別を受けし上は、掛り合ひなき他人の汝等、麁忽なことは言はぬものぢや。

〽こもる情の一言に、只しく／＼と泣くばかり、人々空を打ち見やり、

下甲　又も烈しく降りさうゆゑ、

下乙　只今の內鴻の巢まで、

番一　急いで參ると、

皆々　いたしませう。

左內　いや急ぎたくは思へども、冷腹ゆゑか先刻より腹痛いたして堪え難し、暫時あれなる藥屋にて藥

用いたして參るであらう。

下甲　なに、御腹痛で、

皆々　ございますとな。

左内　それと申すも足弱を連れて參りし老人が、此雪中を跣足にて笠も持たずに居るを見て、難儀の程も思ひやる、藥用いたして參る間、跡で名殘りを、いやさ、跡に長居をいたさぬやう、よくいたはつて追ひ返せ。

番一　委細承知、

四人　いたしました。

下乙　然らばわれ〳〵兩人も、

下甲　藥用いたすでございませう。

左内　此雪中では服藥をいたして用心せねばならぬ。

〽以心傳心兩人の下役引連れ休息も、葭簀の内へぞ入りにける、跡に番太は役人の厚き情を褒めそやし、

ト此内左内先きに下役二人附いて上手の茶見世の陰へはひる。番太四人前へ出て、

番一　あの落田の旦那ぐれえ、お慈悲深え旦那はねえ。
番二　此雪の中を追掛けて來た、以前の舅や女房子に、
番三　名殘りをさせて遣りてえばかり、
番四　藥用なさると此猶豫、
番一　さあ〳〵此間に、
四人　逢つて行きねえ。
六兵　そんならそれゆゑ、お役人様が、御腹痛がなされるとて、
さよ　あれなる藁屋の物蔭へ、おはひりなされて下されしか。
お民　有難いものでござんすなあ。
人一　成程お上といふものは、
人二　お慈悲の深えものだなあ。
〽今は餘人の見る前も、忘れて側へ女房が、娘引連れ差寄れば、舅も側へ進み寄り、
ト三人よろしくあつて、
さよ　これ富藏どの、情ない、お前は江戸の御公儀の御金藏とやらへはひらしやんして、まつたくお金を

取らしやんしたか。それには譯がござんせう。
お民 盗みをすれば縛られて牢へはひるといふ事は、わたくしでさへ知つて居るに、父さんお前は知らぬかいなあ。
六兵 持つたが病といひながら、もう段々と取る年に悪い性根も直つたかと、頼みに思つて居ましたがやつぱり盗みを止めずに居て、去年中から噂のあつた御金藏の賊といふは、そなたの業でござつたか。
さよ 何れ是れには同類でも、なければ出來ぬ企み事。
六兵 よもやこなたが一人にて、そんな悪事は仕果せまい。
さよ 人に頼まれ仕た事なら、
六兵 それを言上げ、少しでも、
さよ 罪科を輕く、
兩人 して下され。
〽言ふも涙のおろ〳〵聲、籠の内より富藏は、細りし首を差出し、
ト富藏よろしくあつて、是れより床の合方になり、

富藏　今はあかの他人だが、以前の誼を忘れずによく逢ひに來てくんなすつた、盜みをすりやあ身の末は仕置に逢ふのは元より覺悟、八年あとに盜みをして無疵の體へ疵がつき、人交はりが出來ねえから繁華な土地の江戸へ出て、人にならうと思つたが、何をするにも元手はなし、しがねえ稼きをして居るうち、親仁が以前御恩になつた藤岡さまの御子息が、金に詰つて困ると聞き見て居られぬがおれが性分、盜みを勸めて大膽にも御金藏の金を盜み、俄分限になつたれど、どうで此儘安穩に生涯遂れぬ天の網、せめて息ある其内に加賀に居るお袋が、十死一生と聞いたゆゑ道を急いで行つた所、思ひの外に病氣もよく不孝の詫びをした上で、土産に出した百兩の金も不正と知つたのか受けぬゆゑに仕方なく、二三日逗留して居るうち、江戸への話しに城下の茶屋で、藝者を揚げて遊んだ時遣つた金から足が附き、番屋へ引かれて持つて居た金の調べを受けた時、口から出任せ僞つたが、煩つて居るお袋を呼んで身元の詮議をすると親に搦んだ一言に、據なく白狀したが盜んだ金で榮耀をしても、ほんのことだが一晩でも枕を高く寐られねえ、其心配を考へりやお貧乏しても正直の道を守つて樂々と、寐られる方がよかつたと、思つた所が後の祭り、どうぞお民に眞人間の聟を貰つて父さんに、安心させて上げてくれ、今日を限りに是れから先き野州無宿の富藏が仕置になつたと聞いたなら、蔭で囘向をして下せえ、賴みといふは是ればかり、さあ

さあ雪の降らねえうち、早く連立つて歸んなせえ。

〽道を案じて雪風に、首差し入れて凌ぎ居る、三人は寒さおし怺え、籠の左右に取縋り、

ト双方よろしくあつて、

さよ　それではお前は親御の恩を、返す心で藤岡さまと盗みをしたのでござんすか、獨身なれば知らぬこと、緣は切れてもわたしといふ女房もあり子もある上、殊には若い時からして御苦勞掛けた親御さまが煩うておゐでなさるのに、跡の歎きを思はずして大それた事なさんすとは、あまりといへば跡先き見ず、お前は緣が切れたゆゑ構はぬ心でござんせうが、わたしや一旦夫に持ち子までまうけた女房ゆゑ、お前が死ねばもう此世に、生きてるそらはござんせぬ、此子を連れて江戸へ行き、お仕置受けしと聞く時は、菩提の爲めに尼となり、跡を問ふ氣で居ますわいなあ。

お民　かゝさんわたしも江戸とやらへ、連れて行つて下さりませ。

六兵　おゝそれがいゝ〳〵、斯ういふことにならいでさへ、女房に具れの妾に具れと言込む者をうるさがり後家を立て抜く片意地者、以前の亭主が泥坊で仕置になつたと此土地で、笑はれるのも面目ない、おれも是れから世帶をしまひ、親子三人江戸へ出て知らぬ土地にて饂飩屋でも、始めて暮しを附けようから、手前も尼になつた氣で後世を弔ひやるがよい。

さよ　父さんお前も江戸へ出て、暮す心にならしやんしたか。

六兵　それといふのも眼八めの、御託を聞くのが忌々しい。

お民　そんなら是れから江戸とやらへ、直に行くのでござんすか。

さよ　いや、あの家を仕舞はねば、直に江戸へは行かれぬわいなう。

　へ歸りし振で物陰に窺ふ眼八しや／＼り出で、（ト下手の掛稲の蔭より以前の眼八出で、）

眼八　いや、さう旨くはマアならねえ、女房でねえと極つたら、おれの女房に仕にやおかぬ。

　ト前へ出る、是れにて三人びつくりなし、

六兵　いつの間にやら、爰へ來て、

さよ　樣子を聞いて、

兩人　ござつたか。

眼八　おれが一口しやべつたら親子夫婦や舅でねえと、言張る譯にやあ行くめえが、そこを言はぬが此方でも望みかゝつた女房を、貰つて遣らうと思ふからだ、大盗人の囚人にそんな未練を殘さずとおれと一緒に歸るがいゝ。

さよ　いえ／＼何でお前のやうな、太いお人を亭主に持ち、又も苦勞をしませうぞ。

六兵　そちらで言はぬことがあれば、こつちも言はぬことがある、未練な者に構はつしやるな。

眼八　何だ言はねえことがある、耄碌親仁のくせとして、おつゝな御託を吐きやあがるが、番太の衆の居る前で、どんな事だか言つてしまへ。

六兵　おゝ、望みなら言つて見せう。

〽律義一途に突き詰めるを、（トよろしくこなし、富藏首を出して、）

富藏　あこれ父さん、それは惡い、詰らぬことを言ひ立てゝ、お上へお手數かけるのはお慈悲を無足にする譯だ。

六兵　そんなら爰では言はれぬか。

富藏　また言ふ折もあらうから、まあ〳〵默つて居るがいゝ。

〽いはれて是非なく控へれば、又も弱身へ附入りて、（トよろしくあつて、）

眼八　さあ言はねえか、どうしたのだ、そつちで言はざあ此方から先きへ次第を言ひ立てるから、どいつもこいつも待つて居ろ、どれ旦那に逢つて來よう。

〽行かんとするを押隔て、

ト眼八上手へ行かうとするを、番太四人前へ出て是れを留め、

番一　いや、旦那は御腹痛で、今お藥用最中だ。

番二　何だか知らぬが横合から、「出しや張る當所の親分風。

番三　餘計な手數のかゝることを、言ひ立てるのは彌次馬だ。

番四　ぴんしやん仕ねえでから尻の、つぎ立てにでも行くがいゝ。

眼八　いや、こんた衆ぢやあ分らねえ、是非とも旦那に逢はにやあならぬ。

番一　えゝ、餘計なことをしなさると、

番二　一緒に江戸まで、

四人　引かにやあならねえ。

へ脅し附けられ其身にも、疵持つ足の氣味惡く、（トこなしあつて、）

眼八　いや旦那方が腹痛で藥用中へ言ひ上げるも、あんまり心のねえやうだ、それぢやあ一足先きへ行き泊りへ着いた本陣で、あらひざらひを言ひ上げようが、離縁といふは表向き盜んだ金のあるを見て、家へ引入れ亭主だと吐かしたことを言ひ立てりやあ言はずと知れた同類だ、それを言はれて困るなら、こつちも口を塞いで居るから默つておれの女房になれ、まご〳〵すると其の餓鬼を宿場女郎のなぶりもの小職に賣つても足りねえ程見じめな思ひを仕ようから、入らぬことだが言

つて置く。どれ、鴻の巣の寄附けで熱い燗でも引掛けようか。

〽叶はぬ戀の傍若に、積る遺恨の雪の道、踏み散らしてぞ急ぎ行く、（ト眼八花道へはひる。）

〽跡に悔しき親と子の、心を察し富藏が、番太に聞かす壁訴訟、

ト富藏籠の内より首を出し、

富藏 父さん必ず案じなさんな、先頃加賀へ行きがけに去つた女房の家とも知らず、饂飩を喰ひに寄つたのが盡きねえ縁で久し振りお前方に逢つた時、あの生馬の眼八が來て、おさよを女房にくれなけりやあ金を返せと證文の、五の字の間へ十の字の入筆をして言ひ掛り、太え奴だと思つたが、おれも明るい身でねえから、術と知つて富藏が中へはひつて扱つた金は不正の五十兩、それをあいつが遣つて居りやあ、言はずと知れた同類だが、それを言はずに默つて居るは、お前方を引合に附けめえ爲めに我慢をするのだ、あの時見せた去狀がこなたの方にしまつてありやあ、あかの他人で通るから、誰が何と言はうとも、心配するにやあ及ばねえ。

六兵 斯ういふ事になる端か、捻を戻してあの時に一旦取つた去狀は反故に仕ようと言つたのを、無理に預けて行かしつたは、惡事が露顯する時は難儀を掛けねばならぬゆゑ、それであの晩引き留めたを泊りもせずに別れしかと、今に至つて知れました。

さよ　さういふ譯でござんすなら、なぜあの時に斯う／＼と明かして言うては下さんせぬ、お上のお手に掛らぬうち訴へ出で、願つたなら、そこはお慈悲で罪科も少しは輕くなりませうに、それと知らねば本意なくも、別れて待ちし甲斐もなく。

お氏　加賀とやらにて縛られて、此の街道を父さんが通ると聞きし悲しさは、何の因果と泣きあかし今日まで待つて居りました。

富藏　おれも一人のお袋が病氣でゐると聞いたゆゑ、ちつとも早く訪ねて行き、不孝の詫と一生の別れをしようと思つたに、

六兵　逢ふか逢はぬに召捕られ、重き罪あるこなさんと聞いたら嘸や母親も、泣きあかしたことであらう。

さよ　なまじ尋ねて行かぬのが、却つて不孝になるまいに、いはゞ不孝の上塗りを仕なさんしたも皆報い。

富藏　天の罰とはいひながら、引かれて通る長旅も憂き事つもる雪の道、

六兵　消えぬ惡事は此世から、見下す山の谷陰に、氷る劍も越路潟、

さよ　浪のあはれといふ人も、なき別れする囚人の、膚を通す横吹雪、

富藏 凌ぐとすれど凌がれぬ、辛き思ひを信濃路に、
六兵 月の鏡の淨玻璃へ照らせば業を更科や、
さよ 縁うすひの山越えて、北に向へば身もこゞえ、
富藏 八寒地獄は目のあたり、
六兵 めぐる因果も如月の、
さよ 春とはいへど此の大雪、
お民 いつ止むことか白妙に、
富藏 思へば盡きぬ、
四人 名殘りぢやなあ。
〽盡きぬ名殘りと妻や子が、取附く籠に老の身も、とゞめ兼ねたる憂き涙、落ちて流るゝ雪解川、利根に水增す如くなり。
ト此内おさよお民籠にすがりて泣く、富藏六兵衛は此の體を見て愁ひのこなしよろしく、
〽時刻うつれば小蔭より、咳きなして役人が立ち出る樣子是非なくも、二人ははツと引下り涙を隱しひれ伏せば、左あらぬ體に番太ども、

ト此内上手の陰より以前の左内先きに下役兩人出來る、おさよ六兵衞は泣き居るお民を連れて下手へ來い平伏する、番太四人この體を見て、

番一　御腹痛は如何なるか。

番二　お藥用をなされまして、

番三　少しは雪のお惱みも、

番四　納まりまして、

四人　ござりまするか。

左内　いや藥用はいたさうもので、さつぱりと納つた。

番一　それはよろしう、

四人　ござりました。

下甲　見れば老人足弱も、立ち惱みて打ち伏し居るは、

下乙　雪あたりにて持病でも起りしことゝ相見える。

左内　又大切なる囚人富藏、かれめも持病の起らぬやう、幸ひあれなる地藏の前に茶碗があれば服藥させ、それを名殘りに、いやさ、それが殘らばあの者にも、服藥させてやるがよい。

六兵 左様なら、あの富藏へ、

さよ お手當ありし其あとを、

富藏 お上のお慈悲、お有難く戴きますでござりまする。

お民 そんなら、あの、このお茶碗を。

左内 いや、それはこちらで申し附けん。それ雪水を取つて參れ。

番一 心得ましてござりまする。

へ下知に隨ひ後なる地藏の前の缺茶碗、凍りつきたる雪水を捨てゝ掬ひし白雪は、黄金の名ある六つの花、六道能化のそれならで、施す丸子一粒が無量の慈悲の百倍に、まさる功德と富藏が首差出して呑むさまは、獄門臺へ物相の飯を手向けし如くにて、餘る情を三人の親子の前へ持ち行けば、押頂いて銘々にすゝる涙の厚き恩、いつの世にかは報はんと思ふ甲斐なき妻や子は、二世と一世の憂き別れ、

ト此内番太一人立上り、地藏の前にある茶碗を持つて來る、左内印籠より丸藥を出し雪の上へ載せてやる、富藏これを一口喰ふ、番太その跡を六兵衛にやる、おさよお民雪水をすゝることよろしくあつて納まる。

富藏　思へば餓鬼の罪人が、地藏菩薩のお慈悲にて、
六兵　地獄の責めの其中で、飢ゑを凌ぐと同じこと、
さよ　どうぞ未來で此の樣に、苦艱を脫れて下さんせ。
富藏　大罪犯す者にさへ、かゝるお慈悲はあるものを、
六兵　何の因果で人並に、此世へ產れ出でながら、
さよ　身寄りばかりかお上へまで、御苦勞掛ける盜みをして、
お民　自分も苦艱をなさんすか。
富藏　今更いつても返らぬが、惡事はせまじきものだなあ。
〽觀念なして又籠へ、首引ッ込ませ吐息つき、（トよろしくあつて、トヾ雪おろしになり。）
左内　又も降り出す此大雪、路次を急いで泊りへ着かん。
下甲　それがよろしう、
皆々　ござりまする。
左内　それ、桐油を籠へ掛けて遣はせ。
番一　はツ、

さよ　そんなら是れが、

三人　もう見納め。

左内　その方共も早く歸れ。

三人　はあゝ、（ト泣き伏す。）

〽泣く聲あとに舁き上げる、籠も桐油の薄き緣、長き別れは熊谷の道にあぐみし旅人や、鵞毛を飛ばす雪の中、鶴鷺に似し鳥の名の鴻の巣差して、

ト此内雪おろし烈しく、日覆より雪を大分に降らし、件の籠へ桐油を掛け、人足二人にて擔ぎ、是れへ皆々附いて花道へはいる。おさよ六兵衛お民舞臺にて見送り、名殘りを惜しむこなし、此の引ばり床の三重雪おろしにて。

幕

六幕目大切

傳馬町牢内の場
奉行所茶屋の場
牢屋敷言渡の場
牢跡祖師堂の場

（淨瑠璃）牢屋跡の祖師堂へ、千歳講の會式參り、太鼓音題目總踊　（淸元連中）

〔役名――野州無宿の富藏、法華講中題目の七兵衞、伊丹屋德太郎、講中立花の紋次郎、隅の隱居音羽の勘右衞門、撿使黑川傳右衞門、講中太皷の兵四郎、生馬の眼八、講中洗米の八十八、巾着切隼長太、伊丹屋丹次郎、講中木劍の音次、四人中間九助、撿使明石三五郎、四人穴の隱居坊主丸藏、萬燈持ち妙見の龜、手代吉兵衞、萬燈持ち百足の百、同白蛇の松、家主杢右衞門、五人組作兵衞、牢名主松島貫五郎、講中長房の玉藏、藤岡藤十郎、講中曼陀羅の十右衞門、四人頭、同數見役、同上座の隱居、同平の隱居、同假座の隱居、同三番役、同四番役、同五番役、同本番、同本助番、同親方、同丁代、同詰本番、同助番、同若隱居四人、四人大勢、同田舍役者萬九郎、同紙屑屋ぼろ八、同淺草無宿才次郎、同下谷無宿九郎藏、同下金屋銀兵衞。講中待合のお國、同遊船宿のお松、茶見世の娘おせん等。〕

（傳馬町大牢の場）――本舞臺四間の間平舞臺、正面柱二本、高さ三尺餘の板羽目、此上へ大格子二本目の柱際戸前口出入り、此上の格子に神棚取附けあり、羽目に箸紙手拭掛けあり、上の方書心に同じく板羽目大格子、下の方同じく、爰に五器口、流しあり、飯笊、桶、手桶、箸笊、物相の面桶、茶碗、小道具に誂へあり、名主、隅の隱居の上に夜具棚を取附け、夜具載せあり、總て傳馬町大牢の

體。上手隅に、隅の隱居中羽の勘右衞門月代の延びし鬘、好みの着附、疊七疊積み蒲團の上に住ひ、是れより下へ疊一疊縱に敷き、此上に假座の隱居、平の隱居、上座の隱居、此次に富藏二番役好みの鬘、好みのこしらへにて住ひ、戸前口に數見役、銘々行儀よく住ひ、次に疊十疊を積み蒲團を敷き、牢名主松島貫五郎、月代の延びし鬘、好みのこしらへにて住ひ、此次に穴の隱居丸藏住ひ、上の方一疊に若隱居四人住ひ、眞中より上寄りに疊一疊に三番役、四番役、五番役住ひ、下の方一疊にも本番本助番、親方、丁代四人住ひ、又一疊に詰本番、同助番住ひ、此下向う通りの心にて役者惣出にて四人住ひ、幕明かぬ内に、「御せんとう」といふ、皆々「お有難うござります、」と、此聲あつて時の太鼓にて幕明く。と富藏よろしくあつて勘右衞門に向ひ、

富藏　只今は蔓の配分を下さいまして、お有難うござります。

頭　一同お禮を、

役人皆々　申しまする。（ト役人皆々辭儀をする。）

勘右　山方出入りで入牢した檜屋の番頭が、手紙を遣つて二十兩呼蔓がはひつたから、それでみんなに配分したのだ。

穴隱　かういふ筋のお客ばかり、毎日續いて來りやあいゝ。

頭　さうした日にやあ、蔓は元より、見舞物で中も富貴だ。

數見　此間から引續き、野天博奕や板の間かせぎ、
二番　碌な奴が來ねえから、一把か二把の蔓はかり、
上隠　しつかり蔓を持つて來る、お客がどし〱來りやあい。
平隠　天保度の御趣意の時は、大層中が潤つたとさ。
假隠　古い人がよく話すが、干物の喰手がなかつたさうだ。
勘右　そりやあ天保十三年で、初めておれが入つた時だ、江戸に名高い商人が御趣意に洩れた品を賣り珠數繋ぎに毎日來たが、大した蔓と見舞物でその時位御牢内の、富貴なことはありやあしねえ。
三番　どうぞ斯うして居るうちに、もう一遍御趣意があつて、
四番　さういふ手合が毎日來て、包み金で蔓がはひり、
五番　干物の喰手のねえ程に、中を富貴にしてえものだ。
本番　延喜直しに新入りに、すツてん踊りを踊らせやせうか。
本助　間男をしてこつちへ來た、田舍役者に踊らせよう。
親方　高の知れたぺい〱だが、役者だけにあいつはうめえ。
丁代　けふは紅膏と白膏で思いれ顏をゑどつてやらう。

富藏　萬九郎を早く呼びねえ。
數見　やい、萬九郎こゝへ來い。
萬九　はい〳〵。（ト向う通りの、萬九郎お仕着裝にて前へ出で、）すッてん踊りでござりますか。
丁代　今面をゑどつてやるから、
本番　い、囚人のどん〳〵來るやう、
本助　晩に握飯を一つ遣るから、
親方　緣起よく踊つてくれ。（ト赤膏と白膏を持つて來て萬九郎の顔をぬる。）
萬九　二番役さまへお願ひでござりますが、どうか褌だけ御免下さりませ。
富藏　おゝ、許してやるから、早く踊れ。
萬九　畏りました。（ト往來を通る飴屋の鳴物になり、）
富藏　表へ飴屋が來たこそ幸ひ、拍子に合してやつてくれ。
萬九　はい〳〵、（ト裸になり、面桶を冠り、）すッてん〳〵すッてんてん、跡からよいのが參ります。
（トこれを繰返し踊りながら廻る。）
貫五　成程こいつは役者だけ、すッてん踊りはうめえものだ。

勘右　然し間男をする面でもねえが。
萬九　いえ、此の踊りに惚れましたのだ。
頭　えゝ、餘計な口を利きやあがるな。
萬九　へゝえ。（トお仕着を持ち跡へ下つて着る。）
貫五　昨夜遲く來た新入は、何の科で爰へ來たか、呼出して聞いて見ろ。
富藏　今日は呼出しの多いので、大きに遲くなりました。（ト きめ板を見て、）淺草無宿才次郎、此處へ來い。
才次　へい。（ト 向う通りより縞の着附で出る。）
富藏　これ、手前は何をして爰へ來た。
才次　花川戸の薪川岸で高瀨船の船頭を相手に、野天丁半をいたしましたが、すどいに逢つて逃げ場を失ひ川の中へ飛び込みましたが、少しも泳ぎを知りませぬから、既に土左衛門になる所を闘ッ引に引き上げられ、危ふい命を助りましたが、直に送りになりました。
上隱　逃げ場に困つて泳ぎも知らず、
平隱　川の中へ飛び込むとは、

假隱　こいつア命を知らねえ奴だ。
數見　とても命を捨てる氣なら、
頭　なぜ大きなことをしねえ。
穴隱　見るから間抜けな野郎だな。
才次　おつしやる通り間抜な野郎、どうぞお慈悲を願ひます。
富藏　もういゝから、引込んで居ろ。
才次　へい。（ト大勢の中へはひる。）
富藏　神田三河町の寄り子傳藏、九助爰へ出ろ。
傳藏九助　へい。（ト傳藏九助前へ出る。）
富藏　手前達は何をしたのだ。
傳藏　先づ山の手は四ツ谷、赤坂、又下町は淺草、神田、所々を引酒押借りで、あんまり荒しましたので、酒屋で尻を突かれました。
九助　筋違外の桝酒屋で、僅一升貸してくれと申しましたを因業に、手酷く斷りましたから、呑口を引ッ拂ツたので、

傳藏　到頭仕舞は押借で、
九助　二人とも突き出されました。
富藏　手前達もしみツたれな、僅かな酒の押借りで突き出されるとは、氣が利かねえ。
本番　如何に看板一枚で、年中酒に喰ひ醉ひ、
本助　引酒をして押して歩く、三河町の駄折助でも、
親方　こんなことで喰え込むとは、あんまり目先きの見えねえ奴だ。
詰本　假令僅かな酒にしろ、押借りとなれば盜み同然、
本番　入墨の上、五十か百、
助番　箒尻を背負はにやならねえ。
傳藏　へゝえ、それぢやあ酒の押借りでも、やつぱり盜み同然に、墨がはひつて叩かれますか。
九助　それと知つたらいつそのこと、家尻を切るか押込みか、大きな仕事をすりやあよかつた。
富藏　今度來るなら五十把も、蔓を持つて來るやうな、腕に餘つた仕事をして來い。
傳藏　ほんにそれと知りましたら、家尻でも切りましたに、
九助　惜しいことをいたしました。

富藏　跡は寺島無宿の長太郎。

長太　へい、（ト長太好みのこしらへにて出で、富藏に向ひ、）親分、暫くお目に掛りませぬ。

富藏　おゝ手前はいつか巣鴨で逢つた、巾着切の小僧だな。

長太　へい、あの時厚い御異見を受けましてござりますが、やつぱり親仁の眞似をして掏摸をいたして居りましたから、到頭こちらへ參りました。

三番　昨夜は暗くツて分らなかつたが、今日見りやあいゝ若衆だ。

四番　こいつアいたはつてやらにやならねえ。

五番　小僧手前は樂をさせて遣るぞ。

長太　お有難うござります、惡いことはいたしましたが、何所にか是れでも少しばかり孝行な所がありますか、內に居る時父さんの足を毎晩揉みましたから、どうかわつちに皆さんの、足を揉まして下さいまし。

貫五　それぢやあ手前は按摩が出來るか、そいつあ何より重寶だ、晩におれを揉んでくれ。

長太　そりやあお有難うござります。

穴隱　こいつア中々業じみて居る。

三番　もう新入は是れでしまひか。

四番　まだ一人あつた筈だ。

富藏　おゝ、熊谷無宿の勘八といふ奴がある。

五番　勘八、早く出ろ。

眼八　へゝえ。（ト眼八好みの裝にて前へ出る。）

富藏　や、生馬の眼八か、いゝ所へはひつたな。

眼八　爰で相牢しようとは、實におらあ思はなんだ。

富藏　手前は何をして來たのだ。

眼八　土地を荒して熊谷に居られぬはめで江戸へ來て、濁りを取つて勘八と名前を變へて遊んで居たが、金に詰つて盜みを働き御用になつてこつちへ來たのだ、萬更知らねえ中でもねえから、どうぞ是れからいたはつてくんねえ。

富藏　おゝ遺恨のある手前だから、是れからおれが可愛がつてやらう。

貫五　富藏、それに遺恨があるといふのは、どういふ譯があつてのことだ。

富藏　わつちが以前持つて居た女房の親仁が此奴から、五兩金を借りたところ、元から巧みで十の字

を中へ加へて五十兩と高を上せて居催促、その場へわつちが行き合せ、親仁が難儀を救ふ爲め謀書と知つて五十兩、金を返して遣りましたから、どこかで意趣を返さうと思つた奴でござります。

若隱　それぢやア此奴に五十兩、

同二　借りねえ金を返したか。

同三　こいつあ遺恨に思ふ筈だ。

眼八　いえ、十の字なぞを其中へ書入れたのではござりません。

勘右　えゝ、喧しい靜にしろ、そんな詮議は爰ぢやあしねえ、出る所へ出て言譯しろ。

眼八　それだといつて富藏か、

勘右　まだ〳〵吐かすか、默りやあがれ。（トきつと言ふ、是れにて眼八控へる、長太前へ出て、）

長太　へい、二番役さまへお願ひがござります。

富藏　小倅何だ。

長太　昨夜わつちが跡から來て、熊谷切つての顏役を手前達と一緒に置くのは、目先きの見えねい奴等だと、大きな形で輻をしてわつちを無暗に肱でこづき、肋骨を折られましたが、痛くつていけませぬ。

眼八　此小倅め嘘をつけ、何で手前をこづくものか。
長太　聲を立てたら叱られませうと、痛さを怺えて居りましたが、こんなに痣になりました。
　ト脇腹を見せる。
眼八　まだそんな嘘をつくか。
傳藏　そりやあ嘘ぢやあござりません、わつちら二人も新入で昨夜一緒に居ましたが、
九助　大きな形で小さな者を、酷い事をいたしましたは、二人が證人でござります。
富藏　二人證人があるからは聞き捨てにやあならねえぞ、少しは牢法も辨へながら、そんな不法な事をすりやあ、此儘にやあお許されねえ。(ト貫五郎に向ひ、)こいつは何本馳走をしませう。
貫五　おゝ、五本ばかりするがいゝ。
勘右　いや五兩の證文へ十の字を書き入れたといふ惡事があれば、十本馳走をしてやるがいゝ。
富藏　角の御隱居のお聲掛りだ、馴染がひにうぬに十本、おれが馳走をしてやるぞ。
眼八　何もぶたれる覺えはねえ。(ト立ちにかゝるを、)
三番　じたばたすると、
三四五　引伏せるぞ。

ト眼八是非なくじつと下に居る、富蔵きめ板で一つ二つと十打つ、眼八痛さを怺え、悔しき思入。

富蔵　これでおれが胸が晴れた。

眼八　よく酷い目に逢はしやあがつたな。

數見　これ、田舎牢とは譯が違ふぞ。

上隠　日本一の江戸の大牢、

平隠　ぐづ／＼言やあ素ツ裸にして、

假隠　すツてん踊を踊らせるぞ。

眼八　え〻、忌えましい目に逢ふことだ。

本番　これ手前の爲めにならねえから、

助番　こつちへ來てすつこんで居ろ。（ト眼八を下手の後へ入れる。）

富蔵　何所でか意趣を返さうと、思ひに思つた眼八を毆り倒して腹が癒た、是れで明日が日死んでもいい。

貫五　引續いての御精進日に仕置を受ける者もねえが、富蔵手前も長くはねえぜ。

富蔵　本口書が濟みましたから、今日か／＼と呼出しを此間から待つて居ります。

勘右　さつき帳番からちらりと聞いたが、明日御用になるさうだ。
頭　それぢやあ富藏、
皆々　明日は別れか。
富藏　皆さんにも長い間、大きにお世話になりました。（ト辭儀をする、貫五郎思入あつて、）
貫五　御金藏を破つたは御代始つてねえ賊だから、お仕置に出る其時は、立派に仕度をしてやらうと思つて居たが牢内も、世間につれて不景氣に心に思ふやうにも行かねえ、着附は唐棧、帶は博多、これで不承してくんねえ。（ト夜具棚にある風呂敷包みを出す。富藏これを取つて頂き、）
富藏　高の知れたわつちをば、お前さんを始めとして隱居方のお情で、大した役を勤めまして今日まで樂をした上に、明日の晴れに唐棧に博多の帶の仕立おろし、故鄕の者に見られても立派に仕置が受けられます、實に淚のこぼれる程有難うござりまする。（ト辭儀をなし嬉しき思入。）
貫五　天下に稀な科人だから、跡へ其名も殘るやう、とても死ぬなら立派に死ね。
富藏　そりやお覺悟をして居りますから、未練な死にやうはいたしませぬ。
勘右　手前が出る時遣らうと思つて、拵へ置いた紙の珠數、明日これを掛けて行け。
ト紙でたゝんだ珠數を富藏に遣る。

富藏　これは〳〵お有難うござります。（ト受取り、）長い間お前さんにも御厄介になりました、まことにお名残り惜しうござります。

五番　親女房へ言傳でも、あるなら言つて置くがいゝ。

富藏　これも熊谷に居ましたが、江戸へ出ると言ひましたから、今ぢやあ何所に居りますか、別に言傳はござりませぬが、此世の別れに只一目娘に逢ひたうござります。

ト ほろりと思入、貫五郎これを見て、

貫五　いや早く帳番にさういつて、酒と肴を入れてくれ。藝盡しでもみんなにさせ、賑かに別れを仕よう。

ト 紙に包んだ金を出す。

本番　承知しました。（ト此時眼八出て、）

眼八　それぢやあ、明日お仕置か、是れでおれも腹が癒た。

富藏　又口出しをしやあがるか。（ト立ちかゝるを、側の者捨ぜりふにて留める。）

貫五　其奴はあとで馳走をするから、

勘右　まあそのまゝに捨ておけ、

富藏　娑婆なら生かして置かねえのに。（トきつと思入、此時後にて、）

呼ビ　西の大牢、

富藏　え――、

呼ビ　北の御番所入牢がある。

皆々　あ――、

ト鍵の音してお戸前口より一々肩書を讀み、下谷無宿の九郎藏破落戸のこしらへ、紙屑買ぼろ八、そぼろな裝、下谷屋銀兵衛商人のこしらへにて、三人を入れる。

富藏 皆々　お有難うございます。

ト戸前をしめ錠をおろす音する、三人戸前口にうづくまり居る、富藏ぼろ八をぐろ〳〵引張り廻して引きする、

富藏　やい、手前は何所の者だ。

ぼろ　へい、私は芝の新網で紙屑買をいたします、ぼろ八と申します者でございます。

富藏　これ、爰は地獄の一丁目で二丁目のねえ所だ、是れより先に行く所はねえぞ。牢は始めてか、元來てもいつ來ても疊一疊々々に格式があつてむづかしい、諸方で噂を聞いたであらうが日本一、

三奉行よりおつかねえ西の大牢とは玆のことだ、うぬが今のめづり込んだ所はお戸前口牢屋門といふ所だ、命の蔓は何千何百兩持つて來た。

ぼろ　一把持つて參りました。

富藏　えゝしみッたれな野郎だな、うぬがやうなすッてんてんのてけれんぼうは、碌な泥坊もしめえ、いつ來ても初めて來ても富貴な大牢、二千人三千人の惡黨揃ひの色男、一把や二把は、娑婆ぢやあ一貫六百の通用するが、御牢内ぢやあ百か二百の通用にしかならねえ、御牢内へ來るにやあ首の釣替がなけりやあ來られねえ。娑婆ぢやあ帶とも褌ともいふが、此牢内ぢやあ名が替り、帶は長物褌は細物だ、その細物を向う通りへ持つて行きやあがつて、同座相囚人が首でも縊りやあ汝が下手人だ、その上御牢内には十二人のお役人があつて、樂の出來る所ぢやあねえ、それも本番さんに願つて、永當々々働きやあ隨分樂の出來る所だ、うぬが糺明仰せ附つた御奉行樣から、出牢證文の出るまできつと守つてゐろ。

ぼろ　此次に參る時は、たんと持つて參りますから、御免なされて下さいまし。

富藏　跡の奴は何所の者だ、兇狀持か。

九郎　へい、私ヤア、下谷無宿の九郎藏といひます者、お戸前はお負けなされて下さりませ。

ト辭儀をして下手へ住ふ。跡の一人を見て、

富藏　これ、手前は中で身裝もよく、堅氣に見えるが何所の者だ。

銀兵　へい、わたくしは金吹町で下金を渡世にします銀兵衛と申す者、下金の間違ひで御牢內へ參りました。

勘右　それぢやあ定めて、初牢だらうな。

銀兵　へい、初めてゞござります。

富藏　命の蔓を持つて來たか。

銀兵　へい、十兩持つて參りました。

富藏　其の金は何所にある。

銀兵　鼻紙の中を切拔いて、一分金ではいつて居ります。（ト富藏改め見て、）

富藏　十兩蔓を持つて來ました。（ト鼻紙を貫五郎の所へ出す。）

貫五　堅氣な者なら、いたはつてやれ。

三番　さあ、お前はこつちへ一緒に來ねえ。（ト銀兵衛を上手へやる。）

ぼろ　わたしも一緒に。（ト行きかけるを、）

四番 手前はならねえ。(ト引き戻す。)

ぼろ なに、ならねえとは。(ト寄るを、)

富藏 地獄の沙汰も、(トぼろ八を突倒し、どうとなるを木の頭)金次第だ。

ト此の眼八顔を出す、富藏きめ板を持つてきつと見得、皆々思入よろしく、隣牢のすつてん踊りの聲右の合方にて、

ト夜廻りの太鼓、時の拍子木割竹の音にてつなぎ、直に尻明けに引返す。

ひやうし幕

(町奉行所茶屋の場)――本舞臺四間通し瓦葺の家體、上下一間の出入り口、眞中に無双櫺子窓板羽目、入口の向う常足の二重、正面板羽目、上の方同じく隣りの家體、下の方後石垣の土手、松の立木日覆より同じく釣枝、下手に御膳籠、赤飯の桶などあり、總て町奉行所茶屋の體、二重に仕出仕ひ、外に○△□◎の町人四人立掛り居ろ、飴屋の唐人笛呼出しの聲にて幕明く。

○ 御金藏の泥坊も、いよ〳〵今日が落着で、藤十郎も富藏も引廻しに出るさうだ。

△ 聞けば千住で磔になるといふことだから、嘸見物が出るだらう。

□ 鼠小僧此の方で大層な評判だ。もう日本橋はいつぱいだ。

◎橋臺の餅屋鮨屋は、此引廻しの見物で、思ひがけない錢儲けだ。
○その錢儲けに引替へて、伊丹屋のお家では、此泥坊で大物入り。
△徳太郎さんが新宿のお辰を連れて逃げた時、然も巣鴨の庚申塚で、
□その富藏に助けられ、百兩貰つて歸つた後、不正の金と知れたゆゑ、
◎上から御詮議ないうちに、訴へ出たがお調べ中、徳太郎さんは手錠を掛けられ、
○お改めに出る度毎に、書役の禮から辨當代、
△何やかやで大した物入り。
□然し今日は落着で、
◎あすこの家でも安心だ。

ト合方になり、上手より徳太郎着流し息子のこしらへ、手代善兵衞羽織着流し、家主五人組羽織木綿袴にて附添ひ出來る、此時茶屋の内より丹次郎羽織着流しにて出迎へ、

丹次　おゝ、お兄樣、御免になりましたか。
四人　お目出度うございます。
徳太　丹次郎悦んでくれ、今日は明るい體になつた。

○　まことにお悦び、
四人　申しまする。
德太　皆樣方にも態々爰まで、よくお出で下さりました。先づ今日富藏から貰つた金が不正ゆゑ、百兩お上へ納めまして、過料で御免になりました。
○　どういふことで、同類にでも抱き込まれはなされぬかと、
△　實にお案じ、
四人　申しました。
德太　三年跡に新宿から歸りに四谷の御門外で、賊に出逢つて百兩の金をそこへ取落し、其折直に御奉行所へお訴へをして置きましたが、其百兩を拾つたものが、則ち賊の富藏で、返す心で庚申塚でわしに百兩惠んだと、富藏からの言上げにて先づ同類の疑ひ脫れ、過料で濟んだはお上のお慈悲有難いことでござりまする。
善兵　此御沙汰を御兩親樣が、お聞きなされたことならば、どんなにお悅びか知れませぬ。
丹次　お父さんも人前は憎い奴ぢやとおつしやれどお心ではどの位お案じなされたか知れませぬ、又母さまは信心なす神々さまへ茶斷ちをして、どうぞ無事に濟みますやうにと、お願ひなされてゞご

ざりました。

徳太　新宿通ひもその元は、そなたへ家督を譲りたいと、思ふ心もいつしかにお辰と深く言ひ交し、遂にはまことの不埒となり、御恩も送らす御両親へ御苦労掛けて濟まぬ譯、是れを越度に隠居なせば家督はそなた繼いでくりやれ。

丹次　いえ〳〵それはどうあつてもお断りを申しまする、達てとあなたがおつしやれば、此身は家出をいたしまする。

善兵　これは御總領のことなれば、一度御家督なされまして、又改めて順養子に丹次郎様へ御家督を、お譲りなされたがよろしうございます。

丹次　お父さんへ母さまがお願ひなされて新宿の、お辰どのを身受けなし、御免になれば夫婦にすると内々極つて居りまする。

徳太　すりや不孝者の私を、左程に思つて下さりますか。

善兵　御両親ほど世の中に、有難いものはござりませぬ。

○　承はれば何から何まで、お目出度いことだらけ。

五人組　又佐兵衛どの呑めますな。

家主　先づ何しろ茶屋へ參つて、諸勘定をいたしまして、
○　少しも早く本鄕の、
△　お宅へお歸り、
皆々　なされませ。
德太　それではちよつと茶屋へ寄り。
丹次　これまで世話になりました、
善兵　禮をいたして參りませう。
德太　そんなら皆さん、
家主　先づおいで、
皆々　なされませ。
ト合方に時の太皷を冠せ、此道具廻る。

（牢屋敷言渡所の場）――本舞臺二間の家體、長庇、前に受柱、向う兩枚板羽目、常足三尺の二重、上の方斜に大牢の外鞘の大格子、下の方柵矢來、平舞臺、莚を敷き、總て牢屋敷内閻魔堂といふ言渡し

牢の體、正面に黒尾傳右衞門紋付羽織、野袴大小草履穿のこしらへ、明石三五郎同じこしらへにて立身、牢屋同心二人羽織着流し大小にて立身、左右に法被裝の張番二人控へ居る、此見得時の太鼓にて道具留る。

傳右　奧御金藏へ忍び入り、盗みいたせし野州大塚村無宿入墨富藏、上總國[illegible]兵衞伜藤十郎、右兩人、内藤紀伊守殿御差圖に依り、今日お仕置に行はるゝ、科の次第を申し聞けん。

三五　右兩人を呼出されよ。

同心　はッ、それに控へし富藏、藤十郎、兩人共に引立て參れ。

中間　畏つてござりまする。

ト説經の合方になり、上手より富藏髮を結びし鬘、唐棧の着附博多の帶白の股引草鞋、首縄に掛り首へ紙の珠數を掛け出て來る、跡より藤十郎總髮せし鬘、黒五本骨の紋附の着附白の股引草鞋、首縄に掛り紙の珠數を襟へ掛け、是れを牢屋中間大勢にて引立て出來り、筵の上へ坐らせる。傳右衞門思入あつて、

傳右　富藏、

富藏　へい。

傳右　其方は何歳になる。
富藏　三十三歳にござりまする。
傳右　野州犬塚村無宿。入墨があるな。
富藏　へい。
傳右　當所へ入牢したは何日だ。
富藏　安政四年四月九日でござります。
傳右　藤十郎。
藤十　へい。
傳右　其方は何歳になる。
藤十　三十七歳にござりまする。
傳右　上槇町德兵衞地借だな。
藤十　へい。
傳右　當所へ入牢したは何日だ。
藤十　安政四年二月晦日でござります。

傳右　科の次第を申し渡す、承はれ。

富藏／藤十　はッ、（ト辭儀をする。ところにて傳右衞門證文を開き、）

傳右　「其方共の內富藏は先達て盜みいたし候科により、入墨叩き相成候身分にて右入墨を消し紛らし、其上武家方中間勤め中御城內へ立入り候儀これ有り、奧御金藏これある御場所は、西刎橋內に當り候趣き承はり候間、右御金藏のお金盜み取るべくと申し候に藤十郎同意いたし兩人申合せ、去る卯年四月以來都合六度、矢來御門柵矢來を乘り越し、西刎橋石垣際に藤十郎待ち居り、富藏は右石垣を傳ひ越し、中之御門埋御門御金藏柵矢來共乘越し、御藏御戶前口まで忍び入り、赤銅御扉竝びに御土戶御網戶の御錠前を紙へ寫し合鍵をこしらへ、右を以て追々に御締りを明け、終に同三月六日の夜兩人共御藏內へ忍び入り、小判二千兩入り二箱盜み取り柵矢來の間より外へ出し、柵矢來を乘越え、埋御門中之御門は潛りの閂を外し扉を明けて持ち出し、西刎橋石垣より藤十郎は先へ下り立ち、富藏細引を以て金箱を釣下し、矢來御門を乘越え迯げ去り、右盜み取り候御金の內千二百六十五兩は富藏受取り酒食遊興雜用等に遣ひ捨て、又は所持いたし、二千七百三十五兩は藤十郎配分受け、所々へ貸し遣し、又は呉れ遣し、山方立木買入れ代金其外諸拂ひ、酒食雜用等に遣ひ捨て所持いたし、追々御材木御用下納め人と相成る目論見にて

御作事方大棟梁へ品よく申し談じ、御用幟提灯等借受け宅入口へ飾り置き候段、公儀を恐れざる仕方、兩人共重々不屆至極に附き、引廻しの上淺草に於て磔申し附候。」

富藏 藤十　お有難うござります。（ト辭儀をする。）

三五　申し渡し濟む上は、兩人を引出せ。

張番　はッ。

富藏　御前樣へ申し上げます、西の大牢入牢中、名主役松島の貫五郎に厚く手當を受けました。

藤十　私事も、右同樣東の大牢入牢中、名主役三州無宿萬右衞門に、別段手當を受けましてござりまする。

富藏　お慈悲の御沙汰を、

藤十　お願ひ、

兩人　申し上げまする。

傳右　願ひの趣き聞き屆けた。

富藏　いで、此上は少しも早く、

藤十　お仕置受けたう、

兩人　ござります。

三五　おゝ、よい覺悟だ、それ引立てい。（ト是れにて富藏藤十郎立上る。上の方牢の内にて、）

張番　はツ、立たう。

囚人　日本一の大泥坊。

同　石川五右衛門此方だ

皆々　大威張りで威張つて行け。（ト大勢でいふ、兩人振返り、）

富藏　お題目を、

兩人　賴むぜ。

囚人　そりやあ承知だ。

藤十　今日が此世の、

富藏　見納めだなあ。（ト兩人顏見合せ思入）

中間　立たう。

ト時の太鼓になり、富藏藤十郎勢ひよく、同心張番附き、跡より傳右衛門三五郎附き中間共花道へはひる。此内牢内より聲を掛ける、是れにて道具廻る。

（牢屋跡祖師堂の場）――本舞臺正面表門、またぎの提灯、上手に出茶屋、軒提灯を掛け、柱に行合といふ掛行燈、葭簀の蔭に茶道具を飾り、長床几三脚並べ、門の内祖師堂灯入りの遠見よろしく、總て傳馬町牢屋跡祖師堂の體。題目太鼓にて道具納る。と知らせに附き上手柵矢來を打返す、と爰に清元連中居並び、直に淨瑠璃になる。

〽きのふまで浮世地獄と人呼びし、牢屋のあとも極樂へ、けふは導く祖師堂に會式櫻の花咲いて、街賑ふ夜參りや。

ト賑やかな合方、題目太鼓にて、花道より毘沙門の虎、百足の百、揃ひの紺半纒腹掛股引草履にて、跡へ横長な萬燈、高祖馬の上に乘り、婆胡麻の牡丹餅を捧げ居る龍の口引廻しの圖、これを持ち出て來り、花道附際へ立てる、跡より立花の紋次郎、遊船宿のお松、木劔の音次、洗米の八十八、太鼓の兵四郎、待合のお國、長房の玉藏、何れも誂への講中端出な揃ひの着附、白足袋草履にて出來る、此跡へ妙見の龜、白蛇の松、紺半纒腹掛股引草履にて、行合川馬上の萬燈を持ち出で、皆々花道へ止まる。

〽續く萬燈講中も、女交りに誰が見ても色と浮名の龍の口、何れ歸りは待合へこつそり脱けて引廻し、濡れてあふみの樂みと、一本槍に當てられて顏に紅葉の散る小春、浮かれ〳〵て來りける。

ト皆々花道にて振りあつて舞臺へ來る、此時茶見世よりおせん、同じ揃ひ裝にて、盆へ茶碗を大分載

せ持ち出來り。

お仙　これは皆さん、お早うございました。

紋次　思ひがけねえ天氣になつて、講中も仕合せだ。

お仙　第一わたしが大仕合せでございます、仕合せと申しますれば、此間はお揃ひを有難うございます。

玉藏　女の着にくい揃ひもの、禮を言はれては面目ねえ。

ト此時茶見世から太鼓の兵四郎、同じ揃ひのこしらへで出來り、

兵四　女連れで手間が取れたか、大分來やうが遲かつたな。

お松　おや兵さん、お前は先きかえ。

お國　又いつもの氣長やで、跡からだと思ひましたよ。

兵四　所をさつきから來て待つて居たのだ、時に講頭はまだかえ。

音次　お株で話しこんで居るのだらう。

八十　爰で一服するとせう。

皆々　それがいゝ／＼。

お仙　まあお茶を一つ、お上りなさりませ。（ト皆々へ茶を出す、これにて床几へ掛け、）
玉藏　世界が段々開けるに附き、おいらが小供の時分とは、大層世間が變つたな。
紋次　おゝ變つたとも〳〵、先づ爰などは牢屋敷で隨分いやな所だつたが、御維新から市ケ谷へ牢屋が引けて其跡へ、弘法さまと祖師さまが出來、兩方共に繁昌だ。
虎　繁昌所か御緣日には、大層人が出ますから、
百　居店の衆はいふに及ばず、
龜　三寸を張る商人が、一月毎に多くなり、
松　めつぽうけいに賑かだ。
八十　爰へお寺をこせへたのは、隨分と一番當つたね。
兵四　そりやあずんと當る筈だ。
八十　なぜ。
兵四　鐵砲町が近いもの。
八十　又駄洒落を言やあがるか。
お仙　今のお話しを承はりますと、爰は牢屋でござりましたか。

玉藏　丁度お前の見世の所が、死罪の首を切られる所だ。
お仙　あれ氣味の惡い、いやでございますよ。
紋次　なに、首を切る所は南の隅だ。
お松　それでは今度千歳座でする、音羽屋も三河屋も爰の牢に居ましたのかね。
お國　お前のやうにお言ひだと、親方衆が居たやうだが、役でする富藏と藤十郎がはひつて居たのさ。
玉藏　それに附いて千歳座でも、その二人の菩提の爲め、爰で施餓鬼をするさうだ。
紋次　大方役者が出るだらうから、見物があるだらうよ。
お松　それは何日だか樂しみだね。
お國　お仙さん、しつかり儲かりますよ。
お仙　嬉しうございますね。
虎　や、向うから誰か來たぜ。
四人　おゝい／＼。

ト招く、浮いた合方へ萬燈の家體囃子を冠せ、花道より造花の花吉、萬燈の萬之助、提灯の長次三人共揃ひの着附、白足袋草履、團扇太鼓を持ち出來り、花道へ留る。

〽冬とはいへどうらゝかに、返り花咲く梅もまだ、蕾のまゝの小供連れ、色氣も早く土地がらに、見得を芝居の振りを眞似、團扇太鼓を打連れて、踊り狂うて來りける。

ト三人花道でよろしく振りあつて、舞臺へ來り、

紋次 おゝ三人共遲かつたな。

花吉 今人形町を通つたら、勝文さんで呼び掛けられたから。

蔦之 ちよつと見世へ寄つたらば、お株で酒に醉つて居て、

長次 一緒に行くといはれたので、それで遲くなりました。

玉藏 何にしろ講釈の來るまで、斯うして居られもしめえ。

音次 つなぎに何ぞ踊らうかね。

お松 それを當てこんで、わたしらも男の中の豆煎りに。

お國 中へはいつて來ましたのだ、早く踊つてお見せなさいよ。

紋次 先づ口明けは三人の、小供に何か踊らせよう。

花吉 それぢやあおいら三人で。

蔦之 爰で何か踊るのか、

長次　踊るのは嬉しいが、

花吉　御見物さまは御難儀だ。

音次　そりやお言はずと知れたことだ。

兵四　さあ〳〵早く、

皆々　遣つたり〳〵。

〽今年上總から房州かけて、祖師の舊跡千ケ寺參り、日影長房濱邊を行けば、〽珠數のたまけた足長蛸が、芋を尋ねてぬら〳〵ぬつと、岸へ上るを手取りにせんと、こちは三人手が六本、向うは逃げる足八本、拔けつ潛りつ逃げ行く海へ、ざんぶと落ちてだぶ〳〵、〽救ひたまへや日蓮さまと題目唱へて助かつた。

ト三人でかゝり花吉蛸になり、兩人捉へようとする笑止味の振りあつて、末は三人一緒に振りあつて納る。

皆々　イヨウ〳〵面白かつた〳〵。

紋次　時に松さん、今日はお前に此頃流行の、駕屋新道の蜂龍を、歸りに奢つて貰ひたいのだ。

玉藏　そりやあ何で、

紋次　此間相場の狂ひで、何千圓か儲かつたさうだ。

玉藏　え、藤十郎か富藏ぢやアあるまいし。

お國　いえ、わたしの聞いたのは、そんな事ぢやアありません。

晋次　大方そりやあ葭町の、小島さんと待合で、

お松　おや、そりや本當でありますかえ。

兵四　噓の本當のと、此一件を知らないのは、

八十　あんまりお前がぼんやりだ。（トお松の背中を叩く）

お松　え丶、腹の立つことだねえ。（ト口說きになる）

〽今更言ふも愚痴ながら、まだ顏を見ぬ其先きから、いつぞは色になりたいと松葉ケ谷のお施餓鬼へ、友達衆に誘はれて水棹に濡れて大川へ、立つた卒塔婆のあの世かけ、經木に浮名流せしも、ぬしの浮氣に浮まれず、わたしや迷うて居るわいな。

トお松玉藏を捉へ口說きの振り、これへお國搦み、浮まれずといふ所へ兵四郎亡者の思入にて出て、をかしみあつて納まる。

玉藏　浮名まうけでい丶けれど、そんな覺えもないことを、惡い洒落をするぢやあねえか。

紋次　なに、おいらぢやあねえ、お國さんが。

玉藏　誰でもいゝから其代り、爰で何ぞ踊んねえ。

紋次　それぢやあ踊るのか。

兵四　差詰めこゝは音兄イと、二人で一番遣るところだ。

音次　とんだお相伴を喰ふものだ。

八十　さあ〳〵早く〳〵、

皆々　遣つたり〳〵。（ト是れにて紋次郎音次前へ出る。）

〽抑々高祖の御一代大難四ヶ度の其内にも、一の御難は腰越の土の牢より馬上にて、鎌倉中を引廻され、龍の口にて勿體なくも首級を刎ねんとなしたるに〽一天俄にかき曇り、轟く雷ぐわら〳〵〳〵〽そりやこそ臍の用心と、うろたへ騒ぎ稻妻の閃めく太刀は三段に、折れて不思議の天變に〽こりや打捨て置かれぬと、御所より送る赦免狀、馬にて飛ばす注進と双方出合ふ行合川、今に其名は殘りける。

ト紋次郎音次にてかゝり、八十八太刀取りにて出で、行合川へ玉藏出て、皆々よろしく振りあつて納る。題目太鼓になり、花道より題目の七兵衞、曼陀羅の十右衞門同じ揃ひのこしらへにて、長提灯な

持ち捨ぜりふにて直に舞臺へ來る。

お松　親方大層遲いぢやァありませんか。

お國　どんなにみんなが待ちましたらう。

七兵　ちよつと一軒寄つたので、

十右　大きに遲くなりやした。

お松　何所へ穴ッ入りをしなすつたのだ。

七兵　どこへおれが行くものか。

八十　あんまりさうでもござりますまい。

七兵　そりやあ十年も昔のことだ。

音次　天窓に毛のあつた時かえ。

七兵　べらぼうめ、今でも毛はあらァ。

十右　ほんに音兄ィもおれもすつかり、洋燈になつてしまつた。

七兵　お前は年だが、おらあ性分だ。

十右　年だとは情ない、まだ四十になりやあしねえ。

玉藏　十錢札は二枚位くッ附いてゐから、さうかも知れねえ。
紋次　十錢札ならいゝけれど、二十錢が交つて居よう。
十右　それぢやあおれが七十だ、無勘定なことをいふなえ。
七兵　その七十の伯父御と、おれが今度千歳座でする藤十郎と富藏に、二人がどこか似て居ると、言はれた所から浮氣になり、
十右　丁度舊暦の十月だから、會式祭りと名を附けて菩提の爲めに祖師堂で、題目踊りをしてやるのだ。
玉藏　それは何より功德ゆゑ、
兵四　おいら達も彌次馬に、
八十　若い手合を誘ひ出し、
紋次　今夜爰へ押出したのだ。
お松　早う見たうござりますね。
七兵　振り附は花柳だが、振りは何の造作もねえ。
十右　みんなも一緒に踊るがいゝ、
お國　當るといふは延喜がよいから、

お松　當振りに踊りませう。

お仙　ほんに皆さまがお待ち兼ね。

音次　お前も一緒にやらかしねえ。

七兵　さあ〳〵題目踊りの、

皆々　始まり〳〵。（ト皆々團扇太鼓を持ちて竝ぶ、）

〽南無妙法蓮華經々々、唄題目の七文字に、いろは紅葉の色まさる、夕日まばゆき日の御影あふぐ團扇の盆太鼓、拍子とり〴〵面白や、（ト皆々團扇太鼓を叩き總踊りあつて、）

頭取　先づ今日は是れぎり。

ト目出たく　打出し。

四千兩（終り）

（附錄）主なる興行年表

筆賣幸兵衛

年時	明治十八年二月	明治二十六年五月	明治三十一年六月	明治四十二年十一月	大正三年十月	大正八年一月	大正十三年十月
座名	千歳座	市村座	歌舞伎座	市村座	明治座	市村座	市村座
名題／役割	水天宮利生深川	水天宮利生深川	水天宮利生深川	水天宮利生深川	水天宮利生深川	水天宮利生深川	水天宮利生深川
幸兵衛	尾上菊五郎	尾上菊五郎	尾上菊五郎	尾上菊五郎	尾上菊五郎	尾上菊五郎	尾上菊五郎
要次郎	尾上菊五郎	尾上菊五郎	尾上菊五郎	なし	尾上菊五郎	尾上菊五郎	なし
良作	市川左團次	市川左團次	片岡市藏	なし	中村東藏	中村吉右衛門	なし
三五郎	市川左團次	市川左團次	片岡市藏	尾上榮三郎	中村吉右衛門	中村吉右衛門	坂東彦三郎
傳次	尾上松助	尾上松助	尾上松助	なし	守田勘彌	中村東藏	なし
富三郎	片岡我童	中村壽三郎	なし	なし	なし	坂東三津五郎	なし
お村	坂東秀調	中村福助	坂東秀調	岩井粂三郎	尾上芙雀	河原崎國太郎	市川鬼丸
小ひな	澤村源之助	尾上榮三郎	坂東秀調	なし	なし	尾上菊次郎	なし
巡査	坂東家橘	市川小團次	尾上菊三郎	中村吉右衛門	尾上榮三郎	坂東三津五郎	大谷友右衛門

幡隨長兵衛

年時
座名
名題／役割
長兵衛
水野
權兵衛
おとき
登之助
櫻川
おはな
黑鷲
公平

四千兩

明治十四年十月	明治十七年六月	明治二十年八月	明治二十四年六月	明治二十八年五月	明治三十五年四月	明治四十一年三月	明治四十五年一月	大正四年十月	大正八年三月	大正八年十月	大正九年八月	大正十一年五月
春木座	新富座	千歳座	歌舞伎座	演伎座	本郷座	市村座	本郷座	帝國劇場	明治座	市村座	歌舞伎座	明治座
極附幡随長兵衛(きはめつきばんずゐちやうべゑ)	極附幡随長兵衛(きはめつきばんずゐちやうべゑ)	極附幡随長兵衛(きはめつきばんずゐちやうべゑ)	金平法問諍(きんぴらはふもんあらそひ)	極附幡随長兵衛(きはめつきばんずゐちやうべゑ)	極附幡随長兵衛(きはめつきばんずゐちやうべゑ)	極附幡随長兵衛(きはめつきばんずゐちやうべゑ)	極附幡際長兵衛(きはめつきばんずゐちやうべゑ)	極附幡随長兵衛(きはめつきばんずゐちやうべゑ)	極附幡随長兵衛(きはめつきばんずゐちやうべゑ)	極附幡随長兵衛(きはめつきばんずゐちやうべゑ)	極附幡随長兵衛(きはめつきばんずゐちやうべゑ)	極附幡随長兵衛(きはめつきばんずゐちやうべゑ)
市川團十郎	市川團十郎	市川團十郎	市川團十郎	市川八百蔵	市川壽美蔵	中村吉右衛門	市川八百蔵	松本幸四郎	市川八百蔵	中村吉右衛門	市川中車	松本幸四郎
市川權十郎	市川左團次	市川左團次	市川權十郎	中村歌仙	市川猿之助	尾上菊五郎	市川左團次	澤村宗之助	市川左團次	尾上菊五郎	市川左團次	市川左團次
坂東家橘	坂東家橘	市川小團次	市川八百蔵	市川猿蔵	市川猿蔵	中村駒助	市川壽美蔵	澤村宗十郎	市川小團次	坂東三津五郎	市川猿之助	坂東壽三郎
岩井粂若	岩井粂若	澤村源之助	坂東秀調	岩井松之助	市川女寅	岩井粂三郎	坂東秀調	尾上梅幸	坂東秀調	市川米升	坂東秀調	坂東秀調
尾上松助	市川海老蔵	坂東彦十郎	市川新蔵	市川雷蔵	市川升蔵	市川新十郎	市川市十郎	坂東彦十郎	市川市十郎	市川新十郎	市川左升	市川市十郎
市川權十郎	市川左團次	中村芝翫	なし	市川染五郎	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
澤村清十郎	中村嗣助	市川金太郎	なし	岩井松之助	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
中村鶴助	市川團右衛門	市川團右衛門	なし	市川團七	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
なし	なし	なし	市川新蔵	市川團七	市川團吉	市川新十郎	中村又五郎	坂東竹三郎	中村又五郎	市川男女蔵	市川三升	市川三升

年時	座名	名題	富蔵	藤十郎	徳太郎	おさよ	六兵衛	おみさ	お辰	左内	千次
明治十八年十一月	千歳座	四千両小判梅葉	尾上菊五郎	市川九藏	坂東家橘	河原崎國太郎	尾上松助	岩井松之助	岩井松之助	片岡我童	尾上松助
明治二十四年五月	大阪中座	四千両銀杏合紋	片岡我當	片岡市藏	中村霞仙	實川正朝	片岡市藏	尾上芙雀	中村壽之助	なし	片岡當十郎
明治三十三年六月	淺草座	四千両小判梅葉	澤村訥子	中村芝鶴	市川鬼丸	市川鬼丸	市川團次	市川紅若	關花助	なし	市川喜猿
明治四十四年十月	明治座	四千両小判梅葉	片岡仁左衛門	市川左團次	中村又五郎	澤村源之助	尾上卯三郎	坂東秀調	市川莚若	なし	市川左升
大正四年七月	歌舞伎座	四千両小判梅葉	尾上菊五郎	中村吉右衛門	守田勘彌	尾上菊次郎	中村東藏	河原崎國太郎	尾上菊次郎	坂東三津五郎	中村東藏
大正九年十月	市村座	四千両小判梅葉	尾上菊五郎	中村吉右衛門	市川米升	岩井粂三郎	尾上菊三郎	なし	なし	大谷友右衛門	市川照藏

（「女化稲荷」は再演なし）

大正十四年五月十二日印刷
大正十四年五月十五日發行

『默阿彌全集第十八卷』

非賣品

著作權者印

上演、轉載等の場合は藏版者の許諾を得られ度候。

補修　河竹糸女

校訂編纂者　河竹繁俊

東京市日本橋區通四丁目五番地
發行者　和田利彦

東京市小石川區久堅町一〇八番地
印刷者　上村新輔

東京市小石川區久堅町一〇八番地
印刷所　博文館印刷所

東東市日本橋區通四丁目五番地
發行所　春陽堂

